昭和八年二月十五日印刷
昭和八年二月二十日發行
昭和十四年三月十日再版發行

國譯一切經 經集部 八

【定價金一圓二十五錢】

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
株式會社 大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝(三)三九四四番
(三)三〇四〇番

製本所　兩角製本所

索　引

（頁數は通頁を表す）

— 經集部八索引終 —

是の故に今日此の惡果を得、天をして無量の衆生を殺害せしめたり』と。阿修羅有り、羅睺に語りて言はく、『實に言ふ所の如し。王の言を用ひずして非時に闘ひ、是の故に今是の如き惡果を得たり』と。陀摩睺阿修羅言はく、『業の熟さんとするを以て、我れをして廻らざらしめ、是の如き意を生じて此の惡果を得たり』と。是の如くに迭互に說き已りて自らの地に還れり。毘摩質多羅は第四地に到りて其の本城に入り、甚だ大いに羞恥ぢて憂悴へ低頭れ、婇女に圍遶まれて憂憤へ、憔悴れ、鉢摩梯等の非法の惡龍は氣力を喪失ひて戲樂城に還れり。是の如くに愛の毒は衆生を破壞し、互に相ひ害を加へ、世間に流轉して少樂有ること無し。賢聖の弟子は是の如くに觀已りて、欲意を離るゝことを得。復次に、修行者は法を內觀し、隨順して修行す。此の比丘、是の如くに觀已りて第十七地を得、心常に樂みて第一の實諦を觀ぜり。爾の時、地神夜叉は見已り、歡喜して虛空神に告げ、虛空夜叉は聞き已り、歡喜して護世天に告げ、是の如くに展轉して乃ち少淨天に至り、皆是の言を說かく、『閻浮提中に善男子有り、某聚落に住し、名字は某甲にして、信を以て出家し、鬚髮を剃除して袈裟を被服し、魔の境界を離れて煩惱を樂まず、生死を厭捨し、是の觀を作し已りて今是の如き第十七地を得たり』と。諸天聞き已りて皆大歡喜し、是の如き言を作さく、『此の比丘の如きは天中の天にして、魔衆を損滅し、諸の天を增益せり』と。

處を知らず。我れと怨散なるも利益する所無し。汝は天を伐たんと欲して、自ら衰を得るなり』と。阿修羅は是の語を聞き已り、復水下に入りて以て生命を求む。時に天帝釋、諸の天衆に勅すらく、『迴る可し、迴る可し。阿修羅の軍は皆氣力を失ひ、唯微命有るのみなり。之れを放ちて去らしめ、本の止まる所に還らしめよ』と。時に諸の天衆、天王に白して言さく『此の阿修羅は調伏す可からず、自らの力を知らず、他の力に審かならず。我れ等今復更に阿修羅の衆を破壞り、復迴らざらしむ可し』我れ天中に於て自らの業にて樂を受け、阿修羅によりて惱害を生ぜざらん。此の阿修羅は云何んが他の法行に順へる人に於て衰惱を欲するや。我れ怨を報ぜずんば、終に迴らざるなり』と。是の語を說き已り、手に種種なる器仗、刀戟を執り、速疾かに阿修羅の軍に趣き、加ふるに怖畏を以てして其れを破壞れしめ、而も殺害せず。時に天帝釋は悲愍の心を起し、鉢呵娑に於て其の怖れて死せんことを恐れ、諸の天衆に告げらく『汝等は慈悲の心無し』と。是の語を說き已り、善法堂の一切の天衆と還りて天宮に向へり。時に四大天王は帝釋の還れるを見、三十三天の衆に告げて言はく『天王既に還れり。汝も亦迴る可し』と。既に勝れし力を得、皆各歡喜して悉く本の宮に還り天王帝釋は伊羅婆那白象王に乘り、三十三王は歌頌にて讚嘆して第二天に詣り、善法殿に昇り、及び餘の天衆も皆本の宮に入り、悉く鉀冑を捨てゝ雜殿林に置き、伊羅婆那は化身を捨て、本形に還復して蓮華池に入り、是の如くに天世界に到りて五欲の樂を受け、五欲の功德にて、共に相ひ遊戲し(林池に娛樂し)、婆修吉、德叉迦龍王等も阿修羅を破りて既に勝を得已り、心に歡喜を懷きて戲樂城に還れり。阿修羅の軍の破られし餘殘は、身體毀壞れ、羞愧ぢ、低頭れ、諸の婦女等は憂惱へ愁悴れて阿修羅に向ひ、羅睺阿修羅は諸の破られし阿修羅に語りて言はく『我れ先に汝等に語らずや。是れ天と共に戰鬪する時に非ず、人は正法に順ひ、父母に孝養し、沙門・婆羅門・耆宿長宿を恭敬して天衆を增長し、阿修羅を減損すればなり』と。我れ是の語を說けるも、我が言に隨はずして

て餘無からしめんと欲す。時に鉢呵娑毗摩質多羅阿修羅王及び其の軍衆は、退散・敗走して以て救護を求め、歸依處を求めて大海の下に歸り、門に向ひて走り、勢力を喪失へり。毗摩質多羅鉢呵娑は百千の輪殿に乘り、敵を却けんが爲を以て、三阿修羅王をして前に在りて走らしむるも、怖畏れ苦惱む。時に天帝釋は伊羅婆那白象王に告げて言はく、『速疾かに彼の毗摩質多羅を逐へ。彼れ慢心を以て、自ら大力ありと言へり。汝今速かに往ゐて其の所乘の百千の輪殿を破れ。大仙の說きたまふ所に、不殺生戒は是れ涅槃道なりと。此の言眞實なり。衆生は命を愛すれば、其の命を斷つこと勿れ。汝速かに彼れに至りて其の輪殿を破り、百千分と爲せ』と。伊羅婆那は是の勅を聞き已り、變化の身を以て迅風より疾く大海の下に至れり。鉢呵娑毗摩質多羅は見已りて怖畏れ、大海の底に在りて門に向ひて疾走するも、力の進み能ふ無し。伊羅婆那は大勢力を以て其の所に到り已り、手に其の輪を執り、鉢呵娑をして殿下に墜墮せしめ、接りて殿を離れしめ、現に其の所に對ひて其の大殿を碎き、朽草を摧くが如し。時に華鬘阿修羅王は皆勢力を失ひ、命絶えんとするに垂とし、妻子を憶念ひ、走りて門下に趣き、勇健阿修羅王も亦復逃げ奔り、走りて水下に趣き、門に向ひて走り、以て自らを救はんことを求め、羅睺阿修羅王も亦復逃遁し、走りて水下に趣き、自ら命を救はんことを望み、大身有りと雖も悉く氣力無し。是の時、天衆は阿修羅の悉く破壞れ已りしを見、歡喜して言はく、『阿修羅等は鬪戰ひて報を得、破壞れて退走せり』と。天是の事を見、是の如き言を作さく、『我等は當に往ゐて其の門下に至り、彼の破れし阿修羅を觀るべし』と。時に天は疾く往き走りて水下に向へり。阿修羅の破られては、猶し猛風の吹きて浮雲を破るが如し。天帝見已り、阿修羅に語りて言はく、『汝何を以ての故に自ら此の惡を爲し、無量の阿修羅衆をして軀身を喪失はしめしや。汝は諸天と共に怨敵を爲すも、少の利益も無し。今閻浮提人は法に順ひて修行せり。人の善を修むるを以て、天に勝れし力有り、人不善を行はゞ、天は則ち破壞れん。汝は時を知らず、方

釋は卽ち變化を作し、阿修羅をして伊羅婆那白象王を見せしむるに、一一の頭上に千の帝釋有り、皆手を以て千刄の金剛、種種なる器仗を執り、衆の蓮華池あること亦前に說くが如く、華池中に於て無量千の帝釋天王を見、伊羅婆那は化して十頭を爲し、一一の頭上に千の浴池有り、一一の池中に千の蓮華有り、一一の蓮華に百の華臺有り、一一の華臺に各千葉有り、象頭の華臺に百千億の帝釋天王・億那由他の種種なる武器、金剛の寶劍有りて間に空處無し。時に阿修羅は是の化を見已り、怖畏れて迷沒し、是の念言を作さく『「帝釋天王は虛空中に遍く、間に空處無し。手には種種なる刀戟、器仗を執り、身力無量にして、種種の刀仗は虛空中に滿ち、間に空處無く、十方に遍し。恐らくは其の水下にも、天帝の軍衆其の中に滿ちん』と。時に阿修羅の軍は甚だ大いに怖畏れ、各共に相ひ告ぐ。鉢呵娑言はく『阿修羅よ、怖るゝ勿れ、怖るゝ勿れ。能く彼の天帝釋王の伊羅婆那を伏さん』と。是の語を說き已り、疾走して伊羅婆那大龍象王に趣けり。時に伊羅婆那は卽時に鼻を以て阿修羅を捉へ、虛空中に於て廻施りて之れを轉ずること人の鈴を弄ぶが如く、死に垂として乃ち放ち、象の旣に放ち已るに、少しく甦息するを得。阿修羅に語りて言はく『一人にて云何んが能く帝釋を破らん。今當に一切盡く共に之れを攻むべし』と。時に四阿修羅王は復走りて伊羅婆那に向へり。帝釋見已り、金剛の雹を放ちて阿修羅を打ち、退散せ令めんと欲す。命を奪はんが爲に非ず。時に阿修羅は無量の大山・刀劍・矛矟を以て天王の上に雨らし、夏の降雨の如くに天王の身に注げるも端嚴にして患無く、是の如くに天王の阿修羅と無量に大いに鬪ふに、餘の天見已りて走りて阿修羅の軍に趣き、阿修羅の軍も馳せて天衆に趣き、互に共に鬪戰ひ、無量の惱害あり、無量の衆生の見し者は大いに怖る。無等に嬈亂れて是の如く大いに戰ひ、天と阿修羅王及び其の軍衆は互に相ひ攻伐し、無量の器仗は堅きこと金剛の如くにして、共に合に鬪戰せり。時に天帝釋は、無量の阿修羅衆の其の前に在りて住れるを見るも、命を奪ふことをせず、但阿修羅の軍を破り、退き

にして知る所無きや。一切の阿修羅の力も一天の力に及ばず。獨り我が一の天も能く汝の軍を破らん。何を以ての故に。天に法力有り、汝に法力無し。法の非法を去らしめて玄絶ること、譬へば日光を闇冥に比ぶるが如く、實語を以て妄談に比ぶるが如く、須彌山を以て衆山に比ぶるが如く、解脫を以て繫縛に比ぶるが如く、利益を以て衰損に比ぶるが如く、善友を以て寃家に比ぶるが如く、甘露を以て毒藥に比ぶるが如く、白日を以て昏夜に比ぶるが如く、僞珠を以て眞實なるに比ぶるが如く、巨富を以て貧窮に比ぶるが如く、猶し行使せるを安住せる者に比ぶるが如く、螢火を以て日光に比ぶるが如く、足無き者を猛風に比べんと欲するが如く、相ひ去りて玄遠なること、盲人を以て眼明かなる者に比ぶるが如く、險路を以て平坦なる路に比ぶるが如く、外道を以て如來に比ぶるが如く、猶し虛空を土地に比ぶるが如く、一念を以て一劫に比べんと欲するが如く、汝の我れと相ひ去りて玄殊ることも亦復是の如し。汝は法に順はざるも我れは則ち敬重し、汝は便ち癡なるも我れに智慧有り、汝は福を修めざるも天は福行を修め、汝は是れ畜生なるも我れは淨天爲り。是の如くに知り已らば、汝は則ち吾れと共に戰ふべからず』と。是の語を說き已り、卽ち現に相を去り、伊羅婆那をして阿修羅に向はしむ。他伽頌にて曰く。

　法は能く非法を破り、實語は虛妄を破す、智慧は愚癡を破り、天は阿修羅を破る。

爾の時、帝釋、是の語を說き已り、伊羅婆那を化すこと前に說く所の如く、阿修羅に向ひ、速かなること疾風に過ぎ、手には千刄の金剛を執れり。阿修羅を怖れしむるものにして、殺心を以てせざるなり。時に阿修羅は天帝釋を見、亦走り往趣る。時に四天王・三十三天も亦各疾走し、天と阿修羅と陣を交へて大いに戰ひ、皆勝を得んことを望みて互に相ひ攻伐し、天・阿修羅(互)に傷害を被り、命を殞して死せる有り、或ひは怯弱なる有りて、退走して還歸り、住りて觀視する有り、心に歸ることを念へる有り、或ひは瞋恚れる有り、或のは復癡亂へ、或ひは怖畏るゝ有り。時に天帝

大箭を雨らして鉢呵娑に向へり。時に鉢呵娑は大輪殿に乘りて帝釋王を攻む。時に天帝釋は鉢呵娑に語るらく『汝は畜生と爲りて非法の道に住せり。何所に至らんと欲せるや。吾れ當に汝を壞り、汝をして退還し、走りて水下に入らしむべし』と。時に毘摩質多羅鉢呵娑は天主に語りて言はく『我れ今汝及び諸の天衆を破らん』と。時に毘摩質多羅鉢呵娑は大金山の廣さ五百由旬なるを接りて以て天衆に擲ぐ。伊羅婆那白象王は金山の來るを見、口より猛風を出し、吹きて金山を破るに、猶し沙末の如く大海中に墮つ。時に阿修羅王は金山の碎けしを見、復金剛の齋しき山の廣さ五百由旬なるを取りて天帝釋に擲ぐ。時に伊羅婆那白象王は鼻を以て接取し、還りて鉢呵娑阿修羅王の胷を打ち、其れをして傾動かしむ。三十三天は是の事を見已り、聲を揚げて大いに叫び、唱へて言へらく『畜生よ、天主は汝を破れり。白象は汝を打ち、汝をして傾動かしめき。何ぞ況んや帝釋の手より金剛を放つをや』と。是の語を作し已り、一切の天衆は走りて阿修羅の軍に向ひ、大石を取る有り、大樹を取る有り、大山を取る有り、大戟を取る有り、大山を取る有り、雷電霹靂を震はして火を出す有り、犂具を取る有り、或ひは相樸する有り、刀輪を執る有り、或ひは刀を執る有り、虚空を行く有り、弓箭を執る有り、[七]闉山を執る有り、相ひ[八]擒捉する有り、法に順ひて闘ふ有り、道理を相る有り、或ひは指授する有り、巧僞多き有り、火を以て闘ふ有り、或ひは水にて闘ふ有り、或ひは流を注ぐ有り、或ひは一切闘ひ、或ひは闇にて闘ふ有り、或ひは幻と闘ふ有り、或ひは鋸を以て闘ひ、或ひは抓を用つて闘ひ、或ひは殿輪を以てし、或ひは聲叫を以てし、鬪者忍びず、或ひは脚を以て踏み、或ひは手を以て闘ひ、是の如き種種なる器仗を身に皆具足し、一切の天衆は帝釋の前にて在り阿修羅に向へり。時に鉢呵娑・羅睺王等は、諸の天衆の種種なる器仗を執れるを見、鉢呵娑と共に帝釋の所に向へり。時に諸の天衆は四阿修羅王の帝釋の所に向へるを見、即ち自ら莊嚴りて以て天王を助く。時に天帝釋は自ら天衆を見、阿修羅に告げて曰く『汝等畜生は云何んが是の如く癡

【七】闉山。盆地を圍める山々を全體として執るの意ならん。
【八】擒捉。擒にして刺す、押へて刺すの意。

く『天衆獨り鬪ひて、阿修羅の破壞る所と爲れり。天王よ、速かに去れ。天衆をして散滅・毀壞し、畜生に勝を得令むる莫かれ。天王よ、速かに去れ、速かに去れ。善法堂を除き、餘の一切の天は皆當に速かに去るべし』と。三十三天は是の語を聞き已り、一切の天衆皆悉く疾かに鉢呵婆毘摩質多の所に趣きて衆の刀箭を雨らし、鉢呵婆は三十三天衆の上より大石山を雨らして虛空中に滿ち、一切和合し吼叫して大いに鬪ひ、各各自ら謂へらく『我が軍勝を得たり』と。是の如く鬪戰ふに、百千の山谷互に相ひ打觸し、碎けて微塵と爲り、虛空中に於て千由旬に滿ち、此の塵雲中、迭互に箭を雨らし山を雨らして猶し秋雨の如く、無量億の阿修羅衆は喪滅して還らず、諸の天衆中にも無量千人は天命にして壽を喪ひ、怯弱の阿修羅等は命を護らん爲の故に走りて本の宮に入り、敗軍の餘の旣に城に入り已るに、阿修羅衆の諸の婦女等は來りて之れに問ひて言はく『我が夫は今は何所に在りと爲すや』と。阿修羅答へて言はく『阿修羅の軍は天と共に鬪ひて天衆を破壞り、皆大歡喜し、來るに久しからざらんとす』と。阿修羅の婦女等、卽ち一切觀池に向ひて阿修羅の軍を觀るに、天の勝つことを得、阿修羅の軍は敗散・破壞し、死屍狼藉れ、百たび退き千たび退けるを見、諸の女は見已りて悲塞み、懊惱み、却きて地に坐し、啼泣き、悲哭きて、心に大いに苦惱み、池を遶りて住し、胷を椎ちて大いに叫び、自ら頭髮を拔き、手を擧げて身を拍ち、眼中より涙を流し、時に諸の婦女は池水中に於て夫の死し已れるを見て、憂悲へ大苦む天と阿修羅は是の如く共に鬪ひ、是の如き大惡の鉢呵婆阿修羅王は無量億の阿修羅に自ら圍遶まれ、來りて帝釋に向へり。帝釋見已り、諸の天衆に告げらく『此の阿修羅は今我が所に來り、共に鬪戰せんと欲し、調伏す可きこと難し。我れ法を伴として當に彼の軍を破るべきこと、明の暗を除くが如からん』と。是の語を說き已りて伊羅婆那白象王に乘り、其の走りて速疾かなること猶し箭を射るが如く、善法の天衆に自ら圍遶まれ、上従り下りて直に阿修羅の軍に向ひ、大樹林を拔きて其の軍上に擲げ、又大石を擲げ、或ひは

切擾亂れ、天の大いに唱叫べば一切の阿修羅皆悉く力を失ひ、互に相ひ謂ひて言はく『我れ今力無く、救護有ること無し』と。阿修羅有りて言はく『怖るゝ勿れ、怖るゝ勿れ。還迴りて走ること勿れ』と。是の語を説く時、即ち山峯を雨らして遍く阿修羅の軍を打ち、天大歡喜して是の如き言を唱ふらく『阿修羅を捉へよ、阿修羅を捉くよ。此の非法惡行の畜生を殺せ。常に我等を惱せしも、鬪戰ふ能はずして怯るゝこと烏鳥の如く、勇健の志無くして、刀戟を善くせず。是の如きを好く破りて、復廻らざらしめん。此の阿修羅は鬪ふに時節を知らず』と。是の如くに天衆は歡喜し、阿修羅に向ひて打害を加へんと欲し、瞋恚りて目の赤きこと猶し絳の色の如く、刀を雨らし戟を雨らし、又大火を雨らして猶し秋月に大雨を降注するが如く、是の如くに阿修羅衆を破壞れり。時に鉢呵娑阿修羅王は百千の輪行殿の上に坐し、無量億の阿修羅衆に自ら圍遶かれ、種種なる刀戟を雨らし、手に大山の或ひは一由旬乃至は五由旬なるを接りて天衆に向へり。時に羅睺阿修羅等は是の事を見已り、氣力還り生じ、復迴りて鬪はんと欲す。時に鉢呵娑は之れを安慰して言はく『怖るる勿れ、怖るゝ勿れ。我れ今此れに來れり。一切の天を破りて喪滅・摧壞せしめん。汝怖畏るゝこと莫かれ、阿修羅王よ、怖るゝ勿れ、怖るゝ勿れ。若しは本の宮に至るも、己の妻の所に於て云何んが自ら我れは是れ丈夫なりと稱さん。膽勇無くんば、虚しく丈夫と稱するのみ』と。時に鉢呵娑は是の語を説き已り、走りて天衆に趣く。諸天之れを見て亦疾かに往趣し、天と阿修羅と陣を合して大いに戰ひ、大聲震吼して須彌留の山川・谿谷に滿てり。時に羅睺阿修羅王は走りて迦留足天に趣き、勇健阿修羅王は手に大戟を執りて走りて鬘持天に趣き、華鬘阿修羅王は手に大山の廣さ三由旬なるを擎げて三箜篌天及び天の使者に趣き、是の如く大いに戰ひ、一切の衆生は說くを聞くも毛竪つ。何ぞ況んや親見するをや。時に鉢呵娑阿修羅は復諸天を調伏、摧壞せんと欲し、風の雲を吹くが如く、自ら大力を恃みて天衆を懼れず。時に四大天王は是の如くに惱まされ、三十三天に至り、帝釋に白して言さ

り、即ち其の軍と走りて天衆に趣き、及び羅睺・勇健阿修羅軍の餘殘は相ひ率ゐ、還りて華鬘と俱に天衆に詣り、共に相ひ謂ひて曰く『何が故に妄りに阿修羅王と稱して而も自ら退走せしや。旣に自ら力無く、叉刀戟もて善巧に敵と戰ふこと無し。宮に至ることを得るも、妻子を毀辱しめん』と。是の語を說き已り、氣力還りて增し、身は大山の如く、手に兵器を執り、走るに速きこと風の如くにして、復天衆に向ひ、天と戰はんと欲す。時に天の使者及び鬘持天・常恣意天・迦留足天等は皆共に籌量すらく『一切の阿修羅皆共に和集して我が所に來らんとす。自ら己の力を恃みて驕慢を生じ、天の力を知らず』と。是の語を說き已り、走りて阿修羅に趣き、卽ち共に大いに鬪ひ、上より大山を雨らし、或ひは大石を雨らし、刀を雨らし戟を雨らし、共に相ひ擒撲して無量く相ひ殺し、無量く逼迫り、無量く相ひ打ち、無量く命を喪ひ、大海上に遍く無量種に鬪ひ、法として喩ふ可き無く、龍の衆は龍と共に無量種に鬪へり。時に天帝釋は此の事を見已り、三十三天に告げて言はく『速疾かに莊嚴れ。一切の阿修羅衆今皆此れに來れり。鉢呵娑を除く。我れ當に伊羅婆那白象に乘り、鉢呵娑は鬪はん』と。時に天帝釋は諸天に告げ已り、伊羅婆那白象に語りて言はく『我れ今汝に乘りて毗摩質多羅阿修羅王及び其の軍衆を破らん』と。是の語を作し已り、手に金剛を執り、遍く阿修羅の勢力の誰か勝れしやを觀るに、天勝るゝを得、阿修羅軍は退沒して如かざるを見る。天は阿修羅の破壞れて退走するを見、皆大歡喜し、天王帝釋も怡悅・喜樂せり。時に鉢呵娑は是の事を見已りて是の思惟を作さく『三地の無量億の阿修羅衆は鬪戰ひて力を失ひ、皆已に破壞れたり。前に一切觀池に於て見し所の如くにして異なる無く、如實にして虛しからず。我れ今當に往ゐて天帝釋を破り、彼の諸天を壞らん』と。是の語を說く頃、天衆已に水底の門下に時至れり。時に毗摩質多鉢呵娑は大瞋恚を生じて、諸山搖動し、大海波を湧かし、日光山頂に皆赤色を作せり。及び其の軍衆と水中に住りて、諸天の羅睺等の阿修羅の軍を破れるを見る。走りて水下に趣き、力無く救無く、一

廣さ三百由旬なるを取り、走りて天衆に向へり。時に迦留足天は手に弓杖を執り、亦走り往趣き、箭を以て山を射、碎けて沙末の如く海中に墮ちしめ、虛空より刀を雨らす。時に阿修羅は是の事を見已り、畜生心の故に少勇・怯弱にして、走りて勇健阿修羅の軍に向へり。勇健阿修羅王は其の退還けるを見、軍衆に告げて言はく『此の羅睺王に空しく大身有りて、少の力も有ること無く、天の壞る所と爲りて、走りて軍に來奔し、救護を望まんと欲せり。凡阿修羅の如くにして、異なること有る無し。力無きを以ての故なり。若し力有らば、則ち此の身を以て、必ず能く獨りにて一切の天衆を破らん。是の身は第二の須彌山王の如し。此の迦留足天は第一勇健なり。能く是の如き大身と共に鬪ひて破壞れず』と。是の語を作し已り、卽ち陀摩睺の衆と走りて迦留足天に趣ひ、共に鬪戰はんと欲す。時に天は見已り、卽ち鬘持天に告げて言はく『速かに來れ、速かに來れ。今勇健阿修羅王は大軍衆を將ゐ、來りて我が所に向へり』と。時に鬘持天は是の語を聞き已り、卽ち復疾走して勇健羅睺阿修羅の所に向へり。羅睺は復勇健阿修羅と牢く自ら莊嚴り、回りて天衆に向ひ、迦留足天と相樸ひ共に鬪はんと欲し、本の宿怨を念ひて大石山を擲げ、上より刀箭、種種の器仗を雨らし、及び大樹を擲げ、、虛空中に滿ちて間に空處無く、復相ひ見えず、百千たび共に鬪ひ、無等の鬪戰にして、諸天の身分の壞れ已りて復生すること亦上に說くが如く、阿修羅の軍の斬られては生ぜざること、亦人の法の如し。諸天の軍衆の首を斬られては命則ち全からざるを除き、若しは中腰を斷たれしも亦復是の如し。是の時、天衆少しく減損せること有り、阿修羅の衆に多く喪滅有り。時に阿修羅は天に破られ已り、餘殘の軍衆は水下に還退きて救護を望まんと欲し、天衆の大叫しては、阿修羅軍其の叫聲を聞きて皆威力を失ひ、微命にて自ら存し、羅睺・勇健は走りて本城に還り、門下に住せり。時に第三地の華鬘阿修羅王は羅睺・勇健の天の爲に破られしを見、軍衆に告げて曰く『我が軍悉く來れ。當に天と戰ふべし。我れに大力有り。天何をか能くする所ぞ』と。是の語を說き已

と莫かれ』と。時に婆修吉・德叉迦は是の語を聞き已り、卽ち速かに往ゐて阿修羅の伴なる鉢摩梯等の非法の龍の所に趣き、大猛火を雨らせり。時に毘摩質多羅鉢呵婆は卽ち鉢摩梯を遣して大熾電を放たしむるも、一切の惡龍の身の上に火燃えて大苦惱を受け、尋いで復破壞れ、走りて阿修羅の軍に趣き、是の如き言を作さく『各各軍を異にしては彼の大衆に勝つ可からず。皆當に和合して共に鬪ふべし。天は乃ち破る可けん』と是の語を作し已り、卽ち復走りて婆修吉・德叉迦の所に向へり。時に法行の有なる婆修吉は彼の惡龍を見、德叉迦に語りて言はく『彼れ惡心の瞋恚を以て來れり。我れ當に之れが爲に衰惱を作して復來らざらしめん。若し彼れに加へずんば、數數是の如くに我等を惱亂せん』と是の語を作し已り、時に德叉迦は卽ち走りて鉢摩梯の所に往趣き虛空中より大猛火を雨らし、諸の煙焰を放ちて彼の惡龍を燒けり。旣に燒かれ已り、尋いで便ち退走し、奔りて阿修羅の所に趣き、生命を救はんことを望めり。羅睺阿修羅王は此の事を見已りて是の如き言を作さく『此の龍破壞れ、退きて此れに來至せり。汝等何が故に之れを捨てゝ住るや』。是の語を作し已り、力を奮ひて走る。時に迦留天は羅睺阿修羅の來れる見、亦走り往趣き軍を交へて合戰し、甚だ怖畏る可きこと惡險岸の如くにして、諸の小阿修羅の海中に住せるは皆悉く聾塞り、或ひは恐怖にて其の身命を喪ふ有り。空中より刀雨り、逼迫りて馳せ下り、百千萬數の是の如くに鬪ふ時、若し天の害を被りて手足を斬截せらるゝも、尋いで復還り生じて患害ふ所無く、一切の身分も亦復是の如くにして、患苦ふ所無く、色相異らず、妙色を具足し、唯首を斬られ、及び半身を斷たるゝを除く。天と阿修羅は互に相ひ怨敵にして是の如く鬪戰へるに、若し阿修羅の天の爲に害斷せらるれば、則ち生ぜざること亦人の法の如く、諸の苦痛を受け、天の法の如きに非ず。時に迦留足天は羅睺阿修羅の軍と是の如く大いに戰ひ、時に迦留足天は復無量の大山を取りて阿修羅の軍に雨らし、時に阿修羅は分散・破壞して百千分と爲る。羅睺阿修羅王は其の軍衆の悉く破壞れしを見已り、卽ち大山の

面に住せり。時に四天王・徳叉迦・婆修吉等は帝釋に白して言さく『天王よ、阿修羅の軍は我が前に在りて住せり。天王は何が故に我等の彼と共に戰ふを勅せざるや』と。時に天帝釋は諸の天衆及び諸い龍衆に告げらく『我れ今當に護世四天王を遣すべし。閻浮提に下りて諸の衆生を觀せしめん。父母に孝養し、沙門・婆羅門を恭敬し、法に順ひて修行せば、則ち能く阿修羅の軍を破壞せん。天は法の爲に護られ、法に依止し、法の增長するに依りて天も亦增長し、法の損滅せるが故に天衆も亦減ず。我れ今汝を遣して閻浮提に詣り、人世界に到らしめん』と。是の如くに說き已りて、卽ち四天に勅すらく『汝速かに閻浮提に往ゐて諸の衆生を觀よ。若しは法に順ふこと有り、父母に孝養し、長宿を恭敬し、沙門を供養し、齋戒もて自らを守り、布施・持戒し、放逸を行はずして、正法に隨順することありや』と。時に四護世は是の語を聞き已り、箭を射る如き頃に閻浮提の一一の住處・一一の村落・一一の城邑・一一の軍營・一一の交道・一一の國土に到りて一切を觀察し、父母に孝養し、沙門・婆羅門・耆宿・長宿を供養せるを皆遍く觀察して、閻浮提人の法に順ひて修行し、父母に孝養し、沙門・婆羅門・耆宿・長宿を供養し、法の如くに修行せるを見、是の事を見已りて心に歡喜を生じ、箭を射る如きの頃に帝釋の所に到り、心喜び踊悅りて、天王に白して言さく『甚だ慶悅ぶ可し、釋迦天王よ、閻浮提人は法に順ひて修行し、父母に孝養し、沙門・婆羅門・耆宿・長宿を供養し、布施し徳を修して天衆を增長し、阿修羅の軍を損減せり』と。帝釋聞き已りて甚だ大歡喜し、護世に告げて言はく『一切の天衆應に歡喜を生ずべし。我れ今阿修羅の軍を破壞らん。我れ今阿修羅の軍を破壞らん。閻浮提人の多く福德を修するが故なり』と。天衆聞き已りて皆大歡喜し、身力轉た增して先の十倍に過ぎ、白して言さく『天王よ、何が故に住るや、何が故に住るや。我れ天王の威勢力を以ての故に、彼の怨敵を破り、天をして勝を得しめん』と。時に天帝釋は婆修吉・徳叉迦等の諸の龍王に告げて曰く『汝速かに走りて鉢摩梯等なる非法の龍の所に趣け。毘摩質多羅阿修羅の軍に往くこ

王に護られ、天王に依止せば、阿修羅及び軍衆を畏れず』と。是の如く說き已るに、時に三十三天は皆大歡喜し、天王を讃めて言はく『天王、常に勝れ、天衆、常に勝る』と。旣に讃歎し已りて四天王の所に到れり。時に天帝釋は、將ゆる所の天衆は無量百千にして、宮殿に圍遶まれ、伊羅婆那大白象王に乘れること、上に說く所の如し。其の身殊妙にして、七寶の光焰赫きて電光の如く虛空中に滿ち、無量の音樂の震吼する聲は十方に充滿し、百千の天衆歡喜して圍遶み、須彌山に住せり。乾闥婆衆は諸天を莊嚴り、仙聖の歌頌にて比無く讃歎し、共に相ひ娛樂し、善業の果にて第一の樂を受く。時に四天等は帝釋の下るを見、皆大歡喜せり。時に天帝釋は四天に告げて言はく『我れ今此れに至れり。阿修羅の軍を破らんと欲す。怖るゝ勿れ、怖るゝ勿れ。諸の天の大衆よ、悉く集りて此れに來れ』と。時に四天衆は聞き已りて歡喜し、白して言さく『天王よ、我れ已に獨りにて能く阿修羅を破れり。況んや天王の來れるをや。大衆皆集れり。我れ天王に依りて、阿修羅に少の畏るる心も無し』と。是の語を說き已りて、卽ち帝釋を遶りて一面に住し、毘摩質多羅阿修羅王・羅睺阿羅修王・勇健阿修羅王・花鬘阿修羅王の軍を觀る。身に諸天の金剛の鎧鉀を著け、手に種種なる兵刃武器を執り、阿修羅の軍を摧けんと欲し、心に念じて息まず、種種の寶にて莊嚴れる殿上に住せり。法行の龍王なる婆修吉・德叉迦等も心に鬪戰せんと欲し、住して一面に在りて帝釋を瞻仰し、其の敎勅に隨ひて卽ち當に奉行すべく、共に水下を觀る。時に四阿修羅王、忽然として直に出でたり。一切の軍衆は無量千億にして、皆共に圍遶み、手に種種なる鬪戰の具を執り、直前に進みて左右を顧ず、無量百千の大衆圍遶みて、一切の須彌留山も皆悉く震動せり。一切の阿修羅中其の力最も勝れ、善く無量の鬪戰の術を解し、水下從り出づるに猶し第二の須彌山王の如く、鉢摩梯等の非法の惡龍に自ら圍遶まれて、毘摩質多羅鉢呵婆は來りて戰場に至れり。諸の天の大衆は虛空中に遍く、阿修羅の軍は大海上に滿ち、天衆と共に大戰鬪を興さんと欲し、各自ら思惟して鬪戰を觀んと欲し、一

ひ、白して言さく『毗摩質多羅鉢呵婆は諸天を伐たんとす。一切の大海擾亂れて定まらず、百千の
衆山皆悉く動搖せり。阿修羅衆は武を奮ひて遊戲し、大怖聲を出し、大海魚・鱉及び小龍子は皆身
の力を失ひ、小羅刹那・毗舍遮鬼・無量の衆生は身命を喪失ひて、婆羅摩梯なる非法の惡龍は歡喜・
踊躍し、吼ゆること雷の震ふが如く、婆修吉・德叉迦等の法行の龍王は愁悴へて自らを守れり。毗摩
質多阿修羅王の水下從り出づるに、六萬の眞金の須彌樓山も悉く皆震動し、一切衆生の心皆怯弱れ
て、鬘持天・常恣意天・迦留足天・三箜篌天は心に皆惶怖れ、怯弱にして安からず。我れを遣して大
天王の所に來至せしむ。天王當に何等の方便を作すべきや。是の如くに我れ已に彼の三地の阿修羅
軍を破り、羅睺阿修羅王・花鬘阿修羅王・勇健阿修羅王と百千たび共に戰ひ、悉く已に破壞せり』と。
帝釋聞き已り、護世に告げて言はく『我れ已に前に毘摩質多羅鉢呵婆の起りて天を惱さんと欲せる
を知れり。我れ今下りて阿修羅の軍を摧破し、諸天を救護せんと欲す。我れは法に護られ、法に救
はれ、法を修行し、法を勝れし幢と爲し、法を求め法を樂み、非法を樂まず、我れ是の如きの功德
を以て能く彼の軍を破り、我れ則ち勝ることを得ん。我れに勝る者無し。怖畏を生ずこと莫かれ。
我れ今大軍衆を將ゐて阿修羅の所に到らん。怯弱を生ずること莫かれ。所以は何ぞ。閻浮提人は父
母に孝養し、沙門・婆羅門・耆宿・長宿を恭敬し、恩を知り恩を報じ、法に順ひて修行し、正法を守護
し、正法を喜樂し、正法を信奉し、沙門を供養し、業の果報を知り、六齋日に於て齋戒して自らを
守り、布施し、戒を持し、福を習ひ智を習ひ、我れ常に憶念して法に順ひて修行し、行法の戒を受
くればなり。彼の阿修羅に法行有ること無し。是の故に彼の阿修羅所に於て少の畏心をも生ずるこ
と無けん』と。時に天帝釋は是の語を說き已り、往ゐて毘瑠璃山頂の四天王天の所住の處に詣れり。
時に天帝釋は四天王を見、諸の天衆に告げらく『此の護世四天は來りて此處に集り、阿修羅の軍を
破らんと欲するや』と。時に護世天は帝釋に白して言さく『此の諸天は、天王に攝せられ、天

有り、百百千千皆共に釋迦天主を瞻仰し、天主の阿修羅と共に戰ふに伺侍し、各各籌量し、諸の方便を設く。時に天帝釋は御臣に告げて曰く『賢士よ、汝往ゐて彼の伊羅婆那六頭の白象なる一切の大龍の功德を具足せるに告げよ。我れ此の象に乘りて阿修羅を摧けん』と。是の時、御臣は天主の敎を受け、卽ち如意蓮華池所に向ふ。時に伊羅婆那六頭の白象は、衆の群象と池中に遊戲せり。爾の時、侍臣、象子に告げて曰く『天主釋迦は寶象に乘りて阿修羅を摧けんと欲す』と。象子聞き已りて卽ち寶象に告ぐ。伊羅婆那は其の所說を聞き、卽ち守者と共に御臣の所に詣り、善法堂に到れり。侍臣卽ち入りて天帝釋に白さく『天主よ、當に知るべし、第一の寶象今已に來至せり』と。時に天帝釋は卽ち以て憶念すらく『此の寶象を化して百頭有らめん』と。面貌淸淨にして諸の塵垢を離れ、其の一一の頭に皆十牙有り、皆悉く鮮白にして、一一の牙端に十の華池有り、一一の池中に千の蓮華有り、一一の蓮華に十の華臺有り、一一の華臺に百の華葉有り、一一の葉中に百の玉女有り、五音の樂を以て、歌舞し嬉戲して美妙の音を出し、以て比を爲す無し。是の如き伊羅婆那なる殊勝の寶象は帝釋天王の變化せる所、其の身は廣大にして一千由旬あり、其の色鮮潔・純白にして比無く、帝釋之れに乘りて阿修羅の軍を破らんと欲す。種種の伎樂に或ひは歌舞せる有り、或ひは戲笑せる有り、或ひは嘯き或ひは吼え、或ひは叫喚ぶ有り、光明の威德は端嚴殊妙にして、善見城を出づ。諸天見已りて各種種なる異色の寶殿に乘り、種種なる器仗にて以て自ら莊嚴り、種種の伎樂にて歌舞し戲笑し、暗に噎びて聲を出し、歡喜び悅樂み、帝釋王を見て喜悅前に倍せり。時に天帝釋は寶象に端坐して[六]正しく其の中に處り、大功德力の集成せる所の無量の天衆は周匝を圍遶み、端嚴比無く、種種の天衆皆共に圍遶せり。三十三天王は其の明百千の日光より勝りて虛空中に滿ち、衆の伎樂の音は充塞て遍く二萬由旬に滿つ。上從り下りて阿修羅の鬪戰すの處に詣れり。爾の時、護世四天王は聲を發して大いに叫び、虛空に上升して天帝釋に往詣で、卽ち空中に於て天帝釋に遇

【六】正の字は宋・元・明三本に依れり。

千億の阿修羅軍の光明は日の如く、始めて發起せる時、一切の大地・山河・乾陀羅山・須彌山王は皆悉く大いに動き、乃至善見城の天の善法堂なる[二]釋迦天主の所生の處も、動搖して定まらず。時に天帝釋は是の思惟を作さく『我が座搖動せり。阿修羅王は必ず天と鬪はん。是の故に我が坐處をして傾動かしむ』と。時に天帝釋、諸天に告げて曰く『若し毗摩質多羅阿修羅起らば、則ち園林・山谷・須彌山王皆悉く大いに動かん。汝等三十三天よ、速疾かに莊嚴れ。阿修羅來らん。毗摩質多羅鉢呵婆阿修羅王發起り、來りて天衆を破壞らんと欲す。我れ今亦自ら伊羅婆那象に乘り、諸の天衆と共に鬪處に詣らん。何を以ての故に、我れ、天衆の能く此の鉢呵婆毗摩質多羅阿修羅王と共に戰ふを見ず』と。時に天帝釋は是の語を說き已り、善見城中の善法堂上の一切の天衆、一一の天宮の所住の處に皆勅して善見城を出で、往ゐて毗摩質多羅鉢呵婆の戰鬪の處に趣かしむ。天衆聞き已りて卽ち質多羅林に入り、種種の器仗を取れり。此の質多羅林は、一切の戰具を皆悉く備有す。時に彼の天衆の或ひは百、或ひは千、或ひは千億萬億は疾かに彼の林に入りて皆戰具を取り、聲震ひて躁擾なること海潮の聲の如く、逼迫・險[三]閙にして、颺塵空に滿つ。斯の如き大衆の或ひは空を行く有り、山脊を行く有り、山谷を行く有り、周圍の大陣に空缺の處無し。復諸天有り、遊戲林間にて鼓を擊つ聲を聞き、走りて質多羅林に趣き、欲樂を捨てゝ衆の戰具を取り、百百千千億億萬衆の一切諸の天は、皆共に帝釋天王を瞻仰す。時に天帝釋の是の天衆を見るに、皆大歡喜して衆の寶殿に坐せり。其の殿の嚴は麗しくして七寶もて莊嚴り、或ひは光寶を以て嚴餝を爲し、或ひは金色の以て莊嚴を爲す有り、或ひは毗琉璃、或ひは頗梨を以て、或ひは車璩を以て、或ひは迦羅の種種なる大寶を以て以て莊嚴を爲し、或ひは種種なる[四]摩尼を以て莊嚴を爲し、寶網・羅絡に衆の寶鈴を懸け、端嚴殊妙にして、業の果報の如くに此の勝れし殿を得、其の身に光明と威德の赫焰ありて、位に次ぎて相ひ比び、間に人を容れず、或ひは須彌山峰に住して[五]𡑞滿充遍せる有り、空中に住する

【二】釋迦天主。帝釋天のこと。

【三】閙の字は宋・元・明三本に依れり。

【四】摩尼(mani)無垢、如意珠、等と譯す。寶玉の名。

【五】𡑞の字は元本・明本に依れり。𡑞滿はみちたるかたち。

巻の第二十一

畜生品　四

爾の時、毘摩質多阿修羅王、第三地の華鬘阿修羅王・勇健阿修羅王・羅睺阿修羅王の破られて力を失へるを聞けり。時に阿修羅有り。鉢呵娑に語りて言はく『軍衆破壞せるも、能く救ふ者無し。唯汝のみ力有りて、能く彼の軍を護らん』と。鉢呵娑言はく『汝速かに彼の三阿修羅王の今何處に在るかを看よ』と。阿修羅言はく『今は悉く諸天の破る所と爲り、水底に還歸りて門下に住し、皆勢力を失へり。遙かに大王娑羅呵娑に歸し、救護を求めんと欲し、其の力を助けんことを望み、羞慚ぢ・愧恥ぢて門下に住し、城に入るを得ず』と。時に毘摩質多羅鉢呵娑は是の語を聞き已り、阿修羅に語りて言はく『阿修羅等は天と共に戰はん。釋迦天主は中に在りや不耶』と。阿修羅言はく『未だ曾て來らざるなり』と。時に鉢呵娑は是の語を聞き已り、卽ち大に瞋恚りて眼の赤きこと血の如く、其の身力を奮はして阿修羅を視、是の如き言を作さく『唯四天王のみにて三地の諸の阿修羅を破壞り、勢力を失はしめたり。阿修羅の軍は能く爲す所無く、彼の一天の破壞る所と爲る。我れ今當に往ゐて一切の天を破るべし』と。時に鉢呵娑阿修羅王の是の語を作し已るに、諸の阿修羅に皆威力有り、阿修羅王、諸の軍衆に勅すらく『速疾かに鼓を撃て。我れ自ら出でゝ彼の天衆を撃ち、其れをして破壞り衰惱まし喪滅へしめんと欲す。及び帝釋天王をも、我れ獨りにて能く破らん。若し我は無くんば、諸天に大勢力有りと言ふことを得るも、我れ今猶存す。云何んが諸天に能く大力有りて、我が阿修羅女を奪ふことを欲望まんや』と。毘摩質多羅鉢呵娑は是の語を說き已りて大戰の鼓を撃ち、諸の軍衆に告げらく『速疾かに[一]莊嚴れ。我れ今往ゐて彼の天衆を攻め、阿修羅衆をして皆增長を得令めんと欲す』と。是の如くに勅し已りて、卽ち自ら百千の輪殿を發起せり。無量

【一】莊嚴。こゝにては戰鬪の準備せよといふ意。

の事を見已り、園山を接取り以て阿修羅の胸を打つに、卽時に破壞れ走りて海の下に入りて、本の住處に還れり。時に諸の軍衆は阿修羅の退けるを見、陀摩睺阿修羅の軍も亦皆悉く散走し、困乏して死に垂として、還りて本の處に入る。時に羅睺阿修羅及び其の軍衆は、復疾かに三箜篌天に往趣き、自ら己の力を以て、與に闘戰はんと欲す。諸天は見已り、羅睺阿修羅の上に大猛火を雨らして阿修羅の軍を燒き、阿修羅王及び其の軍衆は、退走し散壞して海の下に還歸せり。是の時、諸天は阿修羅の軍の皆悉く退散せるを見て心に大歡喜し、阿修羅王は憂感愁ひ惱みて丈夫の力も皆悉く散壞し、還りて水下に走り、門從り入りて、救護を求め、歸依する處を求めんと欲す。時に諸の天衆は阿修羅の悉く水の下に入れるを知り、本の山頂に還りて毘琉璃山に住せり。『恐らくは阿修羅復來りて此れに至らん。何を以ての故に。毘摩質多羅阿修羅王鉢呵娑は、阿修羅中に於て最も大力と爲し、第一最勝にして、能く一切の諸の阿修羅を救へばなり。猶未だ此れに來らざるも、彼れ若し破壞るれば、一切の阿修羅は皆悉く破壞れん』と。是の語を說き已りて皆大歡喜し、氣力增長し、皆共に遙かに阿修羅の軍を視て、意を決して戰はんと欲す。時に婆修吉・德叉迦法行龍王は、鉢摩梯等の傷を被れる殘餘を破り、還りて戲樂城に入れり。『望むらくは鉢呵娑阿修羅王の諸天を破壞り、我等を救護せんことを。若し壞る能はずんば、天還りて勝つことを得、天衆增長せん』と。是の如くに阿修羅の伴なる惡龍王鉢摩梯等は愁毒・苦惱して本の城中に住し、阿修羅の軍も亦復是の如く愁憂へ苦惱みて本の處に住せり。

阿修羅に告げて曰く『虚しく來りて此れに至り、天衆を壞らんことを望めり。我れに大力有り。何を以ての故に。閻浮提人の法行に隨順し、父母に孝養し、沙門・婆羅門を供養し、善法を喜樂して善法を修行し、命終りて天に生るればなり。是の故に我れは今汝等より勝れ、大力勢有り、第一にして比無し。我等は法の如くにして、法に順ひて修行し、汝等を惱さざるに、汝は非法を行ひ、我れ等を惱亂す』と。時に阿修羅は是の語を聞き已り、天語を受けずして卽ち天と鬪ひ、時に諸の天等は其の住する處に從ひて虚空中に滿ち、空從り下りて阿修羅の軍を破らんと欲し、兩軍戰を交へて聲は大海を震はし、魚・鼈・黿・鼉・摩竭大魚・那迦・錯魚は心に皆大いに怖れ、散りて百分と爲り、或ひは百千分と爲り、天等は大いに鬪ひて諸の器仗・矛矟・刀戟を雨らし、天は阿修羅と是の如く大いに戰へり。時に花鬘阿修羅王は諸天に告げらく『前軍の鬪戰に、我が時未だ至らずして、汝をして之を破らしめたり。我れ今此れに至れり。當に汝の衆を摧くべし。獨り我が一の身にて、能く帝釋をも伏す。何ぞ況んや汝等四天王衆をや。是の故に我れ能く汝天衆を破らん』と。是の語を說き已り、卽ち鬘持天に向へり。時に迦留天は其の來れるを見已りて、卽ち花鬘阿修羅の所に向ひ、時に阿修羅は其の軍を破らんと欲し、大海の邊に於て大石の方四百里、或ひは三百里、或ひは二百里、或ひは一百里、或ひは一由旬にして、大火の熾に燃えたるを拔き取り、此の山を以て迦留天に擲げんと欲す。時に天は之れを見、卽ち三寶に歸し、思惟して法を念じて、箭を以て之れを射るに、碎けて沙末の如く、大海中に墮つ。時に阿修羅は事の功無きを見、卽ち大戟を取り、迦留天と對敵して共に戰へり。天既に見已り、虚空中より金剛の雹を雨らして其の刀戟を碎き、阿修羅の軍は皆悉く散壞す。時に勇健阿修羅王は復走りて常恣意天に往趣き、共に鬪戰せんと欲して、波利佉と名くる大圍山の廣さ六百由旬なるを取りて、諸天に告げて曰く『我れ今汝一切の諸天を破り、汝天衆をして閻魔羅所に至らしめん』と。是の語を說き已りて、直に常恣意天に向へり。時に護世天は是

衆を破るべし。王若し去らば、帝釋天王も敵を爲すを得ず。況んや餘の天衆をや』と。是の時、花鬘阿修羅王は是の語を聞き已りて思量し籌量し、即ち無量億の阿修羅衆に自ら圍遶まれ、種種の器仗・刀戟・鉾矟を以て牢く自ら嚴莊り、往ゐて戰場に詣り、大聲にて震吼し、聲は十方に滿つ。時に羅睺阿修羅王は是の事を見已り、勇健阿修羅に語りて言はく『花鬘阿修羅王は今來りて此れに向へり。我が威力を益して諸の天衆を破壞らん。汝は今廻る可し、汝は今廻る可し。花鬘阿修羅來りて、我れに今大力あり』と。軍衆は聞き已り、還りて戰場に詣り、天と鬪はんと欲す。時に四大天王は阿修羅に語りて言はく『汝は畜生の法にして、天の數 汝を破れるも、而も復還廻れり。汝は愚癡の心にて、自ら軍衆を失ふなり』と。是の語を說き已り、阿修羅の衆に向ひて速疾かに馳走す。花鬘阿修羅は諸天の來るを見、其の軍衆に告げらく『汝等阿修羅よ、怖るゝ勿れ怖るゝ勿れ。天と共に戰ふに、何故に聚り住れるや。彼の天衆を破る(に於て)怯弱を生ずる莫かれ。我れ有るを以ての故に、汝何ぞ畏るゝ所あらん。獨り我が一の身にても、能く諸の天を壞る。何ぞ況んや勇健阿修羅王の我が朋侶を爲し、師子兒羅睺阿修羅王の我が同伴を爲せるをや。汝等の鬪戰ふに、怖畏を生ずる莫かれ、怖畏を生ずる莫かれ。威力を增長して彼の諸天を破り、阿修羅をして增長して勝を得しめよ。奮怒せる大力もて、之れと共に戰へ』と。時に花鬘阿修羅は是の如くに勅し已り、即ち諸の阿修羅を往ゐて鬘持天・常恣意天・迦留足天・三箜篌天の所住の處に詣れり。(諸天は)毘琉璃の地を周遍く嚴飾り、心に喜悅を生じて是の說を作さく『我れ等三十三天・帝釋天王を須ひずして、能く數數阿修羅の軍を壞れり。法の力を以ての故にして、法を伴と爲せるを以てなり』と。時に阿修羅は處りて大海に在り、海上に遍くして、天と鬪はんと欲し、集りて大海に在り。是の時、諸の天衆は阿修羅の大衆の集れるを見已り、各 共に議して曰く『一切の第三地の花鬘阿修羅の大力を宿せる者は、今皆來り集れり』と。是の語を說き已るに、阿修羅衆は皆其の所に至り、時に天は見已りて、

れ已りて大瞋恚を生じ、手に大石の廣さ八百里なるを擎げて鬘持天に擲ぐ。時に迦留天は是の事を見已り、卽ち大火を雨らして此の山を燒滅せり。是の時、勇健阿修羅王は山の燒かるゝを見て卽ち威力を失ひ、諸天に告げて曰く『此の山已に燃ゆ。我れ當に更に大山を以て汝の身の上に擲ぐべし』と。爾の時、阿修羅王は手にて大山を擎げ、復天に擲げんと欲す。時に諸の天衆は阿修羅に告げて言はく『汝に旣に法無く、而も非法を作せり。我れを壞る能はず。我れ正法に住し、汝は非法に住すればなり』と。諸の天是の如く、阿修羅王を毀呰れり。是の時、羅睺阿修羅王は是の語を聞き已り、諸の軍衆を將ゐて、疾走して天に向ふ。天衆見已り、皆亦馳せ赴き、阿修羅と陣を交へて大いに戰はんと欲し、諸の兵刃、種種の刀戟・戈矛・箭矟を以て、互に相ひ攻伐せり。天は法を說き已り、誠心にて憶念し、三寶に歸命して、直に阿修羅の軍に趣き、天衆旣にして至らば、阿修羅の軍は皆悉く退散して百千分と爲り、海に向ひて下らんと欲す。非法の惡龍なる鉢摩梯等は阿修羅に語りて言はく『怖るゝ勿れ怖るゝ勿れ。汝今我れを捨てゝ何所に至らんと欲するや。德叉迦・婆修吉諸龍王等は、我れ能く之れを遮へん。汝は當に獨り諸天と共に鬪ひて、諸の天衆を破るべし。汝畏るゝが若くんば、汝本何が故に自ら宮城を出で、來りて此れに至れるや。汝は自ら力の强弱を審らずして、何故に諸天に怨を爲せしや。若し汝怨を捨てゝ本の宮城に還らば、我れ等龍衆は何所に趣くことを爲さん。德叉迦・婆修吉は是れ我が怨家なり。我に何所にか趣かん』と。時に阿修羅は是の語を聞き已りて復天の所に還り、天と共に鬪へり。時に諸の惡龍は、彼の如法の龍衆を遮ふる能はず、阿修羅の軍も尋いで復退散し、海下に還歸りて本の宮城に入る。時に阿修羅は其の軍衆の是の如くに破るゝを見已り、阿修羅を遣はし、第三地の花鬘阿修羅の所に向ひて白して言さく『大王よ、速かに起て、速かに起て。天衆の力勝れ、一切の阿修羅を破壞りて、分散・四趣し、逃避・迸走せしめたり。大王は久しく已に天と共に戰ひ、大名稱を得たり。今亦是の如く、當に厲き意を起して諸天

戟を以て、彼の諸天を破る可し』と。勇健阿修羅王は其の面前に在りて速疾かに馳走し、諸の刀戟を雨らして、諸の天所に向へり。天衆之れを見、種種なる闘戰の具を莊嚴りて、亦疾かに往趣す。勇健阿修羅王の衆の武器なる刀劍・予矟を雨らして鬘持天に向へるに、鬘持天衆は是の事を見已り、讃めて言はく『善き哉善き哉、阿修羅王よ、我が諸の天衆は數數汝を破れり。而も汝は恥無く、厭心を生ぜず。我れ法力を以て、法を行ふを以ての故に、法に歸せるを以ての故に、法を修むるを以ての故に、法を離るゝを以ての故に、是の故に我れ勝れり。汝は多貪の故に他の物に貪著し、己の用を爲すことを望みて多く貪を行へるが故に、汝に法行無し。云はんが此の十善業道に於て、法に順へる諸天を破壞ることを望まんとするや。黑闇は光明を覆障ふ能はず。明の力勝れるが故なり』と。勇健阿修羅王は此の說を聞き已り、諸の天に告げて曰く『何ぞ多言を須ひん。我れ汝等の神通・威德を見て、之れを忍ぶ能はず。我れ等自ら己の力に依り、天衆を破壞らん。諸天の威德の勝れしを見るを以ての故に、之れを忍ぶ能はず』と。是の語を作し已り、直に前みて鬘持天の所に往趣せり。時に鬘持天は是の事を見已り、種種の箭を雨らして阿修羅の身を射、空缺の處無く、勇健阿修羅の上に當り、衆の刀劍を雨らせり。時に鬘持天は阿修羅に告げて曰く『何故に貪多きや、阿修羅よ、汝は惡業を以て自ら破壞す。何ぞ天と共に相ひ攻伐するを用ひんや。非法は如法を破壞する能はず。我れ汝の爲に諸の衰惱を作さざるに、汝等は何が故に數天衆を惱ますや』と。此の說を作すと雖も、然も阿修羅は猶復馳奔走りて天衆に趣く。時に鬘持天は婆修吉・得叉迦等の諸の龍王に告げて曰く『今此の勇健阿修羅王は、憍慢を以ての故に、自ら己の力を恃みて猶調伏せず。汝今阿修羅に大火を降澍し、彼れをして力を失ひ、破壞れて還り退か令む可し』と。時に婆修吉は是の語を聞き已り、即ち空中より大猛火を雨らして鉢摩梯などの諸の惡龍等を燒き、復疾走して勇健阿修羅の上に趣き、大熾電を放ち、霹靂の猛火を阿修羅の軍に雨らせり。時に阿修羅王は龍の火に燒か

衆を破壞れり。王今聽け、我れ天と共に闘はん。我れをして勝つことを得令めよ』と。時に花鬘阿修羅王・毘摩質多羅阿修羅王・鉢呵娑は卽ち勇健阿修羅王に告げて曰く『速に去れ速に去れ。我れ汝の伴を爲し、能く天衆を壞らん。汝の羅睺阿修羅王を助くれば、則ち能く一切の大衆を破壞せん。況んや四大王をや』と。時に勇健阿修羅王は是の語を聞き已り、卽ち羅睺阿修羅の所に向へり。戰を助けんが爲の故なり。時に諸の阿修羅衆は勇健の來るを見て皆大歡喜し、悉く勇力を生じ、手に武器の刀鉾・箭矟を執りて直に天衆に詣り、諸の鬪具を設け、箭は雨の如くに墮つ。時に天は此の二阿修羅將の大軍衆を見、各是の言を作さく『此の阿修羅は是の如く、數數羞恥有ること無くして來りて天衆を惱ませり。我れ數之れを破りしも、猶來りて止まず』と。是の說を作し已りて牢く自ら莊嚴し、奮迅の勇力もて阿修羅の軍に向ひ、共に交戰せんと欲す。時に勇健阿修羅王は天衆を見たり。是の如き言を作さく『天今此に下れ、必ず共に戰諍はん。我れ當に天と陣を列ねて大いに戰ふべし』と。時に二阿修羅王は此れを籌量り已り、速疾かに往ゐて四天王の所に詣り、意を決して鬪はんと欲し、各勝を得んことを望めり。若し日、天の後に在らば、阿修羅の軍は、日其の前に在りて、日の光明の其の眼を照すを以ての故に、害を加ふる能はず、亦刀仗・劍戟を雨らす能はず、能く目を以て諸天を正視する能はずして、各各相ひ謂はく『日光晃昱きて我が眼目を照し、是の故に天と鬪戰するを得ず』と。是の時、羅睺阿修羅王は卽ち一手を以て彼の日光を障ふ。是れ第三の因緣にして、世の人見已り、愚癡の心を以て咸是の言を作して、今は日蝕なり、或ひは言はく當に豐なるべしと、或ひは當に儉しかるべしと言ひ、或ひは水災あらんと言ひ、或ひは旱災あらんと言ひ、或ひは王者の吉凶・災祥を言ひ、或ひは衆人に疫有り疫無しと言ふ。是の如きは實無くして、妄りに分別を生じ、實の如くに知らずして、愚癡の說に隨へるなり。是の如くに羅睺阿修羅王は日光を障蔽ひ、勇健阿修羅に語りて言はく『天今見易し。天今見易し。刀劍・種種の武器なる兵戈・矛

勇健にして心に畏るゝ所無く、此の術有りと雖も、卽時に破壞れ、若し世間の人の正法に順はずんば、羅睺阿修羅王は則ち天衆に勝つ。是の故に法を第一と爲し、法を最勝と爲し、一切の諸法は無因緣に非ず。若し羅睺阿修羅王の破壞れて力を失はゞ、皆悉く愁悴して闘心を厭離す。時に羅睺阿修羅王は、諸の軍衆の皆悉く愁悴して厭離の心を生ぜるを見、之れに告げて曰く『阿修羅よ、自ら愁悴して心をして劣弱ならしむる莫かれ。怖るゝ勿れ怖るゝ勿れ。我れ若し汝と本の宮城に至るも、安樂に住らざらん。是の意を作すこと莫かれ「宮城に還らんと欲す」と。奮迅の威武もて身の力を增さしめ、廻りて戰場に詣り、本の處に歸ること莫かれ』と。時に阿修羅は是の語を聞き已り、復彼の四天王の所に往趣して更に共に闘戰し、大石山を雨らし、雷電雨を注ぎ、黑雲靉靆たり。陣を列ねて大いに闘ひ、見る者の毛を竪たしむ。天復勝ちて阿修羅の軍を破り、一切の阿修羅は是の思惟を作さく『天に大力有り、我れ當に彼の第二の住處なる星鬘城中に歸り、阿修羅王に以て救護・利益・安樂を求めて、諸の天衆を破るべし。彼の城中に阿修羅王有り、名けて勇健と曰ひ、自性勇健にして、已に曾て百千たび天と共に戰ひ、乃至天主釋迦提婆にも彼れ亦勝ち、是の如き阿修羅は一切に勝過れり』と。是れを思惟し已り、皆共に往ゐて勇健阿修羅の所に詣り、是の如き言を說く『阿修羅王よ、天衆は大力にして、羅睺阿修羅王の之と共に闘へるも、伏せしむる能はず。今疾かに往き、力を以て利益し、爲に救護・佐助を作す可し。勝力の王にして若し仗を執らば、帝釋天王も亦阿修羅の軍を壞る能はず。況んや餘の天衆をや。王は曾て彼れを諸の闘戰に伏し、阿修羅中大名稱を得たり。速疾かに彼れに詣れ。馳奔り急趣け。手に兵戈を執り、奮ひて武器を動かし、天と共に戰ひて彼の天衆を破れ。汝は先に已に曾て百千たび彼の金剛の手を彼の天中に於て破れり。汝は勝れし力を以て、威を奮ひ武を振へ』と。時に阿修羅王は是の語を聞き已り、卽ち華鬘阿修羅・毘摩質多鉢呵娑阿修羅の所に向ひ、是の如き言を作さく『天の軍力勝れ、羅睺阿修羅王及び其の軍

陣を交へて大いに戰ひ、時に大力の羅睺阿修羅王は、其の軍中に處りて猶し第二の須彌山王の如きも、天は法力を以て、卽ち羅睺阿修羅の軍を破れり。諸の救護中、法を第一と爲し、一切の光明(中)、法の光は第一なればなり。時に羅睺阿修羅は其の軍衆の破壞れて退散し、皆悉く怯弱なるを見て、阿修羅王は復安慰して言はく『汝等阿修羅よ、怖るゝ勿れ怖るゝ勿れ。何故に丈夫にして、怯るゝこと烏鳥の如きや。自ら己れの舍に於ては、勇健有りて是れ大丈夫なりと云ひ、汝等亦論法を倂知して畏懼るゝ所無く、曾て已に具に無量の軍衆の破壞れて退散せるを見ながら、汝は今何が故に愁怖を生ずるや』と。時に諸の阿修羅は安慰するを聞き已りて心に歡喜を生じ、憍慢を以ての故に、卽ち迴り復返りて、天と鬪はんと欲す。時に羅睺阿修羅王は、憍慢の心を以て其の軍前に在り、一切の阿修羅は羅睺に依止して羅睺に護られ、羅修王を以て最第一と爲す。一切の阿修羅は皆往ゐて彼の四天王所に向ひ、諸の阿修羅は羅睺阿修羅の力に依れるを以て、氣力を生ずるを得て『羅睺阿修羅王は我が前に在りて行く。此の王の力は尙能く彼の釋迦天主をも破らん。況んや四天王をや』と。卽ち復對敵して諸の刀戟を雨らし、又大石の猶し大山の如きを雨らし、空從り下りて天衆を壞らんとす。時に護世天は羅睺阿修羅の大石山を雨らせるを見、諸の天衆に告げらく『羅睺阿修羅王は大石山を雨らせり。汝等當に刀戟・鉾銷を雨らして、天衆をして大衰惱を得せしむること莫かるべし』時に護世天は是の語を說き已り、及び諸の天衆と直に羅睺阿修羅王に趣き、羅睺阿修羅と共に陣を合せて大いに戰ひ、雨れる刀雨れる石は空從り下りて大海中に墮ち、海をして涌沸せしめ、天より刀劍を雨らして海中の無量百千の衆生の類を傷害し、或ひは死し、或ひは怖れて逃走・畏避し、大海中に遍く皆泡沫を生ず。羅睺阿修羅の天と共に戰へるに、餘の天と阿修羅は是の事を見已りて、皆是の念を作さく『未だ曾て有らざるなり』と。天は阿修羅と是の如く大いに戰ひ、戰鬪して止まず、若し世間の修行して法に順はゞ、一切の阿修羅は諸の伎術・刀矟・矛劍多く、大力・

即ち往ゐて彼の第三地の阿修羅王に告げ、其の所に到り已りて是の如き言を說かく『一切の天衆、四天王天は皆共に和合し、來りて我が所に至れり。我れと共に鬪はん。今當に思惟すべし、何の方便を設けて彼の諸天を破らん』と。時に諸の阿修羅は是の語を聞き已り、即ち羅睺阿修羅に答へて言はく『我れ當に莊嚴して彼の三十三天の王なる帝釋と共に戰はん。汝今去る可し。天當に破壞るべく、阿修羅は勝たん』と。時に羅睺阿修羅王は即ち戰處に往き、天と鬪はんと欲せり。時に諸の阿修羅衆は羅睺阿修羅王に向ひ、說きて言はく『大王よ、天に大力有り、天に大力有り。共に戰ふ可からず』と。時に羅睺阿修羅王は即ち天衆に趣き、諸の刀戟を雨らして天と共に戰へり。是の時、諸天は阿修羅の諸の刀戟を雨らすを見、龍をして火を雨らさ使め、疾走して往趣き、羅睺阿修羅の軍を破らんと欲して、天は劍戟の猶し金剛の如きを雨らし、陣を交へて鬪戰して、稱說す可からず。若し閻浮提人の法に順ひて修行し、父母に孝事し、沙門及び婆羅門を供養し、耆舊を恭敬せば、天衆則ち勝れ、阿修羅の軍は退沒して如かず、若し諸の世人の法教に順はずんば、天則ち退弱して阿修羅勝つ。是の如くに法力と非法力の故に、天は阿修羅と等しく鬪戰すること無く、若し阿修羅勝ちて天衆破壞るれば、一切の天衆は互に相ひ告げて曰く『提婆よ、提婆よ、當に法を念ずべし。法有るを以ての故に天衆則ち勝れ、法の因緣を以て天は增長することを得。是の故に諸天は當に信敬を起し、思惟して法を念ずべし』と。復往きて彼の阿修羅の軍に趣くに、一切の天衆は法を念ずるを以ての故に法の護る所と爲り、光明の威德は皆悉く增長し、前に勝ること百倍にして、時に阿修羅は諸天の光明の威德を見、即ち怯弱を生ぜり。諸の軍衆に告げらく『汝今何が故に怯弱の心を生ずるや。天の威德は吾と等しからず。及び其の刀戟・兵刃・相樸も吾れ悉く彼れに勝れり。汝今何が故に怯弱を生ぜるや』と。時に諸の軍衆は阿修羅王の安慰する音を聞きて氣力を增長し、是の時、阿修羅の軍は還りて天衆に向へり。時に諸の天等は身に法力を得、速疾かに馳奔せて阿修羅に向ひ、

し、法は能く救を爲し、若し非法を行はゞ、非法を行ふ者を非法は救はず、一切の阿修羅は非法を行ふが故に、天は是の念を作さく『阿修羅王は我れ等を惱亂すも、既に天に勝たず、天と等しからず。何を以ての故に。閻浮提人の父母に孝養し、法行に隨順し、種姓の耆宿・有德を供養し、[三]八齋を淨修し、布施し持戒して福德を修行し、放逸を行はず、惡友に近かずして、是の人命終り、天上に生れ、阿修羅は非法にして、法の救護無ければなり』と。一切の天衆は是れを思惟し已り、時に天の使者も鬘持天・常恣意天の一切の天衆は天の法幢を持し、速疾かに馳せ赴きて阿修羅の軍に向ひ、之れに語りて言はく『住まれ、住まれ阿修羅よ。我れは天中に住らん。汝等は何が故に數我等を惱ますや。汝は既に諸の天力に勝る能はず、又第一に非ず、汝の兵戈能く諸天に勝れるに非ず。我れ今汝の軍衆を破らんと欲する爲の故に、來りて此れに至れり。汝は諸天に惡心なるを以ての故に、汝は住する所の宮城に至ることを得ず、汝は一切正法を行はざるを以て、安樂を得ず、寂滅を得ず』と。是の如くに說き已り、直に其の所に趣きて一切刄を決し、大刀戟を雨らし、婆修吉等の雨らせる大焰火は阿修羅の軍に墮つ。時に阿修羅は是の事を見已り、卽ち鉢摩梯諸惡龍等を喚びて『汝は我が伴を爲せり。當に德叉迦・婆修吉大龍王等と、火を雨らして共に戰ふべし』と。時に鉢摩梯は是の語を聞き已り、卽ち走りて婆修吉の所に往趣き、時に二部の龍は火を雨らして相ひ燒き、天と阿修羅と大に鬪戰を興し、天復勝つことを得て、阿修羅の軍を破れり。時に阿修羅は皆共に相ひ率ゐ、往ゐて羅睺阿修羅の所に至り、憂慼ひ憔悴れて以て救護を求む。羅睺阿修羅王は是の事を見已り、之れを安慰して言はく『怖るゝ勿れ畏るゝ勿れ。我れ有るを以ての故なり。若し獨一の身にても尙彼の帝釋天王を畏れず。況んや汝等有りて以て翼從を爲すをや。諸天は劣弱なり。何をか能く爲す所ぞ。我れ今當に大仙勇健阿修羅王・花鬘阿修羅王・鉢呵娑[四]毘摩質多羅阿修羅王等に告ぐべし。彼れの爲に說き已らば、我れ當に自ら往ゐて彼の天衆を破るべし』と。時に羅睺阿修羅王は

【三】八齋。八戒齋又は八齋戒に同じ。之の中、不過中食なる齋法を具するに依り、八齋戒と云ふ。すべて、是れ齋の法なるには非ず。これに二說ありて、俱舍論によれば七戒と一の齋法を加へて、八齋戒とし、智度論、成實論、薩婆多論等によれば、八戒に齋法を加へ、總じて九戒なるも、八は戒、一は齋なれば、戒齋合して八齋戒と名くるなり。

【四】毘摩質多羅(Vimalacitra)。新に吠摩質呾利と云ふ。淨心、綺畫、寶飾等と譯す。帝釋の夫設支夫人の父なりとせらる。

若し諸の世間の法に順ひて修行せば、迦留天は則ち大勝するを得て阿修羅を壞り、是の如き諸天は阿修羅の無量の大衆と大海に鬪ひて喩ふ可き者無く、法と非法の因緣力を以ての故に、勝つこと有り退くこと有り、其の自らの力に非ず。若しは迦留天の彼れの爲に壞らるれば、時に護世天は卽ち往ゐて彼の鬘持天衆に告げ、鬘持天衆は迦留天、及び天の使者、及び德叉迦・婆修吉等の無量の大衆と和合して共に集れり。時に羅睺阿修羅王は光明城に住り、第一地の雙遊戲阿修羅・陀摩睺阿修羅は、無量億那由他阿僧祇の阿修羅の衆と同じく一軍を爲し、天と共に鬪ひて稱說す可からず。若し世間の人ハ法に順ひて修行せば、天衆則ち勝ち、阿修羅の軍は退散して破壞る。一切皆法の力勢に由りて天をして勝つことを得しめ、非法に由らず。若し法行に順ふ人無くんば則ち阿修羅勝ち、護世四天は是の事を見已りて、往ゐて常恣意天の所に詣り、是の如き言を作さく『速疾かに莊嚴せよ。阿修羅の軍は天衆に勝てり』と。常恣意天は是の語を聞き已り、無量百千の天衆と與に、種種の器仗を持し、大海に詣りて阿修羅と鬪はんと欲し、大海中に住りて、厲しき聲にて大いに叫び、速に阿修羅の軍を破らんと欲して更互に合戰し、多時を經て大惡鬪戰し、無量の苦惱あり。若し阿修羅の天の爲に破らるれば、卽ち往ゐて羅睺阿修羅の所に向ひ、具に上の事を說く。時に羅睺阿修羅王は諸の阿修羅を安慰して言はく『汝今怖るゝこと莫かれ。汝今怖るゝこと莫かれ。我れに大力有り、能く天衆を壞らん。天の力は劣弱にして、我が力は彼れに勝れり。阿修羅よ、汝等は廻る可し』と。諸の阿修羅は羅睺阿修羅王の是の語を說くを聞き已り、卽ち復還廻りて天と鬪はんと欲す。是の時、諸天は阿修羅と陣を列ねて大いに戰ひ、無量の刀戟もて互に相ひ打斫ち、是の如く大いに戰へり。時に第一地の雙遊戲阿修羅、第二地の陀摩睺阿修羅の諸の天衆と對敵して共に戰ふに、若し諸の世間の法行に順はずんば、阿修羅勝ちて天衆則ち退き、若し諸の世間の正法を修行せば、天衆則ち勝ちて、悉く能く阿修羅の軍を破壞る。是の如くに法は是れ天勝の幢にして、法を第一と爲

の城を出で、阿修羅と大海上に在りて陣を交へて鬪戰し、稱說す可からず。虛空中に於て或ひは大火を雨らし、或ひは刀戟を雨らし、互に相ひ攻伐して愛の毒にて自らを燒き、愚癡を以ての故に是の如くに鬪諍せり。若し閻浮提人の法に順ひて修行し、父母に孝養し、沙門・婆羅門を恭敬せば、一の法行の龍は則ち能く獨りして一切の阿修羅の軍を破り、若し世間の人の法を行ふ者少なくば、則ち阿修羅勝ちて法行の龍は退く。若し龍破壞るれば、即ち往ゐて天の使者の所に詣り、告げて言はく『速に來れ、速に來れ。一切の阿修羅衆は來りて我れを伐てり。我れ彼れと戰へるも、敗失して如かず』と。時に天の使者は是の語を聞き已り、種種の器仗もて自ら莊嚴り、婆修吉・得叉迦龍王所に向ひて是の如き說を作さく『我れ汝の阿修羅王の爲に破られしを聞き、是の故に此れに至れり。阿修羅の軍を破らん』と。時に天の使者は龍王と俱に阿修羅の所に詣り、共に鬪戰せんと欲す。時に羅睺阿修羅王は是の事を聞き已り、亦天所に向へり。大海上に在りて陣を列ねて戰ふに、若し世間の人の法に順ひて修行せば、時に天の使者は即ち能く速疾かに阿修羅衆を破り、時に阿修羅は既に破られ已りて、其の宮城に還れり。時に第二地の阿修羅衆は是の事を聞き已り、諸の軍衆に告げらく『汝等怖るゝこと勿れ。我が身尚存せり。能く彼の天を討たん。汝何ぞ畏るゝ所あらん』と。時に阿修羅は疾走して天の使者に詣り、大鬪戰を興し、大海中に於て陣を交へて共に鬪ひ、天復勝つことを得て阿修羅の軍を壞れり。阿修羅軍の既に破壞らるゝに、時に第三地の阿修羅は其の破られを聞き、即ち天所に向ひ、天と共に戰ひて迭互に相ひ害ふ。若しは天破壞るれば、即ち護世四天の[二]迦留天所に向ひ、是の如き言を作さく『提婆天王よ、速疾かに馳せ赴け。阿修羅衆は我れ等を嬈亂せり』と。時に迦留天は諸の器仗を持し、即ち往ゐて彼の阿修羅の所に詣れり。時に阿修羅は天衆の來るを見て大瞋恚を生じ、疾に天の所に詣り、迦留天衆と陣を合せて大いに鬪ひ、見る者の毛を堅たしめ、一切世間の鬪戰の大なる者も天と阿修羅の戰に過ぐること無く、喩ふ可き者無し。

【二】迦留天(Karipada)。詳しくは迦留波陀、又は迦留足に作る。象跡天と譯す。本經二十三卷に詳說せらる。

至り、鋡毘羅城に詣りて花鬘阿修羅王の所に至れり。時に鉢呵娑阿修羅王は無量億那由他の諸の阿修羅と、花鬘阿修羅の所に到りて是の如き言を作さく『速に起て、速に起て。我れ等能く婆修吉・得叉迦等の諸の龍及び天王等を破らん』と。時に花鬘阿修羅王は是の語を聞き已り、諸の軍衆に告げらく『今は鬪ふ時に非ず。所以は何ぞ。閻浮提人の父母に孝養し、沙門を恭敬し、正法を修行すればなり。是の事を以ての故に、天に大力有り。是の故に我れ今是れ鬪ふ時に非ず』と。時に鉢呵娑阿修羅王は花鬘阿修羅王の是の語を說くを聞き已り、告げて言はく『速に起て、速に起て。我れ能く獨りにても婆修吉等及び諸の天衆を破らん。何ぞ況んや汝等の我を同伴せるをや』と。時に花鬘阿修羅王は其の說く所を聞きて威力增長し、心に歡喜を生じ、及び其の無量億那由他の阿修羅衆は、第二地に詣れり。時に鉢呵娑阿修羅王・勇健阿修羅王・花鬘阿修羅王は相ひ隨ひて羅睺阿修羅の所に往詣し、告げて言はく『速に起て、速に起て。阿修羅王は鬪戰せんが爲の故に、諸の天を破らん故なり』と。時に羅睺阿修羅王は諸の阿修羅王に告げて言はく『我等今は是れ鬪ふ時に非ず。所以は何ぞ。閻浮提人の父母に孝養し、沙門・婆羅門を恭敬し、天上に生れて天をして大力ならしめ、是の故に天と共に鬪ふことを得ず。阿修羅王には時に非ざるを以ての故なり』と。時に諸の阿修羅王は羅睺阿修羅に語りて言はく『速に起て、速に起て。我れ鬪はんが爲の故に來りて此れに至れり。天と鬪はんと欲す』と。時に羅睺阿修羅王は卽ち其の意に隨ひ、起ちて大海に往詣かんと欲し、鉢摩梯惡龍王等に告げて、是の如き言を說かく『今彼の婆修吉・得叉迦諸龍王等を破らんと欲す』と。時に鉢摩梯は是の語を聞き已りて大いに歡喜し、卽ち婆修吉・德叉迦の所に往き、告げて言はく『汝來れ、同伴よ、汝今出づ可し。我れ汝と共に戰はん。何處に住りて鬪ふや』と。時に婆修吉・得叉迦龍王は卽ち其の城を出で、鉢摩梯惡龍と共に戰ひ、非法の惡龍は破壞れて還退せり。時に無量億の阿修羅衆は速疾かに馳奔せて龍王の所に詣り、共に鬪戰せんと欲す。時に婆修吉・得叉迦は復其

有り。所以は何ぞ。閻浮提人の正法を修行すればなり。我れ今當に往ゐて第三處に告げ、一切行阿修羅の爲に廣く上の事を說くべし』と。時に勇健阿修羅王は卽ち往ゐて第三の住處の阿修羅衆に告ぐ。時に一切行阿修羅は是の語を聞き已り、鈐毘羅城に入りて花鬘阿修羅王の所に至り、復上の事を說けり。花鬘阿修羅王は卽ち閻浮提を觀、若し沙門・婆羅門を供養する者有らば、一切行阿修羅に告げて言はく『我れ當に第四の住處の阿修羅等に告ぐべし』と。時に第三地の阿修羅は卽ち第四地の阿修羅の所に向ひ、是の如き言を說かく『婆修吉・得叉迦は四天王と共に我が伴なる諸の龍王等を破れり。我れ今當に彼の諸天衆の爲に大衰惱を作すべし』と。時に第四處の阿修羅衆は是の語を聞き已り、卽ち鈐毘羅城に向ひて鉢呵娑阿修羅の所に至れり。時に鉢呵娑は諸の阿修羅に告げらく『何故に速に行くや』と。卽ち答ふること上の如し。時に鉢呵娑は諸の阿修羅に告げらく『羅睺阿修羅等は能く爲す所無くして、四天王をして鉢摩梯龍王等を破壞らしめたり。世間の法に順ひ、沙門及び婆羅門を供養するも、何をか能く爲す所ぞ。我れ能く之れを壞らん』と。時に鉢呵娑阿修羅王は大衆の阿修羅の所に至り、告げて言はく『速疾かに莊嚴せよ。我れ今婆修吉・德叉迦等と四天王の所に往きて、其の軍衆を破らんと欲す』と。時に諸の阿修羅は無等の力を以て、天と共に鬪へり。時に鉢呵娑阿修羅王は諸の阿修羅に告げて言はく『汝等は何が故に勇力有ること無く、彼の諸の龍王等を破る能はずして、而も自ら破壞れしや。我れ今當に往くべし。自ら身の力を以て、彼の龍と天を破らん』と。時に鉢呵娑阿修羅王は其の軍衆に勅すらく『速疾かに莊嚴りて諸の器仗を執れ。我今久しからずして天と共に鬪はん。汝等の先に見たる天の怨敵と、久しからずして當に（事を）發すべし、我れ諸の阿修羅衆に告ぐ。天は忍ぶ可からず、當に彼れと戰ふべし』と。時に諸の阿修羅は是の事を知り已り、卽ち自ら種種の器仗を莊嚴れり。是の時大力の波羅呵娑阿修羅王は自ら勇力を以て、大心にして畏無く、自力と他力の優劣を量らずして、自ら其の城を出でて第三地に

復次に、比丘、業の果報を知りて、一切忍阿修羅衆の業及び果報を觀る。何の業報を以て一切忍阿修羅地に生れしや。卽ち聞慧を以て此の衆生を知るに、美味に愛著し、林樹の間に住みて此の林樹を護るも、衆生の爲にせるに非ず、自ら命を活かさん故にして、悲心有るに非ず、自らの利益の爲に、身命の因緣にて一切の林を護り、是の因緣を以て、身壞れ命終りて一切忍阿修羅中に生れしなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて、阿修羅の天と共に鬪ふを觀る。卽ち聞慧を以て法行龍王の戲樂城を觀るに、龍王の頂上に七頭有り、其れを名けて〔一〕婆修吉龍王・德叉迦龍王・跋陀龍王・樓醯龍王・雲鬘龍王・婆都龍王・一切道龍王・鉢呵婆龍王・婆利沙龍王と曰ひ、此の諸の龍王は正見にして法に順ひ、樂みて放逸を離るゝこと、上に說く所の如し。時に法に順はざる非法の惡龍の鉢摩梯龍王・毘諶林龍王・迦邏龍王・睺樓睺龍王等は如法の龍王の爲に壞られ、卽ち走りて第一の住處の雙遊戲阿修羅王の所に往趣き、是の如き言を作さく『速に來れ、速に來れ。同伴よ、當に知るべし、婆修吉龍王・得叉迦龍王及び四天王は我等を破壞れり。汝は今是れ我れの親しき所の友なり。何ぞ相ひ助けざるや』と。時に遊戲阿修羅は是の語を聞き已りて卽ち光明城に詣り、羅睺阿修羅の所に至れり。到り已りて具に上の事を說けるに、若し羅睺阿修羅王の、世間の人の正法を修行し、沙門を供養し、恩を知り恩を報ぜるを知らば、鉢摩梯等の惡龍王に語りて言はく『且く住りて一月、彼の婆修吉・得叉迦龍王を遮へよ。我れ當に彼の第二の住處の阿修羅に告げて、汝等を惱ます無からしむべし』と。廣く說くこと上の如し。時に陀摩睺阿修羅は是の語を聞き已り、星鬘城に入りて阿修羅王の所に至り、是の如き言を作さく『婆修吉龍王・德叉迦龍王及び四天王は、鉢摩梯を惱亂せり』と。時に第二地の勇健阿修羅王は是の事を聞き已り、卽ち自ら力有りや力無きやを觀察す。若し閻浮提人の正法を修行し、沙門及び婆羅門を供養せば自ら力無きを知り、彼の使に答へて言はく『天に大力

【一】婆修吉等は十八卷の註を見よ。跋陀は十八卷の跋陀羅に同じく、樓醯は盧醯に同じ。

是の如き心意に使はるゝ衆生は、流轉して三界の海を行く、愚癡と愛結の自在なるが故に、心に使はれて衆生は流轉し行き、彼の涅槃の城に到る能はざること、生盲の人の正路を失へるが如し。

是の如くに衆生は種種の業を作し、是の故に彼の城にて種種の報を受く。是れ第四地にして、其の城外に於て園林・流池は周匝を圍遶み、河泉の蓮華と衆鳥の類を異にせるは、第四の阿修羅地なる所住の處を莊嚴り、一切忍阿修羅等は勇健にして畏無く、第一端正に其の身を莊嚴し、共に相ひ娯樂みて相ひ惱亂せず、心常に悅樂して猶し節會の如く、衆の婇女と與に種種に莊嚴り、一一の徒衆は眷屬に圍遶まれ、或ひは百、或ひは千、遊戲して嬉樂し、其の地は皆摩尼眞珠を以て、以て婇女を僞して、光明晃燿き、諸の阿修羅は鉢呵娑阿修羅王を恭敬・尊重し、瞻仰して厭ふこと無し。樂報を受くと雖も、無常にして敗散す。

復次に、比丘、業の果報を知りて、一切忍阿修羅王の受くる所の果報を觀る。何の業を以ての故に彼處に生れしや。卽ち聞慧を以て此の衆生を見るに、人中の時に於て邪見心を覆ひ、業果を識らずして佛・法・僧を離れ、第一に精進せる持戒の人の須ふる所有らんと欲し、來り從ひて乞ひ求め、辛苦して乞ひ索むるを見て、乃ち一食を施し、既に施し已りて是の言を作さく『我れ汝に食を施せるも、何の福德か有らん。我れ癡なりしを以ての故に、汝に此の食を施せり。汝は下賤の人にして、出家に應らず。食を以て汝に施せるは、種子を以て之れを沙鹵に投ぜしが如し』と。是の如きは難施なり。身壞れ命終りて、此の難施を以て惡道に墮ち、不淨の布施なりしも、福田の功德を以て、第一の安樂なる處に生れて衆寶に莊嚴られ、畜生の報を受くるも、不動界に生れて阿修羅を作し、一切忍と名け、謂はく、天と等しくして、餘の一切の阿修羅王より勝れ、一切の樂具を皆悉く具足せり。福田に施せるを以て是の如きの報を得、自心にて生れしに非ず。

巻の第二十

畜生品之三

復次に、比丘、業の果報を知りて第四の阿修羅地を觀る。彼れ聞慧を以て見るに、畜生なる阿修羅の地有り、三地の下二萬一千由旬に在りて、名けて不動と曰ひ、其の地の廣博六萬由旬、城を鋡毘羅と名け、縱廣一萬三千由旬にして、莊嚴妙好なり。阿修羅王を鉢呵娑と名け、阿修羅衆を一切忍と名け、是の阿修羅王は諸の阿修羅中に於て勝れし自在を得、安樂・勇健にして、光明の威德あり、自在にして畏無く、尙帝釋天王をも畏れず。況んや餘の天に於てをや。大勢力有り、放逸・憍慢にして、一切の地の下に住み、此れ從り以下には更に住處無く、是の阿修羅王の所住の處は摩尼寳珠以て其の地を爲し、心常に歡悅び、人の節會の如く喜樂して自ら娯み、諸の愛慢多し。衆の蓮華・流泉・浴池を以て周遍く鋡毘羅城を莊嚴り、七寳の宮殿は以て莊嚴を爲し、諸の怨敵を離れ、互に相ひ親善して他の怖畏無く、第一の樂を受く。此の第四地の鋡毘羅城は園林・浴池・蓮華にて莊嚴られ、七寳の宮殿は端嚴・殊妙にして星の空に處るが如く、端嚴・殊妙なること亦復是の如し。伽他頌に曰く。

心は能く一切の業を造り、心に由るが故に一切の果有り、是の如き種種の心行にて、能く種種なる諸の果報を得。

心は一切の巧なる畫師と爲り、能く三界に於て衆行を起し、心の爲に使はれて諸趣に遍く、處處に生を受けて窮已り無し。

心は解脫の本を繫縛することを爲し、是の故に心を說きて第一と爲す、善を爲さば則ち能く解脫を得、惡不善を造らば則ち縛られん。

の頃に於て天と共に闘ひて、天亦勝つことを得、花鬘阿修羅王は、敗散して宮に還る。比丘、是の如くに阿修羅の天と共に闘ふを觀、實の如くに見已りて厭世の心を生じ、法に順ひて修行す。

復次に、比丘、業の果報を知りて、第三地の花鬘阿修羅王の受くる所の業報を觀る。何の業を以ての故に、第三地に生れしや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、節會の日に因り、相撲・射戲・樗蒲・圍碁にて種種に博戲し、此の事に因るが故に不淨の施を行ひ、心無く思無く、亦福田無くして、是の人の身壞れて惡道に墮ち、遊戲行阿修羅中に生れしなり。壽は七千歳にして、人中の七百歳を以て阿修羅中に於ける一日一夜とし、是の如きの壽命は七千歳に滿ち、亦中夭する有りて、命亦定まらず。

復次に、比丘、業の果報を知りて花鬘阿修羅王を觀察・思惟す。卽ち聞慧を以て此の阿修羅王を知るに、食を以て破戒の病人に施し、心に淨き思ひ無し。此の業緣を以て阿修羅中に生れ、鋡毘羅城に於て阿修羅王を作し、名けて花鬘と曰ひ、其の食ふ所の食味は天の食ふ所の須陀の味の如く、一切の樂を具ふること、前に說く所の如し。

の正法を修めず、法行に順はず、父母に孝ならず、沙門及び婆羅門を敬はずんば、則ち阿修羅勝ち、阿修羅勝つを以ての故に、雨の澤すこと時ならずして、人民に飢饉あり、兵刃數起り、世間の邪見の諸の相師等は是の思惟を作さく『八曜の所作なり』と。世人の爲に星宿の過を說くこと、廣く說くに上の如し。是の如き一切の諸の外道等は正法及以び非法を知らずして、愚癡の心を以て憶想・分別し、實の如くに說かず。阿修羅の勝れ、龍王如かざるを以て、時に護世四天王は卽ち四天衆に向ひ、[九]伽陀頌にて曰く。

法勝るれば非法は滅じ、實を增さば妄語を離れ、天は阿修羅より勝れ、光明は黑闇に勝る。
布施は慳貪より勝る、戒を持して毀犯ること莫かれ、佛勝れ外道に非ず、動かざるは退沒くに勝る。
實を語り諂曲なる莫かれ、悲心は怨害より勝れ、慈心は瞋恚に勝り、天王は衆羅に勝る。
上勝るれば下增すこと莫く、豐勝れば飢饉勿く、智勝るれば愚癡を滅し、法戒は衆惡を滅す。
精進せば懈怠を離れ、丈夫は女人より勝れ、長者は小人に勝り、忍は瞋恚より勝る。
人勝れ惡龍に非ず、白日は夜に勝り、月勝れ餘の曜に非ず、五穀は萱の苗より勝る。
苦を滅すれば樂み增長し、病を離るれば常に安樂にして、柔軟なるは麁惡に勝り、解脫は衆の縛を滅す。
法戒は一切に勝れ、善法の常に增勝せば、不善は常に消滅ぶ。

護世四天王は是の如くに說き已り、卽ち天鼓を擊ちて是の言を作さく『諸天の大衆よ、龍王退弱し、阿修羅勝てり』と。時に諸の天衆は是の語を聞き已りて器仗を莊嚴り、須臾の頃に於て大海上に至れり。若し世間の人の父母に孝養し、沙門に敬事せば、阿修羅衆は諸天の來るを見、卽時に退散し、還りて其の宮に入り、若し諸の世人の父母に孝ならず、沙門及び婆羅門を敬はざるも、須臾

【九】伽陀頌。梵漢並びあぐ。伽陀(gāthā)。卽ち、譯して頌なり。諷頌するやうに造られたる韻文。

此の四種の林は阿修羅の鋡毘羅城を莊嚴り、遊戲せる阿修羅衆の快樂は天の如くに異なる無く、衆の塗香・末香を以て自ら其の身に塗り、常に樂みて遊戲し、歌舞して戲笑し、百千の婇女に圍遶み衞護られて、花鬘阿修羅王は、常に園林に遊びて相ひ娛樂み、種種の衆寶もて其の身を莊嚴れり。是れを遊戲阿修羅の所受の樂處と爲す。時に第二地の勇健阿修羅王の遺使と名けて閻婆と曰ひ、來りて花鬘阿修羅の所に詣り、是の言を作さく『閻浮提人は父母を供養し、恩を知り恩を報じ、沙門及び婆羅門を恭敬し、法の如くに行へるが故に、天をして力有ら令めたり。我れ當に力を竭して人天の行へる所の正法を破壞すべし』と。是の時、第三地の花鬘阿修羅王は是れを說くを聞き已り、上に說く所の如く心に瞋恚を懷きて、是の如き言を作さく『我れ當に云何んが彼の人天を壞るべきや。人に因るが故に天あり、人天は是れ我れの大なる怨なり』と。時に第三地の遊戲阿修羅は卽時に種種の鉀冑を莊嚴り、器仗を執持り、樂城なる龍王の宮殿に詣らんと欲せり。時に婆修吉・得叉迦大龍王等は、阿修羅の聲を聞きて大瞋恚を生じ、身より電光を出し、赫き焰は大いに明るく、大熾電を雨らし、無量百千億の龍は海中從り出で、阿修羅と共に大鬪諍を興せり。若し閻浮提人の正法を修行せば龍は則ち勝つを得、阿修羅衆は四散して破壞れ、若し世間の人の正法に順はずんば、則ち阿修羅勝ち、龍の衆破壞れ、既にして破られ已らば、往ゐて天の使者に白して言はく『大仙よ、我れ今破られたり。汝應に力を竭して阿修羅を破るべし』と。時に天の使者は是の事を聞き已り、心に瞋恚を生じて口中より煙を出し、往ゐて四天王に告げ、白して言はく『天王よ、阿修羅勝ち、龍は今破壞れたり』と。閻浮提中の邪見の相師は煙の相を見已り、咸是の說を作して、彗星出現せり、或ひは豐、或ひは儉、或ひは水、或ひは旱ならんと。亦上に說けるが如し。是れを第二の因緣にて彗星出現すと爲す。若し天・龍勝たば則ち時雨を數降らし、疫氣行らず、兵革起らず。邪見の相師は復是の說を作し、是れ八曜の力の作爲する所なり、と、廣く上の事を說く。若し諸の世間

人の力を以ての故に天は増勝れ、天の擁護を以て人は安隱なり、各各迭互に勢力を増して、正法に隨順せる道に住することを得。

天の善道は人世界にして、人の善道は天世間なり、諸の惡道の地に三種ありて、善を行ふ人の遠離する所なり。

汝は應に勇猛く勤精進み、當に樂みて善知識に親近み、是の如く常に應に法を增長し、力を勉め勤を加へて天宮に昇るべし。

法を衆の樂の根本と爲し、法の因緣を以て涅槃を得、眠睡れる衆生を法は常に覺ます。法は最勝なる第一の道たり。

時に天帝釋は是の如くに敎勅し、護世四天王は閻浮提人を護りて正法を增長し、利益を得せしめんが爲の故に、遍く行きて觀察せり。

復次に、比丘、業の果報を知りて天の心行を觀已り、內に自ら思惟して法行に隨順す。

復次に、比丘、業の果報を知りて阿修羅の第二地を觀已り、次いで第三の阿修羅地を觀る。何等を第三の阿修羅地と爲すや。彼れ聞慧を以て第三地を觀るに、第二地の下二萬一千由旬に在りて阿修羅地有り、修那婆と名け、縱廣一萬三千由旬にして、樹林鬱茂り、浴池・流泉に衆花常に敷き、伎樂充滿てり。城を鋡毘羅と名け、縱廣八千由旬にして、彼の城中に於て阿修羅王有り、名けて花鬘と曰ひ、阿修羅民を遊戲行と名く。彼の阿修羅の鋡毘羅城を種種の衆寶以て莊嚴を爲し、園林に遊戲し、淸流・浴池に蓮花を具足へ、遊戲せる阿修羅衆は悉く其の中に滿てり。四大林有りて以て莊嚴を爲し、六時中に於て花常に鮮榮えたり。何等を四と爲すや。一を鈴鬘と名け、一一の林樹に皆寶鈴有りて妙なる音聲を出し、二を黃鬘と名け、其の林は悉く皆是れ眞金の樹にして、三を焰鬘と名け、其の樹の花の色は猶し火焰の如く、四を雜林と名け、諸の雜れる花果は以て莊嚴を爲し、

若しは欲境に惑ふことを爲さゞる有り、愛欲の因緣に隨はずんば、三惡道の怖畏を脫るゝを得て、是の如きの人は天上に生れん。
若し鬪諍せるを見れば能く勸喩め、知識・親族及び兄弟の、能善く和解して諍ふ無からしむれば是の如きの人は天上に生れん。
若し人惡を離れ欲泥を出で、常に一切の衆生に樂を施さば、垢を離れし寂滅の心は解脫して、則ち能く魔の軍衆を破壞らん。
若し能く心意を調伏へて、心意の使ふ所と爲らずんば、是の人は淸淨にして怨敵を破り、則ち諸の天宮に上生れるを得ん。
若し人有りて能く身業を淨くし、衆の惡不善の法を遠離れ、欲を離れて禪定の樂を修習へば、是の如き人は天宮に生れん。
放逸なる惡知識を捨離て、愛の毒と諸の煩惱を斷除き、女人の欲の縛る所と爲らずんば、是の如きの人は天宮に生れん。
若し人法に於て勤精進み、布施・持戒及び三昧(を行ひ)、志意勇猛しく心、堅固ならば、是の人は則ち天上に生れん。
若し人能く衆の〔八〕結縛に於て、智刀もて之れを斬りて礙られず、自在に縛を離れて滯ほる所無くんば、是の如きの人は天宮に生れん。
諸の欲垢を離れて貪著せず、衆の過惡を滅して染愛を除き、勇健に垢を離れて悕望を斷たば、則ち自らの果報を受くることを得。
若し衆生有りて人の報を受け、能く常に衆の善法を修行せば、是の如き善人は業の果報にて、天世間をして增長せしむることを得。

【八】結縛。煩惱の束縛。

阿修羅は、閻浮提中の法行の衆生を惱亂する能はず。唯願はくは仁者よ、我れの爲に釋迦天王に啓白げよ』と。時に諸の龍王の此の語を說き已るに、護世天王は帝釋の所に至り、具に上の事を說けり。時に帝釋は是の語を聞き已りて歡喜・踊躍し、伽陀頌にて曰く。

牟尼は眞に知りて實道を說きたまひ、若しは人の能く行きて天上に生れ、諦かに布施を行ひ慈心を修むれば、諸の衆生を護りて愛語を說きたまふ。

正見にして清淨の心は垢を離れ、佛は三十三天道を說きたまふ、淨きを修めて衆の善行と相應し、能く善心を以て正しきに依止したまへり。

此の樂處從り樂處に至り、復光明從り還りて明に入りたまふこと、譬へば朝落ちし光明華の如く、亦一燈の異なる燈を然やすが如し、若し人彼の燈の如きを得んと欲すれば、放逸を行ひて自ら心を壞すこと莫かれ。

若しは常に淨善を行ふ心有り、垢を離れて明淨なること寶珠の如くんば、是の人智慧あり塵垢を離れ、能く諸の天の生るゝ處に至らん。

戒を持し禪及び三昧を習ひ、若し人能く心に修行すること有らば、是の人の智慧は眞金の如くにして、必ず諸の天宮に往生することを得。

若しは殺生を捨離すること有り、諸の衆生に於て慈悲を起し、愍哀・質直の心・寂靜ならば、是の如きの人は天宮に生れん。

一切の人に於て軟語を施し、衆の惡不善の業を捨離れば、惡業は其の心を汚す能はずして、是の如きの人は天宮に生れん。

若し人金を視ること草木の如く、諸の愛欲を觀ること火毒の如くんば、是の如き欲を離れし智慧の人は、則ち天宮に生れて快樂を受けん。

りて、何の所作を爲すや。彼れ聞慧を以て天の使者を知るに、護世鬘持天の所に詣り、是の如き言を作さく『阿修羅衆は法行に須はずして、諸の惡龍に敎へて、閻浮提の法に順ひ善を行へる諸の福德人の爲に不饒益を作し、衰害・惱亂せしむ。所以は何ぞ。彼の善を行ひ法に順へる人の命終りて天に生れんことを恐れ、彼れ是の念を作さく「閻浮提人は食の因緣を以て、能く布施・持戒・智慧を行ふ。汝當に往ゐて閻浮提に至り、惡雨を降澍して民の百穀を害ふべし」と。空行の法に順へる諸の夜叉等は來りて我が所に至り、是の如きの事を說き、我れ今汝に語れり。汝は展轉して餘の天衆に告ぐ可し。若しは軍持天・三箜篌天・常恣意天に是の如き事を說きて、普く聞くを得しめよ』と。時に四大天王は其の所說を聞き、往ゐて善見城中の善法堂上に詣り、五欲の功德と眷屬を具足せる憍尸迦天王(帝釋天)の所にて、廣く上の事を說けり。天主憍尸迦は卽ち護世四天王に告げて言はく『汝當に往ゐて閻浮提に詣り、諸の衆生を觀るべし。佛寶・法寶・比丘僧法を信ずること有り、沙門・婆羅門・耆舊・長宿を供養し、恩を知り恩を報じ、質直にして信有り、父母に孝養し、齋戒を受持し、諂はず佞ず、斗秤を以て人を欺誑きて、互に相ひ陵易ざるや』と。爾の時、護世四天王は是の語を聞き已り、衆生を利せんが爲に閻浮提に下り、一一の國土、一一の聚落、一一の城邑・軍營・村柵を一一觀察し、法敎を修行せるを遍く行きて普く觀る。爾の時、護世四天王は、閻浮提人の法行に隨順し、父母に孝養し、三寶を敬信せるを見、此の事を見已りて、卽ち大海の大龍の王宮なる戲樂城內の婆修吉・得叉迦等の大龍王所に詣り、是の如き言を作さく『法行龍王よ、怖るゝ勿れ、怖るゝ勿れ。非法減少し、正法增長して闇冥を破壞し、光明を顯發し、魔の軍衆を動かし、天衆を增長せり。天人・龍王は樂みて正法を行ひ、能く法鼓を擊ち、歌頌の法音にて天衆を增益し、諸の魔・非法の惡龍及び阿修羅を減損せん』と。時に婆修吉・得叉迦等の諸の大龍王は聞き已りて歡喜し、卽ち護世四天王に白して言はく『我れ今歡喜せり。天王よ、我れ今畏れず。非法の惡龍、非法惡行の敵

遊戲する處にして、蓮華の浴池を鳧雁・鴛鴦周遍く莊嚴り、歡娛みて樂を受け、其の地の住處に七の園林有り。一を雪鬘林と名け、二を常林と名け、三を戲樂林と名け、四を果常集林と名け、五を風樂林と名け、六を伎樂林と名け、七を雜寶林と名け、是れを七種の大林と爲し、陀摩睺阿修羅の所住の處に諸の衆侶多く、自らの業力を以て皆富樂を受け、悉く其の中に滿てり。

復次に、比丘、業の果報を知りて陀摩睺阿修羅の受くる業の報果を觀る。何の業を以ての故に彼處に生るゝや。卽ち聞慧を以て此の衆生を知るに、前身の時に於て、大施會を作して外道を供養し、不淨の施を行ひ、漏を雜へて堅ならず、種種の食を以て破戒の雜行の人に施し、心に正思無くんば、是の如くに施し已りて、命終りて畜生の中に生れ、陀摩睺阿修羅の身を受け、下・中・上の業を以て、得る所の樂報に亦下・中・上あり、因果相ひ類たり。

復次に、比丘、業の果報を知りて勇健阿修羅王の業の果報を觀る。何の業の報を以て、阿修羅王を得しや。彼れ聞慧を以て此の衆生を觀るに、人中の時に於て、憙びて賊盜を作して他の物を偸竊み、不正の思を以て、離欲の外道に施して飮食を充足さしめ、是の因緣を以て阿修羅中に生れしなり。

復次に、比丘、陀摩睺阿修羅の壽命の[七]倐促を觀、彼れ聞慧と天眼を以て觀察して、阿修羅の壽は六千歲なるを見る。閻浮提中に於ける六千歲を以て陀摩睺阿修羅中の一日一夜と爲し、是の如きの壽命は滿六千歲にして、少しく出で多く減じて、命亦定まらず。善・不善の業因緣を以ての故に、畜生道の業果の爲に攝せられ、阿修羅に於て第二地を爲せり。第二地を觀已り、法行に隨順して一切衆生、法に順へる衆生、法を護れる衆生を觀る。一切の生死に攝せらるゝ衆生は、善業にて人・天の中に生れ、惡不善の業にて地獄・餓鬼・畜生に生る。

復次に、比丘、業の果報を知りて天の使者を觀るに、虛空中の神通夜叉の是の事を說くを聞き已

【七】倐促。は長短に同じ。

大雨を降澍すと言ひ、牛婆羅門の力の故に天をして雨を降らしめ、餘の因緣に非ず（と言ふ）。若しは閻浮提人の父母に孝ならず、沙門・婆羅門を供養せず、尊長を敬はず、正法を行はずんば、婆修吉・得叉迦なる如法の龍等は退沒して如かず。時の惱亂・奮迅龍等は大勢力を得、閻浮提をして雨の澤すに時ならず、災旱・水澇ありて、人民を飢饉ならしむ。世間の邪見の呪術・占星の諸の相師等は是の如き說を作す。八曜の過の故に、時節の過の故に、卦相の過の故なり、と。諸の外道等は業果を識らず、衆人惡を行ふを以て、國をして災儉あらしむるを知らずして、更に異說を作し、實の如く見るに非ず。何を以ての故に。若しは天世間、若しは魔世間、若しは梵世間、若しは沙門・婆羅門は其の境界に非ず、唯如來及び我が弟子なる諸の沙門等の、我が說く所の諸の業の果報及び餘の業報の決定せる相を聞けるを除き、是の餘の人の能く是の業を知れるに非ず。

　復次に、比丘、業の果報を知りて陀摩睺阿修羅の所住の處を觀る。若しは如法の龍王なる婆修吉等の大勢力を得れば、非法の者は壞れ、陀摩睺阿修羅は星鬘城に住し、或ひは林中に住み、心に憔悴を懷き、光明・威德も悉く亦損減し、羞愧ぢ愁慼へて自ら其の宮に入り、是の如き念を作さく『我れ今何時か能く諸天を破らん』と。時に陀摩睺は是れを思惟し已り、即ち羅睺阿修羅の所に往ゐて是の如き言を作さく『阿修羅王よ、汝は當に强力なるべく、怯弱を得る無かれ。久しからずして我れ當に彼の天衆を破るべし』と。羅睺阿修羅王は是の語を聞き已り、陀摩睺勇健阿修羅に告げて言はく『汝愁怖する莫かれ。且く自ら意を安んぜよ。久しからずして我れ能く彼の天衆及び天主なる帝釋天王を壞らん』と。時に陀摩睺勇健阿修羅王は是の語を聞き已り、復更に歡喜して、其の所止に還れり。

　復次に、比丘、業の果報を知りて星鬘城を見已り、次いで陀摩睺阿修羅王の餘の地の園林を觀る。彼れ聞慧を以て陀摩睺を觀るに、異なる園林有り、縱廣一萬三千由旬、園林・流池は衆鳥の異類の

間飢饉ならん』と。或ひは豐樂なりと言ひ、或ひは王者の吉凶・災祥を言ひ、或ひは國土安寧なりと言ひ、或ひは荒壞せんと言ひ、或ひは人畜安隱にして無爲なりと言ひ、諸の世の邪論は此の說を作すと雖も、而も相の因緣を知る能はず。何を以ての故に。但相に隨ひて說き、業果を知らざるが故なり。所以は何ぞ。一切世間の沙門・婆羅門、若しは・天・魔・梵、若しは阿修羅は、是の如くに微細の業因緣の果報を知る能はず、我が此の法律なる十善業道を思惟する能はず。唯如來のみを除く。

復次に、比丘、業の果報を知りて空行の大力夜叉を觀るに、云何んが此の大勢力を得て能く天上を行き、能く大海の法行龍王の所に至るや。彼れ聞慧を以て見るに、空行夜叉は大神通力にて大海中に入り、婆修吉・得叉迦なる法行に隨順せる大龍王の所に至りて、是の如き言を說かく『陀摩睺阿修羅の勇健阿修羅王は一切觀池に至り、自ら其の身を觀て』と、上に說く所の如し。時に婆修吉・得叉迦等の諸の大龍王は夜叉の說けるを聞き、夜叉に告げて曰く『非法の惡龍を我れ當に呵責して、其れをして折伏せししべし。我れ當に彼の閻浮提中に於て時雨を降澍し、閻浮提人の百穀の苗稼悉く增長するを得て、豐樂・安隱なら令むべし』と。夜叉は聞き已り、歡喜して去りぬ。時に大龍王の婆修吉・德叉迦なる諸の龍王等は、自ら莊嚴り已りて、往ゐて非法の惡龍の惱亂龍王・奮迅龍王なる諸の惡龍の所に至り、是の如き言を作さく『汝は非法を行ひ、好みて衆惡を作せり。我れ正法を行ひ、衆の善に隨順す。汝は我等に於て、善き伴を爲すに非ず。我れ今汝と鬪ひて其の勝負を決せんと欲す』と。時に惱亂龍・奮迅龍等は是の語を聞き已り、卽ち起ちて莊嚴し、雷を震はし雹を耀らし、霹靂にて火を起し、大雨を降澍そぐ。若し閻浮提人の父母に孝養し、沙門及び婆羅門・耆舊・長宿に供養せば、時に婆修吉・德叉迦龍王等は則ち勝れし力を得、惱亂・奮迅惡龍王等は破壞れ還退しむ。閻浮提をして雨の澤すに時を以てし、人民を豐樂ならしむ。時に諸の呪師・星宿を占ふ者は妄りに邪說を作して、八曜等の功德の相の故に、二十八宿の功德の相の故に、是の故に時に依りて

或ひは王崩びんと言ひ、或ひは兵起ると說き、或ひは起らずと言ひ、或ひは牛婆羅門の吉と不吉とを言ひ、或ひは水旱の災異を言ひ、或ひは某國に凶衰ありと言ひ、或ひは某國に事無しと言ひ、此の說を作すと雖も虛妄にして實ならず。

　復次に、比丘、業の果報を知りて惡龍、惡阿修羅の行ふ所の法を觀る。彼れ聞慧を以て見るに、彼の大身の大神通力を行使せる夜叉は、諸の天衆に告げて上の如き事を說き、時に四天王は夜叉に告げて曰く『汝畏るゝこと莫かれ。汝畏るゝこと莫かれ。諸の天は尊勝にして、阿修羅は怯弱・下劣なり。何ぞ能く爲す所あらん。所以は何ぞ。閻浮提の人は正法を修行し、父母に孝養し、沙門・婆羅門を供養し、長宿を恭敬せり。是の義を以ての故に我が最增長し、阿修羅は弱くして能く爲す所無し』と。時に虛空神と諸の大神通の大夜叉等は天の所說を聞きて歡喜・踊躍し、彼の惡龍・阿修羅の所に於て大いなる瞋恚を生じ、卽ち下りて法行の龍王なる婆修吉・得叉迦等の諸の龍王の所に至り、上の因緣を說かんと欲して空從り下るに、一切の身分に光焰騰りて赫き、是の相を見る者は皆[六]憂流迦下ると言ひ、若し其の夜下れば皆見、若しは晝下らば或ひは見、(或は)見ず。下りて大海に入り、彼の法行龍王の所に至りて上の因緣を說く。是の相を見已り、世間の邪見の諸の呪術師は咸異說を作して、是の相出ずれば或ひは豐樂なりと言ひ、或ひは飢饉ありと言ひ、或ひは王者の吉凶を言ひ、或ひは兵起ると言ひ、或ひは起らずと言ひ、或ひは人民喪沒せんと言ひ、或ひは死せずと言ひ、或ひは牛婆羅門に吉有り、不吉ありと言ひ、此の說を作すと雖も業果を知らず、相似の說に隨ひ、眞實有ること無し。

　復次に、比丘、憂流迦をる天火の下る者を觀るに、復因緣有りて憂流迦下る。諸天の行かんと欲して宮殿を身に隨へ、其の行速疾かにして、二殿竝び馳せて互に相ひ研磨れ、火の熾なる焰の光明を騰りて赫かしめ、上從り下るに、世の人見已り、諸の呪術師及び占星者は是の如き說を作す『世

【六】憂流迦(Ulkā)。註に、魏に天狗下ると言ふとあり。天狗とは彗星の名なり。

則ち不善事の起ること有り、善・不善等の一切の諸業は因緣從り生じ、無因生に非ず、作者有るに非ず、因果相似して果報を得。邪見の相師は因果を識らずして、是の說を作して言はく、『天帝地を動かせり』と。或ひは風を動かせりと言ひ、災禍・豐樂・飢儉・荒壞・王者の吉凶・風雨・旱澇・兵革・軍陣の或ひは起り、起らず(と言ひ)、天手婆羅門は或ひは善く或ひは惡し(と言ひ)、世間の相師の吉凶を占相ひ、星宿を觀る者は、因果を識らずして但此の說を作し、百災を記說して一言に徵有りとし、愚人皆謂はく『我が此の[四]書記は、最勝にして比無し』と。

復次に、比丘、業の果報を知りて、陀摩睺阿修羅の勇健阿修羅王、非法の惱亂惡龍王等を觀る、具に觀察し已りて、一切の諸の世間を利せんが爲の故に、思惟し觀察す。云何んが惡龍・弊阿修羅は、何の因緣の故に損減へて勝れず、衰損へて諸の世間を壞すことを作さゞるや。卽ち聞慧を以て知るに、閻浮提人の若しは正法を修行し、父母に孝養し、沙門・婆羅門及び諸の耆老を供養し、若しは王・大臣の正法を修行せば、爾の時、地神・諸の夜叉等は彼の惡龍・惡阿修羅の非法を行ひて諸の世間を壞さんと欲するを見、卽ち大海に向ひて婆修吉龍王・得叉迦龍王等の諸の龍所に至り、是の如き事を說き、復虛空夜叉等に告げて上の如き事を說けり。時に虛空中の諸の夜叉等は諸の地神の是の語を說くを聞き已り、卽ち大身の大神通力を以て、大瞋恚を生じて口中より煙を出し、空に乘り上行して往ゐて四天王の所に至り、是の如き言を說かく、『[五]提婆天王よ、惱亂惡龍・弊阿修羅は、今閻浮提中の法に順ひて修行し、孝養せるの人を破壞せんと欲せり』と。閻浮提中の邪見の論師は、彼の夜叉の口中より煙を出すを見て彗星出ずと謂ひ、是れ閻羅王の一百一子なりと言ひて、乃ち是れ一百一の大力の夜叉なるを知らず、時に彼の世人に或ひは見る者有り、見ざる者有り。世俗の相師は說きて是れ閻羅王の一百一子なりと言ひ、實の如くに知らず、妄りに分別を生じ、彗星出ずと言ひて、或ひは豐樂なりと言ひ、或ひは飢饉あらんと言ひ、或ひは王者に吉祥ありと言ひ、

【四】書記。原語は恐くは(Vyākaraṇa)說示、示現、豫言、記莂、ならん。

【五】提婆(Deva)。天と譯す。

龍王ありて、是の如き等の龍は正法に順ぜず。時に陀摩睺阿修羅王は既に龍の所に至りて、是の如き言を作さく、『汝は世人に於て自在を快得たり。人今天を助け、我れをして損減へしむ。人は食に依るが故に壽命を得るなり。汝當に我が爲に彼の人の食を斷つべし。汝若し能く爾らば、則ち復人無く、若しは人民無くして、天は則ち損減へん。婆修吉龍王・得叉迦龍王は是の汝の大怨なるが如く、我れの諸天に於けるも亦復是の如くにして、我れの怨敵なり。汝我が爲に人界を殄滅す可し』と。爾の時、惡龍は陀摩羅勇健阿修羅王の是の如くに説けるを聞き已り、答へて言はく、『甚だ善し。我れ當に汝と共に伴侶を作して、明翼け、佐助くべし』と。是の時龍王は自ら其の宮に入り、大瞋恚を起して大水を震動し、或ひは百由旬、二百由旬、三百旬由にして、地は水上に住するも、水動くを以ての故に大地も亦動く。非法の惡龍の大地を動かし已るに、世間の邪見の諸の論師等は咸是の説を作す、『是の如きの相は國土に災儉あるなり』と。或ひは豐樂ならんと言ひ、或ひは王崩びて大臣殃を受くと言ひ、或ひは王者に靈瑞・吉祥ありと言ひ、或ひは兵起ると言ひ、或ひは安隱なりと言ひ、或ひは水災ありと言ひ、或ひは亢旱あらんと言ひ、世間の相師は是の如くに地動の相を説き、而も動く因緣を知る能はず。復異なる因緣有るが故に大地をして動かしめ、諸の衆生の善・不善の業を行ふ因緣に隨ふが故に、地大をして動か令む。地下に風有りて名けて持風と爲し、持風動くが故に大水をして動か令め、大水動くが故に大地をして動か令め、五十由旬、或ひは百由旬、或ひは二百由旬、或ひは三百由旬、或ひは四百由旬にして、風の廣狭に隨ひて水の動くことも亦爾り。水の廣狭なるが如くに地の動くことも亦然なり。卽ち聞慧と天眼を以て觀察するに、風は水を持し、水は地を持し、風動くを以ての故に大水則ち動き、水動くを以ての故に大地則ち動くなり。是れを二の因緣の故に、地大をして動かしむと名く。彼の比丘、二種に動くを觀るに、若し善の因緣動かば、衆生は豐樂にして諸の衰患無く、若し諸の衆生の不善の行を作せる因緣動かば、衆生に

旬、第一に清淨く、最上の美味にして、泥濁有る無く、亦垢汚無く、湛然として滅ずること無く、端嚴愛す可くして、猶し滿月の如し。星宿城中の其の池を名けて一切觀月と曰ひ、池の勢方を以て陀摩睺阿修羅の若しは鬪戰はんと欲して、器杖を莊嚴り、彼の池を圍遶りて自ら其の身を觀るに、明鏡を視るが如くに自ら其の相を觀て、戰の勝負を知り、池水の中に於て、明淨なる鏡の如くに自ら退走するを見て、天の必ず勝つを知り、若しは池中に於て身の偃臥するを見れば、死相を爲すを知る。時に陀摩羅睺阿修羅の王なる勇健阿修羅王は、池水中に於て自ら其の身の若しは走り、若しは墮つるを見、時に阿修羅は是の思惟を作さく『何事を以ての故に、此の池中に於て是の如き事を見るや。我れ天と鬪ひ、退墮し破壞れて卽ち皆所止のの處に還歸れり』と。或ひは十年に至り、或ひは百年に至り、或ひは五百年にして、時に勇健阿修羅王は衆の器杖・鉾鎧を以て、塗香・末香にて莊嚴り、復一切觀池に至りて、圍遶りて自ら觀る。『何の因緣の故に、我れの破壞るゝを見るや』と。卽ち池水中に於て、閻浮提人の父母に孝養し、沙門・婆羅門を恭敬し、正法を修行し、天上に生るるを樂みて、命終りて後諸天中に生れ、是の故に天衆增長し、阿修羅衆の虧損・減少するを見、池中に於て是の如きの相を見るを以て、時に陀摩睺勇健阿修羅王は是の思惟を作さく『人の修行し、父母に孝養し、沙門・婆羅門を供養し、法を行へる因緣を以て、人の力を以ての故に、天は勝れし力を得。我れ今當に世間の人に不安樂・不饒益の事を作して、天をして減劣ならしめ、我等を增長せしむべし』と。時に陀摩睺勇健阿修羅王は復自ら思惟すらく『人の因緣を以て、天に勝れて力有り。我れ當に云何んが衆人をして其の所食を失はしめ、天をして亦破れ令むべきや。人食するを以ての故に壽命を得て、法行を修むるを得。今當に方便して人の所食を斷つべし』と。是れを思惟し已り、海中の惡龍王の所に向ひて『是の惡龍王は法行に順ぜず、毒を含み多く瞋り、常に他人の爲に大衰損・不利益の事を作す。我れ今當に往ゐて彼の住處に至るべし』と。惱亂龍王・奮迅龍王・迦羅

遠にして五百歳を經。阿修羅中の一日一夜は、人間に比ぶるに五百歳を經、是の如きの壽命は滿五千歳なるも、少しく出で多く滅じて、亦中夭すること有り、[二]下中心の因緣力を以ての故に、身相・威德は業の如くに報を得。比丘、當に知るべし、衆報の心を觀て種種に信解せり。

復次に、比丘、業の果報を知りて大海底の羅睺阿修羅の地を觀、彼れ聞慧と第一に清淨なる利智を以て、地下の第二の地を觀るに、地有りて月鬘と名け、羅睺阿修羅の下二萬一千由旬に在り、阿修羅有りて名けて陀摩睺と曰ひ、阿修羅王を花鬘と名く。彼れに大城有りて雙遊戲と名け、縱廣八萬由旬、園林欝茂り、淸流・浴池に蓮華映飾り、金山・巖崿・山窟の幽邃なるを多くの禽獸有りて周遍く莊嚴り、靑毘琉璃は以て其の地を爲し、地に綠草を生じ、柔軟にして愛す可く、地種種なる衆鳥の音聲和雅にして、諸の阿修羅は悉く其の中に住して國界に充滿し、豐樂・安隱なり。周遍く奇特にして甚だ愛樂す可く、七寶の林樹とて莊嚴れる園觀も亦上に說くが如し、復衆樹有り、殊特なること前に倍し、那伽龍欒・無憂龍欒・陀婆欒・佉提欒・無憂力樹あり、復衆樹有りて前の樹林より勝れ、謂はく、夜光樹・夜開敷樹・婆究吒樹・尼單多樹・重花樹・普愛樹・集花樹・繁花樹・柔軟花樹・五歳花樹・蜂愛樂樹・瞿流瞿流音聲樹・衆鳥遊戲樹・白齒樹・那羅葉樹なり。雙遊戲城は四山中に住し、其の山金色にして、一を歡喜山と名け、二を金焰光山と名け、三を不見頂山と名け、四を可愛光山と名け、其の山の高廣五千由旬にして、種種の林樹と流泉・浴池・河水の淸凉なるあり、群獸類を異にして種種色を雜へ、色に隨ひて[三]同じく遊び、衆の婇女等は歡娛みて樂を受け、種種なる衆寶は門戶を莊嚴り、牛頭栴檀樹あり、香風の凉冷たるは身に觸れて悅樂せしめ、常に香林に遊びて遊戲して自ら娛み、種種の衆寶は以て光明を爲して障礙ふ所無く、種種の妙花は其の身を莊嚴り、無量百千の孔雀の音聲あり、大阿修羅王に守護せられ、寒暑調適にして、多くの諸の衆人は歡樂して常に悅び、音聲・伎樂・歌舞にて、喜笑して以て自ら意を娛ませり。星鬘城中に大池水有り、縱廣五百由

【二】下中の心の因緣力。意味不明。心の價値を九品に分ち（上中下の各に三品あり）今はその中の下中品に相當するといふ意味ならんか。

【三】同の字は、宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

巻の第十九

畜生品之二

復次に、比丘、云何んが羅睺阿修羅王の第二の住處を觀るや。彼れ天眼と智慧を以て阿修羅王の所住の處を觀察するに、縱廣一萬三千由旬にして、園林・浴池あり、蓮華欝茂り、遊戲の處は異類の衆鳥以て莊嚴を爲せり。阿修羅の城は黃金を地と爲し、處處に多く摩尼寶珠・珂貝[一]有りて嚴飾り多衆くの婇女は端正・殊妙にして、羅睺阿修羅の主たる領には相ひ諍訟ふことをせず、意の憶念する隨に能く至る有り。住する所の境界に十三處有り。何處は十三なりや。一を遮迷と名け、二を勇走と名け、三を憶念と名け、四を珠瓔と名け、五を蜂施と名け、六を赤魚目と名け、七を正走と名け、八を水行と名け、九を住空と名け、十を住山窟と名け、十一を愛池と名け、十二を魚口と名け十三を共道と名く。若し諸の世間の父母に孝ならず、沙門及び婆羅門を供養せず、正法を行はずんば、諸の天衆減じて阿修羅衆を增長し、若しは諸の世間の沙門及び婆羅門を供養し、正法を修行せば、阿修羅を損減して、諸の天衆を增益す。法と非法の二の因緣を以ての故に、諸天と阿修羅を增長・損減せ令むるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて、羅睺阿修羅王の所住の境界と、諸の阿修羅の業法の果報を觀る。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、漁獵者の圍を張り網を設け、罝罟もて遮截るを見、衆生を利(益)して、其れをして命を活かさしめんが爲の故に、彼の魚堰を破り、或ひは勢力有れば、逼まりて生あるを放たしめ、或ひは自らを利せんが爲に、或ひは名譽を求むる爲めに、或ひは王者と爲り或ひは大臣と爲りて屠殺するを遮斷しめ、或ひは種族を護りて、前世より相ひ習へる不殺の法を行ふも、諸の善を行はざれば、是の人、身壞れ命終りて阿修羅道に墮ち、阿修羅の身を受け、壽命長

【一】珂貝。珂は美石、又一説に一種の珠、又白瑪瑙なりとす。貝は貝殼。古は以て貨幣とせり。

塔を救ふべし。奇妙の莊嚴あり、彫飾精麗にして、廣大・希有なり。當に此の火を滅して、塔をして壞れざら令むべし。若し我れ救はざれば、王の若しは知る者、或ひは重罰を加へん』と。實の信心に非ず、尊重の心に非ざるも、卽ち四千の乘車に載せたる水を以て、以て此の火を滅し、旣にして火を滅し已らば笑を含みて言はく、『我れ此の塔を救へり。福德有りと爲んや福德無き耶。若し福德有らば、願はくは我れ後身に大身相を得、欲界に等しき無からん』と。此の願を作すと雖も猶信ぜず、正しく思惟せず、常に鬪戰を愛して正業を信ぜざれど、福田力の故に光明城に生れて、阿修羅王を作す。

復次に、比丘、業の果報を知りて羅睺阿修羅王を觀る。何の業報を以て阿修羅道を得、何の業を作せるが故に是の如き報を得しや。伽他頌にて曰く。

因無くんば則ち果無く、業を造らば必ず報有りて、種子の果を得るが如く、善業は人天に生る。
善業は樂果を得て、常に天人中に處り、惡業は三處に墮つ、阿修羅は云何ん。
彼れ畜生道を受けて、云何んが樂報を受くるや、智少なくして能く了する莫きは、此れに何の因緣有りや。

比丘、思惟し已り、卽ち聞慧を以て阿修羅の往昔過去を觀る。婆羅門の法を習ひ、第一に聰慧しくして、善く世間の種種なる技術を知り、喜びて布施を行ひ、曠野中に於て諸の飲食なる果食・根食・淸泉の美水・房舍・敷具を施し、又四交の路首に於て諸の病人・行路の估客・盲冥・貧窮に施し、房舍・飲食・敷具を施して悉く滿足せ令め、而も正見ならず。爾の時、彌梯羅林に僧伽藍有り、縱廣二十由旬、其の寺中に於て、無量百千の佛塔有りて、寶焰の莊嚴あり、泥彌王等の五百の大王は共に斯の福を造り、中に一の塔有り、眞金の瓔珞と焰の鬘にて莊嚴り、七寶の映飾もて種種に莊校り其の曾て聞ける諸佛の名號に隨ひて、皆悉く圖畫ける如來の影像あり、種種の林樹・池流・泉源の莊嚴の勝妙なること、上に說く所の如し。

爾の時、閻浮提中、羅睺阿修羅王の城中の林樹の如きを皆悉く具有し、見る所の樹・畫工の圖飾・莊嚴れる佛塔・浴池・流泉・衆の妙なる蓮華・衆鳥の遊戲せるが如きは、亦上に說くが如し。時に婆羅門あり、名けて涉利と曰ひ、毘陀論を誦し、廣く福業を造れること上に說く所の如く、時に婆羅門は四千の乘車を以て衆飲食を載せ、大曠野の衆の人の行路に至りて、須ふる所を施さんと欲するに一佛塔あるを見、高さ二由旬、廣さ五十里なり。時に惡人有り、火を以て塔を燒き、之れを捨て去る。時に婆羅門は火の塔を燒くを見て、是の思惟を作さく、『我れ今寧ろ且らく施福に住して如來の

【三八】毘陀(Veda)。又韋陀、皮陀、新に吠陀、薛陀、鞞陀等。明智、明分等と譯す。婆羅門所傳の印度に於ける最古の聖典にして、紀元前千年已前の古記錄なり。大本四分に別つ。卽ち、リグ吠陀(Rig-veda)。サーマ吠陀(Sāma-veda)、ヤジュル吠陀(Yajur-veda)、アトハルヴ吠陀(Atharva-veda)にして、讚歌、祭詞を集めたるものより成る。

羅鳥・[三三]遮倶羅鳥・婆求羅鳥なる是の如きの衆鳥は遍く城中に滿ち、林樹の間に悉く其の音を聞き、多く林樹有り、蓮華の浴池は以て莊嚴を爲し、其の城中に於て四の園林有り、皆是れ金樹にして、一一の園林は縱廣正等しく滿百由旬なり。一を遊戲と名け、二を耽樂と名け、三を鵝住と名け、四を倶枳羅と名け、此の四園林は其の城を映飾し、一一の林樹に三千種あり、如願樹は、其の樹金色にして雲の如く影の如く、其の枝は柔軟にして鳥其の上に棲み、衆華常に敷き、香氣馚馥として一由旬に滿ち、多く群蜂有り、流蜜充溢せり。或ひは金色樹・酒泉流樹・牛頭栴檀香樹ありて、雲の如き色有り、七葉香樹・枳多迦樹・畢利迦樹を微風吹動し、黑沈水樹・普眼香樹・明燈香樹・摩尼香樹・火色香樹・靑無憂樹・赤無憂樹・[三四]婆究羅樹・阿枳多樹・阿珠那樹・尼珠羅樹・靑荊香樹・堤羅迦樹なる是の如き等の衆の華香樹は其の華敷榮し、常に新出せるが若く、復衆果有り、摩頭迦樹・鳳凰子樹・婆那婆樹・無遮果樹・垂瓠頭・毘頭羅樹・地蓋果樹・虛空蓋樹・雲色果樹・樂見果樹・遮雲果樹・鳥集果樹・蜂芒果樹・香鬘樹・香華樹あり、種種の色の華は時時に常に敷き、女人之れを見れば皆樹に樂著を生じ、[三五]蒲桃樹・[三六]迦卑他樹・[三七]波流沙迦樹あり、其の葉は光明の莊嚴を具足して渠流に鬱映り、泉池を嚴飾り、之れを觀れば愛す可し。是の如き種種なる諸の樹ありて、或ひは閻浮提中に生ぜる有り或ひは鬱單越國に生ぜる有り、或ひは阿修羅王の光明城中に生ぜる有り、或ひは華樹有り、或ひは酒樹有り、阿修羅王は遍く行遊して觀、歡娛みて樂を受け、衆の婇女と、圍遶まれて自ら娛み、此の煩惱に於て、無常にして堅からざる速に朽つる樂に染みて、謂ひては甘露不死の地と爲す。阿修羅王に四の婇女有り、憶念ふに從ひて生ず。一を如影と名け、二を諸香と名け、三を妙林と名け、四を勝德と名け、此の四婇女に十二那由他の侍女有りて以て眷屬を爲し、阿修羅王を圍遶み、娛樂みて情を恣にし、縱逸に樂を受けて喩を說く可き無く、阿修羅王は自業にて成就せる無量億の衆の婇女に圍遶まれ、歡娛、喜樂し、千柱の寶殿、寶房は行列せり。

【三三】遮倶羅(Cakra)。又は蹠倶羅。かはせみなり。

【三四】婆究羅樹以下五樹の句語不明。

【三五】蒲の字は、宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

【三六】迦卑他(Kapittha)。猿住樹か。

【三七】波流沙迦樹(Harshaka)。歡喜樹。

の愚人諸の相師等の咸災祥を記すること上に說く所の如く、復一の手を以て須彌山頂を摩して、諸天と其の得失を決せんと欲するも、是の阿修羅は畜生にして智少なく、天の種種なる勝相の莊嚴の威德の光明を見て心に疑悔ひを生じ、止まる所に還歸りて光明城に住す。是れを第二の因緣にて、日月を掩蔽ひて日月を蝕けしめ、天聲にて震吼すと名くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて、大羅睺阿修羅王の受くる所の樂を觀る。彼れ聞慧を以て觀るに、阿修羅王の所住の城內は種種の衆寶以て莊嚴を爲し、須彌山の側に在り、深さ二萬一千由旬、廣さ八千由旬にして、蓮華の浴池、林樹の蔚茂たるを皆悉く具足し、眞金を地と爲して色は電光の如く、金殿・堂閣あり、珊瑚の寶樹に衆の寶鈴を懸けて妙なる音聲を出し、種種の樂の音ありて、歡娛みて樂を受く。一一の池中に金花の莊嚴あり、鳧鴈・鴛鴦は皆眞金色にして、以て莊嚴を爲し見る者愛樂し、天の衆鳥の如くに[二九]摩尼を嘴と爲し、歡喜して遊戲し、七寶の雜色あり、靑毘琉璃は以て羽翼を爲し、諸の樓閣の欄楯の間に於て、歡娛み遊戲して甚だ愛樂す可く、妙なる音聲を出し見る者は悅樂む、一切の衆鳥も亦復是の如く、淸淨にして穢無く、端正に莊嚴られ、孔雀の翡翠と眼は互に開合し、頭頂に勝れし冠あり、雙類びて隨ひ行き、華汁と婆鳩羅華を飲食し、其し聲雅妙にして童子の音の如く、頂冠は金色或ひは毘琉璃にして、[三〇]欄楯の間に翺翔して遊び、未だ曾て休息せず、華汁に恣にして、其の目は紺靑、身色は綵を雜へて閒電光の如く、衆色は分明かに、黃色は細軟にして、鮮明なること電の如し。林樹・山巖の間に行きて縱逸に遊戲し、華鬘・瓔珞は天の虹の色の如く、光明身を遶りて鬘の如くに莊嚴り、咽喉の美を含みて赤珠の色の如く、兩の翅柔軟にして蓮華の敷けるが如く、無量の衆色あり、長き摩尼の嘴ありて、身氣の香潔きこと[三一]畢利迦の如く、宮殿に遊戲するに、雙類びて同じく行き、羽翼潤澤にして、飛べば則ち倶に遊びて潔淸き池に澡ひ、睦庭に翺翔り、亦復是の如く、哀鳴相ひ呼びて、微妙なる欲を發す音を出す。[三二]倶枳

【二九】摩尼(Mani)。又末尼と云ふ。珠、寶、如意等と譯す。珠の總名なり。

【三〇】欄楯。林道の兩側に日本の緣門の如く人巧的に造りたる裝飾にして芭蕉の葉等にて屛風のやうに造る。

【三一】畢利迦(Prkka)。又、必栗迦。宥香又は觸香と譯す。

【三二】倶枳羅(Kokila)。又鳩夷羅、鳩那羅、拘翅羅、鳴鵙羅等。好聲鳥、鵶鵑、美音鳥等と譯す。

欲し、地從り起ち、渇仰して見んと欲し、手を以て月を障へて天女を見んと欲す。阿修羅王の無量の衆寶もて其の身を莊嚴れること上に說く所の如く、閻浮提中の呪術師等は呪を作して曰く、『一切の國土・聚落・城邑の衆の惡しきは速に滅し、一切の婆羅門中の衆の惡しきは速に滅せん』と。若しは月の黑色、黃色なれば、世間の相師は是の如き說を作して、或ひは當に豐なるべしと言ひ、或ひは當に儉しかるべしと言ひ、或ひは王者に凶危ありと言ひ、或ひは吉慶あらんと言ひ、或ひは兵力の勇起ると言ひ、或ひは起らずと言ふ。瞿陀尼・弗婆提・欝單越の何れの方面の所蝕の處にも、邪見の說無し。此の一の因緣を以ての故に、日月を掩蔽ひ、是れを月蝕と謂ふ。復次に、二の因緣の故に日月を掩蔽ひて天より大聲を降す。羅睺阿修羅王の大海の下に住めるに、時に諸の官屬は白して言はく、『大王よ、天主〔二六〕憍尸迦は須彌山頂の〔二七〕善見城內に住し、〔二八〕善法堂に處りて、諸天の功德と五欲を具足し、眷屬に圍遶まれ、歡娛みて樂を受く。天主憍尸迦を諸天の主と爲すも、大王は今我等の尊ぶ所と爲し、王に大力有りて、神通は彼れに勝れり。官屬を率ゐて往ゐて天主を攻め、善見城を壞る可し』と。時に阿修羅王は是の語を聞き已り、威を奮ひ怒を縱にして光明城を出で、震吼すること雷の如し。閻浮提中の諸國の相師は天獸下れりと謂ひ、此の如き相を說きて、或ひは豐樂・安隱にして他無しと言ひ、或ひは災儉にして五穀勇貴ならんと言ひ、或ひは王者崩亡ぶと言ひ、或ひは吉慶なる靈應の嘉祥あらんと言ひ、或ひは兵刀境內に起ると言ひ、或ひは人民安隱にして變無しと言ひ、或ひは當に齋の肅かにして淨潔きを須ひ、神を拜して福を求むべしと言ふ。時に羅睺阿修羅王は是の如くに思惟すらく、『我が寶珠等を此の城內に留め、我が諸子の爲に大光明を作さん。若し寶珠無くんば、則ち光明無し。天上も亦爾く、日月有るが故に則ち光明有り、若し日月無くんば、則ち應に闇冥なるべし。我れ今、寧ろ日月を覆蔽ひ、天をして黑闇なら令むべし』と。時に阿修羅は是の思惟を作し已りて城從り起ち、卽ち一の手を以て日月の諸の光明輪を覆障ひ、世間

〔二六〕憍尸迦(Kausika)。又憍支迦。爾兒と云ふ。帝釋の姓なり。
〔二七〕善見城。又喜見城と云ふ。須彌山頂の帝釋所住の城。見る者善を稱すれば、此の名あり、と。
〔二八〕善法堂。善見城外の西南角に在り、忉利の諸天は常に此の堂に集りて、人天の如法、不如法の事を論ずと云ふ。

閻浮提人の正法を修行し、父母に孝養し、師長に敬事し、沙門・耆舊・長宿に供養せば、一切の諸天の勢力增長し、時に四天王は衆の寶衣を以て其の身を莊嚴し、塗香・末香(もてかざりて)、卽時に師子兒羅睺阿修羅の上の虛空中に當り、諸の刀劍を雨らし、一切の天衆心に喜悅を生じ、須彌の側に至りて聲を發して大に叫ぶ。若しは天出でずして、阿修羅王の園林を觀んと欲すれば、日の百千の光は其の身の上の莊嚴の具を眼して其の眼を映障し、諸天の園林なる遊戲し娛樂して樂を受くる處を見る能はざらしむ。時に羅睺阿修羅王は是の思惟を作さく、『日は我が眼を障ひて諸天の婇女を見る能はざらしむ。我れ當に手を以て日光輪を障ひて、諸の天女を觀るべし』と。卽ち右手を擧げて以て日輪を障ひ、天女の愛す可き妙色を見んと欲し、手より四光を出すこと上に說く所の如く、海水中に立ちて水は其の腰に至り、寶珠の光明は或ひは靑或ひは黃或ひは赤或ひは黑にして、手にて日を障ふるを以て、世間の邪見の諸の論師等は咸異說を生じて言はく、『羅睺阿修羅は日を蝕き、若しは日・赤色・黑色なり』と。是の如き法を以て人の壽命を相ひ、業果を識らざる諸の相師等は是の如き說を作して、或ひは當に儉しかるべしと言ひ、或ひは凶禍ありて殃王者に及ばんと言ひ、或ひは吉慶ありと言ふ。時に阿修羅王は手もて日を障へ已り、諦かに諸天の園林・浴池なる遊戲の處を見たり。時に帝釋は是の事を見已り、諸の天衆に勅して宮殿を莊嚴らしめ、諸の天子をして、種種の寶を以て其の身を莊嚴らしめて、往きて羅睺阿修羅の所に趣き、共に鬪戰せんと欲す。時に羅睺阿修羅は諸の天衆を見、卽ち宮城に還れり。

復次に、比丘、云何んが月蝕を觀るや。卽ち聞慧を以て知るに、羅睺阿修羅の眷屬の官衆の海上に行き、月の常に〔二五〕憂陀延山頂に遊び、閻浮提に行き、毘琉璃光明の中に住し、端嚴殊妙にして百倍に轉た勝るを見、官屬見已りて卽ち羅睺阿修羅の所に至り、白して言はく、『大王よ、滿月の端嚴なること天女の面の如し』と。時に羅睺阿修羅は是の語を聞き已り、愛心卽ち生じて天女を見んと

【二五】憂陀延(Udayana)。又鄔陀延、鄔陀衍に作る。日出と譯す。

衆流に住し、閻浮提人にして法行に隨順せば、五十七億の龍衆流に住す。

復次に、比丘、業の果報を知りて龍世間を觀、戲樂城及乃び流水の龍を觀已りて、大海の底を觀るに、何等の衆生は住して其の中に在りや。卽ち聞慧を以て大海の地下の天下の怨敵を知るに、阿修羅と名け、略して說かば二種あり。何等を二と爲すや。一は鬼道に攝せられ、二は畜生に攝せらる。鬼道に攝せらるゝは魔身餓鬼にして、神通力有り、畜生に攝せらるゝは阿修羅にして、大海底の須彌山の側に住し、海の地下八萬四千由旬に在り。略して說くに四地あり、第一の地處は二萬一千由旬にして、是れ〔二四〕羅睺阿修羅の所住の處なり。此の羅睺阿修羅王は、欲界中に於て化身の大小なるを意の隨に能く作し、人の善・不善を行ふを力を以ての故に、時に阿修羅王は是の思惟を作さく、『我れ當に彼の怨家の園林の遊戲する處にて、諸の婇女と共に相ひ娛樂し、恣意に樂を受くるを觀るべし』と。是れを思惟し已り、卽ち自ら其の身を莊嚴るに大青珠王・波頭摩珠王・光明威德珠王を以てし、或ひは金玉五色赤珠王を以てし、或ひは雜色の衣王の若しは青若くは赤若しは黃若しは黑など種種の諸の色なるを以てして、其の身を莊嚴りて以て鉀冑を作し、光明晃昱し、時に羅睺阿修羅王の身の量廣大にして須彌山王の如く、遍き身の珠寶は大光明を出して、大青珠寶は青色の色を出し、黃・黑・赤色も亦復是の如く、珠の光明を以て心大いに憍慢にして、與に等しき無しと謂ひ天女・阿修羅女をして其の身を愛敬せしめんと欲して、城中從り出づ。其の所住の城を名けて光明と曰ひ、縱廣八千由旬にして、無量の寶林・流泉・浴池・諸樹・蓮華は其の城を莊嚴し、首冠の花鬘を塗香もて自ら嚴り、散ずるに末香を以てし、城從り起ちて天の園林の遊戲する處を觀る。若し閻浮提の人の正法を行はず、父母に孝養せず、沙門・婆羅門及び諸の尊長を敬はず、法行に依らず、三寶を奉ぜず善法及び不善の法を觀ぜずんば、諸天の勢力悉く減少すと爲し、四天王天は展轉して相ひ告げらく、『悉く避けて逃逝れよ、恐らくは師子兒羅睺阿修羅王來りて我等を殺さん』と。若しは

【二四】羅睺阿修羅（Rahuasura）。具には羅睺羅阿修羅と云ひ、障持、執日、執月と譯す。後に說けるが如く、帝釋と戰ひ、能く手を以て日月を障覆して日月蝕を起さしむるを以て、しか名くるなり。

の閻浮提國には悉く此座なし。金剛座處は八萬四千由旬にして、佛此の座に坐したまひて菩提心を生じ、此の因緣を以て如來閻浮提國に出まし、餘の天下に非ず。何を以ての故に。善根を成就して佛菩提を得たまふを、須彌山も尙持する能はず。何ぞ況んや餘の地をや。是の因緣を以て、佛は閻浮提に處たまひ、餘の國に處らず、人の身は得難きも、閻浮提中に業を造れる因緣にて、人中に生れたまふことを得、此の因緣を以て、四天下中、閻浮提國は第一最勝にして、餘の天下に非ず。

復次に、比丘、業の果報を知りて龍世界を觀る。何を以ての故に非法行龍王は蝦蟇を呑食し、沙土を噉食ひ、呼吸して風を食ふや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、人中の時に於て妻子を欺陵き獨り美食を飯ひ、其の人の妻子は之れを見て、戀著して口中より涎を流すも、此の人獨り食ひて飽滿、充足し、妻子の所に於て但麁澁きものを與ふれば、是の如きの人は身壞れ命終りて龍中に墮ち、蝦蟇を呑食し、沙を食ひ風を吸ひて、相似の業果を受く。

復次に、比丘、業の果報を知りて龍世界を觀る。何の業を以ての故に、諸の龍は雨を降らすや。復何の業を以て、諸の災雹を降らすや。卽ち聞慧を以て此の惡龍を知るに、毒を含みて瞋恚り、法行に順ぜずして、一一の龍王は瞋恚りて鬪諍し、惡雲雨・惡風・災雹を起して、悉く五穀を散壞りて收めざらしむ。諸の衆生の非法を行ふを以て、惡龍瞋恚り、故に斯の變有り。

復次に、比丘、業の果報を知りて龍世界を觀る。云何んが閻浮提に於て、時雨を降澍して、甘蔗・稻・麻・叢林・大小麥・豆を潤益し、五穀を增長するや。卽ち聞慧を以て法行龍王の時雨を降注して、義しき安樂を以て衆生を利益するを見るに、諸の衆生の法行に隨順するを以て、時雨を降注ぎて、國をして豐樂なら令む。

復次に、比丘、業の果報を知りて一切の龍の所住の宮殿を觀るに、幾許の龍衆は海中に住し、幾許の龍衆は衆流に住するや。卽ち聞慧を以て知るに、閻浮提人の法行に順ぜずんば、無量の諸龍は

し、一切の水をして皆悉く滾濁らしめ、瞿陀尼人にして若し飲む者有らば、此の因縁を以て大なる衰惱を得。是の如く、比丘、瞿陀尼を觀て、實の如くに了知せり。

復次に、比丘、業の果報を知りて弗婆提を觀る。彼れ聞慧を以て知るに、諸の世間の法行を修めずんば、時に惡龍王の力勢增長し、大雷を震吼して大山の崩るゝが如きに、弗婆提人は歡心なるを以ての故に多く病苦に遭ひ、或ひは電光を耀して遍く世界に滿たし、火の熾に燃ゆるが如く、雲中に龍現はれて眼は車輪の如く、其の身黑惡にして猶し黑山の如く、其の頸に三頭ありて衆花を奮出し、形は馬の相の如く、或ひは蛇身を作し、是の如き等の種種なる惡身を現はして、弗婆提に人の之れを見る有らば、大なる衰惱を得しむ。

復次に、比丘、業の果報を知りて鬱單越を觀ること、第二天の如し。云何んが惡龍は、鬱單越人に於て諸の衰惱を加ふるや。卽ち聞慧を以て鬱單越の僧伽賒山を知るに、前に說く所の如く、蓮華常に開きて香氣紛流れ、其の色妙好にして、彼の國の衆人は之れを嗅ぎて歡喜す。若しは世間の人の父母に孝ならず、沙門、婆羅門に供養せずんば、時に惡龍王は自在の心の勢力增長せるを以て、大重雲を起して猶し黑山の如く、黤黮きて垂布れ、日光を掩蔽ひ、蓮華卽ち合ひて香氣有ること無く、金色の光を失ひ、鬱單越人の華既に合へるを見れば、愁惱へ怯劣ふ、雲中より風を出し、衆の樂音を吹きて皆悉く亂壞り、愛樂す可からず、是の如く、四天下の惡龍の勢力は、衰害を作す。

復次に、比丘、業の果報を知りて四天下を觀るに、勝れる有り、劣れる有り。彼れ聞慧を以て鬱單越國を觀るに、快樂・安隱は三天下に勝れり。閻浮提人は法と非法とを行ひ、是の因緣を以て苦樂に增減あり、是の三天下は增長業の地なり地。十善道を行はゞ佛の出世したまふこと有り、(是れ)閻浮提の因緣を以ての故なり。四天下有(れど)、閻浮提人の思惟して十善業道を修行し、能く梵行を修め、此世界中、多く能く思惟して生滅を觀察する(故に)此の國に[三三]金剛座處あり、一切世間

【三三】金剛座(Vajrāsana)。佛陀伽耶の菩提樹下なる佛成道の處。上は地際を窮め、下は金輪に據ると云ふ。菩薩の正覺を成ぜんとするや、皆此の座上に登るは、餘の處にして堅固力有りて能く之れを持するもの無きを以ての故なりと。

を觀已りて瞿陀尼を觀る。云何に順法龍王は瞿陀尼を護るや。瞿陀尼界の衆生は心軟かきも、唯一の惡有り、水の濁れる因緣を以て、之を食ひて[二〇]夭命す。順法の龍王は、彼の世界に於て濁水を雨らさずして、瞿陀尼人は淸水を食ふが故に、病惱無きことを得。龍力を以ての故なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて鬱單越人を觀る。云何んが衰惱するや。彼れ聞慧を以て鬱單越人を知るに、若しは黑雲に遇ひ、冷風に吹かれて香花敷かざれば、旣に花の合へるを見て心に憂惱を懷き、黑雲起るが故に、[二一]僧伽賒山の鳥の鳴くこと麁惡にして、衆樂の音聲悉く美音無くんば、惡龍處に於て此の衰惱を得。法行の龍王は黑雲・冷風を以て是の如き四天下を飄颺らずして、法行龍王は義しき安樂を以て衆生を利益す。

復次に、比丘、業の果報を知りて龍世間を觀る。何等の惡龍は法行に順ぜざるや。卽ち聞慧を以て戲樂城の諸の惡龍王の法行に順ぜざるを觀るに、其れを名けて波羅摩梯龍王・毘諶林婆龍王・[二二]迦羅龍王・睺樓睺龍王と曰ひ、海中の戲樂城内に住せり。云何んが此れ等の非法の惡龍は勢力を增長するや。

彼れ聞慧を以て諸の衆生を知るに、不善の法を行ひ、父母に孝ならず、沙門及び婆羅門を敬はずんば、是の如き惡龍は勢力を增長し、閻浮提に於て大惡身を作し、惡心を以ての故に惡雲雨を起し所雨の處に惡毒樹を生じ、惡風は樹を吹き、毒氣水に入りて水に毒を雜はら令め、一切の五穀皆悉く弊惡にして、若し食ふ者有らば則ち病苦を得、穀力薄きが故に人をして短命なら令め、是の弊龍王は惡心・災毒もて迭互に相ひ害ひ、是の惡を以ての故に、閻浮提人を悉く皆毀壞す。非法の龍の諸の惡を作すを以ての故なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて自在大力龍王を觀る。云何んが非法惡行の龍王は、諸の衰惱を以て瞿陀尼を惱ます。彼れ聞慧を以て非法の惡龍を知るに、瞿陀尼の空山の嶮處より洪雨を降澍

【二〇】夭の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。原本天に作る。

【二一】僧伽賒(Saṃghaṣa)。

【二二】迦羅(Kāla)。迦羅呵(Kālaka)に同じ。黑龍と譯す。他の三龍王の原語不明。

を願ひ、是の人、身壞れ命終れる後、戲樂城に墮ちて龍王の身を受けたるなり。彼の城に生れ已らば瞋恚の心薄く、福德を憶念し法行に隨順して、是の如き龍王は其の身に熱沙の苦を受けざるなり。

　復次に、比丘、業の果報を知りて龍世間を觀る。何の業を以ての故に法行龍王は戲樂城に生るゝや。戲樂城は何等の相を爲すや。卽ち聞慧を以て法行龍王所住の城を觀るに、七寶の城廓に七寶の色光あり、諸の池水中に[9]優鉢羅花・衆花を具足し、[10]酥陀味食あり、常に快樂を受け、香鬘・瓔珞・末香・塗香は其の身を莊嚴り、神通を憶念はゞ意の隨に皆得、然も其の頂上に龍蛇の頭有り。其の城中に於に諸の法行龍王有り、其れを名けて七頭龍王・[11]象面龍王・[12]婆修吉龍王・[13]得叉迦龍王・[14]跋陀羅龍王・[15]盧醯多龍王・[16]鉢摩梯龍王・[17]雲鬘龍王・阿跋多龍王・一切道龍王・[18]鉢娑呵龍王と曰ひ、是の如き等の福德の龍王あり、法行に隨順し、善心を以ての故に時に依りて雨を降らし、諸の世間をして五穀成熟して豐樂安隱ならしめ、災雹を降らさず、佛・法・僧を信じて法行に隨順し、佛[19]舍利を護り、是の如き龍王に熱沙の苦無く、第一の樂を受け、四天下に於て甘雨を降澍す。謂はく、閻浮提・瞿陀尼・弗婆提・鬱單越にして、若し人法に順ひ、父母に孝養し、沙門及び婆羅門を供養し、正法を修行して、法行の龍王をして大力を增長せしむれば、法勝るゝを以ての故に微細の雨を降らし、五穀は熟成して色・香・味を具し、諸の災害無く、果實繁茂し、衆花に妙色あり、日光の晶光の威德は明淨にして、福德龍王は毒風を放たず。閻浮提人に四の因緣有りて、則ち多く命を喪ふ。何等を四と爲すや。一には飢儉、二には刀兵、三には毒風、四には惡雨なり。若し諸の世間の法行に隨順して諸の福德を修むれば、法行龍王は大力を增長して惡雲を出さず、惡雨を降らさず、惡風氣無く、衆水調善にして稻穀豐熟し、果味肥美にして色・香・味を具し、之れを食ふも病無く、諸の飢惱を離れて色力を具足し、四大安隱にして、善業を修行し、善業を行ふを以て、其の果報を助けて田稼豐熟し、法行龍王は是の如く、次第に法に順じて善を修むる衆生を擁護る。閻浮提

【九】優鉢羅(Utpala)。又は優鉢刺、鬱鉢羅、烏鉢羅等。青蓮華、紅蓮華と譯す。又一說に、赤白二色あり、又赤からず白からざるあり、と。

【一〇】酥陀(Suta)。又は須陀、蘇陀に作る。甘露と譯す。天上の食。

【一一】象面龍王(Mātaṅgonāgarāja)大象龍王。

【一二】婆修吉龍王(Vāsukināgarāja)。九頭龍、多頭等と譯す。

【一三】得叉迦龍王(Takṣakanāgarāja)。視毒、多舌、兩舌と云ふ。

【一四】跋陀羅龍王(Bhadranāgarāja)。賢龍と譯す。

【一五】盧醯多龍王(Rohitakanāgarāja)。赤龍と譯す。

【一六】鉢摩底龍王(Padmanāgarāja ?)。蓮華龍王。

【一七】雲鬘龍王。原語不明。

【一八】鉢娑呵。忍龍と譯す。婆の字は元本及び明本に依れり。

【一九】舍利(Śirim)。新に設利羅、室利羅と云ふ。身骨、遺身と譯す。佛の身骨なり。又總じて死屍に名く。

根は癡頑鈍にして、但畜生の業を作せり。

是の如くに、比丘、諸の畜生を観るに、但一業有るも、時に繫縛されて無量百千の生死に流轉し畜生中を受けて無量百千種種の苦網に繫縛らる。畜生の一業に無量の因縁あり、次第に貪欲の業繫斷ぜずして、大海の深さ十由旬なるに生れ、摩竭大魚・螺・蜯蛤蟲・提彌鯢羅・那迦・鯌魚を受け、迭互に相ひ畏れ、常に恐怖を懷き、多く婬欲を行じ、愚癡の因縁にて非法に、邪行す、行ふ應きと行ふ應からざる處を識らず、大海中に生れて水の爲に焦惱み、常に飢渇に患みて互に相ひ殘害し、惶怖れ相ひ畏る。若し多く瞋恚を行はゞ、大海中の深き萬由旬なるに生れて毒龍の身を受け、迭に共に瞋り惱まし、瞋心・亂心にて毒を吐きて相ひ害ひ、常に惡業を行ふ。龍の住む所の城を名けて戲樂と曰ひ、其の城の縱廣三千由旬、龍王中に滿ち、二種の龍王有り、一には法行、二には非法行にして、一は世界を護り、一は世界を壞す。其の城中に於て、法行龍王の所住の處は熱沙を雨らさず、非法行龍王所住の處は常に熱沙を雨らし、若し熱沙頂に著かば熱きこと熾火の如く、宮殿及び其の眷屬を燒きて皆悉く磨滅せしめ、滅し已らば復生ず。

復次に、比丘、業の果報を知りて、龍世界の熱沙を雨らせる苦を観る。何の業因を以て斯の報を受くるや。卽ち聞慧を以て此の衆生を知るに、人中の時に於て愚癡の人にして、瞋恚の心を以て僧房・聚落・城邑を焚燒き、是の如き惡人の、身壞れ命終り、地獄に墮ちて無量の苦を受け、地獄從り出でて龍中に生れしなり。前世の時、火を以て人の村落・僧房を燒けるを以て、是の因緣を以て畜生の身を受け、熱沙に燒かるゝなり。

復次に、比丘、龍世界を観るに、何の業を以ての故に彼處に生れ、何の緣を以ての故に熱沙の燒害する所と爲るや。卽ち聞慧を以て此の衆生を知るに、前世の時に於て諸の外道世間の邪戒を受け布施を行ふも清淨ならずして、上に說く所の七種の不淨の如く、瞋恚の心を以て龍中に生れんこと

復次に、比丘、業の果報を知りて畜生を觀る。云何んが地獄の畜生・天人・水行・陸行・空行の飛鳥と走獸を觀るや。彼れ聞慧を以て、地獄中の種種なる苦惱を觀るに、二種の畜生有り。衆生數と非衆生數有りて、衆生數とは、彼處に生れて燒かれる、非衆生數とは、地獄の罪人の、顚倒の心を以て諸の大鳥の虛空中に於て翱翔り、遊戲ぶを見、心に念を生じて此處に生れんことを願ひ、念ふ隨に卽ち生れて飛鳥の身を受けたるなり。具に上の如き地獄の苦惱を受け、惡業の報を以て、地獄中に生れて諸の師子を見、形色畏る可く、虎・豹・大鳥・惡蟲・蟒蛇なる大惡色者あり。非衆生數は諸の逼惱を以て地獄人を害ひ、是れ衆生數の業の得る所にして、諸の罪人をして大苦惱を受けしめ、彼の苦惱無き畜生の衆生は、地獄中に在りて、師子・虎・豹乃至蟒蛇の惱害する所と爲る。

復次に、比丘、業の果報を知りて飢渴に身を燒かるゝ諸の餓鬼道を觀るに、諸の畜生有りて飢渴の苦を受く。卽ち聞慧を以て三十六種の餓鬼道中に生るる諸の飛鳥を見るに、人中從り死して鳥中に生れ、烏・鵄・鷲・鷹・鷂等の鳥なる害生の類を受け、鳥中從り餓すれば、餓鬼世間に生れて餓鳥の身を受け、飢渴に身を燒かれ、諸の餓鬼を啄きて其の眼を拔き出し、或ひは其の頭を破りて其の腦を食ふ。是の如き餓鬼の眼睛・腦髓は熱くして融けし銅の如きに、此等の衆生を皆共に之れを食へり。惡業を以ての故なり。比丘、是の如くに餓鬼鳥を觀已り、卽ち伽他を以て呵責して言はく。

熱業は熱報を得、具に諸の大苦を受く、是の如くんば應に此の、惡不善の業を捨離すべし。
斯の惡業を造る勿れ、貪嫉は自らを破壞し、若し貪嫉を行ふ者は、餓鬼・畜生に墮つ。
互に共に殘害し、或ひは打縛り、繫閉げば、則ち餓鬼の生を受く、故に應に愚癡を捨つべし。
愚癡にて自ら心を壞り、戒て施を遠離し、愛に誑惑かるゝ所と爲らば、則ち畜生中に墮つ。
行の邪正を識らず、應ぜざる所の食を食ひ、應に作すべきを作さず、法と非法とを解せず、五

なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて諸の畜生の第四の識食なるを觀る。卽ち聞慧を以て見るに、畜生有り、識を愛して苦惱し、常に飮食を憶ひ、曠野中に生れて、大蟒の身、蜥蜴の身を受けて唯風氣のみを吸ひ、復光明天有り、亦愛識憶念と名け、苦惱に非ず、食を見れば憶持し、念ふに隨ひて卽ち飽く。畜生憶食は、何の業を以ての故に斯の報を受くるや。卽ち聞慧を以て此の衆生を知るに或ひは瞋多きを以て、或ひは癡多きを以て衆生を殺害し、彼の人、身壞れて惡道中に生れ、大蟒の身を受くるなり。前世の時、好愛、怨結を以て自ら其の心を縛り、是の因緣を以て、畜生中に生れて、斯の苦惱を受け、識を愛し風を食ひ、若し人中に生るれば、因無き處に於て常に瞋恚を懷き、鬪諍を起す。餘業を以ての故なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて無量無邊の畜生世間を觀るに、云何んが衆生は水蟲の身を受くるや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、愚癡にして智少なく、慧心有ること無く、命終らん時に臨みて極めて渴病に患み、貪愛して水を念はゞ、身壞れ命終りて惡道に墮ち、水蟲の身を受けて種種の魚と作る。是の人、命終り、中陰の有に於て、諸水を見る時心を起し、卽ち往きて水中に生る。取る因緣の、此の中陰の有分に有ればなり。若し本布施・持戒を行はずんば、是の人則ち煖水の中に生れ、口常に乾燥き 觸は灰汁の如し。本の業を以ての故なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて諸の飛鳥なる畜生の類を觀る。何の業を以ての故に、虛空無礙の處を行くや。卽ち聞慧を以て、三種の神通を觀る。何等を三と爲すや。一には解脫神通、二には身行神通、三には心自在神通なり。是の解脫の人は心の憶念する隨にして、若しは鳥の地界を行き、若しは空を飛び、亦地を行くが如きは、解脫の法に非ず、諸佛如來の神通の力は心の念緣するが如くにして、意の隨に能く至り、三種の作有り、是の如き三種は聖神通の勝れしなり。

【八】中陰。中有に同じ。四生の一にして、現世より死滅して、來世に生を受くる中間の果報。不可見の微妙なる色をを以て成り、欲界の中有の形は五六歲の小兒の如く、香を以て食となすと。

に與へ、既に之を食はしめし後、此の賊人をして殺害して怨を除かしむるに、是の賊、語を受けて卽ち彼の怨を殺さば、是の如き惡人は、身壞れ命終りて地獄に墮ち、具に衆苦を受け、地獄從り出でて段食の畜生の中に墮ち、水牛・牛・羊・駝・驢・象・馬・猪・狗・野干・麞鹿・犛牛・烏・鵄・鵰・鷲・鷹・鴨・孔雀・命命鳥なる雜類の衆鳥を受け、多く曠野・嶮岸の中に處りて生る。是れを少分の摶食の衆生と名く。

復次に、比丘、觸食の衆生の類を觀るに、住して𣪊中に在り、初めて𣪊を出れば、觸を以て食と爲す。復衆鳥有り、樂みて水中に住み、岸に依りて巢を爲し、或ひは河岸を穿ちて以て窠窟を爲し卵𣪊を敷産す。龍・蛇等の類は、何の業を以ての故に觸食を受くるや。比丘觀察し、卽ち聞慧を以て此の衆生を知るに、前世の時に於て、心に施を行ふことを許し、思惟へ籌量りて、後心還悔いて施與せざるに、不善の業を以て畜生中に墮ち、本の思心を以て觸食の報を受く。

復次に、比丘、思食の諸の衆生等を觀る。何の業を以ての故に思食を受くるや。卽ち聞慧を以て衆生の類を知るに、謂はく、赤魚の子、提彌魚の子、[六]鯌魚等の子、螺・蜯蛤の卵は思心を食と爲し、若し母憶念せば、則ち飢渴せずして身命增長す。何の業を以ての故に此處に生るゝや。卽ち聞慧を以て此の衆生を知るに、愚癡にして智少なく、業果を識らずして、人に物を施すことを許し、之に語りて言く、『却後半月或ひは一月に至り、我れ當に汝に財物・飲食・金銀・珍寶を施すべし』と。時に彼の貧しき人は其の施を許せるを聞きて心大いに歡喜を生じ、美言にて讃歎し、一月・半月、得る所有らんことを望み、時に貧窮の人は其の家に往至す。是の時、其の人、更に異なる語を作し、本の信に復へざらば、是の如き惡人は、命終りし後、[七]憂喜地獄中に墮ちて具に衆苦を受け、彼れ從り命終らば、畜生中に墮ちて意思を食と爲し、其の前世に他の貧しき人に許して歡喜を生ぜしめ、後竟に實無かりしを以て、若し人中に生るれば人の奴婢を爲す。餘業を以ての故

【六】鯌の字は、元本、明本に依る。別本、錯に作れり。

【七】憂喜地獄。この獄名は本經中に見當らず。或は等活地獄第六別處なる不喜地獄を指すか。

求む。（かの外道）身壞れ命終りて、地獄に墮ちて具に衆苦を受け、地獄從り出でゝ【四】倶舍の諸の化生中に生る。種種の異類あり。

復次に、比丘、業の果報を知りて諸の畜生を觀る。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、惡邪見を起して龜・鼈・魚・蟹・蜯蛤を殺害し、及び小池中に多く細蟲有り、或ひは酢中に細蟲あるを、或ひは惡人有りて、財を貪らんが爲の故に諸の細蟲を殺し、或ひは邪見にして天に事へ、蟲を殺して祭祀らば、身壞れ命終りて地獄に墮ち、具に衆苦を受けて稱計る可からず、地獄從り出でゝ濕生身を受け、或ひは蚊子を爲し、或ひは蚤・虱を爲す。二種の生を觀已り、是の如くに次第して、微細の心を以て業の果報を觀、卵生の諸の衆生等を觀る。何の業を以ての故に彼處に生るゝや。若し人、未だ貪欲・恚・癡を斷ぜず、禪定を修學して世俗通を得しも、因緣有るが故に瞋恚の心を起して國土を破壞せば、是の人、身壞れ命終りて、地獄に墮ちて無量の苦な受け、地獄從り出でて卵生の飛鳥なる雕、鷲の形を受け、此れ從り命終りて若しは人中に生るれば、常に瞋恚多し。餘業を以ての故なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて、彼れ聞慧を以て諸の畜生を觀る。何の業を以ての故に胎生の身を受くるや。若しは衆生有り、欲愛の心を以て牛馬を和合せしめ、共れをして交會せしめて以て自ら意を悅ばし、或ひは他人をして邪に非禮を行はしむるに、是の人、身壞れ命終るの後 地獄に墮ちて具に衆苦を受け、地獄從り出でて胎生の畜生の身を受け、若し人中に生るれば黃門の身を受く。餘業を以ての故なり。

復次に、比丘、十一種の畜生を觀已り、次いで四種の衆生の地獄從り出でて、【五】四種の食を受くるを觀る。何等を四と爲すや。一には摶食、二には意思食、三には觸食、四には識愛食なり。比丘思惟して四食の果報を觀察し、聞慧を以て見るに、衆生有り、諸の摶食を以て惡戒者及び諸の賊人

【四】倶舍(Kośa)。譯。此處では從つて蛹より蝶等に變生するを化生と云へるか。

【五】四種食。一に摶食又は段食、新譯に段食と云ふ。搊握して食ふ食の意。印度人は飯茶を搊握して食ひに依り、すべて欲界有形の食をかく名けたり。二に觸食。又は樂食と云ふ。心所の喜悅等の感情の身を支へて飢えしめざるもの。三に思食。又念食と云ふ。意識の希望等の良く身を支へて以て身命に資助を與ふるものを云ふ。四に識食。六識能く身を持するに依り、之を識食と云ふ。

隨ひて害する無きや。即ち聞慧を以て此の衆生を知るに、人中の時に於て、生死の爲の故に、布施を行ふ時尋いで共に願を發し、當に來るべき世に於て常に夫妻と爲らんと。是の人、身壞れ命終るの後、少の樂有りて大苦惱に非ず。謂はく、[二]命命鳥・鴛鴦・鴿鳥にして、樂を愛欲多し。業因を以ての故なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて諸の畜生を觀る。狐・狗・野干等は、何の業を以ての故に、性として相ひ憎害するや。即ち聞慧を以て此の衆生を知るに、人中の時に於て、諸の善人・出家人の所に於て其の淨食を汚し、常に戯れ闘諍ひ、貪ある因緣にて、身壞れ命終らば畜生中に墮ち、野干・狐・狗の身を受け、互に相ひ憎嫉す。

復次に、比丘、業の果報を知りて諸の麞鹿を觀る。何の業を以て彼處に生るるや。即ち聞慧を以て此の衆生を知るに、前世を爲す時、喜びて強賊を作し、鼓を撃ち貝を吹きて城邑・聚落・村營に至り、人の柵を破壞し、大音聲を作して諸の恐怖を加ふれば 是の如きの人は身壞れ命終りて、地獄に墮ちて具に衆苦を受け、地獄從り出で麞鹿中に生れ、心に常に怖畏る。本の宿世に人の村落を破り、他をして恐怖せしめしを以て、是の故に曠野・山林に生れて常に恐怖多く、業力を以ての故に若し人中に生るるも心常に恐怖れ、少心・怯弱にして、多く怖畏を懷く。餘業の緣の故なり。是の如きは少分にして、畜生處を觀るに、互に相ひ增嫉し、業多きを以ての故に、共に相ひ殘害す。本の業に隨ふが故なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて諸の畜生を觀る。何の業を以ての故に[三]化生身を受くるや。即ち聞慧を以て此の衆生を知るに、前世の時に於て絲絹を求むることを爲し、養蠶して繭を殺し、或ひは蒸し或ひは煮て水を以て之れを漬け、（爲めに彼等は）無量の虫の火髻虫と名くるものと生ず。諸の外道有りて邪なる齋の法を受け、此の細虫を取りて火中に置き、諸の天を供養して以て福德を

【二】命命鳥(Jīvajīvaka)。又共命鳥、生々鳥とも稱す。二身二頭の鳥なりと云はる。

【三】以下順に四生(Catur=yoni)を說く。一に胎生(Jarāyuja)、二に卵生(Aṇḍaja)、三に濕生(Saṃsvedaja)、四に化生(Upapāduka)。化生とは、依託する所無く、只業力に依て起るもの。地獄、天人の最生等の如く、畜生にては、龍、金翅鳥の如きものなり。

卷の第十八

畜生品第五之一

復次に、比丘、業の果報を知りて實の如くに諸の地獄を觀、業の果報を知りて、一百三十六地獄衆生の壽命に長短・增減あるを實の如くに知り已り、第二道の無量の餓鬼にして、略して之れを說くに三十六種なるを觀、及び業行を觀て亦實の如くに知り、彼れ聞慧を以て、諸の畜生の種類・差別を觀る。三十四億あり、心の自在なるに隨ひて、五道に生るゝに、五道中に於て畜生の種類は其の數最も多く、種種の相貌・種種なる色類あり、行食同じからず、[一]群飛各異り、憎愛、違順し、伴行するあり、雙なるあり隻なるあり、同じく生れて共に遊ぶあり。所謂、飛禽及び諸の走獸にして、烏・鵲・鵝・雁・鴻鳥なる衆類は群を異にして別に遊び、相ひ怨害せず、狐・狗・野干等は互に相ひ憎嫉し、烏と角鵄・馬及び水牛、虺蛇と鼬等は共に相ひ殘害ひ、形相同じからず、行食各異る。何の業を以ての故に、種種なる形相あり、行食各異るや。彼れ聞慧を以て是の種生を觀るに、種種なる心の役使ふ所と爲り、種種の業を作して種種の道に入り、種種の食を噉ふ。彼等を觀察するに、何の因を以ての故に各各類を異にし、共に相ひ憎嫉するや。即ち聞慧を以て此の衆生を知るに前世の時に於て、邪見を以ての故に邪法を習學ひ、復衆生有り、邪法を學びて邪慢を生じ、邪見の論・邪見の譬諭を以て互に相ひ諍論し、共に談論すと雖も利益する所無く、安樂有ること無く、亦善道に非ずんば、是の如きの二人は身壞れ命終りて地獄に墮ち、無量の苦を受け、地獄從り出でて本の怨憎を以て畜生中に墮ち、是の故に怨對して還りて相ひ殺害す。所謂、虺蛇と黃鼬、馬及び水牛、烏と角鵄等なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて諸の畜生を觀るに、何の業を以ての故に、畜生の類にして、相

【一】群飛。諸の鳥類。

復次に、修行者は法を內觀し、法に順じて修行す。彼の比丘、實の如くに業の果報を觀て、先に已に分別して諸の地獄を觀、次いで餓鬼諸道の差別を觀て、實の如くに諸の生死の過患の甚だ惡賤す可きを見、是の如くに觀已りて魔の境界を離れ、生死を厭捨し、精進力を起して以て涅槃を求め、成就し具足して十五地を得たり。既に成就し已るに、爾の時、地神・諸の夜叉等は心に大歡喜して虛空夜叉に告げ、虛空夜叉は聞き已りて歡喜して四大天王に告げ、時に四天王は聞き已りて歡喜して三十三天に告げ、帝釋の眷屬は聞き已りて歡喜して夜摩天に告げ、夜摩天は聞き已りて歡喜して兜率天に告げ、兜率の諸天は聞き已りて歡喜して他化自在天に告げ、是の如く欲界は次第に相ひ告げ、其の聲展轉して梵身天從り乃ち光音天に至り、咸此の言を作さく『閻浮提中の某國・某城・某村・某邑・某種姓中の某善男子は、鬚髮を剃除し、信を以て出家して魔の境界を離れ、魔軍を破らんと欲し、魔の使者をして大怖畏を生ぜ令め、能く一切の諸の煩惱の山を動かして正道に入り、今是の如き十五地の行を得たり』と。時に光音天に是の語を聞き已りて皆大歡喜し、餘の天衆に告げらく『汝等諸天よ、應に歡喜を生ずべし。正法を增長して諸の魔及び魔の眷屬を損減し、正法の河をして流注して斷たざら令め、邪見の池を竭し、貪欲・瞋恚・愚癡を調伏して邪徒を摧滅し、正法を紹隆して生死を散ぜんと欲せり』と。欲界の天子は此の語を聞き已りて甚だ大いに歡喜し、之れを讚說する音は是の如く次第に展轉して相ひ告げて乃ち光音の一切の天衆に至れり。比丘、是の如くに勤修・精進して心休息せず、端直にして諂はず、邪曲を遠離して是の如くに涅槃の城を求め、善音の名稱は諸の天衆に遍し。

し海龜の浮木・孔に遇ふが如く、若し人中に生るれば盲冥・瘖瘂・聾頑・無知にして、一切の衆の衰と無量の病惱は其の身を莊嚴り、貧窮・下賤なり。餘業を以ての故に斯の如きの報を受く。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、聞慧を以て、是の如くに略說せる餓鬼の處を觀たり。若し分別して說かば、無量種の眷屬の餓鬼あり。海中に住する有り、海渚に住する有り、閻浮提に住する有り、瞿陀尼に住する有り、弗婆提に住する有り、鬱單羅越等の大洲の中間の所住の處に住する有り。但一名門を以て說けるも、種種なる名門有りて、羅刹鬼[19]・鳩槃茶鬼[20]・毘舍闍鬼[21]有り。彼の鬼神の微細の業行を知るに、各何の業を以て彼處に生れ、何等の食を食ひ、何等の行を以てし、何をか欲樂する所にして、何の緣を以ての故に此處に生れしや。皆心の獼猴を調伏する能はずして、行調柔ならざりしに由る。猶し象の耳の如く住する時有ること無く、鳥の林に在りて人の射る所と爲り、間關[22]として枝に趣き、一從り一に至るが如く、一切の境界に於て常に伺ひて息まず、猶し大風の諸の塵を吹動するが如し。是の心畏る可く、師子獸の如き、虎の如き豹の如き、蛇の如き毒の如きは尙調伏す可きも、是の心の調へ難きこと復此れより過ぎ、造る所の業に隨ひて相似の果を得、是の心是の如くに覺知す可きこと難く、是の如き染心は衆生を縛り、若し心にして淸淨ならんに、則ち解脫を得。是の心は王の如く、諸根圍遶みて以て眷屬を爲し、心に由りて業を造り、業の因緣にて果あり、果の因緣を以ての故に五道有り、心は機關の如く、諸根は絲の如く、五根及び心を能く調御せずんば惡道に行き、若し能善く調ふれば諸の善業を作して天人中に生れ、乃至不動涅槃を證得す。比丘、是の如くに微細の心行を觀察し、隨順して觀察し、是の如くに觀已りて、生死中に於て大厭離を得たり。是の比丘、先に已に地獄の苦を觀て生死を厭離し、次いで餓鬼世間の種種の衆苦を觀て、苦聖諦に入るを得たり。苦聖諦の無礙の行を得しも、未だ無礙道の證を得ず。

【一九】羅刹(Rākṣasa)。又羅刹娑、剎婆、羅叉婆等と云ひ、女を羅叉私(Rākṣasī)と云ふ。勇健、暴惡、可畏、護王等と譯す。惡鬼の通名なり。
【二〇】鳩槃茶(Kumbhāṇḍa)。又鳩滿拏、弓槃茶、吉槃茶等。陰囊、冬瓜、甕形等と譯す。人の精氣を噉ふ鬼なり。
【二一】毘舍闍(Piśāca)。毘舍遮、辟舍柘等に作る。顚狂鬼、又は噉精鬼と云ふ。持國天の國土を護持する鬼なり。
【二二】關の字は、宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。間關とは、鳥の鳴きかはす貌。原本𨵙に作る。

く。餘業を以ての故に斯の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀るに、餓鬼有りて四交の道に住み、因りて以て名と爲す有るを觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、貪嫉心を壞り、他の行糧を盜み、取り已らば笑を含みて之れを捨てゝ去り、其の人糧を失ひ、曠野を行きて大飢渇を受くるに、是の如きの人は此の惡業を以て、身壞れ命終りて遮多波他餓鬼の中に墮つ。惡業を以ての故に自然に鐵の鋸有り、身を截りて縱横に四徹にせられ、飢渇し身を燒く。若しは諸の世間に多病の因緣にて、交道に祀を設くるあひ、凡夫は愚癡にして、因果を識らずして惡見を行ひ、交道に祀を祭り、後病差ゆるを得れば是れ鬼の恩なりと謂ふ。是の交道鬼は此の祭食に因りて以て自ら命を濟ひ、若しは是の餘の飯則ち食する能はず、惡業盡きずんば故に死せざら使め、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば命終りて生れて人中に在り、貧窮・下賤にして、屠兒の羊を殺す家に生る。餘業を以ての故に斯の如きの報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て諸の衆生を見るに、邪道を行ひ、諂曲にして惡を作し、惡因を行ひ、邪見の法を說きて是れ眞諦なりと謂ひ、正法を信ぜざらば、是の如きの人は身壞れ命終りて、魔羅身餓鬼の中に墮ちて惡鬼の身を受く。若しは諸の比丘の行時・食時及び坐禪時に、是の魔羅鬼は爲に心を亂して妨礙することを作し、或ひは惡聲を發して其れをして恐怖れしめ、爲に惡夢を作す。是の如き餓鬼は魔の攝する所と爲り、正法を憎嫉して專ら暴惡を行ひ、此れを以て現に惡業の緣を造るが故に、大熱鐵摶は口從り中に入り、地獄人の如く等しくして異なる無く、熱鐵を呑み啖ひて大苦惱を受け、休息有ること無く、此の魔羅伽耶鬼中從り命終るの後地獄中に墮ちて多劫に苦を受け、或ひは十劫に滿ち、或ひは二十劫にして、是の如く決定して三惡道に在り、或ひは燒炙かれ、或ひは打棒を受け、他の爲に食啖はれ、人の身を得難きこと猶

[一七]能く我が此の業に繋がるゝ苦を救ふは、是れ知識及び妻室に非ず、亦男女諸の眷屬に非ず、是の業は大力にして奪ふ可からず。

苦樂は業に由り、他の作せるに非ず、我れ今斯の三種の業を受くるは、布施・持戒及び聞法を、我れ聞くを得已りて修せざりしが故なり。

我れ癡の網の覆ふ所と爲りしが故に、種種の惡業を造作し、第一の惡業の因緣の故に、我れ今斯の大苦報を受く。

我れ今若し此の、餓鬼世界なる大苦處より免離するを得ば、是の惡き惡業を未來世に、乃至命を失ふも願ひて作さゞらん。

是の時、餓鬼は是の如くに說き已り、大苦に壓されて本業を造りしを悔ゆ。乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば命終りて人中に生れ、[一八]旃陀羅の家に墮ち、屠兒にして膾を魁り、死屍を擔負ふ。餘業を以ての故に是の如き報を受くるなり。

復次に、比丘 業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、樹中に住む諸の餓鬼等を觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、前世の時に於て、人の福德の樹林を種殖せるを見、遠く行く者及び病人の爲にせるに、貪嫉の心を以て斫伐して材を取り、及び衆僧の園林の樹木を盜まば、此の人、是の不善の因緣を以て、身壞れ命終りて毘利差餓鬼の中に墮つ。生れて樹中に在り、惡業を以ての故に寒ければ則ち大いに寒く、熱ければ則ち大いに熱く、逼迮りて身を壓されて賊木虫の如くに大苦惱を受け、身體萎熟え、諸の虫蟻の爲に其の身を唼食され、若し食を以て之れを樹に棄つる有らば、得て之れを食ひて以て自ら命を活かす。餓鬼中に於て諸の辛苦を受け、惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば命終りて人中に生れ、常に藥草・材木・花葉を賣りて以て自ら活を存し、他の使ふ所と爲りて自在を得ず、大苦惱を受

【一七】原文にては此の句、第三連なるも、譯の便宜上、最初に出せり。

【一八】旃陀羅。梵(Caṇḍāla)暴惡、屠者、殺者等と譯す。印度種族の外にして最下等の種族なり。漁獵、守獄、屠殺を業とし、道ゆく時は鈴を鳴らし、破頭の竹を繫ちてその標示とすといふ。

是の如く諸の餓鬼にして、利根と智慧のある有り、少しの善業有りて本の行を憶念し、數數諸の餓鬼等を呵責せり。復諸の餓鬼等を呵責すと雖も、然も其の惡業にて猶脫るゝを得ず、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、脫るゝを得ずして、業盡くれば命終りて人中に生れ、常に山の嶮なるを行きて群鹿を隨逐す。餘業を以ての故なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、塚間に住する諸の餓鬼等を觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、貪嫉心を覆ひ、信有る人の花を持して佛に施すを見、此の花を盜み取り、之れを賣りて自らに供ふるに、此の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終れば餓鬼中に墮ち、塚間餓鬼の身を受く。飢渴の熱惱ありて、常に死人を燒く處の熱灰・熱土を食ひ、一月之中乃ち一食を得、或ひは得、得ず、頭冠・鐵鬘に火焰俱に起り、頭面・髑髏は皆悉く融爛け、燒け已れば復生じ、次いで著けたる鐵鬘は以て頸の上を貫き、火焰復起りて咽・胸を燒燃し、一切の身分は內從り火を出して遍く其の身を燒く。前世の時、佛の花鬘を盜めるを以て、故に斯の報を受くるなり。受くる身は醜惡にして、身の上に火起り、諸の虫に唼食され、異なる羅刹有りて來りて其の所に至り、杖を以て打棒ち、刀を以て其の身を斫り、痛急しくして嘷叫き、三種の苦を受く。何等を三と爲すや。一には飢渴、二には鐵鬘、三には羅刹、刀杖もて打斫するなり。惡業を以ての故に是の如き報を受けて憂悲・苦惱し、卽ち伽他を以て頌を說きて曰く。

我れ飢渴と諸の辛苦を受け、鐵鬘は身を貫き火熾に燃え、刀杖もて打斫せらるゝは第三の苦にして、具に是の如き諸の憂惱を受く。

我れ自心の誑く所と爲り、諸の惡業を癡の惑はす所と爲りて、今日此の餓鬼の苦を受け、永く知識及び眷屬を離る。

業の薪の因緣にて此の火を生じ、愛欲の風の吹く所と爲りて、此の惡業の火は我が身を燒き、周遍を圍遶みて空缺無し。

持戒・精進・智慧の水を、布施の瓶を以て之れに盛り、寂滅の大人此の水を持して、能く三界の諸の業火を滅す。

若し三業の使ふ所と爲らば、三業にて流轉して諸有を行く、是の人迴施りて三處を行くは、是の如き三法に誑かれしなり。

三十六業に驅使せらるれば、四十行を離るゝ能はず、九十八種の諸の[二六]結使ありて、是の如き等の法にて三界を行く。

一百八の明智慧を以て、十二の深義を思惟し、若し人能く法と非法とを知らば、是の人則ち無量の樂を得ん。

若し能く二種の相を知ること有り、二人の特に勝れし行を思惟し、十八の特に勝れしを思惟し已らば、是の人は衆の惡道を遠離す。

若し人能く二種の道を見れば、是れを四法を究竟めし人と爲し、已に四流の海を超越するを得ば、是の人覺悟して衆惱無し。

能善く八聖道を修行し、十力の義を能く知見し、善く二苦の因緣を知らば、是の人則ち無生處に到らん。

若し人善く二諦の義に達し、能善く四念處を思惟し、能く過去と未來世を觀れば、魔の網の障礙する所と爲らず。

我れ惡業の使ふ所と爲り、衆の善き白淨の法を遠離して、諸の餓鬼世界中に到れり、自ら惡業を送りて癡に惑はされしゆえなり。

【二六】結使。結と使と煩惱のこと。

を望みて疲極を計らざるも、所至の處は但空地にして、了に水無きを見る。何を以ての故に。陽焰の中に、性として自ら水無ければなり。云何んが得んや。是の鬼憧惶れて曠野を走るに、荊棘の惡刺は其の兩足を貫き、疲極して水を望み、悶絶して地に𨺉れ、惡業力の故に死し已るも復生き、飢渇に逼惱せらるゝこと前の十倍に過ぐ。未だ起たざる間に、烏・鵄・鵰・鷲は競ひて其の眼を啄み、其の身の肉を食ひ、分張ち摑裂きて身骨を破散し、三苦普く至りて大苦惱を受け、歸する無く救無く、互に相ひ悲み告げ、即ち伽他を以て頌を說きて曰く、

鵰・鷲・烏・鵄なる諸の惡鳥は、金剛の嘴にて我が身を啄み、摑裂、破壞りて全き處無く、具に衆苦を受くるも救護する無し。

諸業は影の如くに身を離れずして、昔の惡業の如くに今報を受く、我等宿路を行く人を害ひ、是れを以て今大苦惱を受くるなり。

惡業は能く諸の衆生を將ゐ、業は牽きて畏る可き處に至らしめ、惡業は能く隨ひて何れの所にも至り、果を受くる時に至りて惡業は熟す。

業に縛られし衆生は三界に遊び、輪轉して窮まる無く休息無し、若し善業を行ひ衆惡を捨つれば、則ち衆苦の饒益無きを離れん。

若し人諸の惡業を愛せずして、之れを觀ると火の如く貪著せずんば、是の人は餓鬼趣に至らずして、飢渇の火の燒く所と爲らざるなり。

須臾の時に於て常に增長し、飢渇の苦痛は念念に生じ、身體の熾火は山谷を照して、猶し大火の山林を燒くが如し。

野火の大山林を焚燒くは、大龍雨を降らして則ち能く滅するも、劫火一たび起らば海水を竭し、我が火も是の如くに滅す可からず。

は波梨耶多の幽嶮なる山中に在り、或ひは氷山の極めて冷き處に生れ、或ひは〔一五〕摩羅耶山の極めて嶮しく、惡難ありて、多く毒有る處に在り、渠水有ること無く、毒藥多饒く、寒ければ則ち氷凍あり、暑ければ則ち毒盛にして甚だ怖畏る可く、叢石・峻巖・師子・猛虎の所居の處にして、其の中に生るれば寒苦の極惱は人の百倍に過ぎ、夏日の熱惱も人より百倍し、盛夏に五日空中より火を雨らして其の身體を燒き、極冬の寒至れば虛空中に五日刀を雨らし、惡業を以ての故に、空中より火を雨らし、乃び刀劍を雨らす。嶮難の處に住して飢渴の火の爲に其の身を焚燒かれ、叫喚び悲惱み、毒藥丸を以て自ら之れを食ひ、食ひ已らば卽ち死し、惡業盡きざれば卽便ち還りて活き、旣にして活くるを得已らば飢渴は前に倍し、呻嘷き悲哀しむ。利き嘴の多有りて來りて其の眼を啄み、大苦痛を受けて聲を擧げて大に叫び、鳥の啄食し已れば眼は復還りて生じ、是の如くに苦を受け、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば命終りて人中に生れ、交道・巷陌に自ら活を存し、惡業に熏ぜられ、猶蠱毒を行ひて、還りて活等の大地獄中に墮つ。餘業を以ての故なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、曠野の諸の餓鬼等を觀る。何の業を以て其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、前世の時を以て、曠野の水無き嶮難の處にして、日光の焰の暑きに於て、福を求むる人の林樹を種殖し、乃び湖池を造り、以て行路に給せるに、諸の群賊有り、池水を決去し、道を行く者をして疲極・渴乏して氣力微劣ならしめ、破壞・劫剝して其の財物を奪ひ、嫉妬の心に覆はれて布施を肯はざるに、是の如き人は身壞れ命終りて、阿吒毘餓鬼の中に墮つ。大火身を燒きて燈を燃やせる樹の如く、日光に曝され、曠野を走りて叫喚して水を求め、及び飮食を求め、哀を求めて自ら救ふ。是の如き餓鬼は、惡業を以ての故に遙に陽焰を見、是れ淸水にして、平住して湛然たりと謂ひ、疾走して往趣し、水を飮むことを得る

【一五】摩羅耶（Malaya）。又摩羅延、摩梨等に作る。南天竺境・摩利伽羅耶國の南界に在りと云ふ。多く旃檀香を出すこと、諸の經論に出ず。

是の如き衆生は惡業に熏ぜられ、具に種種たる諸の苦惱を受く、糞の熏ずる所の如くにして甚だ惡む可くんば、是の如き惡業を應に捨離すべし。

善法の熏ずる所は最も殊勝にして、能く永く惡道の苦を離れしめ、[二]瞻蔔花の熏ぜる香油の、花は滅壞すと雖も香油は在るが如し。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、火炭を食ふ諸の餓鬼等を觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、[三]刑獄に典主たりて、貪嫉心に覆はれ、衆生を打縛りて其の飲食を禁じ、他をして飢え渴きて泥土を噉食ひ、以て生命を續け令むる。此の典獄の人は是の因緣を以て、身壞れ命終りて、食火炭餓鬼の中に墮ち、常に塚間に至りて屍を燒く火を噉ひ、猶足る能はず。是の如きの惡業を因時に悅樂し、報を受けては極めて惱み、心に愛樂せず、不淨にして惡む可く、愛の毒の勢力の因緣和合して食火餓鬼の身を受け、若し火を食ふことを得れば少しく飢渴を除くこと、人の水を以て世間の火を滅するが如し。比丘、是の如くに觀る時、世の愛欲に於て深く厭離を生じ、欒を俱與にするを樂まずして、是の念を作して言はく『愚癡の凡夫は愛の爲に使はれて自在を得ず。火を食ひて飢を除くこと、法として喩ふ可き無し』と。餓鬼の身を受け、乃至惡業盡きず壞れずんば、脫るゝを得ず、業盡くれば命終り、人中に生れて常に邊地の飢儉の處に生れ、食ふ所は麁惡にして美味有る無く、鹽味を識らず。餘業を以ての故に斯の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、毒を食ふ諸の餓鬼等を觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、貪嫉心に覆はれ、毒を以て人に食はし、其れをして命を喪はしめて其の財物を取らば、是の如き惡人は身壞れ命終りて活地獄に墮ち、具に衆苦を受け、地獄從り出で一、食毒餓鬼の中に生る、[四]民陀山の窟の內に在り、或ひ

【二】瞻蔔(Campaka)。又瞻蔔迦、瞻波、占婆、旃波迦、瞻婆等に作る。金色花樹と譯す。樹形高大にして、其の花香氣あり、其の氣風によりて遠く熏ずと云ふ。

【三】刑の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。原本形に作る。

【四】民陀山(Vindhya)。印度の南方デッカン高原を北限する山脈をいふ。

て婆移婆叉餓鬼の中に墮つ。既に鬼身を受くれば飢渇の苦惱あり、活地獄の如く、等しくして異有る無く、四方に奔走るも悕望せらるゝ無く、人の救護する無く、依る無く怙む無く、自心に誑かれて、遠方の處に於て適飲食の林間及び僧の住處に在るを見、奔走り往趣く。疲極れ困乏みて飢渇は常に倍し、口を張りて食を求むるに、風は口從り入りて以て飲食を爲し、惡業の緣を以ての故に死せざら使め、惡業の身を持して妄りに食想を見ること、猶し渴ける鹿の[二]陽焰を見る時、之れを謂ひて水と爲すが如く、空にして所有無きこと、施火輪の如し。前世の時、虛しく誑き、人に許して竟に與へざりしを以て、此の報なるを以ての故に、但眼に食を見るも、得る能はず。伽他頌にて曰く。

　因果相似すとは聖の說きたまふ所にして、善因は則ち善果を成就し、善因は則ち惡果を受けず、惡因は終に善報を受けざるなり。

　因緣相ひ順じて衆生を縛り、生死の相續は鉤鎖の如く、生死に繫縛られし諸の衆生は、諸の趣に輪迴して脫るゝ能ふこと莫し。

　若し能く諸の繫縛なる、堅牢き鉤鎖の業煩惱を斷除せば、是の人能く寂靜處に至り、永く一切の諸の憂惱を斷たん。

其の人是の如く、因に相似せる苦報を受くる時、自心に誑かれ、奔揆り馳走せ、常に風氣を食ひて以て自ら命を活かし、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば命終りて人中に生れ、貧窮・下賤にして人の輕忽ずる所、常に衆人の爲に房舍・飲食・衣物を施すことを許されて而も與ふる者無く、他の許すを聞く時、心悅びて得んことを望むも後に至りて獲ず、轉た憂結を懷き、二種の苦を受く。一には飢渴、二には憂惱にして、大苦惱を受け、餘業を以ての故に斯の如き報を受く。伽他頌にて曰く。

【二】陽焰。鹿愛（Mrgatrishna）を云ふ。沙漠中に起る湖水の相を爲す、蜃氣樓の事。鹿の誑かれて、水を飲まん事を望みて往趣するが故に此の名あり。

諸業は大力にして衆生を牽き、不善業の繩に縛られ、將ゐられて餓鬼世界中に詣り、具に諸の大飢渴の苦を受く。

諸の餓鬼等の飢渴の苦は、火刀及び毒藥に過ぎ、是の如き飢渴に大力有りて、無量の飢渴は衆生を惱ます。

一念の時も休息を得る無く、晝夜苦惱は常に離れず、乃至微少の樂も得ずして、常に種種の諸の辛苦を受く。

苦の業因緣を作せしを以ての故に、惡道中に生れて苦報を受く。此の苦報より脫るゝを得難し、何時か當に安樂を受くるを得べきや。

見る所の諸の泉に悉く水無く、一切の陂池は皆枯渴せり、處處に奔走りて水漿を求むるも、往き至れる諸の河に悉く見ず。

我が所行の處に諸の水を求めて、山林・曠野に遍からざる無く、所至る處に隨ひて水を飲むことを望むも、少しの水を求覓めて得る能はず。

飢渴の火は我が身を燒き、歸する無く救無くして大苦を受く。

是の如く、餓鬼は自業に誑かれて呻喚き哀嘷しむ。乃至惡業盡きずんば、故に脫るゝを得ず、報盡くれば命終り、餘業を以ての故に人中に生れて諸の淫女なる婦女の身を受け、若し男の身に生るれば除糞の家に生れ、身に女人の著くる所の衣を服て女人の法を行ふ。餘業を以ての故なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀る。何の業を以ての故に、食風餓鬼の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、諸の沙門・婆羅門・貧窮なる人の來りて乞ひ求むる者を見、其れに食を施すことを許し、其の來至せるに及び、竟に施與せずして、此の沙門及び婆羅門・貧窮なる病人をして、飢虛・渴乏して冷風に觸るゝが如からしめんに、彼の妄語の人は、身壞れ命終り

は常に火爐の殘食を憶念し、飢渴身を燒きて二火倶に起り、呻吟き嘷叫び、作せし諸の惡業は決定して成熟す。乃至惡業盡きずんば、猶脫るゝを得ず、業盡くれば脫るゝを得、餘業の因緣にて餓鬼中に生れ、貧窮・多病にして、其の行く處に隨ひて常に火の爲に燒かれ、野火の焚く所なり。餘業の因緣を以て斯の如き報を受く。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て觀るに、多く嫉妬を行ひて遍き業を習ひ、究竟して業を成さば餓鬼道に墮ち、不淨の巷陌の中に生る。何の業を行ふを以て彼處に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を見るに、慳嫉心に覆はれ、不淨の食を以て諸の梵行の清淨なる人に與へ、是の因緣を以て、身壞れ命終りて不淨囉他餓鬼の中に生れしなり。若し晝日に於ては人見る能はざるも、若し人夜行かば則ち多く之れを見る。若しは城邑・聚落なる衆の聚る處、若しは曠野に住し、行軍の厠、穢惡を屛へる處にして、虫蛆の中に滿つる臭處の不淨なるを、若し人(之を)見る者は惡みて視るを欲せず、嘔吐を捨て去らば是の餓鬼は生れて其の中に在り、前世の時、不淨の食を以て持して衆僧に與へしに由り、是の因緣を以て不淨處に生れて大苦惱を受け、其の中に處ると雖も常に食を得ず。諸の惡鬼有り、手に利き刀の刄に火焰を出せるを執りて、傍に在りて守護せり。常に飢渴に困み、一月・半月に乃ち一食を得て、猶飽くを得ず、設ひ食を得て飽くも、糞を守れる諸の鬼は强打して吐かしむ。飢渴に身を燒かれて呻嘷き哀叫び、橫に交りて馳走し、憂惱・悲泣す。卽ち伽他を以て說く、頌に曰く。

種子の不善なる因緣の故に、憂苦の惡果報を獲得、因界の性相は相似、惡業の因緣にて苦報を得。

惡業の鉤の牽く所と爲りては、魚の鉤を呑みしが如くにして惡道に入る、鉤を呑みし魚は尙脫る可きも、惡業に牽かれし人の免るゝ者無し。

しくして得る能はず、或ひは十年に至り、或ひは二十年に乃ち一の便を得、常に飢渴に困む。自ら惡業を作して還りて自ら之れを受け、惡業盡きずんば、故に死せざらしめ、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば脫るゝを得、此れ從り命終りて人中に生れ、常に天祀を守り、貧窮しく、困危ありて自在を得ず、[一〇]殘祀を食ふ。餘業を以ての故に他に依りて自活す。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、餓鬼の梵羅刹と名くる有るを見る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、前世の時、生命を殺害りて以て大會を爲し、其れを希有なりと謂ひ、飯食を販賣して、賤く取りて貴く賣り、貪嫉に破壞らる。是の如き衆生の、身壞れ命終りて餓鬼中に墮ちたるを、婆羅門羅刹餓鬼と名くるなり。飢渴の火の爲に其の身を焚燒かれて馳奔・疾走し、現に人像を見て衆生を殺害し、或ひは空巷・衢道・四交の路首に住して以て人の便を求め、諸の婆羅門の殺生して會を設くるに、多く其の中に生れ、或ひは自ら身を藏して以て人を殺害し、或ひは人の身中に入りて以て人命を斷つ。呪術人言はく『鬼神の人に著きて、人の身中に入り已らば、人をして心亂れ、狂惑して知る無からしむ』と。是の如き惡業にて常に衆惡を作し、飢渴に身を燒かれて大苦惱を受け、餓鬼界に住して乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば命終り、餘業の因緣にて、生れて人中に在りて常に人肉を食ひ、或ひは人血を飲む。餘業を以ての故に斯の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、火爐中に食する諸の餓鬼等を觀る。何の業を以て彼處に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、善友を遠離し、貪疾心を覆ひ、喜びて僧の食を噉ひし是の如き人の、身壞れ命終り、地獄に墮ちて無量の苦を受け、地獄從り出でて君荼餓鬼の中に生れしなり。旣に生れし後、飢渴の身を燒くこと火の林を焚くが如く、周遍く走りて飲食を求め、自らの業に誑かれて、天寺中に於て燒を被れる殘食を火を合せて噉ひ、心

【一〇】殘祀。祭に供へたる殘物のこと。

燒かるゝこと、猶し大火の乾ける薪を焚くが如し。
是の愛に初め染さるゝは覺知し難きも、報を得れば火の如くに自ら燒滅く。若し常の樂と心の安隱を欲すれば、應に愛結を捨て、諸の著を離るべし。
魚の鉤を呑まば命久しからざるが如く、愛の結の人を縛るも亦是の如くにして、諸の衆生を縛りて惡道に詣り、餓鬼に墮ちて飢渇に逼らる。
餓鬼世界に諸の苦惱あり、處處に逃遁れして奔走す、地獄趣中に受くる苦は、皆愛の結の因縁に由るが故なり。
若しは諸の貧窮・困病の人にして、朝飡を求索めて（漸く）自ら存濟へるは、皆愛の結の因縁に由るが故に、斯の苦報を受くるなりと聖の說く所なり。
是の如く具に一切貪嫉の因縁の果報を觀、生死中に於て厭離を生ずることを得て、諸の欲を棄捨つ。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、人の精氣を食ふ諸の餓鬼等を觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、前世の時に於て、辭巧に人を誑き、詐りて親友に言へらく『我れ汝の護を爲さん』と。其の人、聞き已りて、策心と勇力（を出す）。是の時、彼の人、他（この人）をして敵に入らしめ、身命を喪はんと欲す。（而も）之れを捨てゝ去り、竟に救護せずして、王所に於て其の財物を取らんと欲す。時に彼の誑かれし者は陣に沒して死せり。彼の人の、是の不善の因縁を以て、身壞れ命終りて食人精氣餓鬼の中に墮ちしなり。大飢餓を受けて自ら其の身を燒き、刀は其の髓を斫りて皮肉を斷ち壞り、空從り刀を雨らし、遍く四方に走るも逃避する處無く、若し人有りて、惡を行ひ信無く、三寶を奉ぜざるを見れば、卽ち彼の便を得て其の身中に入り、精氣を食噉ひて以て自ら命を濟ふ。之を求むること甚だ難く、困

るなり。色に愛有り不愛有るに非ざるを耶。憶念を以て生ずる故に。比丘、是の如くに色入を觀、〔八〕名色を見已りて、貪らず染まず、迷はず取らず、色の堅無きを知り、彼の比丘、是の如くに眼を觀、色入を觀已りて、眼識に著せずして欲穢を離るゝを得、眼識は我に非ず、我は眼識に非ず、觸・受・想・思も亦復是の如し、と。復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、小兒を噉ふ諸の餓鬼等を觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、惡術呪の龍にて、災雹を除く爲にとて病人を誑惑し、呪術の夜叉にて人の財物を取り、或ひは復羊を殺し、是の如き人の身壞れ命終りて活地獄に墮ち、無量の苦を受け、地獄從り出でて婆羅婆叉餓鬼の中に生れしなり。復衆生有り、殺生の餘報にて、生れて人中に在りて此の餓鬼を爲し、〔九〕兒を偸みて之れを食ひ、或ひは産婦の所住の處に至りて彼の嬰兒を取り、或ひは匍匐の時、或ひは始めて行く時、是の如き餓鬼は諸の小兒を偸み、次第に之れを食ひて、若し其の便を得れば卽ち能く命を斷つ。若し殺業無くんば、害を爲す能ふ無し。伽他頌にて曰く。

惡業に繫縛らるれば惡果を受け、若し善業を行はゞ樂果を受く、業の繩は長く堅くして人を繫縛り、諸の衆生を縛りて脫るゝを得ざらしむ。

安隱の涅槃城を得ずして、長き流の三有に衆苦を受くるも、能く智の刀を以て斯の業を切らば、必ず諸の熱惱を解脫することを得ん。

業の至を斷つを以て繫縛無くして、無爲の寂靜處に至るを得、魚の繩に入りて人に牽かるゝが如く、愛の縛の衆生を死せしむるも亦爾り。

人の毒箭を野鹿に中つるが如く、其の鹿狂ひ怖れて東西に走るも、毒藥旣に行きて脫るゝ能はず、愛に縛られし衆生も亦是の如し。

常に衆生に隨ひて放捨せざる、愛を觀ること毒の如く應に遠離すべし、愚癡の凡夫は愛の爲に

〔八〕名色。五蘊の總名なり。受・想・行・識は質礙無くして、只名のみに依て顯はすべければ、之の四を名と云ひ、色法は塵に依りて顯はる、物體なればこれを色と云ふ。

〔九〕兒の字は宋・元・明本及び宮內省圖書寮本に依れり。原本而に作る。

入を觀察す。何等を十と爲すや。一には眼入、二には色入、三には耳入、四には聲入、五には鼻入、六には香入、七には舌入、八にて味入、九には身入、十には觸入なり。云何んが比丘、眼に色を緣ずるや。比丘觀るに、眼は色を緣じて識を生じ、三法和合して觸を生ず。觸は受・想・思・識と共なる者にして、觸相とは觸なる者、覺相とは受なる者、知相とは想なる者、長短・愛不愛の如く、現に相對等を見るは思なる者なるも、識の一緣を知りて而も各各の相あり[六]、各各自體あること、十大地法の如し。何等を十と爲すや。一には受、二には想、三には思、四には觸、五には作意、六には欲、七には解脫、八には念、九には三昧、十には慧にして、一を緣じて各各の相あり、識等の十一法も亦是の如く、猶し日光の一たび起りて衆光あり、自體各各別異なるが如くにして、識の自體の異なるが如く、乃至思も亦是の如し。彼の比丘、實の如くに色入を知りて、眼は空にして所有無く、堅無く實無きを觀、比丘是の如く、實の如くに道を知りて邪見を離れ、正見の心を喜び、眼は癡の垢を離る。實に其の眼を見るに、但是れ肉段、癡の知る所無し。但是れ涙竅と、實の如くに知り已りて欲心を離れ、眼の無常なるを觀て無常を知り已らば、但是れ肉團の住して孔穴に在るなり。實の如く眼を知るに、筋脈の纒縛にして、當に知るべし、衆緣和合して眼入有り、是の如き眼は見る者有る無く、或無く知無く、乃至苦も亦是の如し。眼入を觀已りて欲意を離るゝを得、是の比丘、實の如く眼入を觀察し已り、分別して色を觀るに、是の如き色は愛と不愛と皆悉く[七]無記にして、分別を以て生ず。何法は見る可く、何者を淨と爲し、何者是れ常にして、何者を貪る可きや。比丘、是の如く思惟し觀察して實の如く色を知るに、有に非ず樂に非ず、是の如く思惟して色相を觀察せば、堅無く實無く、分別を以て生ずるなり。愛・不愛等は實有に非ざるを耶。一切衆生は愛・不愛に於て虛妄に貪着するも、此の色の如きは實體有るに非ず、常に非ず有に非ず、眞に非ず樂に非ず、不壞法に非ず、堅なるに非ず我に非ず、貪欲・瞋・癡の自ら心を覆ふを以ての故に、愛・不愛を生ず

【六】宮內省圖書寮本にはこの下、「思有三分或色或非色」の八字あり。

【七】無記。無生の異名なり。卽ち諸法の實相は無生無滅なるを云ふ。

の身は得難し。

若し衆の惡を遠離し、喜びて善法を行ひて心に愛樂せば、此の人現世は常に安樂にして、必ず涅槃解脱の果を得ん。

若し衆生有りて善行を習はば、世間中に於て最も殊勝にして、若し人不善の業を習學せば、一切世間の最大の惡なり。

若し智慧有りて善を行ふ人は、能く初・中・後の惡法を離る、若し衆の惡業を造習すること有らば、則ち地獄に入りて苦報を受く。

能く善法を以て諸根を調ふれば、則ち世間の淨勝の法を得、是の人の身壞れ命終る時、天宮に上生して快樂を受く。

業の汝を繋縛すること堅牢く、閻羅の使者の持する所にして、送りて恐怖しき諸の惡道に至る、閻羅の世界は大苦處なり。

汝は前世に於て衆惡を作せり、此の業を今當に還りて自ら受くべく、自ら作して自ら受くるにて他の爲ならず、若し他の作す所は已の報に非ざるなり。

是の如く閻羅王の罪人を呵責し已るに、使者は將ゐて出で、此の罪人の自ら惡業を作して、自らの業に誑かるゝを以て、將ゐて果報の種種の苦惱を受けしめ、楚毒にて之れを治む。（彼の執杖餓鬼は）飢渴に逼られ、但風氣のみを食し、惡業盡きずんば故に死せざら使め、此れ從り脫るゝを得ば、業に隨ひて流轉して生死の苦を受け、若しは人中に處らば生れて邊戍[四]に在り、幽山・嶮谷・深河・峻岸なる危怖の處にして、自在者[五]の此の路を行く有らば、其れをして引導せしむ。餘業を以ての故に斯の罪報を受くるなり。

復次に、行者は法を內觀す。云何んが比丘、五地を觀るや。彼れ聞慧を以て、明眼にて十種の色

【四】邊戍。邊境の守備人のこと。
【五】自在者。こゝにては自由に通行する人。旅客の意。

し、耽耳[二]・大腹にして、高聲にて大叫し、以て諸の鬼を怖れしむ。手に利き刀を執りて諸の罪人に擬し、其の手を反執にして縄を以て之れを縛り、將ゐて王所に詣り、大王に白して言さく『我れ人中に於て此の罪人を捕へ、來りて我れに至れり。大王よ、此の人、前世に不善の業なる身業の不善・口業の不善・意業の不善を行へり。願くは王よ、呵責せよ』と。時に閻羅王、卽ち偈頌を說きて呵責して言はく。

汝は人中の愚癡の輩にして、種種の惡業にて自ら莊嚴れり、汝本何ぞ善行を修せざりしや、寶渚[三]に至りて空しく歸還せしが如し。

善業の因緣にて樂果を得、樂果の因緣は善心を生ず、一切の諸法は心に隨ひて轉じて、流轉の生死は常に斷ぜず。

一切の諸行の悉く無常なること、猶し水沫の堅固ならざるが如し、若し能く是の如くに正法を修すれば、是の人未來に勝報を得ん。

若し人有りて能く常に善を修め、一切の諸の惡業を捨離せば、是の人は則ち我が所に至らずして、階に乘り上生して天報を受く。

若し人愚癡にして覺悟ること無く、惡業を愛染せば我が所に至り、能く惡業の諸の不善を捨つれば、是の人則ち第一道を行かん。

若し世間の諸の業果を見、亦天上の種種の樂を見るも、是の如くに猶放逸の心を起さば、是の人自ら身を愛すと名けず。

誰を利せんが爲の故に惡業を作りしや、一切の身・口・意を放恣にせる、是の如き人等の行くところは各異り、汝は今業に對へて我が所に至れり。

汝は衆惡の誑く所と爲り、畢定して嶮難の道を行く、若し人愛樂して惡業を造らば、未來に人

【二】耽耳。垂れたる耳。

【三】寶渚。寶の滿ちたる海岸。昔印度人は船にのりてペルシヤ、メソポタミヤ地方と通商せり。それ等の商人が利得を得て歸來し、語り傳へてそれ等の國々を寶渚と稱せり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、海渚餓鬼等を觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、前世の時、行人の曠野を過ぐる有るを見、病苦にて疲れ極むに、是の人の所に於て、多く其の價を取りて直の薄少なるを與へ、惡貪を以ての故に辭を巧みにして曠野の空乏を行く人を欺誑き、是の因縁を以て海渚中に生れしなり。是の海渚中に樹林・陂地・池水有ること無く、其の處は甚だ熱く、彼の冬日に於ても甚熱の毒盛にして、人間の夏時の熱に比べんと欲すれば十倍を過踰え、唯朝露のみを以て自ら命を活かし、海渚に住むと雖も水を得る能はず、惡業を以ての故に海の枯渇せるを見、設ひ樹林を見るも皆悉く熾に燃ゆる大火焰起り、望心斷絶す。衆惡榛集りて安隱有ること無く、飢渴に身を燒かれて呻嘷き悲叫び、自身に誑かれて處處に奔走り、悲聲にて叫絶するも救ひ無く護り無く、依る無く恃み無く、髮髮蓬亂れ、身體羸痩せ、一切の身脈皆悉く麁現にて猶し羅網の如く、所至の處は皆空竭して、救無く歸する無く、依る無く怙む無く、惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に死せさら使め、業盡くれば脫るるを得、此れ從り命終り、業に隨ひて流轉して生死の苦を受け、人の身の得難きこと海中の龜の浮木・孔に値ふが如く、若し人中に生るれば生れて海渚に在りて、或ひは一足なる有り、或ひは復足短く、漿水(を得る)に困乏す。餘業を以ての故に斯の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、閻羅執杖餓鬼を觀る。何の業を以て其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、慳嫉を以ての故に自ら其の心を壞し、國王・大臣・豪貴に親近して專ら暴惡を行ひ、心に慈愍無く、正理を行はず、諸の賢善の輕毀する所と爲り、是の如き惡人の身壞れ命終りて、閻羅王の執杖餓鬼の身を鬼世界に受けたるなり。閻羅王の爲に趨走りて使を給し、若し衆生有りて惡業を作らば、時に閻羅王は卽ち此の鬼をして其の精神を錄さしむ。此の鬼の身色醜惡にして、手に刀杖を執り、頭髮蓬亂れて倒髮は身を覆ひ、長脣下垂

卷の第十七

餓鬼品之二

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を観、彼も聞慧を以て、迦摩餓鬼を觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、若しは男、若しは女、若しは[一]黃門人の、種種の衣を著けて自ら嚴飾り、女人の衣を服て婬女の法を行ひ、若し人、欲を發して之れと交會せば、此の事に因るが故に財法を得て凡人に施與し、福田處に非ざる不淨の心の施にして、是の因緣を以て、身壞れ命終りて欲色餓鬼の中に生れしなり。鬼の身を受け已らば、種種の嚴飾は意の念ふ隨に皆得て心に從ひ、善きを欲すれば則ち美しく、惡しきを欲すれば則ち醜く、若し其れ愛・不愛の色を作さんと欲すれば悉く能く之れを爲し、或ひは男子を作れば顏容端正に、或ひは女人を作れば姿も首も美妙に、或ひは畜生と作れば相貌殊異なり。能く種種なる上妙の莊嚴を作し、能く遍く一切の方所に遊行し、若し食飲を得れば能く食ふも患無く、少しく施を行ひしが故に、能く微細の身を作して人家に盜み入り、世人說きて言はく『毘舍闍鬼は我が飲食を盜めり』と。或ひは人の身と作りて他の節會に入り、或ひは鳥の身を作して人の祭飲を食ひ、其の身細密にして人見る能はず、此の鬼是の如く、意の隨に能く種種の衆色を現はし、世人皆如意夜叉と名け、或ひは女身と作して人と交會す。是の如く種種に莊嚴りて人を誑き、人の間に行く。鬼道中に在りて、乃至惡業盡きず壞れず朽ちざれば、脫るゝを得ず、業盡くれば脫るゝを得、此れ從り命終り、業に隨ひて流轉して生死の苦を受け、人の身を得難きこと猶し海中の龜の浮木・孔に値ふが如く、若し人と爲らば伎兒中に墮ち、種種の衣を著けて縱逸に遊戲し、以て命を活かすことを求め、自ら己の妻を以て、他に從事せしめて財物を求む。餘業を以ての故に斯の如きの報を受くるなり。

[一] 黃門人。梵、般荼迦、般吒(paṇḍaka)。これに五種あり。即ち男性不具者。

て其の便を求め、瞋恚の心を以て常に其の便を求めて處處に追逐し、嬰兒を殺さんと欲して其の害する便を求む。是の如き餓鬼は一切の處に遍く、小兒の便を求めて其の因緣を覓め、若しは母の過を犯し、育養法を失はゞ、其の子に便を得、若しは不淨にして穢汚るれば鬼の便を得ると爲す。窓牖を闚視し、或ひは復門の中・大小便處・不淨なる水の邊、呪中に便を求め、彼の忌む所に求む。若しは影像を見、若しは衣の不淨なる、若しは火若しは水、若しは地、若しは刀(に求め)、若しは喜慶に求め、若しは高巖に臨み、若しは高閣に上らば、上下するに便を求め、是の如くに種種常に其の便を求めて、怨怒の心を常に捨離せざること上に說く所の如く、若し其の便を得れば能く嬰兒を害ひ、若し便を得ざれば十歲に至るまで種種に便を求め、猶殺すことを捨てずして、是の如き不善を自ら其の心に纏ひ、飢渴身を燒かば殺害する能はざるも、若し其の便を得れば則ち其の命を斷つ。若し此の小兒に强き善業有りて、或ひは善神の擁護する所と爲らば殺害する能はず。彼の鬼に瞋心あり、此れ從り命終らば業に隨ひて流轉して生死の苦を受け、人の身を得難きこと猶し海龜の浮木、孔に値ふが如く、若　人中に生るゝも、宿業にて瞋を習ひ、怨の結に縛られて緣無き處も悉く怨家の如く、種種に方便して他の短闕を求む。餘業を以ての故に是の如き報を受くるなり。

るに、火は身從り出で、呻嘷き、悲叫び、奔突して走りて、諸の城邑・村落の人の間、山林の住處に至り、身は大聚の如く、飢渴の火燃ゆ。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、貪嫉心を覆ひ、他人を破壞し、妄語にて人を誑き、狂りに人の財を奪ひ、人の城廓を破壞し、人民を殺害し、他の眷屬・宗親をして散壞せ令め、抄掠めて財を得ては、持して王者・大臣・豪貴に奉りて王の勢力を得、王は其の能を善し、稱歎へ讚美め、轉た兇暴を增すこと上に如くが如くにして、是の如き惡人の、身壞も命終りて闍婆隸餓鬼の中に墮ちしなり。前世の時、夜行きて劫奪ひ、人を獄に繫縛りて諸の楚毒を加へしを以て、是の因緣を以て夜は則ち遍き身に熾燃たる火起り、前世の時、人を繫縛して嘷哭・叫喚せしめたるを以て、是の因緣を以て熾火身に燃え悲聲にて大いに叫ぶ。惡業盡きずんば、故に死せさら使め、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず。此れ從り命終らば業に隨ひて流轉し、人の身を得難きこと海中の龜の浮木、孔に値ふが如く、若し人身を得るも常に他人の破壞する所と爲り、設ひ財物有るも多く王賊の爲に侵陵・劫奪せられ、若しは高危なるに上り、或ひは林の樹に昇らば、顚墜して身を傷つく。餘業を以ての故に是の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、餓鬼の常に人の便を求め、其の短を伺ひ求めて嬰兒を殺害する有るを觀る。何の業を以て其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、前世の時、他の惡人の爲に其の嬰兒を殺され、心に大なる怒を生じ、卽ち願を作して言はく『我れ當に來世に夜叉の身を作し、報にて其の子を殺すべし』と。是の如き惡人の、身壞れ命終りて惡道に墮ち、蚩陀羅餓鬼の身を受けたるなり。常に怨家を念ひ、瞋恚に毒を含みて諸の婦女の產生の處を求め、嬰兒の使を伺ひて其の命を斷つ。此の鬼に勢力あり、神通自在にして、若し血の氣を聞かば、須臾の頃に於て能く行きて百千由旬に至り、若し婦人產すれば微細の身を以

かれ、頭髪は蓬亂れ、身體扁瘦せ、其の身を打捧たれて皆悉く破壞し、大嶮難の黑闇の處を行きて大なる劇苦を受け、惆惶て奔走し、唯獨にして伴無く、猛風勁く切りて猶し刀の割くが如く、惡業を以ての故に死を求むるも得ず。乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば脫るゝを得、此れ從り命終り、業に隨ひて流轉して生死の苦を受け、人の身を得難きこと猶し海龜の浮木、孔に遇ふが如く、若し人中に生るれば多く深山・幽嶮なる海の側に處りて日月を見ず、此の國土に生れ、其の目盲冥にして見うる所無く、貧窮・下賤にして、乞ひ求めて自活す。餘業を以ての故に斯の如きの報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼彼れ聞慧を以て、餓鬼の名けて神通大力光明と曰ふ有るを觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、妄語にて人を誑き、貪嫉に破壞られて他の財を偷盜み、人を誑きて物を取り、或ひは勢力を恃み、强ひて人の財を奪ひて諸の惡友に賜へ、福田に施さざる不淨の布施にして、恩を求めんが爲の故に、救を求めんが爲の故に、節會の爲の故に、急難の爲の故に、親府せんが爲の故に、是の如き等の爲に是れ不淨の施を爲して、是の人の身壞れ命終りし後、大力神通鬼の中に生れしなり。鬼神の身を受け已らば多く無量の苦惱せる餓鬼有りて左右を圍遶み、深山に在り、或ひは海渚に處り、生れて其の中に處りて神通自在にして、唯此の一鬼のみ第一の樂を受け、自餘の眷屬の身は、林を燒くが如くに飢渴の火に逼られて、皆共に此の樂を受くる鬼を瞻視る不淨の施の報なり。業盡くれば脫るるを得て此れ從り命終り、業に隨ひて流轉して諸の生死を受け、人の身を得難きこと猶し海龜の浮木・孔に遇ふが如く、若し人と爲るを得れば飢饉の世に於て國土を統領し、或ひは大臣と爲る。餘業を以ての故に斯の如きの報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、夜熾に燃ゆる諸の餓鬼等を觀

常に人の短を求む。何の業を以て其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、貪嫉心を覆へし、衆生を誣誣して財物を取り、或ひは鬪諍を作し、恐怖れしめ、人に逼り、他の財物を侵し村落・城邑に於て他の物を劫奪ひ、常に人の便を求めて劫盗を行はんと欲し、布施を行はず、福業を修めず、良友に親まず、常に嫉妬を懷き、貪りて他の財を奪ひ、他の財物を見ては心に惡毒を懷きて、知識・善友・兄弟・親族は常に憎嫉を懷き、衆人之れを見て咸共に之れを指して弊惡の人と爲し、是の人の身壞れて惡道に墮ち、甞陀羅餓鬼の身を受けたるなり。遍き身の毛孔に自然の火焰ありて其の身を焚燒き、[一二]甄叔迦樹の花の盛の時の如く、飢渴の火の爲に常に其の身を燒かれ、呻嘷き、悲叫び、奔突して走り、飮食を求索めて以て自らを濟はんと欲し、世に愚人有り、[一三]塔に逆つて行き、若しは天廟を見て順行・恭敬せば、是の如きの人に、此の鬼[一四]便を得て、人の身の中に入りて人の氣力を食ひ、若し復人有りて、房の欲穢に近けば是の鬼便を得、其の身中に入りて人の氣力を食ひ、以て自ら命を活かし、自餘の一切は悉く食するを得ず。乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば脫るゝを得、此れ從り命終り、業に隨ひて流轉して生死の苦を受け、若し人中に生るれば多く衆難に遇ひ、王難・水難・火難・賊難・飢儉の難にして、常に貧窮・下賤の處に生れ、諸の病苦多く、身體尫羸し。餘業を以ての故に斯の如きの報を受く。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、地下黑闇の處の諸の餓鬼等を觀る。何の業を以て其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、愚癡にて惡を造り、貪癡心を覆ひ、法を枉して財を求め、人を繫縛りて闇牢中に置き、其れをして黑闇にして目に見る所無く、互に相ひ呼ぶ聲音は常に哀酸にして、大憂苦を受くるも人の救護ふる無からしめ、是の如き人の身壞れ命終り、黑闇處に墮ちて餓鬼中に生れしなり。地下の黑闇の處に在りて大惡蛇有り、遍く其の中に滿ち、受くる身は長大にして、長さ二十里なり。風の寒きに噤戰き、飢渴に身を燒

【一二】甄叔迦(Kimśuka)。赤阿叔迦(Aśoka)と名け、無憂樹と云ふ。註に曰く、此の樹の花の赤きこと、火聚の色の如きが故に、以て之れに喩ふ、と。

【一三】「塔に逆へて行きは」佛塔を禮拜せず反抗の心をもつて對すること。

【一四】伺便餓鬼。は「餓鬼草子」(備前、曹源寺藏)一五の疾行餓鬼、二〇の伺羅兒便餓鬼等とゝもに物凄く描かれてあり。

叉に神通力有りて、樂報を得。鬼世界に於て苦を脱るゝを得已らば、此れ從り命終り、業に從ひて流轉して生死を受け、人身を得難きこと海龜の浮木、孔に遇ふが如く、若し人中に生るゝも貧窮の家に生れ、其の身に香氣ありて香を塗れるに似る。餘業を以ての故に斯の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、疾行する諸の餓鬼等を觀る。何の業を以て其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、貪嫉心を覆ひ、或ひは沙門と爲り、受くる所の戒を破れるも、法衣を被て自ら聚落に遊び、諂ひ誑きて財を求め、病者の爲に隨病を供給せんと言ひて竟に施與へず、便ち自ら之れを食ひ、乞求せんが爲の故に衣服を嚴飾り、遍く諸の城邑に廣く須ふる所を求めて、病者に施さず、是の因緣を以て、身壞れ命終りて惡道に墮ち阿毘遮維餓鬼の中に生れしなり。鬼身を受け已らば、不淨處に於て不淨を噉食ひ、常に飢渇に患みて自ら其の身を燒き、若し衆生有りて不淨に行かば、是の如き餓鬼は則ち多く之れを惱まし、自ら其の身を現して爲に怖畏を作し、人の便を求めて、或ひは惡夢を示して其れをして恐怖れ令め、塚間に遊行して屍に近くを樂み、其の身に火燃えて烟焔倶に起り、若し世間に疫病流行して死亡せる者の衆を見れば心則ち喜悅し、若しは惡呪すること有りて、之れを喚ばゞ即ち來り、能く衆生の爲に不饒益の事を作し、其の行迅疾にして、一念のころ能く百千由旬に至り、是の故に名けて疾行餓鬼と爲す。凡ての世の愚人の共に供養する所、咸皆之れを號して以て大力の神通夜叉と爲し、是の如くに種種人の殃禍を作して人をして怖畏れしめ、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脱るゝを得ず、業盡くれば脱るゝを得、此れ從り命終り、業に隨ひて流轉して生死の苦を受け、若し人中に生るれば呪師の家に生れて諸の鬼神に屬し、鬼神の廟を守る。餘業を以ての故に斯の如きの報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て便を伺ふ諸の餓鬼等を觀るに、

しと言ひ、賤なるを以て貴なりと爲し、是の如き惡人の、身壞れ命終りて惡道に墮ち、生れて食肉餓鬼の中に在るなり。是の夜叉鬼は四衢道に於て、或ひは巷陌・街巷・市店に在り、或ひは城內、僧の所住の處、天祀中に在りて生れ、形狀醜惡にして見る者恐怖れ、而も神通有り、其の性輕軟にして、多く惡を爲さず。不淨の施を行へる是の因緣を以ての故に神通を得、諸の衆生の雜類なる牛・羊・麞・鹿の肉を以て、會を設けて人に與へ、是の業緣を以ての故に神力有り。乃至惡盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば脫るゝを得て此れ從り命終り、業に從ひて流轉して生死の苦を受け、人身を得難きこと猶し海龜の浮木、孔に遇ふが如く、微なる善業有らば人中に生るるを得て邊地に墮ち、旃陀羅・蠻夷の屬の如くに人肉を噉食ふ。餘業の因緣の故に斯の報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て香烟を食ふ諸の餓鬼等を觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、嫉妬の心と惡貪の覆ふ所と爲り、商賈にして香を賣りて、人の香を買ひて速に供養に須ふるを見、好き香を以て彼の買ふ者に與へずして、乃ち劣れる香を以てし、價は酬ゆる直ならず、心に淨信無くして惡報無しと謂ひ諸佛の眞實の福田を識らずして、是の如き惡人の、身壞れ命終りて、食香烟夜叉鬼中に生れしなり。而も神通有り、身に香鬘・塗香・末香を著け、妓樂にて自ら娛み、或ひは神廟に生れ、寺倉・林間・遊戲の處・重閣・樓櫓に皆遍く遊行し、世間の愚人は恭敬・禮拜し、沈水等の種種の諸香を燒きて之れを供養す。前世の時、商賈にして香を賣り、人をして勝上の福田なる〔一〇〕悲田に供養せしめしを以ての故なり。若し佛・法・僧中に少の布施を行はゞ大果報を得ること、譬へば〔一一〕尼拘陀樹の、其の子甚だ少なるも、之れを良地に種うれば樹を成し、甚だ大にして枝條の四布するが如く、若し佛・法・僧の福田の中に於て布施を行はゞ大果報を得ること亦復是の如くにして、福田力の故に、是の如き夜

【一〇】此處、原文には「非心田」とあるが、それにては意味通ぜず。恐く「悲田」の誤寫ならん。
【一一】尼拘陀(Nyagrodha)。又尼瞿陀、尼拘律、尼拘盧陀、諾瞿陀等に作り、縱廣樹、無節等と譯す。榕樹なり。

し、塔に詣りて要誓するに、則ち其の便を得て能く惡夢を示し、以て衆人を怖れしめ、若しは異なる人有り、諸の惡事に遭ひて其の恩力を求め、此の鬼神は大威德有る神通夜叉なりと言ひて、花鬘を以て之れに上するに、此の事に因るが故に鬘を得て之れを食ひ、少しく飢渴を離れて飢の火の燒く所と爲らず、世人に讃歎せらるれば鬼は常に喜悅す。是れ食鬘鬼にして、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば脫るゝを得て此れ從り命終り、業に隨ひて流轉して生死の苦を受け、若し人中に生るれば園を守る人を作し、花を賣りて自活す。餘業を以ての故に斯の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、諸の餓鬼の血を食ひて自活せるを觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て諸の餓鬼を觀るに、本人を爲せし時、愛樂して血肉の食を貪り嗜み、其の心慳嫉にして、戲笑して惡を作し、殺生して血を食ひ、妻子に施さゞるに、是の如き惡人は身壞れ命終りて惡道中に墮ち、血を貪り嗜みしが故に囉訖吒餓鬼の中に生る。鬼身を受け已らば人皆之れを名けて以て夜叉と爲し、供養・奉事し、血塗泥を以て之れを祭祀り、既に血を啖ひ已らば恐怖人を加へて數禱祀を求め、人皆之れを說きて以て靈神と爲し、是の如き次第にて自ら命を活かすことを得、壽命は長遠にして、亦上に說くが如く五百歲を經、是の如き餓鬼は諸の妖孽を作す。乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば脫るゝを得て此れ從り命終り、業に隨ひて流轉して生死の苦を受け、若し人身を得れば旃陀羅の家に生れて人肉を啖食ふ。餘の惡業の因緣を以ての故に爾なり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、肉を食ふ諸の餓鬼等を觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、嫉妬と惡貪にて自ら其の心を覆ひ、衆生の肉を以て肉段を作し、臠臠に之れを稱りて賣買するに、欺誑きて實は少きも多

を得ず、惡業盡きざれば、故に死せざらしめ、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脱るゝを得ず、若し惡業盡くれば此れ從り命終り、業風に吹かれ、世間に流轉して生死の苦を受け、人の身を得難きこと猶し海龜の浮木、孔に遇ふが如く、若し人中に生るれば工師の家に生れ、下賤の僮僕にして、人の爲と策使せらる。餘業の因緣にて是の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、唾を食ふ諸の餓鬼等を觀る。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、若しは男若しは女の、慳嫉心を覆ひ、不淨の食を以て、諸の出家・沙門・道士を誑きて是れ清淨なりと言ひ、其れをして信用して便ち之れを食はしめ、或る時は復所應からざる食を以て淨行人に施し、數此の業を爲し、復他人に敎へて誑惑を行はしめ、布施を行はず、禁戒を持せず、善友に近かず、正法に順ぜず、樂みて不淨を以て持して人に與へ、是の如き惡人の、身壞れ命終りて惡道中に生れ、啖吒餓鬼の身を受けたるなり。飢渴の火の爲に常に其の身を燒かれ、不淨の處なる若しは壁若しは地に於て以て人の唾を求め、之を食ひて命を活かし、餘の一切の食は悉く食ふを得ず、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脱るゝを得ず、業盡くれば脱るゝを得、此れ從り命終り、業に隨ひて流轉して生死の苦を受け、若し人中に生るれば貧窮・下賤にして、多病にして消瘦せ、鼻齆ぎて膿み爛れ、除厠の[九]家に生れ、或ひは僧中に生れて殘食を乞ひ求め、以て自ら命を濟ふ。餘業の因緣にて是の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、魔羅食鬘餓鬼を觀る。何の業を以て其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、前世の時を以て佛の花鬘を盜み、及び尊重なる師長の其の花鬘を盜みて、淨潔なるを以て用つて自ら莊嚴り、惡心を以てせず、其の心貪嫉にして、身壞れ命終らば或ひは佛塔に生れ、或ひは天祀に生れ、而も神力有り、若し人の忿諍

【九】除厠の家。不淨の處を掃除することを渡世とする家。

の食は悉く食するを得ず、常に飢渴に患み、其の身を焚燒かれて火の林を燒くが如きも能く救ふ者無く、面色皺みて黑く、淚流れて下り、手脚は破裂し、頭髮面を覆ひ、身色惡む可くして猶し黑雲の如く、辛酸に悲叫びて、頌を說きて曰く。

施さずんば則ち報無く、施す事無くんば果も亦無し、燈無くしては明の無きが如く、施さずんば樂報無し。

盲人にして目無きが如きは、見る所有る能はず、施さゞるも亦是の如くにして、來世に樂報無し。

若しは餓鬼道に生れ、人中常に貧窮しく、流轉して苦惱を受くるは、嫉妬の因緣の故なり。

施さずんば則ち報無く、業を作らば終に失はずして、自らの業にて果報を得、衆生は業に依りて食ふ。

我れ惡業の爲に燒かれ、生れて餓鬼中に在り、此の大飢渴を受け、猛火は常に熾に燃ゆ。

何時か飢渴を離れ、何時か安樂を得、受くる苦の極熱惱より、何時か解脫するを得ん。

道と非道とを識らず、善業の果を知らざりしより、飢渴は火の燃ゆるが如く、是の如くに苦惱を受く。

亂れし髮は面目を覆ひ、人の能く救護ふ無く、脈現はれて網縛の如くにして、苦に逼らるゝも命は盡きず。

惘惶てゝ曠野を行き、常に諸の苦惱を受け、孤獨にして救護無く、具に諸の辛苦を受く。

是の如くに悕望餓鬼は呻吟して奔走し、處處に逃遁す。比丘、觀已りて是の如くに思惟すらく、『生死は熾に燃え、欲界增上せりと』。是の如き餓鬼は、若しは其の種姓の或る時供を設けて亡者を祭祀らば、得て之れを食ひて以て身命を濟ひ、唯此れのみを食ふを得て、餘の一切の食は悉く食ふ

を行はしめ、見て隨喜を作し、作し已りて悔いず、是の如きの惡業にて、身壞れ命終りて食水餓鬼道中に生れしなり。常に飢渇に患み、其の身を焚燒かれて曠野・嶮難の處を走り、惘惶て、水を求むるも困しくして得る能はず、其の身の狀貌の惡む可きこと、焦けたる鹵地の如く、身は破裂し壞れ、體を擧げて熾に燃え、長髮面を覆ひて目に見る所無し。飢渇に身を燒かれて走りて河邊に趣き、若し人の河を渡りて脚下に遺落せし餘水の泥垢の垂滯を、速疾かに接取して以て自ら命を活かし、若しは餘の人有りて河の側に在り、水を掬ひて命の父母に過ぎたるに施し、則ち少分を得て、是の因緣を以て命は存立することを得。若し自ら水を取らば、水を守れる諸の鬼は杖を以て撾打ち、身の皮剝脫て苦痛忍び難く、哀叫き、悲嘷びて河側を走る。惡業を作して自らの身を誑けるを以て、業の繫は盡きずして、故に死せざら使め、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、猶脫るゝを得ず、業盡くれば脫るゝを得、此れ從り命終りて、業風に吹かれて生死に流轉し、人の身を得難きこと猶し海龜の浮木、孔に遇ふが如く、若し人中に生るれば邊地に生れ、貧窮にして困厄あり、林樹有ること無く、水漿無き處に依りて止住し、常に焦渇に患み、恒に熱病に困み、晝夜常に渇く。餘業を以ての故に是の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、諸の餓鬼の阿賒迦と名くる有るを見る。何の業を以て其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、嫉妬と惡貪にて自ら其の心を覆へし、他の善人を見、因りて少物を得るに、賣買の價直は道理を以てせず、欺誑きて物を取り、作し已りて隨喜し、悔心を生ぜず、亦他人に敎へて此の惡を作さしめ、布施を行はず、福德を修めず、禁戒を持せず、心に誠信無く、正法に順ぜず、其の心麁獷くして調伏ふ可からず、善友に親まず、常に嫉妬を懷きて、是の如き惡人の、身壞れ命終り、悕望餓鬼の中に墮ちたるなり。若しは諸の世人の、亡父母の先靈の爲に祀を設くるに、此の如き餓鬼は得て之れを食ひ、餘の一切

んが故に不淨の法を說き、說きて殺生せば天福を生ずるを得と言ひ、强力にして財を奪ふも罪報無しと言ひ、女を以て人に適がしむれば大福德を得、一牛王を放たば亦復是の如し、と。是の如き等の不淨の法を以て人の爲に宣說し、財を得て自供せるも布施を行はず、藏を擧げて積聚み、是の人、此の妬嫉の心を覆へせるを以て、命終りて惡道に墮ち、食法餓鬼の身を受けたるなり。是の人命を尋ぎて五百歲を經、日月の脩短きは亦上に說くが如く、嶮難なる處に於て、東西に馳走して飮食を求索め、飢渴身を燒くも能く救ふ者無く、猶し乾ける木の如くに火の燒く所と爲り、頭髮は蓬亂れ身の毛甚だ長く、身體羸瘦て脈は羅網の如く、脂肉消盡せて皮骨相ひ裹み、其の身は長大にして、堅勁り、麁陋くして、爪甲長く利し。惡業に誑かれ、皺面・深眼にして、淚流れて雨の若く、身體の黧黮きこと猶し黑雲の如く、一切の身分は惡虫に唼食れ、蚊虻・黑虫は毛孔從り入りて其の身の肉を食む。慞惶れ奔走りて若しは僧寺に至るに、或ひは人有りて來り、衆僧の中に於て二種の施を行ひ、此の施に因りて上座の說法あり、乃及び餘の人の說法を讚歎せば、此の鬼、是れに因りて命を得力を得、命は存立することを得。乃至惡業未だ盡きず壞れず朽ちずんば、終に脫るゝを得ず、若し業盡くれば脫るゝを得、此れ從り命終らば、前世の時に種種の心にて種種の業を造れるを以て處處に生を受け、人の身を得難きこと猶し海龜の浮木、孔に遇ふが如く、若し人中に生るゝも、常に天の祀祠を守る婆羅門にして、羊を殺して天を祀り、呪龍師を作し、自在を得ず、常に他の人に依り、乞ひ求めて自活し、惡業の因緣にて還りて地獄に墮つ、餘業を以ての故なり。

　復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、水を食ふ諸の餓鬼等を觀る。何の業を以て其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て諸の餓鬼を知るに、前身の時に於て惡貪心を覆ひ、麴を釀して酒を酤れるに、世間を欺誑きて水灰汁を加へ、或ひは蚓、蛾を沈めて以て愚人を惑はし布施を行はず、福德を修めず、禁戒を持せず、正法を聽かず、正法を行はず、復他人に敎へて惡貪

穢にして惡む可く、樂みて不善を行はしめ、若し出生するを得ば短命にして多難あり、王難にて繋縛されて牢獄の苦を受け、飢渴にて飢死す。餘業を以ての故に是の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、氣を食ふ諸の餓鬼等を觀る。何の業を以て其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、前世の時に於て多く美食を食ひ、自ら食噉ふも妻子及び餘の眷屬に施さず、妻子は但其の香氣を嗅ぐことを得て、其の味を知らず、妻子の前に於て獨り之れを食ひ、慳嫉を以ての故に同業の眷屬に施與せず、亦他人に妻子に給せざることを敎へて隨喜の心を起さしめ、數斯の過を造りて改悔せず、慚愧を生ぜずして、是の如き惡人の、身壞れ命終りて食氣餓鬼の中に生れしなり。旣に生れし後は、飢渴に身を燒かれて處處に奔走り、呻吟き、嘷叫び、悲泣み、愁毒へ、唯塔廟を恃み、及以び天を祀れる有信の人の諸の供養を設くるに、其の香氣に因り、及び餘の氣を嗅ぎて、以て自ら命を活かす。復氣を嗅ぐ諸の餓鬼等有り。諸の世人の多病の因緣を以て、水邊・林中・巷陌・交道に諸の祭具を設くれば、斯の香氣に因りて、以て自ら命を活かす。是の如き氣を食ふ諸の餓鬼等に無量の苦惱あり、惡業盡きずんば、故に死せざら使め、乃至惡業盡きず壞れず朽ちざれば、故に脫るゝを得ず、業盡くれば脫るゝを得、此れ從り命終りて、業に隨ひて流轉して生死の苦を受け、人の身を得難きこと猶し海龜の浮木、孔に遇ふが如く、若し人中に生るゝも貧窮にして病多く、身體臭穢なり。餘業を以ての故に是の如き報を受く。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼世間を觀、彼れ聞慧を以て、法を食ふ諸の餓鬼等を觀る。法の因緣を以て命をして存立せしめ、而も勢力有り。何の業を以ての故に其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て此の餓鬼を觀るに、人中の時に於て性として貪嫉多く、身命を活かさんが爲、財利を求めんが爲に人と說法するも、心に敬重せず、戒を犯し信無く、諸の衆生を調伏することを爲さゞら

を生ぜず、心に隨喜を生じ、復他人に敎へ、既に惡業を作して初め改悔せざるに、是の如き惡人は、身壞れ命終らば無食餓鬼の中に生る。若しは男若しは女の其の中に生るれば、飢渴の火增長して熾に燃ゆること、山の濬[八]水に涌く波の力の如く、腹中に火起り、其の身を焚燒きて遺餘無く、滅し已れば復生じ、生じ已れば復燒き、二種の苦の其の身を焚燒くこと有り。一には飢渴、二には火の燒くなり。其の人、苦に逼られて嘷叫び、悲惱み、四方に馳走するも、自業の惡果は不可思議にして、其の人是の如く內外の苦を受け、一切の身分は業火に燒かれ、身の內より火を出して自ら其の體を焚くこと、譬へば大樹の內空に乾燥けるに、若し人の火を投じて之れを燒かば熾に燃ゆるが如く、此の鬼の燒を被ること亦復是の如くにして、遍き身は皆燃え、哀叫み、悲哭けば口中より火出で、二の焰俱に起りて其の身を焚燒く。慞惶れて道を求むれば地に棘刺を生じ、皆悉く火燃えて其の兩足を貫き、苦痛忍び難く、哀嘷み、悲叫けば火は其の舌を燒き、皆悉く融爛けしめて凝酥を燒くが如く、滅し已れば復生じ、惡業を以ての故に、奔走りて水を求めて諸の池、流泉の源なる諸の水に至るに、水は即ち枯竭す。其の人、惡業にて、林中の遊戲する處に至り、若しは高原に在り、若しは陂澤中、顚倒の見の故に但一切は大火の猛焰なりと見、山地の樹木の悉く熾に燃ゆるを見て、諸の水に往趣き、諸の水邊を見るに、水を守れる諸の鬼は手に器杖を執り、逆へて其の頭を打ち、大苦惱を受けしむ。皆前世の貪嫉の心なる怨の誑惑する所に由るなり。壽命長遠にして五百歲を經ること亦上に說くが如く、是の如く惡業にて常に食ふ所無く、惡業盡きざれば、故に死せざら使め、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、若し業盡くれば脫るゝを得、此れ從り命終りて、惡業に吹かれ、業に隨ひ流轉して生死の苦を受け、人の身を得難きこと猶し海龜の浮木・孔に遇ふが如く、若し人中に生るれば、母胎に處る時、母は食する能はず、母の身の色をして憔悴して醜惡なら令め、殺生の業の故に胞胎の傷にて墮ち、設ひ胎夭せざるも、母の身體をして臭

【八】濬水。深い水。深淵。

破れず壞れずんば、終に脫るゝを得ずして、食吐餓鬼の中に在りて常に嘔吐を求むるも、困しくして得る能はず、此れ從り命終らば畜生中に生れ、亦常に吐を食ひ、飢渴の苦を受け、畜生中に死すれば人中に生るゝも、餘業の因緣にて常に飢渴に患み、諸の巷陌に於て常に世人の棄つる所の殘食を拾ひ、或ひは沙門及び、婆羅門從り乞ひ求めて自活す。餘業を以ての故に斯の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて諸の餓鬼を觀る。彼れ聞慧を以て此の衆生を知るに、前世の時に於て多く貪嫉を行ひ、常に慳惜を懷きて布施を行はず、不淨の食を以て諸の沙門及び婆羅門に施し、是の如き沙門及び婆羅門の、不淨なるを知らずして之れを食はゞ、此の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡道に墮ち、食糞餓鬼の中に生る。壽命の長短は上に說く所の如く、亦五百歲にして、飢渴身を燒き、諸の糞穢を求むるも、猶得可からず、業力を以ての故に常に心に從はずして、不淨の處に蛆虫・糞屎を馳走して求索むるも、常に充足せず、命盡きざるに至り常に苦惱を受け、乃至惡業盡きず壞れず朽ちずんば、故に脫るゝを得ず、若し惡業盡くれば、此れ從り命終り、業に隨ひ流轉して生死の苦を受け、人の身を得難きこと猶し海龜の浮木、孔に遇ふが如く、遍く惡身を受け、若し人中に生るゝも貧窮にして病多く、常に飢渴に困み、恒に餬飡を乞ひて以て自ら命を活かし、無量の衰惡は以て嚴飾を爲し、其の身破裂して不淨の臭穢あり、人の惡み賤む所、口氣腥臊く、其の齒は黧黑し。餘業の因緣にて是の如き報を受くるなり。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼の慳嫉の地處を觀る。一切の餓鬼は慳嫉を本と爲す。是の諸の衆生は、何の業を以て無食餓鬼の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て諸の餓鬼を知るに、前身の時慳嫉を以ての故に自ら其の心を覆へし、妄語にて欺誑き、自ら强力なるを恃みて、良善なるを枉誣して之れを囹圄に繫ぎ、人に糧食を禁じて其れをして死に致らしめ、殺し已りて快心ありて、悔恨

等ありて、是の如く身心に種種の苦を受く。餓鬼道の一日一夜は、人間の日月歳數に比ぶるに、十年を經、是の如くに命を受けて五百歳に滿ち、命亦定らずして、若しは男若しは女は、生れて其の中に在り。又第二の業にて、此の針口餓鬼の中に墮つ。若しは丈夫有り、其の婦人に勅して沙門・婆羅門に食を施すことを命ずるに、其の婦慳惜みて實は有るも無しと言ひ、其の夫に語りて言はく『家に有する所無し。當に何等を以て沙門及び諸の道士に施與すべきや』と。是の如き婦人は夫を誑き、財を悋みて布施せずして、身壞れ命終らば針口餓鬼の中に墮つ。其の積習して多く惡業を作れるに由り、是の故に婦人は多く餓鬼道中に生る。何を以ての故に、女人は貪欲にして嫉妬多きが故に、丈夫に及ばず、女人は小心・輕心にして丈夫に及ばず、是の因緣を以て餓鬼中に生る。乃至嫉妬の惡業失はず壞れず朽ちずんば、餓鬼中より脫るゝを得ず、業盡くれば脫るゝを得、此れ從り命終らば畜生中に生れ、畜生中に於て[七]遮吒迦鳥の身を受け、常に飢渴に惱みて大苦惱を受け、畜生中に死すれば人中に生るゝも、餘業を以ての故に常に飢渴に困み、苦を受けて難窮し、常に行きて乞食し、以て自ら存濟す、餘業を以ての故に斯の如き報を受くるなり。

又次に、比丘、業の果報を知りて諸の餓鬼を觀、彼れ聞慧を以て、吐を食ふ諸の餓鬼等を觀る。是の衆生は何の業を以て食吐餓鬼の身を受くるや。彼れ聞慧を以て是の衆生を知るに、前世の時、身は婦人を爲し、其の夫を誑惑して自ら美食を噉ひ、心に慳嫉を懷き、其の心を憎惡して施與さず、或ひは丈夫有り、妻の異心無きに便ち妬意を起し、獨り美食を食ひ、妻子に施さずして、是の因緣を以て槃多餓鬼の中に墮ちたるなり。餓鬼の身を受けては常に飢渴の爲に其の身を焚燒かれ、其の身は廣大にして長さ半由旬、曠野中に於て、四に奔疾走りて漿水を求覓め、高聲にて嘷叫びて、飢渴を唱言ふ。此の衆生は前世の時、財物・無畏を以て布施せず、法施を行はざるを以て、是の因緣を以て餓鬼中に生れ、壽命長遠なること前に說く所の如く、五百歳を經、乃至惡業未だ盡きず、

【七】遮吒迦(Catakn)。註に依るに、此の鳥唯天雨のみを食し、仰ぎて口に天の雨水を承けて之れを飲み、餘の水を食するを得ず、と。

て、業の果報を知れり。聞慧を以て觀て、云何んが迦婆離鑊身餓鬼を觀るや。其の身長大にして人の兩倍に過ぎ、面目・手足・穿穴有ること無くして猶し鑊の脚の如く、熱火中に滿ち、其の身を焚熱することと火の林を燒くが如くにして、飢渇の熱惱あり、時に報に縛られては人の能く救ふ無く、歸する無く怙む無く、愁憂・苦惱を人の救護する無し。何の業を以て彼處に生るゝや。卽ち聞慧を以て此の衆生を觀るに、前世の時に於て、財を貪るを以ての故に他の爲に屠殺し、雇を受けて殺生し脂肉を臠割きて心に悲愍無く、貪心にて殺生し、殺し已りて隨喜し、惡業を造集して心悔いざれば、是の如きの惡人は身壞れ命終りて惡處に墮ち、迦婆離餓鬼の身を受け、地下五百由旬に在り、此れ從り命終らば忽然として卽ち大怖黑闇の處に往生し、既に生るゝの後、上下の二山一時に倶に合ひ、其の身を壓笮して大苦惱を受けしめ、身增して轉た大きく、一由旬に滿ち、飢渇の爲に其の身を焚燒せられ、餓鬼道中五百歲を經。餓鬼道中の一日一夜は此の閻浮提中の日月の歲數にて十年を經、是の如き五百歲を名けて一生と爲すも、少しく出で多く減ずることありて、命亦定まらず。又第二の業にて餓鬼中に墮つ。若しは衆生有り、他の寄する物を受くるも、抵拒て還さずんば彼處に生れ資財を施さず、法を以て施さず、無畏を以て施さず、若しは男若しは女の、是の如き三種の布施を行はずして常に慳嫉を懷かば、是の因緣を以て餓鬼中に生る。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼を觀、彼れ聞慧を以て、針口餓鬼等を觀る。何等の業を以て其の中に生るゝや。彼れ聞慧を以て、蘇支目佉餓鬼を觀て此の衆生を知るに、前世の時に於て、財を以て人を雇ひて殺戮を行はしめ、慳貪・嫉妬にして布施を行はず、衣食を施さず、無畏を施さず、法を以て施さずして、是の如き惡人の、身壞れ命終りて針口餓鬼の身を受けたるなり。鬼の身を受け已らば、自業に誑かれて、受くる所の身の口は針の孔の如く、腹は大山の如く、常に憂愁を懷き、飢渇の火の爲に其の身を焚燒かれて諸の內苦を受け、外に寒熱有り、蚊・虻・惡虫・熱病の惱

餓鬼、二十一には迦摩・欲色餓鬼、二十二には三牟陀羅提婆・海渚餓鬼、二十三には閻羅王使・執杖餓鬼、二十四には婆羅婆叉・食小兒餓鬼、二十五には烏殊婆叉・食人精氣餓鬼、二十六には婆羅門・羅刹餓鬼、二十七には君茶火爐・燒餓鬼、二十八には阿輸婆囉他・不淨巷陌餓鬼、二十九には婆移婆叉・食風餓鬼、三十には鴦伽囉婆叉・食火炭餓鬼、三十一には毘沙婆叉・食毒餓鬼、三十二には阿吒毘・曠野餓鬼、三十三には賒摩舍羅・塚間住食熱灰土餓鬼、三十四には毘利差・樹中住餓鬼、三十五には遮多波他・四交道餓鬼、三十六には魔羅伽耶・殺身餓鬼にして、是れを三十六種の餓鬼を略說すと爲す。廣く說かば則ち無量なり。重心にて惡を作り、業行各異り、種種の慳心あり、布施を行はずして、貪心の因緣にて種種の身を受く。

復次に、比丘、業の果報を知りて、諸の餓鬼の大飢渴を受けて自ら其の身を燒くを觀る。前世の時に多く妬嫉を起し、惡心にて破壞し、廣く三業なる身・口・意の惡、十不善の業を造りて餓鬼中に生れ、其の人、十種の不善の業道の因緣を以て一切の苦を得、惡業を以ての故に餓鬼中に生れ、惡業に索かるゝが故に、業を本と爲すが故に餓鬼中に入り、彼れの縛る所と爲り、因業を以ての故に生死を脫るゝを得ず。無始より來、獼猴の心の爲に、躁擾く輕く轉り、嶮難・障礙の處を行き、種種の羅網・枝條に攀緣り、速疾に往返して、生死の山に住み巖窟に睡り、所行の處は覺知す可からず。心の獼猴を觀るに、速疾にして停らずんば、應に是の如く初に心を調伏すべし。若し心調はずんば、能く衆生を將ゐて大怖處に至り、大苦惱を得しめ、是の如く心の怨は能く衆生をして流轉せしむ。比丘、是の如く思惟して、心已に生死中に於て欲穢を離るゝを得、生死の苦を厭ひて是の如くに思惟すらく『一切の衆生に皆悉く苦惱あり』と。是の如くに比丘、餓鬼の中を分別し思惟するに、無量種有り、是の如く思惟し已り、一一を分別して諸の業報を觀るに、無因生に非ず、苦樂・好醜・淨と不淨・善惡・貴賤・上下・生滅、一切の雜類は自然生に非ず、比丘、是の如くに諸の餓鬼を觀

を知る。心の貪と嫉とに由りて人を欺誑き、貪り惜みて積聚ね、長富を欲望して廣く衆惡を積み、惡貪に覆へされて布施を行はず、沙門・婆羅門及び諸の病瘦・盲冥・貧窮なるに施さず、來りて乞ひ求むる有るも、心に慳嫉を生じて施與を肯はず、功德を作さず、禁戒を持たずして、此世・他世利無く衰惱あり、妻子・奴婢に悋惜みて與へず、慳嫉にて自らを誑くに、是の因緣を以て餓鬼中に墮つ。女人は多く餓鬼中に生る。何を以ての故に。女人の性は心に多く嫉妬あり、丈夫の未だ隨はざるに、便ち妬意を起し、是の因緣を以て、女人は多く餓鬼中に生る。

復次に、比丘、業の果報を知りて餓鬼道を觀る。餓鬼の住する所は、何等の處に在りや。是の觀を作し已り、卽ち聞慧を以て諸の餓鬼を觀るに、略二種有り。何等を二と爲す。一には人中に住し二には餓鬼世界に住するなり。是の人中の鬼は、若し人夜行かば、則ち見る者有り。餓鬼世界は閻浮提の下五百由旬に住し、長さ三萬六千由旬、乃餘の餓鬼なる惡道の眷屬は、其の數無量にして、惡業甚だ多く、閻浮提に住して近き有り、遠き有り。

復次に、比丘、業の果報を知りて諸の餓鬼を觀るに、無量種有り。彼れ聞慧を以て、略餓鬼の三十六種を觀る。一切の餓鬼は皆慳貪、嫉妬の因緣の爲に彼處に生れ、種種の心を以て種種の業を造り、種種の行を行ひ、種種の住處にあり、種種の飢渴にて自ら其の身を燒く。是の如くに三十六種を略說せり。何等を三十六種と爲すや。一には迦婆離・鑊身餓鬼、二には甦支目佉・針口餓鬼、三には槃多婆叉・食吐餓鬼、四には毘師咃・食糞餓鬼、五には阿婆叉・無食餓鬼、六には揵陀・食氣餓鬼、七には達摩婆叉・食〔六〕法餓鬼、八には婆利藍・食水餓鬼、九には阿賒迦・悕望餓鬼、十には唌吒・食唾餓鬼、十一には摩羅婆叉・食鬘餓鬼、十二には囉訖吒・食血餓鬼、十三には瞢娑婆叉・食肉餓鬼、十四には蘇揵陀・食香烟餓鬼、十五には阿毘遮羅・疾行餓鬼、十六には蚩陀羅・伺便餓鬼、十七には波多羅・地下餓鬼、十八には矣利提・神通餓鬼、十九には闍婆隸・熾燃餓鬼、二十には蚩陀羅・伺嬰兒便

【六】法の字は元本・明本に依れり。別本吐に作る。

ことを離れ、永く諸の一切の憂熱を斷つ。
若し人、道と非道を知り、有無中に於て善く思惟し、能善く學を修め慈悲の心あらば、則ち第一最勝の道を得ん。
若し衆生有りて濁亂ならず、心は常に清淨にして所染無く、能く不善の諸の惡法を離るれば、應に知るべし是の人は解脫を得ん。
若し人有りて能く正道を行ひ、正念の大力堅牢の故に、常に樂みて諸の有を遠離せば、是の人解脫せんこと必ず疑無し。
若し人能く有愛を斷ち、有愛を悕望する心を起さずんば、是の人生・老・死苦に於て、微細の著をも生ぜざらん。
若しは愚人の諸業を作ること有り、諸の惡を作し已りて轉た增長するも、諸の欲は毒の如く親しむ可からずんば、智有る人は應に捨離すべし。
若し人諸の欲を捨離し、心常に樂みて解脫の果を求むれば、是の人不善を滅して餘無きこと、日光の照して闇冥を除くが如し。
是の如き善法に親近する者は、常に一切の諸の不善を捨て、能善く淨と不淨を思惟す、是の如くに略說せり汝當に知るべし。

是の如くに比丘、當に此世・他世を念じて、智慧を以て利益すべく、當に智慧を以て一切世間を饒益すべし。地獄の苦を觀、一切の衆生に於て思惟し憶念して慈愍の心を起し、慈悲を修行し、一切地獄の怖畏と苦惱に逼迫らるゝ處に於て、具に觀察し已りて業の果報を知り、業報を知り已りて厭離の心を生じ、復是の觀を作す『此の諸の衆生は云何んが種種なる惡道の大怖畏處に沒し、生死の曠野の中を行くや』と。是の如くに比丘、是の思惟を作して慈悲の心を生じ、餓鬼道の嶮惡の業

無始より久しく集めし因緣の故なり。

諸天は放逸にして自ら心を壞り、人中追求して諸の苦を受け、餓鬼は常に飢渴の爲に燒かれ、畜生は迭に共に相ひ食啖ふ。

地獄の中に大猛火あり、餓鬼道の中は癡に惱まされ、一切衆生の生死中に、微少毫の樂も得可からず。

諸の苦の中に於て樂想を生じて、衆生は癡に惑ひ惡に誑かる、正道を教示する者有ること無くんば、此の苦中より脱るゝを得ず。

若しは善法を遠離すること有り、常に妄語を行ひて誠信無く、禪定の法を修習する能はずんば長く生死に淪みて諸の苦を受く。

諸佛如來の說きたまふ所の法は、若しは今現在・未來世・父母及び親族に過ぎ、常に衆生に隨ひて離れず。

三聚の類の衆生等は、三種の過惡常に自在にして、常に三界に行きて止息せず、三種の受を以て伴侶と爲す。

三業は衆生を迷惑はし、行きて三惡の嶮難道に趣かしめ、三有の行に於て常に愛樂しては、三有の法中を輪轉して行く。

若し衆生有りて三寶に歸し、自在に三菩提を修行し、三種の見を斷除し遠離せば、是の如き人は衆苦を離れん。

三時中に於て正行を樂み、如實に觀て三種の老を見、飲食中に於て止足を知らば、是の人則ち能く憂惱を離れん。

貪・瞋・癡なる三種の聚を過ぎ、善く思ひて三業に惡を造らざる、是の如きの行人は苦を生ずる

卷の第十六

餓鬼品第四之一

復次に、比丘、業の果報を知りて遍く一切地獄の苦海を觀るに、愛の瀑水の洄澓の爲に沒せられ大地獄人なる〔一〕富蘭那・末迦離等・倶迦離・提婆達多なる是の如き等の魚は、大摩竭魚の呑食する所と爲る。活地獄從り乃ち阿鼻地獄に至り、其の獄廣大にして、〔二〕沃焦・深水あり、及び餘の大苦海中、提彌魚・提彌鯢羅魚・那迦羅魚・〔三〕鳩毘羅魚・失收魔羅魚・龜・鼈・黿・鼉ありて、旋流洄澓き、貪欲・瞋恚・愚癡の風力の飄鼓てる所、水浪・濤波洄澓きて相ひ注ぎ、時に水沫の如し。大苦惱を受けて涙は雨の如くに墮ち、啼哭き、悲泣み、呻吟き、悲嘷び、辛酸に大叫びては猶し濤波の如く、愁思の波覆へり、惡業の龍の力は大苦雨を雨らして諸の地獄に滿つ。阿鼻地獄は〔四〕無間・極深にして、其の火の猛焰は、劫火の起りて燒く大劫の時の如くに、〔五〕斫迦婆羅山に滿つ。是れを大地獄の苦惱の大海と爲し、劣弱の人にして善力有る無きは、能く度る者無し。是の如くに比丘、大苦を觀已りて、心に厭離す。伽他頌にて曰く。

一切の衆生は癡に欺かれ、愛染の縛る所と爲り、將ゐられて世間の嶮難の道にして、老死の惡濟なる恐怖の處に至る。
三處より退き已りて地獄に入り、地獄從り出でて天上に生れ、三處の命終らば畜生に墮ち、復彼れ從り終に餓鬼に墮つ。
自業の惡行に迷はされ、諸欲に自在に使はれし衆生は、癡の羂網の纏縛る所と爲りて、洄澓く三界の海に流轉す。
無始より久しく大苦惱を受け、種種に衆生に大苦惱あるも、生死を厭離する心有ること無きは、

【一】富蘭那等は第十四卷の註を見よ。猶、末迦離は十四卷の摩婆迦離に同じく、倶迦離は居迦離に同じ。
【二】沃焦。大海に石あり、焦と名け、大河の絕えず海に歸するも海水增すことなきは、この石の海水を竭すに依ると云ふ。
【三】鳩毘羅(Kumbira)。又倶尾羅、鳩鞞羅等に作る。蛟龍と譯す。他の提彌魚等は、前に數數出づ。
【四】無間。阿鼻地獄は苦を受けて間無きを云へるなり。
【五】斫迦婆羅(Cakravāḍa)。又爍迦羅、斫迦羅等に作る。鐵圍山と譯す。卽ち中に須彌等の七山八海を擁して一小界を區劃する鐵山のこと。

是の如き言を説かく『閻浮提中の某國、某村の某善男子にして、某姓、某名なるは、鬚髪を剃除し、法衣を被服し、正信にて出家し、正行・正道・正見にして邪ならず、出世道を行き、業報の法を知りて十三地を得、盡く一切地獄の邊底を見て無間の苦を知れり』と。彼の地の夜叉は是の如く是の如くに具足して虚空夜叉に傳聞し、虚空夜叉は四大王に向ひて、前に說く所の如く、彼の四大王は四天王に向ひて亦是の如くに說き、彼の四天王の三十三天に向ひて說くこと是の如く、三十三天は夜摩天に向ひて亦是の如くに說き、彼の夜摩天は兜率天に向ひて亦是の如くに說き、彼の兜率天は化樂天に向ひて亦是の如くに說き、彼の化樂天は第六天に向ひて亦是の如くに說き、次第に乃至少光天に向ひて是の如くに說きて言はく『天よ、今當に聽くべく、心に當に正しく念ずべし。閻浮提中の某國、某村の是の如き種姓なる某善男子は、鬚髪を剃除し、法衣を被服し、正信にて出家し、彼れ正しく法を行ひて曾て休息せず、心は魔の境界に住するを樂まず、欲染の色・聲・香・味・觸の境界を樂まずして十三地を得、八大地獄の一切の業報を皆悉く盡知し、彼の比丘、是の如く知り已りて、無明黑闇の生死を厭離せり。天よ、今應に知るべし。魔分を損減し、正法の朋を長せり』と。彼の少光天は是の如くに聞き已りて極めて大いに歡喜し、彼處の諸天も正法を聞くことを得て是の如くに歡喜し、未だ佛法を聞かざりし諸天は、聞き已りて猶尙歡喜せり。何ぞ況んや信心し隨順して行へる人の諦かに正士を見、彼の比丘の業報の法を知りて正法を増長せるを聞きて、歡喜せざらんや。

【一五】　正士。菩薩のこと。

亦無く、[三]傍廂にも亦無く、麁細倶に無く、近遠に皆無く、更に攝せらるゝ無く、一切見ず、彼の比丘是の如くに思惟し、道を見て思惟して、盡邊を觀察するに、八大地獄の各十六處の眷屬の處なる是の如き盡邊は、惡業の地にして、一切愚癡の凡夫は此の地を作集し、惡業を作せし人の證を受くる處なり。八大地獄幷に眷屬の處ありて、我れ更に異なる大地獄を見ず、更に異業の一種の生處無く、更に惡處無し。此の如き阿鼻大地獄處は、何處の衆生も大苦惱を得、此の如き阿鼻大地獄處、毛起地獄の、千分中に於て一分をも說かず。何を以ての故に。說き盡す可からず、聽くを得可からず、譬喩ふ可からず、地獄の苦惱は是の如く極惡、是の如く堅鞕、是の如き大苦にして、是の如く耐え叵く、是の如き苦惱は異なるものゝ相似る無く、苦は喩ふ可からず。何を以ての故に。人の能く說く無く、人の能く聽く無く、若し人有りて說き、人有りて聽かば、是の如き人は血を吐きて死し、此の大地獄は愛樂す可からず、憶念す可からず、彼の地獄の苦は、苦中の苦たり。彼の比丘、是の如くに大地獄を觀察し已り、則ち一切の生死の苦惱に於て心に厭離を生じ、無常・苦・空・無我を觀察して、一切法は皆悉く無常なりと見、聖諦を思惟し、則ち生死に於て重ねて厭離を生じ、生死を毀呰りて、是の如き生死を最も鄙惡と爲せり。彼の比丘、是の如くに見已りて是の如き心を生ずらく『此の諸の衆生は天眼有ること無く、過去を知らず、正法を聞くことを離れ、復地獄の極苦惱處・第一の苦處・第一の惡處に於て復更に生じ、此の是の如き等の愚癡の凡夫は、愛の羂に縛られて、無始の生死あり』と。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して知るに、彼の比丘、次第に一切の惡處を觀察し、活地獄從り次第に乃至阿鼻地獄の彼の業果報の一切を悉く知りて、十三地を得、魔界を樂まずして、愛は自在ならず、愛の縛を脫れんが爲に魔界に任せず、無常を喜樂し、彼の比丘、使結を斷ちて涅槃の城に入らんと欲す。彼の地の夜叉は其の精進を見て心に歡喜を生じ、轉た復虛空夜叉に上聞して

【三】傍廂。平面の上の周圍の謂ひか。廂(わたどの、ひさし)はこの場合輕い添字ならん。

無始の生死より來、皆因緣にて生じ、業の如くに相似して見れ、法の相似せざるは無し。

若し愛の業を作し、衆生は業因にて生るゝを知らば、彼の人業果を知るが故に、寂靜の人と名く。

自體に惡を作す人は、常に癡の羂の爲に縛らる、已に惡業を作し竟れるに、云何んが心に悔を生ずるや。

惡は常に惡に依止し、法は常に法に依止す、黠慧き人は倶に捨つとは、實を見し者の說く所なり。

若し道と非道とに迷はゞ、則ち佛法に迷ひて、彼れの寂靜を得ざること、日中に闇無きが如し。

若し人因緣に迷はゞ、法と非法とに迷はん、(かくして)汝[二]は惡地獄なる、極苦惱の處に到れるなり。

閻魔羅人は相應せる語に因りて之れを呵責し已りて、復戟鉾を執り、瞋怒れる心を以て、復無量種種の器杖を以て、地獄人を縛りて、無量百千[三]鉢頭摩數なる長遠の時に於て斫り刺し打ち築き、自業の所作にて是の如くに苦を受け、乃至作集せる惡不善の業の未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已れば、七百世に於て食糞屎餓鬼の中に生る。是れ彼の惡業の餘殘の勢力にして、若し彼處より脫るれば五百世に於て畜生中に生れて蚯蚓等を作す、彼の業勢力の餘殘の果報なり。彼處より脫れ已れば若しは人中同業の處に生れて邊地に生れ、身體黑色なる漁人の屬にして、下濕の處・水田にありて食無く、飮食は得難くして、水中の虫を食す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて阿鼻大地獄處を觀察するに、更に第十七處有るを見ず、下向にも

【二】汝の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依る。原本法に作れり。

【三】鉢頭摩數(Padma)。兆以上の大數。

汝は愛の毒に醉はされし、一切の癡心の力を以て、正法に於て頑鈍なりき、今者徒に唱喚ぶ。
惡業を見て喜樂し、唯現在の樂を貪れり、惡を作さば初は甜しと雖も、後に則ち火毒の如し。
惡業を作すの人を、一切の人は毀呰り、善を作す者を皆讃ふ、是の如くんば應に惡を捨つべし。
(惡法は)見る者愛樂せず、惡報は苦惱を受け、惡を作さば惡報を得、是の如くんば黠慧きは捨つるなり。
惡を作さば失壞せずして、一切の惡に報有り、惡は皆作すに從りて得、心に因るが故に作すこと有り。
心に由るが故に惡を作し、心に由りて界報有り、一切は皆心の作せるにて、一切皆心に因る。
心は能く衆生を誑き、將ゐ來りて惡處に向ふ、此の地處は惡處にして、最も是れ苦惡の處なり。
心に繫屬する莫かれ、常に應に法行に隨順すべし、法を行へば則ち常に樂あり、惡を行はゞ寂靜ならず。
非法は善果無し、(善果は)顚倒せざるを以て受け、一切種種の果は、因の如くに相似して見る。
果は因と相似、異相は因果に非ず、是の如き無常法は、皆因緣にて生ず。
因無くして果を見るに非ざること、地獄中最も勝れ、因の如くに果は相應して、地獄中に熟煮らる。
作集せし業堅鞕くんば、決定して惡處に行き、業果は相續して縛りて、地獄中に煮熟らる。
若しは懺悔の方便にて、惡業則ち破壞れ、〔一〕不見不愛の果ありとは、實に見し者の說く所なり。
世間の光明に因ること、業因の果を得るが如し、業果は迭に相ひ因れり、一切の法は是の如し。
迭互の因緣を見るに、迭互に自在に行き、相似し隨順して縛るとは、實に見し者の說く所なり。
一切世間の法は、是れ因果無きに非ず、自在等に作さるゝに非ずとは、實に見し者の說く所なり。

【一】不見不愛果。凡夫の邪ならず、又愛欲ならざる結果即ち證りの善果を指すものならん。

普き身に焰燃え、唱喚び號哭く。石に壞らるゝ苦惱ありて、少の樂事の針の孔許の如き攀緣す可き處も無く、是の如き鐵鍱の火は遍くして間無く、是の如き惡觸あり、苦を受けて耐え叵く、是の如き鐵鍱は飢を作し渴を作し、大熾火を作す。是の如き苦を受け、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より乃ち脫るゝを得、彼處より脫れ已らば百千世に於て食腦餓鬼の中に生れ、若し彼處より脫るれば七百世に於て食火畜生の中に生れ、彼處より脫れ已らば若しは人中同業の處に生れ、五百世に於て王の爲に信ぜられず、常に繫がれて獄に在りて、飢渴にて死す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復阿鼻大地獄處を觀る。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて十一焰と名け、是れ彼の地獄の第十六處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、人有りて惡を行ひ、若しは佛像若しは佛塔等、衆僧の寺舍に於て、破壞・拭滅し、佛の畫像を滅し、或ひは復人有りて、佛の弟子に非ず、佛に於て信ぜざるに、而も自ら說きて是れ佛弟子なりと言ひ　過失を求めんが爲に佛法を聽聞して其の便を推求し、聞き已るも法に於て信入を生ぜずして、是の如き毀呰を樂み行ひ多く作すに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終れば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、十一焰處の火中を行きて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の活・黑繩等の七大地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、百倍して更に重く、復勝る者有り。所謂彼處に一千倍の嚴しき惡毒ある蛇有り、彼の蛇多饒くして地獄に普遍く、彼の地獄人中に在りて來去するに、閻魔羅人は手に鐵棒を執り、打ちて疾走せ令め、蛇の齧む所と爲り、復火を執れる有り、極熱にて燒燃ゆ。彼の人是の如く、二種の火に燒かる。謂はく、毒火の燒くと、地獄の火の燒くなり。唱喚びて馳走り、悲號き啼哭くに、唱喚ぶを以ての故に、閻魔羅人は復爲に偈を說き、之れを呵責して言はく。

至作集せし惡不善の業の未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脱るゝを得、彼處を脱ると雖も七百世に於て食血餓鬼の中に生れて唯産血のみを食ひ、若し彼處を脱るれば五百世に於て畜生中に生れて雞・孔雀・鵠鴿等の鳥を作し、彼處より脱れ已れば若しは人中同業の處に生れ、旃陀羅[8]なる屠兒の家に於て生る。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復阿鼻大地獄處を觀察す。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて鐵鍱處と名け、是れ彼の地獄の第十五處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、人有り、輕心・誑心・惡意ありて、儉しき時世に於て比丘を請喚し、是の如き言を作さく『此の年中に於て我が家に夏坐[9]せよ。病藥の須ふる所は我れ皆供給せん。一切憂ふる勿れ、異なる意を生ずる莫かれ』と。彼の諸の比丘、心に皆信を生じ、時世復儉しければ、彼の人を信ずるが故に更に餘に求めず。既に夏坐に赴くに、彼の惡心の人は一切與へずして、驅りて去らしむ。時世儉しきが故に彼の諸の比丘にして、或ひは死する者あり、或ひは比丘の前夏を失ふ者有り、或ひは極めたる飢渴の苦を受くる者有り、或ひは比丘の異國に向ふ者有り。是の如き惡人は比丘を棄捨て、妨礙げ惱亂す。彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終れば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、鐵鍱處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の活・黑繩等の地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、百倍して更に重く、復勝る者有り。所謂、彼處にて地獄罪人は十一焰の聚に周匝を圍遶まれ、常に飢渴に患み、閻魔羅人は數數常に熱せる赤銅汁・熱鐵の塊摶を以て飲ま令め啗は令め、彼の罪人の身は乃ち無量大鉢頭摩・三尒多數・尼余多數に於て常に燒かれ常に煮られ、乾燥きて破壞し、又復更に生ずるに、復勝れる苦有り。閻魔羅人は熱鐵の鍱の、廣さ五由旬、焰火甚だ熾にして、普く一の焰の鬘なるを取り、彼の鐵の鍱を以て其の身體を裹み、一切は爛熟し、

【八】旃陀羅(Caṇḍāla)。屠者、下姓等と譯す。印度四姓の外にありて、屠殺を業とするものを云ふ。

【九】夏坐。安居(Varṣa)のこと。雨期三ヶ月間、印度の僧徒の外出を禁じて坐禪修學するを云ふ。之れを舊譯家は前中後の三期に分ち、新譯家は前後の二期に分つ。後文の前夏とあるは、四月十六日より三十日間の前安居を指すならん。

乃ち脫るゝを得、彼處を脫れると雖も五百世に於て生れて食烟餓鬼の中に在り、惡行身を覆ひて心に苦惱を受け、心亂れて正しからず、若し彼處を脫るれば七百世に於て畜生中に生れて夜行虫と作り、若しは獯狐・兎・梟等の鳥と作り、彼處を脫れ已るに、過去の久遠に人の業有る者は若しは人中同業の處に生れ、雪山中に生れて惡しき飮食を食し、恒常に貧窮にして、三百世に於て夷人中に生る。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復阿鼻大地獄處を觀る。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて臭氣覆と名け、是れ彼の地獄の第十四處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、人有り、邪見の故に、惡心を以て憶念し思惟して瞋心を隨順し、喜樂の意を生じて、僧の田地、或ひは甘蔗の田・園林・果樹、或ひは復衆僧の餘の受用する處に於て、火を放ちて焚燒し、此の如き僧の受用する所の物を燒きて、諸の比丘をして衰損・失壞せしめ、業業普遍く、業を作して究竟め、和合し相應せんに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、彼の地獄の臭氣覆處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等の七大地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、百倍して更に重く、復勝る者有り。所謂彼處に熱焰の網有りて針孔網と名け、熱焰普遍くして地獄中に遍く、惡業の罪人の旣に彼處に生るゝに、閻魔羅人は焰の利き大刀(を執り)、箭を執り之れを射て、驅りて焰の燃えたる針孔網の中に入らしめ、走ることを得る能はず、彼の惡業の人は彼處に繫縛されて脫るゝを得る能はず、彼の網は極めて利くして其の手を削割き、復其の手を削り、一切の身分皆悉く遍く削られて唯骨のみ在ること有り、網の割削くこと已れば閻魔羅人は甘蔗の杖にて打ち、百たび倒れ千たび倒れ、若しは百千たび倒る。彼の惡業の人は惡業に遍く覆れて彼の箭の苦を受け、長久しき時に於て大苦惱を受け、堅鞕しき惡觸あり、受くる所の苦惱は、異なれるものの相似ること無く、彼の地獄中極めて大苦惱を受け、乃

彼處を名けて一切苦施と爲し、是れ彼の地獄の第十三處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、惡心の人有りて顚倒の意を起し　一切智の說をたまふ所の言語・書畫・文字に於て除滅・陰障し　法身を失はしめて、諸の衆生をして佛を信ずるを得ざらしむ。若し正法を聞かば則ち信心を生ずるも　法無きを以ての故に衆生は信ぜず。是の如き心意、是の如きの邪見にて惡業を作集し、垢心・惡心にて若しは他人に教へて隨喜に住せしめ、是の如く作し已りて後復更に作し、惡心意の故に業業普遍く、業を作して究竟め、復彼處に於て作し已りて復作すに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、一切苦旋なる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等の七大地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝る者有り。所謂彼處にて熱沸せる赤銅を其の眼中に置き、二眼に皆滿し、或ひは熱沙の金剛の惡觸あるを以て、其の眼を揩磨り消洋け、碎散さしめ、又復更に生ずるに、生じ已れば復拭ひ、復利き鋸を以て其の手を割截り、截り已れば復生じ、生じ已れば復截り、復焰の鑊に置き、頭面は下に在り、身は鑊の外に在りて是の如くに極めて煮られ、鑊の外たる半身を、利き刀にて割削く。眼を以て法を看て法を滅壞せしが故に是の如き報を受け、手指を以て磨して法を滅壞せしが故に鋸に截らるゝ報を受け、本惡心を以て法を陰滅せしが故に鑊中に在りて坐し、金剛の嘴の鳥ありて心を拔きて食ひ、其の心の汁を飮み、惡心以ての故に是の如き苦を受け、身は鑊の中に坐し、背の分は上に在りて鑊の處に入らず。閻魔羅人は利き斤斧を執り、以て其の皮を斤りて下脫さ使め、嚴熱の灰汁にて之れを灌洗ひ、焰熱の利き針にて遍く其の身を刺し、焰熱の鐵輪疾く轉じて頭に在り、是の如くに苦を受け、若し彼處より脫るれば洋たる地に墮ちて消え、苦は常に斷ぜず、作集せし業の故に地獄中に於て是の如き苦を受け、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾

の如き一の苦を受くる處より若しは脫るゝを得已るも、又復更に勝熱味風に入る。惡觸ありて刀の如く、一切の脈を割き、已に脈を割き已れば之を擧げて上に在らしめ、移して地獄の第二の角の處に向はしむ。彼の惡業の人の既に地獄の第二角に到り已らば、風は億の劍を吹きて罪人の一切の身分を割き、皆悉く散壞りて唯筋脈のみ有り、彼の人是の如く、身は唯筋の縷にして、閻魔羅人は然る後執持へ置きて星鬘風の吹く鑊中に在らしめ、既にして彼れに置かれ已れば足は上に在り、頭面は下に在り、頭面先に入り、彼は復後時にして、熱沸せる赤銅は先ず其の眼を燒き、次いで髑髏を燒き、次いで其の面を燒き、次いで其の齒を燒き、次いで咽喉を燒き、熱せる赤銅汁を咽喉中に置き、一切普く燒かれて唱喚ぶ能はず、聲を出すを得ず、彼の人是の如くに堅鞕しき苦を受く。彼の苦を受け已れば更に復餘の閻魔羅人有り、手に鐵杵を執りて其の頭を打築ち、既に其の頭を築かば一切の身分悉く跳り建ち、頭身倶に跳りて魚の動轉するが如く、久遠時を過ぎて是の如き兩の星鬘地獄の中に在りて煮熟られ、乃至作集せし不善の惡業の未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已れば一千世に於て生れて悕望餓鬼の中に在り、常に苦惱を受け、飮食は得難く、百年中に於て或ひは得、得ず、彼處より脫れ已れば五百世に於て畜生中に生れ、隘迮き處に在り、鹿の身を受けて心常に驚き恐れ、一切の人に於て皆怖畏を生じ、嶮岸中の人を離れし處に於て、常に怖畏るゝが故に羸瘦せて色無く、身體乾き枯れ、惡業の力の故に獵人に殺さる。既に脫るゝを得已れば人中同業の處に生れ、則ち常に生を治めて身は導主を爲すも、飢え渇きて常に乏しく、一切の時行き、常に他に繋屬して他の使ふ所と爲り、他に依りて命を活かし、人と相似せるも是正の人に非ず。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復阿鼻大地獄處を觀る。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて

め、・皮・肉・脂・髓を皆悉く噉食ひ、復其の汁を飲む。彼の國土を破りて惡業を行ひし人は、自らの業にて是の如く、長久しき時に於て大苦惱を受け、乃至作集せし惡不善の業の未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已れば五百世に於て餓鬼中に生れて極めて苦惱を受け、若し彼處より脫るれば五百世に於て畜生中に生れて賒羅婆を作し、生れ生るゝの世に火に入りて燒かれ、或ひは蛇の爲に食はれ、或ひは火の爲に燒かれ、或ひは風の爲に殺され、彼處より既に脫るれば若しは人中同業の處に生れ、戒無き時に生れて、人中最も凡鄙と爲す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復阿鼻大地獄處を觀察す。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて星鬘處と名け、是れ彼の地獄の第十二處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、人有りて惡を行ひ、起滅定に於て一切の煩惱を盡滅せる比丘の初めて極飢を起せるに、其の食を偷み已りて心に歡喜を生じ、食ひ已りて貪り取り、口に讃善を說くも、復他人に敎へて業業普遍く、業を作して究竟め、作して復集めて惡業堅鞕ならんに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、星鬘處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等の七大地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け、百倍して更に重く、復勝る者有り。所謂彼處の地獄に二角あり、普く地獄處の鑊の湯に焰燃えて虛空の星の如く、一角の處に於て二十億數・九那由他・九千鉢頭摩・六十億阿孚陀・三十大鉢頭摩・億百網・億二十千萬なる是の如きを過ぐる時節に燒煮され、煮られて熟し燒かれて熟して魚の如くに動轉す。焰燃えて赤沸せる銅の旋れる鑊中、燒煮を增長し、一切の時燒かれて堅惡の苦を受け、彼の惡業の人の唱喚びて心に悔ゆるも、自らの心の惡業にて長久遠時是の如くに燒煮かるゝこと前に說く所の如く、彼の人是

【七】起滅定。因緣の和合と離散に依りて、衆法の生起し滅謝するを觀ずる定。

七百由旬は大曠野の如く、嶮岸・高山ありて大火焔燃え、多く鐵樹有り、彼の地獄人は顚倒の見の故に河池・樹林を具足すること有りと見、彼れ飢渇に患み、第一の惡火に其の身を燒かれ已りて、唱喚び號哭きて走りて彼の池に向ひ、是の如き意を作さく『我れ彼處に到り、彼の池水を飲まん』と。既にして彼の池に到らば熱沸せる灰有りて河池中に滿ち、彼の池の所に於て閻魔羅人は手に鐵刀を執り、彼の罪人を執へて刀を以て割削き、二の苦惱を受く。一には刀の割く苦、二には飢渇の苦なり。彼の人是の如く、曠野の處に在りて、刀に其の身を破られて大苦惱を受くること長久しき時にして、若し彼處より脫れ、飢渇を以ての故に處處に馳走し、飢渇に身を燒かれて處處に馳走して、冷河有るを見、疾走して往趣く。彼の人既に走るに、池中に鳥有りて身は大象の如く、名けて閻婆と曰ひ、嘴利くして焔を生じ、彼の地獄人を執へ、上に擧りて空に在り、擧り已れば遊行し、彼の地獄人の卽ち憶念を失はゞ、然る後之れを放ちて石の如く地に墮ちしむ。彼の中の地處は焔（燃えて）堅惡の觸あり、罪人地に墮つれば碎けて百分と爲り、復更に和合し、合ひ已らば復散らし、散らし已らば復合ひ、鳥の復更に取ること前に說きし所の如く、是の如く無量百千億歲是の如き種の惡鳥の苦惱を受け、若し彼處より脫るれば復更に閻魔羅人の執持へらるゝ所と爲り、熱沸せる赤銅の旋れる河に置かる。既に彼處に置かるれば身の皆消洋くること水沫の消ゆるが如く、又復更に生じ、彼の惡業の人は惡業を行ひしが故に長久しき時是の如くに燒煮かれ、年數有ること無し。國土を破りし人の若し脫るゝを得已らば飢渇身を燒き、處處に馳走するも、自らの惡業の故に所行の處は鐵鉤道に滿ち、其の刄極めて利くして、其の足を割破き、自ら足下從り次第に髀に至り、一切を破裂せしめ、足の破裂し已れば其の身に焔燃え、極苦惱を受けて唱聲にて啼哭び、心に悔惱を生じて呻號き叫喚ぶ。一切の身分皆悉く燒燃し、燒け已れば復起ち、起ち已れば復去り、彼の人是の如く、心亂れて正しからず。彼處に復焔の齒の狗有りて來り、罪人を齧みて一切の身分を皆破壞せし

を耳に置きて滿たしめ、熱せる鐵鉢を以て熱沸せる灰を盛り、以て其の耳を灑ぎ、復利き刀を以て割き復削り、四百四病を常に具足して有り、火焔は普遍く合して一の焔と爲りて極熱の苦を受け、彼の地獄處(に在ること)長久しき時にして、年數有ること無し。乃至作集せる不善の惡業の未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已らば五百世に於て蠅虫等を生じて遍く其の身を覆ひ、常に嚙み食はれ、身に瘡孔有り、孔に惡虫有りて其の身を噉食ひ、屏中に在りて住する常食糞屎餓鬼の中に(あり)、若し彼處より脫るれば七百世に於て畜生中に生れ、曠野の惡處にて常に鹿の身を受け、飢渴に燒煮かる。既に脫るゝを得已れば若しは人中同業の處に生れ、身に常に重きを負ひ、打たれて身壞れ、晝夜安からず、手足皆破れ、口は常に乾燥き、身體の色惡く、衣裳は破壞る。是れ彼の惡業の餘殘の果報にして、人中に生ると雖も五百世に於て是正の人に非ず、鬼と相似し、身に常に苦惱ありて、晝夜安からず。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復阿鼻大地獄處を觀る。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて彼處を名けて閻婆叵度と爲し、是れ彼の地獄の第十處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有りて野の處にあり、河澤の中に於て濟を取りて命を活かし、彼の河澤の處は是れ第一の業にして、一切の田地の穀等の食具を皆彼れ從りて得て以て性命を存するに、惡心の人有りて彼の河を斷截ち、河の既に斷たれ已れば彼處の國土の一切皆失ひ、鳥鹿も亦死す。況んや復人類をや。城邑・聚落・一切の沙門・婆羅門等皆悉く渴きて死し、彼の河を斷つが故に國土・人民の一切死し盡すに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終れば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、閻婆叵度なる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等の七大地獄にて受くる所の苦惱なる彼の一切の苦を此の中具さに受け、百倍して更に重く、復勝る者有り。所謂彼處の

て五種の苦を受く。謂はく、樹火・鐵・飢・渴・病苦にて、長久しき時の年歳無數なるに於て(受け)、聞く者毛の起(つが如き苦にして)、百那由他(に受く)。此れ少分の堅鞕しき苦惱、惡味の苦惱を說けり。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、旣に脫るゝを得已れば七百世に於て食火烟餓鬼の中に生れ、飢渴の身を燒くこと林屋を燒くが如く、彼處より脫るゝを得ば五百世に於て畜生中に生れて燒を被る龍を作し、常に雨る熱沙は其の身の上に墮ちて燒煮かれ、畜生中より旣に脫るゝを得已れば、若しは人中同業の處に生れて叢林中に住み、常に塼等を負ひて盡極苦を生じ、曾て一たびも飽ちず、美食を得ずして、唯好食美味の名のみを聞き、奴と爲りて他に使はれ、貧しく、病みて凡鄙にして、是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復阿鼻大地獄處を觀る。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて雨[六]山聚と名け、是れ彼の地獄の第十の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、人有りて惡を行ひ、辟支佛の飢えて噉食はんと欲するに於て便ち偸み取るに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終れば惡處に墮ち、彼の地獄の雨山聚處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等の七大地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中に具に受け、百倍に更に重く、復勝る者有り。所謂彼處に多く鐵棒・鐵戟・鐵鏃・鐵函の苦惱有り、上より鐵山を雨らして種種の苦を與へ、彼處に多く勝勝れたる山の聚を雨らして上從り墮ち、一由旬の量にして、唯山の聚のみを雨らして彼の罪人を打ち、身體を碎壞きて猶し沙摶の如からしめ、散らし已らば復生じ、生じ已れば復散らし、散らし已れば復生ず。十一の焰有りて周遍く身を燒き、火の身を燒き已れば次いで復眼を破り、破り已れば復生ず。閻魔羅人は復其の舌を割き、割き已れば復生じ、復其の鼻を割き、熱き白鑞の汁を其の割きたる處に置き、復其の耳を割き、熱せる赤き銅汁

【六】雨の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依る。原本兩に作れり。以下の二三同樣に雨に依る。

中に生れ、若し彼處より脫るれば五百世に於て畜生中に生れ、常に石の墮つる有りて壓拶さるゝ處にあり、身は糞等の如く、大苦惱を受け、此れに因りて死を致す。彼處より脫るれば人中同業の處に生れ、常に貧しく常に病み、他の使ふ所と爲り、曠野・嶮岸・沙饒き處・草の稀なる處・草無き處・水無き處・澤を離れし處・常に怖畏ある處なる惡國土に生る。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復阿鼻大地獄處を觀る。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて名けて身洋受苦惱處と曰ひ、是れ彼の地獄の第九の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、檀越の家有り、常に好き心有りて正信を成就し、恒に病人に於て、出家の人に於て、病を差やさんが爲の故に其の財物を與へ、此の如き財物の、何の病人に隨ふも病の差ゆることを得しむるに、惡人有り、聲を具へて行く人なるが、內心善からず、善知識を離れ、無漏道に遠く、袈裟を被服せるも是れ大賊にして、彼の供養せる病人の財物を食ひ、用ひ已りて懺いず、心に悔を生ぜず、還さず償はず、復他人に敎へて往いて隨喜せしめ、復貪り取るに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終れば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、身洋受苦惱處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等の七大地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝る者有り。彼の地獄處に一由旬の量なる熱沸せる鐵樹あり、彼の樹に焰燃え、惡業の所作にて、彼の地獄處に熱焰の石有り、金剛に相似して觸は甚だ堅鞕く、百倍して焰は燒き、是の如き火樹は熾燃として極めて高し。樹の根下の處なる彼の地獄に生れ、四百四病の增長せる苦惱あり、獨にして伴無く、頭面は下に在り、脚足は上に在り、彼の樹の炎熱の熱力熾盛にして、地獄の火を形りて氷の冷きが如からしめ、彼の樹根の汁は一種の苦もて壓し、遍く罪人の身は毛頭許も無く、彼の病の苦の重きこと火の百倍にして、樹の壓する苦惱は復是れに過ぎ、時節長遠しく、年歲無數に是の如きの苦を受く。彼處に復閻魔羅人有り、手に鐵刀を執りて脈脈を遍く割き、彼の地獄處に

彼の衆僧をして飲食を得ずして身に飢の苦を受けしめ、善を念ぜず、坐禪を得ず、心寂靜ならず、彼の惡業の人の僧の現食を取り、取り已りて懺いず、心に悔を生ぜず、復僧の食に於て喜樂して取らんと欲し、復他人に教へて心に隨喜を生ぜしめ、業業普遍く、業を作して究竟めんに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終れば惡處に墮ち、彼の地獄の夢見畏處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等の七大地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中に具に受け、百倍して更に重く、復勝る者有りて、一切の衆生は其の名を知らず、彼の大苦惱は皆悉く堅鞕くして、受くる所の苦惱は自らの業の起す所、今は少分を說きて海の一渧の如く、(說く所は)人の夢中に見し所の實ならざるが如きにて、此の地獄中に見る所の夢の如きなり。惡人有るを見、甚だ怖畏る可く、彼の人手に種種の器杖の、若しは枷、若しは杵を執り、地獄人なる惡業を行ひし人を取り、置きて鐵地に在らしめ、鐵の函中に坐せしめて、熱鐵の杵を以て其の身を擣築き、并に骨をも破散して蠟蜜の塊の如くにし、又復更に生ずるに、生じ已れば棒にて打ち、破壞し碎散す。是れ彼の惡業を作集せし勢力にて、彼の果報を受くるなり。若し彼の函にて受くる所の苦惱を脫るれば復鐵林に入り、自業の道を行きて彼の鐵林に入るに、一切の身分を分分に析裂き劈割て散らしめ、鐵床の上に墮ちて、彼の惡業の人の一切の身分は皆悉く破壞す。若し彼處を脫れ、救を望み歸するを望みて處處に馳走するに、復鐵刀を雨らして其の身を劈割き、一切の筋脈は斷絕し破壞して唯骨の網のみ有り、少しの肉の停蠅む可き處も無く、皮・骨・筋の連れる唯是れ骨網なり。更に復鐵を雨らし、劈裂かれ破碎かれて悲苦しみ唱喚び啼哭きて走り、處處に馳走するも脫るゝを得ず、自らの惡業の起り、不善の業の起り、乃至作集せし不善の惡業の未だ盡きず未だ壞れずんば、極めて急しく煮燒かられて一切の身分は破滅れ壞爛れ、不善の業の故に長遠時に受けて解脫するを得ず。若し彼の惡業の一切を受け盡さば爾乃ち脫るゝを得、旣に脫るゝを得已らば一千世に於て食唾汁餓鬼の

眼を食み、其の頭を破り已りて其の腦を飲み、既に腦を飲み已れば次いで其の心を劈き、既に心を劈き已らば肉血を飲み、彼れを既に飲み已れば次いで其の腸を食み、既に腸を食み已れば次いで其の胃を食み、既に胃を食み已れば次いで熟藏を食み、熟藏を食み已れば次いで其の髓を食み、既に髓を食み已れば次いで其の髀を食み、既に髀を食み已れば次いで其の脛を食み、既に脛を食み已れば次いで足趺を食み、足趺を食み已れば次いで足指を食み、彼の人是の如くに堅鞕の苦を受くること長久き時にして、年歲數無く、百年中の數も亦盡す可からず、少しの相似たる無し。今は少分を說きて、大海中より一掬の水を取りて異なる處に置けるが如く、是の如く說きし所は、唯一分を說けるのみなり。彼の惡業の人は是の如き長時に堅鞕しき苦を受け、是の如く乃至作集せる惡業の未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已らば一千世に於て食唾餓鬼の中に生れ、命有る而已にして、第一の飢渴の苦惱は身を燒き、彼處より若しは脫るれば畜生中に生れて大魚と作り、大海中の醎水の處に在り、常に大海水中に在りて住す。謂はく、那伽羅、若しは[5]摩伽羅にして、若しは大龜と作り、常に飢渴に患み、醎水中を行きて一千世を經、既にして彼處より脫れ、過去世に於ける人の業の熟すること有らば、若しは人中同業の處に生れ、所在の國土は二王の中間の疆界の處にして、彼の二國王は常に共に鬪諍し、彼の人財物を聚集めて得已るも他の取る所爲り、王は罰して取り、既に奪ひ取り已れば獄中の守掌たらしめ、飢渴は身を燒き、他從り食を得、極苦惱を受く。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復阿鼻大地獄處を觀る。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて夢見畏と名け、是れ彼の地獄の第八の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若しは何等の人、多くの比丘衆の聚の和合して食はんと欲する食に於て取りて之れを食ひ、

【五】摩伽羅(Makara)。又は摩竭、鯨魚、巨鼇と譯す。極大の魚にして、或ひは三百由旬、四百由旬なるありと云ふ。

鐵鉗を以て其の身を鉗み取り、鐵钁中に置きて之れを煮、極めて熟して大小豆の如く、燒煮られて轉捩り、若しは浮び若しは沈みて堅鞕き苦を受け、第一の惡苦にして、是の如き苦惱は譬諭す可からず、一切の三界の因果の相似も、彼の人の受くる所の地獄の百分・千分・歌羅分中、其の一に及ばず、是の如き苦惱なる、百千の勢力ある第一の苦惱の大海に漂はさる。自らの業の果證なり。乃至作集せる惡不善の業の未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の黑肚地獄處より爾乃ち脫るゝを得、旣に脫るゝを得已らば千二百世食屎餓鬼の中に生れ、若し脫るゝを得已らば七百世に於て食吐畜生の中に生れ、旣にして脫るるを得已るも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れて屎等を食ふ邪見の外道を作す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復阿鼻大地獄處を觀る。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて身洋處と名け、是れ彼の地獄の第七の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、人有りて惡を行ひ、法の財物を取りて自ら食用し、作して復集めて業業普遍く、業を作して究竟め、復他に作すことを教へんに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終れば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、身洋處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等の七大地獄にて受く所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、百倍して更に重く、復勝る者有り。所謂彼處に二の鐵樹有りて皆悉く焰燃え、惡風に吹かれて迭互に相ひ合へり。彼の地獄人は二樹の中に在り、極勢にて相ひ觸れて[四]多羅の葉の機關の厭搊ふが如く、身體消洋くるも又復更に生じ、生じ已れば復搊り、兩樹直に來りて兩邊より身に搊り、大苦惱を受けて是の如くに蹉捩ひ、消洋けて地に墮つ。彼れに鐵の烏有り、金剛の惡嘴ありて、彼の樹上に在り、罪人の頭を啄み、啄み已れば樹に上り、數數是の如く罪人の頭を破り、眼を啄みて食ひ、罪人の唱喚び悲食み號哭くも、復其の

【三】歌羅(Kalā)。分量の名。人毛の一を折りて百分と爲し、其の一を歌羅と曰ふと。或ひは又十六分の一を云ふともあり。極微の量なり。

【四】多羅(Tāla)。岸樹、高竦樹等と譯す。形容椶櫚の如く高きは七八十尺に及び、其の葉長く稠密にして、乾燥して文字を刻すに用ふ。貝多羅葉即ちこれなり。

卷の第十五

地獄品之十一

又彼の比丘、業の果報を知りて復阿鼻大地獄處を觀察す。彼れ見聞して知るに、復異なる處有り[一]黑肚處と名け、是れ彼の地獄の第六の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若しは何等の人の佛の財物を取りて自ら食用し、還さず償はず、彼の[一]業を信ぜずして復取り、復他に取ることを敎へ、住持せんが爲に佛に施し已りて復還りて攊取し、或ひは他に物を與へて佛に施さしめ、而も自ら食用せんに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、黑肚處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等（ ）七大地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦惱を此の中具に受け、百倍して更に重く、復勝る者有り。所謂彼處にて飢渴は身を燒き、自ら其の身を食ふに、食ひ已らば復生じ、食ひ已らば復生じ、是の如く無量百千億歲食ひ已らば復生じ、生じ已らば增長して兩重に苦を受け、飢渴の苦惱は彼の惡業を以て受くる所の苦惱より百倍して更に重く、自ら苦惱を作して還りて自ら身を押し、彼の人是の如く、自ら身の肉を食ひて處處に馳走す。既に是の如く走るに、黑き肚の蛇有りて黑雲の色の如く、彼の罪人を執へて足甲等從り稍稍漸く齧み、骨をも合せて食ひ、食ひ已らば復生じ、生じ已らば復食ひ、食ひ已らば復生じ、是の如く久しき時、惡業を以ての故に是の如くに食を被る。彼の罪人の佛物を食用せるを以て、諸の福田中、佛の福田の勝れるに、佛物を損ひしが故に是の如くに苦を受け、既に脫るゝを得已らば、焰の鐵地の[二]佉陀羅炭の火焰に相似せるに入り、彼の地中に入らば（身は）一由旬の量にして、彼の人火に入らば無量百千億歲煮燒かられて復更に增長し、是の如く極めて煮らる。若し脫るゝを得已りて救を望み歸するを望むも、彼處に復閻魔羅人有り、焰の

【一】業を信せず。業報因果の法則を信ぜざること。

【二】佉陀羅（Khadira）。又は佉達羅、朅地羅、軻地羅等に作り、山木、紫檀木等と譯す。

於て苦を與へられて止ます、若し惡業盡きんに、是の如き地獄の極惡の處より爾乃ち脫るゝを得、復一千世餓鬼中に生れ、普き身は焰に燒かれて聲を發して唱喚び、一切の國土、一切の城邑、一切の聚落にて夜中唱喚び、夜は則ち火に燒かれ、晝日時に於ては日光火を雨らして、火に相似して燒かる。乃至火を生ずる惡業の壞爛して氣無く、盡滅せば、若しは彼處より脫れて、一千世に於て畜生中に生れ、百足虫を作して常に飢渴に患み、兩頂と兩面あり、復兩口有り、多時に苦を受けて停まるを得ず、一切の身分は多く黑虫の噉食ふ所と爲る。既に彼處を脫れ、過去の久遠に少善業有らば、若しは人中同業の處に生れ、一千世に於て黑色人を作し、色は黑雲の如く、毀傷を被るを喜び、恒常に貧窮にして、常に行き多く行き、處處に行き、駱駝を行使し、他の使ふ所と爲り、常に飢渴に患み、飲食を得難くして、命を繫ぐ而已なり。是の如き餓鬼にて一千世を經、是の如き畜生にて一千世を經、是の如き人中一千世を經て、業の因緣にて、是の如くに苦を受く。

し相應せんに、彼の人是の惡業の因縁を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、彼の地獄の鐵野干食なる別異の處に在りて生れ、大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等の七大地獄にて受く所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、百倍して更に重く、復勝る者有り、業重きを以ての故に、受くる苦も亦重し。何を以ての故に。因と果は相似、果は種に似るが故なり。既に彼處に生るれば、惡業の因縁にて一切の身分に焰火普く燃え、彼の身に焰燃ゆること十由旬の量にして、十一の苦有り、頂の苦最も重く、諸の地獄中、此の苦最も勝れり。彼處に復火に相似せる山有り、彼の山の一切に炎火普く燃えたり。飢渴に燒煮され、長遠時に於て常に燒かれ常に打たれ、手を伸して上に向ひ、彼の人の手を伸ばすこと、高さ五由旬にして、焰の鬘の普く燒くこと山角を燒くが如く、彼の人普く燒かれて、唱聲にて叫喚び悲啼み號哭く。唱喚びて口を張らば火焰口に滿ち、內外普く燃えて皆一の焰を作し、中間有ること無く、火焰は漸く長し、久しき時に燒煮かる。若しは彼處より脫れ、救を望み歸するを望みて處處に馳走し、口を喎め面を破りて樂處を求覓むるも、自ら作せる惡業に隨順し繫縛せられて、復異なる處に到る。彼れに山河有りて、苦惱の增長せるに、上より鐵塼の一居賒の量なるを雨らして夏時の雨の如く、塼は彼の人を打ち、頭從り足に至りて破壞し幷疊して乾脯を打つが如く、一切の身分は分別す可からず、彼の人是の如く、常に雨れる惡鐵にて大苦惱を受くるも、又復更に生じて彼の身の力無きに、焰の牙の野干は之れを噉食ひて乾脯を食ふが如く、和集して復生じ、生じ已らば復食ひ、彼の惡野干は長久しき時に於て是の如く常に食ひ、是の如くに燒煮めれ、煮られ已りて復生ずるに、惡業を以ての故に是の如くに之れを食ひて、大苦惱を受けしむ。自ら作せるにて他に非ず、自ら作さば失はず、作さゞれば得ず、因無くして得るに非ず、異從り來れるに非ず、作者の安住せし所有ること無くして、受者の住持する所有るに非ず、自ら因を作して得るなり。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に

決定の妄語人は、非法を說きて法と爲す、此れ第一の賊にして、餘の者は大賊に非ず。
若し人正しく法を說かば、一切の惡を出離して、則ち善處に到り、彼處に苦惱無し。
盡くること無き財にして失はず、一切も偸む能はずして、實語を天の階と爲し、亦是れ涅槃の門なり。
是の如く常に實を語り、常に法行を憶念せば、悲・憂無く老いずして、彼の人人中に勝る。
汝は正法を捨離し、善人を毀呰れり、汝は本聚の惡を集めて、今此處に於て受く。

閻魔羅人は是の如くに聖法を毀れる人を呵責し、既に責疏め已りて多く苦惱を與へ、彼れ知る可からず、苦を說く可からず。何を以ての故に。聖人を毀れる極重の因を以ての故に、相似して果を得とは、如來の說きたまふ所なり。是の如くに燒煮され、乃至惡業未だ壞れず爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業の盡くれば、野干吼處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已らば二千世に於て餓鬼中に生れ、賓茶處に在り、彼の身は塊を作して肉塊に相似し、見ず、聞かず、嗅がず、甞めず、言語する能はず、若し彼處より脫るれば、三千世に於て畜生中に生れて常に屎虫を作し、既に彼處より脫るれば若しは人中同業の處に生れ、五百世に於て常に貧窮しく、所有る語言は人の信ぜざる所、癩病・聾・瘂にして、是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復阿鼻大地獄處を觀る。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて彼處を名けて鐵野干食と爲し、是れ彼の地獄の第五の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、惡心・惡念を隨喜し、重惡の心を以て衆僧の寺を燒き、并に佛像及び多くの臥敷・衣裳・財物・穀米・衆の具を燒き、惡心を以ての故に火にて僧處を燒き、燒き已りて隨喜し、心に悔を生ぜず、復他人に敎へて隨喜し讃說せしめ、業業普遍く、業を作して究竟め、和合

舌を食ひ、復野干の其の鼻を食ふ者有り、復野干の胸骨を食ふ者有り、肺を食ふ者あり、小腸を食ふ者あり、大腸を食ふ者あり、脖を食ふ者有り、髀を食ふ者有り、蹄を食ふ者有り、脛を食ふ者有り、臂を食ふ者有り、手足を食ふ者あり、復其の手足の指を食ふ者有り、一切の身分を別別に割き食ひ、食ひ已らば復生じ、彼の惡業の人の作集せし業の果にて、長久遠時、是の如くに苦を受く。若し彼處に受くる所の苦惱を脱れ、救を望み歸するを望みて處處に馳走するに、彼れに復更に閻魔羅人有り、口を擘きて舌を出し、極めて利き刀を以て欝欝に碎割き、割き已らば復生ず。舌を以て毀呰りて聖人を說きしを以ての故に、他人の爲に非法を讃めしを以ての故なり。彼の人是の如く、長遠時に於て是の如くに苦を受け、若し彼處より脱れ、救を望み歸するを望みて處處に馳走するに、惡業の所作して閻魔羅人は復更に執持し、迭に相ひ謂ひて言はく『此の妄語の人は曲語・澁語・不淨の垢語・惡法を說く語・非法を說く語にて、諸の衆生をして正道より退失せ令めき』と。彼れ復執り已りて、口を擘きて舌を出す。是の如き惡舌は長さ一[三三]居賒にして、其の舌を柔軟なるを赤き銅の焰の燃えたる鐵地に置き、畫して阡陌を作し、人を遣りて之れを耕す。熱焰の鐵の犂の利き刀に焰燃え、其の牛の脚上に極めて利き刃有り、焰火熾燃たり。縱横に之れを耕して百たび到り千たび到り、彼れ惡語を說き、他世に證に於て相應せざるを說きて是の如き苦を受け、是の如くに久しき時、耕・煮・燒・割せられ、是の如き惡舌に種種の苦を受く。彼の人是の如くに苦を受けて唱喚し、心に悔いて啼哭するに、閻魔羅人は之れを呵責せんが故に偈を說きて言はく。

六萬[三五]阿浮陀、五千六浮陀、口に語り心に惡を願ひ、聖を毀りて地獄に到れり。

善き色に惡業を行ひ、非法を似法と說き、惡は前に惡を說けるを以て、今此處に於て燒かる。

衆生は實を悕望せるに、云何んが惡法を說けるや、汝は惡を說きしを以ての故に、惡の如くに相似して受く。

【三三】 居賒(Krośa)。又は俱盧舍、拘樓賒等に作る。五里、或ひは五百弓三千二百尺の里程。

【三四】 阡陌。田間の道なり。

【三五】 阿浮陀(Abda)。一ヶ年のこと。次の語、浮陀は阿を略せしならん。

爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、或ひは一劫、或ひは減一劫に於て、是の如く常に燒かる。若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脱るゝを得、既に脱るゝを得已らば四千世に於て食彼不〔三〕淨餓鬼中に生れて飢渇は身を燒き、若し彼處より脱るれば畜生中に生れて曠野の水無き處に在り、竹林中に生れて口常に乾燥き、迮狹の處・山谷の中に生れて常に陰影を畏れ、常に鴿・鷲を畏る。畜生中に生るゝに、何の因縁を以て竹林中に生るゝや。彼の竹林處に常に大風有りて、竹を吹きて火を生じ、四千世中常に燒死を被り、還りて彼處に生るればなり。彼處より脱れ已らば若しは人中同業の處に生れ、貧窮にして常に病み、世中に賤鄙しく、妻は貞良ならず、若しは他の妻を侵し、或ひは他の女を犯さば、彼れの捉ふる所と爲り、捉へ已らば王に付し、若しは王王等は其の人根を拔き、舍宅有ること無く、四出の巷、若しは三角の巷に於て他從より乞食して以て自ら命を活かし、常に飢渇に患み、彼れ復病を發し、或ひは四出の巷、若くは墓田中にて苦毒みて死す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて阿鼻大地獄處を觀察す。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて、野干吼と名け、是れ彼の地獄の第四の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、一切智人を毀呰り、辟支佛を毀り、阿羅漢を毀り、法律を毀り、非法を法と說き、又他人に教へて隨喜に任せしめ、彼の人非法を復說きて法と爲し、常に聖人を毀らば、彼の人是の惡業の因縁を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の野干吼處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等の七大地獄の惡業に相似して受くる所の苦惱なる彼の一切の苦を此の中具に受け、百倍して更に重く、復勝る者有り。所謂、彼處に業にて野干の鐵口に焔燃えたるを作し、遍く彼處に滿てり。是の如き野干の焔の牙は甚だ利く、疾走して聖法を毀れる人に往趣き、各異なる處を食ひ、頭を食ふ者有り、項を食ふ者有り、舌の惡語を以て、復野干有りて其の

〔三〕淨の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。原本羅に作る。

るを得、若しは一劫、若しは減一劫に於て復更に身を燒くも、受くる所の苦惱は阿鼻地獄中の苦より少なく、一千世に於て餓鬼の身を受けて責疏餓鬼の中に生れ、飢渴は身を燒き、一切の身は燃えて燈の如くに相似し、彼れ若し脫るゝを得ば一千世に於て畜生中に生れ、曠野の鳥等にして、常に飢渴に患む。謂はく、[三〇]遮多迦・野干・蟬虫・瞿陀・野馬・野驢・鹿等なる是の如きの畜生にして、是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。彼處より脫るゝを得已れば若しは人中同業の處に生れ、則ち馬面の國土の中に生れて、三百世に於て胎中に死し、若しは過去の業にて活くるを得て死せざるも、貧窮にして常に病み、多く苦惱を受け、五百世中不能の男を作す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて阿鼻大地獄處を觀察す。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて無彼岸長受苦惱と名け、是れ彼の地獄の第三の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若しは何等の人の境界に亂され、或ひは欲心に因り、或ひは惡友に近き、或ひは自ら酒に醉ひて母と共に欲を行ひ、行ひ已りて心に惶れ、惡知識に近きて其の語言を取り、是の如き癡人の復更に是の如きを樂み行ひ多く作し、復他人に敎へて是の如きを行は令むるに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、彼の地獄の無彼岸長受苦處と名くに在りて、大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等の七大地獄にて受くる所の苦惱なる彼の一切の苦を此の中具に受け、百倍して更に重く、復勝る者有り。所謂、彼處の閻魔羅人は熱焰の鐵鉤もて、其の人根を鉤きて隨從り出し、棘の刺針を取りて其の人根を刺し、或ひは臍[三一]中に鐵鉤もて釘うち、或ひは其の鼻に釘ち、或ひは其の耳に釘ち、復其の口を斵り、焰の燃えたる鐵鉤を口に置きて滿た令め、普く焰は口に滿ちて大苦惱を受け、彼の人の下令に復大苦惱を受けて、彼の人是の如く三處に苦を受け、燒かれ壓され劈れて皆悉く破壞る。普く彼の一切を無彼岸長受苦處と名け、阿鼻の內に在りて大苦惱を受け、受くる所の苦惱は譬諭す可からず。乃至惡業未だ壞れず未だ

【三〇】遮多迦(Cataka)。又は遮吒迦に作る。鳥の名なり。露を食して生くといふ。

【三一】中の字は宮內省圖寮本に依れり。別本人に作る。

盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已れば一千世に於て餓鬼中に生れて鼎餓鬼と名け、若し彼處より脫るれば畜生中に生れて象・犛牛・[一八]肫徒魔邏・鼠・狼・毒蛇・守宮・蚯蚓・蚊子等の虫を作し、又復牛を作す。既に彼處を脫るれば、若しは人中同業の處に生れて[一九]膾子の家に生れ、二百世に於て胎中に死し、或ひは復生れ已るも未だ行かずして死し、或ひは復出でんと欲して便ち命終る。餘殘の惡業の因緣の故にして、復惡業を作せばなり。

又彼の比丘、業の果報を知りて阿鼻大地獄處を觀察す。彼れ見聞して知るに、復異なる處ありて彼處を名けて一切向地と爲し、是れ彼の地獄の第二の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、思惟して漏盡證を得たる聖比丘尼、阿羅漢に强ひて婬欲を行じ、染み行ひ多く作さば、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、彼の地獄の一切向地なる別異の處に在りて生れ大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩・合・喚・大叫喚・熱・大焦熱なる七地獄中にて受くる所の苦惱なる彼の一切の苦を此の中具に受け、百倍して更に重く、復勝る者有り。彼處の鐵地にて頭面は下に在り、身は上に在りて上下顚倒し、數數轉換し、閻魔羅人は地獄人に極重の苦惱を與へ、彼の人苦を受けて唱喚ぶ能はず、聲を出すことを得ず、氣を出すを得ず、半身なる下分は若しは其の上に在り、閻魔羅人は利き斤斧を以て漸漸に之れを斬り、乃至肉盡きて唯骨のみ在ること有り、又復彼の骨を灰汁にて之れを洗ひ、洗ひ已らば墮落し、彼の人彼處にて命有る而已なり。復熱沸せる、焰の漂きて赤銅の熱沸せる鐵鑊に置き、彼の鑊中に在りて上下に廻轉し、極めて煮られて、爛熟して大小豆の如く、既に煮熟し已れば普く氣遍く覆ひ、一切見叵し。是の如く無量百千年歳鐵鑊中にて煮られ、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫る

【一八】肫徒魔邏とは或ひは Śiśumāra か。Śiśumāra は普通失收摩羅、室獸摩羅等に作る。鰐魚の類なり。
【一九】膾子。劊子を謂ふか。劊子とは即ち殺手、人を刑するものなり。

三を無彼岸長受苦惱と名け、四を野干吼と名け、五を鐵野干食と名け、六を黑肚と名け、七を身洋と名け、八を夢見畏と名け、九を身洋受苦と名け、十を[一七]雨山聚と名け、十一を吼生閻婆叵度と名け、十二を星鬘と名け、十三を苦惱急と名け、十四を臭氣覆と名け、十五を鐵鍱と名け、十六を十一焔と名け、此の十六處は乃ち是れ阿鼻根本地獄の眷屬の處にして、彼の十不善の惡業道を行ひ、幷に五逆業を皆共に和集して大地獄に行き、阿鼻獄に入る。內の五逆有り、外の五逆有り、究竟して作し已り、生れて阿鼻大地獄の中に在り、業の如くに相似して彼處に生る。業の如くに相似すとは、作集せし業にして、業を普く究竟め、樂み行ひ多く作して、彼の地獄の別異の處に在りて生るゝなり。彼の阿鼻の業に凡そ五種有り。謂はく、阿羅漢を殺し、惡心にて思惟して佛身より血を出し、心に隨喜を生じて樂み行ひ多く作し、復他に作すことを敎へ、彼れをして安住せ令め、或ひは他を遣りて作さしむるに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、彼の地獄に在りて烏口處に生れ、大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活・黑繩等の七大地獄の、唯阿鼻にて受くる所の苦惱を除ける彼の一切の苦を、此の中具に受け、百倍して更に重く、復勝る者有り。閻魔羅人の罪人の口を擘くこと烏の口を擘くが如く、然る後將ゐて黑灰河と名くるに到る。淩流の漂くこと急にして、其口中に入り、是の如き熱灰は初に其の脣を熱き、既に脣を燒き已らば次いで其の齒を燒き、既に齒を燒き已れば次いで其の咽を燒き、既に咽を燒き已らば次いで其の心を燒き、既に心を燒き已れば次いで其の肺を燒き、既に肺を燒き已れば次いで其の腸を燒き、既に腸を燒き已れば次いで腸藏を燒き、腸藏を燒き已れば次いで生藏を燒き、生藏を燒き已れば次いで熟藏を燒き、熟藏を熱き已れば下從り出ず。彼の地獄人は灰河の苦を受け、內を燒かれて皆盡き、身の內に物無く、唯外物のみ有り、惡業に任持せられ、是の故に死せずして堅鞕しき苦を受け、長久時に於て常に燒かれ常に煮られ、年歲を數ふる無し。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ

【一七】雨の字は、宮內省圖書寮本に依れり。別本兩に作る。

百世生れ已りて死し、鳥の食ふ所と爲り、復五百世未だ行かずして死す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。若し後殘の業の果報盡き已らば、無始の時より業網の轉行せるに相似たる果を得、下・中・上有り。彼の比丘、是の如くに觀已り、偈を説きて言はく。

無始の生死中、業の網は世界を覆へり、或ひは生れ或ひは死滅するは、皆自業の因緣なり。

天從り地獄に生れ、地獄從り天に生れ、人より餓鬼界に生れ、地獄より餓鬼に生る。

異異の勢力の生、異異の勢力の樂、皆是れ愛の業にて生れ、[一五]自在の作すところに非ず。

[一六]阿僧祇の作業と、生死は衆生の常なるも、餘の人は解する能はず、唯如來のみ知りたまふ。

彼れは諦かに此の業を知り、亦因緣を知り、癡人に與へて解脱せしめ、一切の衆生を化したまふ。

諸の比丘よ、彼の比丘、是の如くに阿鼻の苦を觀察し已り、一切の生死に心離欲を得、大慈悲を以て其の心を修め、正しく憶念し已りて十一地を得たり。彼の地の夜叉は知り已りて歡喜し、復更に傳へて虚空夜叉に聞こえ、虚空夜叉は四大王に聞こえ、彼の四大王は四天王に聞こゆること前に説く所の如く、次第に乃至大梵天に聞こえて是の如く説きて言はく『閻浮提中の某國、某村の、是の如き種姓なる某善男子は、鬚髮を剃除し法衣を被服し、正信にて出家し、魔と共に戰ひて魔界に住せず、心に染欲の境界を喜樂せずして、十一地を得たり』と。彼の大梵天は聞き已りて歡喜し、是の如き言を説かく『魔分を損減し、正法の朋を起し、善分を增長し、法行に隨順し、諸の比丘の法を建立して熾燃たらしめり』と。又修行者は内心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが彼の比丘、阿鼻を觀已りて隨順し修行するや。云何んが彼の比丘、阿鼻大地獄處を觀察するや。阿鼻地獄に凡そ幾處有りや。彼れ見聞して知るに、餘の地獄の十六處を具ふるが如く、此の阿鼻獄も亦復是の如く、十六處を具へたり。何等は十六なりや。一を鳥口と名け、二を一切向地と名け、

【一五】「自在」自在天のこと。濕婆(Śiva)初は自在に凡てを創造すといはる。

【一六】阿僧祇(Asaṃkhya)。無數と譯す。印度の數名なり。

此の人、彼の人の微細の中間も更に得可からざるが故に阿鼻と名け、山中の河の勢力の斷ぜずして晝夜常に急なるが如く、彼の阿鼻處の常に受くる苦惱の勢力は斷ぜず、彼の人の苦惱は休息す可からずして、乃至劫盡くるまで復中間無きが故に阿鼻と名く。彼の人の苦惱は說くを得可からざるも、此こに少喩有り、海水の渧の數を得可からざるが如く、是の如く是の如く、阿鼻地獄の惡業を行へる人の受くる所の苦惱も數を得可からず、說くことを得可からず、一切の苦處にして阿鼻處の如き者有ること無く、業重きを以ての故に受くる苦も亦重し。若し一逆を作さば彼の人の苦は輕く、若し二逆を作さば、彼の人身大にして受くる苦も亦多く、是の如く次第に一切の身分皆悉く轉た大にして、苦も亦是の如く、業因重きが故に、是の如き苦の因は更に相似せる無し。樂受を受くるが如きは、[一三]阿迦尼吒の更に相似せる無く、苦樂の二處なる是の如き上下は、皆諭ふ可からず、是の如き上下の邊を論ふ可からず。何を以ての故に。惡業を作すを以て、惡業を作すが故に、因に相似せる果ありて、地獄中に於て地獄の邊に在り、相似と譬諭とは得可からざるが故なり。彼の人是の如く、或ひは一劫なる有り、或ひは減一劫なる有りて、彼れに在りて燒煮され、惡業盡き已れば爾乃ち脫るゝを得。因盡くるを以ての故に其の果の乃ち盡くること、火盡くるが故に其の熱も亦盡くるが如く、種失ふが故に其の芽も亦失ふが如し。是の如く阿鼻地獄の人の若しは惡業盡き、氣無く爛壞せんに、彼の地獄より爾乃ち脫るゝを得、若し脫るゝを得已れば、餘殘の業果にて針孔山巖の飢鬼中に生れ、既に彼處に生るれば飢渴身を燒き、其の身は猶し火に燒けたる樹林の如く、若し彼處を脫るれば畜生中に生れ、[一四]舒舒魔羅にして、復屎中に生れて不淨虫を作し、飢鬼中に於て二百千世飢渴に燒煮かれ、畜生中に於て二千世を經。惡不善の業の餘殘の勢力にて種種の生處に一切の苦惱あり。畜生の中種種に惡食し、心に常に憶念して殺生處に生れ、復彼處に於て迭に相ひ噉食ひて大苦惱を受け、若しは彼處より脫れ、過去の業力にて人中に生るゝを得ば、五百世に於て胎中に死し、復五

【一三】阿迦尼吒（Akhanistha）。又は阿迦尼師吒、阿迦尼沙託等。色究竟と譯す。色究竟天のこと。即ち、色界十八天の最上にある第四禪天の第九の稱。

【一四】舒舒魔羅。不明。

るが故に、是の如き罪人に惡業の果報ありて、久しき時煮食さる。若し彼處より脫れて救を望み歸するを望み、處處に馳走するも、邪見の惡因と五逆の果報にて是の如きの道を得、生れて阿鼻に在り、是の如き五逆は決定して彼れを受け、業の如くに相似せり。彼の地獄人は何處に在りや。[九]摩婆迦離及び[一〇]不蘭那・[一一]提婆達多・[一二]居迦離等は彼處にて燒煮され、彼の地獄人は大地獄に到り、決定して燒煮せられて、彼れ第一の急惡なる苦惱を受く。彼處の苦とは、何物が苦惱なりや。一切の衆生は論を說く能はず。是の如き阿鼻地獄の罪人は大苦惱を受け、惡業を行ふ人は闇の聚を一切衆生に和集む。毛起地獄、上に在りて刀を雨らし、阿鼻の人を燒煮き劈裂き又、復更に生ずるに、生じ已らば復裂き、更に劈き更に燒き、金剛の枷を雨らし、金剛の雹を雨らし、又復石を雨らして破壞・碎散す。彼の五逆の惡人の是の如く燒かれ已るに、又復更に十一の焰の聚有りて大苦惱を受け、忍耐す可からず。十方に十の焰あり、第十一の焰とは飢渴の火聚にして、飢渴を以ての故に口中より焰出す。彼の人の周匝を十の焰は身を圍み、是の如くに燒煮して其の身體に遍く、微細なること毛孔許の燒燃せざる有る無くして、彼の諸の罪人は平等に燒を被り、乃至毛根許の樂も有ること無く、と名け、此の世の間より退きて更に生處無く、唯彼の大地獄中に生れ、苦の更に過ぎたるは無く、故に阿鼻と名け、一切の諸の根、一切の境界の皆悉く煮熟せるは、不正の心なるを以ての故に阿鼻時節無數なるが故に阿鼻と名け、一切の欲界に攝せらるゝ衆生の最も極下と爲すが故に阿鼻と名け、是の如き阿鼻は更に過ぐる者無きが故に阿鼻と名け、是の如き阿鼻は更に勝る者無きが故に阿鼻と名け、彼の大地獄の頭已上の如きは更に物有る無く、是の如き阿鼻の地處は甚だ熱く、亦復是の如く更に上有る無きが故に阿鼻と名け、彼の阿鼻處は其の地甚だ熱くして更に過ぎたるは無く　熱沸せる赤銅、燒けたる赤き肉骨の更に過ぐる者無きが故に阿鼻と名け、彼處の地は密なるが故に阿鼻と名け、彼の地獄處の脂・肉・骨・髓の一切に焰燃え、彼の地獄人は普く皆焰燃えて分別す可からず、

【九】 摩婆迦離(Maskari)。詳しくは末伽梨拘賒梨子(Maskari Gośāliputra)。六師外道の一にして、苦樂は因緣に因らず、自ら然るのみと說く。
【一〇】 不蘭那(Pūraṇa)。詳しくは不蘭那迦葉(Pūraṇa Kāśyapa)。同じく六師外道の一、一切法の斷滅を說く。空見の外道なり。
【一一】 提婆達多(Devadatta)。又は調婆達多、地婆達兜、調達等。天熱、天授と譯す。阿難の兄、佛の從弟たり。出家せるも後に三逆罪を犯して佛法を破壞し、地獄に墮つ。
【一二】 居迦離(Kokālika)。又は瞿伽離、俱伽離等に作る。惡時者、牛守等と譯す。提婆の弟子にして、舍利弗、目連を譏して大蓮華地獄に墮ちし事、智度論に出でたり。

怨家に將ゐられて地獄に入り、若しは復閻魔羅人を離るゝを得て處處に馳走するも、此の人、瞋心を樂み行ひ多く作せる果報を今受けて、救無く歸する無く、師子・虎・蛇なる惡瞋の類は其の前に現住せり。彼の人怖畏れて處處に馳走するも、惡業を以ての故に走る能はずして、彼れの執ふる所と爲る。極めて大いに瞋怒りて先づ其の頭を食ひ、頭を食はれて唱喚び悲苦み、宛轉して地に在るに、復惡蛇有り、牙に惡毒有りて復之れを齧み、其の脇を食ひ、虎は其の背を食ひ、火は其の足を燒き、閻魔羅人は復遠くより之れを射、是の如くに苦を受く。閻魔羅人は復爲に偈を說き、之れを呵責して言はく。

汝は瞋の燒く所と爲りて、人中最も凡鄙しく、復此處に到れるに、何が故に今唱喚ふや。

瞋を第一の因と爲し、人をして地獄に生れしめ、繩の如くに繫縛して、今此の苦惱を得しむ。

瞋心に誑かれし癡人は、常に瞋を念じて捨てずして、曾て心の寂靜ならざること、蛇の窟中に住するが如し。

若し人堅惡の體にして、恒常に多く瞋を行はば、彼の人の樂を得ざること、日中の闇の如し。法に非ず多財に非ず、知識に非ず親に非ず、一切は瞋恚・亂心の人を、護ること能はず。

此世・他世に於て、能く黑闇の果を作し、復能く惡處に到る、是の故に名けて瞋を爲す。

瞋らざる者は第一にして、瞋る人の則ち勝るゝに非ず、若し人にして瞋を捨離せば、彼の人涅槃に趣かん。

汝は瞋の因緣を以て、惡處の地獄に到れり、業盡くれば乃ち脫るゝを得ん、宛轉何ぞ益する所あらん。

閻魔羅人は是の如くに地獄の罪人を呵責し、既に呵責し已りて復更に箭を射る。師子・虎等の瞋多き畜生は、瞋の因を以ての故に殺して之れを食ひ、彼の業に相似して相似の報を得、果の種に似

彼の物に向ひ、是れ已の有なりと謂ひ、彼の貪心の人は惡不善の業を樂み行ひ多く作して得し所の果報にて、地獄中に於て心に顚倒の見あり、是の如くに見已り、貪心を以ての故に多く受用せんことを望む。貪心を以ての故に手中に刀生じ、走りに彼の物に向ひ、既にして物所に到り已らば刀を以て、相ひ斫り、彼の地獄人は迭に相ひ削割き、是の如くに相ひ割きて唯骨のみ有り、後復更に生じ、生じ已れば更に割き、割き已らば復生じて、乃ち無量百千年歳を過ぐ。惡業の所作にて、閻魔羅人は手に利き刀を執りて地獄人を劇き、地獄人を捉へて一切を割削き、一切の肉盡きて芥子許も無く、唯骨のみ有り、彼の地獄人は唱喚び號哭き憂愁み苦惱しむ。是の如くに削割かれ、削かれ已りて復生ずること刀を以て割くが如く、閻魔羅人の若しは河中に置くに卽ち復還りて活く。是の如く是の如く彼の地獄人は還りて復更に生じて是の如くに苦を受け、唱喚び號哭く。閻魔羅人は復爲に偈を說き、之れを呵責して言はく。

貪に壞られし丈夫は、貪の誑く所と爲り、他の物を悕望して、此の間是の如くに煮らる。
貪心の惡不善を、癡人は心に喜樂す、貪心は還りて自らを燒くこと、木中より火を出すが如し。
貪心を甚だ惡と爲し、人をして地獄に到らしむ、是の如くんば應に貪を捨つべし、苦報ある毒惡の物なればなり。
他人の富めるを見已りて、貪心にて自ら得んことを望む。彼の貪は毒果を生じ、今此處に來りて受く。

閻魔羅人は是の如くに地獄の罪人を責疏め、既に責疏め已りて然る後多多く諸の苦惱を與へ、是の如く無量百千年歳にして、乃至惡業未だ盡きざる已來、時節久遠しく苦を與へて止まず。彼の地獄人の若しは彼處を離れ、救を望み歸するを望みて處處に馳走するに、復火聚に入り、焰の燃えたる熱鐵の地に墮ち、宛轉して復起ち、處處に馳走し、孤獨にして伴無し。惡業を行へる人は惡業の

此の地獄中の如きは、餘の重き苦惱を受く、是の如き苦は重しと雖も、渇の火の苦に如かず。閻魔羅使は彼の語を聞き已り、焔の燃えたる鐵鉗にて以て其の口を擘き、焔の燃えたる鐵鉢に赤銅汁を盛り、熱沸して焔の燃えたるを其の口中に置き、彼の相應せざる綺語の罪過の故に其の舌を燒き、卽時に消洋けること雪の火に在るが如く、彼の地獄人は二種の苦を受け、具に說く可からず。是の如く燒け已りて唱聲にて大喚ぶに、大喚ぶを以ての故に更に復多多く其の口に內り、焔の燃えたる赤き銅は其の舌を燒き已りてて次いで其の咽喉を燒き、咽喉を燒き已りて次いで其の心を燒き、既に心を燒き已りて次いで其の腸を燒き、既に腸を燒き已り、次いで熟藏を燒き、熟藏を燒き已れば下從り出づ。是の如き罪人の苦を受けて唱喚ぶに、閻魔羅人は卽ち爲に偈を說き、之れを呵責して言はく。

前後の縛がらざる句にして、義無く相應せざる、汝本綺語を說きて、彼の果を是の如くに受く。

若し常に實を說かず、若しは常に讀誦せずんば、彼れは則ち是れ受に非ずして、唯是れ肉臠なる可し。

若し人常に實を語りて、常に善き功德を樂まば、彼れは則ち是れ天の階にして、乃ち名けて舌と爲すことを得。

閻魔羅人は是の如くに地獄の罪人を呵責し、既に呵責し已りて復熱沸せる洋けたる赤銅汁を以て彼の地獄の罪人の口中に置き、是の如く無量百千年歲にして、不相應の綺語を說くを以ての故に是の如き惡報あり。彼の地獄人の、若しは閻魔羅人より免離れるを得て處處に馳走するも、復大聚に入りて身體消洋け、脚・髀・腰等火聚の中に在り、皆悉く洋消けて生酥の塊の如く、洋け已りて復生ず。彼の人是の如く、救を望み歸するを望みて處處に馳走するに、惡業を以ての故に城有るを望見す。寶物中に滿ちて、他の人守護せり。是の如き癡人は惡業の因の故に、心に貪著を生じて走りて

【八】臠の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。原本膾に作る。

如し。
刀火、毒等の惡は、此惡大惡にあらず。舌鑽りて能く火を生じ、心中に在りて增長す。人中
惡口の火は、乾燥る薪を燒くが如し。
若し人實語を樂まば、一切の人供養せん。自の母と異るなきが如く、心喜びて己が父の如くな
らん。
實語は第一の善なり。因樂にして果も亦樂なり。惡を除いて盡きず、一切世間を利せん。
實語は天の階たり、實は第一の藏たり。實は世間の眼たり。實は蜜と異るなし。
惡口は第一の惡たり。說き已れば地獄に到る。汝の舌作して自ら受く、今何ぞ悔いを故
に生ずるや。

閻魔羅人は是の如く地獄の罪人を呵責し、乃ち無量百千年歲を過ぎ、彼の惡業の人は妄語・惡口を樂み行ひ多く作し、他に教へ隨喜せしめて是の如きの苦を受け、若しは彼處より脫れて處處に馳走するも、又復更に閻魔羅人有り、執持して極めて燒き、大苦惱を與ふ。

又彼の比丘、綺語を樂み行ひ多く作す惡業の果報を觀察す。彼れ見聞して知るに、此の地獄人は自業の果報にて極苦惱を受け、第一の苦に逼られ、是の如き閻魔羅人より脫るゝを得て處處に馳走するも、復更に爲に餘の閻魔羅人は執捉へて問ふて言はく『汝は何に患む所ぞ』と。彼れ即ち答へて言はく『飢と極渴に患めり』と。而して偈を說きて言はく。

自身の功德は盡き、自身の鑽りて生ぜし所の、鐵火の燒く飢渴ありて、我れ惡燒の苦を受く。
氷雪の火に於けるが如く、須彌と芥子の如く、飢の地獄の火より、其の勝ることも亦是の如
し。
地獄の火勢の力は、異なる處に行かざるも、是の如き飢渴の火は、天中にも、亦能く到る。

生處は常に凡鄙くして、惡處に在りて生れん。若し人兩舌を說かば、則ち是れ癡に乘らる。
惡業を行ふの人は、常に地獄に燒かる、若し人惡を作すを樂まば、彼れ常に兩舌を說かん。
第一の惡に誑かれ、密言を隱覆せず、兩舌の人に兩面ありて、常に他の背肉を食ふ。
若し人兩舌を捨つれば、彼の人常に堅密にして、知識・兄弟等は、常に曾て捨離せざらん。
若し人にして兩舌を捨つれば、常に王の密語を護り、兩舌を捨つれば寂靜にして、若しは人の妬みの惡を離れん。
何が故に法を行はざりしや、何ぞ兩舌を捨てざりしや、今兩舌の果を受くるに、何が故に心に悔を生ずるや。

閻魔羅人は是の如くに地獄の罪人を呵責し已れり。舌苦を受くるの人、大苦海に入り、乃し無量百千歲を過ぎて、若し彼處の堅鞕き苦みを脫れ已れば、舌還りて本の如し。更に復閻魔羅人を見ず。彼の地獄の人、旣に地獄中の苦みを脫れ得て、處々に急走して、第一苦を受く。忍耐るべからず。惡業の風力、惡報の薪を吹き、大火の燒燃る處々を急走す。彼處に復閻魔羅人あり、執へて問ふ、「汝は何を患へるや」惡業の因緣にて卽ち答へていふ。「我は今飢を患ふ」。閻魔羅人は卽ちその口を擘き、その舌を取る。(この)大勢力人、刀を以て之を割き、驅て自ら噉はしむ。彼は飢を患へること急にして、卽ち自ら舌を食ふ。涎血流れ出で、彼人是の如く自らその舌を食ふ。彼の舌是の如く割かれ已りて復た生ず。生じ已りて復た割かる。業の羂の力ゆへ宛轉りて地にあり、さけび哭く。彼人苦しみ眼轉じ睛動き、大苦惱を受く。孤獨にして伴なし。自ら作し自ら受く。閻魔羅人、爲めに之を呵責し、偈を說きいふ。

舌の弓の放つ所は、利口語の火箭なり。　若し人、惡口にて說かば、彼の果、此と相似たり。
もし世に肉を食する者は、一切の人捨離す。　若し人、惡口にて說かば、彼人の舌は毒の

毒・鑞・鉤に相似し、刀の如く火の如くに等しくして、若し妄語を說く者は、多く惡果報を受く。善業の果を求めんと欲し、眞諦を見るを得んことを欲すれば、常に應に實語を說き、惡妄語を捨離すべし。

彼の地獄人は是の如き等の堅立き苦惱を受け、是の如く無量百千年歲其の舌を犂耕さる。彼の妄語人の舌の還りて口に入るに、彼の人怖畏れえてを破り面を破り、處々に馳走して炭火の聚に墮ち、入り已りて燒き被り、彼の人是の如くに大苦惱を受け、救無く歸する無く、更に復餘有り、閻魔羅人は手に棒刀を執り、頭從り足に至りて皆破散せ令め、唱喚び、號哭きて常に息まず。阿鼻の火は常に極めて燒燃す。

又彼の比丘、兩舌を樂み行ひ多く作して受くる所の果報を觀察す。彼れ見聞して知るに、此の地獄人に兩舌の業果あり、兩舌の因の故にして、復極惡なる地獄の中に到り、彼處に更に閻魔羅人有り、轉た更た甚だ惡しく、罪人の之れを見れば、罪人に問ひて曰く、『汝何ぞ患む所ぞや』と。答へて言はく、『飢に患めり』と。閻魔羅人は卽ち其の口を擘きて其の舌を挽き出し、手中に之れを提ぐ。是の如き舌の量は三百由旬にして、是の如きを普く出し、彼の閻魔羅なる[六]悲無き惡人は、焰の鐵刀の、刄利くして焰燃えたるを取りて舌の[七]一廂を割き、彼の舌の一廂は、狗・野干・豺等有りて之れを食ひ、彼れ是の如き極惡の苦惱を受け、唱喚び、號哭く聲は自ら止まず。彼の地獄人の是の如く唱喚ぶに、閻魔羅人は之れを呵責せんが故に、偈を說きて言はく。

汝は破壞の心を以て、多語を說くことを作せり、一切の法中の垢にして、彼の果にて是の如くに煮らる。

破壞の語の惡人は、生れし處にて常に孤獨にして、何人の兩舌を說くも、善人の讚えざる所なり。

【六】悲無き惡人。これは罪を主として云ひしものにて獄卒を惡人と斷言せるにあらず。

【七】一廂。一部分の意味らし。

ありて百たび到り千たび到り、若しは來り若しは去り、縱橫に之れを耕し、膿血は河を作し、河中に虫有り、又復舌中に多くの虫生ず。舌は極めて柔軟にして天服の軟かきが如く、是の如き軟かき舌を縱橫に耕し已れるに、復更に生じ合ひ、合ひ已れば復耕し、是の如く無量百千億歲是の如き惡舌に惡苦惱を受け、惡苦は堅鞕くして忍耐す可からず。彼の人、苦を受けて唱喚び號哭くも、孤獨にして救無し。是の如きの惡業は是れ母の作せるに非ず、亦父の作せるに非ず、亦天の作せるに非ず、又復是れ異なる丈夫の作せるに非ず、是れ作さゞるに非ず、異なる處より來れるに非ず、自ら作さば失はず、作さゞれば得ず。業を作さば果を受く。彼の人の是の如く苦を受けて叫喚するに、閻魔羅人は之れを呵責せんが爲に偈を說きて言はく。

應に堅惡にして、美味無き妄語を捨離すべし、妄語を說くの人は、心輕くして久しからず失ふ。
是の如き處を信ぜされ、一切の善人は捨てゝ、愛せざること怨家の如く、健者は能く捨離す。
妄語は先に自らを誑き、然る後他人を誑く、若し妄語を捨てずんば、自他を俱に破壞せん。
妄語を言說する人は、先に自らの口を破壞し、彼の人を天は捨離して、終には惡處に到り去らん。
若し妄語を喜樂せば、彼の人に好き處無く、世・出世間道を、妄語の故に捨離せん。
妄語堅くんば報も堅く、黠慧き人は捨離す、妄語に依止する人は、地獄處に到らん。
實を說かば人中に勝れ、一切の人は供養すも、妄語するを一切は捨つ、是の如くば應に實語すべし。
若しは殺さず實を語り、軟心にて衆生を悲まば、實語を天の階と爲し、實を第一の法と爲す。
若しは人の地獄に行き、閻魔羅人の前にある、彼の因緣は妄語なりと、智者は是の如くに說けり。

り。聞知せるも亦爾なり。偈を說きて言はく。

女は惡の根本たり、能く一切の物を失ふ。若し人にして婦女を樂まば、樂は則ち得可からず。
一切の法中の惡にして、婦女は多く諂ひ妬む。　丈夫は婦女に因りて、能く二世を失はしむ。
婦女は樂みて欲を行ひ、婦女は常に諂を行じ、心中に念ふ所は異るも、口には異なる言語を說く。
初の時は軟滑に語るも、後の心は金剛の如し、恩に非ず供養に非ず、心は輕くして憶念せず。
百の恩を念はずして、一の惡を計り、心は鹿愛の體の如く、婦女は惡業の地なり。
丈夫に欲染の心あらば、婦女は人をして失はしめ、此世・未來世に、女の失は第一の失たり。
若し欲を受樂する者は、應當に婦女を捨つべし、若しは婦女を捨つる者に、世間の第一の樂あり。
若し人にして愛を斷たんと欲し、大富樂を悕望ひ、寂靜の處に至らんと欲すれば、彼れ應に婦女を捨つべし。

癡心を以ての故に、是の如く無量百千年歲燒煮かれて破壞れても、又復更に生じ、彼の人、彼處より若しは脫るゝを得已るも復火聚に入り、燒かれ已り煮られ已り、飢渴に逼られて處處に馳走す。

又彼の比丘、阿鼻の不善を滿足せる妄語の業人の、樂み行ひ多く作して受くる所の果報を觀察す。彼れ見聞して知るに、妄語の業人は彼の地獄に在りて、飢渴に亂りに燒かれ、彼れに[五]火刀有り。閻魔羅人は彼の罪人を執り、之れに問ひて曰く、『汝何に患む所ぞ』と。答へて曰く、『飢渴なり』と。閻魔羅人は業を集めし人を執り、卽ち其の口を擘きて其の舌を出す。惡業力の故に、是の如き惡舌は五由旬の量にして、妄語の果の故に彼の舌を旣に出し、閻魔羅人は卽ち取りて焰の燃えたる鐵地に置き、惡業力を以ての故に一千の犂を作して彼の地處に在り、犂の頭に焰燃え、極めて大力の牛

【五】火刀の二字は宮内省圖書寮本に依れり。原本大力に作り、宋・元・明三本には火力に作る。

若し愛の毒より脫るゝを得ば、彼の人は貪を捨て、若しは人にして金と土と等しくせば、則ち涅槃に近からん。

戒を最勝の財と爲し、日を第一の光と爲す、財物は散壞す可きも、戒は常に失滅せず。

戒を持さば三天に生れ、復禪の境界に生る、[四]此世・未來世に、戒の光は相似るもの無し。

若し貪の火を滅する者は、智慧を以て水と爲す、貪心を滅せざる人は、解脫を得可からず。

彼の地獄人は、彼の貪の火により、是の如くに燒かれ已り、復阿鼻の第二の火に入りて燒かれ、復嶮岸に墮ちて利き刀の處に在り、三倍に極めて燒かる。彼の地獄處にて、旋火輪・乾闥婆城・鹿愛に相似せる是の如き物を貪りて、夢に見し所の如し。閻魔羅人は地獄人を執り、乃ち無量百千年歲を過ぎて大苦惱を與ふ、偷盜の業の故なり。

又彼の比丘、阿鼻の邪行の業果を觀察す。彼れ見るに、是の如きの惡業を作せる人は、彼の鐵惡の處を既に脫るゝを得已り、火聚を過ぎ已りて、惡業轉ずるが故に、更に異なる處の邪見處と名くるに入る。彼の惡業の故に婦女有るを見、本人中に先に見し所の者にして、先に行へる所の者の如し。彼れ既に見已りて、無始より來習へる欲の火を發起し、卽便ち疾走して彼の婦女に趣く。彼の婦女は惡業の作せる所、身皆是れ鐵にして、既に前みて到り已らば彼れの抱く所と爲り、復其の口を鳴らし、其の脣等を食ふに芥子許の如きも有ること無く、身も亦食に盡され、盡き已らば復生じ、生じ已れば復食はれ、食はれ已れば復生じ、彼の人、是の如くに堅鞕しき苦を受く。彼の人是の如く、欲火を捨てずして、復異なる處に於て、更に婦女を見、欲火に燒かれて疾走して往き趣き、苦惱を念はず。彼の婦女は身是れ金剛にして、鐵に火焰燃え、彼の罪人を抱くに、抱かば卽ち破碎して摧け沙の摶の如く、一切の身は散り、散り已れば復生じ、生じ已れば復散り、散り已れば復生じ、又復更に走りて是の如くに苦を受け、欲心定まらず。是の如くに比丘、彼處を見已れ

【四】原本には、戒の光云々の句、此世、未來世の句の前にあるも譯の便宜上、前後せしめたり。

巻の第十四

地獄品之十

又彼の比丘、偸盜を樂み行ひ多く作して受くる所の果報を觀察す。彼れ見聞して知るに、是の如き偸盜なる惡業を行へる人は、旋火の輪・乾闥婆城・鹿愛[一]に相似せる大財物の聚を、地獄中にて見る。金珠寶・衣裳・財物有りて、種種に各異り、和合し聚集せり。彼の惡業の人は是の如くに見已りて貪心を生じ、貪癡の業に誑かれて是の如き心を生ずらく、『彼の財物は是れ我が財物なり』と。是の如き癡人は惡業を以ての故に、焰火の然えたる炭の聚の中より過ぎて、走りて彼の物に趣く。惡業の所作にて、閻魔羅人は卽ち刀の網を以て彼の罪人の一切の身分を取り、劈き割き燒き盡くし、唯骨のみ有り、無始より來貪心を捨てずして、是の如くに苦を受くるも猶憶ひて忘れず。爾の時世尊、偈を說きて言はく。

慢心と嫉妒の結[二]ありて、分別して他の物を取らば、貪心の火は人を燒き、世間の火は木を燒く。

貪の毒に齧まれし人なる、彼の人は寂靜たり叵く、數數喜樂して貪り、又復更に增長す。

猶し人の薪を得しが如く、貪心は是の如くに長し、火に燒かれし人は走るを得るも、貪に燒かるゝは避く可からず。

貪る人の輪の轉ずるが如くにして、貪心は人を誑惑く、始も終りも無き世界に、更に貪の如き怨は無し。

貪心に誑かれし人は、海水の中に入り、刀[三]鬪饒き處に入り、貪心に因るが故に受く。

貪の因緣にて王を作し、迭互に相ひ殺害し、母子の和合を離れ、物を愛して鬪處に入る。

【一】鹿愛(Mrgatrsnā)。沙漠中に現はるゝ蜃氣樓様の湖のこと。形のみ有りて實なきに諭ふ。鹿の水を飮まんとて近づく故に此の名あり。

【二】妒結の二字は元本及び明本に依れり。別本煩惱に作る。

【三】鬪の字は元本、明本に依れり。次の後も同じ。

作せる所なり。若しは彼處にて受くる惡苦惱を離れ、歸を望み救を望みて疾く異なる處に走り、彼れ既に走り已るに、大山有るを見る。走りて彼の山に赴かば、多く黑虫有り、虫の身に焔燃え、彼の山中に滿ち、彼の地獄人の黑虫處に入るに、彼の黑虫の身は其の觸焔の如くにして、是の如き黑虫は彼の罪人を食み、分分に分散し、碎壞して塵の如からしむ。(罪人は)苦み惱みて唱喚べば、唱喚ぶための故に焔の燃えたる黑虫は卽ち其の口に入り、咽喉等從り乃至は熟藏にして、入り已りて食み、彼の人、極めて堅惡なる苦惱を受く。若し彼の罪人の惡業を造作するに、五逆は阿鼻にして、十不善の業の和合せる業と同じく、相似たる果を受け、是の如く無量百千年歲黑虫に食まれて大苦惱を受け、若し彼處を離るゝも、復食肉畜生の林を見る。惡狗・野干・師子・熊・羆・虎等多饒く、疾走して往き赴き、既に彼れに到り已らば、爲に諸の惡獸は分分に分張して之れを噉食ひ、頭を破りて腦を食ひ、咽を食ふ者有り、頭を食ふ者有り、肩を食ふ者有り、胸を食ふ者有り、腹を食ふ者有り、腸を食ふ者有り、腸根を食ふ者、大腸を食ふ者、小腸を食ふ者、熟藏を食ふ者、生藏を食ふ者あり、髀を食ふ者有り、踹を食ふ者有り、足の趺を食ふ者有り、彼の人是の如く食はれ已らば復生じ、初め生ぜしは軟嫩にして、軟嫩なるを以て故に更に食はれては苦重く、食はれ已らば肉生ず。又多く殺生し、惡業を作集して惡果を受くるが故に、彼の地獄人は、是の如く無量百千年歲、彼の地獄處にて惡業の果を受け、惡業の惡果は異の相似るものは無く、譬諭す可からず。

いで復更に墮嶮岸受苦の處と名くるに入る。普く彼の地獄に十一の焔の聚ありて周匝を圍遶み、孤獨にして伴無く、業の羂に縛られ、一切內外は皆悉く遮障られ、曠野中を行き、一切の地獄の諸の苦惱中の勝れたる苦到らんと欲す。疾走して往ゐて墮嶮岸受苦之處と名くるに詣るに、足を下さば則ち洋くるも、足を擧ぐれば則ち生じ、生じて則ち更に軟かくして、其の觸は甚だ苦しく、堅く利き苦惱あり、極めて大いに怖畏れ、是の如くに怖畏れて面を皺め口を喎め、手足・身分の一切は消洋け、然る後次第に彼の嶮岸に到る。彼の人彼處にて嶮岸より墮つるも、惡業を以ての故に風を作し、之れを擧ぐること三千由旬にして、下りて未だ地に到らざるに雕・鷲・烏・狗・獯狐之れを食ひ、風は復更に擧げ、彼の惡風の觸は火の如く刀の如くにして、擧げて上に在ら令め、更に復(雕等は)之れを食ひ、是の如くに上下し、乃ち無量百千年歲を過ぎて若し彼處を離るれば、更に復走りて旋轉印孔地獄の處に向ふ。彼處に到り已れば下に在りて則ち千輻輪の生ずること有り、輪に金剛の軸あり、焔[三三]然えつゝ速に轉じ、彼の地獄人の卽ち到る時に於て其の輪疾く轉じて一輪は身を破り、一輪は頭を破り、彼の破れし處より熱焔の脂出で、兩眼は消洋す。復二輪有り、轉じて兩肩に在りて兩肩の骨を破り、一切を消洋す。其の兩手に於て各一輪有り、其の輪疾く轉じて猶し攢き火の如く、火の手に生じては二種の火あり、一は是れ輪火、一は是れ攢火にして、肉中より火を出す。是の如き鐵輪は焔燃え、疾く轉じて彼の人の身骨の一切を碎壞し、疾く轉じ破碎して、沙摶の如からしむ。又復背上に火輪あり、千輻にして速疾かに轉じ、背骨乃至は跨骨從り人根の處に到り、復鐵鎖有りて兩頭は柱に繫がり、罪人上に在り、推して來去せしめて次第に之れを摽ち、熟藏に入り、復生藏に入り、生藏を破り已りて次に其の腸を斷ち、又大坐せしめ、髀の上に輪生じ、疾く轉じて髀を破り、內踝に輪生じ、骨を破りて髓出で、足下の鐵鉤は其の兩足を破り、大苦惱を受く。惡業を行ひし人は是の如く無量百千年歲に阿鼻の苦を受け、堅鞕しき惡苦にして、忍耐す可からず。自業の

【三三】然の字は明本に依れり。別本に利に作る。

骨・髓を皆食ふ。復異なる鳥有り、火中に生れ、火中を行き、火中にて食ひ、是の如きの惡鳥は地獄人の一切の身の肉を食ひ、次いで其の骨を破り、既に骨を破り已らば肉を破りて血を飲み、彼れ血を飲み已らば次いで其の髓を飲み、彼の地獄人は唱喚き悲號び啼哭きて悶絶す。次に復鳥有りて火髻行と名け、火の燒かざる所にして、極めて大いに歡喜し、其の頭を破り已りて先づ其の血を飲み、次に復鳥有りて食髑髏と名け、火焰の嘴を以て其の髑髏を破りて其の腦を飲み、次に復鳥有りて名けて食舌と爲し、其の舌及び齒根の肉を食ひ、食ひ已れば復生じ、新に生じて柔軟なること蓮華の葉の如くに、是の如きを復食ひ、食ひ已らば復生ず。以て復鳥有りて名けて拔齒と爲し、嘴は焰の鉗の如く、其鳥大力にして盡く牙齒を拔く。次に復鳥有りて執咽喉と名け、身は甚だ微細にして其の咽喉を食ひ、次に復鳥有りて苦痛食と名け、其の肺を食ひ、次に復鳥有りて食生藏と名け、其の心を破り已りて其の汁を飲み、次に復鳥有りて名けて脾聚と爲し、其の脾を食ひ、次に復鳥有りて腸內食と名け、其の腸內を食ひ、次に復鳥有りて喜背骨と名け、其の背骨を破りて其の髓を飲み、飲み已らば外に出で、次に復鳥有りて名けて脈藏と爲し、脈脈を斷ち已り、脈の孔中に入りて其の汁を飲み、苦を受けて唱喚ぶ。次に復鳥有りて名けて針孔と爲し、嘴の利きこと針の如くにして、其の血を飲み、次に復鳥有りて骨中住と名け、其の頰骨を破りて內に在りて食ひ、次に復鳥有りて食肉皮と名け、其の外皮を食ひ、次に復鳥有りて名けて拔爪と爲し、一切の甲を拔き、次に復鳥有りて名けて食脂と爲し、其の皮を破り已りて其の脂を飲み、次に復鳥有りて名けて緩筋とし爲し其の筋を破り裂きて一切を皆食ひ、次に復鳥有りて名けて拔髮と爲し、其髮根を拔く。是の如き阿鼻地獄處の三千由旬を惡鳥處と名け、彼れに復更に異なる地獄人有りて同じく共に食を被り、是の如く無量百千年に食はれ、食はれ已らば復生じ、彼の人是の如くにして、鳥に食はるゝを怖畏る。阿鼻地獄は一切の苦の網の遮り覆ふ處にして、既にして脫るゝを得已り、歸を望み救を望むも、次

似たる身を生じ、頭面は下に在り、足は上に在り、墮ちんと欲する時に臨み、大力の火焔に抖擻られて打ち壞られ、二千年を經て下に向ひて行くも、未だ阿鼻地獄の處に到らず。阿鼻地獄は、是の如くに下に向ふも、中間に在りて未だ往到す可からず。阿鼻と謂ふは、阿鼻地獄は欲界の最下にして、此の欲界從り色界を上り行き、是の如く乃至〔三〕阿迦尼陀にして、兩界を已に上らば更に處有ること無く、阿鼻地獄も亦復是の如くにして、下に更に處無し。彼處に墮ち已らば、惡業力の故に、極苦惱を受け、是の如き阿鼻地獄の人の大焦熱地獄の罪人を見るに、是の如きは他化自在天處に相似して異ならず。彼の阿鼻獄に多饒く焰の鬘あり、既に彼の中に生るれば先づ其の頭を燒き、次いで其の身を燒き、彼の人是の如く、頭と身に燒熱あり。今少論を說くに、是の如き焰の鬘は、須彌山王を少時圍遶せば、幷に彼の山王の六萬の眷屬なる所有る山河・陂池・林樹を皆能く燒き盡し、唯地獄人のみは久しく燒かれて死せず。今少喩を說かば、譬へば火に煮られし鐵器の極めて熱きに、脂の一滴を置かば卽時に燒き盡すが如く、是の如く是の如く、一逆の罪業あらば阿鼻の火は能く人の身を燒き、四天下處の衆生及び山・天・阿修羅・諸の龍・山窟・洲林・大海を皆能く燒燃し、若し人、二逆の惡業を造作せば能く二海を燒くこと前に說く所の如く、若し人、三逆の惡業を造作せば能く三海を燒き、是の如く四業は能く四海を燒く。彼の身の燒熱せられては鐵器の燒くるが如く、卽ち入る時に於て、更に復輪山及び大輪山を卽ち入る時に於て皆能く燒き盡し、一切の海畔に攝めらるる諸の龍・大阿修羅・諸の畜生の衆・復善業の有りし四天下處・欲界の六天も、地獄の氣を聞かば卽ち皆消盡す。何を以ての故に。地獄人は極めて大いに臭きが故なり。地獄の臭氣は何が故に來らざるや。二大山有り、一を出山と名け、二を沒山と名け、彼の臭氣を遮ればなり。彼の惡臭氣は異なれるの相似する無し。惡業を以ての故に地獄は寬廣くして、彼の地獄中に焰の嘴の鳥有り、其の嘴は堅くして利く、色白きこと氷の如く、是の如き惡鳥は、地獄中に於て、一切の罪人の身の皮・脂・肉・

【三】阿迦尼陀(Akaniṣṭha)。又は阿迦尼吒、阿迦尼沙託、略して尼吒等と云ひ、色究竟と譯す。色界十八天の中、最上に位する天の名。卽ち第四禪天の第九なり。

さる丶苦あるをや。

是の如き等の無量なる、種種の大苦惱あり、汝は須臾の間に於て、是の如き苦惱を受けん。閻魔羅使は是の如くに惡業の人を呵責し、既に呵責し已りて將ゐて地獄の極めて苦惡の處に向へり。無量の時を經て業の羂に縛られ、彼の人、惡業にて一切の身分に皆悉く火燃え、樹の內乾きて多時に燒を被るが如し。地獄の門を去ること、道里遠からず。彼の地獄處は譬諭す可からずして、爾の時、世尊、偈を說きて言はく。

四角にして四門有り、廣長分分の處にて、燒かれ、煮られて自在ならず、地獄人は多く倒る。

彼れを去ること二萬五千由旬にして、彼の地獄の無量の堅惡なる啼哭の聲を聞く。堅き苦ありて味無く、破壞して畏る可く、異なれるものの相似せる無く、異なる地獄中の、彼れに生れし彼の人若し聞かば、一切の地獄の所有る苦惱を皆悉く憶はず、此れを聞かば則ち死す。何ぞ況んや未だ地獄に生れざる人をや。彼の地獄の人は人世間中に惡業を作し已り、中有中、種種の苦に覆はれ、復彼の聲を聞きて十倍に悶絕し、彼の人是の如くに苦惱は無邊にして、身心に苦惱あり、心は更に起亂し、夢の如くに相似たり。彼の人轉た復阿鼻に近く住するに、惡業を以ての故に寒風に吹かれ、地下・水中にても人の曾て觸れざる(所)なり。彼處に日無く、彼の風の勢力は劫盡風に過ぎ、彼の風は極めて冷くして此の中の雪を形り、氷の如くにして異なる無く、彼處の水上の冷風は更に冷く、惡業を以ての故に風は利き刀の如く、此の風の勢力は能く大山の高さ十由旬なるを吹きて移散せしむ。是の如きの惡風は中有の人を吹き、彼の人に寒の苦あり、[19]色等の諸陰は極苦惱を受け、是の如き苦惱は譬諭す可からず。劫の盡くる時七日に出す熱の如きより更に一千倍に勝る熱を悕望し、此の取の因緣にて則ち[20]有分有り、即ち彼の悕望にて、中有の[21]陰滅して異なる陰生じ、受陰の生ずること有り。譬へば第二の三十三天の如きは、五・四・三・二・一由旬等の如し。業力自在にして、相

【一九】色等の諸陰。肉體及びその感覺等。
【二〇】有分。存在。生存。
【二一】陰。こゝには身體、肉體のこと。

汝は已に多多く瞋り、瞋りて猶多く思惟し、是の如くにして地獄を得たるに、何が故に今悔を生ずるや。

顚倒の惡と邪見の二業、已に破壞するに、汝は邪見の心を以て、他をして邪見に任せしめたり。

此等の諸の惡法は、身・口・意從り生ず、汝は癡心を以ての故に、自ら作し他に向ひて說けり。

多多く惡を作し已り、決定して不善を行ひしかば、今此處に我れ執れり、何が故に心に悔を生ずるや。

大海中に於て、唯一掬の水を取るが如く、此の苦は一掬の如くにして、後の苦は大海の如し。

若し人惡業を作さば、彼の人は自らを愛せざるなり、惡業は地獄に煑らるれば、應に惡業を念ずべからず。

惡人は惡行を見、善人も亦[一八]是の如し、惡を行ひ善を憎む人は、是の如く地獄に生る。

癡人は卽ち善を捨て、而も不善に入る。汝は癡人にして寶を捨て、石等を取れり。

種種の好き法饒く、佛寶等は無量なり、汝は既に人の身を得たるに、何が故に法を樂まざりしや。

常に惡人を捨離し、常に善き心意有らば、求めて涅槃を得ん、外道は得可からず。

初・中・後皆善くんば、法に於て常に樂を生ず、初・中・後に苦を生ずるは、是れ惡業の果報なり。

是の如くんば常に惡を捨てて、善行に攀緣せよ、惡業を捨つる人は、生れし處にて常に樂を受けん。

無始の生死より來、惡業にて數數燒かれしに、何故に疲倦ずして、愚癡にて癡心に屬するや。

汝は前に惡業に燒かれ、後に大火の爲に燒かる、惡業は地獄の因にして、惡業の人に煑熱あり。

惡業の果を說くを聞くも、心は則ち應に調伏すべし、況んや惡業を作し已りて、是の如く燒煑

【一八】是の如しとは、善人は善行を見るの意。

以て殺せり。

(佛)は三界に最も勝ると爲し、一切の過を已に離れ、一切の縛を解脫せるに、汝は彼れに於て惡を作せり。

(僧)は一切法の藏にして、能く解脫の門を開くに、汝は惡人にして僧を破りて、彼の果を今此れに受く。

(阿羅漢)は一切の使を已に過ぎ、一切の結を已に捨つるに、癡人は羅漢を殺して、彼の果を今此れに受く。

(妄語)は諸法中にて火の如し、實語の寶を破壞し、汝常に妄語を說きて、彼の果を今これに受く。

迭に相ひ破壞する義を、念念中憶念し、汝は兩舌の說を作して、彼の果を是の如くに受く。

(惡口)は刀の如く火毒の如く、惡中の第一の熱なり、汝は常に惡口を說きて、彼の果を今此れに受く。

(綺語)は前後の顚倒せる向にして、義無く相應せず、汝は多く綺語を說きて、彼の果を今此れに受く。

衆生は自在無くして、常に命を愛して怖畏るゝに、汝な多く衆生を殺して、今苦惡の果を受く。

貪心にて他人を陵し、而も他の財物を取り、貪欲の心の故に盜みしが、今の時果報は熟せり。

癡の暗に覆はるゝ故に、覆はれて第二の惡を作せり、已に欲と邪行を作せるに、何が故に今悔を生ずるや。

他の物を得んと欲し、自ら多く貪りて思惟せるも、彼の物は得可からずして、今是の如き果を得たり。

遍く我が身體を縛らしむるや。
我れ今是の如く見るに、行く物も動かざる物も、是の如き一切の處は、大火悉く充滿せり。
一切の地界の處に、惡人皆遍く滿ち、我れ今歸する所無く、孤獨にして同伴無し。
我れ虛空の中於て、日・月・星を見ず、此の一切は顚倒し、一切普ねく闇に覆はる。
我が身の一切を鉤き、破裂して大苦を受く、我れ歸依する所無し、云何んが脫るゝを得んや。
苦惱の聚を增長し、一切の周匝の人は、念念に衆苦を增し、身心皆苦を受け、苦惱は我が身に逼るも、更に餘の同伴無し。

閻魔羅人は惡業の人の說く所の偈を聞き已り、瞋怒れる心を以て、自らの惡業に誑かれし人に答へて曰く。

汝は前に已に惡を作せり、後何すれぞ思量を用ひん、前に癡の誑かす所と爲りては、今に悔ゆるも何ぞ及ぶ所ならん。
汝の作せし所の惡業は、惡中の大惡、不善中の不善、苦中の大苦たり。
或ひは劫或ひは滅劫に、大火は汝の身を燒く、癡人の已に惡を作れるに、今何ぞ悔を生ずるを用ひん。
[一四]是れ天・修羅・[一五]揵達婆・龍・鬼に非ず、業の羂に繫縛されては、人の能く汝を救ふこと無けん。
若しは人の業の縛の爲に、縛られて地獄に在り、送られ到りて自在ならざるは、一切因緣の行なり。
[一六]汝は惡中の惡を作せり、此の惡は第一の惡にして、殺母の惡業を作りては、此の業已に決定せり。
[一七]若し人の本生れし所にては、父の身分增長せるも、汝の父は自在ならず、汝は惡しくして刀を

【一四】是れ天、修羅等の繫縛するに非ず、業の繫縛するなれば、如何んとも脫れ難しの意ならん。
【一五】揵達婆(Gandharva)。帝釋の俗樂神。須彌の南の金剛窟中に住し、唯香のみを食して命を存すと云ふ。尋香神ともいふ。
【一六】以下の五連(四句を一連とす)の偈句は、案ずるに殺母殺父、出佛身血、破和合僧、殺阿羅漢なる五逆罪を說きしものと思はる依つて經文には無きも、解し易き樣括弧內の字句を增補せり。又後の偈句中に出ずる括弧內の字句も同樣意義を解し易からしめん爲、增補せるものなり。本文中には其の字句無きものと知るべし。
【一七】人間は所詮、父の身體より分れて發達せるも、汝の父は汝の身を左右するの力なし。この故に汝は擅に惡を行ふたりの意。

子・蛇蟒・野干・狗犬の屬を見る。閻魔羅人は手に種種の畏る可き器仗を捉りて其の身體を打ち、唯罪人のみ見て餘の人は見ず、是の如く見るが故に極めて面眼を皺む。油の漸く盡きて亦漸く滅するが如く、彼の惡業の人は是の如くに死滅して中有の色生じ、不見不對にして、其の身は猶し八歲の小兒の如く、即ち死して即ち【三】到り、即ち到る時に於て閻魔羅人に執持られ、焰の燃えたる鐵の羂もて其の咽を繫縛り、兩手を反束ねる。東西・南北・四維・上下に火焰の燃えたるを見、彼の火中を見るに、種種なる惡面の閻魔羅人あり、火中は沸熱せり。種種の畏る可き器仗を執りて其の身を打ち、彼の人既に見るに、其の臂を反縛せられて、極めて大いに怖畏る。閻魔羅人は罪人を呵責し、既に呵責し已りて、將ゐて南廂に向へり。懊惱・啼哭して、偈を說きて言はく、

我れ世間の命を離れては、癡なりしが如く伴無くして行き、惡人我れを將ゐて去り、周匝に惡人饒し。

一切は唯火焰にして、空に遍く中間無く、四方及び四維の、地界に空處無し。

去る處は自在ならず、彼處は知る可からず、曠野は我れを漂はして去り、一切の伴侶無し。

人の安慰むるを見ること無く、救ひて我が苦を脫れしむるは無く、力無く自在無く、身を燒きて極めて苦を受く。

送られて我れ自在ならず、何處に去るやを知らず、遍き身は一切の處にて、皆鐵を以て繫縛さる。

【三】物に非ず知識に非ず、妻に非ず亦子に非ず、人の來りて我れを救ふこと無きは、我が惡を嫌ふを以ての故なり。

法を失はゞ歸救無く、苦惱は心を破壞す、閻魔羅人は我れを縛りて、歸救は得可からず。

我れを瞋れるが故に是の如く、我れに多くの急しき苦を與ふるなり、何人が是れ誰か遣はして、

【三】到の字は宮内省圖書寮本に依る。別本倒に作れり。直後の「即ち到る時に於て」の到の字は、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。原本同じく倒に作る。

【三】知識も妻子も我れを救ふこと有るに非ずの意ならん。

復驚恐す。師子・虎・豹・熊・羆及び蛇蟒等多饒くして、極めて怖畏を生じて大高山に上り、嶮岸より墮ちんと欲して屎にて床敷を汚し、彼の山より墮ちんことを畏れて手を申べて上に向ひ、諸の親しきは見已りて皆言はく『此の人手にて虛空を摩す』と。是の如き病人の彼の山林・巖崖・窟穴を見るに、多饒く柳樹ありて火焰熾に燃え、其の上に墮ちんと欲して心驚怖を生じ、號聲にて唱喚び、復更に糞を失し、眼目動轉し、恐怖れて面を皺め、眼中より淚出で、遍き身の毛起ちて棘刺の針の如く、卵は縮みて却き入り、口中より涎出で、然る後此の人の四大の怒盛なり。四とは所謂地界・水界・火界・風界にして、地界瞋怒れば一切の身分堅からずして破壞すること、兩名の間に水の聚沫を壓すが如く、沙摶を壓すが如く、一切の身の骨と身分の脈道は斷絕ち散壞れ、普く彼の人の身は第一の苦を受く。是の如きは、地界瞋怒れるが故に爾なり。惡業を以ての故に水界瞋怒れば、咽喉は利ならず、氣を抒きて死なんと欲し、筋脈皆緩み、大水の漂へるを見て、流れて眼耳に入る。火界瞋怒らば自ら其の身の大屋中に在りて燒燃かるゝを見、大苦惱を受け、一切の身分に堅鞕しき苦を受け、苦を受くるを以ての故に呻喚て廻轉り、手足を亂し動かし、頭は暫くも住まらず。風界瞋怒れば堅澁き觸有り、種種に輕く冷く、一切の身分は堅鞕り一閉塞り、種種に能く吹かれ輕きとは、上り去り、虛空に昇りて大嶮岸に墮つるが如きにて、冷しとは、能く攣縮りて一切の筋を卷くなり。彼の人の四大は死に臨まんと欲する時、四大の力盛にして、是の如く四大の毒蛇の瞋怒りては是の如き等の種種の苦惱を受け、彼の苦惱は譬諭有ること無く、彼の人是の如く、一切の身分皆悉く破壞して水沫の塊の如くにして、水に漂はされ、燒かるゝ等、第一の苦を受けて臥敷を把挽み、手は虛空を摩す。現在の心滅すれば中有の心生じ、山頂に在りて身を放ちて地に墮つるが如く、旣に山頂を離るれば攀捉する所無くして空中を轉び行き、彼の人是の如く生れて中有に在り、印の如くに相似たる中有の心生じ、彼れに於て則ち惡しき面・手・足ある猪・象・驢・馬・熊・羆・虎・豹・師

劈風に殺され、次を家旋身虫と名け、塊過風に殺され、次を脂遍行虫と名け、破髀風に殺され、次を涎灑虫と名け、破節風に殺され、次を齧齒骨虫と名け、髀破不覺風に殺され、次を涎食虫と名け、力爛風に殺され、次を唾冷沫虫と名け、筋椎柱風に殺され、次を吐虫と名け、十和漂内行旋風に殺され、次を蜜醉虫と名け、蜜亂風に殺され、次を六味悕望虫と名け、毛爪屎壞風に殺され、次を抒氣虫と名け、精出風に殺され、次を增味虫と名け、破壞作風に殺され、次を夢悕望虫と名け、寬柱風に殺され、次を毛生虫と名け、乾屎作風に殺され、次を善味虫と名け、一廂縛風に殺され、次を虫母虫と名け、六鷲風に殺され、次を毛光虫と名け、一切身分作風に殺され、次を毛食虫と名け、健壞風に殺され、次を習習虫と名け、熱作風に殺され、次を瘡生風と名け、和集風に殺され、次を粥粥虫と名け、下上風に殺され、次を筋閉虫と名け、命風に殺され、若し人、命風幷に屎の出ずる時は彼の人卽ち死す。次を脈動虫と名け、閉風に殺さる。

一切の衆生の死なんと欲する時に臨み、是の如き等の虫と是の如き等の風あり、相應せざる風彼の虫を殺し、是の如く阿鼻地獄の人は顚倒の惡業にて、是の如くに下上の顚倒風吹き、彼の惡業の故に、大力風を作して遍く其の身を吹き、此の是の如き等の八十種の風は八十種の虫を殺し、相應せるが如くに殺し、顚倒せるが如くに殺す。風有りて名けて必波羅針と爲し、能く一切の身分を乾燥か令むること、機關を以て用つて甘蔗を壓すが如く、一切の血を乾かし、一切の脈を閉ぢ、一切の筋を斷ち、一切の髓を洋けしめて、大苦惱を受けしむ。惡業を行へる人なる阿鼻の人は死なんと欲する時に臨み、彼の虫死なんと欲し、則ち色有るを見る。阿鼻の人は地獄の相を見る。見るが如くんば屋舍は黑き幕に覆はれ、一廂に火起りて次第に周遍く、黑き幕の屋内の一切に焰燃ゆ。彼の人是の如くに屋の燃ゆるを見已り、驚怖・戰恐して面を皺めて呻喚き、兩手を亂し動かし、眼轉き涎出で、齒を齧みて聲を作し。兩の脣は相ひ觸れ、彼の人更に復第二の色なる大黑闇聚を見、轉た

二　八十種の虫其の身體に在りて、一切の身の脈・筋・皮・脂に皆悉く遍く有り。（然るに）八十種の風吹きて彼の虫を殺す。八十種の虫の八十種の風に殺さるとは、何等か八十なりや。一を毛虫と名け、毛過風に殺され、二を黑口虫と名け、隨時風に殺され、三を無力虫と名け、夢見亂風に殺され、四を大力作虫と名け、不忍風に殺され、五を迷作虫と名け、虫色字作風に殺され、六を火色作虫と名け、味押風に殺され、七を滑虫と名け、鐵過風に殺され、八を河漂虫と名け、糞屎上風に殺され、九を跳虫と名け、糞門行風に殺にされ、十を分別見虫と名け、憶念過風に殺され、十一を惡臭虫と名け、皮過風に殺され、十二を骨生虫と名け、味過風に殺され、十三を赤口虫と名け、脈過風に殺され、十四を針刺虫と名け、欲過風に殺され、十五を脈行食虫と名け、骨過風に殺され、十六を必波羅虫と名け、食力風に殺され、十七を堅口虫と名け、持牛風に殺され、十八を無毛虫と名け、垢作風に殺され、十九を針口虫と名け、濕過風に殺され、二十を胃穿破風と名け、屎多過風に殺され、二十一を不行虫と名け、食和合風に殺され、二十二を屎散虫と名け、齒破風に殺され、二十三を三節虫と名け、喉集風に殺され、二十四を腸破虫と名け、下行風に殺され、二十五を塞脹虫と名け、上行風に殺され、二十六を金虫と名け、三廂風に殺され、二十七を糞門熟虫と名け、節節行風に殺され、二十八を皮作虫と名け、心過風に殺され、二十九を脂嘴虫と名け、散亂風に殺され、三十を和集虫と名け、開合風に殺され、三十一を惡臭虫と名け、送閉風に殺され、三十二を五味共未虫と名け、藏集虫に殺され、三十三を築築虫と名け、藏散風に殺され、三十四を藏華虫と名け、行去來住走作風に殺され、次を大諂虫・蛇虫・黑虫・大食虫・煖行虫・眼有鼻虫と名け、身風に殺され、次を舐骨虫と名け、瞻過風に殺され、次を黑足虫と名け、冷沫過風に殺され、次を蜜割虫と名け、髓過風に殺され、次を腦虫と名け、依爪風に殺され、次を髑髏行虫と名け、依足一廂風に殺され、次を頭骨行虫と名け、不覺作風に殺され、次を煩惱與虫と名け、破壞風に殺され、次を耳行虫と名け、行

【二】八十種の虫。八十種の風。の關係は當時印度の生理學の知識を示して興味多し。

り、面色甚だ惡しく、心は常に驚き恐れ、人中の鄙劣なり。一切の諸の親・兄弟等の衆にも、惡因緣無くして驚畏を生じ、一切世界の處處に煙を見る。此の人の身の中は諸界調はず、遠く惡色を見、洗浴するも速に乾き、身恒に熱に患み、黃病に患むを喜び、口に常に醎苦あり、床敷は軟かなるも堅き惡觸を得、吹笛・打鼓・琵琶等の聲は之れを聞くも猶惡し。況んや餘の鄙しき聲をや。又復彼の人の鼻識は破壞し、好き香物に於て嗅げば則ち惡臭あり、一切の身分皆悉く臭く爛れ、一切の髮毛は墮落ちて堅からず、齒の色は變壞し、手足は破裂し、一切の算數を皆悉く忘失れ、天常に怖嚇し、夢には則ち心驚く。常に驚くを以ての故に常に瘦せて肥えず、若しは好き花を以て頭及び身に置くも則ち速に萎え乾き、衣裳は健く破れ、喜びて垢穢を生じ、衣を澡浴浣ふも速に垢有り、道中に於て行くに因緣無くして倒れ、既に地に倒れ已れば身を壞りて瘡を作し、其の身體に於て瘡更に多く出でて復差え難く、臥睡れば咽乾きて常に多く飲むを喜び、城邑・聚落は、實には自ら人饒きに皆空と見、日月・星宿の實の色を見ず、微軟風來るも堅き觸あるを覺ゆること、鐵の身に觸るゝが如く、もし火に近かんとすれば身則ち燒を被りて兩重の熱觸あり、月に於て溫を覺え、極めて冷き水に於て亦其の煖を覺え、極めて好き樹林を見て惡處と爲し、先の時に聞ける所の愛す可き鳥の聲を聞けば野干の如く、一切の人を見れば塚と異ならず。常に一切の時に不喜の聲を聞き、復酒を飲むと雖も心亦喜ばず、曾て惡を作さゞるも罪罰を得、大なる巷の中、四出の巷の中、三角の巷の中に於て屎を放ち尿を放つ。是の如きの人を諸天は捨離りて常に一切の不饒益ぬ事を得、彼の人の身の色は燒を被れる林の如くにして、一切の世人は憎みて愛せず。彼の惡業の人は現在世に於て先に是の如き阿鼻の相有り、次いで死相現はれては白日に月を見、夜中に日を見、自らの影を見ず、因緣有ること無くして惡聲を聞き、鼻は則ち皺倒ち、髮毛相ひ著き、身に熱等の必死の病を得て身をあげて蒸熱あり、四百四病は唯四百を見、普き身を逼惱すことは、火坑に在りて燒煮からるゝが如し。

生れんが爲の故に大火を以て其の母を燒き殺すこと有り、又復人有りて、高山の嶮岸より母を推して墮ちしむ。是の如くにして母を殺し、又復人有り、母を水中に置き、是の如くにして母を殺し、又復人有り、飢えしめて其の母を殺し、惡道の癡人は惡聞に誑かれ、是の故に母を殺し、貪心にて天を悕ふ。是の如くにして母を殺すに、或ひは飢えしめて殺す有り、或ひは山上の嶮處に在りて推して殺し、或ひは火にて燒き殺し、或ひは水中にて殺し、天を得んが爲の故に、彼の人天を愛して自らの母を殺す。瞋心を以て毒等にて殺す有り、輕心有るが故に、心の因緣の故に、心は自在なるが故に、是の故に母を殺し、是の如くに父を殺し、三毒の過を以ての故に是の如く殺す。或ひは復人有り、癡心を以ての故に如來は是れ大福田なるを知らずして、瞋れる惡心を生じて其の身より血を出し、是の如くに僧を破り、阿羅漢を殺し、瞋多きを以ての故に、彼の人是の如く、一切の因緣と一切の作業を皆悉く遠離して、阿鼻大地獄中に生る。彼の惡業の人は死なんと欲する時に臨み、(或る)人には、身に卽きて阿鼻地獄の大火已に生じ、或ひは復人有り、死なんと欲する時に臨み、或ひは中有中なる彼の中間に生れて阿鼻の苦を得、是の如き等は何の時に〔一〇〕隨ふも、阿鼻地獄の惡業を造作せば、卽時に一切の善業を燒燃し、所有る出家の決定して業を受けたる解脫分の業も、一切燒燃せられて戒を受くるを得ず。是の如く燒け已るに、不善の惡業は彼の人の身を燒き、過去の久遠に作せる所の勝れし業も、五逆を作すを以て、彼れ是の如き業を決定して受けず。何處にも決定し、地獄に決定して能く命をして短かゝらしめ、若しは百年の命も二十年にして盡き、思念して求むる所を皆得可からざること、譬へば種を下して鹹地に在らしむるが如し。彼の惡業の人は是の如く、乃至自ら天に隨身するも卽時に捨て去られ、一切の作す所は果利を得ず、諸根頑鈍くして、境界中に於て數惡夢を見、常に一切の饒益せざることを得、所有の妻子及び奴婢等は皆悉く捨て去り、常に飢渴に悩み、若しは美食に遇ふも本味を得ず、聲は已に破壞れ、一切に惡觸あ

〔一〇〕隨の字は、宋・元本及び宮內省圖書寮本に依る。別本に墮に作れり。

の人是の惡業の因緣を以て、則ち阿鼻大地獄中に生れ、一劫を經て住し、若しは[六]減劫に住す。業既に平等なるも而も減劫に住するは、劫の中間に惡業を造作して阿鼻に墮つるを以ての故にして、(是の故に)彼の人減劫に阿鼻にて燒煮さる。何を以ての故に。時節已に過ぐれば迴さしむ可からず。是の故に彼の減劫に於て燒煮され、苦惱堅鞕くして、多くの惡業を少時に受くるを以ての故なり。是の如く阿鼻の業を造作するに、堅きに[七]非ざる心有りて、軟中の心にて作さば、受くる苦は重からざるも、人の一阿鼻の業を造作するが如きに、若し重心もて作さんに、彼れ勝れし苦を受く。一切の作業及び業の果報は一切皆是れ心・心數法に(因る)。心は皆自在にして、心は皆和合し、心は隨順して行ふ。復六結有りて、衆生を繫縛す。若し心寂靜ならば、衆生は解脫せん。彼の次第の如く阿鼻地獄の中に在り、苦の因緣の故に受くる所の苦惱の身に軟なると麁なると有り、若しは[八]五逆の人は、地獄中に於ける其の身長大にして、五百由旬あり、若しは四逆の人は四百由旬、若しは三逆の人は三百由旬、若しは二逆の人は二百由旬、若しは一逆の人は一百由旬なり。

又彼の比丘、阿鼻大地獄處を觀察するに、此れを[九]毛起と名く。最大地獄は凡そ幾處有りや。彼れ見聞して知るに、普く此の地獄に十六處有り。何等は十六なりや。一を烏口と名け、二を一切向地と名け、三を無彼岸常受苦惱と名け、四を野干吼と名け、五を鐵野干食と名け、六を黑肚と名け、七を身洋と名け、八を夢見畏と名け、九を身洋受苦と名け、十を兩山聚と名け、十一を閻婆叵度と名け、十二を星鬘と名け、十三を苦惱急と名け、十四を臭氣覆と名け、十五を鐵鍱と名け、十六を十一焰と名け、普く彼の阿鼻最大地獄に是の如き等の十六の別處有り。

又彼の比丘、是の如く觀察するに、人の死なんと欲する時、乃至は中有中にて、云何んが阿鼻地獄に行く人は、此の中苦を受け、復苦處に生るゝや。彼れ衆生を見るに、貪欲・瞋恚・愚癡に覆はれて惡業を造作し、阿鼻地獄の惡行を成就す。是の如くに造作する阿鼻地獄の惡業を行ふ人は、天に

【六】減劫。世界の成立より空に期する間を成劫、住劫、壞劫、空劫なる四中劫に分ち、此の各中劫に二十小劫あり。住劫の二十小劫の中、初の一劫は人壽無量歲より百歲每に一歲を減じ、人壽十歲に至る一減の期間にして、第二劫は、人壽十歲より百歲每に一歲を加へて人壽八萬歲に至り、更に八萬歲より百歲每に一歲を減じて十歲に至る一增一減の期間なり。かくの如く、第三劫より第十九劫の間は一增一減し、第二十劫は人壽十歲より百歲每に一歲を加へて人壽八萬歲に至る一增の期間のみなり。かく第一劫より第十九劫に至る間の、百歲每に一歲を減じて人壽十歲に至る期間を增劫に對して減劫と云ふ。

【七】非の字は宮內省圖書寮本に依れり。

【八】五逆。殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血の稱。又、殺父、殺母を一として殺父母となし、破羯磨僧(阿闍梨と懺悔を行へるものを妨礙すること)を加へて五逆罪となす。

【九】毛起。身の毛よだつといふ意味ならん。無間地獄の異名。

細を是の如くに皆知る。汝等比丘よ、若しは餘の人有り、若し彼の外道の遮羅迦波利婆闍迦にして是の如くに問ふ者あらば、汝は是の如くに答へよ。若し是の如くに問へる彼の諸の外道の遮羅迦波利婆闍迦は、心則ち迷沒して汝に答ふる能はず。何を以ての故に、諸の比丘よ、一切の生死に攝せらるゝ衆生は其の所行に非ず、境界に非ざるが故に彼の人麁く知り、正しく知る能はず、忽かに知り垢を知り、微劣にして少なく知り、彼の三種の業なる身・口・意業にして、彼の人の説ける所は他の爲に破壞せられ、生・老・病・死・憂悲・啼哭なる一切の苦惱を斷絶する能はず、聖法を證せず、涅槃に到らず、究竟道に到らず、寂靜法に非ず、安樂法に非ず、天道に生るゝに非ず。彼の人は三種の業道なる身・口・意業を思惟して、唯慢心のみ有り。諸の比丘よ、彼の外道の遮羅迦波利婆闍迦は自らの意に歡喜し、心に諸の過と功德を思惟せず、彼の人是の如く、此の三種の業なる身業・口業・意業に大惡あり、彼の人の我れに於て少しの相似せる無きこと、譬へば涅槃の生死と乃至少分の相似有ること無く、理相玄遠なるが如く、彼れの知れる三業と我れの知る三業とは、少しの相似も無し。諸の比丘よ、汝等應に知るべし、彼の外道の問に唯言語のみ有り、佛に正道の寂滅涅槃有り。諸の比丘よ、應に是の如くに知るべし、物有りて常なる無く、物にして動かざる無く、物にして變ぜさる無く、物にして異ならざるは無し。諸の比丘よ、彼の修行者は彼の比丘を見るに、是の如くに身業・口業・意業を種種に諦かに見、涅槃の城に趣けり。

又復觀察するに、云何んが彼の比丘は十二地を得るや。彼の修行者は彼の比丘、倦まず精進して、復更に惡業の因の果なる七大地獄幷及に別處を觀、業報の法の如きを諦かに觀察し已れり。彼れ見聞して知るに、又復更に最大地有りて名けて（五）阿鼻と曰ひ、七大地獄幷及に別處を以て一分と爲すも、阿鼻地獄は一千倍勝る。衆生は何の業にて彼の地獄に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、重心にて父を殺し母を殺し、復惡心有りて佛心より血を出し、和合僧を破り、阿羅漢を殺さば、彼

【五】阿鼻（Avici）。詳しくは阿鼻至、阿鼻旨。無間と譯す。

自ら作せる業の如くに相似て果を得、自ら業を作して生る。衆生は是の如く、業の所作の如くに自業の所得あり、若しは善・不善は業の如くに果を得。彼の比丘、是の如くに地獄の果報、地獄の行業を思惟し、既に思惟し已りて生死を厭離し、樂有るを見ず、常有るを見ず、我有るを見ず、淨有るを見ず、是の如くに唯一切の生死は皆悉く無常・苦・空・無我なりと見、是の如く見已りて一切の欲を離れ、欲なる結を離れ、欲を行ふことを離れ、欲意を離れ、欲の因を離れ、欲は過惡なりと見て轉た復增上して更に怖畏を生じ、是の如くに正しく身・口・意の三業の勝行を攝めて魔も便を得ず、魔に繫屬せず、彼れ是の如くに修めて生死を緩め、惡の相續の鎖を破壞し離散せしむるなり。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察し、是の如き意を作さく『彼の比丘は甚だ希有と爲す。增上力有りて十一地を得たり』と。彼の地の夜叉は彼の比丘の倦まず精進して增上力有るを見、心に歡喜を生じて轉た復上りて虛空夜叉に聞こえ、虛空夜叉は四大王に聞こゆること前に說く所の如く、次第に乃至大梵天に向ひ、是の如くに說き言はく『閻浮提中の某國、某村の某善男子の、是の如き種姓にして名字某甲なるは、鬚髮を剃除して法衣を被服し、正信にて出家し、心は魔の境界に住するを樂まず。欲愛の心と共に住するを樂喜せず、煩惱の蛇に於て喜樂を生ぜず、他・苦惱を見、則ち世間の一切の生死に於て深く厭離を生ぜり』と。彼の梵身天は聞き已りて歡喜し、是の如くに說きて言はく『魔分を損減し、正法の朋を長せり』と。彼の修行者は天眼を以て見て彼の比丘を觀るに、是の如く已に第十一地を得て正道を見、是の如く諦かに見て業報の法を知り、諦かに身業・口業・意業を見たり。諸の比丘は是の如き三種の微細の身業・口業・意業を分分に細かく知り、若しは天世間、若しは魔世間、若しは梵世間、若しは沙門界、婆羅門界、是の如き天人は是の如く分分に細かく知る能はず。何ぞ況んや外道の遮羅迦波利婆闍迦にして能く知るを得んや。唯我れのみ能く知り、及び我が弟子の我れ從り聞けるは能く是の如くに知り、微細の三業の分細・分

果報は前に說く所の如く、又復人有りて、他の其の命を救ひ、病等に於て命盡きんと欲するに臨むことと有りて他の救ふ所と爲り、或ひは殺を被れる者の他の爲に救はれ、彼れ則ち恩有るも恩を識らずして、反りて其の妻に婬せんに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、木轉處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝る者有り。彼處に河有りて大叫喚と名け、彼の河中に在る熱せる白鑞の汁は燒煮き漂流し、無量百千の地獄の罪人は、彼の河中に在りて是の如くに漂煮され、彼の地獄人は同じく其の中に在りて河の漂はす所と爲り、急に漂はすを以ての故に頭は下に在りて入り、中に入り則ち沈みて餘の罪人と飜覆りて相ひ壓し、分別す可からず、是の如くに上下し、地獄は以て罪人を壓して下に在らしめ、熱沸せる白鑞に燒煮せられて唱喚び、間無き苦を受け、彼の地獄人は是の如くに苦を受く。惡業を以ての故に而も復摩竭受大魚有りて其の身分を食ひ、食ひ已りて復生じ、彼の木轉處にて大苦惱を受け、是の如くに苦を受けて時節久遠しく、自らの惡業の故に是の如くに苦を受け、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、彼處より脫ると雖も五百世に於て餓鬼・畜生の中に生れ、既に脫るゝを得已りて若しは人中同業の處に生れ、一切の女人の憎賤する所、自らの父母・兄弟・妻子は悉く皆嫌惡し、五百世中欲を行ふ能はず。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱の大地獄を觀るに、唯是の如き十六の別處のみ有り、更に第十七處有るを見ず。普く一切を觀るに唯十六處のみなり。此の大極惡の大焦熱、極大地獄は是の如く無邊にして、此の自業の果を地獄中にて受け、燒煮せらるゝ罪人の受くる大苦惱は業の如くに相似たり、異なる人の作して異なる人の苦を受くるに非ず。自ら作さば失はず、作さゞれば得ず、

す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて無間闇と名け、是れ彼の地獄の第十五處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語・邪見を樂み行ひ多く作すの業及び果報は前に說く所の如く、又復人有りて自らの子の妻に婬せんに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、彼の地獄の無間闇處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝る者有り。彼處の鐵地に焰燃えて熱沸し、閻魔羅人は地獄人を執りて彼の熱地に在らしめ、上下に飜覆して彼の罪人をして遞互に上に在り、迭互に下に在ら令め、百たび到り千たび到り、和集して同じく煮、合して一の塊と爲して毛頭を容れず、彼此是の如くに合して一の塊と爲らば閻魔羅人は杵を以て擣築きて復異なる塊と爲し、前の塊より密にして、是の如く細かく擣き細密に和合せしめて分別す可からず、是の如く無量百千年歳に堅鞕しき苦を受け、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、彼處より脫ると雖も五百生に於て餓鬼・畜生の中に生れ、若し彼處より脫るゝも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、貧窮にして常に疾み、常に怨對の破壞する所と爲り、惡國土に生れ、海中の夷人すにして一切の人中に最も鄙劣と爲し、又長命ならず。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて木轉處と名け、是れ彼の地獄の第十六處たり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語及び邪見等を樂み行ひ多く作すの業及び

業の處に生れ、貧窮にして病多く、他の使ふ所と爲り、巷に在りて乞ひ求め、身の形は矬短し。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて大悲處と名け、是れ彼の地獄の第十四處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語及び邪見等を樂み行ひ多く作すの業及び果報は前に說く所の如く、復善き人有りて、他人の邊に從ひて經論を讀誦し、或ひは復其れに從ひて經論有るを聞くに、彼の人多欲にして其の妻妾に婬し、敎師等の婦の實は貞良なるを誘ひ誑きて婬を行ひ、常に人に向ひて說かく『彼れは是れ我が母なり』と。敎師の婦の母に相似せるを以ての故に、癡心にて信に違ひ、是の如く欲を行ずるに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、大悲處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝る者有り。所謂彼處に熱鐵の床有り、床に利き刀有りて狀は磨齒の如く、罪人中に在りて恒常に急しく磨られ、一切の身分の皮肉・筋脈・骨髓・血汁皆悉く和合し、既に是の如く磨かれて悲號び啼哭くに、餘の地獄人の既に其の聲を聞きては大苦惱を生じ、自身の苦に於て復覺知せず、是の如くに磨らると雖も常に死せずして、是の如く無量百千年歲に磨られて常に活き、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、六千世に於て餓鬼・畜生の中に生れ、若し彼處より脫るゝも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れて或ひは胎中にて死し、或ひは生れ已りて死し、或ひは生れ已ること有るも未だ坐せずして死し、或ひは生れ已ること有るも未だ行かずして死し、或ひは生れ已ること有るも能く行かば死し、或ひは行き走ること有りて便ち死する者あり、諸の所生に隨ひて諸根を具へ

て算數有ること無く、若し業因盡きて是の如き熱焰の鐵杵を脫るゝを得るも、處處に馳走して復鐵地に入る。其の鐵に焰燃え、入り已らば則ち墮ちて大苦惱を受け、唱聲にて吼喚び、復大林の相ひ去ること遠からざるを見る。色は靑き雲の如く、林は普く寂靜にして、鳥の音聲饒く、其れを去ること遠からずして、大池水有り、清淨にして愛す可し。彼の地獄人は是の如き意を起さく『彼れは是れ第一の寂靜なる樹林、清淨の池水なり。我れ彼處に於て應に安樂を得べし』と。救を望み歸を望みて走りて樹林に向ふに、焰火の集聚れる鐵地ありて罪人中に在り、彼の樹林の相ひ去ること遠からずして多く衆鳥有るを見、安樂有らんことを望み、救を望み歸を望み、彼の人是の如くに極めて大苦を受けて乃ち樹林に到るに、一切の見る所は本見しと異なり、一切皆惡しく、極めて大いに怖畏るべし。所謂、彼處に大口の惡龍有り、龍に千の頭有り、其の眼に焰燃え、惡毒甚だ熾にして、皆是れ向者に見し所の樹なり。向者に聞ける所の衆鳥の聲音は皆是れ地獄人の遍き身の焰燃えて唱喚ぶ聲、向者に遠く聞きて是れ衆鳥なりと謂ひしは皆是れ惡龍にして、地獄人を取りて之れを噉食ひ、種種の苦を與へ、是の如き罪人は大苦惱を受けて唱聲にて大喚ぶ。彼の龍の焰の口にて是の如く食ひ已るに、龍の口中に於て復還りて活き、自業の所作にて龍の口中に在りて死して復活き、活きて復死し、是の如くに常に食はれ、年歲甚だ多くして算數有ること無く、食ひ已れば復生き、食ひ已るに復生く。若しは口中に於ける業盡きて脫るゝを得るも、熱渇甚だ急しくして　復池水の異なる處に在るを見、疾走して往くに、彼處の池水を闇火遍く覆ひて彼の池中に滿ち、地獄の熾火、深さ一由旬にして、到り已れば中に入り、入りては則ち沈沒して極苦惱を受け、自らの業に相似し、餘の業の諭に非ず、受くる所の苦惱は異なれるの相似する無く、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、彼處より脫ると雖も人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しては人中同

の鐵砧【三】の上に置き、鐵椎を以て之れを打つこと鍛鐵師の椎にて鐵塊を打つが如く、是の如く打つ時、打たば則ち命終り、椎を擧ぐれば還りて活き、彼の地獄人は一切の時に於て常に燒煮かれて年歲數無く、若し彼處を脫るゝも閻魔羅人は之れを鼓中に置き、旣に鼓中に置くに、惡業を以ての故に鼓は畏ろしき聲を出し、聞かば則ち心破れ、散り已りて復生じ、生じ已らば復散り、彼の人是の如くに死し已りて復活き、活き已りて復死し、乃至作集せる惡不善の業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、彼處より脫ると雖も六百世に於て畜生中に生れ、若しは人中同業の處に生れて心常に驚き恐れ、野鹿等の如くに心驚きて安からず、常に官人の橫狂して繫縛せんことを畏れ、壽命は極めて短かく、心初め安からず。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて悲苦吼と名け、是れ彼の地獄の第十三處なり。衆生は何の業に彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語及び邪見等を樂み行ひ多く作すの業は前に說く所の如く、復邪婬有り、所謂人有りて、女の姉妹等に於て、齋會【四】中に在りて惡邪法を見、共に欲を行ふなり。婆羅門從り是の邪法を聞く『女若し男を憶ふに、男取らずんば則ち大罪を得』と。彼の婆羅門は是の如き計を作し『若し爾らずんば、法を破りて罪を得』と。是の如き邪なるを聞き、惡法に誑かれて邪行を行はんに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、彼の地獄の悲苦吼處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の活等の地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝る者有り。所謂、彼處の閻魔羅人は熱焰の鐵杵もて勢を極めて搗築き、遍き身を破壞し、體に完き處の米豆許の如きも無く、遍き身は是れ瘡にして、彼の人の身分の一切是れ瘡なり。普く熱苦を受け、孤獨にして伴無く、堅鞕しき苦を受け、年歲久遠にし

【三】砧の字は、宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

【四】齋會。外道の特別なる儀式のこと。

に）彼の地獄人の一切の身分は碎散して沙の如くにして、唱喚ぶ能はず、一切の筋脈皆悉く碎壞す。是の如く無量百千萬億［一］阿僧祇歲に蟒の腹中に在りて燒き、捩ぢ、破壞せらる。是の如き罪人の若し蟒の口を出づるも一切の筋脈皆緩み、處處に馳走して復更に閻魔羅人の來りて其の身を取るを見る。利き鐵の刀を以て一切の身分を遍く切り遍く割きて膾の［二］鱯魚の如くにし、是の如く無量百千年歲にして亦數ふ可からず。常に一切の時に大苦惱を受け、乃至作集せる惡不善の業の未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、脫るゝを得已ると雖も五百世に於て餓鬼・畜生の中に生れ、彼處より脫れ已るも、人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れて貧窮にして常に病み、身體の色惡しく、身體には常に惡瘡・毒瘡有りて恒常に苦惱を受く。又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて髮愧烏と名け、是れ彼の地獄の第十二處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語・邪見を樂み行ひ多く作すの業及び果報は前に說く所の如く、復邪婬有り、或ひは酒に醉へるに因り、或ひは復欲盛にして、姉に婬し、妹に婬せんに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、彼の地獄の髮愧烏處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の苦惱なる彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝る者有り。所謂、墮ちて熱焰の銅爐に在り、身則ち消洋け、還りて復和合し、而も更に消洋け、彼の爐中に於て生れ已りて復死し、死し已りて復生き、常に大苦を受け、是の如き爐中を閻魔羅人は兩の鞴を以て之れを吹き、爐の火と罪人とを分別す可からず、是の如く無量百千年歲に之れを煮て、此の人中の金を煮るが如くにして異なる無く、是の如く是の如く、彼の地獄中にて是の如くに燒煮さる。惡業を行へる人の若しは彼の爐中の惡業より脫るゝを得て彼の銅爐より出づるも、閻魔羅人

【一】阿僧祇（Asaṃga）。無數或ひは無央數と譯す。印度の數名なり。

【二】鱯。なまずの一種にして、口腹共に大なる白色のもの。大なまず。

卷の第十三

地獄品之九

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱之大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて雨縷鬘抖擻と名け、是れ彼の地獄の第十一處なり。衆生は何の業にて彼處に生るるや。彼れ見るに、人有り、殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語・邪見を樂み行ひ多く作すの業及び果報は前に說く所の如く、復邪婬有り、所謂、善き比丘尼に侵近するなり。或る時荒れ亂れて國土安からざるに、比丘尼の正行にして持戒せるに於て、是の童女を時安からざるに因り、强ひて逼り侵犯して其の淨行を汚さんに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ちて彼の地獄に在り、雨縷鬘抖擻の處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝る者有り。謂はく、彼處に於て復無量の金剛の利き刀有りて以て刀の網を爲し、處處に遍く覆ひ隨所に廻轉し、身動けば則ち割き、遍き體を普く割き、是の如き刀網の金剛の刄の縷羂は罪人を縛り、此の如き間に繩ありて毛綿中に在り、彼處の罪人は彼の網中に在りて生れ而も復死し、死して復生れ、閻魔羅人は焰の鐵箭を以て其の身分を射、一切普遍し。是の如き罪人は金剛の網に縛られ、焰の箭に射られて堅鞕しき第一の苦惱を受け、唱聲にて呻喚き、悲號び啼哭き、大苦惱を受け、身は普く破壞し、一切堅く縛らる。若し彼の罪人の彼處の惡業の因緣にて受くる所の苦の極を脫るゝを得るも、處處に馳走して復熾燃たる普き火炭の聚に入りて身體消洋け、身を燒きて唱喚ぶも孤獨にして伴無し。遠く大なる門を見れば、門に光明有り、疾走して往き趣き、既に彼れに到りつけば復大蟒有り、乃ち毒甚だ熾にして、其の口中に入り、彼の地獄人は彼の內に於て燒かれて唱喚ぶ能はず、是の如き業の蟒は彼の惡業の如く是の如くに廻轉し、(爲め

如き婦女は極めて苦惱を受けて唱喚び、啼哭き、作集せる惡業にて常に一切の時に是の如く苦を受け、處處に馳走り、惡業を以ての故に本の比丘の來りて其の身に向ふを見、欲意に誑かれて疾走り趣く。業なる怨は捨て難くして、是の如き惡處にても欲心猶在り、彼の比丘を見て其の身體を抱くに、則ち火盆に入る。普く火焰燃え、是の如く無量百千年歲に苦髮處に於て極めて堅鞕しき第一の大苦を受け、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し彼處を脫るゝも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れて則ち婦女と爲り、城中に在りて常に糞屎を除き、城中の所有る人中にて最も凡鄙とせられ、貧窮・醜陋にして手足劈裂け、脣口は兎缺にて面色甚だ惡しく、父無く母無く、諸の親しき兄弟、姉妹有ること無く、常に他人に從ひ食を乞ひて命を活かし、衣裳は破壞れ、垢に穢れて不淨にして、身に一[三]廂を闕き、顯現れし處に於て身に傷の破れし有り、諸の童子の打擲する所と爲り、苦を受けて活く。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

【三】一廂。廂は恐く相ならん。身體の諸相に於いて鼻、耳等の一相をかくことを謂ふ。

切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業の有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れて婬女の家に生れ、彼れの爲に奴を作し、顏色好からず、手足は破裂し、恒常に水を負ふ。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて苦髻處と名け、是れ彼の地獄の第十の別處なり、衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偸盜・邪行・飲酒・妄語・邪見を樂み行ひ多く作すの業、及び果報は前に說く所の如く、復惡婬有り。善き比丘有りて戒を持して正しく行ひ、律に於て犯れず、種姓に事有るが故に怖畏を生じて信ぜる所の家に入る。而も彼の舍の主なる邪淫の婦人は語りて言はく、『此丘よ、我れと共に欲を行へ。若し肯かずんば我れ則ら擧告し、必ず比丘をして王に於て罰を得しめん。或ひは我が夫に語りて是の如き言を作さん、「比丘は我れを侵せり」と。若し我れと共に欲をなさば、多く比丘に佉陀尼食、種種の美飲を與へん。我れ比丘と二人極めて樂しくして更に人の知る無く、我れ人に向ひて說かん「此れ好き比丘にして、第一に持戒せり」と。多く臥具・病藥の因緣有り、檀越を具足せん。我れ能く敎化し、必ず比丘をして事事を皆得令めん』と。彼の人是の如くに善き比丘を誑きて正道より退か令めんに、是の如き婦女は惡業の因緣にて、身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、苦髻處に在りて大苦惱を受く。所謂苦くは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝る者有り。所謂彼處の閻魔羅人は彼の婦女を取り、利き鐵を以て刷りて其の皮肉を刷り、肉盡きて骨のみ在るも復更に生じ、生じて則ち軟嫩なるを復更に刷り、刷り已らば復生じ、生じ已らば復刷り、閻魔羅人は彼の婦女を取り、肉生じて轉た多く、而も復坏嫩なるを、鐵にて刷りて焰を燃やし、遍く其の身を刷りて復火にて燒き、是の

きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、常に貧しく常に病み、常に悲苦有り、他の使ふ所と爲り、諸根を具へず、生れて邊地なる凍山・雪山[二]に在り、其の面極めて醜くして草馬の面の如く、唯根・草を食ひて以て性命を存し、曾て稻・粟等の食有るを知らず。是れ彼の本の業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて無間闇と名け、是れ彼の地獄の第九の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語・邪見を樂み行ひ、多く作すの業及び果報は前に說く所の如く、又復人有りて、外なる染境界の繫縛を離れ、貪欲・瞋・癡なる三煩惱軟く、善を修めたる人に於て、婦女を遣し勸誘して退かしめんに、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の無間闇處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄の一切の受くる所の堅惡の苦惱なる彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝る者有り。彼の地獄處に地盆虫有り、口嘴極めて利く、能く金剛を破りて水沫の如からしめ、罪人の惡業にて是の如き虫有り、彼の惡虫に於て得る所の苦惱は地獄の苦に勝り、若し虫の苦を受くれば彼の地獄の苦を則ち大樂と爲す。彼の地盆虫は罪人の骨を破りて其の髓を食ひ、彼の地獄中の一切の諸の苦皆悉く和合するも、虫の苦を受くるに於て百分の中其の一に及ばず、千分中に於て其の一に及ばず、百千分中も亦一に及ばず。彼の惡虫より脫るゝを得る能はずして、處處に遍く走るも彼彼處に隨ひ、皆脫るゝを得ず、是の如く無量百千年歲に常に燒かれ常に煮られ、餘の一切の地獄の罪人の受くる所の苦惱に於て最も惡しく最も重くして、是の如き苦を受け、一切の時に於て彼の地獄處に是の如く燒煮せられて而も亦死せず、彼の惡業を作集せる勢力の地獄に和集せるを以て常に是の如く燒かれ、常に是の如く煮られ、乃至作集せる惡不善の業の未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一

【二】雪山（Himālaya）。印度北境の大山。俗に云ふヒマラヤ山なり。

ふして生れて人にて、形體を具へず、所謂、一脚・一眼・一臂にして、其の身獨り短かく、命は則ち長からず、或ひは一日の壽にして、是の如きの處に生る。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有り。所謂河有りて、其の河を髀多羅尼と名け、惡しく燒き惡しく漂はし、是れ彼の地獄の第八の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り。殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語・邪見を樂み行ひ多く作すの業及び果報は前に說く所の如く、復邪行有り。所謂人有りて香を燒きて婦を索め、手を把りて相ひ付け、彼の婦に過無く、心に厭賤を生ずるも、强ひて與へて過を作し、旣に過を與へ已りて猶故に喜樂して共に欲を行はんに、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ちて彼の地獄に在り、髀多羅尼なる惡しく燒き惡しく漂はす大河の處にて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の苦惱なる彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝るゝ者有り。謂はく、闇の聚なる虛空の中に於て熱鐵の杖を雨らし、惡業の作す所にして、其の杖極めて利く、入りて地獄の罪人の身中に在り、入り已りて極めて燒き一切の身分に皆悉く孔を作して劈割れ、燒煮られ、一切の身分皆悉く分離れ、內外火に燒かれて極苦惱を受く。焰の燃えたる鐵杖の是の如く劈き已るに、極めて大苦を受け、彼の苦は堅鞕くして譬論す可からず、彼の地獄人の旣に大苦を受けては處處に馳走り、墮ちて嶮岸に在り、岸の下に河有りて、其の河を名けて髀多羅尼と曰ひ、惡しく燒き惡しく漂はし、惡業を以ての故に滿中に惡蛇にして、罪人之れを見て驚怖れて極めて苦む。是の如き惡蛇の焰の牙に惡毒ありて其の身體を碎き、分分に塵の如くにして之れを噉食ひ、極めて大苦を受けて唱聲にて號哭く。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、年歲無數にして、若しは惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し其れ餓鬼・畜生に墮ちざるも人の身を得難

と爲し、此の不善の業は世・出世に於て皆相應せず。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて彼處を名けて普受一切資生苦惱と爲し、是れ彼の地獄の第七の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偷盜・邪行・飲酒・妄語・邪見を樂み行ひ、多く作すの業及び果報は前に說く所の如く、復邪行有り。所謂比丘、貪染の心の故に相應せざるを行ひ、酒を以て持戒せる婦人を誘ひ誑き、其の心を壞り已りて然る後共に行ひ、或ひは財物を與ふるにて、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の普受一切資生苦處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受く。彼の人常に修習して苦を栽ゑ、善行を捨てゝ惡道を修習し、是の如き不善の惡業を行ふ人は不善の道を習ひ、喜樂し習行して、惡業を行へる因緣を以ての故に、彼の地獄に於て更に重き苦を受け、活等の地獄にて受く所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受く。所謂彼處にて自ら足指從り乃ち頭に至り、焔の刀もて一切の身の皮を剝ぎ割き、其の肉を侵さず、是の如くに一切の身分を剝ぎ削りて大苦惱を與へ、既に其の皮を剝ぎて身と相ひ連なれるを敷きて熱地に在らしめ、火を以て之れを燒き、身に既に皮無し。閻魔羅人は熱鐵の鉢を以て、熱沸せる灰を盛りて其の身體に灌ぎ、彼の人是の如くに燒れ、蒸れ、煮られて大苦惱を受け、唱聲にて大喚び、呼差き、號哭く。是の如く無量百千年歲に大苦惱を受け、年歲數無く、脫るを得可からずして、常に是の如き堅鞭しき苦惱を受く。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業の有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、人身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れて常に貧しく常に病み、極惡の病を得、海の畔の衆生と業を同じ

惡風に吹かれて十方に分散し、彼の罪人の身を、地獄中に於ける惡風の刀の如きは分分に割裂き、碎散きて沙の如くにし、乃至一物の見る可き有る無く、是の如き身分の毛も亦見巨きに、惡業を以ての故に一切の身分復更に生じ、生じ已りて復散る。欲の力の故に爾り、欲は前に說く所の如し。是の如く無量百千年歲にして、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し此の苦より脫るゝも彼處に復金剛の惡鼠あり、其の人根を食ひ、分ちて破碎せしめ、芥子許の如くにし、苦を受けて唱喚ぶ。人根を食ひ已りて次いで其の腸を食ひ、既に腸を食ひ已らば次いで熟藏を食ひ、熟藏を食ひ已らば背從り出でゝ次いで其の背を食ひ、既にして背を食ひ已らば次いで背骨を食ひ、彼の惡業の人は惡業を以ての故に是の如く無量百千年歲に地獄の苦を受け、長久しき時に於て彼處より脫るゝを得。受くる所の苦惱より既に脫るゝを得、走りて異なる處に向ふに、復黑虫有りて其の身に纒り絞め、先ず其の人根に纒り、燒きて之れを食ひ極苦惱を受けて唱聲にて大喚ぶ。是の如き黑虫は常に纒り常に食ひ、乃至彼の人の作集せる惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るるを得、既に脫るゝを得已りて、復無量百千世中に於て食自肉餓鬼中に生れて自ら身の肉を食ひ、自ら肉を食ふと雖も復死せず、業を作せる時、自らの姉妹等に非梵行を行ひて自ら樂を受けしが故に、餓鬼の中に於て自ら身の肉を食ひ、若し彼處より脫るれば畜生中に生れ、常に牝の猪と作りて自ら其の子を食ふ。人中の時の如きは、親等の中に於て婬を行へる業の故なり。彼の人、彼處より若しは脫るゝを得已るも、人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、彼の人常に人根に惡病有り、是の如き人根の惡病急しきが故に自ら人根を割き、彼の業の因緣にて、若し自ら妻有るも下賤の人の侵逼す所と爲り、相應せざると共に婬欲を行ふ。業を作せる時、他の妻を犯せるを以の故なり。一切の惡中、邪見・邪行を最も深重

彼の地獄人は灰火地獄にて第一の苦を受け、是の如くに唱喚ぶ。彼の地獄人は常に一切の時に大苦惱を受け、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し脫るゝを得已らば復無量百千世中に於て餓鬼・畜生の道に生れ、餓鬼中に於て迭互に相ひ見るに飢渴身を燒き、畜生中に於ては迭に相ひ噉食ひ、彼の彼處より脫るゝを得已るも、人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、惡業力の故に貧窮にして病多く、身分を具へず。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて彼處を名けて吒吒吒嚌と名け、是れ彼の地獄の第六の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偷盜・邪行・飮酒・妄語・邪見を樂み行ひ多く作すの業及び果報は前に說く所の如く、復邪行有り。謂はく、受戒せる正行の婦女に於て非梵行を行ひて或時は一たび到り、二たび到り三たび到り、四たび到り五たび到り、彼の人是の如くに相應せざるを行ひ、或ひは姉妹に於て、或ひは同姓に於て、或ひは香火に於て、或ひは〔八〕香火の婦、或ひは知識の婦を誑き誘ひて邪を行ふに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ちて彼の地獄に在り、吒吒吒嚌なる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂〔九〕苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝る者有り。謂はく、惡風有りて第一の勢の觸あり、極めて飄く極めて吹き、彼の地獄の罪人の身分を分分に解きて猶し〔一〇〕劫貝の如からしめ、急悪しく抖擻て羊毛を彈くが如く、是の如くに勢の急なる極惡の大風ありて罪人の身を吹き、毛塊、毛塊を分分に分散して猶し細毛の毛も亦見巨きが如からしむ。如何なるが毛なりや。劫貝沙の毛(の如き)なり。彼の毛の旣に散るも還りて復聚合す(るが如く)、彼の罪人の身も亦是の如くにして

【八】香火婦。外道の神に奉仕する女か。

【九】苦の字は宮內省圖書寮本に依れり。別本には若に作る。

【一〇】劫貝(Karpāsa)。又、劫貝娑、劫波育等後文に劫貝沙に作れり。樹の名なり。又其の花は柳の絮の如くにして、以て白氎を作すべく、此の白氎を劫貝と云ふ。此處では其の絮を劫貝と云へるならん。

火は惡風に吹かれ、吹かれ已りて熾に燃え、地獄人を燒き、普き身を捩ぢ轉す。是の如く燒け已るに、復山有るを見、青色にして大きく、既に燒かれて苦を受け、復更に走り趣きて救を望み歸を望み、既に彼の山に到るに、勢にて其の中に墮つること、猶し弩の弦に放たれし鐵箭の射て蟻封に入り、是の如く入り已りて所在を知らざるが如く、是の如く是の如く、彼の地獄人は內の熱沸せる火山の中に在りて、[七]沒して處所無し。彼の地獄人は彼處に在りて是の如くに燒かれ已り、焦げ已り炙られ已りて、又復更に闇火聚觸なる惡山の中に入り、諸根閉塞して一切の苦を受くること 捶の箭を納るゝが如く、具に一切の惡業の果報を受け、是の如くに罪人は作集せる惡業にて闇火聚觸なる惡山の中に是の如き果を受け、苦惱急惡るも主無く救無く、伴侶有ること無く、自業の果を食ひて久しく極苦を受け、常に燒かれ常に煮られ、業風に吹かれ、彼の熱沸處にて一切の身熟し、彼處を出ずるを得るも足の力無きが故に走るを得る能はず、閻魔羅人は復更に執りて割截山に置き、鐵焔の鋸を以て其の人根を割き、是の如く無量百千たび鋸き割かれて大苦惱を受け、又 更に業證山中に入りて大苦惱を受け、唱喚びて偈にて言はく。

我れ自ら業を作せるが如く、我れ是の如くに果を受く、欲なる怨の我れを燒くが故に、今此の地獄に到れり。

放逸の地は善ならず、欲なる火は人身を燒く、彼の羂は我れを繫縛し、是の故に此處に到れり。

我れ先の時には知らざりしも、欲の果にて是の如き苦あり、癡の誑く所と爲り、自ら作して今自ら受く。

悲心無き惡人は、我れを將ゐて此處に在らしめ、無邊の苦惱の海にあり、云何んが脫るゝを得可けんや。

業を苦中の苦と爲し、我れ今是の如くに受け、會て樂有るを見ず、地獄の苦は盡きず。

【七】沒無處行とは、或ひは第二の山なる極深無底の別票ならんかとも思はる。さだかに知り難し。

剛の沙の三角の地有り、刃火極めて利く、罪人は身を揩りて乃至骨をも盡くし、盡き已らば復生じ生ずれば復更に揩り、揩り已りて復盡き、盡き已りて復生じ、死して復活き、能く救ふ者無く、焰の沙中に墮ちて唱喚び號哭き、呼嗟き涕泣く。惡業を以ての故に彼の苦處より自ら脫る能はず、時節長久にして若しは惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、彼處より脫ると雖も無量千世に餓鬼・畜生中に生れ、若し餓鬼に生るれば飢渴に燒煮かれ、畜生の中にては迭に相ひ噉食ひ、一千世に於て常に他の殺を被り、若し彼處より脫るゝも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、常に貧しく常に病み、人の信ぜざる所にして、不男の人を爲す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱大地獄處を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて內熱沸と名け、是れ彼の地獄の第五の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偸盜・邪行・飮酒を樂み行ひ多く作すの業及び果報は前に說く所の如く、又復人有りて、邪見と邪行あり、五戒を持する優婆夷の邊に於て强ひて非法を行ひ、其の梵行を汚し、戒を缺壞らしめて、彼れ是の意を作さく『戒を破るも罪無し』と。業果を信ぜずして彼の人、是の惡意と惡行の業因緣を以ての故に、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の內沸熱處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝るゝ者有り。所謂彼處に五の火山有りて皆內は熱沸し、是の如き五山と、普遍き地獄は皆悉く熱沸せり。一を普燒と名け、二を極深無底と名け、三を闇火聚觸と名け、四を剸截と名け、五を業證と名け、彼の地燒に遍く、是の如き五山は普輪山及び大輪山を去る道理極めて遠し。彼の地獄人の彼の五山を見るに、優鉢羅華あり、彼の山中多く樹林有りて、陂池を具足す。彼處を悕望みて、安樂を得んと欲して疾走して往き趣くに、惡業を以ての故に彼の山の內なる

業を作集せる勢力なり。彼の地獄人の彼處を脫れ已りて走りて異なる處に向ふに、大蛇の衆の一時に俱に來るを見、彼の人見已りて大いに怖畏れ、走りて餘の處に向ふ。是の如きの蛇衆は惡業の作す所にして、疾く走ること風の如く、彼の罪人に向ひ、到り已りて普き身の周遍を纏ひ絞め、其の牙は甚だ利くして大惡毒有り、彼の罪人を齧み、百千種の最大の苦惱を受く。彼の地獄人に是の如く具に三火有りて燒かる。一には飢渴の火、二には蛇の毒火、三には地獄の火なり。是の如く無量百千年歲に常に是の如く燒かれ、年數有ること無く、時節は長遠にして、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已らば無量千世に生れて餓鬼・畜生の中に在り、餓鬼中に於て飢渴に極めて燒かれ、遍く畜生中に生れては、生生に常に他の殺害する所と爲り、殺し已りて食はれ、若し彼處を脫るゝも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、五百世に於て第三の人と爲る。所謂不男にして、是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱大地獄處を觀る、彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて雨沙火と名け、是れ彼の地獄の第四の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偷盜・邪行・飲酒・妄語・邪見を樂み行ひ多く作すの業及び果報は前に說く所の如く、復邪行有り。沙彌尼に於て惡行を作し已りて心に歡喜を生じ、猶故喜樂するに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、彼の地獄の雨沙火處に在りて、大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝るゝ者有り、所謂彼處に五百由旬の大火充滿し、一切に焰燃え、金剛の沙有りて遍く其の中に滿ち、柔軟なること水の如く、能く燒く人も猶尙沒せんことを畏る。況んや重惡業の地獄の人をや。彼の地獄人の中に入れば則ち沒して猶し水に沒するが如く、惡業の因の故に沒し已りて復出で、彼の金

身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、火髻處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、十倍して更に重く、復勝るる者有り。是の如き火髻處に、惡業を以ての故に多く惡虫有りて似髻と名け、彼の地獄に在り、長くして弓の弦に似、其の毒甚だ嚴しく、其の齒は極めて利し、閻魔羅人は地獄人を執りて其の手足を縛り、其の身體を敷きて熱鐵の鉤ある極めて熱き鐵地に在らしめ、彼の地獄人の是の如くに苦を受けて啼哭唱喚ぶに、先ず其の背を燒きて極苦惱を受く。閻魔羅人は似髻虫を取りて其の糞門に置き、彼の似髻虫の形は弓の弦の如くにして、其の身中に入りて能く堅き毒ある急しき苦を作し、其に觸るれば火の如く、初に糞門を燒き、燒き已りて食ひ、糞門を食ひ已らば次いで復上り行きて其の熟藏に入り、燒き已りて食ひ、熟藏を食ひ已りて、次いで復上り行きて其の生藏に入り、卽ち生藏を燒きて復之れを食ひ、是の如くに食ひ已りて復小腸・大腸に入り、燒きて齧み食ひ、是の如くに食ひ盡し、其の身內に在りて處處に遍く走り、罪人の身の內は白鴿の兒の如きも、猶故死せず。是の如き惡虫は走りて咽筒に向ひ、走りて未だ到らざるに其の心を燒煮き、燒き已りて遍く食ひ、彼の地獄人は是の如くに苦を受けて唱喚び號哭く。彼の人是の如く二火に燒かる。身の內には則ち似髻虫有りて食ひ、身の外に則ち地獄の大火有り。彼の似髻虫は、咽筒を食ひ已りて次いで走りて面に向ひ、既に面に到り已りて其の舌根を燒き、舌根を燒き已りて齧みて之れを食ひ、是の如くに食ひ已り、走りて耳根に向ひて復其の耳を食ひ、耳根を食ひ已りて走りて髑髏に向ひ、次いで其の腦を食ひ、既に食ひ盡しては頭を破りて出ずるも、猶故死せず。是れ彼の惡業の勢力の故にして、遍き身に孔有り、是の如き惡虫は復孔の內に入り、復地獄の大火の爲に燒かれ、普き身の內外に一切焰燃え、惡業を行へるが故に是の如く無量百千年歲に食はれ已りて[六]復食はれ、食はれ已りて復生じ、生じ已りて復食はれ、死し已りて復生き、是の如くに罪人は大苦惱を受く。是れ彼の惡

【六】原本に食復食食とあり。宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本には食已復食とあり、後者に依れり。

婬欲は樂の至ること少なく、惡業を作すこと甚だ多し、癡人は欲心に乘られて、苦從り苦を得。欲樂は一念の頃も、樂に非ず亦常に非ず、身を轉じて極苦を受く、是の如くなれば應に捨離すべし。

欲の爲に覆はれし人は、地獄の舍に住し、若し欲に屬せざる者は、則ち地獄を畏れず。

若し人惡業を作さば、決定して苦惱を受く、悲しみ苦しむ凡鄙き人よ、何が故に今唱喚ぶや。

惡を行へる地獄の人の、業盡きて乃ち脫るゝを得ば、多く唱喚ぶこと無し、解脫の理を得ればなり。

若し人欲自在ならんに、不愛の惡業を作し、(是の如きの)癡人は今苦を受く、唱喚ぶも何ぞ益する所ぞ。

若し未來の果を見て、現在に善を喜樂せば、彼の人の唱喚ばざること、汝の今朝の日の如し。

閻魔羅人は是の如くに惡業を行へる人を責疏め、既に呵責し已りては復種種無量の苦惱を與ふ。乃至惡業未壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已るも無量千世に餓鬼・畜生中に生れ、彼處を脫れ已るも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、短命・貧窮にして、心亂れて正しからず、所有る語言を一切は信ぜず、四千世に於て不能の男を作す是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱大地獄を觀る。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて火髻處と名け、是れ彼の地獄の第三の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語・邪見を樂み行ひ多く作すの業は前に說く所の如く、若し復人有りて、威儀を攝めて正しく行へる婦女に於て其の非道に行はんに、彼の人、是の惡業の因緣を以て、

を得るも、復無量百千年歲に於て餓鬼。畜生中に生れ、若し餓鬼中に生るれば飢渴の苦を受け、畜生中に於ては迭に相ひ食ふ苦あり、乃ち無量百千世中に於て、他の殺されて噉食はるゝ所と爲り、彼の惡業の人の彼の苦を受け已るも、人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、貧窮にして病多く、他人の所に於て常に熱惱を得、心亂れて止まず、復長命ならず、四百世に於て不男の人を作す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱大地獄處を觀る。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偷盜・邪行・飲酒・妄語・邪見の業と果は前に說く所の如く、又復若し人、淨行の　沙彌尼戒を毀犯すが故に、身壞れ命終りて惡處に墮ちて彼の地獄に在り、大身惡吼可畏處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝るゝ者有り。彼の罪人の身は一由旬の量にして、第一に柔軟なること生酥の塊の如く、閻魔羅人は其の身を執持りて、微細の鉗を以て遍く其の毛を拔き、肉をも合せて之れを拔き、足從り頭に至りて皆悉く遍く拔き、芥子許も拔かざる處無く、彼の人是の如くに極めて碎苦を受けて唱聲にて大喚び、餘の地獄人之れを聞かば心破れ、開劈きて分散す。心の怨に誑かれて惡業を造作り、自らの業に誑かれて是の如くに聲を出し、地獄の罪人は是の如くに苦を受く。閻魔羅人は呵責せんが爲の故に偈を說きて言はく。

欲心にて甜き語を出し、甜き語を聞きて欲を發せり、欲語は是れ大惡にして、今是の如きの果を受く。

欲語は最も利き刀にして、彼の刃は自ら身を割く、寧ろ自ら其の舌を割くも、婬欲の語を說かされ、欲に誑かれて衆生は、瞋心急しくして熾に燃え、癡心に乘らるゝが故に、婬欲の甜き語を說く。

【五】沙彌尼(Srāmaṇerikā)。勤策女と譯す。大僧の爲に常に策せらるゝ意なり。出家せるも未だ修行熟せずして、比丘尼になる以前の十戒を持せる女性のこと。

も、復木轉地獄中に於て煮られ、彼の地獄人は彼の地獄の十六處に在りて煮らる。邪見に攝せられ比丘尼を犯せる惡業の罪過にて、彼の人、彼處に無數年の久しき時に於て長く煮られ、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄中より爾乃ち脫るゝを得、彼處を脫ると雖も復餓鬼・畜生の中に生れ、無量千世に飢渴に燒煮せられて迭互に相ひ食ひ、百千の身を食ひ、是の如きの畜生は惡邪見を以て復淨行の比丘尼戒を犯し、彼の人是の如くに人の身を得雖きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、五百世に於て不能の男を作す。比丘尼を犯せる不善の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大焦熱大地獄處を觀る。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語・邪見の業と果は前に說く所の如く、又復若し人、清淨の【四】優婆夷戒を毀犯すに、身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、一切方焦熱處に在りて生れ、大苦惱を受く。所謂苦とは、彼の地獄處の一切間無く乃至は虛空にも皆悉く焰燃え、針の孔許も焰の燃えざる所無く、彼の人火中にて手を伸して上に向ひ、聲を發して唱喚び、第一の急惡なる大力の堅き苦あり、熾火に燒かれて灰も亦得叵く、又復更に生じ、是の如く無量百千年歲に常に燒かれて止まず、彼處より若しは脫れ、救を望み歸を望みて走りて異なる處に向ひ、旣に是の如く走るに、閻魔羅人は復更に之れを執り、普く焰の鐵繩を脚從り纏ひて、乃ち頭に至り次第に急しく纏ひ、血皆上り流れ、集りて頭の中に在り、然る後復焰の燃えたる鐵鉤を以て、其の頭に釘ち頷の下に出で、復鐵鉤を捉りて急しく轉ばし急しく捩ぢ、復抽掣して罪人より血を出し、赤銅汁の熱焰熾燃なるが如きを其の身體に灌ぎ、是の如く無量百千年中、血を其の身に灌ぎて之れを燒煮き、死するも復生き、死して復生れ、惡業力の故に是の如く常に一切時に燒煮せらる。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝ

【四】優婆夷（Upasikā）。清信女、近善女等と譯す。三寶に親近し、五戒を受けたる在家の婦女のこと。

ひ、大聲にて唱喚ぶ。彼の地獄人の是の如くに見已るに、憂悲の火生じ、燒燃せる愛の薪の憂悲の火熱くして、地獄の火を(之に)形れば猶し氷雪の如し。是の如き二種の大火に燒かれて極めて苦惱を受け、聲を發して唱喚ぶ。閻魔羅人は爲に偈を說きて之れを呵責して言はく。

愛の火は火より熱くして、餘の火は則ち氷の如く、此の中には地獄の火あるも、愛の火は三界中にあり。

是の如き地獄の火は、盡し少にして言ふに足らず、若し愛の因に生ぜし火は、焰饒くして毒熱あり。

惡を行ひし地獄の人は、業盡くれば乃ち脫るるを得るも、愛の火は三界を燒き、未だ脫るるを得る期有らず。

愛は能く人を繫縛して、無始の生死に在らしめ、愛の火是れ地獄にして、地獄の火を生ずるに非ず。

地獄の火は熱しと雖も、唯能く身のみを燒き、愛の火の衆生を燒かば、身心倶に燒を被る。

愛の因緣にて生ぜし火は、火中にて最も上と爲し、地獄の火は普からざるも、愛の火は一切に遍し。

三因を三處に行ひて、三種の業を顯現し、三時中に於て生るゝは、皆是れ愛心の火にてなり。

天中欲の火に燒かれ、畜生は瞋の火に燒かれ、地獄は癡の火に燒かれ、愛の火にて一切燒かる。

是の如き愛心の火にて、三界に皆焰燃ゆ、何れの不樂の法を見て、今是の如く心に悔ゆるや。

閻閻羅人は彼の地獄の大悲處に於て是の如くに地獄人を呵責し、既に呵責し已れば復更に種種の苦惱を與へ、是の如き罪人の彼處より脫るゝを得るも、復更に無悲闇處地獄中に於て煮らる。彼處の普き火は地獄人を燒きて其の色猶し甄叔迦樹の如からしめ、是の如き罪人の若しは彼處を脫るゝ

【三】甄叔迦(Kimśuka)。前に出でたり。無憂樹とも云ひ、其の花赤く、形人の手の如しと。

大火は甚だ熱く、一切の火に於て此の火最も勝れ、更に相似せるは無く、彼の火髻處は常に火の沙を雨らして之れを燒煮き、彼の沙は稠に〔一〕迅くして夏時の雨の如し。復異なる處有りて內沸熱と名け、彼處に闇火ありて常に燒き常に煮、彼の罪人をして身體脹滿して猶し皮ゝ囊の如からしめ、復更に處有りて彼處を名けて〔二〕吒吒吒嘖と爲し、彼の地獄の一切の罪人は諸の身分を以て、迭に相ひ搯き割きて大苦惱を受け、復別の處有りて彼處を名けて普受一切資生苦惱と爲し、彼處にて惡煮せられて大苦惱を受け、彼の是の如き處に多く畏る可き惡狗・獅子・烏・鷲・猪・蛇有りて一切皆苦を與へ、復惡河有りて彼の河を鞞多羅尼と名け、惡しく燒き惡しく漂はし、彼處に燒煮せられて皆悉く熟爛し、彼の河に熱灰あり、赤き銅、白鑞に燃焰えて熱沸し、百種千種に惡しく漂・燒・煮せられ、是の如くに燒煮せらる。復別處有りて無間闇と名け、罪人中に入れば闇火に燒煮かれて種種の苦を受け、復更に處有りて苦髻處と名け、罪人中に入れば燒煮かれて苦を受け、熱焰の鐵輪轉じて其の頭に在り、一切の身分を鋸き割き劈裂き、若し脫るゝを得て、異なる處の雨縷髻抖擻と名くるに入りて更に燒かれ更に煮られ、普き身に焰燃え、是の如く燒かれ已るに、閻魔羅人は百たび到り千たび到りて焰の刀もて刺割し、若し脫るゝを得已るも、復更に髻塊烏處に入りて燒煮かれ、彼處にて骨の身ありて雪の如くに相似、自身に火を生ず。彼の地獄人は各利き刀を執りて迭に相ひ割刣き、是の如く無量百千年歲にして、若し脫るゝを得已るも復更に悲苦吼處に入り、彼處に在りて常に燒かれ常に煮られ、既に是の如く煮られて聲を發して大いに吼ゆ。是の如き吼聲は、自餘の一切の諸の地獄中、是の如くに吼ゆる無し。若し脫るゝを得已るも復更に大悲處と名くるに入り、彼の人、非法の惡法を讃說して法と爲し、彼の邪見人は惡業を以ての故に愛する所の色を見る。或ひは父或ひは子、或ひは兄或ひは弟の大悲處に在りて燒煮かれ、身を捩ぢて苦を受け、啼哭びて喚びて言はく、『我れ今孤獨なり。來りて我れを救ふ可し』と。彼の父子に極大の悲苦あり、臂を伸して上に向

【一】迅の字は元本、明本に依れり。宮內省圖書寮本には後に作り、餘は浚に作る。浚とは大なる貌、又深き意。

【二】嘖とは多くの聲。吒吒とは蓋し叫喚の聲ならん。諸經要集第十八(兩一二)中に、阿鼻至大地獄に呼呼婆地獄の衆生、叫喚して阿吒吒、阿吒吒と言ひ、故に呼呼婆地獄と名く等とあり。

れ、是の如く惡しく燒かれ、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、彼處の業盡きて爾乃ち脫るゝを得ば、是の如くに復生れて飢渴身を燒き處處に浪りに走りて、復河・陂池の淸水有るを見る。冷水を望むが故に疾く走り往趣き、旣に走りて到り已るに、彼の河池等に洋たる白鑞の汁皆悉く充滿ち、惡毒饒き蛇其の中に普遍く、彼の地獄人は熱渴甚だ急しくして、卽ち是の如き毒蛇と和合せる洋たる白鑞の汁を飲む。彼の惡毒の蛇は罪業の作せる所、極めて甚だ微細にして罪人の口に入り、旣に腹に入り已り、卽便ち麁大にして、地獄人の肚も亦復增長し、是の如き惡蛇は其の身內に在りて所有る一切を皆悉く遍く齧み、先ず小腸を齧みて之れを啖り食ひ、是の破戒せる人は飲酒の罪過にて、是の如く無量百千年歲に惡業に誑かされて彼の蛇に齧まれ、白鑞に燒かれ、是の如く燒き齧まれて死し已るも、而も復生く。戒ある人の酒を飲みて戒を破りし罪過なり。

又復妄語の惡業の果の故に彼の蛇舌を齧み、是の如く無量百千年歲に大苦惱を受け、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、彼處の業盡くれば爾乃ち脫るゝを得、彼處より脫れ已りて處處に浪りに走るに、復更に不慈心の果なる彼の地獄人の業の作せる衆生を見る。(其の衆生)是の如くに說きて言はく『汝等云何んが無辜にて燒かるゝや。更に處無かる可くして此れに住するなりや。我れ汝に處を示し、汝をして樂を得しめん』と。閻魔羅人は是の如くに語り已りて、地獄人を地獄中より取りて、餘の處なる彼處と別異なるに置き、別異の苦惱を多多く更に與ふ。閻魔羅人は是の如くに地獄の罪人に種種なる苦惱を與ふ。所謂、一切の方處に在りて大火に燒かれて種種の苦を受け、周匝の嶮岸は處處遍く燒け、又復更に大身の惡吼せる畏る可き處に入り、常に燒け常に煮るれて是の如くに苦を受け、身は大にして極めて軟かく十由旬の量なり。又復更に火髻處と名くるに入り、彼處に於て生れて大苦惱を受く。彼の火髻處の

卷の第十二

地獄品之八

又偸盜の果にて、惡業を以ての故に彼の地獄中、自已の物の他人に刧奪はるゝを見、卽便ち走りて逐ふ。既に是の如く走るに、閻魔羅人は利き鐵刀を以て執取りて斫割き皆脈脈を斷つ。斷ち已れば復生ず。又復餘の地獄人の疾く走りて來れる有るに、閻魔羅人は亦復捉取り、刀・戟・杵・枷の皆悉く焰の燃えたるにて斫り刺し、棒打づく。是れ彼の偸盜なる惡業の果報なり。是の如く無量百千年歲にして、乃至偸盜なる不善の業果の破壞して氣無く、腐爛し盡滅せんに、彼の人彼處より爾乃ち脫るゝを得。

又邪行の者は、本の婦女の灰河に漂はざるるを見る。極めて大いに唱喚さけび、惡波に推されて或ひは出ずる者有り、或ひは沒する者有り、地獄人を喚びて是の言を作さく、『我れ今此の灰河の惡處に在りて導無く救無し。汝今來りて我が此の難を救ふ可し』と。彼の地獄人は既に(その)啼哭を聞きて、惡業の癡心にて彼の灰河に入り、卽ち入る時に於て一切の身分は灰の爛らす所と爲り、乃至芥子許も在ること無し。唯骨のみ殘る有り。後復肉生じ、肉既に生じ已れば復更に向者の婦女の稍前より遠くにあるを見る。灰河中に在りて、復唱喚びて是の如き言を作さく、『我れを救へ、我れを救へ』と。彼の卽ち前み、彼の婦女に疾く走り往趣き、既に前み到り已りて婦女を抱かんと欲するに、婦女は之れを抱く。彼の婦女の身は皆是れ熱鐵にして、焰起りて熾に燃え、鋒の利き鐵の爪あり、既に抱き得已れば卽便ち之れを攫み、身體碎壞けて芥子許も全き處得可き無く、唯骨のみ在ること有り。是の如き罪人の普き身は皆是れ血にして、唯筋の綱のみ有り、彼の地獄人は欲心に覆はされ、彼の婦女を見て復走りて彼の灰河中に往き、乃ち無量百千年歲を經て是の如くに惡しく漂はさ

飲みしや。

舌中より惡毒を出し、一切の人は信ぜず、汝妄語せる惡人は、何が故に捨離せざりしや。

是の如き五種の惡を、汝は心に憙樂せる所なれば、今は應に忍びて受くべきに、徒らに此の憂惱を生ず。

惡業の法は毒の如きに、汝は是の如くに捨てず、故に此の地獄の、焰の鬘ある大畏處に到れり。

閻魔羅人は是の如くに地獄人を呵責し、既に呵責し已れり。自ら作せる所の業なり彼の業は印の如くにして、常に大苦を受けて晝夜息まず、種種に堅鞕き無量種有り、無量種の不善の業行の如く、是の如く無量種種に苦を受け、因に相似るが如くに相似る果を得、是の如きの苦果は種子に似るが故に大焦熱大地獄中に在り、惡業を滿足せる不善の業人は苦の果報を得、善を滿足せる者は樂果を滿足し、彼の惡業の人は是の如くに苦を受く。是の如く無量百千年歳に、是の如きの惡業は怨の如く異なる無くして大いに饒益せず。是の如くに燒煮る〻彼の地獄人なる是の如き罪人は若し彼處を脫れ、救を望み歸を望みて走りて異處に向ふに、遠く樹林を見る。極めて大黑闇にして、是の如き闇處に多く大なる狗有り、彼の狗を名けて瞋口大力と爲し、是の如きの狗は能く急疾かに走り、口は是れ金剛にして、彼の狗の吼ゆる聲は甚だ怖畏る可く、是の如き瞋口大力なる狗は彼の林中に於て處處に遍く有り。彼の地獄人の彼の林を見已りて疾走して往き入るに、彼の諸の惡狗は一切皆來りて彼の罪人を逐ひ、先ず其の卵を齧み、肉・皮・筋・根・脈及び脈穴、骨及び骨節なる一切の身分を皆悉く遍く食ひ、芥子許りの如きの遺餘りて盡きざらば後復更に生じ、長久遠しき時に惡狗に食はる。此れ何の業の果なりや。謂はく殺生の業にして、肉を食はんが爲の故に衆生を殺して、是の如きの果を得るなり。

食已に到れり』と。即ち取りて之れを食ひ、先ず其の脣を燒くこと前に廣く說くが如く、次第に乃至下從り出で、惡業の力の故に常に死せず、業を作集せしが故に舌は還りて更に生じ、更に生じて柔軟なること蓮華の葉に過ぎ、身復更に生じ、更に生じて軟嫩にして、惡業の果報なり。彼の比丘是の如くに觀察すらく『何の業にて新に生ぜるは更に軟かなりや』と。彼れ見聞して知るに、如來は燈の如く、是の如く說きて言へり『若し人、殺生・偸盜・邪行あり、酒を飮み酒を與へ、復妄語あらば、彼の業の果報にして、若し人、戒を犯すに若し聲を具へて行ひ、我れ戒を持つと言ふ。是の如き比丘の是の如き心意にて衆僧の食を食はゞ、是の如きの果を得』と。閻魔羅人は又復更に地獄人に問ひて曰く『汝は舌を燒く耶』と。彼の地獄人なる惡業の癡人の舌を出して之れに示すに、彼の舌の極めて軟かきこと蓮華の葉の如く、廣さ半由旬にして、妄語の業の故に閻魔羅人は其の舌を犂耕し、無量百千たび倒れ、傷つき壞れて破裂し、聲を發して呻喚く、妄語の業の故に是の如く無量百千年歲にして算數を出で、時節久遠しく大苦惱を受く。是れ彼の作集せる惡業の果報なり。是の如くに受け已るも、而も地獄より解脫するを得ず、閻魔羅人は又復偈を說きて之れを呵責して言はく。

汝の命を護惜るが如く、他心も亦是の如し、汝は是の如くに殺生して、惡業を作せしが故に來れり。

世の人は寧ろ命を捨てゝ、財物を聚集むるに、何故に他の物を取りて、以て己れの所有と爲せしや。

一切の人の妻を愛すること、自身を愛するより勝れるに、汝癡なる欲に染まりし人は、何が故に强ひて侵逼せしや。

若し人にして酒を飮む者は、佛の所に於て癡を生じ、法中の第一の過なり、汝は何が故に酒を

如きの言を作す、『汝は何に患むや。汝は何に苦しむや』と。彼の苦を受くる人は卽ち復閻魔羅人に報答へて是の如き言を作す。『我れ今是の如くに極めて大苦を受く。是の如きの大苦は猶尚忍ぶ可きも、渴の苦は耐え回し』と。閻魔羅人の是の如く聞き已るに、復惡河有りて可畏波と名け、彼の河に唯極めて熱き勇沸せる銅汁と鑞汁の和合せる有りて中に滿ち、又復多く焰の燃えたる鐵塊有り、彼の河岸は嶮しく、若し彼の河を見れば極めて大いに怖畏れ、若し其の聲を聞かば極めて恐怖を生ず、閻魔羅人は熱鐵の鉢を以て熱せる銅・熱せる白鑞の針を盛り取り、持して罪人に向ひ、之れに語りて言はく、『汝之れを飮む可し』と。彼の人渴けるが故に兩手に執取りて之れは是水なりと謂ひて、取り已りて飮み、彼の地獄人は惡業を以ての故に先ず其の脣を燒き、旣に脣を燒き已りて次いで其の舌を燒き、乃至咽筒も皆悉く燒を被り、次第に乃至身を燒くこと遍かり已りて下從り出で、是の如き罪人は四倍に焰燃え、四倍して苦を受く。何の業の果報なりや。所謂殺生・偸盜・邪行乃以び飮酒にして、戒ある人の自ら飮み、復戒ある人・出家せる比丘に與へたる此の業の果報にて、地獄中に於て熱渴ありて水を須ひ、熱沸せる赤焰の銅汁を飮む。是の如き比丘・持戒せる人の、衆僧中の是れ酒なりと知らざるに於て是れ淨飮なりと謂ひ、而も實は是れ酒にして、酒は是れ毒なるも手に旣に執り已らば棄捨つる能はず、衆僧を畏るゝが故に自ら之れを飮み、此の業の果報にて地獄中にて赤焰の銅汁を捨棄つる能はず、渴急しくして飮む。此れは是れ酒の果にして、所謂、沙門の檀越の家に在り、檀越の意を惜み、棄却つる能はずして便ち之れを飮める此の業の果報なり。閻魔羅人は又復更に地獄人に問ひて曰く、『汝は何に患む所なりや』と。彼の地獄人は卽ち復答へて言はく、『我れ今飢に患む。我れの受くる所の是の如き苦の中、飢の苦を勝ると爲す』と。是の如く答へ已るに、閻魔羅人は可畏波の熱焰の火中より鐵摶[三]を取り來り、五倍して焰燃えたるにて、罪人に語りて曰く、『此れは則ち是れ食なり』と。彼の地獄人は惡業にて癡なるが故に是の如き意を起さく、『今

【三】鐵摶。鐵團に同じ。鐵のかたまり。

く速に建ち、連りに上り連りに下り、手を伸し臂を努め、吼喚、號哭びて、地に墮ちて復上り、是の如く唱喚びて大火焰の鬘は普く身體を覆ひ、建ちて空中に在りて常に復燒かるゝこと前に說く所の如く、火焰中に入りて、是の如く無量百千年歳に彼の大地獄の大火盆中にて燒け已りて復燒け、連りに燒けて止まず、一切の身分燒け已りて復生じ、乃至時盡きて若しは火盆を出づるも、惡業を以ての故に而も復更に閻魔羅人を見、是れ衆生に非ざるに、罪人は之れを見て是れ衆生なりと謂ふ。手中に焰の燃えたる鐵鉗を執持し、彼の鉗は極めて熱く、彼の火聚より二倍に更に熱し、何の因緣を以て彼の鉗は極めて熱きや。殺生を以ての故に、火盆に燒かれ、殺生と偷盜との二惡業の故に、彼の鉗は極めて熱く、二倍して更に熱し。此の因緣を以て彼の焰の鐵鉗は二倍に更に熱し。閻魔羅人は是れ衆生に非ずして、是の如き鉗を以て、罪人を鉗み取りて熱鐵の地に置き、焰の鐵鉤の上に提げて坐らしめ、焰の熱えたる鐵鉤は糞門從り入りて背の上に出で、或ひは[三]卵上より出で、廣く說くに前の如く、彼れ旣に坐し已れば三倍に苦を受け、熱焰の利き鐵は其の人根を割き、幷に卵を倶に割く。何の因緣にて三倍して苦を受くるや。所謂、殺生・偷盜・邪行なる此の因緣を以て、三倍して苦を受く。譬へば鐵師若しは其の弟子の、鐵を作す處にて、鞴を以て之れを吹き、風を皮の鞴に滿たし、是の如くにして風吹きて彼の火焰燃ゆるが如く、是の如く是の如く、惡業を作す人は惡業を作して究竟め滿たすを以ての故に惡業の人と名け、惡業を作す人は惡業の弟子なり。業業普遍きが故に名けて風と爲す。所謂業風にして、婦女と共に婬するを名けて、鍛となす、爐中に熱沸をなすなり。謂はく、地獄人は唱聲にて叫喚び、是の如くに多く吹かれて是の如く多く燃え、不善の業多くして、是の如くに多く不善の業人を燒き、極苦惱を受け、此の因緣を以て彼の地獄中にて三倍して苦を受く。殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作せる彼の果は應に知るべし。閻魔羅人は彼の地獄にて、極めて大いに怖畏れ、面を皺めて唱喚ぶ不善の業人(卽ち)大火に煮られし人に問ふて是の

【三】「卵」睾丸のこと。以下同斷。

邪見あり、復邪行有りて、彼の淨行の欲染の心無き淨戒と相應せる善き比丘尼に於て、强ひて逼りて欲を行ひ、彼の不善の業を作して復集めたる堅鞕き勢力をもつて得し所の果報にて、大火聚有り。其の聚の擧高五百由旬、其の量寛廣は二百由旬、焔の燃ゆること熾盛にして、彼の人作せる所の惡業の勢力にて、急に其の身を擲げて彼の火聚に墮ち、大山崖にて推されて嶮岸に在り、坑の蹬るべく、挽き挾つ處有ること無きが如く、是の如き罪人は直に大火に入り、彼の地獄中の是の如き勢は惡業の人を推し、大地獄の熾に燃えたる火中に入らしむ。惡業を以ての故に熱鐵の鉤有りて先ず其の足を鉤け、頭は下に在りて火中に入らしめ、彼の惡業の人の既に是の如く地獄の熾火に入るに、先づ其の眼を燒き、既に眼を燒き已らば次いで頭の皮を燒き、頭の皮を燒き已らば次いで頭の骨を燒き、頭の骨を燒き已らば次いで頬の骨を燒き、頬の骨を燒き已らば次いで其の齒を燒き、既に齒を燒き已らば次いで牙床を燒き、牙床を燒き已らば次いで項の骨を燒き、項の骨を燒き已らば次いで背骨を燒き、背骨を燒き已らば次いで胸骨を燒き、胸骨を燒き已らば次いで咽筒を燒き、咽筒を燒き已らば次いで其の心を燒き、既に心を燒き已らば次いで其の肚を燒き、既に肚を燒き已らば次いで大腸を燒き、大腸を燒き已らば次いで小腸を燒き、小腸を燒き已らば次いで其の髓を燒き、既に髓を燒き已らば次いで其の根を燒き、既に根を燒き已らば次いで髓の骨を燒き、髓の骨を燒き已らば次いで其の踹を燒き、既に踹を燒き已らば次いで脚腕を燒き、脚腕を燒き已らば次いで足指を燒き、是の如く是の如く、彼い惡業の人は惡業を以ての故に、最初に先ず大火盆中に入りて是の如くに極めて燒かれ、一切の身分燒け已りて復生じ、苦を受けて斷ぜず、彼の人中にて上上に業を作せるが如く、是の如く是の如くに上上に苦を受け、彼の地獄人は是の如くに具に受く。焔の鬘と火盆にて是の如く極めて燒かれ、然る後墮ちて金剛の火地に在り、怖畏を以ての故に手を伸し臂を努め、既に地に倒れ已りて卽ち復建ち上ること毬の地に著くが如く、卽ち上りて停らず、是の如

火の燒くは是れ燒くに非ず、惡業は乃ち是れ燒き、火の燒くは則ち滅す可きも、業の燒くは滅す可からず。

火は地獄を燒かず、火は隨逐して行かざるも、汝惡業の火を作さば、須臾にして當に汝を燒くべし。

若し惡業の火を作さば、彼れ〔一〇〕地獄に在りて燒かれ、若し惡業の火を捨つれば、則ち地獄を畏れず。

若し人自ら身を愛し、復地獄を畏れなば、彼の人則ち惡を捨てゝ、大苦惱を受けざらん。
惡業を捨離する人は、心常に善く觀察し、身・口・意皆善くして、涅槃を去ること遠からず。
若し人常に惡心あり、癡心常に自在ならば、故に惡地獄を得、何ぞ眼より涙を出すを須ひん。
苦を造らば苦報を得、苦滅すれば樂報を得、初・中・後に惡業あらば、衆生は樂を受けず。
汝人中にて惡を造り、惡業を已に多く作して、是の如き惡業の果を、今は將に受けんと欲す。
若し人惡業を造らば、則ち惡處に向ひて去り、若し人善業を作らば、則ち去りては善處に向ふ。
是れ惡業を作して、樂の果を得るに非ず、樂果は惡の得るに非ず、顚倒せざるを以てして受く。
無始の世界より來、善を作さば樂果を得、若し惡業を作す者は、是の如くに苦果を得。
因緣は則ち相似るも、〔一一〕顚倒は相應せず、已に因を前に作さば、是の如くに果報を得。

是の如き罪人の惡業の所作にて、閻魔羅人は中有中に於て苦しめ呵責し已り、將ゐて地獄に向ひ、彼の惡業の人は既に呵責するを聞きて、怖畏れて毛竪つ。何ぞ況んや、眼に見るをや。彼の中有の人、既に地獄の熾に燃ゆるを見るも色等の諸陰に極めて寒苦を受け、戰動ひて忍び難くして、彼の地獄の焰火の熾燃なるに於て心に貪著を生じ、心を起して卽ち取る。取るに因緣有り、一切の有分法皆是の如くにして、因緣有りて生ず。彼の惡業の人に不善の業因なる殺生・偸盜・邪行・飲酒・妄語・

〔一〇〕地の字は元本・明本に依れり。別本に燒に作る。

〔一一〕顚倒は因緣に相應せず、卽ち因果顚倒して、惡業の善果を得るが如きこと無しとの意ならん。

見、閻魔羅人は堅く其の咽を絮り、業風に吹かれ、將ゐられて地獄に向ひ、自在を得ず。閻魔羅人の面に惡狀有り、手足極めて熱く、身を捩ぢ肚を努め、罪人は之れを見て極めて大いに芒怖れ、閻魔羅人の聲は雷の吼ゆるが如くにして、罪人之れを聞きて更に恐怖を增す。閻魔羅人は手に利き刀を執り、腹肚は甚だ大にして黑雲の色の如く、眼の焰は燈の如く、狗牙の鋒利く、臂と手皆長く、搖動かして勢を作し、肩闊く長き爪あり、鋒利くして焰燃え、臂に麁き脈脹れ、一切の身分皆悉く麁起し、是の如き種種なる畏る可き形狀あり、惡業の人を執りて是の如くに將ゐ去り、六十八百千由旬の地・海・洲・城を過ぎて海外の邊に在り、復三十六億由旬を過ぎて漸漸く下に向ふこと十億由旬にして、業風に吹かれて是の如くに遠く去る。彼の是の如き處に業風の力に吹かれて心の思量しうるに非ず、譬諭す可からず、彼處の境界は日・月・風力の到る能はざる所、唯業風の力のみあり、一切の風中業風は第一にして更に過ぐる者無く、是の如き業風は惡業の人を將ゐ、去りて彼處に到り、既に彼れに到り已るに閻魔羅王の呵責すること前の如く、閻魔羅王既に呵責し已り、惡業の羂にて縛り、出でて地獄に向ひ、惡業を以ての故に彼處に閻魔羅人有るを見て、是れ衆生なりと謂ふ。惡業の人を將ゐて大焦熱大地獄中に向ひて去る。是の如き罪人は闇中遠く彼の大焦熱大地獄中に普く火焰の燃ゆるを見る。彼の地獄の量は五千由旬にて增さず減らず、彼の地獄を去ること三千由旬にして地獄人の啼哭の聲を聞き、悲愁しみ恐怕れて極めて大いに憂惱し、已に無量種種の苦惱を受け、堅急にして耐え叵く、是の如く無量百千萬億なる無數の年歲に大焦熱大地獄中の地獄の罪人の啼哭の聲を聞く。既に啼哭を聞きて十倍に恐怕れ、心驚き怖畏る。閻魔羅人は是の如くに將ゐ送りて大焦熱大地獄に向ひて去り、閻魔羅人は之れを呵責せんが故に偈を說きて言はく。

　汝は地獄の聲を聞きて、已に是の如くに怖畏る、何ぞ況んや地獄の燒きて、乾ける薪草を燒くが如きをや。

【九】怕の字は、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。下も同じく之れに依る。

一切の怨惡の中、更に業の如きの怨は無く、三惡業にて縛束り、我れ今地獄に趁る。
獨り惡業を造作して、獨り惡果報を受け、獨りして自ら惡處に到り、世間に同伴無し。
若し人の多く惡を作せるは、他人に因緣あるも、自ら作さば還りて自ら受け、彼の人救ふ能はず。
汝何故に愚癡にして、妻子の爲に誑かれ、比丘尼等に於て、癡に誑かれしが故に惡を造れり。
此の世、未來世に、(業なる)怨は常に隨逐して行き、怨中の第一の怨にして、一切の惡處を示す。
自ら作せる所の惡業は、毒の如く刀火の如し、汝ら自ら惡業を作して、汝是の如くに自ら食ふ。
此の人業を作して、餘の人の果報を受くるに非ず、[八]初に非ず中、後に非ず、此の世、他世に非ず。
若し人散亂せる意あらば、心不正に觀察して、樂味を貪受るが故に、不善の業を造作す。
愚癡にて亂れし心の人は、不善の法を增長し、正しく觀察するを知らずして、諸の惡業を造作す。
心は能く衆生を誑き、心能く人をして貪ら令め、人をして地獄に向ひ、闇中の闇處に去らしむ。
闇に覆はれし生死中にては、佛の正法を得難く、若し人法を愛せずんば、苦從り苦處に到る。
若し人寂靜の心ならんに、境界は破壞せずして、彼の人善處に到るも、汝は今此れに到れり。

是の如くに惡業を造作せる人は自らの身・口・意に不善の業を造り、閻魔羅人は呵責し已りて、大焦熱大地獄に趁りて去る。鼻に不淨なる臭く爛れし惡屎を嗅ぎ、舌に堅き熱ある不淨の惡味を甞め、不可愛の香味の色を得、身は則ち當に最重の惡觸に觸るべく、惡風の來る有りて、刀の如く火の如く、此の五境界は畏る可くして、心怖畏るゝが故に則ち恐怯を生じて、先に於て已に地獄の惡相を

【八】初に非ず中、約に非ず等。果報は凡て因緣和合の結果なれば、その中の一なる、初、中、後、此世、他世等の一々に限つて伴ふべきにあらずといふ。

似して果を得、彼の惡業の人は中有中に於て中有の苦を受く。彼れ自身を見るに、長命の時の人壽八萬四千年歳の如く、年始め八歳の小兒の身にして、自ら自身を見るも餘の一切の人の皆見ざる所。四大微細にして不見、不對なり。須彌山を鑽りて能く穿ち能く過ぎ、而も妨礙せず、自身は障へず。須彌も障へず、何ぞ況んや餘の山をや。彼の中有中にて、是の如くに自ら黑闇の鐵城を見、自身中に入り、惡業を以ての故に、自己の身の一切の諸の毛に皆悉く焰燃ゆるを見、又復自ら閻魔羅人を見る。黑き鐵の繩を以て其の手を反縛り、復其の足を縛り、彼の黑き鐵の繩に毒の堅き觸の惡しきあり、其の色畏る可く、次いで其の體に纒み、遍き體は普く急しくして毛頭を容れず、惡業を行くる人は是の如くに自ら見、既に鐵の繩の爲に堅急に縛られ已るに、不可愛の色・聲・香・味・觸等の境界有り、謂はく、惡業の故に眼に惡色を見、甚だ怖畏る可く、閻魔羅人の眼に則ち焰燃えて多種の惡色あり、臂を努め極めて瞋り、心に見るを喜ばず、又復耳に不可愛の聲を聞き、心に聞くを樂まず、所謂、說きて言はく『此の人は乃ち是れ惡業を行へる者にして、身業・口業・意業善からず、惡業を造作し、人中の善き處なる寶洲の地にありて自ら其の身を誑き、不正を思惟して、十善業道に不善の行を作し、常に虛妄を行ひて善寶を得ず、一切の欲を行ひ、(欲は)刀火の毒の如くにして墮ちて嶮岸に在り、此の人是の如くに欲の誑かす所と爲り、他の妻に誑かされて是の如くに惡を行ひ、此の人是の如く不善に觀察して三種の不善の惡業を造作し、是の如き癡人は自ら惡業を行へり。我れ今に於ては、大焦熱大地獄中に置きて種種の苦を與へ、無量百千種種の苦惱を皆悉く具に與へて、後時に更に復惡行惡業を作さゞらしむ』と。閻魔羅人は中有の妻子を離れし人、大いに憂愁ふる者を呵めんが爲に、偈を說きて言はく。

女色を知識と爲さば、利益せざること怨の如の如くにして、人の世界を破壞り、闇地獄處に到る。

悉く燒き煮られて大苦惱を受け、身體の皮膚は赤銅の色の如く、内外皆熱し、口乾きて大いに渇き心を燒く熾なる熱あり。又復風界は、輕相更に增し、身乾けるを以ての故に虚空に昇るが如く、復下りて地に墮ち、一切の身分の一切皆乾き、一切の身分、一切の脈中に風行きて住せず、風有て名けて必波羅針と爲し、焰の針の刺すが如く、乃至遍き身の毛根等の如きより乃至は精・髓皆悉く燒け、卑波羅風は能く皮・肉・脂・骨・精・髓を割きて斤斧の斫るが如く、一切の根、一切の身分を吹きて皆悉く閉塞せしめ、大小便利は擁隔へられて通せず、息は調利ならず、咽喉正しからず、眼目損滅へ、耳中に則ち不可愛の聲を聞き、鼻は香を聞かず、舌は味を知らず、鼻柱傾倒き、人根縮み入り、糞門に苦痛ありて火に觸れらるゝが如く、皮膚は腫起れ、毛髮牢からず、此等は唯、惡業の人の死なんと欲する時に臨み、彼の人是の如く、三夜三日、四大の忿盛にして苦惱に逼らるゝを說けり。若し命盡くる時、他世の相現る。所謂、自ら一切の屋舍の黑き帳幕の如くなるを見、黑き焰有るを見て夢に色を見るが如く、是の如き惡相は曾て暫くも住せず、復惡色の師子・虎等の不可愛の色を見、一切の極惡なるを皆悉く具に見、惡虎の聲を聞きて大怖畏を生ず。鐵は身の皮を磨り、殘はれて盡きんと欲すること有り、彼の風上り行き、始の足の甲より起り、足の甲を離れて次いで足の趺を行き、足の趺を離れ已りて次いで其の踹を行き、是の如くに踹を離れて次いで其の膝を行き、是の如くに膝を離れて次いで其の髀を行き、是の如くに髀を離れて次いで其の髖を行き、是の如くに髖を離れて次いで其の肚を行き、是の如くに肚を離れて次いで其の心を行き、是の如くに心を離るれば咽喉利ならず、口乾きて唾盡き、一眼則ち陷りて虚空中を見る。閻魔羅人は手に鐵棒を執り、既に是の如きを見れば手を以て摩托で、知識、諸の親しきは是の如きを見已りて皆言はく、『此の人、手にて虚空を摩せり』と。氣息は閉塞り遍く身分を吹きて是の如くに氣を斷ち、彼の燈炷の燒け已りて滅するが如く、此の世間を捨てて生れて中有中に在り、因の相似せるが如くに相

く作さば、彼の地獄に墮つ。業及び果報は前に說く所の如し。復持戒に於て禁戒を犯さず、具足して缺さゞる淨行の童女・善き比丘尼にして、未だ曾て欲を行はず、未だ曾て戒を犯さず、如來の法中にて法の如くに行へる者なるに、其れをして退壞かしめ、是の如き人は佛法を信ぜずして、是の如き心にて言はく『佛は則ち一切智人に非ず。佛既に是れ一切智者に非ず、何ぞ況んや弟子の比丘尼僧に清淨の行有らんや。是の如きの一切は是れ妄語なり、虛誑にして實ならず。是の如き佛法は是れ惡處にして、布施此れ能く福德を生ずるに非ず、布施此れ能く涅槃を得るに非ず、此れ凡人の僧にて是の如くに和合せるにて、比丘女尼の禁戒を毀破るも則ち罪を得ず』と。彼の人、是の如くに惡しく思惟し已り、彼の童女・比丘尼の戒を壞りて僧行を退かしめ、其れをして戒を犯さしめ、彼の人、身業・口業・意業に惡不善を行はんに、身壞れ命終らば惡處に墮ち、大焦熱大地獄中に在りて大苦惱を受く。一由旬の身あり、身極めて柔軟にして生酥より軟らかく、是の如く眼軟らかくして更に身より軟らかく、是の如くに五根皆悉く坏軟にして、聲・觸・色・香も猶尙能く殺す。何ぞ況んや餘の苦をや。彼の作せる惡の如きは、惡業重きが故に是の如くに身心皆悉く坏軟なり。彼の惡業の人は惡業力の故に極苦惱を受け、彼の惡業の人の死なんと欲する時に臨み、現に果報を受けて大苦惱有り、前に說く所の如き活地獄中の所有る苦惱を皆悉く具に受け、此の罪人の如きは死なんと欲する時に臨み、先の三日に於て是の如くに苦を受けて乃至は命盡く。音を失ひて語らず、想大いに怖畏れ、行劣り識驚き、是の如くに次第に四大の色怒りて極めて苦惱を受く。地界は堅鞕くして身體強く怒り、一切の身分の筋・脈・骨・髓の處處閉塞し、皆悉く破壞して大苦惱を生じ、新生の酥の如くに摶押たれ磨打らる。地界は是の如し。又復水界は、一切の身分の筋脈を繫縛し、本自ら堅燥けるを能く爛殺れしめ、殺虫の氣臭く、一切の漏門は皆悉く閉塞ぢ、咽は通利らず、舌縮みて喉に入り、諸の竅は苦を受け、遍き體より汚を出す。又復火界は、一切の身體の所有る筋脈皆

の如く連りに抜きて其の口中に置き、驅りて自ら食はしむ。彼處に多く金剛の嘴の蜂り、罪人の身に觸るれば熱血の出ずること有りて、味鹹きこと鹽の如く、閻魔羅人は彼の鹹き血を取りて罪人の口に置き、驅りて之れを食はしむ。彼れ旣に食ひ已るに、十倍の飢渇ありて其の身心を燒き、惡業に誑かれて復自ら肉を食ひ、食ひ已らば更に生じ、惡業の因緣にて作集せる惡業に誑惑され、大苦惱を受けて年數有ること無し。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、旣に脫るゝを得已らば四百世に於て餓鬼中に生れて不淨の食を食ひ、彼處より脫れ已らば五百世に於て畜生中に生れて蟮・蜣・蜋等の虫を作し、飢渇身を燒く。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀、是の如く觀已るに、彼れ更に第十七處を見ず、是の如き焦熱の大地獄は是の如き等の處にて是の如くに邊を盡くし、彼の邪見の人の是の如くに業を作せる惡業の住處なり。彼の比丘、是の如くに六大地獄を觀察して實の如くに知れり。彼の修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察し、是の如くに見已りて心に歡喜を生じ、是の如き言を作さく、「此の比丘は第一に精進し、十一地を得たり。彼の人則ち能く生死の道を斷ぜり』と。彼の地の夜叉は知り已りて歡喜し、轉た復上りて虛空夜叉に聞こゆること前に說く所の如く、次第に乃至少光天に聞えて是の如き言を作さく、『某國、某村の某善男子は』と、前に說く所の如く、『十一地を得、魔王と共に同一の處に住せず、心煩惱と共に戲るゝを樂まず、生死の欲なる非境の處を離れ、一切世界の無邊の苦中に住止するを肯はず』と。

又彼の比丘、活・黑繩・合喚・大喚及び焦熱等幷に別處を觀已りて復更に觀察するに、當に更に餘の地獄有るべしと爲んや不や。彼れ見聞して知るに、大地獄有りて大焦熱と名く。衆生は何の業にて彼の地獄に生るゝや。彼れ見るに、人有りて、殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語・邪見を樂み行ひ多

【七】蟮はみゝず。蜣、蜋は直前に出でたり。

轉じ已るに、異なる刀風生じて、其の身を碎割して沙摶の如からしめ、十方に分散して又復更に生じ、生じ已らば復散り、散り已らば復生じ、恒常に是の如くにして年數有ること無く、是の如き等の堅急しき苦惱を受く。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、旣に脫るゝを得已らば五百世に於て食吐餓鬼中に生れ、彼處より脫れ已らば復飢え渇ける畜生の中に生る。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて彼處を名けて金剛嘴蜂と爲し、是れ彼の地獄の第十六處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行・飮酒・妄語を樂み行ひ多く作すの業及び果報は前に說く所の如く、復邪見有り。所謂、人有りて是の如き見を作さく、『世間に始有りて因緣にて生じ、常なると無常なる有り、一切皆是れ因緣の作す所なり』と。彼れ實ならざるを語り、邪の因譬喩にて非法中に於て相似の法を說き、他の餘人をして邪法に安住せ令め、正法を退失し、正法を障礙して邪見を作し、彼れ正しからざるを說きて『常法は因に非ず、常法は動かず、常法は異ならず、常は作す能はずして猶し虛空の如し』とし、彼の邪見の人は不實に分別す。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、金剛嘴蜂鎧鉀處に生れて大苦惱を受く。彼の邪見の人は身業・口業・意業を破壞せる下賤しき人にして、衆生中にて劣り、正法を障礙して不善の法に住し、愚癡を以ての故に惡道の行を作し、自ら智有りと謂ひ、智を恃みて我慢あり、自らの意に分別し、不實の語を說きて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中に具に受け、五倍して更に重く復勝るゝ者有り。所謂、彼處の閻魔羅人は極めて細き鉗を以て稍しく其の肉の毛根許の如きを抜き、抜き已りて復抜き、是

譬諭とを和合して説けるが故にして、彼の地獄人は是の如き舌の罪の故に是の如き一切の苦綱を受け、彼の邪見の人は曲見を他に教へ、大悪心を以て餘の人を教化して邪見に任せ令め、身業・口業・意業を破壊して、長久しき時に於て地獄中に在り、常に燒燃かれ、年數有ること無く、窮盡む可からず。乃至悪業未だ壊れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し悪業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脱るゝを得、既に脱るゝを得已らば三百世に於て食屎餓鬼の中に生れ、既に脱るゝを得已るも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、他の王法を犯せるに横しまに其の殃を得、悪業を以ての故に貧窮にして病多く、他人に繋屬はれて自在を得ず、人の肉を噉食ひて而も復人と名く。是れ彼の悪業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて闇火風と名け、是れ彼の地獄の第十五處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盗・邪行・飮酒・妄語を樂み行ひ多く作し、業業普遍く、業を作して究竟むるに、是の悪業を以て彼の地獄の闇火風處に墮つ。業及び果報は前に説く所の如し。復邪見有りて樂み行ひ多く作し、所謂、人有りて是の如き見を作す『一切の諸法に常なると無常なる有り。無常の者とは身、常なる者とは四大[六]なり』と。彼の邪見の人は是の如き二見あり、悪しき因譬諭を他人の爲に説きて邪見に任せしめ、復隨喜を生ぜしめ、大衆の中に於て、非法中に於て相似の法を説き彼の人、是の悪業の因緣を以て、身壊れ命終らば悪處に墮ち、彼の地獄の闇火風處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に説く所の如き活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け五倍して更に重く、復勝るゝ者有り。彼れ既に脱るゝを得るも、閻魔羅人の作す所の苦惱は脱れ難く、脱れ已らば悪業の所作にて後復更に闇火急風受苦の處に入り、悪風に吹かれ、彼の地獄人は虛空中に在りて所依の處無く、輪の如くに疾く轉じ、身は見る可からず、彼の人是の如く輪の如くに

【六】四大。一切の色法を構成する地・水・火・風の四成分を云ふ。倶舍論には之れを實假の二に分ち、堅性、濕性、煖性、動性を能造なる實の四大とし、世間に云ふ地・水・火・風を所造の假の四大とせり。

飢渴の逼る所と爲り、若しは異なる人有りて王法に違犯せるに、横に誣枉られて共れをして罪に入らしむ。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて彼處を名けて邪迦虫柱惡火受苦と爲し、是れ彼の地獄の第十四處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行・飮酒・妄語を樂み行ひ多く作すの業及び果報は前に説く所の如く、復邪見有りて樂み行ひ多く作す。所謂人有り、是の如く邪見にして、此の世無く、亦彼の世も無しと言ひ、殺・盜・邪行・飮酒・妄語の業及び果報は前に説く所の如く、此の世は常、一切の法は常にして、常にて破壞せずとし、彼の人是の如き顚倒の邪見あり。邪見の人は復他人に敎へて邪見に任せ令め、數數爲に説き、大衆中にて惡しき因譬諭を説き、他人の爲に説きて彼の前の人をして惡邪見を取ら令め、大衆中に於て、相似の法に於て非法に説法す。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、彼の地獄の邪迦虫柱惡火苦處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に説く所の如き活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け復勝るゝ者有り。所謂、彼處に鐵柱有りて生じ、其の頭上に釘ちて下從り出で、是の如く出で已りて半ばは下りて地に入り、半ば頭上に在り、是の如く穿ち已るに、邪迦虫有りて彼の罪人の皮・肉・脂中に在り、一切の處に生じて罪人を飮食し、一切の身分の先ず其の脈を啄み、血を飮みて盡きしめ、次いで其の肉を食ひ、次いで其の骨を破り、次いで其の髓を飮み、次いで其の筋を斷ち、次いで其の脈を斷ち、次いで其の竅を燒き、次いで其の毛を拔き、其の皮を抖擻き、次いで身の內に入りて叢筋中に在り、次いで其の心を破り、旣に心を破り已りて其の汁を飮み、次いで其の肺を破り次いで背の中に入りて其の汁を飮み、次いで其の脈を散らし、次いで熖の鉗を以て其の頷の下を破りて其の舌を拔き、拔き已りて狗に與ふ。其の舌根を以て本惡語を說き、顚倒の因を說き、非法と

生れて蝎虎と作り、或ひは【四】瞿陀を作り、彼處より脱れ已るも人身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、邊地の樹林の國土なる陀羅毘羅・安陀羅等の惡國土中に生れて、貧窮にして病多く、他に繫屬す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて黑鐵繩刀辧受苦と名け、是れ彼の地獄の第十三處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行・飮酒・妄語を樂み行ひ多く作すの業及び果報は、前に說く所の如く、復邪見有り。所謂人有りて、是の如き見を作さく『一切の罪福は因緣の中に在り、所因の處に皆罪福を得』喜びて他の爲に說き、樂み行ひ多く作すに、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、黑鐵繩刀受苦と名くる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け五倍して更に重く、復勝るゝ者有り。所謂、彼處の閻魔羅人は黑き鐵の繩を以て其の身體を鎖ぎ、惡業を以ての故に、是の如く鎖ぎ已りて、利き鐵刀の火焰熾に燃えたるを以て、足從り頭に至りて之れを辧劈き、彼の地獄人は既に鎖れ劈かれて悲號き大叫び、唱喚き啼哭く。而も復更に鐵の繩を以て之れを鎖ぎ、焰の燃えたる利き鐵は極細に分辧して芥子許りの如きも亦得可からず、而して更に和合して還りて復更に生じ、和合して生じ已らば復更に割き、割き已つて復割く。彼の人是の如く、彼の地異處にて長久しき時に於て大苦惱を受け、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るるを得、既に脫るゝを得已らば五百世に於て餓鬼中に生れて人の棄つる所の器を盪へる惡水を食ひ彼處より脫れ已らば一百世に於て畜生中に生れて【五】蛭を作し蝎を作し、若しは蜣・蜋等の種種の諸の虫(を作し)、是れ彼の惡業の餘殘の果報にして、若しは人中同業の處に生れ、生れし所にて常に

【四】瞿陀(Kuṇḍn)。龍の名。

【五】蛭とは、ひる。蝎とは、きくひむし。蜣とは、くそまろめむし。蜋とは、かまきりなり。

殘の果報なり。若しは人中同業の處に生れ、貧窮にして病多く、惡國土に生れて諸根を具へず、常に怖畏有りて、惡國の中にあり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて金剛骨と名け、是れ彼の地獄の第十二處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行・飲酒・妄語を樂み行ひ多すこと前に說く所の如く、復邪見有りて樂み行ひ多く作す。所謂人有りて、是の如き心を作さく、『一切の世間の命あり命無き物は自然に生じ、自然に滅すること棘の刺針、孔雀の毛色の如く、鹿愛焰・乾闥婆城の因緣無くして有り、因緣無くして滅するが如くにして、一切諸法も皆亦是の如く、因緣無くして生じ、因緣無くして滅し、自然なること是の如し』と。復他人に教えて他人を安住せしめ、是の如く信ぜ令めて身業・口業・意業を破壞し、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、彼の地獄の金剛骨處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝るゝ者有り。閻魔羅人は地獄人を取り、嚴利き刀を以て其の身の肉を削りて皆悉く盡きしめ、唯骨のみ在ること有り。本の怨家を見、(其の怨家は)諸の骨人を執りて此れを以て彼れを打ち、彼れを以て此れを打ち、惡業を以ての故に骨は金剛と爲り、頭の破れし者有り、身中破れし者あり、或ひは罪人の一切の身分皆悉く破れし者有り、孔を作せる者有り、骨の乾ける者有り、或ひは罪人の身分を失へる者有り。復骨を以て更互に打つ者有り、焇の石を以て之れを打つ者有り、彼の地獄人の惡業の因緣にて、無數の年歲に彼の地獄中にて本の怨家を見、(其の怨家は)是の如く執持して更互に打ち、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るるを得已らば五百世に於て自食腦餓鬼中に生れ、彼處より脫るゝを得已らば五百世に於て畜生中に

【三】鹿愛焰(Mrgatrislnu)。沙漠中にて陽焰の間に現はれる湖水のこと。蜃氣樓の如くにして其實なきも、鹿迷はされ、水を飲まんと欲して近くが故に此の名あり。東京の近郊にてあらはれたりと、「逃水」と稱せられた地に臥せば見えるとぞ。

復異なる處有りて惡嶮岸と名け、是れ彼の地獄の第十一處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行・飮酒・妄語の業及び果報は前に說く所の如く、復邪見有りて樂み行ひ多く作す。所謂人有りて、是の如き見を作さく『水に入りて死する者は一切の罪滅し、死し已りて八臂の世界に生れ、彼處より退かず』と。是の如き癡人は彼處に生れんことを望み、復他人に敎えて亦他をして隨喜せ令め、水に入りて死す。彼の人是の如く水に入りて死し已らば惡處に墮ち彼の地獄の惡嶮岸處に在りて大苦惱を受け、身業・口業・意業を破壞し、彼處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝るゝ者有り。彼の地獄處に極めて利き刀の石ありて遍く其の中に滿ち、多く惡山有り、處處に遍く滿てる巖崖の嶮峻なるは高さ千由旬にして、鳥の飛ぶも到るを得ず、何ぞ況んや罪人能く往き到らんや。熖火普遍く、一切熾に燃え、彼の地獄處の一地獄人は、餘の一切の地獄の罪人の爲に是の如き言を說かん『君等來る可し、此の山を過ぎ已らば更に地獄無く、若し此の山を過ぐれば我等樂を得』と。諸の地獄人は惡業を以ての故に彼の人の是の如き說を作すを聞見し、是の如く說き已るに、諸の地獄人は走りて彼の山に赴き、惡業を以ての故に彼の巖崖・嶮岸の處に到る。彼處は普く燒け、火熖熾に燃え、旣に走りて往き至るも上るを得る能はずして、墮墜つる者有り、火中に在りて極めて燒かるゝ者有り、怖畏有るが故に手に熖の石を抱きて燒かるゝ者有り、驚き畏れて救を望み歸を望みて走りて迴還る者有り、彼の地獄處の閻魔羅人は手に鐵の椎を捉りて極めて打ち連りに打つ。彼の地獄人は身業・口業・意業邪なるが故に長久遠時に是の如く燒き煮られ、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、旣に脫るゝを得已らば三百世に於て食血餓鬼中に生れて同業の處に生れ、彼處より脫れ已らば三百世に於て毒有る畜生の中に生る。是れ彼の惡業の餘

【二】八臂世界。八臂天、即ち那羅延天(Nārāyaṇa)のこと。那羅延とは人生本と譯す。即ち是れ梵王にして、外道は一切の人皆梵王より生ずと爲すが故に人生本と名く。又那羅延とは天上の力士を云ひ、又摩醯首羅(Maheśvara)は形名を變じて韋紐天、那羅延天と爲るとせらるゝにより、摩醯首羅、韋紐(Viṣṇu)を那羅延天の別名と爲す。

畜生に在りて螢火虫を作し、身に火焰有り、夜中に於て行きて一切の人に見られ、白日の風に吹かれ、日光に炙られて身は則ち內燒かる。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて彼處を名けて大鉢頭摩と爲し、是れ彼の地獄の第十の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行・飮酒・妄語を樂み行ひ多く作し、要を以て之れを言はんに、身・口・意業を普遍く究竟め、作して復集むれば、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄に在り、大鉢頭摩なる別異の處に生る。業及び果報は前に說く所の如し。復邪見有りて、彼の邪見人に是の如きの心有り、『大齋中に於て若し丈夫を殺さば、意に稱へる處を得』と。是の如き邪見の惡業を造作せんに、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄に在り、大鉢頭摩なる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、彼の地獄處は【一】鉢頭摩の如く、彼の鬚の中に在りて金剛の棘の鬚あり、五百由旬にして、地獄の美人は鉢頭摩の金剛の棘中にあり、彼の金剛の棘は彼の人の一切の身分を破壞し、針の頭許も刺を被らざる處無く、地獄の火の遍く燒かざる處無くして、身の瘡に焰燃え、是の如く久しき時に常に燒かれ常に煮られ、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、彼處より脫れ已らば二百世に於て食屎餓鬼の中に生れ、彼處より脫れ已らば五百世に於て畜生中に生れ、孔雀等を作して常に惡毒を食ひ、旣に脫るゝを得已るも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、常に貧窮に困みて他人に繫屬れ、若しは伎兒を爲し、戲を以て業と爲して自ら命を活かし、若し是の如く戲にて命を活かす者は世間に下賤しく、乃至命盡く。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに

【一】鉢頭摩(Padma)。又は鉢特摩波頭摩等。紅蓮華と譯す。

巻の第十一

地獄品之七

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて彼處を名けて無終沒入と爲し、是れ彼の地獄の第九の別處なり、衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、盜・殺・邪行・飲酒・妄語を樂み行ひ多く作すの業は前に說く所の如く、復邪見の身・口・意業有り、業業普遍く、業を作して究竟め、樂み行ひ多く作さば、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて彼の地獄に墮ち、無終沒入なる別異の處に生れて大苦惱を受く　所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け、五倍して更に重し。邪見の所作にて、正しからざるを聞くを以て、他人に敎えられて是の如き心有り、『若し虫・蟻・蛇・蟒・鹿・馬を以て火中に著くれば、火既に歡喜して我れ大福を得、生れて世間に勝れ、火に燒かれし者は魔醯首羅の世界中に生れん。若し火を以て衆生を燒く者は、則ち無量の大福を得』と。是の如き愚癡なる邪法に誑かされし邪見の人は、身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、無終沒入なる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、彼れに鐵山有り、火焰甚だ熾にして、廣さ五由旬、其の山に普遍く地獄の火燃え、閻魔羅人は地獄人を驅りて彼の山に上らしめ、脚・腰・髀・背・臂・頭・項・手・足・耳・眼乃至頭腦を燒き、燒き已らば復生じ、生じ已らば復燒き、時節長遠しく、年數有ること無く、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、彼の邪見人の既に彼處より脫るれば、五百世に於て食屎餓鬼の中に生れ、一切の身分に皆悉く焰燃え夜中に於て行きて衆人に見られ、彼の惡業の人の是の如き鬼中より既に脫るゝを得已らば、生れて

倍して更に重く、復勝るゝ者有り。既に彼處に生れて本の人中の男女・妻妾・愛する所の知識・若しは父若しは母・一切の愛する所の親友の人の皆燒煮かるゝを見る。彼の地獄處の男女・妻妾・愛する所の善友・父母・知識は皆人中の業の化して作せる所にして、地獄に在りて燒煮かるゝを見、彼の人見已りて心大いに憂悲し、極めて大苦を受け、彼の一切の敬愛する所の者の燒かれ煮らるを見て、彼の地獄所にて愛の火もて自ら燒き、憂悲の苦は重なり、彼の地獄の火もその十六分中の一分に及ばず。地獄人中の一切の苦惱にて愛火の苦勝れ、彼の愛の火は火中の火、彼の愛の羂は羂中の羂、彼の愛の縛は縛中の縛にして、一切愚癡の凡夫を繫縛す。彼の人、邪見なる不善の業の故に、地獄中に於て愛敬する所の親善等の人の燒かれ煮らるゝを見、彼の地獄人は愛の火にて自ら燒き、彼の地獄の火は愛心の火に於て猶し霜雪の如く、妻子の衆、父母等の衆の悲號み、大喚びて是の如き言を作すを聞く『汝來りて我れを救へ、來りて我れを救ふ可し』と。彼の地獄人は地獄の火の燒煮する所と爲りて自在を得ず。云何んが能く彼の地獄處より救はんや。常に一切の時に是の如き等の身心火に燒かるゝことを受け、時節長遠しく、年歲は無數にして、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已らば三百世に於て餓鬼中に於て生れ、唯[一]觧の棄つる所の飲食のみを食ひ、彼處より脫れ已らば五百世に於て畜生中に生れて常に水虫を作し、兒子多饒く、是の如き兒子は漁獵人の常に殺害する所と爲り、既に彼處より脫るゝも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れ、貧窮くして命短く、諸根を具へず、常に賤人なる天祀の奴等を作す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

【一】觧の字、宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に觽に作る。いずれも意味不詳、觧は蟹に通ずるも、蟹にてもおかし。

を焼き、機關虫と共に一處に焼かる。彼の虫の身少なれば受くる苦も亦少なく、彼の地獄人の身塊甚だ大なれば受くる苦も亦多く、彼の火炎の鬘は迭互に相ひ焼き、時節長遠しく、年歳無數にして窮盡む可からず。乃至彼の人の邪見の惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、旣に脫るゝを得已らば五百世に於て生れて針咽山の傍に止住する餓鬼の中に在り、彼處より脫れ已らば五百世に於て畜生中に生れて海魚の身を受け、大海の大波浪の處、極めて冷たき水中、灰水の中に在り、旣に脫るゝを得已るも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中同業の處に生れて常に林に在りて行き、林の中に在りて住み、或ひは荒榛處にて生を資け命を活かし、貧窮くして困苦み、是の如きの人は彼の荒榛中にて野火に焼かる。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて彼處を名けて一切人熟と爲し、是れ彼の地獄の第八の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偸盜・邪行・飲酒・妄語を樂み行ひ多く作すの業は前に說く所の如く、復邪見有り。所謂人有りて、愚癡・邪見にして邪法を聽聞し、是の如き癡人の身業は顚倒し、口業顚倒し、意業顚倒し、是の如き三業を常に顚倒して行ひ、彼の邪見の人は邪見の行を修め、若しは樹林に於て、若しは山若しは榛、若しは兩村の間、若しは洲潬の上なる是の如き等の處に火を放ちて之れを焼き、彼の邪見の人に是の如きの心有り『若し火飽滿せば天則ち歡喜せん。天若し歡喜せば我れ則ち天に生れん』と。是の如き癡人は惡法を聞くが故に、惡法に誑かされて是の如き計を作し、火に餧えたるを飽かしめて當に天に生るべしとし、是の如くに火を放ちて、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、一切人熟なる地獄處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中にて具に受け、五

るを得已らば四百世に於て畜生中に生れて海鳥を作し、或ひは海畔、河口の處に在りて生れ、彼の鳥に赤頭あり、是れ彼の前の業の餘殘の果報にして、若しは人中同業の處に生れ、貧窮にして病多く、是れ本の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて彼處を名けて髐骨髓虫と爲し、是れ彼の地獄の第七の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、多く惡不善の業を作し、身の不善の業、口の不善の業、意の不善の業あり、復正しきを聞くを離れ、是の如きの癡人にして、梵世に生るゝことを望みて惡を行ひ戒を離れ、本性戒無く、此の諂曲の人の他に苦惱を與へ、正戒を遠離し、乾ける牛屎を以て自ら身を燒かんに、彼の人、現世に身を燒きて苦を受け、是の如き人中の人の火に燒かれ、身壞れ命終らば惡處に墮ち、髐骨髓虫なる地獄處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、鐵椎にて頭乃至脚足を打たれ、唱聲にて大喚び、一切の身分は蜜蠟の摶の如くにして分別す可からざるに、而も復死せず、是れ彼の邪見なる惡業の力の故なり。彼の地獄處の[一六]廣さ三由旬、高さ五由旬にして、地獄人の身の廣長も亦爾く、遍く其の中に滿ちて以て肉の山を爲す。彼の地獄處に濕生虫多饒く、皆是れ衆生なり。是の如き虫は何の業の致す所なりや。若しは何れかの丈夫、若しは何れかの婦女にして、自らの身他の身に虫虱等有るに、本彼の虫を殺し、或ひは蟻子を殺し、或ひは黑虫等、或ひは[一七]蜱等を殺さんに、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば彼處に虫を作して機關虫と名け、是の如き罪虫は生れて彼の山に在り、自業の作す所にして、自らの業の果にて生る。惡業を以ての故なり。髐骨髓虫地獄處に更に復餘有り、閻魔羅人は火を以て之れを燒き、彼の邪見の者は本人中の時乾ける牛糞にて身を燒ける業を以ての故に、機關虫と一處に合して燒かれ、大苦惱を受く。彼の山既に燒けて火炎上り出で、高さ十由旬にして、彼の地獄人は自らの罪業の故に大火身

【一六】廣の字は、宋・元・明三本に依れり。

【一七】蜱とは螳蜋の卵なり。宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本には、蜱を蜌(べい)に作る。蜌とは大蟻の子、又はうしらみを云ふ。

ひは富樂を望みて一月食はず、天に生れんことを望むこと有りて一日食はず、愛なる使に縛られ、彼の人是の如くに苦の縛る所と爲り、是の如く是の如くに復更に苦を受く。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。破れ見聞して知るに、復異なる處有りて血漂河と名け、是れ彼の地獄の第六の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るるや。所謂、邪見なる惡業の衆生は彼處に生る。彼れ見るに、人有り、禁戒に違犯ひて多く戒を犯し已り、是の如くに思惟す『我れ若し苦行せば罪は則ち消滅し、多くの福德有らん』と。彼の人既に是の如きの思惟を作し、樹林中に入りて脚を懸けて樹に著け、頭面は下に在り、刀を以て鼻を破り、或ひは自ら額を破り、瘡を作して血を出し、火を以て血を燒きて天に生るゝを得んことを望む。是れ惡道の行にして、譬へば人有りて沙中に油を求むるも、油は得可からざるが如し。彼の人血盡きて命終を致し、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ち、彼の地獄の血漂河處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け、五倍は更に重く、復勝る者有り。所謂、彼處の閻魔羅人は手に熱炎と枷・刀・鑽・石を執りて之れを散らして末と爲し、流血河を成し、此の河は急に漂き、餘の地獄人の多饒く髮骨彼の河中に在り。復第二の赤銅の河流有りて其の河を名けて惡水可畏と曰ひ、彼の河に虫有りて名けて丸虫と爲し、其の觸ることは火の如く、彼の地獄處にて彼の罪人に觸れ、燒きて之れを食ひ、是の如くに地獄の血河に漂はされ、年歲數無く、時節久遠しく大苦惱を受け、彼の血河漂地獄の處にて、常に一切時に惡苦惱を受く。是の如く彼の邪見人の惡不善の業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已らば五百世に於て煙を食して活命る餓鬼中に生れ、既に脫る

し已りて更に浮き、浮き已りて復沈み、是の如く鋸水に常に割き常に劈かれ、皆悉く熟爛して猶し熟せる豆の如く、身體分裂して或ひは浮き或ひは沈み、長久しき時に於て常に煮られ割き劈かる。極利刀鬘なる熱鐵の鑊とは、罪人の中に入りて受くる所の苦惱は、利き刀の鬘有りて破の鬘中に在り、利きこと剃刀の如くにして、其の身分を劈く。若しは罪人を置く極熱沸水、多饒惡蛇なる此の二鑊とは、罪人の中に入りて受くる所の苦惱は、熱沸せる水有り、極めて沸ける勇沫の高さ半由旬、沫中に蛇有り、牙は甚だ嚴利にして、若しは觸若しは見に皆熾火有りて地獄人を燒き、觸るれば刀の割くが如く、肉を盡して骨のみ在らしめ、之れを【一五】看れば則ち熱して身皆爛れ盡き、沸沫之れを煮て身分皆洋け、若しは水中に在りて苦毒に煎煮られ、第一の苦なる堅鞕くして重き苦を受く。彼の地獄人に、閻魔羅人の若し來り到れる者は、是の如き意を起す『何の方便を作して鑊の門を閉塞ぎ、彼の罪人をして走り出ずる能はざらしめん』と。閻魔羅人は是の如き意を起さく『當に金剛を以て堅く其の口を塞ぎ、之れを合せて地に在らしむべし。則ち走る能はずして、種種の苦惱を中に在りて具に受けん』と。閻魔羅人は既に此の意を發し、一切の鐵鑊の口を合せて下に在らしめ、復炎鬘の火の兩倍して熾なる炎あり、彼の地獄人は是の如くに苦を受く。閻魔羅人に極めて瞋れる意ありて、復更に思惟すらく『云何んが方便して更に異なる苦を與へん』と。既に思惟し已りて復鐵薪の兩重に炎燃えたるを取り、若しは地獄人の意に上に向はんと欲すれば、熱沸せる銅汁迭互に相ひ著き、身散る者有り、蛇の嚴しき毒火其の身を燒きて已に爛熟せる者有り、常に一切の時に種種の苦を受く。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處の熱鐵の鑊中より爾乃ち脫るゝを得、彼處より脫れ已らば三百世に於て食臭氣なる餓鬼の中に生れ、彼處より脫れ已らば三百世に於て畜生中に生れ、彼處より脫れ已らば若しは人中同業の處に生れ、癡なる論師を作して惡因の論を說き、心意顚倒し、或

【一五】看の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

るを得るも、怖畏多き嶮惡の處に在り、常に木を斫る處、常に魚を取る處にて、常に怖畏を生ず。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、更に何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて鐵鑊處と名け、是れ彼の地獄の第五の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行・飲酒・妄語の業及び果報は前に說く所の如く、又邪見有りて樂み行ひ多く作す。所謂、外道の邪見にて齋中に丈夫を殺し、是の言を作す『我れ今會を作して丈夫を殺せり。彼れ天に生るゝを得ば、我れも亦天に生れん。彼れ若し天に生るれば、我れと證を爲せばなり』と。或ひは龜を取りて殺すこと有り、因緣を證して後世天に生るとし、或ひは復他に一生は是の如しと敎えて正道を妨礙げ、邪道に安住せしむるに、是の如き惡業の邪見人は身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、鐵鑊處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、十倍して更に重く、復勝る者有り。六の鐵の鑊有りて十由旬の量にして、六とは所謂、平等受苦無力無苦、火常熱沸、鋸葉水生、極利刀鬘、極熱沸水、多饒惡蛇なり。平等受苦無力鑊とは、罪人中に入り、詳く一處に聚りて一身の聚を作し、猶し麨摶の如く、煮られて力無きに復更に煮られて轉た復力無く、是の如き惡處より身救ふ能はず、心救ふ能はず、是の如きは法無く、惡道の人を法として救ふ可き無くして、能く救ふ人を離れ、救無きを以ての故に長久しき時に煮らる。火常熱沸なる熱鐵の鑊とは、罪人中に入らば熱沸せる赤銅之れを煮て身を散らし、灰も亦得叵く、盡き已りて復生じ、生ずれば常に煮らる。鋸葉水生なる熱鐵の鑊とは、罪人中に入らば赤銅色の水鋸きて其の身を割き、彼處に火炎あり、頭は下に在りて入り、既に彼處に入りては或ひは浮き或ひは沈み、常に鋸の爲に割かれ、熱沸せる銅汁其の身體を割きて脈脈を分散せしめ、是の如くに劈裂かれて又復沈沒し、沒

て赤銅彌泥旋處に在り、諸の地獄人は彼處に在りて生れ、生れ已りて復死し、死し已りて復生れ、一切の身分皆悉く散壞れ爛熟れて浮び出で、銅汁の上に在り、出で已らば復沒して大苦惱を受け、迭に相ひ走奔し、更互に唱聲(を出し)、彼の邪見人にして邪見を說ける者の唱喚して既に走るに、惡業の所作にて惡彌那魚あり、口を張り疾走して地獄人に向ひ、彼の魚既に到らば卽ち涎の羂を以て摣へて罪人を縛りて口中に入らしめ、牙の機關を以て之れを嚼みて碎けしめ、彼の罪人の身は半ば魚の口に在り、半ば口の外に在り、熱炎の赤銅の沸汁は之れを煮、是の如き二種の堅急しき苦惱を受け、彼の人是の如く半ば魚の口に在りて常に咀嚼れ、半ば熱炎に在りて赤銅汁に煮られ、無數の時を經て既に脫るゝを得已るも、更に復餘の果なる赤銅汁に入る。既に彼處に入るに、多く惡虫有りて虫に金剛の嘴あり、牙も復利く、無量の熾なる毒あり、是の如きの惡虫彼の闇處の赤銅汁中に在りて、彼の罪人を取り之れを嚼みて破れ令め、碎末となりて沙の如きに、然る後之れを食ひ、彼の地獄人の既に苦惱を受けて、若し唱喚ばんと欲して口を張る者は、彼の赤銅汁其の口中に滿ちて聲を出す能はず、彼の赤銅汁は遍く九の竅に滿ち、滿ち已らば極めて煮て、一切の身分皆悉く消洋す。又復彼處に時節長久しく煮られて下り沈み、沈み已りて浮び出で、既に浮び出で已らば惡業の所作にて多く刀風有り、甚だ毒ありて利く、其の身を碎割す。彼の實語せず、業果を信ぜざる邪見の人は、常に一切の時に燒煮・散壞せられ、乃至惡業の未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已らば三百世に於て餓鬼中に生れ、彼の鬼を名けて悕望悕望と爲し、若し脫るゝを得已らば三百世に於て畜生中に生れ、象を作し熊を作し、蟻子等を作して常に飢渴に患み、寒熱に逼られ、風に吹かれ日に炙られて忍耐ぶに堪え叵く、彼の畜生中より既に脫るゝを得已るも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若し前世の過去久遠に於て善業の有りて熟さんに、人中に生る

熾盛にして身に普く體に遍く、見に毒ある者有り、觸に毒ある者有り、牙に毒ある者ありて彼の地獄に滿ち、彼の地獄人の龍群中に生るゝに、衆龍廻轉して罪人を[一三]撈磨し、碎きて麨摶の如からしむ。復生れて龍の口中に在る者有り、彼の牙に毒炎あり、連に急速に嚼みて無量たび到ること有り、若しは百千たび到り、死し已りて復生れ、生れ已らば復嚼み、嚼み已らば復死し、死し已りて復生る。彼の諸の罪人は三種の火に燒かる。一には是れ毒火、二には地獄の火、三には飢渇の火にして、彼の諸の罪人は三の火中に生れて堅鞕き苦を受け、自業に相似して復第四の病火の之れを煮ること有り、病の重き苦惱は具に說く可からず、是の如き罪人の惡業を行へる者は常に一切時に火中に在りて生れ、燒煮かれ撈磨られ乾燥され、碎散かれ、乃至惡業の破壞して氣無く、腐爛し盡滅せんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、旣に脫るゝを得已らば百五十世生れて針咽餓鬼の中に在り、二百世に於て畜生中に生れ、飢渇身を燒くも水を離れて水無く、謂はく、獅子・虎・熊・羆等の身にして、曠野の十二由旬水無き處に在り、若しは脫るゝを得已るも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中に生るれば則ち野人と爲り、眼に食を見ず。何ぞ況んや之れを食はんをや。唯藥草及び諸の果等を食ひて以て自ら活を存す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、更に何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて名けて赤銅彌泥旋處と爲し、是れ彼の地獄の第四の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偸盜・邪行・飲酒・妄語を樂み行ひ多く作し、所謂、計りて言はく『一切世間の命あり命無き物の一切は、皆是れ[一四]魔醯首羅の化作する所にして、是れ業果に非ず』と。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、赤銅彌泥旋處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、彼の地獄處に赤炎の銅汁中に滿ちて海の如く、其の中に多く鐵の彌那魚有り、惡業の所作にて復樹葉有り、利きこと剃刀の如し。生れ

【一三】撈磨。過り磨る。とすること。

【一四】魔醯首羅（Maheśvara）。又は莫醯伊濕羅、魔醯伊濕伐羅等、大自在と譯す。色界の頂に在る神にして、大千世界に於て自在を得たるが故に此の名あり。大自在天外道の主神たり。

望ひて便ち前進して入り、既にして彼處に入らば、分荼梨迦に炎燃えたる高き火の五百由旬なるあり、彼の地獄人は惡業に誑かされ、各各別に分荼梨迦に上る。既に樹に上り已らば、多く炎の鬘有りて身分に普遍く、是の如く上り已るに第一の極重なる苦惱を受け、飢渴に逼らる。是の如き彼處の所有る熾火の其の色は猶し分荼離迦の如く、彼の火に燒炙せられて死して復生き、一切の身分皆悉く遍く燒かれて　甄叔迦樹の色の如くに相似し、一切の時に於て大苦惱を受く。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已らば四百世に於て餓鬼中に生れて飢渴の苦を受け、既に脫るゝを得已らば三百世に於て畜生中に生れ、既に脫るゝを得已るも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若しは人中の同業の處に生る。彼の人則ち畏ろしき刀鐵處に生れ、儉しき處、賊の處、惡人多き處なる國土中に生れ、又彼の生れし處にて常に貧しく常に病み、僕使にして下賤く、諸根を具へず。是れ彼の邪見なる惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて名けて龍施と爲し、是れ彼の地獄の第三の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語を樂み行ひ多く作すの業は前に說く所の如く、復邪見有りて樂み行ひ多く作す。所謂人有りて、形相正しからず、或ひは常に踞ること有りて曾て正しく坐せず、若しは常に掌を合し、常に手にて頰を支え、常に手を舐めて食ひ、是の如き等の諸の外道の輩有りて、彼れ說きて言はく『欲・瞋・癡を斷たば涅槃を得とは、是れ則ち然らず、寂靜の根なる者も亦得ず』と。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、龍旋處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、彼處に炎の頭の惡龍多饒く、瞋怒りて毒は盛にして、彼の地獄に在り、彼の龍身の量は若しは一居賒あり。一由旬なる有り、惡毒

【三】甄叔迦(Kinśuka)。又無憂樹と云ふ。西國の花樹の名。其の花色赤く、形は人の手の如しと。

に墮ちて彼の地獄に在り、分荼梨迦なる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄に受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中にて具に受け、兩倍して更に重く、復勝る、者有り。所謂彼の人の一切の身分に炎の鬘有りて間無く、是の如き罪人の一切の身分に芥子許も中間に火無く炎燃ゆる無き處無く、彼の人の惡業に相似せる因果にて、火熱甚だ熾にして譬諭す可からず、相似せる有る無し。彼の邪見の如きは一切の業中最第一の惡にして、彼れの如くに相似して其の火熱極まり、一切の火中此の火最も熱く、一切の惡業に相似して果を得、是の故に彼の火は譬諭す可からず、相似せる有ること無く、彼の業力の故に一切の時に常に燒かれて停まらず。是の如くに燒け已らば、復開敷せる【一】分荼梨迦を見る。無量の鳥衆喜樂し、池流は淸水を具足し、異なる地獄人は是の如く說きて言はく『汝疾く走り來れ、汝疾く走り來れ。我が此の間に分荼梨迦有り、池林は淸軟にして、水有りて飮む可く、林に潤へる影有り、近くに在りて遠からず』と。彼の地獄人は邪見の人を喚びて之れを安慰め、相ひ隨ひ走りて分荼梨迦池林の水所に趣く。既に是の如く走るに、火炭道に滿ち、道の上に坑有り、滿中熾火にして、罪人入り已らば、一切の身分皆悉く燒け盡き、燒け已りて復生じ、生じ已らば復燒け、渴きて水を飮まんと欲し、走りて猶息まず。既に是の如く走るに、鞞多羅杖生じて道の上に在り、杖に火炎有り、罪人を拘き捩ぢりて一切の身分に皆悉く瘡を作し、骨髓散り盡き、盡き已らば復生じ、熱渴を以ての故に猶故走りて分荼梨迦池水樹林に趣く。惡業を以ての故に食肉虫有りて其の身體に遍く、其の兩眼を啄みて之れを噉食ひ、啄み已らば復生じ、生じ已らば復啄み、彼の人眼無く、而も復熱渴ありて、是の如くに走りて分荼梨迦池水樹林に趣く。復異なる虫有りて生じて其の身に在り、彼の盲眼人の一切の身分は虫の食ふ所と爲り、唱聲にて大喚するに又復眼生じ、虫復啄み食ひ、是の如く無量百千年歲に食ひ已らば復生じ、生じ已らば復食ふ。若し復走りて分荼梨迦池水樹林に趣き、既に彼れに到り已り、涼冷を悕

【一】分荼離迦(Puṇḍarīka)。白蓮華の正しく開敷せるにて、人間にあること無く、多く阿耨達池に在りとせらる。

るに、猶し霜雪の如し。此の地獄人の內外は炎燃え、而も復更に第三の熾なる火有り、謂はく、心の悔の熱にして、是の如き異なれるの生じて復更に燒き、彼の地獄人は自ら邪見にて是の如き苦果、苦報、苦味あるを知る。邪見を以ての故に是の如く火に燒かれて、一念の間なる暫くの時に樂を得る無く、是の如き焦熱大地獄處を大燒處と名け、彼の惡邪見なる惡業を行ふ人は、長遠時に煮らる。云何んが長時なりや。人の知ること無き數なり。彼の地獄人は一切の時に於て燒煮せられて散壞し、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已らば三百世に於て餓鬼中に生れ、二百世に於て畜生中に生れ、彼の人、彼處より既に脫るゝを得已るも、若しは人中同業の處に生れ、則ち父母に於て敬重を生ぜず、慚無く、愧無く、羞無く、恥無く人の糞屎を食ひ、諸の國土に於て處處に遊行し、正法を聞くことを離れ、一切の人の嫌賤する所と爲り、狗と同じく食ひ、狗と同じく行き、手足は麁澁くして、常に他の食に依り、其の身命を盡すも空にして福德無く、此の身を捨て已らば次第して不可愛の道に入り、邪見の不愛中の下の如し。彼の比丘、既に觀察し已り、善に隨ひて正しく見、正意にて諦かに觀て正道を行ひ、涅槃の行を得て相應して觀察す。

又彼の比丘、業の果報を知りて復焦熱の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて彼處を名けて分荼梨迦と爲し、是れ彼の地獄の第二の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語を樂み行ひ多く作すの業は前に說く所の如く、復邪見有り、て是の如き一種を樂み行ひ多く作す。所謂、人有り、自ら飢えて死して天に生るゝことを得るを望み、彼の人是の如くに復他人に敎へ、若しは他を隨喜せしめて邪見に住し惡因に縛られしめ、心に惡思惟ありて惡論を造作し、復他人に敎へて惡論に任せ令め、彼の人是の如くに自ら飢えて死するに、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處

ることと無く、是の如く無量百千年歳に苦惱の海中、一切の闇中にあり、邪見なる最闇を作集り說きて是の如き果を得、無數年の時節なる長遠に於て常に燒煮かれ、受くる所の苦惱は譬諭す可からず。一切時に於て是の如くに苦を受け、乃至惡業破壞して氣無く、腐爛し盡滅せんに、彼の地獄中より爾乃ち脫るゝを得、既に脫るゝを得已らば五百世に於て餓鬼中に生れて黃餓鬼と名け、彼の人彼處より既に脫るゝを得已らば五百世に於て苦惱多き畜生の中に生れ、彼處より脫れ已るも人の身を得難きこと龜の孔に遇ふが如く、若し前世の過去久遠に於て善業の有りて熟さんに、人中に生るるを得るも邊處の夷人中に於て生れ、常に病み常に貧しく、目盲・少命にして、所有る語言は人の信ぜざる所、是れ彼の邪見の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて次いで焦熱の大地獄を觀るに、何の異なる處有りや。彼れ見聞して知るに、別異の處有りて火燒處と名け、是れ彼の地獄の最初の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偸盜・邪行・飲酒・妄語の業及び果報は前に說く所の如く、復邪見有りて樂み行ひ多く作さば、惡業の果を得。云何んが邪見なりや。所謂、人有り、是の如き見を作さく『殺生の因緣にて天中に生るることを得』と。是の如き惡業にて、惡果報を得。何を以ての故に。死の苦を以てする者苦中最も重く、諸の道の中の樂は天の樂を最と爲し、殺生の業は彼の樂の因に非ず、殺生して苦を與ふるが故に樂の因に非ずして、是の如きは既に惡因の業果を作し、他人の爲に是の如き邪見を說きて惡業の果を得。而も懺悔せずして、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終らば惡處に墮ちて彼の地獄に在り、大燒處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の彼の一切の苦を此の中具に受け、十倍して更に重く、復勝るゝ者有り。惡業を以ての故に自身に火を生じ、其の火極めて熱く、餘の地獄の火は此の地獄の極熱の大火に於て十六分中唯是れ一分にして、此の地獄人の餘の地獄の所有る諸の火を見

を生ぜずして、是の如く種種に地獄中に在りて受くる報相の生ずること、譬へば屎堆の、人未だ到らずと雖も已に其の臭を聞くが如く、是の如く是の如く、未だ地獄に到らざるに地獄の惡處に生ずる相を見て極めて大いに恐怖れ、一切の邪見にして信ぜざる人は是の如くに驚怖す。愚癡の人は惡業を作集り、不善の業價もて買ひて地獄の苦惱の財物を得、彼處にて報を受く。是の如き地獄に多く惡風有り、所謂、斜風・卑波羅風なり。彼の風嚴利して、其の身分に觸れて若しは拍ち若しは劈き、彼の風急惡にして、彼れ身心二種の苦惱を受く。此の身盡きて將に中有に到らんと欲し、死に臨みて命を殘すも、而も心は善法に攀緣する能はず、彼の邪見の人は人世間に於て、是の如く空過して利益を得ず、自業の邪見の惡業の致す所にて、謂はく、心戰動き不可愛の惡しき色・聲・觸・諸の味・香等有りて一切を皆得、不可愛の怖る可く畏る可き地獄の罪人の啼哭の聲を聞き、惡風の觸るゝこと有りて極めて利き刀の如く、極苦の味を得、惡しき炎の色を見、惡しき臭氣を臭ぎ、彼の人、是の如く一切の境界に大怖畏を生じ、心甚だ驚恐す。是の如き惡人は顚倒の說法なる惡業力の故に、地獄の色を見て皆悉く顚倒し、是の如くに顚倒して地獄處の莊嚴は殊妙なりと見るが故に地獄に於て極めて愛心を生じ、意を起し悕望して『我れ今云何んが彼處に生るゝを得るや』と。彼の邪見人は有分中に於て苦を受くるを得ず、要めて地獄に生れ、因緣を取るが故に地獄中に生れ、取る心にて即ち生れて更に中間無く、既にして彼處に生れては、即ち生時に於て前に說く所の如き活等の地獄に受くる所の諸の苦なる彼の一切の苦を此の中にて具に受け、十倍して更に重く、四百四病あり、地獄中の極惡なるが如くに相似して異なる譬諭無く、諸の怖畏中此の畏最も勝れ、惡業の果報にて皆悉く平等しき一種の火生じ、是の如き惡火は胡麻許を以て若しは山林に置き、若しは國若しは洲に(置くに)能く速かに一閻浮提を燒き盡す。何ぞ況んや地獄に受くる罪人の身をや。是の如き惡火は罪人の身を燒きて生酥の塊の如からしめ、洋ひ已りて復生じ、大闇處に在り、晝夜の差別の相有

多く作し、惡業普遍きに而も復究竟め、樂み行ひ多く作さんに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて、墮ちて焦熱大地獄中に在り。殺・盜・邪行・飲酒・妄語の業及び果報は、前に說く所の如し。今邪見を說くに、若し人、邪見を樂み行ひ多く作し、他の人に向ひて說かく『所謂世間に施無く會無く、善無く惡無く、及以び果報(無く)、此の世間無く、他の世間も無く、父無く母無し』と。是の如くに斷說して自ら業果を失ひ、他人に向ひて說き、他人を隨喜せしめて自身に他人の邪見を增長し、說きて因無く業なく道無しと言ふ。是の如きの人は形服有りと雖も是れ大賊にして、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、焦熱大地獄中に在りて大苦惱を受く。他の信ぜざる人は實業の果報にて、彼の信ぜざる人の死なんと欲する時に臨み、未だ中有に到らざるに惡相旣に現はる。謂はく、彼れ病む時、眼中自ら險惡の闇處を見、多く獅子・虎・蛇・熊・羆有りて高大なること山の如く、旣に是の如きを見て大怖畏を生じ、悲苦・懊惱す。復異なる人の面を皺め口を喎むるを見、復上に在りて黑色の火有るを見、野干の鳴きて種種の聲を作すを聞き、又復閻魔羅人の身に種種の畏る可き形狀を作すを見て、大怖畏を生ず。彼の邪說せる人、惡因を說ける人、惡朋を說ける人、惡見を說ける人、惡法を說ける人、樂み說きて業果を信ぜざるの人は、作す所の言說にて嶮岸の惡處に墮ち、人の自他を皆誑くに因りて最大の惡業を造作せる人にして、彼れ是の如き業を樂み行ひ多く作し、作して復集めて、果を得る時至りては是の如き等の不善の影相を見、大怖畏を生じて諸根戰動し、狀相外に彰れて屎を失し尿を失し、或ひは復呻喚くも〔一〇〕䠞聲出でず、或ひは復面を皺め、或ひは復口を張り、或ひは復手を以て床敷を摩挽り、或ひは自ら身の山頭より地に墮つるを見、是の如く見已りて手にて拒拓せんと欲す、瞻病の人は、是の如きを見已りて是の如き言を作さく『是の如き病人は虛空を挽摩し、是の如き病者或ひは自身の墮つる所有らんと欲するを見て、手を以て一切の身分を摩觸す』と。是の如き邪見の惡業を行ふ人は、業の果報に於て信心

【一〇】䠞聲。へまる聲。

過患、財を失ふ過患、求むる所の念中得ざる過患にして、是の如く略說するに、心に是の如き十種の過患有り。衆生の心は是の如き等の多種の過患を受くるも猶欲を離れず、此の諸の衆生は無始無終に怨なる心に誑かされ、是の如き心は常に動きて住せず、耳無く眼無くして石金剛の如く、多吉祥の處に能く妨礙を爲し、正法に住せず、曾て喜樂せずして一切の時に渴き、色・聲・香・觸・味等の境界に未だ曾て飽足ず、毒の刀火の如き五境界の毒と[二]六入の大賊を知らず、[三]七菩提分を覺らず、亦八分聖道に安忍せず、又亦[四]九衆生居を知らず、乃至[五]十善業道を知らず、十一地に於て思量する能はず、[六]十二入の生、住・行等に於て諦かに知る能はず、十三地上を思量する能はず、十四心緣に常に共に相ひ隨ひ、[七]十七垢に於て心に思量せず、[八]十八受に於て穿穴けて流行し、[九]十九行・十五因緣に於て安忍する能はず、十六惡行に和合・相應して穿穴けて行き、二十處に近づきて、彼の二十の邊に心常に亂れ行く。比丘是の如くに觀察し已りて、彼の衆生に於て憐愍の心を生じ、諦かに觀て業の果報の法を思量す。又彼の比丘、是の如くに精勤み復更に心を生じて魔の縛を斷たんと欲し、是の如き思惟を作さく『當に更に勝れたる地獄有るべしと爲んや不や』と。彼れ見聞して知るに、更に復餘の勝れたる地獄有りて、大叫喚の大地獄より十倍の勝れし惡あり、惡業の苦惱の勢力は極惡にして、名けて焦熱と爲し、十六處有り。何等は十六なりや。一を大燒と名け、二を分陀梨迦と名け、三を龍旋と名け、四を赤銅彌泥魚旋と名け、五を鐵鑊と名け、六を血河漂と名け、七を饒骨髓虫と名け、八を一切人熟と名け、九を無終沒入と名け、十を大鉢頭摩と名け、十一を惡嶮岸と名け、十二を金剛骨と名け、十三を黑鐵繩摽刃解受苦と名け、十四を那迦虫柱惡火受苦と名け、十五を闇火風と名け、十六を金剛嘴蜂と名け、此れは是れ焦熱の大地獄の十六の別處にして、彼の大地獄の壽命は長遠く、算數有ること無し。衆生は何の業にて彼の地獄に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、堅重なる殺生・偸盜・邪行・飲酒(を爲し)、妄語を言說し、復邪見有りて、樂み行ひ

【二】六入。新に六處と云ひ、六根又は六境を指す。根と境互に涉入して眼等の六識生ずるを以て、入と名くるなり。根境並び立てゝ十二入とも云ふ。

【三】七菩提分。又七覺、七覺支、七覺分といふ。依て思惑を斷除して無學果を證す可き七種の覺法にして、擇法覺支、精進覺支、喜覺支、除覺支、捨覺支、定覺支、念覺支、これなり。

【四】九衆生居。欲界九地の稱、欲界地に色界四地、無色界四地を加へて九地あり。

【五】十善業道。又十善又は十善戒と云ふ。不殺生、不偸盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見の稱なり。

【六】十二入。十二緣地を指す。

【七】十七垢。不明。

【八】十八受。不明。「穿穴けて流行し」はこの官能を制せず、欲望のまゝに開放するをいふ。

【九】十九行等。この下の數目多く知れ難し。

り、貧窮にして命短く、所有る語言は人の信ぜざる所、性甚だ愚癡にして、懵鈍して醜陋くし。手足劈裂け、衣裳は破碎し、常に道路に在り、若しは四出の巷、若しは三角の巷にて恒常に乞ひ求め、若しは常に生を治めて微賤の物を賣り、生れて從り終るに至りて第一の苦を受け、對諍中に於て常に負くるに朋に墮つ。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、唯此處のみ有りて更に異なる處無し。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察し、彼の比丘の寂靜・不老・不死・不盡・不滅涅槃の道に入らんと欲するを見る。彼の地の夜叉は彼の比丘の勤精進せるを見已りて心大いに歡喜し、轉た復上りて虛空夜叉に聞こえ、虛空夜叉より是の如く次第して[1]少光天に至りて是の如き言を說かく『閻浮提中の某甲種姓なるは』、略して之れを言はんに、次第に乃至『第十地を得、心魔の境界に住するを樂まず、亦愛心と共に行ふを樂まずして、染法を捨離せり』と。彼の少光天は聞き已りて歡喜して是の言を作さく『魔分を損減して、正法の朋を長せり』と。又彼の比丘、業の果報を知りて勤めて世間生死の繫縛を斷ち、是の如く憶念すらく『此の諸の衆生は大苦惱を受く。愛の誑かす所と爲り、癡の結に縛られ、心の使と相應して三時中煮らるゝも、而も生死に於て心の欲を斷たんとする無く。此の諸の衆生は豈心無かる可けんや。若し其れ心有らば則ち應に知る有るべく、若し知ること有らば何ぞ欲を離れざる。又復衆生の久しく天中に在りて勝れし樂を受くる者も猶尚欲を離る。何ぞ況んや地獄に久しく大苦を受くるをや。而も欲を離れず、彼の衆生の心は是の如く堅鞕くして、是の如き等の無量種種なる一切の苦惱を受けて疲倦まず、長夜眠睡りて寤寤めず、是の如き心に五種の過有りて是の如く無量にして、謂はく、老・病・死・怨憎合會・恩愛別離なり。

又復更に十種の苦惱有り。十とは所謂、飢渴の過患、愛すると離るゝ過患、彼此の國土の鬪諍する過患、退生の過患、他に毀らるゝ過患、他を求むる過患、寒熱の過患、兩人相ひ憎みて共に鬪ふ

【一】少光天。色界二禪三天中の第一天の名。此の天は未だ光明を放つこと少なきを以て少光天と名く。

地獄處より爾乃ち脱るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業の有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、貧窮にして困苦み、人の信ぜざる所、鼻に常に血有りて、若し楊枝を嚼まば鼻中の齒間に常に血の出づること有り、是れ彼の地獄の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて十一炎と名け、是れ彼の地獄の第十八處なり。衆生は何の業にて彼處に生るるや。彼れ見聞して知るに、若しは何等の人、殺生・偸盜・邪行・飮酒の業及び果報は前に說く所の如く、復妄語すること有り。謂はく、王・王等、若しは信ず可き人にて能く事を斷ずる者、若しは或ひは長者にして、或ひは兩人に於て、若しは兩の朋に於て、相ひ對諍する事に、之れを斷ずることを爲し、或ひは物を取るに因り、或ひは相ひ識るに因り、或ひは欲或ひは瞋にて情に隨ひ偏りて斷じ、道理に依らずして妄語の說を作さば、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の十一炎處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄に受くる所の苦惱なる彼の一切の苦を此の中にて具に受け、十倍に更に重く、朋に妄語せる人は更に復偏に重し。何等を重しと爲すや。惡業を以ての故に十一炎處に火聚の生ずる有り、十方を十と爲し、內の飢渇に燒かるゝは是れ第十一にして、內の火なる飢渇の炎は口從り出で、彼の妄語せる人の舌にて朋に妄語せる是の惡業の故に念念に舌を燒き、燒け已らば復生じ、舌を燒く苦を受くるを十六分と爲し、十大聚の苦も其の一に及ばず、惡業を以ての故に是の舌の苦を受く。彼の地獄人は是の如き等の十一炎聚の極重の苦惱を受け、乃至無量百千年歲常に燒かれ常に煮られ、乃至惡業未だ壞れず、未だ爛れず業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脱るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業の有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、常に飢渇に患み、一切の身分は常に熱燒を被

巻の第十

地獄品之六

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて血髓食と名け、是れ彼の地獄の第十七處なり。衆生は何の業にて彼處に生るるや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺・盜・邪行・飲酒の業及び果報は前に說く所の如く、復妄語すること有りて惡業を作集し、謂はく、王、王等、若しは聚落の主、諸の自在なる者にして稅物を賦し已り、後未だ足らずと言ひて復更に取り、若し或ひは長して取りて王の舊法に違ふ。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の血髓食處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活、黑繩等の諸の地獄中の所有る苦惱なる彼の一切の苦を此の中にて具に受け、復勝るゝ者有り。所謂彼處に炎燃えたる樹葉あり、閻魔羅人は炎の鐵繩を以て彼の罪人を縛り、頭を下に足を上にして懸けて彼の樹に在らしめ、金剛の嘴の烏に金剛の爪有り、先づ其の足を食ひ、足上より血出でゝ下りて其の口に入り、彼の地獄人は即ち自ら之れを食ひて常に死せず。何を以ての故に、一切の苦中飢の苦最も大なればにして、處處に皆說き、一切皆知り、一切皆誦せり。彼れ自らの血を飮みて二種の苦を受け、既に大苦を受けて復飢の苦を受く。爾の時世尊、偈を說きて言はく。

熱風の燒き、風吹きて火の燒く苦の如きに非ず、業風の吹く所、飢渴の苦は甚だ重し。

彼の地獄人は是の如く無量百千年歲自ら血髓を食ひ、頭面下に在りて第一の火の燒燃く所と爲り、是の如く無量百千年中、一切時に於て、彼の地獄處にて常に燒煮かれ、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の

實語を言說する人は、一切の人に愛され、妄語するを皆愛せず、故に應に妄語すべからず。若し人にして實語を說かんに、天の如く常に喜樂し、若し人妄語を說かば、常に地獄の苦を受く。

若し善業を作さずして、無量種の惡を作さば、無量の苦惱を受く、今悔ゆるも何ぞ及ぶ所ならん。

善果は善從り得、惡を作さば惡果を受く、黠慧き人は惡を捨てゝ、喜樂して善法を行ふ。

實を第一の善と爲し、妄語は第一の惡にして、過を捨てゝ功德を取らば、是れ人中て勝る。

閻魔羅人は是の如く地獄人を責疏し已りて復種種を量の苦惱を與へ、是の如く無量百千年歲にして、乃至惡業破壞して氣無く、腐爛し盡滅せんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業の有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、貧窮して常に困み、一切の人に於て常に畏懼を生じ、若しは奴僕と爲り若しは苦作の人にして、人中にて下賤く、所有る語言を人は信受せず、彼の業の因緣にて常に苦惱を受く。實語に相ひ對する妄語の果報なり。

なるを而も復更に拔き、復刀を以て遍く其の身を削れる有り、刀は甚だ薄く利くして頭を剃る刀の如く、彼處に虫有りて名けて斷虫と爲し、復其の腸を食ふ。彼の地獄中に復異なる處有り、其の地普く青く、復黑闇にして、罪人中に入り、惡業を以ての故に摩竭魚有り、內外に火燃え、彼の罪人を食ひ、彼の摩竭魚に金剛の炎の口、金剛の炎の爪、金剛の炎の齒ありて罪人を攫齧み、一切の身分は破散して碎末となる。若し魚の口を脫るれば則ち其の腹に入り、うち無量百千億歲を經て常に燒燃を被り、氣未だ通暢せず、或ひは復氣少く、常に燒煮を被りて堅鞭の苦を受く。是れ本の妄語なる惡業の所作にして、是れ彼の自らの舌にて妄語せる因の故なり。摩竭魚の腹中に在りて極めて燒かれ、身體破壞して後に復更に地獄の火の爲に燒かれ、後に復更に青火の爲に燒かる。是の如く燒け已るに、閻魔羅人は偈を說きて之れを責䟽して言はく。

妄語を言說する者は、是れ地獄の因緣にして、因緣を前に已に作せしかば、唱喚ぶも何ぞ益する所あらん。

妄語は第一の火にして、尙能く大海を燒く、況んや妄語の人を燒くをや、猶し草木を燒くが如し。

若し人實語を捨てゝ、妄語の說を作さば、是の如き癡惡の人は、寶を捨てゝ石を取るなり。

若し人自らを愛せずして、地獄を愛さば、自身は妄語の火にて、此處に自ら身を燒く。

實語は甚だ得易く、一切の人を莊嚴り、實語を捨てゝ、妄說せんに、癡の故に此處に到る。

功德中實に勝れ、是れ毒の甘露なるに、何ぞ癡にも、功德を捨てゝ、毒中の毒を取るや。

過を作らば惡果を得て、常に地獄に在り、自身の功德を壞さば、極惡の地獄に到る。

智者は妄語を說きて、一切の苦の種子とせり、樂の根は實第一なるが故に、應に妄語すべからず。

業盡くれば、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業の有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、貧窶にして困苦み、所有る言語を人信受せず、處處に乞ひ求め、許せる者も與へず、彼の人是の如く極大の貧窮にして、是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて彼處を名けて受無邊苦惱と爲し、是れ彼の地獄の第十六處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偷盜・邪行・飮酒の業及び果報は前に說く所の如く、復妄語すること有り、所謂、多人の海中に生を治むるに、彼の導者は賊と同心にして、彼の諸の賊人導者に語りて言はく『彼の道に著く勿れ、當に此の道を行くべし、我れをして物を得しめば汝と共に之れを分たん』と。彼の諸の商人は雇へる導者に言はく『汝我等を將ゐて寶所に到らしめよ、我に汝に物を與へん』と。彼の導者の言はく『我れ當に是の如くすべし、我れ當に是の如くすべし』と。相ひ許して決定め、而も彼の導者は諸の商人を將ゐて寶路に著けずして、賊の道を行く。賊に先に謀有り、竿を竪て幡を懸け、其の幡は靑色にして、導者之れを見るも賊有りと言はず。彼の諸の商人、靑き幡を見已りて導者に問ひて言はく『彼の靑き幡の處は應當に是賊なるべし』と。而も彼の導者は答へて賊に非ずと言ひ、彼の諸の商人は其の語を實なりと謂ひて皆遮防がず、旣に賊處に到りて所有る賊物は悉く賊の爲に奪はれ、導者も亦取る。是の妄語の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて、惡に處墮ちて彼の地獄に在り、受無邊苦なる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄に受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝るゝ者有り。所謂、彼處の閻魔羅人は熱炎の鐵鉗もて其の舌を拔き出し、拔き已らば則ち生じ、生じて則ち軟嫩なるを而も復更に拔き、復鐵鉗を以て其の眼を拔く者有り、拔き已らば、復生じ、生じて則ち軟嫩

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて受鋒苦と名け、是れ彼の地獄の第十五處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偸盗・邪行・飮酒の業及び果報は前に說く所の如く、復妄語すること有り。所謂人有りて、先に心に憶念し、何等の物に隨ひ、若しは多若しは少なるを、若しは佛の所に於て、若しは衆僧に於て、若しは法中に於て布施を許し已りて後時に復言はく『若し實は許さず』と。衆僧常に悕望の心有り、而も後に與へずして衆僧を妨廢げ、若しは餘の人に於て許して與へずして彼れに妨を爲す。彼の妄語の人は罪過を作集り、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の受鋒處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄に受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中にて具に受け、復勝るゝ者有り。所謂、彼處に熱鐵の針鋒あり、纖細くして長く、炎燃えて極めて利く、閻魔羅人は此の利き針を執りて彼の罪人を刺し、是の如くに罪人は一切の苦を受けて聲を發して大に喚ぶ、既に大喚し已るに針は則ち口に滿ちて幷に舌を俱に刺すこと、譬へば步の靫の中に箭を揷し滿すが如く、既に此の苦を受けて叫喚ぶ能はず、啼哭く能はず、彼れ是の如き針鋒の苦惱を受けて更に過ぐる者無く、異の相似せるは無く、自他を誑くが故に地獄にて苦を受け、一切の身分に皆針を竪て、數は毛根の如く、身分皆壞れ、彼の苦を受くる人既に鋒の苦を受けて隨ひて傾き倒れ、是の如く是の如く隨ひて傾き倒るゝに、衆の針は競ひて刺し、彼の人是の如くに更に針の苦を受けて轉た復氣を蔽ひ、努力して唱喚くも聲を出すを得ず、若し其れ針を拔かば則ち能く叫喚し、若し針を拔かずんば聲を出す能はず、彼れ既に苦を受けて炎鐵の地に臥し、宛轉り、飜覆り、起ちて復倒れ、擾動ぎて停まらず。閻魔羅人は手に大斧を執り、復鐵鑽・鉄枷・鉄杵を執りて斫り刺し打築き、是の如く無量百千億歲に大苦惱を受く。彼の妄語を食へる惡業の果報なり。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡

復異なる處有りて火鬘處と名け、是れ彼の地獄の第十四處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偷盜・邪行・飲酒の業及び果報は前に說く所の如く、復妄語すること有り。所謂人有りて、吉會中に於て法に違ひ法を犯し、衆人皆言はく『汝犯せる所有り』と。彼の人、罰を畏れて妄語を說きて言はく『我れ實は犯さず』と。彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて、惡處に墮ちて彼の地獄に在り、火鬘處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄にて受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中具に受け、復勝るゝ者有り。所謂鐵板に熾火炎燃え、閻魔羅人は彼の地獄人を執りて鐵板の上に置き、復鐵板を以て罪人の上に置きて努力して措磨り、一切の身分は血肉泥と爲りて其の色甚だ赤く、金舒迦[六]の炎の色なる赤き樹の如くにして、鐵板の之れを壓すが故に是の如からしむ。若し彼の地獄の閻魔羅人の鐵板を發却かんに、彼の地獄人は脂・血・肉の末遍く身體に滿ち、既に此の苦を受け、是の故に彼の閻魔羅人に於て大怖畏を生じ、走りて異なる處に向ひて救を望み歸を望むに、大河有るを見る。若し苦を受くる時は熱灰中に滿ち、(目)前に苦を與へらる。閻魔羅人に怖畏を生ずるが故に直に彼の河に入り、既にして彼の河に入らば筋節の機關、一切の身分は皆悉く消洋けて生酥の塊の如く、而も復死せず。是れ彼の惡業の勢力の故なり。彼の地獄處に竹林ありて稠密く、一切火燃え、此の如き人の間に風起る時、火ば乾ける林を燒きて衆生を燒かす。彼の大鬘處に衆生遍く滿ち、燒を被りて熾に燃え、針の頭許も燒けざる處無く、既に燒煮を被りて大聲に叫喚し、四出し馳走して救を望み歸を望み、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若しは前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、語言遲難りて復正しからず、自らの眷屬中にて少少の語言も尙辨了られず、何に況んや衆中の善巧なる言說をや。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

【六】 金舒迦。甄叔迦(Kiṁśuka)。を指すならん。其の花の色甚だ赤しとせらる。

ことを得。

妄語は自らを利せず、亦他人を益せず、若し自他樂からざるに、云何んが妄語を說くや。

若し人惡分別にて、妄語の說を喜樂せば、蜚びて火の刀の上に墮ち、是の如き苦惱を得。

毒の害は甚だ惡なりと雖も、唯能く一の身を殺すのみ、妄語する惡業の者は、百千の身を破壞す。

智者實語を說きて、是れ凡人の正法なりとす、戒ある人は莊嚴を爲して、能く解脫の道を示す。

衆生は自ら業を作して、愛水の漂はす所と爲る、[四]善逝は實語を說きて、第一の船筏と爲したまへり。

始終無き世間は、愛の羂の縛る所にして、唯實のみ能く救解ふと、[五]法主は是の如くに說きたまへり。

實は能く煩惱を斬り、斧能く樹を斬斫るも、刀斧の斬るは猶生くるに、實語の斬るは爾らず。

實は能く二世を益し、故に盡きざる財を說き、出づる處盡く可からず、一切の法中にて勝る。

此の實を說く功德にて、能く大樂果を生ず、智者は妄語を捨て、諦かに見る人は皆捨つ。

實語を捨つる人を金剛の嘴の鳥は是の如く無量百千年歲常に燒き常に食ひ、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、數數鬪諍して常に負處に墮ち、一切世間は其の語を信ぜず。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

妄語を具足する不實の人は、極苦惱の地獄の惡處に到りて、惡果報を受く。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、

【四】善逝(Sugata)。佛十號の一。好く涅槃に去りて再び生死海に還らざる義による立名にして、如來の義と共に來往自在の德をあらはす。
【五】法主。佛のこと。法を有して法の主たるが故なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて彼處を名けて金剛嘴烏と爲し、是れ彼の地獄の第十三處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若しは何等の人、殺生・偸盜・邪行・飮酒と、復妄語すること有りて、樂み行ひ多く作さば、彼の地獄に墮ちて金剛嘴烏なる別異の處に生れ、前の活等の諸の地獄中に受くる所の彼の一切の苦を此の中に具に受く。殺生・偸盜・邪行・飮酒の業及び果報は、前に說く所の如し。今妄語と說けるは、所謂、若し人、衆僧中に於て、病者に隨病、醫藥を與ふるを許して而も後與へざるにて、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて、惡處に墮ちて彼の地獄に在り、金剛嘴烏なる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、本許して與へざりし惡業の所作にて金剛の嘴の烏あり、其の身の肉を啄みて之れを噉食ひ、既に肉を啄み已るに、卽ち彼の啄みし處は還りて復更に生じ、生じて則ち軟嫩にして猶し蓮華の如く、軟嫩なるを以ての故に大苦惱を受け、是の如く更に啄み、啄み已らば復生じて前より軟嫩なるに而も復更に啄み、苦を受けて轉た增し、彼の地獄人は是の如くに無量百千年歲烏の食ふ所と爲る。既に彼處を脫るれば次第に復熾火の炎燃えたる鐵沙の中に生れ、彼の地獄人は足に熱沙を踏みて沙の燒く所と爲り、一切の身分は灰にして亦得叵きも又復更に生じ、自ら其の舌を食ひ、食ひ已るに復生じ、食ひ已りて復生ずるに、舌の妄語を以ての故に人の食ふ所と爲り、彼の妄語の人は妄語を說くが故に還りて自ら舌を食ふ。爾の時世尊、偈を說きて言はく。

　甘露及び毒藥は、皆人の舌の中に在り、實語は甘露を成し、妄語は則ち毒を爲す。

　若し人甘露を須ふれば、彼の人は實語に住し、若し人にして毒を須ふる者は、彼の人妄語を說く。

　毒は決定して死せざるも、妄語は則ち決定せり、若し人妄語を說かんに、彼の人を死人と言ふ

を誑ける惡業にて、彼の地獄處に於て鐵の鋏刀有り、本人中にて誑きし所の親しき者を見る、（その親しきものは）其の身（妄語者の）の肉を鋏みて其の口中に著け、驅責て、食はしめ、惡業を以ての故に自らの肉は消えず。閻魔羅人は偈を説きて之れを責め、是の如き言を作す。

實語は安樂を得、實語は涅槃を得、妄語は苦果を生じ、今來りて此れに在りて受く。
若し妄語を捨てずんば、則ち一切の苦を得、實語は買ふを須ひす、得易くして難からず。
實は異國より來るに非ず、異なる人より來るに非ず、何が故に實語を捨てゝ、妄語の説を喜樂するや。
實は勝れて口を濟ふと爲す。實に因りて諸法を得、實を燈中の最と爲すと、如來は是の如くに説きたまへり。
實を藥中に勝ると爲し、常に能く苦を破壞す、惡を作せるは我が敎へしに非ずして、汝自ら癡心にて造れるなり。
汝自ら惡業を作して、汝今還りて受く、業盡くれば脱るゝを得るも、唱喚ぶも何ぞ解るゝ所ぞ。
已に惡業の爲に誑かされ、今は徒らに叫喚ぶ、自ら誑くは是れ愚癡にして、叫喚ぶは黠慧きに非ず。

閻魔羅人は是の如くに地獄人を責疏め已りて、復無量種の苦惱を與ふること前に説く所の如く、大苦惱を與へ、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに彼の地獄處より爾乃ち脱るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れて常に他人の誑惑く所と爲り、所有の財物も常に他人の劫奪ふ所と爲り、是の如き苦惱ありて、財物を得已るも復亡ひ、一切の人の信ぜざる所と爲る。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

の惡師子は彼の妄語せる地獄の罪人を取り、前に說く所の如く種種に苦惱せしめ、既に脫るゝを得已らば彼の師子の爲に擧げて食はれ、擧げて食はるれば則ち死し、之れを下せば則ち活き、又復其の一切の身分を食ひ、食ひ已らば復生じ、生じ已らば復食ひ、惡業を以ての故に彼の師子の齒の機關中に炎火を充滿せしめ、是の如き齒を以て彼の罪人を食ひ、罪業力の故に師子の口中にて齧まれ、燒かれて兩種の苦を受け、是の如く無量百千年歲常に燒壓を被りて大苦惱を受く。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若しは前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、惡業力の故に或ひは蛇の爲に螫されて命終を致し、或ひは師子・虎・熊の殺して之れを噉食ふ所と爲る。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて迭相壓と名け、是れ彼の地獄の第十二處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偸盜・邪行・飮酒及以び妄語を樂み行ひ多く作さば、彼の地獄の迭相壓處に墮つ。殺生・偸盜・邪行・飮酒の業及び果報は、前に說く所の如し。何者が妄語なりや。兄弟等有りて近き有り、遠き有りて兩の朋諍對す。彼の兄弟とは、或ひは同一の父、或ひは同一の祖、或ひは異なる兄弟、或ひは是れ伯・叔なるにて、物を分ちて鬪諍ひ、同種姓なるも極めて遠く、乃至は二十一世なる有るに、是の如き人來りて爲に證明を作し、是の如き等の中近き者を益せんが爲の故に妄語の說を作し、自ら實に非ざるを知るも而も故之れに敎ふるに曲意を受くるを以てし、方便し、計校りて妄語の說を作し、彼の業を普遍く究竟め和集む。彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の迭相壓處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄に受くる所の彼の一切の苦を此の中にて具に受け、復勝るる者有り。彼の人妄語にて親しき

の妄語せる人の惡不善の業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、生れて則ち奴と爲りて本の前世に誑かれたる人に屬し、前世の時に許して與へざりしを以て是の故に是の如く、或ひは復餘の人に繫屬れて奴と爲る。彼の人に異る業あればなり。何を以ての故に。無始より來生生に輪轉し、無始以來種種の惡不善の業を造作りて、是の如く世間の生死に攝められ、處處に流轉して相ひ値ふこと難きが故なり。喜愛の業の繩に繫縛され、是の故に處處の異る(ところ)に輪轉するが故に相ひ値ふ可からず、此の因緣を以て或る時は復異る人の與に奴と爲り、常に飮食・臥具・屋舍・隨病・醫藥を離れ、常に大家の罵辱する所と爲る。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて雙逼惱と名け、是れ彼の地獄の第十一處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや、彼れ見るに、人有り、殺生・偸盜・邪行・飮酒を樂み行ひ多く作さば、彼の地獄の雙逼惱處に墮つ。業及び果報は、前に說く所の如し。復妄語有り。何者は妄語なりや。謂はく、邑子中、社等の會中、若しは我慢の心にて、若しは瞋心に因り、若しは相ひ憎嫉み、或ひは相ひ鬪諍うて妄語にて說き、自他を倶に誑き、自他を破壞り、是の如き妄語を作せる因緣を以て、彼處の衆中他をして罰を得しめて心に歡喜を生じ、彼れ是の如き業を多く作して究竟め、作して復集む。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の雙逼惱處に在りて大苦惱を受く。彼の人是の如き社會等の中妄語にて惡說し、是の如き因を以て、是の如き因緣にて身壞れ命終りて彼の地獄に墮ち、雙逼惱なる別異の處に在りて生れ、大苦惱を受く。所謂苦とは、活・黑繩・合・叫喚等の諸の地獄中の前に說く所の者の如きは此の中轉た勝れ、惡業を以ての故に彼處に則ち炎の牙の師子有り、彼

して、其の體を鉤捜け、乃ち彼處に到ること前に說く所の如し。次第に乃至彼處に到り已るに、彼の見し所の食は悉く洋鐵にして、熱炎熾に燃え、大いに臭く色惡く、是れ彼の妄語なる惡業の作せる所にして、既に近づきて之れを見れば卽便ち中に墮ち、若し彼の氣を嗅がば鼻を燒きて墮落せしめ、若し身之れに觸るれば一切の身分皆悉く炎燃えて螢火虫の如く、鐵汁脣を燒き、既に脣を燒き已りて次いで其の咽を燒き、既に咽を燒き已りて次いで其の心を燒き、既に心を燒き已りて次いで其の脾を燒き、既に脾を燒き已りて次いで其の腸を燒き、是の如く次第に生藏を燒き已りて次いで熟藏を燒き、熟藏を燒き已りて下從り出づ。又復敷具及び臥具等布施を許して後時に與へざれば、彼の妄語の業にて寒熱に逼られて大苦惱を受け、悕望する所無く、彼の地獄中に熱せる銅板の地に、罪人の坐し已るに一切の身分皆悉く消洋け、洋け已りて燒燃かれ、後復更に生ず。若し人屋舍を客人に施さんと欲して許して而も與へざれば、彼の妄語の業にて歡喜鑊、隨喜鑊中に置かる。是の如き鑊の量は五十由旬にして、熱沸せる鐵汁彼の鑊中に滿ち、彼の惡業の人の頭は下に在りて入り、既にして鑊中に入らば或ひは上或ひは下皆悉く爛熟し、未だ熟さずんば則ち沈み、熟し已れば則ち浮かび、既に浮かび出で已れば復沈みて下に在り、是の如き沸熱にて既に爛熟し已らば、一切の身分より皆悉く肉脫れ、筋・皮・骨散り、一切の諸の節は損少け、減く盡く。彼の鑊は甚だ闇くして沸ける鐵中に滿ち、生きながら其の身を燒かれて唱喚にて號哭ぶ。彼れ既に煮られ已らば復餘の鑊に入り、鑊中にて煮られて熟し、熟すれば則ち浮かび出ずること初の鑊にて煮られたるが如く、此の中も亦爾くして、是の如くに上下し、或ひは出で或ひは入り、彼の諸の罪人は或ひは一處に合ひ或る時は分散し、若し相ひ近く時は極熱もて相ひ觸れ、是の如く相ひ觸れて一百千たび倒れ、身體破れて一百千段と爲り、而も復更に生じて又復餘の罪人と極熱もて相ひ觸れ、身體破れて一百千段と爲る。是れ本の妄語なる惡業の羂の縛にして、一切の時に於て是の如き苦を受け、是の如く乃至彼

妄語を作し、諂曲る心にて語り、他の語を枉謗ると。是の如くに彼の人は父母・妻子・香火・善知識等有るを見、彼の妄語せる人は是の如くに久しく無邊の苦惱は堅鞕くして利き苦を受け、是の如く無量百千年歲常に煮られ常に燒かれ、常に劈かれ常に打たれ、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、貧窮・下賤にして、根を闕き常に病み、一切衆人の憎嫉する所、一切信ぜず、一切汚惡にして、一切の作す所は其の功を唐勞にし、求むる所を得ず。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて唐悕望と名け、是れ彼の地獄の第十の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人殺・盜・邪行・飮酒と、復妄語有りて、樂み行ひ多く作さば、彼の地獄の唐悕望處に墮つ。業及び果報は前に說く所の如し。今妄語と說くは、何者か妄語なりや。苦惱せる人なる若しは病有る人、飢えたる人渴ける人、貧窮・孤獨・下賤・癡傳なる是の如き等の人に於て、若しは粳米等の一切の食具、若しは食若しは飮、若しは衣若しは敷臥の具と舍等、一切皆無くして若しは乞ひ乞はざるに、許して而も與へず、彼れ(その苦惱の人)常に悕望し、後時に(漸く)心を息む。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の唐悕望處に在りて大苦惱を受く。本食を許して後與へざる彼の惡業を以ての故に、地獄中に種種の好き佉陀尼食、蒲闍尼食、種種の妙好なる莊嚴の具有るを見、彼の地獄人は極めて大いに飢え渴き、疾疾く走りて彼の食處に趣く。遠く彼の食を見るに、極めて好く甚だ愛すべく、淸潔を具足せるも、到り已れば即ち無くして、唯鐵汁の熱炎熾燃たるを見るのみ。旣に彼の食に赴きて疾疾く走るに、滿道鐵鉤に

を作し、妄語を以ての故に能く國土の一切を亡失はしめ、若しは勝れたる人死し、他の怨者をして迭に相ひ劫奪ひて財物を亡失はしむ。彼の妄語せる人を一切は信じて其の妄語を信じ、彼の妄語せる人は正行の衣服なるも實は是れ賊にして、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の異異轉處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、彼の地獄處にて遠く父母・奴僕・知識・香火・善友を見、是れ本の人中先に見し所の者にして、彼の地獄中に於て之れを安慰む。彼の地獄人は既に愛語を聞きて疾走りて往趣き、救を望み歸を望みて彼の人是の如く走りて異處に赴くに、灰河中に入りて石の水に墮つるが如く、沒し已りて復出で、一切の身分に大苦惱を受けて唱聲にて大喚ぶ。復父母・妻子・香火・善友・知識を見て復更に走り赴くに、惡業を以ての故に道に鐵鉤を生じて其の體を鉤擭け、既に到らば復閻魔羅人の執持る所と爲り、炎燃えたる鐵の鋸は其の身を解劈いて猶し木を劈くが如く、是の如き罪人の若し彼處を脫れんに、唯骨のみ在ること有り、一切の身分皆悉く破裂し、走りて異處に向はゞ更に其の餘の閻魔羅人の爲に執りて炎火の鐵の刀輪中に著けられ、彼の鐵の刀輪は上下に皆有り、惡業を以ての故に是の如き鐵輪の利き刀遍く滿ち、彼の輪は疾く轉じ、炎火熾に燃え、彼の妄語せる惡業の人を磨き、碎きて麨末の如からしめ、末たり已りて復生ず。彼の地獄人は輪處を脫るゝを得るも、復父母・妻子・香火・善友・知識を見、救を望み歸を望みて疾走して往き赴くに、惡業を以ての故に既に是の如く走る道の上に多く熱炎の鐵鉤を生じ、惡師子有り、惡業の生ずる所にして、彼の罪人を執りて口中に置き、牙齒の間に在らしめ、閻魔羅人は熱炎の鐵鉤もて之れを鉤きて出でしめ、出で已れば思念して復更に走り、既に是の如くに走らば其の足破裂し、火炎極めて燒きて一切の身分は皆悉く破壞し、燒燃かれて焦げ爛るゝも猶走りて止まず、遍き身は是れ瘡にして、彼の罪人の身の骨脈皆盡く。是れ彼の妄語を樂み行ひ多く作せる相似の業因にて、相似して果を得たるなり。彼の人の說くが如くんば、我れは實語の人たりと。而も

んが爲の故に出家の服を著け、多人の曠野を行かんと欲する有るを見、（其の人）之れに問ひて『彼の曠野處に賊有りと爲すや不や』と言へるに、彼れ賊有りと知れるも卽ち答へて無しと言ひ、彼の人到り已れば賊の爲に劫奪はれ、賊物を亡失ふ。妄語にて他を誑き、（他の人）彼れを信ぜる因緣にて、業の相似せるが如くに相似して果を得、優鉢羅の滿中の青光を見る。悉く是れ火にして、閻魔羅人は之れを執り、優鉢羅中に扶著して火を以て之れを燒き、足無きを以ての故に下るを得る能はず、是の如き惡業に相似せる勢力は、彼の罪人をして手・足・眼目の一切を皆無からしめ、是の如き地獄の優鉢羅中に大火充滿し、是の如く無量百千年歲に常に燒煮れ、死して復活き、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、所有る言語は道理に依らずして、自出の心にて語り、曲迴げて言說し、詐ひ財物を得るも王の奪ふ所と爲り、獄に繫がれて死す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて異異轉と名け、是れ彼の地獄の第九の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偸盜・邪行・飮酒及以び妄語を樂み行ひ多く作さば、彼の地獄の異異轉處に墮つ。殺生・偸盜・邪行・飮酒の業及び果報は、前に說く所の如し。何者か妄語なりや。所謂、人有り、諂曲にて妄語するにて、他人をして勝負・衰利・死活等あらしめんと欲するが故なり。所謂、人有り、若しは陰陽師にて善く卜術を知り、卜へる事皆當り、若しは德有る人にて常に實語を出し、世の人に信ぜらるゝに、復因緣有りて他人に問はれて是の如き意を作す『我れの妄語せざるを一切皆知り、一切の人信ず。我れ今妄語するも人皆實なりと謂はん』と。是の如く念じ已りて卽ち妄語

て其の腹を嚙み破り、破り已りて之れを食ひ、腸を食ひ背を食ひ、閻魔羅人は手に斤斧を執り、斧の熱炎熾にして、其の身の肉を斤り、稱を以て之れを稱るに一兩・半兩にして、狗に與へて食はしめ、斤斧甚だ利く、復其の骨を斤りて其の髓を取ることを爲す。用つて狗に與へんが爲の故なり。熱炎の鐵鉤は其の頷の下を鉤き、既に破れしめ已りて熱炎の鐵鉗は舌を拔きて出でしめ、驅りて起たし使め、熱炎の鐵鉤其の身體を鉤き、肉皆破裂せば是の如くに筋を拔き、一切の身分を皆悉く遍く鉤く。是の如き妄語を行ふ惡業の人は自ら惡業を作して自ら是の如くに食ひ、彼の妄語の人の是の如き業熟さんに、既に免離れるを得るも、〔二〕閻魔羅人に大熾火有りて地獄中に滿ち、間に空處無く、妄語の罪人は火の地獄に入りて飛中の如くに墮ち、是の如く常に燒かれ、燒かれ已りて復生じ、生じ已りて復燒かれ、是の如く無量百千年歲にして、乃至作集せる惡業破壞して氣無く、爛れ盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、生れて貧窮・下賤の家に在り、生れ便ち燒かれ、設ひ多人有りて嚴峻く防備するも必ず燒かる。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて死活等と名け、是れ彼の地獄の第八の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺・盜・邪行・飮酒と、復妄語有りて、樂み行ひ多く作さば彼の地獄の死活等處に墮つ。前に說く所の如き活等の地獄に受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中に具足し、復異なる苦有り。謂はく、杖を以て打たれて卽ち死し、杖を却くれば卽ち活き、是の如く無量百千年歲に死し已りて復生き、活き已りて復死し、彼の人是の如く、惡業を以ての故に若しは脫るゝを得已るも次いで復更に〔三〕優鉢羅林を見、疾走して往向し、救を望み歸を望み、優鉢羅の滿中の青花を見る。是れ何なる妄語の所得の果報なりや。所謂人有り、出家人に非ざるに、賊を作さ

〔二〕閻魔羅人。地獄の獄卒のこと。

〔三〕優鉢羅(Utpala)。又は優鉢剌、鬱鉢羅等。青蓮華と譯す。

に受くる所の彼の一切の苦を此の中に具に受け、復勝るゝ者有り。所謂、此の中にて一切の身分は皆悉く遍く割かれ、割かれ已りて復生じ、生じて則ち軟嫩なるに彼れ復更に割かれ、割かれ已りて復生じ、生じて更に軟嫩なるに而も復更に割かれ、是れ彼の悪業の麁報にして、一切の肉盡きて唯骨のみ在ること有り、自身に虫を生じ、虫に金剛の嘴あり、其の虫は炎燃え、種種の雑れる色にて、其の身を食ひて種種の苦を受け、唱聲にて大喚ぶ。彼の地獄人は是の如く無量百千年歳にして、乃至作集れる悪業破壊して氣無く、爛れ盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脱るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、一切の身分に皆悉く爛臭あり、頭に濕虫を生じ、常に衣服無く、貧窮にして困苦み、設ひ少しの者(衣服)有るも一切補納にして、所有る語言を一切は信ぜず、人の愛せざる所、生を治むるを知らず。是れ彼の悪業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて彼處を名けて如飛虫墮と爲し、是れ彼の地獄の第七の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偸盗・邪行・飲酒及以び妄語を樂み行ひ多く作さば、彼の地獄に墮ち、如飛虫墮なる別異の處に生る。殺生・偸盗・邪行・飲酒の業及び果報は、前に說く所の如し。何物か妄語なりや。所謂、人有り、衆僧の物を取り、若しは穀若しは衣などの何物等に隨ひて處處に販賣し、賤く買ひて貴く賣り、既に利を得已りて衆僧に與へず、利を得ずと言ひて衆生を欺誑くにて、是の如きの人は貪る心にて妄語し、是の如き言を作す『我れ唯此れのみを得て更に餘有ること無く、我が生を治むる所に唯爾許を得たり』と。是の如きの人は生を治めて妄語し、是の如き癡人は貪心にて作す所にして、彼の人是の悪業の因緣を以て、身壞れ命終りて悪處に墮ちて彼の地獄に在り、如飛虫墮なる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、彼れに鐵の狗有り

や。彼れ見るに、人有り、殺生・偷盜・邪行・飲酒及以び妄語を樂み行ひ多く作さば、彼の地獄の一切闇處に墮つ。殺生・偷盜・邪行・飲酒の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は妄語なりや。所謂人有り、他の婦女を姦し、衆人の前に於て、若しは王の前に於て妄語を說きて言はく『是の如き婦女を我れ實は犯さず』と。彼の女の家をして返つて殃罰を得しむ。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の一切闇處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、頭を劈きて舌を出し、出し已りて刀にて割き、割き已るに復生じ、復炎の刀を以て苦痛せしめて之れを割き、是の如く無量百千年歲にして、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、生盲・耳聾にして、常に道の頭に在り、若しは四出の巷にて乞ひ索めて命を活かし、自身も是の如く、是の如きの人を以て父母と爲し、無量の家を經て乞ひ求めて活き、壽命は長からず、妻無く、子無し。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて人闇煙と名け、是れ彼の地獄の第六の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺・盜・邪行・飲酒及以び妄語を樂み行ひ多く作さば、彼の地獄の人闇煙處に墮つ。殺生・偷盜・邪行・飲酒の業及び果報は、前に說く所の如し。何者が妄語なりや。所謂人有り、生を治めて命を活かし、他と共に要を立てゝ香火にて契を爲し、異なる處に生を治めて實は財物を得たるに、妄語にて說きて言はく『我れ物を得ず、共に分たざらん』と。彼の人、是の如くに卽ち是れ大賊にして、他の財物を劫ひ、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の人闇煙處に在りて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて隨意壓と名け、是れ彼の地獄の第四の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。是の作集れる業にて彼處に生る。彼れ見るに、人有り、殺生・偸盜・邪行・飲酒及以び妄語を樂み行ひ多く作さば、彼の地獄の隨意壓處に墮つ。殺生・偸盜・邪行・飲酒の業及び果報は、前に說く所の如し。何物が妄語なりや。所謂、人有り、他の田地を認めて他の田地を奪ひ、鬪諍ひて妄語し、曲迴げて說き、不正直に說きて他の田地を奪ひ、言語もて他を壓して自ら道理を取るものにして、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、彼の地獄の隨意壓處に在りて壓さるゝ苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄に受くる所の苦惱の彼の一切の苦を此の中に具に受け、活等の地獄の諸の地獄人は此の地獄を見て皆悉く指して言はく『彼れは是れ地獄なり』と。所謂苦とは、二の鐵の韛囊ありて風具の中に滿ち、閻魔羅人は彼の地獄人を置きて鐵の爐中に在らしむること亦鐵を置くが如く、韛を以て極めて吹き、鐵鉗を以て之れを鉗みて鐵砧の上に在らしめ、鐵槌を以て之れを打ち、是の如く打ち已りて復爐中に置き、二の鐵の韛を以て之れを吹くこと前の如く、罪業を以ての故に惡熱甚だ熾にして、吹き已りて復吹き、吹き已りて鉗もて出して鐵砧の上に置き、熱せる鐵椎を以て極めて打ち連りて打ち、多く打ち急しく打ち、是の如く打ち已るも猶活きて死せず、又復之れを鉗みて鑊の湯中に置き、之れを堅めて[一]堅からしめ、一切時に彌くして曾て暫くも停らず、乃至惡業壞れ爛れて氣無くんば、彼の地獄中より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去・久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、常に渴き多く瞋り、人の信ぜざる所にして、是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて一切闇と名け、是れ彼の地獄の第五の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝ

【一】堅の字は宋・元・明三本に依れり。

卷の第九

地獄品之五

又彼の比丘、業の果報を知りて大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有り、彼處を名けて受堅惱不可忍耐と名け、是れ彼の地獄の第三の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺・盜・邪行・飲酒を樂み行ひ多く作さば彼の地獄に墮ち、受堅苦惱不可忍耐處に生る。業及び果報は前に說く所の如し。復妄語有り。何者が妄語なりや。若しは王・王等の官人執持し、若しは他に因り、若しは自らの因緣にて、若しは物を與へて怖畏を脫るゝを得るに因り、若しは餘人を證し、若しは生活の爲に是の如く妄語する。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮ち、受堅苦不可忍處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、惡業を以ての故に自身に蛇を生じ、一切身中を處處に遍く行きて遍く其の筋を挽き、地獄の因緣にて遍く身分を食ひ、脾・腸等を食ひ、內に在りて宛轉り、是の如き苦惱は火の苦より重く、是の如く彼處に大蛇の苦を受け、惡毒の苦を受くること火より嚴利しく、是の邊際有る無き苦みを受く。彼の地獄處に受くる所の苦惱は堅鞕して耐え叵く、具に說く可からず。彼の地獄の苦は忍耐す可からざるも、而も復死せずして、一切の時に於て極重の苦を受け、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きざれば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て惡業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、既に母胎に在るに母卽ち常に病み、惡業の力の故に初め母胎に在りし從り乃至出ずる時、母病みて差えず、若しは胎を出ずるを得るも卽ち生れて卽ち病み、一切の醫師の治むる能はざる所にして、是れ本の惡業の餘殘の果報なり。

若しは人中の同業の處に生れ、彼の人常に病み、若しは咽病に患み、若しは口病に患み、是の如き等の苦あり、貧窮にして困苦し、常に富人の能く捨つる人に從ひて乞ひ求むるも得ず、一切皆知りて皆妄語舌の人なりと言ひ、是の故に與へず、惡病にて死す。是れ彼の前世の妄語なる惡業の餘殘の果報なり。

す。『彼の人は是れ我が第一の知識にして、是れ我が愛する所なり。汝若し我れを愛せば、彼れは是れ我が友にて我れの爲にす可きが故に、彼の怨對と不饒益を作さん』と。方便して語を說き、若し人是の如くに妄語を言說せんに、身壞れ命終りて惡處に墮ちて彼の地獄に在り、受苦惱無數量處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、前に說く所の如き活等の地獄に受くる所の苦惱なる彼の一切の苦は皆悉く和合し、是れ此の地獄の一處の苦惱なり。何を以ての故に。業重きを以ての故に受くる苦も亦重く、受くる苦重きを以て業の果報を示すこと是の如く、苦を受けて休止むこと無し。業と煩惱とにて生死に輪轉して邊際有ること無く、猶し旋れる環の如く、是の如くに妄語は一切の惡業にして、異異の因緣にて異異に轉行し、種種の惡業を多く作して多く受くるは、皆妄語に由る。又復妄語は能く制斷して滿つる善根の柱を滅し、相似の因の如くに相似の果を得、是の因緣を以て、此の地獄處を名けて受苦無有數量と爲し、彼れ說く可からず、彼の受くる苦惱は具に說く可からずして、異の相似する無く、乃ち是れ地獄人中の地獄人にて、惡苦惱を受く。所謂苦とは、虫の生ずる苦を受け、飢渇の苦を受け、大火の苦を受け、悕望無き苦、安慰無き苦あり、黑闇の苦を受け、相ひ觸る苦を受け、不愛の觸・色・聲・香の苦を受け、本の生の怨家人の來るを見、鐵の刀にて割かるゝ苦を受け、灰河を渡る苦、鐵鉤の破る苦あり、嶮岸に墮ちて大火に燒かるゝ苦を受け、拔草の苦を受く。[九]拔草の苦とは、打斫れて瘡を作し、草を瘡の上に著け、相ひ著くを待ち已りて然る後犂發くなり。(又)金剛の拶磨して碎けしむる苦を受け、周遍き火炎の鬘に炙らるゝ苦を受け、是の如き等の地獄に相應する無邊の苦惱を受け、彼の受くる處なる地獄と相應し、大嶮處に墮ち、受くる所の苦果は妄語に相似す。是の如く乃至彼の妄語の人の妄語の惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、

【九】拔草苦。印度には今も傷を治する草葉あり、今はこの草を瘡にはりて漸く瘡口をふさぐを待ちて直ちにその草を引いて瘡を增大せしむる事。

是の如き一切の惡あれば、愼みて妄語を說く勿れ、一切の畏等の惡ありと、智者は妄語を說けり。

彼の比丘、是の如く諦かに妄語の果報を觀て、無障礙の見あり、亦復諦かに實語の功德を見、是の如く諦かに善惡の業道を觀て、大叫喚大地獄處を觀る。彼れ見るに、處有りて名けて吼吼と爲し是れ彼の地獄の第一の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若しは人、殺・盜・邪行・飮酒にて彼處に生る。業及び果報は前に說く所の如し。復妄語有り、親舊の因緣にて一の朋に攝められ、對諍の時に於て妄語の說を作し、後に懺悔せず、厭はず毀てず、樂み行ひ多く作さば、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて彼の地獄に墮ち、吼吼處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、舌の妄語を以て、還りて舌の罰を受く。閻魔羅人は利き鐵刀を以て其の頷を穿ちて其の舌を挽き出し、惡泥水を以て用つて其の舌に塗り、口中は炎燃え、舌根に爛臭あり、炎の口の黑虫其の舌を噉食ひ、身に大苦惱を受くること前の活等の地獄中に說ける苦惱の狀の如く、彼の前の一切の諸の地獄中に受くる所の苦惱は皆悉く和合し、前に說く所の如くに乃至彼の人の妄語の惡業壞爛れて氣無くんば、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中の同業の處に生れ、貧窮にして顚狂ひ心無く心を失ひ、命短く根を缺き、世の嫌賤する所にして、皆是れ一切の不饒益の器なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復大叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて名けて受苦無數量處と爲し、是れ彼の地獄の第二の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺・盜・邪行を作して復集むれば、彼の地獄の名けて受苦無數量處と名くるに墮つ。業及び果報は前に說く所の如し。復妄語有り。何物は妄語なりや。若し人欲に因り、或ひは瞋心に因りて妄語の說を作し、若しは他に遣されて是の如き言を作

二世を饒益せず、一切相ひ憎惡し、妄語する者は能く、一切の法を空曠しから令む。
若し人卽ち生るゝ時、口中に大なる斧有りて、是の如く能く自ら割くは、所謂妄語の說なり。
一切の惡の幡、一切の惡處の繩にして、癡の闇の藏處なりとは、所謂妄語の說なり。
若し人實語を離るれば、一切の善人に捨てられ、今世に猶し草の如く、後世は惡處にて燒かる。
健者は妄語する勿れ、妄語を甚だ惡と爲し、口中の氣は爛臭あり、後に身に則ち悔を生ぜん。
若し實語を捨離れば、彼の人法得叵く、是の如き法を離るゝ人は、生れし世の苦無邊なり。
實を諸法の燈と爲し、善人は如實を愛し、天道中にて勝るゝを得とは、熱を離れし者の說く所なり。
實道は天に生るゝことを得、實道は解脫を得、若し人にして實を離れし者を、善人は狗の如しと說く。
若し人實語無くんば、小人中の小人たり、實は是れ法の階にして、明中の第一の明なり。
實は是れ解脫の道にして、財中の第一の財、救中の第一の救なりとは、是れ智者の說く所たり。
明中の第一の明、眼中の第一の眼にして、物として猶富めりと爲す無く、莊嚴の莊嚴たり。
實を第一の藏と爲し、王等も奪ふ能はず、若し實を說く人は、行ゐて第一の道に到らん。
種種に莊嚴れる者の、端正なることも是の如からず、若し人實もて莊嚴らば、端正なること則ち天の如し。
[八]能く後世も救護するは、父母・財物に非ず、知識に非ず親に非ず、唯實語のみ能く救ふ。
聖人は妄語を說きて、火中の第一の火、毒中の第一の毒にして、惡道の第一の階なりとす。
妄語は能く人を燒きて、名けて第一に燒くと爲し、毒火の燒き觸るゝが如きの故に、應に妄語を捨つべし。

【八】是の第一句は、原文にては第三句なれど、譯の便宜上、第一句に置換せり。

謂はく鐵鉤にて筋脈・骨髓を打ちて一切の身分を破壞・碎散し、又復更に餘の苦惱を受く。所謂、斤斧にて其の身體を斤り、一切の身分乃至は骨等なり。彼の妄語の人は他の因緣を以て是の如きの說を作し、一切法橋に依らずして行ひ、乃ち是れ一切の饒益せざる門、亦是れ一切の善き穀の雹にして、是の如き妄語は亦是れ一切惡道の門、亦是れ一切苦惱の藏なり。一切衆生の信ぜざる所、一切聖人は棄捨して屎の如く、諸佛世尊・聲聞・緣覺・阿羅漢等は之れを捨つること毒の如く、若しは世間、出世間道を行かば大黑闇の如く、人にして愛する者無く、乃ち是れ地獄の第一の因緣にして異に相似する無くして大黑闇の如く、是の如き等の種種の諸の惡有り、若し人已に說き、今說き、當に說くべくんば、是の如き業因に相似して果を得。彼の大叫喚大地獄に復火に燒かれて生酥の如き者有り、炎燃えたる鐵の鋸は以て其の身體を鋸きて身心苦惱し、彼の大地獄の大火は之れを煮、是れを見知する者は大いに悲む因緣にて、地獄に相似して一切重く病み、是の如き病は名尙說き叵く、是の如き病を受けて極めて大苦惱し、是の如くに說く所の二種の苦惱あり。乃ち無量百千億那由他の地獄の苦惱ありて、乃至作集せる惡不善の業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、貧窮にして命短く、心は亂れ、不男にして、一切に惡み賤められ、人の信ぜざる所、是れ彼の殺生・偸盜・邪行・飮酒・妄語の餘殘の果報なり。

爾の時、世尊偈を說きて言はく。

若し人にして過の一法ありて、是の如き妄語する人は、未來世を破壞し、惡として造らざる無し。

妄語の說を作す莫かれ、一切の惡の因緣にして、能く生死を繫縛し、善道は見る可からず。

からず、惡毒の起るが如く、世間の生死と惡道の因緣にて、屎の如くに異る無く、能く口中に爛れたる臭氣を生ぜ令め、常に苦の網を生じて愛樂す可からず、是れ大地獄の大怖畏の使にして、死なんと欲する時に臨みて心則ち大いに驚き、閻魔羅人の境界に攝せられ、是の大なる怨家は能く人をして餓鬼・畜生に墮ち令め、惡業を證明し、貧窮の因緣にて、能く地獄の大怖畏の事を與へ、能く畜生の相ひ食ふ因緣を作し、無始より來生死に轉ずる種子にして、妄語の果報にて彼處に生る。彼の地獄に十八處有り。何等は十八なりや。一を吼吼と名け、二を受苦無有數量と名け、三を受堅苦惱不可忍耐と名け、四を隨意壓と名け、五を一切闇と名け、六を人[七]闇煙と名け、七を如飛虫墮と名け、八を死活等と名け、九を異異轉と名け、十を唐悕望と名け、十一を雙逼惱と名け、十二を迭相壓と名け、十三を金剛嘴烏と名け、十四を火鬘と名け、十五を受鋒苦と名け、十六を受無邊苦と名け、十七を血髓食と名け、十八を十一炎と名け、此の十八處は是れ大叫喚の大地獄の有する所の別處なり。衆生は何の業にて彼れに生るゝや。業道を作集して普遍く究竟め、樂み行ひ多く作さば大叫喚に墮つ。根本の自體は極大の怖畏にして、大地獄中に大苦惱を受く。所謂苦とは、其の舌甚だ長く、三居賒の量にて、其の體の柔軟なること蓮花の葉の如く、口中從り出で、閻魔羅人は熱鐵の犂を執り、其の犂は炎燃えて耕破して道を作り、熱炎の銅汁の其の色甚だ赤きを以て其の舌に灑ぐ。舌中虫を生じ、其の虫に炎の口あり、還りて其の舌を食ひ、彼の妄語の人は罪業力の故に舌に大苦を受け、口に入るゝ能はず。彼の地獄人の口中に虫有りて名けて堆虫と曰ひ、其の齒を拔き、又惡業の故に風は其の齗を散らし、碎抹して沙の如からしめ、利刀風有りて其の咽を削割り、炎嘴の鐵虫其の心を噉食ひ、彼の大叫喚根本地獄にて是の如くに燒かれ、妄語の人の身は惡業を以ての故に身中に虫を生じ、還りて其の身を食ひ、虫の身は炎燃え、彼の地獄人の身內は虫に食はれて急病の苦を受け、是の如く內外二種の苦惱あり。彼の地獄中、閻魔羅人は復罪人に種種の苦惱を與ふ。

【七】闇の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

察す。彼れ見聞して知るに、復地獄有りて大叫喚と名く。衆生は何の業にて彼の地獄に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人殺生・偸盗・邪行・飲酒・妄語を樂み行ひ多く作し、增上し滿足せんに是の如きの人は大叫喚大地獄中に生る。殺生・偸盗・邪行・飲酒の業及び果報は、前に說く所の如し。今妄語を增上し滿足すと說けるは、第一の極惡にして、一切善人の憎賤する所、一切の惡道所由の門たり。是の如き業とは謂はく、所謂人有り、若しは王王等、軍衆等の中、謂ひて正直と爲し、二人の諍對に與りて證人を作し、是の如きの言を作す『是れ我が知る所にして、此の事正に爾く、我れ則ち是れを量らん』と。彼の二諍人の各各說き已るに、是の如き證人は內心實を知れるも口に正しく說かず、或ひは財物を得、或ひは知識、朋友の(ため)、或ひは染欲の心にて、自ら誑きて破壞すること前に說く所の如く、是の如き證人は是の如き心を作す『彼れ先の時語りて是の如く、是の如し。我れ今に於ては是の如くに異りて說けり。我が此の妄語は、是の如き妄語に竟に何の罪あらん』と。彼の妄語の人は心に罪無しと謂ひ、是の如き心を起す『我れ當に罪無かるべし』と。彼の人、異り說きて二人の中に於て妄語の罪を得、一人罪を得て或ひは時に死を致し、或ひは時に死を畏れ、或る時は罪を得、或ひは舍宅を輸され、彼の法制の如くに相似して罪を得。是の如き惡人は是の妄語の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處に墮つ。謂はく大叫喚地獄中にして、彼の處は命長し。何を以て量と爲すや。化樂天の八千年壽の如きは、此の人中に依りて若しは八千年を彼の天中の一日夜と爲し、彼の三十日を以て一月と爲し、彼の十二月を以て一歲と爲し、彼の天中に於ける若しは八千年を、彼の地獄中の一日夜と爲す。彼の大叫喚大地獄中は是れ惡業の人なる妄語人の處にして、自他を誑すを以て能く一切の第一善根を破りて大黑闇の如く、大衆は信ぜず、是の如き妄語を善人は許さず、一切の聖人・聲聞・緣覺・正遍知の呵責する所、一切の世間、出世間道は皆相應せず、一切善根の橋梁の大斧にして、常に他人を惱まし、爛れたる死屍の如くに破壞して堅

惡業は惡報を得、惡を作す者は自ら受け、惡は善者を殃せず、是の如くなれば應に惡を捨つべし。

若し惡を捨つる人は、惡に於て則ち畏れず、自ら作して自ら苦を受け、餘の人の食ふ所に非ず。閻魔羅人は是の如くに地獄人を責疏し、既に責疏し已りて復無量種種の苦惱を與へ、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、身體乾き枯れ、第一瞋心にして調順へ難し。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、彼の大地獄に唯此の處のみ有り、更に別に異なる處の見る可き有ること無く、亦別に業果の得可き有る無し。是の如き叫喚大地獄の是の如き十六の眷屬の處ありて、活・黑繩・合等の地獄の種種の苦惱の如きは、此の中に具足せるもの轉た重く轉た勝れ、彼の地獄中に受くる所の苦惱なる彼の一切の苦は、此の地獄中皆悉く十倍なり。何を以ての故に。作せる惡業の堅・重・多なるを以ての故なり。殺・盜・邪行と、持戒せる人に酒を與ふるは四倍の惡業にして、此の地獄に堅鞕にして多く重き種種の苦惱を受け、壽命は延長し、彼れの四倍の業の果報の苦惱あり。彼の比丘、是の如き四倍の惡業の苦惱の果報を觀察し、既に思惟し已りて、則ち生死に於て十倍に厭離す。又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。彼の比丘、是の如く諸の地獄を觀察し已りて深く生死を畏れ、第十地を得たり。彼の地の夜叉は知り已りて歡喜し、是の如くに復虛空夜叉に聞こゆること前に說く所の如く、次第に乃至[四]梵迦夷天・[五]梵不流天・[六]大梵天等にして、彼の梵天等は聞き已りて歡喜せること前に說く所の如く、『生死の魔分々皆悉く損減し、正法を增長せり』と。復彼の比丘、業の果報を知りて次いで復餘の大地獄を觀

【四】梵迦夷(Brahma-kāyika)。前に出でたり。淨身天と譯し、色界初禪梵天の通名なり。

【五】梵不流(Brahmapurohita)。色界初禪第二天の名。即ち梵輔天のことなり。

【六】大梵天(Mahābrahman)。色界初禪天の通名なれど、其の中特に、初禪三天中の王を大梵天と云ふ。

智無く方便無く、身口皆用無く、一切皆知らざるは、酒の心を劫ふを以ての故なり。
若し人にして酒を飲む者は、因緣無くして歡喜し、因緣無くして瞋り、因緣無くして惡を作す。
佛の所に於て癡を生じ、世と出世の事を壞し、解脫を燒きて火の如くなるは、所謂酒なる一法なり。
若し人能く酒を捨て、正しく法戒を行ずれば、彼れ第一の處に到り、死無く生處無けん。
汝は善行を捨離て、酒の誑す所と爲りて、地獄の惡處に墮ちたり、何ぞ用つて呼嗟を爲さん。
酒を飲まば初甜しと雖も、[二]報を受けては第一に苦く、過は[三]金波迦の如しとは、是れ智者の說く所なり。
智者は酒を信ぜずして、其の意を壞つ能はず、觸るれば冷きも果報は熱く、酒に由りて地獄に到る。
若し惡業を作す者は、意輕くして則ち心喜ぶも、報は則ち第一の苦にして、後に悔ゆるは是れ癡人なり。
欲中に意を樂まさゞれ、欲は第一に人を誑かし、縛りて生死に在ら令め、一切地獄の因たり。
若し人欲を喜樂せんに、彼の人の苦は無邊にして、欲の爲に嚙まるゝ者は、樂は則ち得可からず。
汝本意に欲を樂み、此の惡地獄に來り、極惡の苦惱を受け、今は徒に悔を生ず。
汝本惡業を作して、欲と癡の誑かす所と爲れり、彼の時何ぞ悔ゐざる、今悔ゆるとも何ぞ及ぶ所ならん。
作集れる業は堅牢くして、今惡業の果を見る、本應に惡を作すべからざりしに、惡を作して今苦を受く。

【二】「報を受け」るは、結果としてはの意。即ち「後には」といふ程の意なり。
【三】金波迦(Campaka)。芳しき黃華あり、樹形高大にして海岸にあり金翅鳥來りて止ると傳ふ。

く時能く速疾かに走り、能く鹿等を殺す。彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる叫喚地獄の分別苦處に墮ち、大苦惱を受く。所謂苦とは、彼の罪人に隨ひ、是の如く是の如く種種に分別し、閻魔羅人は是の如く是の如くに大苦惱を與へ、百たび倒れ千たび倒れ、若しは百千たび倒れ、億千たび倒れ、若干種種、異異の苦惱あること、前に說く所の如し。餘の地獄中種種の苦惱あるも、彼の一切の苦を此の中倍して受く。閻魔羅人は罪人を責疏めて、偈を說きて言はく。

三種の惡業を以て、遍く九處に在りて熟す、四十重に苦を受くるは、惡業を行じて得し所なり。

酒を惡の根本と爲し、笑つて地獄に入り、一切の根は失滅し、不利益の因緣なり。

太だ喜び多く語言り、貪を增し他を畏れ令め、口過ぎて自ら誇誕り、兩舌の第一處なり。

酒は能く人の心を亂し、人をして羊の如から令め、作すと作さゞるを知らず、是の如くんば應に酒を捨つべし。

若し酒に醉へる人は、死人の如くにして異なる無し、若し常に死せざらんと欲すれば、彼の人應に酒を捨つべし。

酒は是れ諸の過の處にて、恒常に饒益せず、一切の惡道の階にして、黑闇の所在する處なり。

酒を飮まば地獄に到り、亦餓鬼の處に到る、畜生の業を行ふは、是れ酒の過に誑されてなり。

酒を毒中の毒と爲し、地獄中の地獄にして、病中の大病なりとは、是れ智者の說く所なり。

酒は智を失ひ根を失ひ、能く法寶を盡滅す、酒を第一の胎と爲し、是れ梵行を破るの怨なり。

酒を飮まば人をして輕んぜしめ、王等をも尙重んぜず、何ぞ況んや餘の凡人をや、酒の弄ぶ所と爲ればなり。

諸法の大斧は、人をして羞慚無から令め、若し人にして酒を飮む者は、一切の輕賤しむ所たり。

是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて雲火霧と名け、是れ彼の地獄の第十五處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偷盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の地獄の雲火霧處に生る。業及び果報は前に說く所の如し。今復酒を說くに、若し人酒を以て持戒せる人に與へ、若しは外道に與へ、其れをして醉はしめ已りて之れに調戲弄れ、彼れをして羞恥せ令めて自心に喜樂せば彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる叫喚地獄の雲火霧處に墮ち、大苦惱を受く。所謂苦とは、彼の地獄中に地獄の火滿ち、厚さ二百肘にして、閻魔羅人は地獄人を捉へて火中を行か令め、足從り頭に至りて一切消洋し、之を擧ぐれば還りて生じ、惡業を以ての故に火風有りて、起りて地獄人を吹き、葉の如くに集散り、十方に轉迴して猶し捩ぢれる繩の如し。彼の地獄人は是の如くに燒を被り、乃至灰末の得可き有る無く、而も復還りて生じ、是の如く無量百千年歲に常に是の如く燒かれ、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、彼の人則ち閻魔羅國・婆離迦國に生れて、常に人を負ふが故に項は則ち常に腫る。彼の酒の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて分別苦と名け、是れ彼の地獄の第十六處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偷盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の人則ち叫喚地獄の分別苦處に墮つ。業及び果報は前に說く所の如し。今復酒を說くに、所謂人有り、因緣を行はんと欲し酒を以て奴及び作人等に與ふるにて、彼れをして酒を飲ましむれば、身力乏しからず、若し獵に行

けては還りて復前の煙中の樂を憶ふ。是の如くに煙氣の勢力は嚴しく利し。若し彼處を脫るゝも、復鐵の鳥有りて煙葉鬘と名け、其の嘴甚だ利く、其の骨を啄破して髓を取りて飲み、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、則ち多く脇を病み、貧窮にし命短し。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて彼處を名けて煙火林處と爲し、是れ彼の地獄の第十四處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人殺生・偸盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の人則ち叫喚地獄の煙火林處に墮つ。業及び果報は前に說く所の如し。今復酒を說くに、若し人怨家をして衰惱せ令めんと欲し、酒を以て賊に與へ、若しは官人に與へて怨に苦を與へ令むれば、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる叫喚地獄の煙火林處に墮ち、大苦惱を受く。所謂熱風は刀の如く火の如く、彼の惡業の故に是の如き風を作し、彼の罪人を吹き、空中に在りて、勢相ひ打觸して自在を得ず、身體碎壞けて猶し砂搏の如く、惡業の力の故に身復還り生じ、是の如く無量百千年歲にして、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の苦を受く。所謂苦とは、火の苦、刀の苦、利き刀の劈く苦、病の苦、鐵の苦、熱灰等の苦にして、是の如き等の第一の極苦を受け、第一に極惡、第一に極急なり。是の如く無量百千年歲にして、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、項上の三堆は極めて高く隆出して常に瘤病に患む。

是れ本の酒を與へし惡業の果報なり。若し樹に映るゝ者は、鐵の鷲鳥有り、其の眼を啄破して其の汁を飲み、是れ本の酒を與へし惡業の果報にして、若し樹に上る者は則ち樹枝より墮ちて地上に在り、身は百段と爲り、若しは一千段にして、是れ本の酒を與へし惡業の果報なり。若し罪人の樹に依らざる者有らば則ち灰河に墮ち、熱灰に漂はされ、身骨洋爛れ、是の如く無量百千年歳に大苦惱を受く。此れ少分を說けるにて、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、心は則ち正しからず、報にて惡病を得、若しは大病を得、若しは心痛病、只羅娑病、若しは脚腫病、若しは目盲病にして、是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて彼處を名けて芭蕉煙林と爲し、是れ彼の地獄の第十三處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人殺生・偷盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の人則ち叫喚地獄に生れ、芭蕉煙林なる別異の處に生る。業及び果報は前に說く所の如し。今復酒を說くに、若し人欲心にて、是の故に酒を持して陰密かに他の貞良なる婦女に與へ、彼れをして醉はしめんと欲し、威儀に住せずして、心動きて變異せば非法を行はんと望むに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處の叫喚地獄に墮ち、芭蕉煙林なる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、彼の地獄處の周圍・縱廣五百由旬、普く煙遍滿ち、惡焦の火有るも復黑闇にして、彼の闇火中に炎の鐵塊の厚さ三[一]居賖なる有り、皆是れ火炭なるも闇に覆れて見えず。彼の地獄人は速疾かに沒入し、黑闇の火に覆れて唱喚ぶ能はず、是の如き罪人の一切の根門に、皆悉く火滿つ。是れ彼の酒を與へし惡業の果報なり。若し彼處を脫るゝも則ち芭蕉煙は其の根門に滿ち、旣に煙の苦を受

【一】居賖(Krośa)。又は俱盧舍、拘樓賖。一由旬を四十里（六丁一里として）とし、その八分の一なる五里を一拘樓賖とすと云ひ、又五百弓（一弓の長さ六尺四寸）の長さなりとす。

汁を以て其の中に和雜へ、是の如く無量百千年歲に常に燒煮を被る。閻魔羅人は炎の刀と枷を以て若しは斫り若しは打ち、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、彼の人色黑くして墨と異なる無く、多く瞋り多く妬み、性慳にして常に貧し。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて大劍林と名け、是れ彼の地獄の第十二處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の人則ち叫喚地獄の大劍林處に墮つ。業及び果報は前に說く所の如し。今復酒を說くに、曠野の中の人の居る無き處にして、唯道路のみ有り、多人の行く所なるに、若し人中に於て酒を賣りて利を求むれば、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて、惡處なる叫喚地獄の大劍林處に墮ち、大苦惱を受く。所謂、多く大なる利き劍樹の高さ一由旬なる有り、刀の葉甚だ利く、樹莖は炎燃え、煙毒熾盛にして、是れ本酒を與へし惡業の作す所なり。若しは一由旬にして、未だ樹の所に到らざるに身已に熟爛れて而も復死せず是の如く是の如く大劍林に近くに、彼の林の周廣三千由旬、火煙と毒刀は百千重有り、大苦惱を受けて而も復死せず。若し地獄人の大劍林に到るに、閻魔羅人は打獄して入らしめ、樹の下に在る有り、普遍く雨れる刀にて一切の身分、一切の筋脈、一切の諸の節、一切の骨髓は皆悉く破裂れ、分分に分散す。閻魔羅人は手に刀・枷を執りて劍林を周圍り、罪人の若し出ずるを見れば則ち還り入らしむ。彼の大劍樹の鐵林中の罪人は、若し閻魔羅人を見れば極めて怖畏を生じ、樹に映る者有り、樹に上る者有り、捉へらるゝ者有り。既に捉へ得已れば刀を以て斬斫り、頭の破るゝ者有り、

り燃え、乃至頭を燃やし、閻魔羅人は熱炎の鐵刀にて足從り頭に至りて若しは斫り若しは刺し、既に斫刺し已りて又復更に大苦惱を與ふ。所謂火の燃炎えたる利き鐵戟にて是の如く無量百千年歲常に一切の時に燒き、斫り、劈き、打つ。乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、彼の人則ち惡國・惡處・邊地の處に生れ、下賤にて猪を放ち、是の如き處に生る。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

　又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて劍林處と名け、是れ彼の地獄の第十一處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の人則ち叫喚地獄に墮ちて劍林處に生る。業及び果報は前に說く所の如し。今復酒を說くに、若し人酒を以て曠野を行かんと欲する人を誑きて言はく、『是れは第一の阿婆婆酒なり。人をして醉はざら令む』と。而も惡酒を與ふ。彼れ酒を將ちて去り、既に曠野の嶮處に入りて之れを飲み、飲み已りて極めて醉ひて覺知する所無く、是の如くに醉へる人の有する所の財物は悉く賊の爲に取られ、或ひは其の命を奪はる。阿婆婆酒の味は酪漿の如く、美き水の如き有り、馬酪の如き有り、好妙の藥を以て和へて之れを作る。彼の人(之れを)與へずして惡酒を與ふるが故に醉は使令め、彼の酒を與へし者を世人は皆咽を捉ふる賊の如くにて、最も是れ惡賊なりと言ふ。彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて、惡處の叫喚地獄に墮ちて劍林處に生れ、彼の作集せる惡業にて大苦惱を受く。所謂苦とは、雨れる炎火の石は甚だ多く稠密にして、普く身を燒かれ、是の如くに劈き斫られ、地に倒れて舌を吐く。彼處に河有りて熱沸河と名け、熱血の洋水常に怖畏を生ぜしめ、彼の河は熱沸し、熱せる銅汁と熱せる白鑞の

彼れに異なる處有りて普闇火と名け、是れ彼の地獄の第九の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生る丶や。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の人則ち叫喚地獄の普闇火處に墮つ。業及び果報は前に說く所の如し。又復若し人酒を賣りて活を存し、酒を買ふ人有りて酒の價を知らざれば、少き酒を貴く賣りて多くの物を取るに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる叫喚地獄の普闇火處に墮ち、大苦惱を受く。所謂苦とは、普闇火處の地獄中、閻魔羅人は是れ何人爲るやを識らず知らずして之れを闇打し、彼の地獄人は大苦惱を受け、誰れの打つやを知らず、闇火中に入れども彼の火は乃ち微少の光明の毛頭許の如きも無く、彼の地獄人は彼の火中に於て燒煮れて爛壞れ、復鐵の鋸有りて其の身を解劈き、頭從り起りて裂きて兩分と爲し、罪人苦惱して唱聲にて大喚ぶ。乃至作集せる惡不善の業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄より爾乃ち脫る丶を得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、常に飢渴の逼惱する所に患み、財物有ること無く、隘迮き處に生れ、常に儉しき處に生れて正しき人類に相似する處に生る丶に非ず。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて閻魔羅遮約曠野と名け、是れ彼の地獄の第十の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生る丶や。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の人則ち叫喚地獄に墮ち、閻魔羅遮約曠野に生る。業及び果報は前に說く所の如し。今復酒を說くに、若し人、酒を以て强ひて病人、新に產せる婦女に與へ、若しは財物の爲、若しは衣服、飮食等の爲の故に、是の如く酒を與へて、若しは財物を取り、若しは衣服、飮食等を取るに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて、惡處の叫喚地獄に墮ち、閻魔羅遮約曠野に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、足甲從

如く見已りて大怖畏を生じ、面を皺め口を喝め、救を望み歸を望みて嶮岸處に墮つ。熱炎の嘴爪ある鐵身の烏・鷲・獵狐・鵄・雕は分分に分散せしめて之れを噉食ひ、食ひ已るに復生れ、是の如く無量百千年歳にして、乃至惡業未た壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れず、是の如き次第は前に說く所の如く、王法に縛られ、身體色惡しく、面貌醜陋くして、獄に繫がれて死す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

　又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて彼處を名けて鐵林曠野と爲し、是れ彼の地獄の第八の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の人則ち叫喚地獄の鐵林曠野に墮つ。業及び果報は前に說く所の如し。又若し人有り、毒藥を酒に和せ、怨に與へて飮ま令むるに、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる叫喚地獄の鐵林曠野に墮ち大苦惱を受く。所謂、鐵輪の熱炎疾く轉じ、閻魔羅人は熱鐵の繩を以て地獄人を縛りて彼の鐵輪の速疾かに急轉せるに在らしめ、閻魔羅人は熱鐵の箭を以て其の身分を射て、體に完き處の芥子許の如きも無く、罪業の力の故に復死せず。彼の鐵輪處の因緣若し盡きて走りて餘の處に向ふも、罪業の力の故に復鐵蛇の執持する所と爲り、百千年に於て噉食はれ、乃至惡業未だ壞れず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れて蛇を捉ふる家に生れ、喜びて蛇の頭を捉へ、彼の惡業の餘殘の勢力を以ての故に蛇に螫されて死す。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

　又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに

して闘はしむることを爲し、酒を與へて飲ましむれば、是の業報の故に惡處なる叫喚地獄に墮ち、雨炎火石なる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、罪業力の故に彼の地獄中に大象有り、生身皆炎燃え、皆能く一切の身分を打觸ち、彼の人を取り已りて彼の人の一切の身分を觸破り、破碎きて墮落さしめ、大怖畏を與へ、彼の人是の如く唱聲にて大喚び、身分は散盡せる。若しは脫るるを得已るも而も復更に閻魔羅人は之れを執りて鑊に置き、熱沸せる赤洞の汁の中に在り、是の如く無量百千年歲に常に燒かれ常に煮られ、身體は爛壞し、乃至作集せる惡業未だ壞れず未だ爛れず業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より、爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、彼の人則ち象を殺す家に生れて象の殺す所と爲り、常に貧窮に困み、面色好からず、手足は堅澁くして、身に常に澁觸し、是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて殺殺處と名け、是れ彼の地獄の第七の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の人則ち叫喚地獄に墮ち、殺殺處に生る、業及び果報は前に說く所の如し。又復若し人、酒を以て他の貞良なる婦女に與へ、其れをして醉は令め已りて、心亂れて正しからず、梵行を守らざるに、然る後共に婬すれば、彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる叫喚地獄に墮ち、殺殺處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、熱殺の鐵鉤其の男根を拔き、拔き已るに復生じ、拔き已りて復生じて新生の濡嫩なるに而も復更に拔き、極めて大苦惱を受けて唱聲にて叫喚ぶ、彼の惡業の人は是の如き處を脫れて走りて異なる處に向ふも、既に是の如く走るに其の面前に當りて嶮岸有るを見、烏・鷲・䲻狐・鵄・雕有るを見る。身は皆是れ鐵にして、熱殺の嘴爪處處に遍く有りて、彼の嶮岸に在り。彼の地獄人は是の

業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盗・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の人則ち叫喚地獄に墮ち、熱鐵火杵なる別異の處に生る。業及び果報は前に說く所の如し。今復酒を說かば、若し人酒を以て誑きて畜生に與へ、師子・虎・鸜・鴿・命命なる是の等の鳥獸の、其れをして醉は令め已りて則ち力有ること無く、去ることを得能はざれば、然る後捉取らへて若しは殺し、殺さざるに彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる叫喚地獄に墮ち、熱鐵火處なる別異の處に生れて大苦惱を受く。熱炎の鐵杵は是れ惡業の作にして、築きて碎末ならしめて沙の如くに相似し、一切の身分皆悉く散壞し、彼れ大苦を受けて唱聲にて號哭び遞に相ひ向きて走り、是の如くに走る時、熱炎の鐵杵後に隨ひて打築ち、普く大苦を受く。閻魔羅人は復更に之れを執り、利き鐵刀を以て其の身體を削り、削り已りて復割き、割き已りて復剋り、剋り已りて復劈き、乃至作集せる惡不業の業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れて風血病を得、是れ彼の惡業の餘殘の果報にして、惡國土に生れて醫藥・瞻病・使人有ること無く、貧窮にして困苦み、復惡國の多く種種の惡草・刺棘有るに生れ、多熱・少水の處に在りて常に怖畏を懷れ。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて彼處を名けて雨殺火石と爲し、是れ彼の地獄の第六の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盗・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の人則ち叫喚地獄に墮ち、雨炎火石なる別異の處に生る。業及び果報は前に說く所の如し。又復若し是の如き心を作す、『象の若し醉へる時、多く人を殺す。若し多くの人を殺さば、我れ則ち勝るゝを得ん』と。象と

卷の第八

地獄品之四

又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに復異なる處有りて火末虫と名け、是れ彼の地獄の第四の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有りて、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、彼の人、則ち叫喚地獄の火末虫處に墮つ。業及び果報は前に說く所の如し。復酒を賣る者は水等を加へ益して酒價を取り、是の如くに酒を賣りて偸盜の過有り。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる叫喚地獄の火末虫處に墮ち、大苦惱を受く。所謂苦とは、四百四病なり。何等を名けて四百四病と爲すや。百一の風病、百一の黃病、百一の冷病、百一の雜病なり。彼の地獄人は相似の因果にて、若しは閻浮提處・鬱單越處・瞿耶尼處・弗婆提處なる是の如き四處の、若干人の一病の力に隨ひ、一日夜に於て能く皆死せ令めらる。彼の地獄處に具に是の如き四百四病有りて、而も復更に餘の諸の苦惱有り、所謂苦とは、彼の地獄人の自身に虫生れ、其の皮・肉・脂・血・骨・髓を破りて之れを飮食し、是の如き苦を受けて唱聲にて大喚ぶも、孤獨にして救無し。復彼の閻魔羅人に於て極めて怖畏を生じ、復大火の燒煮する所と爲り、其の身は炎燃えて種種の苦を受く。乃至作集せる惡業壞れ散りて氣無く爛れ盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、貧窮にして苦惱あり。是れ前世の酒を賣れる惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて彼處を名けて熱鐵火杵と爲し、是れ彼の地獄の第五の別處なり。衆生は何の

べし。

財盡きて人中に鄙しく、第一の懈怠の本にして、飲酒は則ち過有り、是の如くんば應に酒を捨つべし。

酒は能く熾に欲を燃やし、瞋心をも亦是の如く、癡も亦酒に因りて盛なれば、是の故に應に酒を捨つべし。

是の如く地獄の髮火流處は是れ地獄人の自業にて得る所にして、乃至作集せる惡業破壞して氣無く、爛れ盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熱さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生る。彼の人、則ち一種の國土の酒無き處に生れ、一切の資具は色無く味無く、色味を知らず。是れ本の惡業の餘殘の果報なり。

野干其の身中を食し、是の如く常に燒かれ、是の如く常に煮らる。彼の人、自ら不善の惡業を作して悲苦き號哭び偈を說きて傷み恨み、閻魔羅人に向ひて是の言を作す。

汝何ぞ悲心無きや、復何ぞ寂靜ならざるや、我れは是れ悲心の器なるに、我れに於て何ぞ悲無きや。

閻魔羅人、罪人に答へて曰はく。

汝は癡の覆ふ所と爲りて、自ら多くの惡業を作せり、今極重の苦を受くるも、我れ此の因を作れるに非ず。

癡人は戒を學ばず、多くの惡業を作集し、既に多くの惡業有りて、今是の如き果を得るなり。
是れ汝の作せる所にして、是れ我れの因緣に非ず、若し人惡業を作さんに、彼の業は則ち是れ因なり。

已に愛の羂の爲に誑され、惡不善の業を作して、今惡業の報を受くるに、何故に我れを瞋恨するや。

作さざれば殃を受けず、惡は因無しと謂ふに非ず、若し人意に惡を作さんに、彼の人則ち自ら受く。

飮酒を喜樂する莫かれ、酒は毒中の毒たり。常に飮酒を喜樂せんに、能く善法を殺害ふ。
若し常に飮酒を樂まんに、彼の人は正しき意に非ず、意動きて法を得叵し、故に應に常に酒を捨つべし。

酒を失中の失と爲すとは、是れ智者の說く所、是の如くに酒を樂むこと莫かれ、自らを失ひ他を失は令むればなり。

常に飮酒を喜樂せんに、不愛の惡法を得、是の如きは惡と言ふことを得、故に應に飮酒を捨つ

獄所有の別處なり。衆生は何の業報にて彼處に生るゝや。彼の比丘、是の如くに叫喚地獄の大吼處を観已り、次いで第二の普聲處と名くるを観る。彼れ見るに、人有り、殺生・偷盗・邪行・飲酒を樂み行ひ多く作さば、彼の人、則ち叫喚地獄に墮ちて普聲處に生る。殺・盗・邪行の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は飲酒なりや。何者は飲酒なりや。若し人、飲酒を樂み行ひ多く作し、若しは他人の初めて受戒せる人に於て酒を與へて飲ましむるに、彼の人、是の悪業の因緣を以て、身壞れ命終りて悪處なる叫喚地獄に墮ち、普聲處に生れて大苦惱を受く。所謂、杵に築かれて彼の地獄人は聲を發して吼喚し、其の聲遍く彼の地獄處、若しは鐵圍山、一切の諸の河、四天下處の閻浮提等に滿ち、彼處に在る者は彼の吼聲を出して一切消盡し、彼の人は啼哭き悲號び吼聲(を出し)、自業に相似して、彼の地獄人は是の如くに吼喚ぶ。乃至悪業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し悪業盡きんに彼の地獄處より乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、則ち曠野の水少き國土に生る。

又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を観るに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、喚大地獄に復異なる處有りて髮火流と名け、是れ彼の地獄の第三の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偷盗・邪行・飲酒を樂み行ひ多く作さば、彼の人、則ち叫喚地獄の髮火流處に墮つ。殺・盗・邪行の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は飲酒なりや。優婆塞なる五戒の人の邊に於て、酒の功德を說きて是の如き言を作す『酒も亦是れ戒なり』と。其れをして酒を飲ま令め、彼の人、是の悪業の因緣を以て、身壞れ命終りて、悪處なる叫喚地獄の髮火流處に墮ち、大苦惱を受く。所謂、雨火にて彼の地獄人は常に燒煮を被り、炎燃えたる頭髮乃至脚足にして、熱鐵の狗有りて其の足を噉食ひ、炎嘴の鐵鷲其の髑髏を破りて其の腦を飲み、熱鐵の

【九】鐵圍山(Cakravāḍa)。須彌山を中心として七山八海あり、此の第八海中の閻浮提等の四洲ありて、此の海を鐵山輪の如に圍遶して一世界を爲すとせられ、この鐵山を鐵圍山、又は鐵輪圍山と名くるなり。

人に與へ、清淨の人に與へたる惡業の致す所を以ての故に、炎燃えたる鐵鉢を以て之れに盛りて其の口中に置く。大苦に逼られ惱みて聲を發して大吼し、是の如き吼聲は餘の地獄中則ち是の如からず、彼の諸の罪人は大悲苦を生じて唱聲にて吼喚び、大吼の聲は遍く虚空に滿つ、閻魔羅人は本性自ら瞋にして、彼の地獄人の罪業力の故に、閻魔羅人は其の吼聲を聞きて倍して更に瞋怒る。諸の酒を飲む人は諸の惡を護らず、一切不善にして慚愧を生ぜざれば、若し酒を與ふる者は是れ則ち人に一切の不善を與ふるなり。飲酒を以ての故に心專ら正しからず、善法を護らずして心則ち錯亂れ彼の亂心の人は好惡を識らず、一切不善にして慚愧を生ぜず。若し人、酒を與ふれば則ち其の因を與ふるにて、因有るを以ての故に能く不善を爲し、相似の因の如くに相似して果を得。此の因緣を以て久しく大苦を受け、種種の苦惱、無量の苦惱あり。何が故に名けて大吼處と曰ふや。無量種種の苦惱を受くるを以て聲を發して大吼し、是の故に名けて大吼地獄と曰ふ。是の如くに衆生は是の如き處に在り、乃至不善の惡業破壞して氣無く、爛れ盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るるを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、生れて則ち愚鈍にして心黠慧からず、則ち多く忘失し、少き時を憶せず。是の如く闇鈍・愚癡の人にして、資財有ること無く、人は敬愛せず、貧窮にして物無く、復財を求むと雖も得可からず、若しは微病を得て卽便ち命終る。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀るに、復何の處有りや。彼れ是の如き叫喚地獄を見るに、十六の處有り。何等は十六なりや。一を大吼と名け、二を普聲と名け、三を髮火流と名け、四を火末虫と名け、五を熱鐵火杵と名け、六を雨炎火名と名け、七を殺殺と名け、八を鐵林曠野と名け、九を普闇と名け、十を閻魔羅遮約曠野と名け、十一を劍林と名け、十二を大劍林と名け、十三を芭蕉烟林と名け、十四を有煙火林と名け、十五を火雲霧と名け、十六を分別苦と名け、此の十六處は叫喚地

る者有り、彼の地獄人は大苦惱を受け、叫聲にて餘の地獄人を叫喚ぶに、罪業の力の故に其の叫喚を聞きて是れ歌聲なりと謂ひ、皆共に走り赴きて救を望み歸を望むに、閻魔羅人は卽ち復之れを執り、鐵の鑽・刀・斧の炎燃えたるにて穿ち、刺し、割き、斫り、是の如く無量百千年歲にして乃至作集せる惡業破壞して氣無く、爛れ盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得るも、救を望み歸を望みて走りて餘のに處向ひ、遠く村有るを見る。屋舍を具足し、多く河池有り、專心に直進み、疾走して往き赴き、彼の村に入らんと欲するに、彼の村の一切は皆悉く炎燃え、金剛の口、利き牙の黑虫有り、身皆炎燃え、處處に遍く滿ち、既に村に入り已るに、門は既ち密閉し、彼の地獄人は金剛の口、利き牙の黑虫の噉食ふ所と爲る。是の如く無量百千年歲にして、乃至作集せる惡業破壞して氣無く、爛れ盡きんに、是の如き苦惱の大海を出づることを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れて心は則ち忽ち忘れ、貧窮にして物無く、常に道巷に在り、四出の巷中に鄙惡の物を賣りて生を治め利を求め、諸の小兒の爲に伴笑し戲弄せられ、口の齒は色惡く、脚足劈裂け、常に飢渴の逼切する所に患み、妻子有る無く、父無く母・兄弟・姉妹無し。此れは是れ酒を飮み、酒を與へし惡業の餘殘の果報にして、是の如く戒ある人に酒を與へし罪業にて、則ち叫喚大地獄に墮ちて苦の果報を受くること、應に是の如くなりと知るべし。又彼の比丘、業の果報を知りて復叫喚の大地獄を觀察するに、何の別處有りや。彼れ見聞して知るに、叫喚地獄に別異の處有りて大吼處と名く。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺生・偸盜・邪行・飮酒を樂み行ひ多く作さば、彼の地獄に墮ちて大吼處に生る。殺・盜・邪行の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は飮酒なりや。所謂、酒を以て齋戒の人、清淨の人に與ふるにて、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる叫喚地獄に墮ち、大吼處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、熱せる白鑞の汁を先ず口中に置、本酒を持して齋戒の

善人は善を行ひ易く、惡人は善を行ひ難し、惡人は惡を造り易く、善人は惡を作し難し。

彼の地獄中の閻魔羅人は是の如く地獄人を責め已りて、種種の苦を設く。所謂、二山あり、山は甚だ堅鞕くして、鐵の炎火燃え、兩相ひ勢を作して一時に倶に來り、地獄人に搾り、搾り已りて之れを磨き、其の身散盡して物として見る可き無く、是の如く磨かれ已りて復還りて生れ、復以て二山前の如く搾磨し、是の如く是の如く生れ已るに復搾り、生れ已りて復磨き、是の如く無量百千年歳にして、惡業未だ盡きず、彼の地獄處より若しは脱るゝを得已りて走りて餘の處に向ひ、救を望み歸を望みて解脱を得んことを思ふも、閻魔羅人は即ち復之れを執りて頭をして下に在らしめ、鐵の鑊中に置き、彼の人是の如く鐵の鑊中に在りて頭面は下に在り、百千年を經て湯火之れを煮、是の如く惡業故の猶くにして盡きず、彼の鑊湯の處より若しは脱るゝを得已りて走りて餘の處に向ひ、救を望み歸を望みて安樂を求めんと欲するも、彼の人の面前に大なる鐵烏有り、其の身炎燃え、即ち其の身を執りて攫斲して分散せしめ、脈脈・節節を百千分と爲し、分散して之れを食ひ、分分に分散し、是の如く無量百千年歳にして、而も彼の惡業故の如くに盡きず、彼の鐵烏處より若しは脱るゝを得已り、救を望み歸を望みて走りて餘の處に向ふも、飢渇の苦に惱み、遠く清水若しは陂池等を見て疾走して往き赴くに、彼處に唯熱せる白鑞の汁有りて彼の滿ち、彼れ澡洗せんと欲して即便ち中に入り、既に彼處に入るに、惡業を以ての故に即ち大なる鼈有りて取りて之れを沈め、熱せる白鑞の汁は煮て極めて熱から令む。是の如く無量百千年歳にして、乃至不善の惡業破壞して氣無く、盡き已らんに、是の如き大なる鼈は爾乃ち之れを放ち、既に脱るゝを得已るも彼の人苦み惱みて救を望み歸を望み、走りて餘の處に向ふに、面前に現に閻魔羅人を見る。手に鐵鑽を執り、其の鑽は炎燃え、是の如き鑽を以て其の頭を鑽して即便ち穿徹ち、或ひは制を被りて背を破りて出づる者有り、或ひは刺を被りて脇を破りて出づる者有り、或ひは刺を被りて頭を破りて出づ

き大に哭く。彼の人、是の如く唱喚して吼え已るに、閻魔羅は爲に之れを責疏めて偈を說きて言はく。

已に不善の業を作して、今苦惱の果を受く、自らの癡心の作す所にて、後に則ち燒煮を被る。
是の如き不善の業は、已に惡心にて作せし所なり、今受くるも呻喚ぶ莫かれ、何ぞ呼嗟くを用ふることを爲さん。
若し人惡業を作さば、皆惡果報を得、若し自らの樂を欲する者は、是の如く惡に近くこと莫かれ。
若しは少の惡業を作すも、地獄に多く苦を受く、癡心自在なるが故に、脫れ得て猶惡を作す。
惡業は信ず可からず、人をして地獄に到らしめ、少火能く山と、及び一切の林樹を燒く。
癡人は念じて惡を作し、善法を喜樂せず、惡行の果報を見るに、皆因緣從り生ず。
云何んが法を樂まず、何故に惡を捨てざるや、若し人惡業を離れんに、則ち地獄を見ず。
若し人自らの心癡にて、惡業の果を知らざれば、彼の人此の惡を受け、汝今是の如くに受く。
惡業は地獄に生れ、惡業の燒く所と爲り、惡は涅槃に到らず、怨も惡業に過ぎず。
本の惡業に誑かされ、今惡業の爲に燒かる、若し惡業を作さずんば、終に苦惱を受けず。
若し人能く愛を制すれば、此の道は寂靜にして勝れ、是の如き愛を捨つる人は、則ち涅槃に近く住す。
已に惡業を造り竟り、曾て善を修行せずんば、是の如きは惡業に燒かる、心に惡業を行ふ勿れ。
惡業を行ふの人は、處として安樂を得る無し、若し自らの樂を欲する者は、應當に法を喜樂すべし。
若し人惡を喜樂せんに、苦中の苦を受く、若し苦を忍ぶ能はずんば、應に惡業を作すべからず。

彼の比丘、是の如くに彼の諸衆生の種種の惡業の自在の果報を觀察して、生死を厭離す。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。此の如き比丘、諦かに觀察し已りて業果に通達し、是の如く諦かに三大地獄并に別處の所及び業の果報を觀察し、觀察して知り已り、攀緣して通達し、有中を樂みて魔の境界に住せず。彼の地の夜叉は彼の比丘の是の如くに精進するを見、卽ち復上りて虛空夜叉に聞こえ、虛空夜叉は四大王に聞こゆること、前に說く所の如く、次第に乃至　無量光天にして、乃至說きて言はく『閻浮提中の某國、某村の』と、是の如く次第して『鬚髮を剃除し、正信にて出家し、彼の比丘、是の如く乃至第九地を得たり』と。無量光天は聞き已りて歡喜し、迭に相ひ告げて言はく『天等當に知るべし、魔分を損減して正法の朋を長せり』と。

又彼の比丘、是の如くに三地獄を觀察し已り、次いで復第四叫喚の大地獄を觀察す、衆生は何の業にて彼の中に生るゝや。彼れ見聞して知るに、所謂、人有り、殺生・偸盜・邪行、飲酒を樂み行ひ多く作し、是の如き四業を普遍く究竟め、作して復集むるに、身壞れ命終りて則ち是の如き叫喚大地獄に生る。殺・盜・邪行の業及び果報は、前に說く所の如し。今飲酒を樂み行ひ多く作さば則ち叫喚大地獄中に生ると說くは、若し人、酒を以て與えて衆僧を會し、若しは戒ある人、出家せる比丘、若しは寂靜の人、寂靜の心の人、禪定を樂む者に與へ、其の酒を與ふるが故に心を則ち濁亂せしむるにて、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる叫喚大地獄に墮ち、彼の中に惡熱ありて大苦惱を受く。何等の苦を受くるや。謂はく、鐵鉗を以て強く其の口を擘き、洋たる赤銅の汁を口に灌ぎて飲ま令め、初に其の脣を燒き、既に脣を燒き已りて次いで其の舌を燒き、既に舌を燒き已りて次いで其の咽を燒き、是の如く咽を燒きて次いで其の肚を燒き、是の如く次第して其の小腸を燒き、小腸を燒き已りて復大腸を燒き、是の如く生藏にして、次いで熟藏を燒き、熟藏を燒き已りて下從り出ず。是の如くに彼の人、酒の不善の業にて是の如き報を得、號啼き吼喚び呼嗟

【八】無量光天。色界二禪の三天の一。此の天の光明無量にして限無きを以て、無量光天と名く。

生れざるも、若しは人中同業の處に生れて侏儒の身を得、目盲・耳聾にて、貧窮にして少く死し、常に飢渴に患む。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。又彼の比丘、果業の報を知りて次いで復合大地獄を觀察するに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偸盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、合地獄の鐵末火處に墮つ。殺生・偸盜の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は邪行なりや。所謂、人有り、實は沙門に非ざるに自ら沙門と謂ひ、若しは婦女の歌舞・戲笑・莊嚴の具の聲を聞き、既に聲を聞き已りて不善に觀察し、心に愛染を生じ、彼の歌笑・舞戲等の聲を聞きて不淨を漏失し、心に適ひ味に著するにて、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて、惡處なる合大地獄の鐵末火處に墮ちて大苦惱を受く。所謂、熱鐵の四角の地獄にして、周圍の鐵壁は五百由旬、常に鐵火の熾燃として息まざる有りて地獄人を燒き、自業の所作にて上從り火を雨らし、曾て暫くも停らず、是の如く鐵を雨らして是れ雨の火の如く、鐵を雨らすを以ての故に彼の地獄人は一切の身分分散して末と爲り、雨の火を以ての故に常に煮られ常に燒かれ、常に是の如き二種の雨の苦を受く。彼の地獄人は是の如くに苦を受け、唯地獄人は是の如くに苦を受けて、是れを除きて以て外に譬諭す可き無く、彼の人是の如くに受くる所の苦惱は堅鞕く急惡しくして、是の如き惡苦を一切皆畏れ、愛せず樂まざるも、自業の所作にて是の如くに苦を受く。乃至作集せる惡不善の業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、常に大河の人を渡す處に在り、常に怖畏を生じ、若しは身常に病み、若しは象に當ふ等、惡命有りと雖も常に死を畏る。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。又彼の比丘、是の如く合大地獄の一一の別處を觀察するに、唯十六にして、更に第十七處有るを見ず。合大地獄の十六の別處に、多衆常に滿つ。是の如くに實の業法の報を觀察し、

彼の人是の如くに不善に觀察し、憶念して喜樂し、心に分別を生じ、數數思惟し分別して善き思惟に非ず、是れ正念の法を證する思惟に非ず、苦集を滅する正法の思惟に非ず、學の思惟に非ず、學の思惟に於て作さず行はず、正しく憶念して心を調ふる思惟に非ず、佛・法・衆僧を念ずる思惟に非ず、少罪の微塵許の如きを見て怖畏るゝ思惟に非ず、應に多く敷具・醫藥・看病・飲食・資具の因緣を取るべからざるに、彼の是の如き人は而も便ち多く敷具・醫藥・隨病・飲食・資具の因緣を取り、彼の人是の如くに多く臥具・病藥・飲食・資具の因緣を取る。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる合大地獄に墮ち、火盆處に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、彼の火盆處に熱炎遍く滿ち、毛頭の處に炎無く熱無くして遍からざる者無く、彼の地獄處の地獄人の身の狀は燈樹の如くにして、彼の燈の熱炎は合して一の炎と爲り、彼の地獄人は呻號き叫喚び叫喚びて口を開くに、滿口は熱炎にして、彼の地獄人は極めて大苦惱を受け、轉た復唱喚び呻號き啼哭くに、火炎は耳に入り、既に耳に入るが故に轉た復呻號・唱喚・啼哭するに、炎は復眼に入り、既に眼に入るが故に轉た復呻號び、唱聲にて叫喚ぶ。彼の人、是の如く普き身炎燃え、熱炎の鐵衣は復其の舌を燒く。既に戒を破り已りて他の飲食を食せるが故に其の舌を燒き、禁戒を犯し、不善に觀察して他の婦女を看るが故に其の眼を燒き、戒を護らずして他の婦女と共に歌笑し相ひ喚び、愛染の心を以て其の聲を聽くが故に熱せる白鑞の汁は其の耳中に滿ち、禁戒を犯して僧の香薰を取るを以ての故に其の鼻を割き、火を以て之れを燒く。彼の人、是の如く五根に戒を犯して地獄中に墮ち、本の業に相似して苦の果報を受け、惡業を行ふが故に、彼の地獄中に是の如く無量百千年歲常に燒煮かる。多く炎の鬘有り、處處に普遍く合地獄に滿ちたるを火盆處と名け、乃至作集せる惡不善の業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に

攅を以て攅にて河中に置き、彼れ若し出でんと欲すれば足則ち熟爛れ、筋熟し髀熟し、腨熟し髖熟し、髖骨亦熟し、髖の皮も亦熟し、髖の肉亦熟し、背の肉墮落し、背の肉亦熟し、頭の肉墮落し、頭の肉亦熟し、髑髏墮落ち、髑髏亦熟す。彼の地獄人は是の如く河中にて是の如く是の如くに燒煮等せられ、是の如く無量百千年歳に、彼の地獄人は彼の惡河中に極苦惱を受けて爾乃ち脫るゝを得、彼處を脫ると雖も而も復更に淸き陂世有るを見る。池に開敷せる鉢頭摩花有り、彼の地獄人は救を望み歸を望み、安隱の樂を求めて走りて彼處の鉢頭摩林に向ふに、彼の鐵の蓮花は觸るれば利き刀の如く、ハ彼の地獄人の身若し之れに觸れんに、彼の鐵蓮花は削り割き斬り斫き身體は碎壞けて稍や墮ち漸く落つ。閻魔羅人、逼りて速に蓮花林の上に上らしむるに、彼の蓮花林の滿中熾火にして、其の花に鐵葉あり、罪人既に葉に上れば則ち卷合き、彼の地獄人ば其の葉內に在りて熾火に燒然かれ、是の如く無量百千年歳に、惡業を以ての故に彼の中に烏有りて其の眼を食ひ、其の舌根を拔き、其の耳を割截し、其の身を分散す。是の如き烏は、自らの業の果報なり。彼の地獄人は摩訶鉢頭摩處地獄の中に於て常に燒煮を被り、乃至作集せる惡不善の業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、則ち疾病に患み、常に飢え常に渴き、復多く瞋恚あり。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。又彼の比丘、業の果報を知りて次いで復合大地獄を觀察するに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて大盆處と名け、是れ合地獄の第十五處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、合地獄に墮ちて火盆處に生る。殺生・偸盜の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は邪行なりや。實は沙門に非るに自ら沙門と謂ひ、沙門を作し已れるも在家の白衣の身の時を憶念して婦女に習近し、喜笑し舞戲し、

だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さば、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、彼の人則ち[7]雄雌等の眼を得て看視ること正しからず、戒無く貧窮にして、壽命は短促し。作集せる業力の致す所なり。

又彼の比丘業の果報を知りて次いで復合大地獄を觀察するに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて名けて摩訶鉢頭摩處と爲し、是れ合地獄の第十四處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、合地獄に墮ちて摩訶鉢頭摩處に生る。殺生・偸盜の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は邪行なりや。實は沙門に非ざるに自ら沙門と謂ひ、而も戒に缺くる有り。何を以ての故に。梵行を行ふと雖も涅槃を求めず、[8]貝聲の行の如く涅槃の行を笑ひ、是の如く念じて言はく『我が此の梵行は、願ひて天中に生れ、若しは餘の處にして天と相似する處に生れ、我れをして彼の天世界中の天女の衆中に生れしむ』と。是の如き沙門の是の如き梵行は、梵行の願に非ず、乃ち是れ愛の行、生死の因の行、愛の因緣の行、是れ垢染の行にして、是の如き梵行にては、病・老・死に於て憂悲・啼哭き、胸を推ち頭を拍きて憂苦み懊惱む、是の如き等の惡より解脫するを得ず。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處の合大地獄に墮ち、大鉢頭摩地獄處に生れて大苦惱を受く。所謂、河有りて名けて灰波と曰ひ、廣さ五由旬長さ百由旬にして、常に流れて息まず、針孔の處も灰の遍く滿たざる無し。彼の地獄人は彼の河中に在りて極めて堅鞕き第一の苦惱を受け、既に彼の河に墮ちて身則ち分散し、骨は則ち石と爲り、髮は水衣と爲り、肉は則ち泥と爲る。河中の水は熱せる白鑞の汁にして、地獄の罪人は身散るも還り合ひて河中の魚と爲り、彼の河に漂はされ、漂ひ已りて則ち熟し、右廂左廂に炎觜の烏有りて之れを噉食ひ、若しは歸救を望みて走りて彼の河を離るゝに、閻魔羅人は鐵炎の

【七】雄雌等の眼。左右の兩眼が、動物の雄雌の如く不同なることをいふものなるべし。左右不揃の眼。

【八】如二貝聲行一は意義不詳。但しこの一句は次の「笑涅槃」行この句を形容するに相違なしさすれば、涅槃への修行をさすから、貝聲を稽古する者に對する如く笑てだすとの意なるか、或は又貝聲の響き渡るやうな大聲をあげて涅槃への修行者を嘲笑するの謂ひか。

に說く所の如し。何者は邪行なりや。所謂沙門自ら沙門の本俗に在りし時、先に婦女と共に曾て欲を行ひ來りて欲の滋味を得たるを知り、比丘を爲すと雖も心に猶憶念し、衣臥の夢中に彼の婦女を見て、婬欲の味に於て不善に觀察して卽ち共に欲を行ひ、彼の人、覺め已りて心卽ち味に著し、非梵行事を思量し憶念して心に隨喜を生じ、他に向ひ讃めて婬欲の功德を說き、喜笑して心に樂み、樂み行ひ多く作して彼彼を喜樂するなり。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて、惡處なる合大地獄の鉢頭摩處に墮ちて大苦惱を受く。所謂苦とは、彼の地獄處は一切皆鉢頭摩色を作し、[六]鉢頭摩の色と相ひ相似し、彼處は是の如く普く皆赤色にして、赤き光明有り。閻摩羅人は地獄人を取りて鑊中にて之れを煮、若しは鐵の函に置きて鐵杵にて之れを擣く。若し彼處を脫れんに、彼の人遠く鉢頭摩花の淸池中に在るを見、彼の地獄人若しは函と鑊の二苦より脫るゝことを得たらんに、彼の淸池の鉢頭摩花に於て救を望み歸を望み疾走して往き赴きて是の如き心を生ず『我れ彼處に往かば應に安樂を得べし』と。彼の地獄人は飢渴の苦惱あり、鉢頭摩を望みて彼の人是の如く百たび過ぎ走り、千たび過ぎ走るに、走る所の道に鐵の鉤多饒く、其の足を傷破け、旣に足を破られ已りて心を敷きて地に在らば、彼の地の鐵鉤は其の心を傷破し、若し背を地に著くれば鐵鉤背を破り、若し傍を地に著くれば鐵鉤は脇を破り、若しは其の坐する者に鐵鉤上入す。彼の人、是の如く迭に相ひ唱喚び、若しは燒かれ若しは煮られ、飢渴に身乾きて、迭ひ相ひ唱喚・號哭・懊惱す。一切の罪人是の如く齊き心にて鉢頭摩を看るに、閻摩羅人は其の背後に在り、大なる利刀、若しは斧若しは枷を執りて之れを割・斫・打し、彼の地獄人は種種の方便にて救を求め歸を求めて鉢頭摩に到り、到り已りて旣ち上る。涼冷を望むが故なり。彼の鉢頭摩は佉陀羅の如く、大火遍く滿ち、金剛の堅き葉ありて、罪人旣に上るに樹葉は鉤卷く。彼の惡業の人は、惡業を以ての故に合地獄の鉢頭摩處に在り、是の如く無量百千年歲に、惡業を以ての故に煮られて死せず、乃至作集せる惡業未

【六】鉢頭摩(Padma)。又は、波頭摩、鉢曇摩、鉢特摩等。紅蓮華と譯す。蓮華の一種なり。

も、若しは人中同業の處に生れ、妻は良に不貞にして他人と共に通じ、喚びて他人と謀りて共に之れを殺し、若しは官人に告げて誣枉して殺さ令め、若しは惡毒を以て藥に和して投じ、若しは其の睡るを待ちて刀等を以て殺す。是れ彼の作集せる惡業勢力の餘殘の果報にして、作集せる業力未だ盡きずんば脫るゝを得ず、會へば必ず之れを受く。又彼の比丘、業の果報を知りて次いで復合大地獄を觀察するに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて無彼岸受苦惱處と名け、是れ合地獄の第十二處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作し、合地獄に墮ちて無彼岸受苦惱處に生る。殺生・偸盜の業及び果報は前に說く所の如し。何者は邪行なりや。所謂、人有り、婬欲の心を起し、自らの妻を憶念して他の婦女に婬するにて、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處の合大地獄に墮ち、無彼岸受苦惱處に生れて大苦惱を受け、作集せる業力にて是の如きの苦を受く。所謂、彼處に火燒の苦を受け、刀割の苦を受け、熱灰の苦を受け、諸の病苦を受け、是の如くに彼岸は則ち得可からず、安慰する者無し。是の說く所の如くに諸の苦惱を受け、譬諭す可からず、說くが如くに苦を受け、彼の地獄人は自心に誑かされて是の如くに苦を受く。是の如く無量百千年中常に燒炙を被り、若しは煮られ若しは打たれ、乃至作集せる惡不善の業未だ壞せず、未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若しは前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、則ち常に貧窮にして、曠野の惡處、山中の嶮處に夷人の奴と爲り、常に病苦有り。又彼の比丘、業の果報を知りて次いで復合大地獄を觀察するに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて鉢頭摩と名け、是れ合地獄の第十三處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見に、人有り、殺生・偸盜・邪行を作集して合地獄の鉢頭摩處に墮つ。殺生・偸盜の業及び果報は、前

て其の腹中に在り、若しは身焦枯け、形貌醜陋くして、若しは門戸を守り、身體、狀貌は燒けたる樹林の如し。作集せる業力の餘殘の果報なり。又彼の比丘、業の果報を知りて次いで復合大地獄を觀察するに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて彼處を名けて一切根滅と爲し、是れ合地獄の第十一處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作して合地獄に墮ち、一切根滅地獄處に生る。殺生・偸盜の業及び果報は、前に說く所の如し。今邪行を樂み行ひ多く作すと說くは、若し人多欲にして、或ひは口中に於て、若しは糞門中の婦女の根に非ざるにて、彼の婦女に婬するなり。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處の合大地獄に墮ち、一切根滅なる別異の處に生れて大苦惱を受く。所謂、火を以て口に置きて滿た令め、熱せる鐵鉢を以て赤銅の汁を盛り、鐵叉にて口を擘き、打刺しに寬からしめて熱銅の汁を置く。彼處に復熱鐵の黑虫有り、虫の體炎燃え、彼の十一處に皆悉く火燃えて以て炎の鬘を爲し、中に在りて之れを燒き、燒かると雖も猶活き、是の如く常に燒かる。熱炎の鐵蟻其の眼を唼食み、熱せる白鑞の汁を耳に置きて滿た令め、炎熱の利刀其の鼻を割截し、復利刀を以て次いで其の舌を割き、熱せる利刀を雨らして其の身を燒割し、一切の諸の根に大苦惱を受け、極苦惱を得、不樂の報を得、彼の地獄人は異の相似する無く、類を譬ふ可からず。今小分を說くに、譬へば燈を以て況を日に取るが如し。是の如く地獄の苦も亦爾く、此の類有るに非ず。天上の樂の勝れたるも譬諭有ること無く、彼の地獄人の受くる地獄の苦も亦復是の如く、譬諭有ること無し。何を以ての故に、天上の樂勝れ、地獄の苦は重ければなり。是の如き苦樂は、今小分を說くに、彼の地獄處に受くる所の苦惱は、堅鞕くして尤も重し。乃至作集せる惡苦善の業今だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざる

內に熱せる白鑞滿ち、外より大火を以て燒かれ、極めて燒けて大苦を受くるは、地獄の惡業の人なり。

若し業は苦果を生じ、惡苦惱の報を受け、彼れ三界中に於て、譬喩を得可からず。

三種の業にて三果あり、三界中に於て生れ、三の過なる三心起らば、三處に苦報熟す。

彼れ是の如き業報にて、三界中に於て生る、因緣和合して作し、是の如くにして異法起る。

心の如く是の如くに行ひ、是の如く是の如くに轉ず、善人は善行を行ひ、惡人は惡業を造る。

心は自在に業を作し、業は自在に復有り、此の心業の起る所、是の如くに愛に誑さる。

惡心にて業惡を作すに、彼の人來りて此れに至る、若し地獄に在りて煮らるゝは、彼の人愛に誑かされてなり。

異なる人の惡を作して、異なる人の苦報を受くるに非ず、自らの業にて自ら果を得るにて、衆生は皆是の如し。

汝の自心に作す所にして、一切は是の如くに誑されて、今大火の爲に燒かるゝに、何故に爾く呻喚するや。

閻魔羅人は是の如くに地獄人を責疏て言はく『汝自ら業を作し、今は自ら受けて脫るゝを得可からず。是の如くに一切は業果に縛られ、彼の一切の業にて此の中に報を受く』と。閻魔羅人は是の如くに之れを責め、彼の地獄人を、閻魔羅人は是の如く無量百千年中、是の如くに地獄の罪人を燒煮き、乃至作集れる惡不善の業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼、畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、常に癖病有り

て空に在りて燒き、飛虫を燒くが如く、是の如く無量百千年歳に大苦惱を受けて而も死せず、乃至惡業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し彼の殺生・偸盗・邪行を樂み行ひ多く作せる惡業を受け盡さんに、彼の地獄處より爾乃ち脱るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中の同業の處に生れ、一切の身分は皆悉く爛れて臭く、惡癩の病を得、若しは癡病を得、多く怨對有り、恒常に貧窮して、惡國土に生る。彼の作集せし業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて次いで復合大地獄を觀察するに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて涙火出と名け、是れ合地獄の第十の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盗・邪行を樂み行ひ多く作すに、合地獄の涙火出處に墮つ。殺生・偸盗の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は邪行なりや。若しは比丘尼の先に餘人と共に不淨の行を行ひて禁戒を毀破れるに、若し人重ねて彼の比丘尼を犯すにて、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる合大地獄の涙火出處に墮ち、大苦惱を受く。所謂、彼處に相似して苦を受け、彼の苦は堅鞕し。不愛の業を作して、所謂、大火の普き炎に燒かれ、眼より火の涙を出し、彼の涙は是れ火にして、卽ち其の身を燒き、彼の地獄人は是の如き等の種種の苦惱を受け、又復更に餘の諸の苦惱を受く。閻魔羅人は其の眼瞼を劈き、佉陀羅炭を眼に置きて滿たしめ、其の眼骨を劈きて猶し竹を劈くが如く、彼の地獄處に是の如き惡畏あり。復鐵の鉤・鐵の杵・鐵の枷を以て鉤き割き打ち築めて身を分散せしめ、熱せる鐵鉗を以て其の糞門を劈き、洋たる熱白鑞を之れに內れて滿たしめ、是の如く內の燒くるに、復大火外より其の身を燒き、內外二種に是の如く極めて燒かれて、第一の苦の急惡なる苦惱を受け、是の如き等の無量種種の衆苦を受けて具足す。閻魔羅人偈を說きて責めて言はく。

【五】佉陀羅(Khadira)。又は佉達羅、佉提迦、軻地羅、軻梨羅等。山木、紫檀木、毒樹刺等と譯す。木の名なり。

『汝來れ汝來れ、是の如き山の上に多く冷い林・潤膩へる林有り、今共に往く可し』と。閻魔羅人は地獄人を打ち、上りて刀石を雨らし、罪人畏るゝが故に走りて彼の山に赴きて救免を得んことを望み、主を望み歸するを望みて、是の如き罪人の既に彼の山に到るに、而も彼の山上に熱炎遍く滿ち、多く炎の烏有りて、鐵嘴甚だ利し。彼の地獄人の是の如くに見已るに、彼の烏は疾く來りて地獄人に向ひ、彼の地獄人に、炎烏の來りて其の頭を破る者有り、復烏の來りて其の腦を取る者有り、復烏の來りて其の眼を取る者有り、復烏の來りて其の鼻を取る者有り、復烏の來りて其の頬を取る者有り、叉烏の來りて其の皮を取る者有り、復烏の來りて其の脇を取る者有り、復烏の來りて其の足を取る者有り、復烏の來りて其の舌を取る者有り、叉烏の來りて其の項を取る者有り、叉烏の來りて頭皮を取る者有り、復烏の來りて其の喉を取る者有り、復烏の來りて其の心を取る者有り、復烏の來りて其の肺を取る者有り、復烏の來りて、小、大腸を取る者有り、復烏の來りて其の腹皮を取る者有り、復烏の來りて其の臍の下なる陰密の處を取る者有り、復烏の來りて其の髀を取る者有り、叉烏の來りて其の踹を取る者有り、復烏の來りて足跟の皮を取る者有り、復烏の來りて足下の皮を取る者有り、復烏の來りて其の足指を取る者有り、復烏の來りて分分に之れを食ふ有り、復烏の來りて分分に肋を取る有り、復烏の來りて脇骨を取る者有り、復烏の來りて唯其の手の一廂の骨を取る有り、復烏の來りて一切の身分に具足せるを取る者有り、叉烏の來りて其の髓を取る者有り、是の如くに衆烏は地獄人を食ひ、分分に皆食ひ、罪業の力の故に食はれ已りて還りて生く。彼の炎烏と閻魔羅人に於て怖畏を生ずるが故に、烏丘山中の處處に馳走し、救を望み歸するを望みて烏丘山に上る。彼の山に上り已るに、惡業を以ての故に炎火遍く滿ち、來りて其の身を覆ひ、是の如く無量百千年歳に燒かれて復生く。是れ彼の作集せる惡業の力の故に、大苦惱を受くるなり。若しは復上りて烏丘山頂に到るに、山頭に復火炎有り、極めて高く、五千由旬にして、彼の炎は吹き擧がり

在ると雖も力を得ず、生れて常に貧窮にして資生乏少しく、又長命ならず。是れ彼の邪行なる惡業の勢力にて、人中に在りて受くる餘殘の果報なり。又彼の比丘、業の果報を知りて次いで復合大地獄を觀察するに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて何何奚と名け、是れ合地獄第九の別處なり。是れ何の業報なりや。作集の業を普遍く究竟めて合地獄の何何奚處に墮つ。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偸盜・邪行を樂み行ひ多く作すに、合地獄の何何奚處に墮つ。殺生・偸盜の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は邪行なりや。邊地の夷人は姉妹等の行ふ應からざる處に於て、而も婬欲を行ふ。彼の國法は爾くして、生處過惡なり。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて合地獄の何何奚處に生れ、大苦惱を受く。所謂、彼處の地獄中にて常に燒煮かれ、閻魔羅人に搗打たれ、苦に毒はれて叫喚けび、其の聲は遍く五千由旬に滿る。彼の地獄人は未だ地獄に到らずして、中有[三]中に在りて彼の叫聲を聞き、叫聲の極惡にして聞くを得可からざるを、彼れ顚倒の故に彼の啼哭を聞きて則ち是れ歌聲、拍手等の聲、種種の話聲なりとし、惡業の力の故に、之れを聞きて愛樂して是の如き心を生ず『我れをして彼の是の如き聲の處に到らしめん』と。是の如くに念じ已るに、速かに彼處に生る。何の因緣有りや。取の因緣有り、彼の中有中に何の處何の處を發心して悕ひ取るに、則ち彼れに生れ、心に[四]彼れを取り已らば、則ち彼處に生る。既に彼處に生るゝに、即ち生るゝ時に於て地獄の苦を得、即ち地獄の自體の惡聲を聞き、急惡の苦惱ありて、異の相似せる無く、譬喩す可からず、大苦惱を受け、既に惡聲を聞き、心重くして破壞す。大苦惱を受くとは、所謂、鐵山を烏丘山と名け、其の山は炎燃え、其の炎極めて高く、五千由旬にして、虛空界に在り、彼れに鐵樹有り、樹に鐵烏有り、烏の身は炎然えて彼の樹上に滿ち、彼の山に火然えて間に空處無く、惡業の力の故に常に炎火有り、熾燃りて滅せず。惡業を以ての故に蓮花林の遍く彼の山に滿つるを見、彼の地獄人は既に蓮花を見て迭互に相ひ喚びて是の言を作す

【三】中有。四生の一にして、死後未だ次いで生るゝに至らざる間を云ひ、眼に見る能はざれども、微細の色を以て成れる形量有りとせらる。

【四】宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依り、彼の下の心の字を除けり。

卷の第七

地獄品之三

又彼の比丘、業の果報を知りて次いで復、合大地獄を觀察するに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて彼處を名けて朱誅朱誅と爲し、是れ合地獄第八の別處なり。殺生・偷盜・邪行を樂み行ひ多く作すに、合地獄の朱誅朱誅に墮つ。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若し人、殺生・偷盜・邪行を樂み行ひ多く作さば、合地獄に墮ちて朱誅朱誅地獄處に生る。殺生・偷盜の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は邪行なりや。所謂、人有りて、若しは羊若しは驢に、人の女無きを以ての故に之れに婬し、彼の人、佛に於て敬重を生ぜずして、或ひは[一]浮圖に在り、或ひは浮圖に近く。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處の合大地獄に墮ち、朱誅朱誅地獄處に生れて大苦惱を受く。所謂、鐵の蟻の常に啑食まるゝ所にして、一切の身分に大苦惱を受け、彼の地獄の火其の腹の內に滿ちて、彼の地獄人は內外を燒煮かれ、自種の惡業にて此の惡報を得。是の如き無量百千年歲に、常に惡虫の[二]朱誅朱誅有り、地獄中に在りて其の肉を噉食ひ、復其血を飲み、既に血を飲み已りて次いで其の筋を斷ち、既に其の筋を斷ち已りて次いで其の骨を破り、既に骨を破り已りて次いで其の髓を飲み、既に髓を飲み已りて大・小腸を破る。彼の地獄人は是の如くに燒け已り、是の如くに炙られ已り、是の如くに食はれ已りて唱喚び、號哭き種種に浪語し、悲號・大哭し、是の如くに乃至愛樂す可からず、不善の惡業にて食はれて未だ盡きず、是の如く無量百千年歲に常に燒煮かれ、炙熟られ食はれ、乃至惡業未だ壞せず爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れて多く怨對有り、王舍に

【一】浮圖は窣堵波(stūpa)。即ち塔の舊譯(音)なり。舊譯家が浮圖を佛陀(Buddha)の音譯とせるは蓋し誤りならん。この經文は一つのよい證據といふべきなり。

【二】朱誅朱誅。この原音は不明なり。されど、虫の啑む音を指すならん。

若しは自ら行ひ、若しは自ら取り已りて他人に給與へ、若しは道に依り、若しは道に依らずして行ふ。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處の合大地獄に墮ち、忍苦處に生れて大苦惱を受く。所謂、苦とは、閻魔羅人之れを懸けて樹に在らしめ、頭面は下に在り、足は上に在り、下に燃えたる大火ありて一切の身を燒き、面從り起り、彼の地獄の火は熱勢甚だ熾なり。彼の罪人の身は危脆く坏軟かにて、眼は最も軟かきが故に燒き盡されて餘無く、彼の人是の如くに極苦惱を受け、堅鞕して耐え叵し。彼の人是の如くは地獄中に生れ、彼の人是の如くに大苦惱を受け、唱聲にて吼喚び、呻號き涕哭いて、唱喚して口を開くに、彼の地獄の火は口從り入り、火既に入り已りて先ず其の心を燒き、既に心を燒き已りて次いで其の肺を燒き、是の如くに次第して生・熟藏・根及び糞門に至り、是の如く燒き已りて次いで其の足を燒き、既にして是の如き燒を被る苦を受け已るに、復烏有りて來りて其の身を噉食ひ、彼れ是の如き二種の大苦を受け、唱聲にて吼喚べは、燒けて止まず。是の如く無量百千歲に地獄中に於て極重の苦惱を受け、是の如き苦惱は異の相似せる無く、是の如く無量百千年歲にして、乃至惡業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きざれば、一切の時に於て苦を與へらはて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、設ひ好き婦の端正雙無きを得るも、則ち官軍の爲に破壞られ、劫奪はれ、惡業の力の故に唱喚び號哭き懊惱みて心碎く、彼の人是の如く地獄と人中なる二時・二處に大苦惱を受け、唱喚・號哭・懊惱等の苦あり。邪行の業因の餘殘の果報なり。

すや不や。彼れ見聞して知るに、復異處有りて多苦惱と名け、是れ合地獄第六の別處なり。衆生は何の業にて彼處に至るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作すに、合地獄多苦惱處に墮つ。殺生・偸盜の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は邪行なりや。謂はく、男にして男に行ふにて、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる合大地獄の多苦惱處に墮ち、大苦惱を受け、作集れる業力にて、地獄中に於て本の男子を見る。熱炎の頭髮あり、一切の身體皆悉く熱炎にして、其の身堅鞕きこと猶し金剛の如く、來りて其の身を抱き、既にして抱かれ已らば一切の身命皆悉く解散りて猶し沙摶の如く、死し已りて復活く。本の不善なる惡業の因を以ての故に、彼の炎人に於て極めて怖畏を生じ、走避りて去りて嶮岸より墮ち、下りて未だ地に至らずして空中に在るに、炎嘴の烏有りて分分に攫斲みて芥子の如からしめ、尋いで復還り合して然る後地に到り、既に地に到り已るに、彼の地に復炎口の野干有りて之れを噉食ひて唯骨のみ在り、復還りて肉を生じ、既に肉を生じ已るに、閻摩羅人は取りて炎鼎に置きて復之れを煮る。是の如く無量百千歲に之れを煮之れを食ひ、之れを分ち之れを散らし、乃至惡業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、多苦處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れて無量の妻を失ひ、一の妻をも得ず、究竟是の如く、設ひ自ら妻有るも、則ち之れを厭離うて他人を喜樂す。邪行の業因の餘殘の果報なり。又彼の比丘、業の果報を知り、次いで復合大地獄を觀察するに、當に更に異なる處有るべしと爲すや不や。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて忍苦處と名け、是れ合地獄第七の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作すに、合地獄の忍苦處に墮つ。殺生・偸盜の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は邪行なりや。所謂、人有り、他の軍國を破りて婦女を得已り、

業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中に生れて則ち兒息無く、不淨有りと雖も種子を成ぜず、世人皆此の人は不男なりと言ひ、一切に嫌賤せらる。是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知り、次いで復合大地獄を觀察するに、當に更に異なる處有るべしと爲すや不や。彼、見聞して知るに、復異なる處有り名けて團處と爲す。[一五]急團に相似たり。是れ合地獄第五の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作すに、合地獄に墮ちて團處に生る。殺生・偸盜の業及び果報は、前に說く所の如し。何者か邪行なりや。所謂、人有り、若しは牸牛若しは草馬等の婬道の處を見已りて心に分別を生じ、此の如き處は人の婦女と異なること有る可からずと是の如くに念じ已り、卽便ち人の婦女の想を生じて婬欲を行ふにて、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處の合大地獄に墮ち、團處に生れて大苦惱を受く。所謂、彼の若しは牛若しは馬を見、惡業の因の故に地獄中に見て、自心に分別して前に人の婦女の想を憶念せしが如く、若しは本の牸牛若しは草馬を見已りて卽ち婦女の想を生じ、欲心熾盛にして、卽ち走りて是の如き牛馬に向ふに、鐵の炎火有りて牛馬中に滿ち、彼の人既に牛馬の根門に近くに、惡業の因の故に彼の根門に入り、卽ち其の腹に入り、中に滿つる熱火ありて彼處に苦を受け、乃ち無量百千年中を經て常に燒燃かれ、其の身は熟爛れて聲を出す能はず、彼の腹中の闇處に於て苦に逼られ、乃至惡業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きざれば、一切時に於て常に燒燃かれ、若し前世の過去久遠に善業有りて熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中の同業の處に生れ、則ち禮無く仁に非ざる國に生れて、己の妻を以て他をして侵近さしめて妬忌を生ぜず。邪行の業因の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知りて次いて復合大地獄を觀察するに、當に更に異なる處有るべしと爲

[一五] 急團。意味曖昧なれども、恐く苦惱の急迫するかたまりの意ならん。

するに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて惡見處と名け、是れ合地獄第四の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有りて、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作すに、合地業の惡見處に墮つ。殺生・偸盜の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は邪行なりや。所謂、人有り、他の兒子を取りて强逼て邪を行ひ、自ら既に力多くして、彼れをして渧哭しむるなり。彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる合大地獄に墮ち、惡見處に生れて大苦惱を受く。所謂、自ら己の兒子を見、惡業を以ての故に自らの兒子の地獄中に在るを見、彼の兒子に於て重愛の心を生ずること、本の人中の如し。是の如く見已るに、閻魔羅人は若しは鐵の杖を以て、若しは鐵の錐を以て其の〔一四〕陰中を刺し、若しは鐵の鉤を以て其の陰中に釘つ。既に自子の是の如きの苦を見て自ら大苦を生じ、愛心の悲絕しく、堪忍す可からず、此の愛心の(苦に比ぶれば)火燒の苦は、十六分中其の一に及ばず。彼の人是の如くに心の苦に逼られ已りて、復身の苦を受く。所謂、彼處の閻魔羅人に執持せられて頭面は下に在り、熱炎の鐵鉢に熱銅の汁を盛りて其の糞門に灌ぐに、其の身內に入りて其の熟藏を燒き、熟藏を燒き已りて次いで大腸を燒き、次いで小腸を燒き、小腸を燒き已りて次いで其の胃を燒き、既に胃を燒き已りて、是の如く次第して次いで其の咽を燒き、既に咽を燒き已りて次いで其の喉を燒き、既に其の噉を燒き已りて次いで舌根を燒き、舌根を燒き已りて次いで其の舌を燒き、既に舌を燒き已りて次いで其の齗を燒き、既に齗を燒き已りて次いで其の頭を燒き、既に頭を燒き已りて次いで其の腦を燒き、是の如く燒き已りて下に在りて出ず。彼の邪行の人は是の如き苦を受け、是の如くに無量百千年中、業化を以ての故に自ら兒子を見て自身の心に苦み、具に是の如き身心の二苦を受け、是の如く無量百千年中常に大苦を受けて、乃至惡業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若しは前世の過去久遠に於て善

【一四】陰。こゝでは男女根のこと。

其の口中に瀉ぐ。銅汁の熱炎は其の脣を燒燃き、次いで其の舌を燒き、旣に舌を燒き已りて次いで其の眼を燒き、是の如くに咽を燒き、次いで其の心を燒き、次いで其の肚を燒き、是の如くに乃至糞門にして、下從り出ず。是の如くに邪行を樂み行ひ多く作さんに、惡業の果報にて地獄に在り、是の如く是の如くに種種に苦を受け、乃ち無量百千億歲を經て常に燒煮を被り、乃至惡業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きざれば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若しは前世の過去久遠に於て有りし善業熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中同業の處に生れ、口中常に臭くして爛れたる氣臭の如く、是の如くに熏じて他の一切の惡む所にして、是れ彼の惡業の餘殘の果報なり。

又彼の比丘、業の果報を知り、次いで復合大地獄を觀察するに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて、彼處を名けて脈脈斷處と爲し、是れ合地獄第三の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作すに、合地獄の脈脈斷處に墮つ。殺生・偸盜の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は邪行なりや。謂はく、婦女の非道に於て婬を行ひ、彼れ隨順はざるに自らの力にて强逼るなり。彼の人、是の惡業の因緣を以て身壞れ命終りて、惡處なる合大地獄の脈脈斷處に墮ちて大苦惱を受く。所謂、熱筒に熱せる銅汁を盛り、口に置きて滿た令むるに、唱聲にて吼喚ひて是の如き言を作す『我れ今孤獨なり』と。是の如く無量百千年歲にして、乃至惡業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きざれば、一切時に於て苦を與へられて止まず、若しは惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若し前世の過去久遠に於て善業有りて熟すれば、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中に生れて得し所の妻婦は他人を貪愛し、彼の人之れを見て遮障る能はず。是れ彼の惡業の餘殘の果報にして、彼の作集せし業の果報は失はず、故の猶くに受く須し、又彼の比丘、業の果報を知り、次いで復合大地獄を觀察

謂殺生・偸盗・邪行を樂み行ひ多く作さんに、彼れ決定して合大地獄を受け、苦惱處を受け、衆生は何の業にて初の大量受苦惱處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、行ふ應らざるに婬れ、不正に觀察し、樂みて邪欲を行ぜんに、彼の大量受苦惱處地獄の中に生れて大苦惱を受く。所謂、炎熱の鉾、利き鐵鑽は刺して穿徹ら令め、彼の鐵鑽を以て下從り之れを刺すに背上より出で、又復之れを刺すに腹上より出で、又復之れを刺すに腰中より出で、又復之れを刺すに肩上より出で、又復之れを刺すに脇從り出で、又復之れを刺すに咽從り出で、又復之れを刺すに口從り出で、復髑髏を破りて其れ從り出で、又復之れを刺すに耳從り出で、彼の地獄人は是の如くに鑽を被り、一切の身分皆悉く穿破れて大苦惱を受け、若しは燒き若しは煮られ、彼れ是の如き諸の苦惱を受け已りて又復極重の苦惱を與へらる。所謂、復熱炎の鐵鉗を以て挾みて其の卵を拔かれ、若しは鐵の鷲鳥の挽きて其の卵を拔きて之れを食ふ者あり、是の如く乃至作業せる所の業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得、若しは前世の過去久遠に於て有りし善業熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、人中同業の處に生れて第三の人と爲る。謂はく、內官等にして、彼の不善の業の餘殘の果報なり。又彼の比丘、業の果報を知り、次いで復合大地獄を觀察するに、復何の處有りや。彼れ見聞して知るに、復異なる處有りて割刳處と名け、是れ合地獄第二の別處なり。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺・盜・邪行を樂み行ひ多く作すに、合地獄に墮ちて割刳處に生る。殺生・偸盜の業及び果報は、前に說く所の如し。何者は邪行なりや。謂はく、婦女に於て行ふ應からざる處なる口中に婬を行ひ、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて、惡處の合大地獄に墮ちて割刳處に生れ、大苦惱を受く。所謂苦とは、閻魔羅人熱鐵の釘を以て其の口中に釘ちて頭從り出でしめ、出で已れば急に拔き、又其の口に釘ちて耳中より出でしめ、復鐵鉢を以て熱銅の汁を盛り、

汝獨り地獄にて燒かれ、惡業の食ふ所と爲るも、妻子・兄弟等も親眷も救ふ能はず。
若しは癡の誑す所と爲り、而も善業を作さざれば、後則ち樂を得ず、汝は今徒らに悔恨す。
若しは欲、瞋に隨順せんに、癡は心を第一に誑し、妻子の樂を爲すが故に、一切下に向ひて行く。

是の如く彼處の閻魔羅人は是の如くに多多く責め、是の如く是の如く之れを責疏めて言はく、『若し汝自身に惡業を造作せしに、今誰れをして是の如き食を食は令めんと欲するや。若し自ら善を作さば還りて自ら善を得、若し不善を作さば自ら不善を得、作さざれば得ず、作さば則ち失はず。汝本業を作して、今此の報を得たるなり』と。彼の地獄人は是の如く久しく合大地獄に在り、乃ち無量百千年中を經て常に燒煮かれ、乃至惡業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、是の如き殺生・偸盜・邪行を樂み行ひ多く作して得たる所の果報にて、一切時に於て苦を與へられて止まず、若し惡業盡きんに、彼の地獄中より乃爾ち脫るるを得、若しは前世の過去久遠に於て有りし善業熟さんに、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中に生れて貧窮にして命短く、不劣の妻を得、設ひ好き者を得るも異なる人と共に通じ、若しは或ひは妻無く、凡鄙しき身を得て他の使ふ所と爲り、彼の業勢力の餘殘の果報にて是の如き等を得、是の如き惡業にて能く人を誑惑して地獄に入ら令む。又彼の比丘、次いで復合大地獄十六の別處を觀察す。何等は十六なりや。一を大量受苦煩惱處と名け、二を割刳處と名け、三を脈脈斷處と名け、四を惡見處と名け、五を團處と名け、六を多苦惱處と名け、七を忍苦處と名け、八を朱誅朱誅處と名け、九を何何奚處と名け、十を淚火出處と名け、十一を一切根滅處と名け、十二を無彼岸受苦處と名け、十三を鉢頭摩處と名け、十四を大鉢頭摩處と名け、十五を火盆處と名け、十六を鐵火末處と名け、合大地獄に是の如き等の十六の別處有り。衆生は何の業にて彼處に生るるや。彼の比丘、思惟して觀察するに、若し人、三種の惡不善の業なる、所

今種種の佉陀尼食・蒲闍尼食有り、好き敷具有り』と。前に說く所の如し。彼の地獄人の是の如くに唱喚するに、餘の地獄人は旣に聲を聞き已りて皆共に馳走し、救有りと謂ひ、歸す可き有りと謂ひ、一處に和集して迭に相ひ問ひて言はく『我れ今當に何處に於て樂を得可く、何れか救ひ、何れに歸せん』と。復異なる人有り、喚ばざるに來り、之れを指示して言はく『汝今此の無邊の彼の岸なる大河の彼岸を看よ。是の如くに多く佉陀尼食・蒲闍尼食・敷具・樹林・蔭影の淸凉なる有り』と。前に說く所の如し。彼の地獄人は是の如くに一切迭に相ひ和集し、倶に走りて往いて無邊の彼の岸なる大河の彼岸に赴くに、是の如き河中は熱せる白鑞の汁、熱せる鉛、錫の汁の沫其の上を覆へり。彼の地獄人は旣に是の如くに走りて墮ちて彼の河に在り、旣に彼れに墮ち已るに、其の身生酥の塊の如き者有り、消洋る者有り、尖嘴の烏に啖はるゝ者有り、熱尖の口の惡魚に食はるる者有り、身分散り消洋ける者有り、彼の地獄人は彼の河中に墮ち、是の如くに一切は苦を受く、是れ彼の惡業の因緣勢力の作集して致す所にして、是の如くに苦を受け、彼の地獄人は是の如くに燒煮かれ熟爛れ分散りて消洋せる乃至作集せる惡業の破壞れて氣無く、腐爛せんに、彼の地獄中より爾乃ち脫るゝことを得。閻魔羅人は罪人を責疏め、偈を說きて言はく。

妻子の羂に縛られ、將ゐられて地獄の舍に來れり。　何が故に心の誑す所と爲りて、彼の惡業を造作せしと。

汝本妻子・知識・親眷等の爲に、諸の惡業を造作せり、是れ黠慧き人に非ず。

汝は實に自らを愛せずして、今地獄の處に到れり、何が故に兒子の爲に、惡業を作して此れに到れるや。

若しは妻子の爲に誑され、諸の惡業を造作し、後に心に悔を生ぜざれば、彼の人地獄に入らん。

樹頭に在り、彼の人見已りて復樹に上ること、前に說く所の如し。彼の業力の故に、是の如く無量百千年歲、無量百千億歲に自心に誑されて、彼の地獄中に是の如く轉行く、彼の地獄人の是の如くに燒を被るは、何の因の故に燒かるゝや。邪欲を因と爲す。彼の人是の如くに猶欲を捨てずして、無始より來心是の如くに轉行き、地獄・餓鬼・畜生に在り、衆生の心は調順す可からずして、地獄中に在るも猶故是の如し。當に知る可し心は信ず可からざるなり。

又復是の如き合大地獄は、彼の中に山有りて名けて鷲遍と爲す。彼の地獄人、身を燒かれて飢え渴き、走りて彼の山に赴く、彼の山中に處處に皆炎嘴の鐵鷲有り、壯身・大肚にして、而も彼の鐵鷲の身內・肚中に地獄人有り、名けて火人と爲す。彼の地獄人は救を望み歸を望むが故に彼の山に赴き、既に彼の山に到るに、彼の鐵鷲鳥は先ず其の頭を破り、髑髏の骨を開きて其の腦を取り、復其の眼を挑る。彼の地獄人は號哭き唱喚ぶも、然も救ふ者無し。既に其の頭を破り、腦を飲み盡くし已りて頭を異處に擲ちて、彼の地獄人に頭無く眼無く、復走りて闇冥地獄に向ふに、罪業の力の故に復鐵鷲有り、其の身極めて大きく、彼の鷲の腹中に悉く火人有り、來りに罪人に向ひ、到りては卽ち之れを呑み、彼の地獄人は鷲の腹中に入りて、卽ち火人に爲る。本他の妻を侵せし罪業の致す所なり。

彼の殺生なる因を樂み行ひ多く作し、乃ち無量百千年歲を經て、常に燒燃を被りて復死せず、彼の邪行の因を樂み行ひ多く作し、則ち婦女を見て刀葉林在り、彼の偷盜の因を樂み行ひ多く作すに、異なる地獄に入りて一處に在り、彼處は是れ河にして、其の河を名けて無邊彼岸と曰ひ、熱沸せる銅汁波の河中に滿つ。地獄の罪人、河の彼岸を見るに、多く種種の淨食の[二二]佉陀尼食、[二三]蒲闍尼食有り、好き敷具有り、好き樹林有り、林に遂影有り、復陂地・河流・淸水有り。彼の地獄人は是の如くに見已り、卽ち大聲を發して迭に相ひ招喚し、是の言を作さく、『汝來れ、汝來れ、我れ今樂を得。

【二二】佉陀尼(Khādaniya)。又佉闍尼珂但尼に作り、嚼食と譯す。咬嚼して食ふべき食。を五種あり。
【二三】蒲闍尼(Bhojaniya)。又蒲膳尼に作り、正食と譯す。飯、肉等の五種の含噉すべき正食なり。

は彼の樹頭に好き端正に嚴飾れる婦女有るを見、是の如くに見已りて極めて愛染を生ず。是の如き婦女は妙なる鬘にて莊嚴り、末香を身に坌き、塗香を身に塗り、是の如く身形は第一に嚴飾られ、身極めて柔軟にして、指の爪は纖く長く、熙怡として笑を含み、種種の寶を以て其の身を莊嚴り、種種に媚びんと欲し、一切愚癡の凡夫は見れば則ち心牽かる。彼の地獄人、既に是の如き端正なる婦女の樹上に在るを見已りて、是の如き心を生ず『是れ我が人中に本見し所の者なり。是れ我が本の時先に有せし所の者なり』と。彼の地獄人は自業に誑さるゝが故に是の如くに見、是の如くに見已りて卽ち彼の樹に上るに、樹葉の刀の如きは其の身の肉を割き、既に肉を割き已りて次いで其の筋を割き、既に其の筋を割き已りて次いで其の骨を割き、既に骨を已りて次いで其の髓を劈き、是の如く一切の處を劈割き已りて、乃ち樹に上ることを得。婦女に近かんと欲し、心轉た專念して自心に誑され、彼の樹上に於て是の如くに苦を受け、既にして樹に上り已りて彼の婦女を見るに復地に在り。彼の人見已るに、然り彼の婦女は欲に媚びたる眼を以て彼の人を上看げ、美聲の語にて喚び、先ず甜き語を以て是の如き言を作す『汝を念ふ因緣にて我れ此處に到れり。汝今何が故に來りて我れに近かざるや。何ぞ我れを抱かざるや』と。是の如き地獄の業の化して作せる所を罪人は見已り、欲心熾盛にして、刀葉の樹頭より次第に復下る。彼の人既に下るに刀の葉は上を向き、炎火熾燃り、利きこと剃刀の如く、是の如き利き刀は先づ其の肉を割き、次いで其の筋を斷ち、次いで其の骨を割き、次いで其の脈を割き、次いで其の髓を割き、遍く體に瘡を作す。彼の地獄人は是の如くに割かれ、是の如くに劈がれ、脈脈斷ち已れるも、彼の婦女を看ては欲愛心を燒き、既に是の如く看るに、炎嘴の鷲鳥卽ち其の眼を啄み、火燃の刀葉は先づ其の耳を割き、是の如く割を被りて唱聲にて叫喚べば、刀葉炎燃えて次いで其の舌を割き、次いで其の鼻を割き、是の如くに遍く一切の身分を割くも、欲愛心を牽きて是の如くに地に到る。既にして地に到り已るに、彼の婦女は復

地獄人は、或ひは身の日の初めて出ずるが如き者有り、身沈没して重き石の如き者有り、河岸に著きて沒入せざる者有り、或ひは罪人の、身は水衣の如き有り、炎を爲す嘴の鐵鷲有りて、之れを食ひて魚を食ふ者の如く、或ひは身洋ひ、其の身は猶し生酥の塊の如き者有り、鐵摶を以て打たるる者有り、或ひは身破れ、百千分の數々にして、沙を搏むが如き者有り、河中に在りて洋銅の如き者有り、熱灰を以て其の身を燒かるゝ者有り、炎鉗を以て其の身を鉗み已りて熱灰中に置き、復鐵鉗を以て連ねて劖刺るゝ者有り、其の身を擘かれて猶し細き縷の如く、挽きて打たるゝ者有り、其の頭を挽き、頭を下に在らしめ、上に在りて打たるゝ者有り、鑊中に置き、湯火にて煮られて熱豆の如き者有り、鑊中に在りて迭互に上下し、速に翻覆する者有り、置かれて鑊に在りて偏に[一〇]一廂に近づき、手を擧げて天に向ひて號哭ぶ者有り、共に相ひ近きて號哭ぶ者有り、久しく大苦惱を受けて主無く救無く、彼の中に多く炎嘴の鷲鳥・野干・狗等有りて熱地の上に在り、殺さずして食ひ、屏處に苦を受けて各相ひ見ず、種種の因緣にて種種に苦を受け、彼れ無量百千種の苦を受く。自らの心に誑され、十不善なる本の邪行の得る所にして、殺生に緣りて得、偸盜に緣りて得たるなり。

又復是の如く、閻魔羅人の鐵の杵を以て彼の罪人を築くに、罪人は怖れて走り、四向を顧望めども歸救有るを望み、是の如き言を作す、『何んぞ我れを救ふや。我れ何れの所にか歸らん』と。四向に走り望み、是の如く行き已るに、炎杵築き已りて炎燃えたる河に置き、若しは炎燃えたる樹、山の巖石の間、窟穴等の中の極めて嶮惡なる處に種種の苦を受く。謂はく、樹頭に著け、復推して墮ちて鐵鉤の地に在ら令め、彼の身に瘡裂くるに、是の如きは千たび到り、若しは百千たび到り、又復是の如く。

閻魔羅人は彼の地獄人を取りて刀葉林に置く。刀の葉甚だ多く、火炎熾燃んなり。而も此の罪人

【一〇】廂。わたどの又はひさし。こゝでは鑊の一端をいふか。

三には縛作なり。言ふ所の作とは初に沙門を作せるにて、縛作と言ふは後の相續せる縛、不作と言ふは乃至阿羅漢果を獲得するなり。又復作とは、沙門を作し已りて沙門の行を作し、又縛作とは、此處より退き已りて異處に於て生るゝなり。又復三種あり。一には禪縛、二には非禪の縛、三には無報の縛なり。彼の禪縛とは、初禪地、三禪縛地の如きにて、第三禪に非ず、第四禪に非ず、非禪の縛とは施、戒等を謂ひ、無報の縛とは、謂はく、阿羅漢の諸漏既に盡き、決定して業を受けて果報を得ざるなり。彼の比丘、世間の海を觀るに、業網に繫縛されて迭互に生るゝ行業の果報にして作者有るに非ず、受者有るに非ず、無因緣に非ず、唯業力のみ有り。彼の比丘、是の如くに思惟して魔軍を破壞し、善法を修集し、更に復勝上に合地獄の業因と果報を觀る。云何んが衆生、根本合大地獄に生るゝや。彼れ見るに、人有り、殺盜・邪行を樂み行ひて多く作し、是の如き業を普遍く究竟め、樂み行ひて多く作すに、是の業にて則ち根本地獄幷及に別處に生れ、彼の人、是の根本地獄に於て大苦惱を受く。業を作すこと前の如く、若し人、偸盜及び邪行を作さんに、是の人を皆邪行の人と名く。云何んが邪と名くるや。是の如くに異りて作し、復異る分別あるなり。若し人、邪に尊者の妻に行はんに、彼の人、合大地獄に生れて大苦惱を受く。所謂苦とは、鐵炎の嘴の鷲其の腸を取り已りて、掛けて樹頭に在りて之れを噉食ひ、彼れに大河有りて鐃鐵鉤と名け、彼れに鐵鉤有り、皆悉く火燃え、閻魔羅人の地獄人を執りて彼の河中に擲つに、墮ちて鐵鉤の上に在り。又彼の河中に熱炎の刀有り、罪人は彼れに於て大苦惱を受け、彼の苦は比無く、譬喩有ること無し。所謂彼處に燃鉤の苦を受く。謂はく、燃鉤を以て、鉤にて其の身を打ち、閻魔羅人は地獄人を取りて彼の河中に置き、按へて彼の地獄人を沒せ令使むるに、迭互に相ひ沈み、既に相ひ沈み已りて唱喚き號哭ぶ、河中は水に非ず、熱せる赤銅の汁にして、彼の罪人を漂はして猶し漂木の如く、流轉して停らず。是の如くに漂ひ燒かれて大苦惱を受け、彼の鐵鉤の河に既に燒け漂ひ已りて、彼の

る果報なり。

又彼の比丘、黑繩大地獄處を觀察し、普遍く十六別處を觀察すること、活地獄の如し。

又彼の比丘、活地獄・黑繩地獄を觀、既に觀察し已りて業報の法を知るに、一切の惡業の果報は堅鞕[八]し。作して集むること有り、集めて作さず、作して集めず。作して集むる者は則ち決定して受け、集めて作さざる者は決定して受けず、作して集めざる者決定して受けず。彼れ見聞して知り、三種の惡業及び業の果報を實の如くに知り已りて重ねて厭離を生じ、業の繩の迭に相ひ縛する處を觀察し、又復無量種の業を觀察し、又復無量種の心の動轉し攀緣するを觀察し、彼の比丘、是の如くに觀察して、諸の衆生の心自在なるを見已り。

又復餘の諸の地獄を觀察す。彼れ見聞して知るに、第三の地獄を合地獄と名く。衆生は何の業にて彼れに生るゝや。所謂惡不善の業を作集し、衆生を燒煮するなり。彼れ見聞して知るに、衆生は三種に惡業を作集して合地獄に生れ、惡果報を受く。所謂、殺生・偸盜・邪行にして、是の如き三種の惡不善の業にて合地獄に生る。彼の上の惡業は則ち是の如き根本地獄に生れ、中・下の惡業にては則ち別處に生れ、上・中・下の三種の苦を受くること有り、又業を作す時、心力異なるが故に、彼の中に命を受けて上・中・下有り、又業を作す時、心力の攀緣に上・中・下有りて、彼れに於て苦を受くるに、上・中・下有り。三種の業定り、身業の三種・口・意の三種とは上・中・下を謂ひ、又復三種あり、欲界生・色界中生・無色界生を謂ひ、又復三種あり、所謂、過去・現在・未來なり。又復三種あり、所謂、現受・生受・後受にして、又復三種あり、善・不善及以び無記を謂ひ、又復三種あり、現縛・中縛[九]・異生處縛にして、又復三種あり、[一〇]人非人縛・非人人縛と、自處自縛なる、所謂、人を捨てゝ還りて人身を得るなり。地獄の業を作すに、是の業勢力の相似の所作にて、業に相似して生る。解脫を得るが如き神通の比丘に、又復三種あり。一には作、二には不作、

【八】鞕の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。以下の鞕の字も之に準ず。原本鞹に作れり。

【九】中縛とは、中有の間の縛、即ち死して次の生を受けざる間の繫縛ならん。

【一〇】人非人縛とは、業の繫縛の定んで人より退いて非人に生ぜしむるを云ひ、非人人縛とは、非人より人に生ぜしむる業の縛を云ふならん。

の地獄處は鐵地に火燃え、普く皆水色にして、十千由旬に周遍く炎起り、鐵の蒺蔾有り、彼の地獄人は怒りて杖にて急しく打ち、晝夜常に走りて、火炎の刀、枷、挽きたる弓弩の箭もて後に隨ひて走り逐ひ、鐵錐にて尋いで刺し、恒常に急走る、閻魔羅人は、手に鐵刀・鐵枷・鐵箭の皆悉く炎燃えたるを執りて之れを斫り打ち射る。唯彼處に行きて飢渇に逼られ、命常に斷えんと欲し、救無く歸無く、氣息絶えんと欲し、命有るのみにして、他人に乘られ、具に衆苦を受く。爾の時世尊、偈を說きて言はく。

多人共に相ひ隨ひ、不善の業を造作るも、後に惡業熟する時、生有りて獨り果を受く。
火刀・怨毒等は、害すと雖も猶忍ぶ可し、若し自ら惡業を造らば、後の苦は是より過ぐ。
親眷も皆分離るれど、唯業のみは相ひ捨てず、善惡は未來世の、一切の時に隨逐ふ。
花の何處かに去るに隨ひて、其の香も亦隨逐ふごとし、若し善惡の業を作すに、隨逐すること亦是の如し。
衆鳥は樹林に依り、旦に去りて暮に還り集る、衆生も亦是の如く、後時に還りて合會ふ。
他の勝るゝことを毀滅り、自ら取りて他を陵ぐなど、何の惡業を作すに隨ふも、彼の人癡に誑かされてなり。
若しは涅槃に趣かず、復天處に向はざるは、彼の癡第一の因にして、闇從り復闇に入る。

彼の人是の如くに自ら惡業を作して地獄の苦を受け、乃ち無量百千年歳を經て地獄に流轉し、乃至惡業破壞して爛れ盡きては、爾乃ち脫るゝことを得、然る後に復畜生・餓鬼中に生れ、若しは人中に生るゝも、放牧人と爲りて若しは駱駝を放ち、若しは餘の畜を放ち、若しは牛・驢を放ち、若しは草馬を放ちて象に當ひ狗に當ひ、常に駱駱を驅りて、處處に生を治めて以て自ら活を存し、若しは鬪兵を作し、鬪兵の帥を主り、貧窮にして命短く、鄙惡しき業を作す。餘殘の業因に相似せ

【七】蒺蔾。棘ある草。

に住するを樂まず、心に喜樂して垢愛に染著す。彼の地の夜叉、彼の比丘の是の如き等の功德と相應すること有るを見、轉た復上りて虛空夜叉に聞ゆること前に說く所の如く、次第に乃至に大梵天に(聞こゆること)、廣く說くに上の如し。又彼の比丘、黑繩の大地獄を觀察するに、復異なる處有り、彼れ見るに、處有りて名けて旃荼黑繩地獄と曰ふ。衆生何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、床臥敷の具、病に須ふる所の藥を、已れに應ふ所に非ざるに而も多く食用し、(この)俗人愚癡にして惡業を覆藏し、若しは自ら羊を殺し、若しは他に殺すことを敎ふること婆羅門外道の誑す所の如し。彼の人是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて惡處なる黑繩地獄に墮ち、旃荼處に生れて大苦惱を受く。所謂惡鳥、若くば烏、若しは鷲、若しは惡猪等其の眼根を拔き、彼の地獄主は杵枷を以て、若しは大斧を以て、若しは惡火を以て、極めて怒り急しく、種種の苦みにて逼る。旣に是の如き地獄の中に生れては、復種種の極重なる苦惱を受く。所謂其の眼を挑ち、若しは其の舌を拔き、一切の身分の分分を皆拔き、銅汁を飮まし、三奇[六]の熱鐵は遍く其の身を刺し、削りて其の足を躄にし、烏鳥に食はれ、一切の病集り、啼哭・號咷するも主無く伴無く、閻魔羅人は瞋怒りて極打く、是の如き黑繩地獄處に乃至無量百千年歲にして、惡業壞爛れて爾乃ち脫るゝことを得、若しは前世の過去久遠に於ける善業未だ熟せずんば、則ち餓鬼・畜生の中に生れ、若しは人中に生るゝも瘻脊にして目盲く、壽命は促短く、人中に死し已りて復惡道に入る。是の如き衆生は業の鎖に縛られ、善業を行ふ者は則ち善報を得、惡業を作す者は則ち惡報を得て、業果に縛られて常に生死に在り。

又彼の比丘、黑繩大地獄處の畏鷲處と名くるを觀察す。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、物を貪る因緣にて他人を殺し、若しは縛り若しは飢えしめ、若しは飮食を奪ふに彼の人是の因緣を以て、身壞れ命終りて惡道の黑繩地獄に墮ち、畏鷲處に生れて大苦惱を受く。彼

【六】明註に、奇は疑ふらくは岐ならんと云へり。三岐とは三叉の槍のことならん。三奇には意味不詳なり。

る。

癡人は諸の惡を作して、妻子を饒益むことを爲し、獨り地獄の苦を受くるは、自業に誑されてなり。

若しは妻子の爲の故に、諸の惡業を造作りて、則ち此の地獄に到り、今此の苦惱を受く。妻子に非ず物に非ず、知識の能く救ふに非ず、人中死せんと欲する時、能く救護ふ者無し。

若し人染欲の心あらば、愛の誑す所と爲り、共に相ひ隨ひ行きて、是の如きの苦を得せ令む。【二】

本境界の爲に劫はれ、已に愛の誑す所と爲りて、自ら此の惡業を作せしに、今何が故に呻喚ぶや。

彼等は喚受苦惱處に於て、是の如くに苦を受く。閻魔羅人は是の如くに罪を治め、彼の地獄人は是の如くに苦を受け、是の如く無量百千歲に第一の苦を受く。是の如く乃至惡業離散れ破壞れ爛盡きんに、爾乃ち脫るゝことを得、若しは前世の過去久遠に於て有りし善業熟すれば、若しは人中に生るゝも、不善の業の故に邊地なる【三】陀毘羅國・【四】婆婆羅國・海畔の境界・【五】辛頭の境界・洲潬の境界に在りて、人の爲に抄りて其の財物を劫掠められ、極苦惱の貧處に於て奴と爲り、若しは門兵と作りて身體を癱殘はれ、一切の身分は鄙劣にして具はらず、飢渴に燒惱み、寒熱衝逼りて箭の捶を射るが如く、極苦極を受け、常に誣枉を被り、諸の小兒の木・石・塼の打擲する所と爲り、一切の人の嫌賤ふ所と爲り、妻無く子無く、一切の人中最も凡鄙と爲り、第一の苦を受け、餘業の果報にて、因と相似て因緣相似て本作す所の如く、後是の如くに受くるなり。若し彼の比丘、是の如くに地獄の黑闇極苦惱の業を觀察せんに、生死中に於て欲の縛を離るゝことを得ん。

又修行者は彼の比丘を觀るに、常に勤めて精進して諦かに業果を見、善く正行を行じて世間の一切の生死を厭離し、第一に堅牢き魔の縛を斷絶ちて魔の境界に住するを肯はず、煩惱の地に於て共

【二】令の字は宋・元・明三本に依れり。

【三】陀毘羅(Dāvila or Drāvila)。南印度東南の海渚に在る國の名。ドラウテアン人種の居る國。

【四】婆婆羅。不明。

【五】辛頭(Sindhu)。此處では辛頭を指す。辛頭河は今のインダス河にして、印度の西境を流る。

汝は邪見にして愚癡なり、癡の羂に縛られたる人なり、今此の地獄に墮ちて、大苦海に在り。
惡見は福を燒き盡し、人中最も凡鄙し、汝は地獄の縛を畏るゝも、此れは是れ汝の舍宅なり。
若し邪見に屬する者、彼の人黠慧きに非ず、一切地獄を行くは、怨家なるに心に誑されてなり。
心は是れ第一の怨にして、此の怨は最も惡と爲す。此の怨は能く人を縛り、送りて閻羅處に到る。
心は常に諸の境に馳せ、曾て正法を行ぜずして、正法の道に迷謬ひ、送りて地獄に在りて殺す。
心の調御ふべからざること、大猛火より甚だしく、速かに行き調ふ可からずして、人を牽きて地獄に到る。
心は等一に調へ難く、此火、火より甚だしく、調べ難くして速疾に、地獄中の地獄に行く。
若し人の心自在ならんに、則ち地獄に行き、若し人能く心を制すれば、則ち苦惱を受けず。
欲を第一の火と爲し、癡を第一の闇と爲し、瞋を第一の怨と爲し、此の三世間を乘る。
汝前に惡を作せし時、自心に思惟して作せり、汝本癡心にて作したれば、今此の惡報を受く。
心好みて他の物を偷み、竊みて他の婦女と行じ、常に衆生を殺害するは、自心に誑されてなり。
是の如く業は自在にして、汝を將ゐて此處に到れり、是れ汝の本の惡業なるに、何故爾く呻喚ぶや。
若し人惡を作し已りて、後に懊惱むは則ち癡なり、彼れ果報を得ざること、種を鹹地に下せしが如し。
欲は少味の利あれど、苦報を受くること則ち多く、癡人は欲を貪著りて、彼れ闇從り闇に入

其の前世の過去久遠に少の善業有らば、若しは人中に生るゝも常に悲惱を懷き、一切の時に於て不吉の聲を聞き、心曾て喜ばず、所謂、常に不饒益の事を聞き、妻子は死亡し、財物散失し、眷屬に殃有り、若しは殺され若しは縛られ、常に悲惱を懷き、心は初め喜ばずして、彼の不善の業は因と果相似す。

又彼の比丘、活地獄第七の別處なる、極苦處と名くるを觀る。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、惡業を行ふ者、惡業を作す時、深厚き結使あり、極めて深く怨惡み、多く衆生を殺して放逸を行ずるに、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて活地獄に墮ちて極苦處に生れ、熱き鐵火を受けて極重の苦惱あり、嶮崖の下に墮ち、鐵鉤鑿を炎き、是の如くに苦を受けて常に休息まず、日夜停らず。

又彼の比丘、諦かに業果を知りて涅槃の城を求め、諦かに生間生死の苦惱を知りて黑繩大地獄處を觀察す。是の如き黑繩大地獄處に、何の異處有りや。彼れ見聞して知るに、黑繩地獄に處有りて名けて等喚受苦と曰ひ、彼處に惡燒あり、苦を受けて間無し。衆生は何の業にて彼處に生ずるや。彼れ見聞して知るに、若しは人に法を說くも惡見の論に依り、以て因譬喩となす。「一切は實ならざれば、一切、崖に投じて自殺するをも顧ず、正しき善戒無し」と、彼の人、是の惡業の因緣を以て身壞れ命終りて墮ちて黑繩大地獄中に在り、等喚處に生れて大苦惱を受け、彼れ極苦を受く。舉げて嶮岸に在り、無量由旬なる熱炎の黑繩束縛して繫ぎ已りて、然る後之れを推して利き鐵刀、熱地の上に墮とし、鐵炎の牙ある狗に噉食はれて一切の身分は分分に分離し、唱聲にて叫喚ぶとも救ふ者有る無く、護る者有る無く、歸訴へる所無く、安慰して苦を離れ令むる者有ること無し。自心に誑されて生死の輪に在り、常恆に疾く轉じ、癡の闇にて盲冥く、身は普く燒けたる黑林の如くに相似す。彼の地獄の地を見て、閻羅人は苦切に偈語にて之れを責疏て言はく。

巻の第六

地獄品之二

又彼の比丘、活地獄第六の別處なる、不喜處と名くるを觀、彼の業の果報(を觀る)。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、惡を行ふ人心常に憶念して衆生を殺さんと欲し、獵りて殺すことを爲さんが故に、林野に遊行し、貝を吹き鼓を打ち、種種に方便して大惡聲を作す、聲は甚だ畏る可し。林を行く衆生なる鹿・鳥・師子・虎・豹・熊・羆・猿猴等の畜の遊行して畏無きに、惡業を行ふ者は殺さんと欲する爲の故に彼の畏るべき聲を作し、獵りて殺さん爲の故に林野に遊行し、王に奉らんと欲すること、若しは王に奉る等をなす。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて活地獄に墮ちて不喜處に生れ、彼の業因の如くに相似して果を受く。業を作せる時他の衆生をして心に喜を生ぜざら令めしが如く、墮ちて地獄に在りて火炎の中に入り、熱炎の嘴の鳥と、極めて大惡聲の獯狐・烏・鷲・狗犬・〔一〕野干は其の耳根を食ひて心を喜ばざら令め、彼れに惡聲有りて最も極惡と爲し、愛樂す可からず、心聞くを喜ばず、一切の聲中最も怖畏る可く、金剛の嘴の虫ありて其の骨の裏に入り、其の骨中を行き、其の耳を噉食ひ、是の如くにして乃至惡業未だ盡きず。心の彌泥魚は愛の河中を行き、瞋心旋轉りて浚流に漂流ひ、生死の山中に常に止宿する所なり。欲・瞋・癡分あり、小味の欲を貪りて鉤の釣る所と爲り、常に邪見なる深水の處を行き、三界の中に於て若しは退き若しは生れて以て身の滑を爲し、常に聲・觸・味・色・香等を渇り、是の如き罪業は、作す時喜笑するも、殃報を得る時は號哭いて受く。爾の時世尊、偈を說きて言はく。

癡心の彌泥魚は、愛の舍宅に住し、業を作す時喜び笑ふも、苦を受くる時には號哭く。

若しは其の彼處に惡業を受け盡さば、爾乃ち出ずることを得て復餓鬼・畜生の中に生れ、若しは

【一】野干。狐の類。續一切經音義には、狗の如き青黃色なる、群行して夜鳴く動物なりとし、又木に攀ぢ、危巖高木に巢をくむとあり。祖延事苑に「野干形小尾大、能上樹、疑枯木不登、狐部形大、疑水不渡、不能上樹」とあり。

ことを得、若し前世の過去久遠に於て有りし善業熟さんには、餓鬼・畜生の道に生れざるも、若しは人中に生れて常に繋縛(けばく)を被り、餘殘の業果にて壽命促短(みぢか)し。

の一切の苦は自らの業にて自ら受け、地獄の地處は心業の畫師の愛の筆にて畫く所にして、不善の分別を種種の彩と爲し、愛する所の妻子を以て彩器と爲し、執著の因緣を以て堅牢と爲し、身に自ら業を作して自ら苦報を得るにて、父母の作せるに非ず。乃至惡業未だ壞せず未だ爛れず、業氣未だ盡きずんば、一切の時に於て常に受けて息まず、彼處より退き已り、若し前世の過去久遠に於て有りし善業熟さんに、則ち畜生・餓鬼に墮ちざるも、若しは人中同業の處に生れて餘殘の業を受け、常に王の爲に罰せられ、若しは打たれ若しは縛られ、鬪諍して怖畏あり、一切人の誣枉する所と爲りて常に重苦を受け、善友・知識・妻子・眷屬・親舊・主人の憎惡する所なり。

又彼の比丘、活地處第五の別處を闇冥處と名くるを觀、彼の業の果報(を觀る)。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、衆生邪見にして顚倒せる業の果なり。所謂、方時の外道の齋中、羊の口鼻を掩ひて是の如くに屠殺し、龜を塼の上に置き、上に復塼は與へて之れを壓して死せ令め、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて活地獄に墮ちて闇冥處に生れ、闇の火に燒かる。惡業を以ての故に、大力の風有りて金剛の山を吹き、合磨して碎け令めて猶し散れる沙の如く、間に暫くの樂も無く、彼處の罪人は各相ひ見ず、熱風に吹かれては利き刀の割きて身をして分散せ令むるが如く、飢渴にて身は燃え、努力して唱喚ぶも聲出でざること羊の口を掩へるが如く、塼にて龜を壓すが如し。常に大火の燒燃する所を被り、常に鎭壓を被り、是の如く無量百千歲常に闇冥に處りて、乃至微少の光明の針頭の處の如きも有ること無く、然えたる自らの毛にて自ら身を燒き、常に一切の時に遍身に火起り、是の如きの苦を受けて乃至は業盡く。皆是れ心の猿猴の作す所にして、彼の心の猿猴は[二四]使の山を行き、使の山は幻堅の慢心なる高峯の止宿する所、惡見の山巖は是れ其の行く處にして、遊慢の樹林、瞋の山窟中は其の住む處、妬心の功德以て衆果と爲し、愛の河の漂ふは不善業の[二五]處なり。乃至惡業爛壞・離散せんに、闇地獄處より爾乃ち脫るゝ

【二四】使。煩惱の異名なり。良く心を驅使するが故に使と云ふ。
【二五】處の字は、宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

ち、若しは其の頭を挾み、若しは小兒をして詐り打ちて戲弄し、衆の苦にて之れを惱まさ令め、若しは熱處に置き、若しは氷中に置き、若しは水を以て漬け、若しは以て水に沈め、若しは衣水を以て面を掩ひ口を浸し、若しは繫りて樹に著け、若しは樹枝に懸けて苦惱を受け令め、若しは嶮岸に在りて、峻に臨みて䰟を怖れしめ、若しは送りて怨に與へ、其れをして種種に方便して苦を治め令め、若しは其の陰を拔き、若しは其の指を挾み、若しは其の毛を拔き、若しは鐵輪を轉じて以て其の頭を劈きて苦惱を受け令め、若しは洋たる白鑞・鉛・錫・銅等を其の身體に灌ぎ、若しは其の鼻を割き、若しは利き鐵を以て、若しは尖れる木にて、其の糞門・陰密の處を貫きて苦惱を受け令め、若しは水を以て淋ぎ、若しは繩を以て繫ぎて塊の上を挽曳き、若しは燈を以て鬚の周匝を遍く炙き、若しは其の髮を拔き、若しは惡虫を以て之れを唼食せ令め、若しは其の皮を捩ぢ、若しは牽き若しは推し、若しは急速疾に其の身を抖擻し、若しは鑊の中に置き、湯火にて之れを煮て苦惱を受け令め、若しは塼を以て打ち、若しは鹽等を以て其の身體に塗り、若しは塵土を以てし、若しは麨等を以て其の口面を掩ひ、若しは橐の筒を以て糞門の中に置き、橐を鼓りて之れを吹き、若しは利き刀を以て其の足指を劈き、若しは氣を以て吹きて聲を出で令めず、若しは浮石を以て急に其の身を揩ひ、若しは手足を割き、若しは驅りて長く行かしめ、若しは須ふる所を遮り、若しは其の咽を繫りて、黃藍の花の中を來去して之れを曳き、若しは種種の雜穢れる脂膩を以て其の口に灌ぎ若しは金寶・種種の財物を以て若しは打ち若しは壓し、若しは樂の具と作して若しは打射等し、若しは打ちて腫れしめ、腫れたる上を復打ち、若しは繩を以て懸け、極めて高から令めて、然る後地に墮として苦惱を受けしめ、此の是の如き等の無量種種の諸の苦惱の事にて衆生を觸惱するに、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて活地獄の多苦處と名くるに墮ち、惡業に相似して相似の果を得、是の如き地獄の十千億種は具に說く可からず、此の極苦惱を具に說くに上の如し。彼

て彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、彼の殺生人の、若しは駱駝を殺し、若しは猪、羊を殺し、若しは衆鳥を殺し、若しは馬若しは兎、若しは羆若しは熊なる有毛の畜生の其の肉を食ふことを爲し、毛をして脫け令めんと欲して活きながら燒き活きながら煮、若しは湯中に置くに、彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて活地獄に墮ちて瓮熟處に生れ、惡業の種子に相似せる果報あり。鐵瓮中に置かれ、煎煮られて極めて熱くして猶し熟豆の如く、是の如く無量百千年歲彼の地獄に在りて、大火之れを煮る。心業の畫師の畫く所の衣破壞して爛れ盡きんに、彼の地獄處より爾乃ち脫るゝを得るも、次いで殘業をけ、次いで氣業を受くること前に說く所の如く、乃至若しは天・人の中に生るゝも、命則ち促短し。彼の修行者は、內法中に於て、正法に隨順して法行を觀察し、是の如くに思惟すらく、『彼の比丘、是の如くに大地獄の瓮熟處を觀察し已れり。當に云何なるべき耶』と。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の比丘、第一勇猛にして、能く魔軍を破壞して生死の海を度り、能く戒の水を以て欲心の火を滅し、能く慈の水を以て瞋心の火を滅し、能く甚深の因緣なる燈明を以て癡心の闇を除き、是の如くにして、比丘則ち能く速に生死の大海を渡る。

又彼の比丘、活地獄第四の別處にして、多苦處と名くるを觀る。衆生は何の業にて彼處に生れ、業因の種子と相似の果報ありや。若しは人、種種の苦にて衆生に逼る。然り、彼の衆生の命猶盡きざらば、所謂、木にて壓して其れをして苦を受け令め、若しは繩を以て懸け、若しは火を以て頭を若しは燒き、若しは柱に若しは其の髻を繫りて以て之れを懸け、若しは煙を以て熏して苦惱を受け令め、若しは道の上に於て牽きて疾走せ令め、若しは地上の棘刺の中に置きて苦惱を受け令し、若しは撲ちて地に著け、若しは高嶮なる處より之れを推して墮ち令め、若しは針を以て刺し、若しは繩を以て縛り、若しは象をして蹈ま令め、若しは擲げて空に在り、下りて未だ地に至らざるに、刀を以て之れを承けて苦惱を受け令め、若しは沙上に著け、若しは石を以て鎖へ、若しは杖を以て打

生中に生れ、若しは後氣の業にて天中に生れ、若しは人中に生るゝも、彼の業因緣にて、生れて則ち命短し。

又彼の比丘、活地獄第二の別處なる刀輪處と名くるを觀、彼の業の果報(を觀る)。衆生は何の業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知るに、若しは心に物を貪り、是の如き因緣にて衆生を殺し、命因を得んと欲して刀を以て殺生し、彼の人是の如く、此の因緣を以て而も懺悔せず、復他に殺すことを教へ、業業普遍きこと、前に說く所の如し。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて彼の地獄に墮ち、刀輪處に生る。彼處に火燃え、周圍の鐵壁は高さ十由旬にして、彼の地獄處に大火常に燃え、人間の火は彼處の火に於て、雲の如くに相似す。彼の地獄處に常に鐵火有りて速かに其の身に著き、彼の熱き鐵火は彼の人身を割き、碎きて芥子の如くに散燒・劈裂し、一切鐵を雨らして譬へば此の間なる閻浮提中の夏月の水雨の如く、彼處の十方遍く熱鐵を雨らして、多く苦惱を與ふ。彼の地獄人は劈裂を被ると雖も常に死せず、是の惡業の果報を以ての故に是の如くに身を割かれ、尋いで割かれ尋いで生く。彼の刀輪處に刀葉林有り、其の刃極めて利く、復兩刃有り、刃頭は下を向く。遙かに彼の林を望むに、青くして汁有り、水と相ひ似たり。彼の諸の罪人は飢渴の惱急しく、業苦を同ふせる者を唱喚びて走り赴き、既に彼の林に入るに、業因を以ての故に、周遍く刀を雨らして其の身體を劈く。又復彼の人、自の命を貪るが故に、衆生を食養す。則ち是れ他を誑すなり。彼の業の果報は是の如く是の如く、心業の畫師は地獄の衣を畫き、是の如く地獄の不善の業を畫きて、是の如く是の如く地獄に苦を受け、彼の業に攝せられて、彼れ、地獄に於て是の如く無量百千年歲に常に劈裂かれ、乃至惡業未だ壞せず爛ず、業氣未だ盡きずんば、心業の畫師の畫文も滅せず、廣く說くに前の如し。

又彼の比丘、活地獄第三の別處を瓮熟處と名くるを觀、彼の業の果報(を觀る。)衆生は何の業に

百千億那由他數の怖畏るべき惡事ありて、相似せる有ること無く、類を譬ふ可からず。分分に活地獄を觀察するに、衆生は何の業にて屎泥處に生るゝや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに何の惡業なる不善の種子を以て、屎泥處に生るゝや。所謂殺生にして、若しは欲心を以て殺す。謂はく鳥をして殺さ令むるにて、鷹を放ち、雕を放つなり。復異の殺有り、若しは圍みて鹿を殺し、若しは獵りて鹿を殺して懺悔せず、業業普遍く、殺業を究竟めて和集し相應すること、前に說く所の如し。彼の人、是の惡業の因緣を以て、身壞れ命終りて彼の地獄に生れ、一分處に在りて種種の苦を受く。謂はく屎泥處にして、燒けたる屎は極めて熱く、其の味甚だ苦く、赤銅屎と和し、屎中に虫有り、虫に金剛の嘴ありて遍く屎上を覆ひ、彼の諸の罪人の是の如き屎を食ふに、虫身の內に入り、先ず其の脣を食し、次いで其の舌を食し、次いで其の齗を食し、次いで其の咽を食し、次いで其の心を食し、次いで其の肺を食し、次いで其の肚を食し、次いで其の脾を食し、次いで其の胃を食し、次いで小腸を食し、次いで大腸を食し、次いで熟藏を食し、次いで筋脈の一切の脈分を食し、次いで肉血を食し、彼の人、是の如くに彼の地獄中に極苦惱を受け、人中の數の如くんば、乃ち無量百千歲を經。諸の殺生人の惡業を造作し、若しは圍みて鹿を殺し、若しは獵りて鹿を殺し、養ひて鳥雀を殺し、若しは鷹・雕等にて、彼れをして殺さ令め已り、奪ひ取りて自ら食ふに、彼の業の果報にて、是の如くに殺し已り、彼の人取りて食へる是の惡業の勢力を以ての故に、屎中に多く諸の虫有り、虫に金剛の嘴有りて其の身の內に入り、是の如くに之れを食し、善・不善の果は自業に相似す。若し彼の罪人の惡業盡きし者は、彼の人、此の屎泥の處なる地獄より脫るゝを得、彼の心業の畫ける畫文盡きて、彼の人是の如くに彼處を脫るゝことを得。若し其の人の業の後報未だ熟せずんば畜生中に生れ、飛鳥の身を受けて餘の鳥に殺され、若しは鹿の身を受けて圍みて殺す所と爲りて、彼の前世に鳥を殺し鹿を殺せしが如し。彼の人、果報を地獄中に受け、餘殘の業にて畜

活地獄と名け、復別處有り、別處は幾ばく有り、名けて何等と爲すや。處は十六有り、一を屎泥と名け、二を刀輪と名け、三を瓮熟と名け、四を多苦と名け、五を闇冥と名け、六を不喜と名け、七を極苦と名け、八を衆病と名け、九を兩鐵と名け、十を惡杖と名け、十一を名けて黑色鼠狼と爲し、十二を名けて異異迴轉と爲し、十三を苦逼と名け、十四を名けて鉢頭摩鬘と名け、十五を陂池と名け、十六を名けて空中受苦と爲し、此れを十六の活地獄處と名く。何の業にて彼の活地獄處に生るゝや。彼の比丘、若しは見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、若し殺生すること有り、樂み行ひ多く作して此の業普遍く、殺業を究竟めて和合し、相應せば、活地獄根本の處に墮つ。殺生の業に上・中・下有りて、地獄に受くる苦も亦上・中・下あり。他の地獄の業は何者を上と爲すや。彼の殺生者にして、若しは善人、若しは受戒せる人、若しは善を行ずる人を殺し、他の衆生有りて衆生の想有るに、殺生の心を生じて其の命根を斷ち、此の業を究竟めて心に悔を生ぜず、他に向ひ讚め說きて復更に作し、復他に殺を教へ、殺を勸めて隨喜し、殺生を讃歎し、若しは他をして殺さ令め、是の如き癡人にして、自ら作し他に教へて罪業を成就せんに、命終りて活地獄中に生る。此の人中の若しは五十年の如きを彼の四天王の一日夜と爲し、彼の數は亦爾く、三十日夜を以て一月と爲し、亦十二月を以て一歲と爲し、彼の四天王は、若しは五十年の活大地獄を一日夜と爲す。惡業の時に上・中・下有るを以て、活地獄の命にも亦下・中・上有り、中間に死する有り、業種子の多少と輕重に隨ひて、活地獄中或ひは一處に受け、或ひは二處に受け、或ひは三處に受け、或ひは四處に受け、或ひは五處に受け、或ひは六處に受け、是の如くに乃至十六處に受け、乃至惡業未だ壞せず爛れず業氣未だ盡きずんば、彼の地獄中に五百年の命あり。天の年數に依り、人中に依らず。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが彼の比丘、活地獄を觀て別處の業を知るや。心業の畫師は自らの業にて業果の地分を畫作し、種種の異心にて別處に苦を受け、

癡を第一の惡と爲し、黠慧き人は捨つるも、若し癡をして自在なら令むるに、寂靜は得可きこと難し。

若し自ら安隱ならんと欲すれば、寧ろ大火に觸入し、毒蛇と同處に住すとも、終に煩惱に近かされ。

智は第一の甘露にして、智は第一の安隱藏たり、智を第一の親と爲し、智を第一の寶と爲す。

是の如きの智火は、常に煩惱の山を燒き、煩惱の山を燒く者は、則ち安樂處に到らん。

若し人智慧無くんば、盲の闇處に入れるが如く、則ち生死なる、非法の諍鬪の籠を厭はず。

若し人常に法を念ずれば、善く人身を得、心の誑す所と爲らずして、應に善人の供を受くべし。

彼の比丘、是の如くに法と非法を知り、法に依りて正しく行じ、是の如く淨心にして、則ち能く無量百千の高大なる生の山を破壞し、餘の氣有ること無くして更に復生ぜず、煩惱の刀を離れて涅槃に近し。

地獄品第三之一

又彼の比丘、隨順して業の果報の法を思惟し、法と非法を觀る。云何んが惡業なりや。無量種種あり、皆心に因りて相續流轉して、何の浚流の諸の衆生を漂すが如く、惡業果報の地に墮ち令め、地獄に在りて極苦惱を受く、彼の比丘、善、不善を觀、諦かに意に思量するに、此の諸の衆生は如何んが是の如くに心の誑す所と爲り、愛の誑す所と爲りて、活・黑繩・合喚・大喚・熱及び大熱、阿鼻なる惡處に墮ちて地獄中に生るゝや。彼の諸の地獄に各々別處有り、皆[二四]官人有りて、業の如くに相似して各各證知す。彼の比丘、若しは見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、大地獄有りて

【二四】官人。官掌者。罪人の業に從つて罪科を審判する意。

既に實に聞き已りて轉た復歡喜せり。爾の時世尊、偈を說きて言はく。

若しは善若しは不善なる、業の果は皆決定せり、自ら業を作して自ら食ひ、皆業の縛る所と爲る。

是の如きは煩惱の地にして、初めは甜く後に苦ければ、境界を捨つること毒の如かれ、饒益せざるを以ての故なり。

智の常に煩惱を燒くこと、火の能く草を焚くが如く、煩惱を覆ふ智梵の故に、佛は三寶を說きたまへり。

若し智の境界を樂まば、寂靜にして牟尼の如く、若し煩惱の蛇齧まば、彼の人一切を失はん。

若し人二諦を知り、勇猛にして諦かに知見せは、彼れ第一の道を行き、生死の處を捨離せん。

若し人生死を樂み、煩惱の怨を喜樂せば、彼の人常に縛を被りて、〔二二〕有なる臨處に流轉せん。

若し人出意有りて、常に寂靜の行を行ぜんに、死しては天衆の中に生れ、梵世界處に到らん。

若しは欲等を愛せずして、佛・法・僧を供養せば、彼の人の生死を捨つること、風の乾草を吹くが如からん。

若し心の使と爲らずして、能く心を使はゞ、則ち能く煩惱を除くこと、日出でて闇無きが如からん。

心の怨は最も第一にして、更に是の如き怨は無く、心常に衆生を燒きて、〔二三〕放燒時樹の如し。

若し心を自在に行かしめ、愚癡にて根を調へずんば、彼れ苦ありて寂靜ならず、涅槃を去ること太だ遠し。

苦及び苦の報を知り、復能く苦の因を知らば、則ち一切の縛を脫して、普く諸の煩惱を離れん。

智を第一の明とし、癡を第一の闇と爲す、是の如き光明を取るに、是れを黠慧き人と名く。

【二二】有。業有、存在の意。こゝにては三有卽ち迷の世界のこと。

【二三】放燒時樹。不明。

又彼の比丘、實の如くに眼を觀る。眼識に色を見、若し樂觸を生ぜんに、則ち樂に攀緣して樂報の業に非ず。又實の如くに觀る。是の如く是の如く、眼識色を見るに、是れ惡意の處にして、若し眼觸生ずれば苦に攀緣せんに、是れ樂報の業なり。彼れ實の如くに知るに、何者を名けて眼識色を見るに、樂に攀緣せば樂報の業に非ずと爲すや。此の法中に於て隨順して觀察するに、眼に色を見已りて不善の思惟・觀察・攀緣あり、憶念して味に著して樂心を生ぜんに、現在は樂なりと雖も後に苦報を得、地獄・餓鬼・畜生を成就す。何の業は現在に不樂の報を得、後に樂報を得るや。眼識色を見て眼觸を生ずるに、心に善き思惟と觀察、攀緣あり、現在世に於て樂著せずんば、現在は樂ならざるも苦報の業に非ずして、轉じて人・天に生れて勝妙の樂を受け、終に涅槃に到る。是の如く耳・鼻・舌・身・意識も皆亦是の如し。又修行者は内心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが彼の比丘、眼識に色を見て、心に捨を行ずるや。謂はく、彼の比丘、眼に色を見已りて心喜樂せず、喜樂せざるに非ずして、貪らず惡まず、心に悕望せず、悕望せざるに非ず、亦憶念せず、憶念せざるに非ず、亦不善に非ず。翳障を觀察して是の如くに捨を行じ、是れを捨の處と名け、苦樂の處に非ず。又彼の比丘、第十地六地處の行を得。謂はく[一九]阿那含の初禪地中乃至は四禪なり。彼の地に登るを得て、彼れ、諸法の出沒と生滅を觀、常に勤めて八分聖道を修行し、欲を覺りて解脫の門に到らんと欲す。彼の比丘、是の如くに精勤して、魔宮を隱蔽せり。彼の地の夜叉は見已りて歡喜し、即ち以て上りて虛空夜叉に聞こえ、虛空夜叉は四大王に聞こえ、彼の四大王は四天王に聞こえ、彼の四天王は是の如くに復三十三天に聞こえ、三十三天は焰摩天に聞こえ、彼の焰摩天は兜率天に聞こえ、彼の兜率天は化樂天に聞こえ、彼の化樂天は復他化自在天に向ひて說き、彼の自在天は復[二〇]梵天に向ひて是の如くに說きて言はく、『閻浮提中の某善男子は』と、廣く說くに前の如く乃至『八地に六地を攝す』と。彼れ既に聞き已りて甚大だ歡喜し、[二一]梵迦夷天は禪樂の行より出で、

【一九】阿那含（Anāgāmin）。又は阿那伽彌、阿那伽迷、不還、不來と譯す。聲聞四果の一にて、欲界の惑に引かれて、再び欲界に生れざるが故に不還と云ふ。

【二〇】梵天（Brahmā）。譯して離欲、清淨等と云ふ。色界の諸天淫欲を離れて清淨なれば梵天と云ひ。又別して色界の初禪天を云ふ。此處には初禪天王、即ち梵主を指して梵天と云へるなり。

【二一】梵迦夷（Brahma-kāyika）。淨身と譯す。色界の初禪天なり。梵迦夷天とは梵王を指す。

り、王に親近し、賊を作して生を治め、是の如き等の苦ありて、乃ち欲する所を得るには、彼の如くに苦を得。諸の過多しとは貪欲・瞋・癡にて、高崖に墮つとは地獄・餓鬼・畜生に墮つるを謂ひ、卽ち命終るとは、法命の盡くるなり。樹の爛孔とは、皆空にして物無く、一切堅ならざるにて、癡人往くとは、所謂愚癡の邪見人なり。是の如き等の無量の諸の過有り、復多く過有りて、是の如き欲果は味少なく過多し。彼の比丘、是の如くに一切の欲心を觀じて、分別を生ぜず。又彼の比丘、欲心を觀察するに、猶し火焰の如く、猶し燈焰の如し。明かなる色は愛す可きも、其れに觸るれば甚だ熱く、飛虫癡なるが故に、他の明かなる焰を見て貪著し、愛樂し、中に入りて卽ち死す。愚癡の凡夫も亦復是の如く、欲・瞋・癡に覆はれ、一切の欲に於て心に愛著を生ずること、彼の飛虫の燈の明かなる色を見るが如く、若しは欲なる燈に入りては則ち地獄・畜生・餓鬼に墮つること、彼の飛虫の燈に入りて死するが如し。彼の比丘、是の如くに觀察して、心欲を離るゝことを得。

又彼の比丘、內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。又此世間の一切の衆生は、何の縛に縛られて生死に輪轉するや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、二の縛に縛られ、繫がれて生死に在り。何等を二と爲すや。一には食の縛、二には觸の縛なり。食の縛に四有り。一には摶食、二には思食、三には禪食、四には觸食なり。何等は摶食なりや。謂はく、四の人處、欲界の六天、八大地獄、鬼中の一分なり。二の思食とは、所謂魚中にして、三の禪食とは、所謂行禪の色界天等、四の觸食とは、所謂諸鳥なり。何物を觸と爲すや。觸とは欲を謂ひ、手を執る者有り、或ひは笑ふ者有り、眼にて見る者有り、是の如きは皆欲なる觸の誑す所と爲り、是の如き一切愚癡の凡夫は謂はく欲界中(にあり)、人、及び餓鬼・畜生・地獄なる此れ等は、欲を習ふが故に欲界と名け、又無色界は[一八]三摩跋提に攀緣して食と爲し、此の二の縛を以て常に世間に在り、欲を離るゝを得ずして、常に一切の結使の縛する所と爲る。

【一八】三摩跋提(Samādhi)。定のこと。無色界は只識心のみありて、微妙なる禪定に住せる境地なれば、三摩跋提を食と爲すと云へるなり。

象とは修行者を謂ひ、一切の染癡の以て供養を爲すも、出離を憶念するを則ち名けて山禪と爲し、三摩提を以て山窟と爲して正道の心を生じ、此れを名けて花と爲し、涅槃を果と爲す。衆鳥の聲とは所謂法師にて、智慧を河と爲し、河を濟る口とは所謂一心にして、地分と言ふは、四梵行なる慈・悲・喜。捨を謂ふ。彼の修行者は猶し壯象の如く、禪定の樂を隨順して思量して[一六]僧伽藍に趣き、林に還りて去ることを爲す。比丘是の如く、道を修行する者は猶し壯象の如く、若し爾らずんば、狗の如くにして異る無し。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが彼の比丘、八地處に於て、第九地を修めて第九地を得るや。彼は見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、一切の三界は皆是れ無常・苦・空・無我・不淨等の器にして、一切の欲を觀るに亦復是の如し。譬へば林中の如きは、極めて大なる山崖の峻嶮なる處に、大高樹有りて[一七]佉殊羅と名け、無量の刺有り、彼の樹頭に於て少しく果實有るも、復得難し。若し彼の果を取らんに、多く諸の過有り、此の樹果の墮ちて嶮處に在らんことを恐れ、復命を失はんことを畏る。樹腹に孔有り、孔坎は脆爛くして、彼の樹に上らんと欲すれば、復孔壞れて人の命を危くせんことを畏る。彼の樹極めて高く、樹より墮つるも尙死す。況んや高き崖の嶮惡なる處に墜つるをや。愚癡の凡人は盲にして智の目無く、衆味に貪著し、望みて彼の果を見て峻崖と樹腹の爛孔を看す。彼の愚癡人、其の果味を貪りて彼の樹に上り、未だ果所に到らざるに卽便ち墜墮し、卽爾に命終る。更に餘人有り、少しく方便を知り、或ひは命業有りて卽ち墜墮ちざるも、少しく果味を得て多く苦惱を受く。是の如く是の如く、彼の修行せる比丘、五道の林を觀るに、中間に孔有り。極めて大なる嶮崖とは一切の病を謂ひ、佉殊羅樹とは所謂欲心、無量の刺とは所謂無量百千の煩惱、彼の苦果を求むとは所謂苦なり。樹頭の果とは一切の欲意にして、諸の愛しき聲・觸・味・香等の得可きこと難き者とは、是れ欲果なり。所謂、海に入り、若しは刀の畏有

【一六】僧伽藍(Saṅghārāma)。詳はしく僧伽藍摩、略して又伽藍と云ひ、衆園、僧房と譯す。僧の集りて修道する所なり。

【一七】佉殊羅。原語不明。

を得。猶し彼の狗の如くに凡夫は愚癡にして、眼色にて彼の骨の如き色を見、虚妄の分別は狗の骨を齩むが如し。是の如く觀察するに、眼に色を見ること猶し枯骨の如く、是の如くに一切愚癡の凡夫は、虚妄分別の誑惑する所なり。

又彼の比丘、是の如くに思惟す、『云何んが比丘、愛に於て畏を生じて生死を厭離し、一切の欲を捨つるや』と。譬へば龍象の如きは、年六十に至るも其の力盛壯にして、善き調象人の革にて鬪ひ捉取へて其の五處を縛り、牢檻中に置き、然る後乃ち多く[一三]歡喜摶、及以び甘蔗、甘蔗酒等の種種の美味を與へ、諸の樂器を以て歌聲にて之れを樂ませ、望みて愁えざら使むるに、林の樂を憶はず、若しは林の樂を忘れ、凡象と共に同じく止住するを得、極めて善調なら令むるに、他人に繫屬す。彼の象は復是の如くに息はしむるも、是の如き供養は其の心をして憂悶を離れ令むる能はず。然り其は林間の樂なる自在の遊行を忘れず、山曲の樹林と花果、衆鳥の音聲、河の傍處の樂を忘れず、思惟し念じ已りて、縛を絶ちて去る。彼の樂を憶ふが故に、調象人に於て忌難を生ぜざるも、其の牢檻を壞ちて去りて林中に向ひ、心に顧念せず。多多の[一四]蹇茶、美なる歡喜摶、及以び甘蔗、甘蔗酒の飲、琴樂、歌聲も心を調ふ可からず、心を誑す可からず、林の樂を忘れず、凡象と共に行き共に住するを樂まずして、還りて林中に向ふ。修行する比丘も亦復是の如し。無始如來世間に流轉して、五縛に縛らる。何等を五と爲すや。所謂、愛しき聲・觸・味・香・色なり。誰をか善調と爲すや。所謂、眼・耳・鼻・舌・身・意なる、是の如き六識なり。何者は牢檻なりや。所謂、妻子・眷屬・止住の處・僕使・富樂を喜樂し、煩惱の遮障る所に染著するなり。多くの歡喜摶、及び甘蔗酒、種種の美味諸の飲食とは、分別の心を歡喜摶と爲し、婬欲を飲食と爲し、心の愛綱を以て作樂・歌聲等の聲と爲し、邪見の凡夫は猶し凡象と共に同じく住する者の如く、謂はく、[一五]有身見と戒取の疑あり、口中に甜しとは、所謂邪見の言説を喜樂するにて、他に繫屬すとは、欲・瞋・癡に屬するなり。善調の

【一三】歡喜摶。又は歡喜丸。情欲を興奮させる食物の一種。

【一四】蹇茶（Khaṇḍa）。又は蹇陀に作る。甚だ鮮白にして良質なる砂糖の名なり。

【一五】有身見（Satkāyadṛṣṭi）。薩迦耶達利瑟致と音譯し、身見、懷身見、僞身見等と譯す。有身見とは薩婆多宗の所譯なり。身に於て實我の執を起す邪見を云ふ。

を行じ、口に不善を行じて、意に不善を行じて、身壞れ命終らんには、惡道に墮ちて地獄中に生る。彼れ若し癡を離れて正見を修行せんに、身に善行を行じ、口に善行を行じ、意に善行を行じ、諦かに善法及び不善の法を知り、是の如く諦かに法と非法の心を知りて、則ち第三の最大の煩惱を滅し是の如くに勤めて觀て癡心を對治す。

又彼の比丘、是の如くに勤めて觀て三種の煩惱を三種に對治するに、彼の三種滅し已りて一切の煩惱・結使の皆滅すること、樹根を斷つに、皮・莖・枝・葉・花・果の緣等皆悉く乾くが如く、是の如く能く此の三煩惱を斷たんに、一切の煩惱皆悉く斷滅す。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが彼の比丘、第七地中に、第八地を修めて第八地を得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の比丘、最初に是の如く實の如くに眼を觀る。云何んが世間の愚癡の凡夫は、眼に色を見已りて或ひは貪り或ひは瞋り、或ひは癡を生ずるや。彼の諸の凡夫、若しは知識を見、若しは婦女を見るも心に則ち貪を生じ、若しは復異見にて則ち瞋を生じ、他の具足せるを見て貪・瞋に覆はれ、眼を以て色に於て實の如くに見ずして、癡は心を蔽ひ、愚癡の凡夫は唯分別のみ有り、若しは貪、若しは瞋、若しは癡に覆はる。愛に誑さるゝ人は自らの意にて此れ我・我所なりと分別し、是の如くに染著すること、譬へば狗の肉を離れし骨を齩み、涎汁と和合せしめて、望みて其の髓を得るが如し。是の如き貪る狗は、齒間に血を流し、其の味を得已りて此れ骨汁なりと謂ひ、自らの血にて是の如き味あるを知らず、味を貪るを以ての故に、次第に自ら其の舌を食ふを覺えず、復其の味を貪り、貪に覆はるゝを以ての故に、骨汁の味なりと謂ふ。愚癡の凡夫も亦復是の如く、虛妄の分別にて、眼識にて色を見て貪著し喜樂し、思量し分別して、色なる枯骨を以て眼・口中に著し、境界は齒の如く、是の如くに之れを齩み、染意は涎の如く、愛は血の流出せるにて、血味を貪愛して謂ひて色を美と爲し、色に於て味

身に非ず、是の如き背處の四十五骨も皆我が身に非ず、頭は我が身に非ず、面中の骨も亦我が身に非ず、頭中の骨も亦我が身に非ず。彼の比丘、是の如くに觀察するに、分分中に於て身有るを見ず、一一の分分に皆身を見ず、又復是の如き分分を見ず、復眼・耳・鼻・舌・身・意等を觀て、皆身を見ず。又復我中に我無きを觀察す。彼の是の如き等は唯是れ微塵にして、是の如く分分に彼の身を觀察するに、猶し芥子乃至は微塵の如し。又復分分に諸の〔〇〕大を觀察す。何者は是れ我、何物は地界、是の如く次第して何者は是れ我、何物は水界、何物は是れ我、何物は火界、何物は是れ我、何物は風界なりや。彼れ是の如くに觀るに、界は是れ我に非ず、我は是れ界に非ず、別に我有るに非ず、別に界有るに非ず、界と我に異りて別に更に物有るに非ず、是の如くに〔一〕皆第一義諦を以てす。譬へば無量の多くの樹和合して則ち林を見、樹は是れ林に非ず、樹に異りて林無きが如く、是れ第一義にして、樹を離れて外に別に林と名くる無し。又復樹を觀るに、彼の根・莖・枝・葉等を離れて外に、別に更に樹無く、第一義諦にては、是の如き樹無きも、〔二〕世諦に依るが故に、林有り樹有り。身も亦是の如く、是等和合して唯名字のみ有り、世諦に依るが故に、身有りと言ふことを得。彼の比丘、身の法を知り已りて身の欲を離れ、身分の欲を離れ、一切の根・受・界の欲を離るゝことを得、既に欲を離れ已りては、彼の喜欲愛も繫縛する能はず。是の如くに勤めて欲心を觀て對治す。

又彼の比丘、云何んが勤めて觀て瞋心を對治するや。彼れ慈心に住し、常に勤めて觀察す。惡行の衆生は、所謂五道の生死に退き生れ、常に怖畏有り、死の如くにて異なる無し。比丘之れを觀ては、母の子を悲むが如し。彼の諸の衆生に是の如き苦惱あり、云何んぞ瞋る可けん。我れ若し之れを瞋らんに、則ち是れ瘡の上に、更に瘡を與ふるなり。是の如き衆生は本性苦惱なれば、應に之れを瞋るべからず。瞋は是れ第二の最大の煩惱たり。是の如くに勤めて觀て瞋心を對治す。

又彼の比丘、云何んが次第に勤めて第三の最大の煩惱を觀るや。癡の衆生を覆ひては、身に不善

【〇】大。四大のこと。

【一】第一義諦。世俗に對し眞如、實相を云ふ。諦とは眞實の道理を指し、この理諸法中第一なれば、第一義諦と云ふ。

【二】世諦。第一義諦に對し、世俗に通ずる道理、又は世間の事實を云ふ。

出ずる者は天人、入る者は地獄・餓鬼・畜生にして、心の彌泥魚は愛河の中に在りて、是の如くに入出す。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが彼の比丘、禪を修めて念に住し、業報の法を知るや。一切衆生の心を觀察し、常に自在に行き、心の使ふ所と爲り、心の縛る所と爲ると、是の如くに觀察す。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、一切衆生の心業は自在にして、心業に依りて行き、心の使ふ所と爲る。

又復觀察するに、云何んが衆生、縛られて生死に在り。無始・無終・無量に轉行するや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、心染なるを以ての故に衆生は繫縛され、心淨なるを以ての故に衆生は解脫す。是の如き心は無量種種に攀緣して相を壞し、自體相を壞し、同業にて相を壞す。心に五種有り。謂はく、五道中に自在に乘執り、結使の心と和合し相應して常に生死に在り、第一の依の謂はく虛空等の三無爲法を離れ、五根相を壞し、五種の心有り、無量無邊の愛心は、種種の壞相に依止す。要を以て之れを言はんに、此れは是れ染分なり、云何んが方便して、染分の三煩惱根を離るゝを得るや。三の對治有りて、過去・未來の一切の諸の佛・正遍知は是の如き正道を說きたまへり、『欲は不淨を以てし、瞋は慈心を以てし、癡は因緣を以てす』と。

彼れ、身中に於て、是の如くに欲を觀ず。是の如き比丘、身の行を緣じ已りて分分に身を觀じ、足爪等從り乃至頭に於て、分分に觀察す。此の麁なる身分は、何者是れ我、何者は我所なりや。自の身分中にて、是の如き足爪を身を離れて觀察するに、爪は是れ身に非ず、足指は身に非ず。何者は是れ身、何者は是れ我、何者は我所なりや。足掌は身に非ず、何處に心を起して是れ我所なりと謂ふや。此の內踝は是れ我が身に非ず、此の足跟は亦我が身に非ず、[八]腨は我が身に非ず、膝は我が身に非ず、[九]面は我が身に非ず、陰は我が身に非ず、此の髑髏は亦我が身に非ず、糞門の處も亦我が

【八】腨の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。原本踹（くびす）に作れり。今重復を避けて腨を取る。
【九】面の字は明本に依る。別本に圓に作れり。

獄・餓鬼・畜生にして、是の如き等の色は好き色の畫に非ず、廣く說くに前の如し。又彼の比丘、次に復心の猿猴を觀察す。猿猴を見るが如くんば、彼の猿猴の如きは躁擾ぎて停らず、種種の樹枝、花菓の林等・山谷・巖窟・迴曲の處に行きて障礙せず。心の猿猴も亦復是の如く、五道の差別は種種の林の如く、地獄・畜生・餓鬼なる諸道は猶し彼の樹の如く、衆生の無量なるは種種の枝の如く、愛は花葉の如く、愛しき聲、諸の香、味等を分別して以て衆果を爲し、三界の山を行くに、身は則ち窟を行きて障礙せざるが如く、是れ心の猿猴にして、此の心の猿猴は常に地獄・餓鬼・畜生なる生死の地を行く。又彼の比丘、禪に依りて心の伎兒を觀察す。伎兒を見るが如くんば、彼の伎兒の如きは諸の樂器を取り、戲場の地に於て種種の戲を作す。心の伎兒も亦復是の如く、種種の業化は以て衣服を爲し、戲場の地とは五道の地を謂ひ、種種の裝飾は種種の因緣にて、種種の樂器とは自らの境界を謂ひ、伎兒戲るとは生死に戲るや。心を伎兒と爲し、種種の戲とは、無始無終の長き生死や。

又彼の比丘、禪に依りて心の[六]彌泥魚を觀察す。彌泥魚を見るが如くんば、彌泥魚の如きは河中に在り。若しは諸の河水の、急速にして亂る、波あり、深くして流れ疾く、行くを得可きこと難くして、能く無量種種の樹木を漂し、勢力暴くして疾く、遮障る可からず、山澗の河水の迅速にして急惡なるに、彼の彌泥魚は能く入り能く出で、能く行き能く住す。心の彌泥も亦復是の如くにして、欲界の河の急疾にて波の亂るゝに於て、能く入り能く出で、能く行き能く住す。地獄に河有りて其の河を[七]鞞多羅泥と名け、彼の河は極めて深く、濤波湧きて迅かに、時として暫くも停る無く、甚だ怖畏る可くして、急疾にて亂れて流れ、善・不善の業を以て流水と爲し、行くを得可きこと難く、一切愚癡の凡夫の渡る能はざる所にして、此の五道の河は、無量劫中に常に衆生を漂す。境界は疾く流れ、迅速にして斷ぜず、勢力暴惡しく遮障る可からず、無常相續の力勢に牽かれて約截つ可からずして、愛の河の急惡なるに、心の彌泥魚は能く此の河を行き、若しは入り若しは出で、

【六】彌泥魚。不明。

【七】鞞多羅泥。原語不明。

色を取りて、地獄中に於て畫いて黑色を作す。何の義を黑と名くるや。黑業を以ての故に地獄中に生れ、燃を彼り縛を被りて黑色の身を得、種種の病を作し、飢渇は身を苦め、無量の苦に逼らる。皆是れ自らの業にて、他の作す所に非ず。

又彼の比丘、是の如き三界と、五道の五種に彩色せる生死の畫衣を觀察するに、三地に於て住す。謂はく、欲界地・色・無色界地なり。心業の畫師の淫欲に習近しては、[一]欲界に攀縁して、種種の色にて畫き、色に縁りて依止して、二十種有り。欲を離れ、四禪を以て畫筆と爲して十六地に依るに、是い所畫る處は[二]色界を畫作す。色界を縁ずるを離れては、[三]三摩跋提にて[四]無色界を縁じ、畫いて四處を爲す。心業の畫師は、廣く是の如き三界の大衣を畫く。

又彼の比丘、是の如き心業の畫師を觀察するに、更に復異法にて衆生を畫作す。心は畫師の如く、身は彩器の如く、貪欲・瞋・癡は以て堅牢を爲し、攀縁の心は猶し梯蹬の如く、根は畫筆の如く、外なる諸の境界の聲・觸・味・色、及び諸の香等は種種の彩の如く、生死は地の如く、智は光明の如く、勤めて精進を發すは平の如くに相似し、衆生は畫の如く、神通は彼の無量の形服の如く、無量種の業の果報の生ずること有るは、畫の成就せるが如し。

又彼の比丘、禪に依りて觀察するに、心業の畫師に異種の法有り。彼の畫師の如きは疲倦を生ぜず、善く彩色を治め、各各明淨にして、善く好き筆を知りて、畫きて好き色を作す。心業の畫師も亦復是の如く、疲倦を生ぜず、若しは禪定を修めて善く禪の彩を治め、明淨に攀縁して彩の光明の如くにす。修道の師は善好の筆の如くに禪の上下を知り、善く識知するが如くに取る有り捨つる有り、疲倦せざるが如く、是の如くに禪定を(修む)。心業の畫師は彼の禪地を畫きて、彼の好き色の如く、又彼れ是の如し。心業の畫師、若し疲倦すること有らば、則ち畫きて善ならず、地獄・餓鬼・畜生道の處と同じき業の因縁にて、鐵杵を筆と爲し、不善の彩色にて　[五]非器の人を畫く。所謂、地

【一】欲界(Kāmadhātu)。此の界の衆生多く婬欲、食欲等に耽るが故に、欲界と名く。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の總稱なり。後に二十種とあるは、如何なる分類に依れるか不詳。

【二】色界(Rūpadhātu)。物質的のもの、極めて精妙なる處にして、四禪、十八天あり。後に十六地と云へるは、薩婆多部の所立なる、四禪、十六天の分類に從へるなり。

【三】三摩跋提(Samāpatti)將に定に入らんとする時をいふ。

【四】無色界(Ārūpadhātu)。物質的なるもの全く在存せず、只微妙の識心のみありて存する處。後の四處とは、此の界を禪定の優劣に依て、識無邊處、空無邊處、無所有處、非想非非想處の四天に分つを指す。

【五】非器。佛法を受持するに堪えざる人を云ふ。

卷の第五

生死品の三

又彼の比丘、是の如くに觀察す『云何んが衆生に種種の色、種種の形相有り、種種の道、種種の依止ありや』と。又彼れ觀察するに、種種の心、種種の依止、種種の信解有り、種種の業有り。此の是の如き等の種種の諸の色、種種の形相、種種の諸の道、種種の依止あること、譬へば黠慧き善巧の金師、若しは其の弟子の、善・平・堅・滑・好地を觀察し、此の地を得已りて、種種に彩色して種種に雜雜らし、若しは好く若しは醜く、心の作す所に隨ひて、彼の形相の如くにするが如し。心業の畫師、若しは其の弟子も亦復是の如く、善・平・堅・滑なる業の果報の地、生死の地界に、其の解に隨ひて種種の形相、種種の諸の道、種種の依止を作して、心業の畫師は業にて衆生を作す。

又諸の彩色あり。白を取りて白を作し、赤を取りて赤を作し、黃を取りて黃を作し、若しは鴿色を取りて則ち鴿色を僞し、黑を取りて黑を作す。心業の畫師も亦復是の如く、白に緣り白を取りて天人中に於て則ち白色を成ず。何の義を白と名くるや。欲等なる漏の垢の染汚せざる所なるが故に白色と名く。又復是の如く、心業の畫師は赤なる彩色を取りて、天人中に於て能く赤色を作す。何の義を赤と名くるや。所謂、愛しき聲・味・觸・香・色を畫きて觀察せらるゝ衣なり。又復是の如く、心業の畫師は黃の彩色を取りて、畜生道に於て能く黃色を作す。何の義を黃と名くるや。彼れ此れ迭互に血を飲み肉を噉ひ、貪欲・瞋・癡にて更に相ひ殺害するが故に黃色と名く。

又復是の如く、心業の畫師は鴿の彩色を取りて、攀緣して觀察し、餓鬼道に於て、垢なる鴿色を作す。何の義を鴿と名くるや。彼の身は猶し火に燒かれたる林樹の如くにて、飢渴に惱され、種種の苦に逼られ、心業の畫師は嫉心に乘られ、癡の闇に覆はる。又復是の如く、心業の畫師は黑の彩

傳へて虛空夜叉に聞こえ、虛空夜叉は四大王に聞こえ、彼の四大王は四天王に聞こえ、彼の四天王は是の如くに傳へて三十三天に聞こえ、三十三天は是の如くに復帝釋王に向ひて說き、彼の帝釋王は次第に復炎摩天に向ひて說き、彼の炎摩天は展轉して復兜率天に聞こえ、兜率陀天は是の如く具に彌勒世尊に白し、彌勒世尊は化應天に告げ、彼の化應天は復他化自在天に向ひて說きて、是の如き言を作さく、『閻浮提中の某善男子にて』と。是の如き次第は前に說く所の如し。

復修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが比丘、業報の法を觀るや。第十一とは名けて無作と爲し、是れ色に攝せられ、一切法中に色と相應す。若し人戒を受け、一たび戒を發し已らんに、若しは睡り若しは悶え、失心して瘋狂ふも、是の如き善法の相續して轉じ行くこと、譬へば河流の流れて常に斷ぜざるが如く、是の如き人の若しは睡り若しは悶え、失心して癲狂ふ、是の如き無作は常に流れて斷ぜず。無作を名けて色と爲し、不可見對なり。彼れ復云何ん。色業に攝せられ、此の無作色は乃ち是れ一切善法の柱にして、此の是の如き等は十一種の色なり。

力有り、是れ難法に答へ、乃ち是れ法師にして、法の鑽りて穿つ所、善巧の修治ありて、是の如く是の如く、願・施・戒・智あり。是の如く是の如くに十善業道の珠を修治し已らんに、願所に隨ひて若しは轉輪聖王を取り、若しは天王を取り、若しは魔王を取り、若しは梵王を取り、無漏禪を修めて三昧自在なり。是の如く是の如く、彼の正法の珠の善く修治し已れるを名けて普門と爲し、此の普門とは天人の門を謂ひ、彼の正法の珠を名けて普門と爲し、世間城の中より既に出ずるを得已りて、涅槃の門に入る。一切の世人に讃歎せらるとは、正見人・學人の讃むる所なるを謂ひ、王王等に應ふ所の用に任うとは、正法の道に入りて心王に應ふ所なり。若し人、彼の毘琉璃珠を信ぜんに、一切の功德を皆悉く具足し、是の如き寶珠は、正法の珠と相ひ似、相ひ對す。

又彼の比丘、業報の法を觀ること、猶し彼の珠の如し。譬へば珠有りて其の珠に瑕有り、普く清淨ならざるが如きは、一切の門に非ずして鮮白ならず、鑽穿に任えず、修治に任えず、一切の人見れば則ち讃歎せず、王王等に應ふ所の畜用に非ず。是の如く是の如く、彼の外道の法は是れ相似の法にして、瑕有る珠の如し。言ふ所の瑕とは、身見の瑕、戒取を疑ふ瑕を謂ひ、一切の門に非ず、唯是れ地獄・餓鬼・畜生なる三趣の門にして、是れ好き法に非ず、又亦無漏と相應せず、鑽穿に任えず、難法に答ふるに非ず、是れ法師にして、法の鑽りて穿つ所に非ず、王王等に應ふ所の畜用に非ず、[四五]八富伽羅正法道行は是れ心の王なるに、彼の外道の珠は其れに應ふ所に非ず、是の如き法は非法の瑕珠に相ひ似、相ひ對す。若し人の咽を繫らんに、是の如き人は彼れ珠に相似し、用つて咽を繫り已りて地獄・餓鬼・畜生に在り、無始以來生死に流轉す。彼の比丘、是の如くに珠を相似する珠を觀察す。譬へば世間に琉璃珠有りて毘琉璃に似たるが如きは、人有りて之れを見て、毘琉璃と謂ひ、愚癡の凡夫も亦復是の如し。彼の比丘、是の如くに諦かに法と非法を知り已りて、第七地を得。彼の地の夜叉、彼の比丘の清淨の持戒にて第七地を得たるを見て轉た復歡喜し、是の如くに

【四五】富伽羅（Pudgala）。又は福伽羅、富特伽耶等、新には補特伽羅に作り、舊には人、衆生と譯し、新には數取趣と譯す。數數五趣に往來する義なり。こゝに八富伽羅正法道行と云へるは八聖道のことか。

彼の比丘、是の如くに一廂の處に坐して、是の如くに無量種の枝業の果報なる羅網の、遍く地獄・餓鬼・畜生・人・天中に滿つるを觀察し、是の如くに觀已りて法行に隨順す。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが比丘、業の果報を知るや。謂はく、此の業を知りて此の業果を知り、善・不善を知り、此の衆生、身の惡行を成就し、口の惡行を成就し、意の惡行を成就し、賢聖を毀謗らんに、邪見に攝せられ、彼の人、是の業因緣を以て、身壞れ命終りて或ひは地獄に墮ち、或ひは畜生に墮ち、或ひは餓鬼に墮ち、若しは衆生有りて身の善行を成就し、口の善行を成就し、意の善行を成就し、賢聖を讚歎せんに、正見に攝せられ、彼の人、是の業因緣を以ての故に、身壞れ命終りて、則ち善道なる天世界中に生るゝを知る。彼の比丘、是の如くに自の業報の法を觀察し、彼の比丘、是の如くに觀已らんに、魔界の衆生と與共に行ぜずして、終に涅槃に到らん。是の如くに法を行じて厭離の行を修め、勤めて善道を行ひ、終に生死を盡くし、他人を攝取して生死を度ら令め、自ら度り已れる如くに諸の[四三]檀越に及ぼす。彼の比丘、業報の法を知り、地獄・餓鬼・畜生・人・天なる諸趣の業報の法數を觀察す。譬へば清淨なる毘琉璃珠の莊嚴を爲すが故に、繩を以て之れを穿つに、彼の繩の色の若しは青、若しは黃・赤・白・紫等なるに隨ひ、彼の色の如くに見るが如く、是の如き業は珠、報は繩の之れを穿てるにて、彼の比丘、是の業中に於て皆見聞して知り、或ひは天眼にて見て、清淨にして明了なり。又彼の比丘、業報の法を知りて猶し彼の珠の如し。譬へば珠有りて其の色極めて白く、普く淸くして瑕無く、淸淨にして穿つに任え、已に善く修治せられたるが如きは、普き門に殊勝れ、一切世人の讚歎する所にして、王王等に應ふ所の畜用に任え、是の如き功德に相應せる淨珠は、唯王王等此の功德ある淸淨の珠の價を知り、此の珠を取り已りて莊嚴の上に著く。是の如く是の如く、彼の比丘の[四四]十善業道なる淨分の寶珠は、普く白く善淨にして、過を離れて瑕無く、淸淨にして穿つに任え、對治せる法分に大勢

【四三】檀越(Dānapati)。施主と譯す。pati(主)を越と譯せるは、施によりて已が貧窮の海を越ゆる義なりと。

【四四】十善業道。十惡業道の對にて、不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見を十善業道と云ふ。

るとは、世間法の如くんば、火到りて乃ち燒き、力至りて方に割き、若しは出世間には、不善の業到りて地獄・畜生・餓鬼の逼惱するにて、(これ)第二居致なり。業有りて若しは到り、若しは其の未だ到らざるに、悉く能く逼惱るとは、世間法の如くんば、呪毒の勢力の、若しは到り未だ到らざるに、悉く能く逼惱り、若しは出世間には、人の死せんと欲する時、[四一]悕望の相有り、未だ地獄に到らざるにて、(その相表はる)これ第三居致なり。業有りて到るに非ず、未だ到らざるに非ずとは、譬へば世間の種種の藥子の如きは、生ずる力に到るに非ず、未だ生に到らざるに非ず、若しは出世間も亦復是の如く、羅漢比丘、決定して業を受けて量は須彌の如く、彼の阿羅漢、若しは涅槃に入れるも、若しは未だ涅槃せざるも、此の業は阿羅漢に逼る能はず、(これ)第四居致なり。

業有りて現に受け、生れて受くるに非ざるは是れ初居致にして、業有りて生れて受け、現に受くるに非ざるは第二居致なり。業有りて生れて受け、亦現世に受くるは第三居致にして、現に受くるに非ず、亦生れて受くるに非ざること有るは、第四居致なり。何の業は現に受け、生れて受くるに非ざるや。若し世間なれば、王法を犯さば王法の罰を與ふるが如く、此の業は現に受け、生れて受くるに非ず。出世間なれば、布施を修行せんに善人に讚へられ、此の業は現に受けて、他世に受くるに非ず。此れ初居致なり。何の業は生れて受け、現に受くる非ざるや。若しは世間なれば、火に入りて[四二]天を得、出世間なれば、此の世に善を行じ、若しは不善を行ぜんに、異世に果を得ること此れ現に見る可く、(これ)第二居致なり。何の業は生れて受け、亦現世に受くるや。若しは世間なれば、所謂現に受け、世に生れて亦受け、出世間も亦復是の如し。(これ)第三居致なり。何の業は現に非ず、亦生れて受くるに非ざるや。若しは世間なれば、戒を語らず、布施を語らざるが如きにて、出世間には無記の業を謂ひ、現世に受くるに非ず、世に生れて受くるに非ず、(これ)第四居致なり。

【四一】人の死せんと欲する時、未だ地獄に到らざるに、地獄の相の能く人を惱ますを云ふ。

【四二】天の字は、宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

云何んが相似の因有りて相似の果を得、相似せざる因にて相似せざる果あり、因相似せず果相似せず、半ば相似し半ば相似せざること有りや。云何んが名けて相似の因有りて相似の果を得と爲すや。譬へば稻の還りて稻を生ずるが如く、是の如く是の如く、內相似とは善業に相似して是の如くに果を得、謂はく、天人中是れ初居致なり。云何んが名けて相似せざる因にて相似せざる果ありと爲すや。譬へば甜き乳にして而も酢き酪の愛樂す可からざるを生ずるが如く、是の如く是の如く、內不相似とは謂はく、此の世に於て染なる聲・觸・味・色・香等を愛して、地獄の不可愛の果・不可樂の果の、猶し酢き酪の如きを得るにて、（これ）第二居致なり。云何んが名けて因相似せず果相似せずと爲すや。譬へば青等の合して異色を生じて色相似せざるが如く、是の如く是の如く、內不相似とは謂はく、業の果報皆相似せず、其の業果に非ず、所謂、邪見の[三八]外道、[三九]齋の法に羊を殺して天を悕ひ、而も地獄に墮つるにて、（これ）第三居致なり。云何んが名けて半ば相似し半ば相似せざること有りと爲すや。譬へば白縷の以て白衣を成すが如きは、縷細く衣麁く、是れ相似せず、是の如く是の如く、內半相似半不相似とは、細なる不善の業にて大地獄の不善の麁報を得るにて、（これ）第四居致なり。

又彼の比丘、思惟して觀已りて、業果を取らず。更に復思惟して異なる業果を觀るに、有中に於て行じて猶し輪の轉ずるが如く、四居致有り。業有りて未だ到らざるに、衆人共に作して能く逼惱するは是れ初居致にして、業有りて已に到り、方に能く逼惱するは第二居致なり。業有りて若しは到り、若しは其の未だ到らざるに、皆能く逼惱するは第三居致にして、業有りて致るに非ず、亦未だ到らざるに非ざるは、第四居致なり。業有りて未だ到らざるに、衆人共に作して能く逼惱すとば世間法の如くんば、星未だ到らずと雖も國土[四〇]殃を得、若しは出世間には、眼識未だ到らざるに業海能く逼り、所謂、欲心・憂・悲等の逼るにて、此れ初居致なり。業有りて已に到り、方に能く逼

【三八】外道。佛教外の諸の教學、又はその教學を擁するものを云ふ。
【三九】齋（Upavasatha）。宗教的儀軌のこと。
【四〇】こゝにいふ出世間とは、世間の天體現象又は生活上の事柄に對して、佛教の教ふる善惡業道因果を指す。

堅意にて他の惡を隱し、軟滑の語を餐はず、時に語りて善く恭敬せば、寂靜の比丘と名けん。
欲界の業因を知り、亦色界の因を知り、無色も亦諦かに知らば、是れ論を知れる比丘なり。
世俗の語を喜ばず、常に樂みて諸の過を斷じ、境界に於て毒の如くんば、佛は是れ比丘なりと說きたまへり。
若し人欲は泥の如く、意常に是の如くに行ずれば、黠慧き開ける心意にて、生死の縛を解脫せん。
若し人、禪と誦の業にて、懈怠を遠離し、諸の衆生を利益せば、蘭若の比丘と名く。
若しは能く問難に答へ、辯才ありて諸根を調ふれば、當に知るべし是の法師は、草等の爾如からず。
若し身に行じ意に行じ、一切疲倦せずんば、僧の所有る事業を、一切皆能く作さん。
而も財物を求めず、富樂と名の爲にせず、唯僧の意を利益せば、一切の縛を解脫せん。
持戒にて天を悕はず、亦名利を求めずんば、持戒を涅槃と爲し、是れ寂意の比丘なり。
常に衆惡を捨離し、但樂みて善行を行じ、惡知識に近かずんば、是れ佛法の比丘なり。
常に慈を以て心を修め、恭敬する質直の意ありて、學句を缺かざる者は、涅槃を去ること遠からず。
常に老病死を畏れ、世間を悕樂はず、禪を修めて放逸ならずんば、涅槃を去ること遠からず。
若し人無常を以て、自他の空して無我なるを(知り)、禪を修めて上上の智あらんに、涅槃を去ること遠からず。

修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが彼の比丘、五地を得已りて、第六地を得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の比丘、四居致を解す。此の法、

是の如くに則ち相應せず。是の如く是の如く、相似せざる法とは謂はく眼識等にて、異なる因異なる緣にて眼識等生ず。爾の時世尊、偈を說きて言はく。

若しは樂みて法を覺知し、林に在りて禪を行じ、正しく諦相を覺知せば、則ち無上處を得ん。

常に樂みて慈心を行じ、法境界に勤め、諦かに身相を知らば、則ち眞の比丘と名けん。

若し人正しく觀察せば、欲恚も壞つ能はずして、彼れ比丘と言ふことを得、此れに異るは比丘に非ず。

一切の衆生を愍み、一切の貪戀を捨て、一切の縛を解脫せば、則ち眞の比丘と名けん。

若し人、調御の心あらば、境界は壞つ能はず、垢無きこと眞金の如くにして、足るを知れる比丘と名けん。

若し人愛と不愛にて、心意を垢汚さずんば、當に知るべし彼れ善を行じて、一切の過を捨離せん。

威儀嫌ふ可からず、法行にて諸の根を調へ、勇猛なる清淨の意あらば、是の如きを比丘と名く。

若し人常に喜樂して、諸の論中の義を知り、飲食に貪著せずんば、寂意の比丘と名けん。

林に行じ、阿蘭若、塚間に草を敷と爲し、若しは此れを以て樂と爲さば、是の如きを比丘と名く。

諦かに罪業の過を知り、善く諸の業果に達し、深く因と緣とを識らば、是れ惡を離れし比丘ならん。

生死の曠野を破り、惡を壞ちて諸根を調へ、復能く善く友を知らば、寂意の比丘と名けん。

譽に於て心喜ばず、毀訾も心に憂へずして、大海の深きが如くんば、是れ修行せる比丘なり。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが比丘、是の如く十色入を觀察し已りて、法入を觀察するや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の法入中に、三種の法を攝す。謂はく、[三四]數緣滅・非數緣滅・及以び虛空所有無法は、皆法入に攝せらる。是の如くに觀已るに、彼の虛空は亦是れ法入にして、數緣滅とは此の法を智と名け、無量種種に證し已り、數緣に順行して作し已り、煩惱を證斷し、彼の煩惱をして、盡滅し央壞せしめて一切無漏なり。非數緣とは、彼の非數緣を智と名け、受に非ず知に非ず、覺に非ず、又亦疑に非ず、餘人の識は百千の生有り。一切皆眼・耳・鼻・舌・身・意等の識を失ひ、彼れ已に破壞して復更に生ぜざるに、是れを非數緣と名け、此の非數緣は第三虛空なり。此の三法を知るに、生ぜずして是れ常にして、三世の攝に非ず、此れ今生ずるに非ず、亦已に生ぜるに非ず、又當に生ずべきに非ず。又彼の比丘、法入の二種を各各分別す。謂はく色と無色にして、言ふ所の色とは、十色入を謂ふ、云何んが眼識は非見非對なるに、對を見、色を見るや、是の如く耳識は非見非對なるに、云何んが聲を取るや、是の如く鼻識は非見非對なるに、云何んが味を取るや、是の如く身識は非見非對なるに、云何んが觸を取るや、云何んが是の加く、彼の外五入、此の內五入の非見非對なるに、彼の見對と云何んが相ひ得るや。彼の比丘、是の如くに觀察す、眼識生ずる時二種に攀緣し、乃至意識に皆二種有り。是の如き識生ずるに、印の物を印して彼れ印に似ざるが如し。印堅く物軟かくして、印則ち文を生ず。是の如く是の如く、識の非見對なる、見對を一切法中に緣取して第三の印生じ、相似せざる物にて、相似せずして生ず。是の如き諸法は相似せざる物にて、相似せずして生ず、是れ初[三五]居致なり。第二居致とは、二法相似し、還りて相似して生じ、所謂、白縷の白衣を生ずるなり。第三居致とは、二相應せず、相應せずして生ずること、燧より火生じ、木の火と想應せざるを見るが如し。第四居致とは、[三六]稀物從り[三七]稠物を生ずるを見る。乳の酪を生ずるに、乳は稀、酪は稠なるが如し。彼の法

【三四】數緣滅等。三無爲と稱し、新譯には擇滅無爲、非擇滅無爲、虛空無爲に作る。數緣滅とは、智慧に依て煩惱を斷ずる所に顯はるゝ涅槃なり。數とは智慧の法數にして、擇と云ふに同じ。非數緣滅とは、智慧に依るに非ずして、但生死の因緣を缺く處に自ら顯はるゝ滅諦にて、智に依るに非ざるが故に、非數緣又は非擇滅と云ふ。虛空所有無法とは、右二無爲の外に、無礙を以て性と爲して、あたかも色法なる虛空に似たるに名く。文中、彼の非數緣を智と名くとあるは、非數緣無爲なる滅諦を智の內容、又は智の體として云へるなるべく、又非數緣は第三虛空なりとは、虛空を直に無爲の義に用ひたるならむと思はる。

【三五】居致(Koti)。際。邊際、こゝでは分野、領那の意か。第一類、第二類等。

【三六】稀物。稀薄なもの。

【三七】稠物。濃厚なもの。

謂、異異の相有り、異異の體有り。異の相とは則ち十大地法の如く、前に說く所の如し。此の一切の法は是の如くに相を異にし、是れ一相にて、一の因緣の作すに非ず。彼の比丘、是の如く諦かに彼の鼻香入を知り、是の如く諦かに求むるに、此の是の如き物は何物堅有り、何物常有り、何物壞せざるや。此の入は常無く、苦・空・無我にして、彼の人是の如く、鼻・香入の一切は我に非ず、是れ我所に非ざるを知る。是の如く正しく知るに、唯分別のみ有りて此の鼻・香入あり、是の如きは唯縛にして、愚癡の凡夫は黠慧き者に非ず。比丘、是の如く一種に觀察す。

又彼の比丘、舌・味入を觀るに、彼の念等の緣にて舌識を生じ、三和合して觸あり、觸と共に受・想・思等倶生す。彼の隨順して覺るを名けて受相と爲し、是れを知るは想相、是れに對する觸相是れを想ふは思相にして、想は相を緣じ、彼の是の如きの法の各各の自相は、復平等の相なり。異なる因緣にて生じて、是の如き一切の共に一事を成すこと、譬へば箇に因り、鉗に因り、糠に因り水に因り、盆に因り、金師の因緣にて一の指環を作し、若しは手釧を作して、是の如き法は一相の成すに非ざるが如く、此の舌・味入も亦復是の如し。又彼の比丘、諦かに舌入及以び味入を觀、是の如く觀已るに、彼の舌・味入に少法の常・樂・我・淨有ること無く、一切種種に思惟するに、一法を得ず。是の如く是の如く、一相に想應して、彼れ、舌入・味入に於て染を離る。一切の衆生は此の海に沈沒して味海を憙樂し、迭に相ひ障礙し、是の故に復人・天・地獄・畜生・餓鬼なる五道の大海に於て、是の如くに繫縛さる。比丘、是の如くに舌・味入に於て欲を[三三]離れて解脫せんに、舌入は我に非ず、我は舌入に非ず、常に非ず物に非ず、亦動ぜざるに非ず、破壞せざるに非ず、舌・味入に非ず。又彼の比丘、身觸入を觀るに、身觸の因緣にて身識を生じ、三和合して觸あり、觸と共に受・想・思等倶生すること、前に說く所の如し。眼根入に等しく、此の身觸入も、應に是の如くなりと知るべし。

【三三】離の字は、宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

に眼入を觀、是の如くに知り已りて次に復色を觀るに、是の如き色は愛、不愛有り、是れ無記法なるを、不實に分別す。此れ何の堅、何の淨、何の常、何の我、何の樂有りや。是の如く色を觀、思惟して知り已りて、一切の色を知るに、皆悉く堅無く、唯分別のみ有りて、此の色に是の如く愛と不愛と有るも、此の愛、不愛の體は得可からず。此れ唯世間の、若しは愛、若しは憎にて分別して攝取し、若しは愛し若しは憎むにて、是の如くに憶念す。又彼の比丘、既に是の如く眼色入を觀已りて、耳聲入を觀る。彼の聲を觀察するに、云何んが生ずるや。根塵相に對して此の聲を生ず。彼れ是の如くに觀ずらく、『耳の因緣と念の因緣を以ての故に、耳識を生じ、三和合して觸あり、觸と共に受・想・思等倶生す』と。觸と共に彼の受・想・思の生ずるを知り、若しは觸と共に思の生ずるを知るを以て、思と想を覺知す。所謂、長相、遠等の因緣にて其の聲を聞くを得、厚・麁・細の業にて、若しは愛、不愛あり。彼の比丘、是の如き聲を知り、思を知り、想を知り、分分に思量して意識を以て知りて思を知り、受を知り、憶念して思量し、彼の耳聲入を思量し、簡擇して覺知するに、是の如き聲は自體有るに非ず、愛、不愛無きも、唯分別のみ有りて、此の聲是の如くにして愛と不愛有り。是の如き聲は自體有るに非ず、常に非ず物に非ず、破壞して堅ならず、樂無く我無く亦我所無く、唯貪・瞋・癡にて愛・不愛の聲あり。是の如く正しく聲耳入を觀已るに、若し聲を聞く時則ち迷惑せず、憙樂を生ぜず、取らず著せず、堅有りと謂はず。是の如く耳聲入を觀察し已らんには、耳識を樂まずして、耳識の欲を離る。鼻の因緣を以て、香の因緣と念の因緣を以ての故に、鼻識を生ず。若しは近き、若しは遠き、若しは愛・不愛なる、若しは香若しは臭なるは、風と和合して來り、風に因りて聞こゆ。鼻を內入と爲し、香を外入と爲し、三和合して觸あり、觸と共に受・想・思等倶生す。彼の相を知り已り、是の如くに鼻・香入の相を知り、內觸の相を知りて則ち觸の相を知り、思の相も平等く(知る)。是の如き法に於て、一相に攀緣するに異の因緣を用ふ。異とは所

は所謂、眼入・色入・耳入・聲入・鼻入・香入・舌入・味入・身入・觸入なり。云何んが此の十色入を觀察するや。眼入の因緣と、色入の因緣にて、我が此の想生ず。彼れ是の如くに觀ず『眼の因緣と、色の因緣を以ての故に、眼識を生じ、三和合して觸あり、觸と共に受・想・思等倶生す』と。彼の比丘若しは受は受を知り、若しは思は思を知り、若しは想は想を知り、此の色の如きは長、此の色の如きは短、此の色は可愛、此れ不可愛、此の色は可見、此れ不可見、此の色は有對、此の色は無對、是の如くに乃至、此の[30]意名色に十一種有りと、是の如くに分別す。三和合して二觸あり、觸と共に受・想・思等倶生するに、彼の眼觸より受・想・思を生ずるを知るとは、彼の義云何ん。覺知を受と名け、受の時節を知るを、是れを想の義と名け、是れを意轉と名く。此れ等の法生ずるに、異異の相有り、異異の體有り、異の義ありて則ち[31]十大地法の如く、是の如きは異相、是の如きは[32]異異の相にて、念・慧・解脫・受・想・思・觸・欲・進・三昧にして、此の一の攀緣に、異異の相有るなり。是の如き受と想と、是の如き想と相は、異有りて一に非ざること、譬へば日光の一にて異體を緣ずるが如く、是の如く是の如く、異自體の受、異自體の思あり。諦かに眼觸より受・想・思を生ずるを知り、彼れ正しく觀察するに、眼は是の如くに空にして、物無く堅無し。比丘、是の如くに實に彼の眼を見て諦かに道を知り、邪見を遠離し、正しく現前を見る。彼れ、是の如き癡と共なる濁行の不淨の眼想、不眞實の想を捨て、諦かに此の眼を觀るに、唯是れ肉摶・脂・膿・血・淚なる不淨物の合せるにて、是の如く知り已りて則ち能く欲を斷じ、彼れ、此の眼に於て無常を知り已りて、則ち無常を見、彼れ、此の眼は唯肉摶有りて骨匡に在るを知り已りて、心離欲を得、復此の眼を筋の纏縛するを知り已りて、此の眼入を知るに、自他迭互に各相應せず、此の物堅ならずして、一切に我無し。

要を以て之れを言はゞ、是の如き眼は、唯是れ苦物なり。旣に觀知し已りて眼入の欲を離れ、旣

【三〇】意名色、名色のを。意の命名し關與する意味に於いて色法は意名色と呼ばる。

【三一】十大地法。心を大地と名け、心所は心と相應して起りて、心所有の法なればこれを大地法と云ふ。これに十あり。受、想、思、觸、欲、慧、念、作意、勝解、三摩地なり。本文には三摩地を三昧に作り、又作意は進に、勝解は解脫に相當するならんと思はる。

【三二】前の略の字、宮內省圖書寮本に依れ異、別本に思に作る。

ん。
好き處なる阿蘭若に、共の人住せざるに非ず、欲を離れし人にて能く止め、欲を憙樂する者に[二七]非ず。

若し多言語を樂み、境界を愛樂せんに、涅槃の城に向はず、不死處に生れざらん。

王に近き極美なるを食し、常に飲酒して瞋を憙ばんに、唯名字の比丘にして、妄語にて[二八]檀越を誑らん。

若し詐りて方便を說き、數王の門所に到り、他の俗人を衰惱せしめんに、空閑を損敗する者ならん。

若し人妻子を捨てゝ、寂靜の林に依れるも、猶係を戀ふる意有らんに、吐き已りて還りて食するが如し。

彼の比丘、此の寂靜を過ぎ、諦かに諸の陰を觀、實の如く諦かに見、勤修して解脫す。尊長に諮問て、若しは道と非道を諦かに知見するが故に、八分聖道にて解脫の城を求め、常に勤めて道を行じ、平等に正しく見て心垢染無く、其の心寂靜にして、行ずる所の道に於て、樂み修めて多く作す。彼の比丘、是の如き善法なる無漏の業道を和合せしめて修行し、魔衆を減損し、正法の朋を長せり。彼の地の夜叉は是の如く知り已りて轉た復上りて虛空夜叉に聞こえ、虛空夜叉は次第に復四大王に向ひて說き、彼の四大王より乃至炎摩・兜率陀天・彌勒世尊に(聞こゆること)、前に說く所の如し。兜率陀處に一の菩薩有り、極めて大歡喜し、[二九]化應天に向ひて是の如くに說きて言はく『閻浮提中の某善男子は、鬚髮を剃除し、法衣を被服し』と、前に說く所の如し。彼の化應天の轉た復歡喜せることも、前に說く所の如し。又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが彼の比丘、第五地を得るや。彼も見聞して知り、或ひは天眼にて見て、十色入を觀る。十と

【二七】 非の字は、宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

【二八】 檀越（Dānapati)。檀(Dāna)は布施のこと、布施主を檀越と云ふ。越とは、布施によりて、己が貧窮の海を越ゆる義なり。

【二九】 化應天。樂變化天、化樂天に同じ。欲界六天の第五。この天の有情、自ら欲を變現して以て娛樂する故、此の名あり。

爾の時世尊、偈を説きて言はく。

若しは何等の比丘、懈怠の人に親近し、常に勤精進せずんば、是の如きは比丘に非ず。

若し意に懈怠を樂まんに、彼れ善法に應はず、煩惱の根は唯一にして、所謂懈怠是れなり。

若し一の懈怠有らんに、彼の人法を得ず、唯法服のみ有るも、比丘と名け得るに非ず。

若しは讀誦の心無く、禪無く漏盡無くんば、唯比丘の形のみ有りて、是の如きは比丘に非ず。

(比丘)は但林中に遊ぶを憙び、道境界を樂まず、貪る意にて酒色を樂まんに、是の如きは比丘に非ず。

若し能く魔の縛を絶ち、復能く惡業を斷ぜんに、佛彼れを比丘と説きたまひ、(彼れ)妄りに僧の食を食さず。

寧ろ蛇、毒菌、及以び洋銅等を食するも、終に禁戒を破らずして、僧の飲食を食す。

[二三]食に應はざる所を食さんに、是の如きは則ち應はず、若し煩惱を食する者は、則ち是れ地獄の人ならん。

若し人煩惱を捨つること、蛇の窟中より出ずるが如からんに、彼の比丘食に應ひ、婦女を見るを樂むに非ず。

自身を以て質と爲し、心に惡を憙樂せんに、此の人僧寶を汚し、云何んが是れ比丘ならん。

若し利養を貪愛し、境界を喜樂し、婦女を見て染を生ぜんに、[二四]道に非ず俗人に非ず。

若し能く煩惱を燒くこと、火の樹林を焚くが如からんに、善き婆羅門と名け、飲食に貪著せず。

常に樂みて聚落に行き、數數洗浴するを喜び、愚癡にて自他を誑らんに、道法に[二五]迷沒せん。

靜心にて[二六]空閑處に、常に禪を行じて捨てざらば、婆羅門と名くるを得て、善道の境界に入ら

【二三】原文。如是則不應、食所不應食とあるも、譯の都合上、句の前後を顚倒せり。

【二四】既に戒を破る道人にあらず、さればとて出家の生活態にあれば在家人にあらずと罵倒せらる。

【二五】迷の字は、宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

【二六】空閑處。阿蘭若に同じ。前卷の註を見よ。

り、然る後に捨離し、若しは利益有ると、若しは不利益なるは、各各相を異にするを(知り)、過去の想を知り、我が此の業に於て、已に善報を得、已に惡報を得たらんに、前に說く所の如くにす。是の如くに想を知り、若し想有らば、猶憶念す須し。彼の憶念は、彼の想に緣りて生ずること、燈の光明の如し。燈に因り燈に緣り、燈に因緣るが故に光明有り、是の如く是の如く、想に因り想に緣り、想の勢力を以ての故に憶念有り。彼の比丘、第五地を得、是の如くに想を知り已りて、彼の天樂に於て貪樂を生ぜず、地獄の苦に於て怖畏を生ぜず、彼れ平等に見て、想は眞金の如し。彼の想は、比丘、是の如き想を破し、異法にて想を觀て、彼の想を解脫す。復餘人を觀るに、虛妄にして實ならず。我れ今觀察するに、何の因、何の緣、何の因緣にて想ありや。彼れ想を觀察するに、因緣和合して是の如きの想を生じ、若し因緣滅すれば彼の想は則ち滅して、彼の月珠の如し。譬へば[三]月珠の如きは、月に緣り珠に緣りて、則ち清水生ず。想も亦是の如く因緣にて生じ、是の如き想は無因緣に非ず、作者有るに非ず、受者有るに非ず、自然生に非ず。比丘、是の如くに諦かに想陰を觀る。彼れ既に是の如く諦かに想を觀已り、諦かに生滅を知り、復微細に觀るに、河の激流の如く、想も亦是の如くにして、善想生じ已れるも、餘の因緣力に轉ぜられて不善と爲り、不善の想生ずるも、餘の因緣力に轉ぜられて善想と爲り、彼の心の猿猴は初始に破壞せられて、無記は記と爲る。彼れ樂想を觀るも貪樂を生ぜず、無漏樂中に樂想を生じ、樂中に苦想を(生じ)、是の如くに樂を知る。云何んが見るや。善き陰・界・入の若しは生じ、若しは滅するに、受を喜樂せず、想の滅するを樂まず、想の滅して然る後に生を行ずるを取らず、住に非ず滅に非ず、心に識の生・住・滅を悕望せず。比丘、是の如くにして、諦かに此の陰を知り、是の故に魔の境界に住せず、貪欲・瞋・癡の縛る能はざる所にして、常・樂・淨・我等の見無く、無明も生死中に於て、色・聲・香・味・觸・愛・羂をもつて繫縛する能はず。憶念を失はず。彼の憶念生ずれば能く諸の漏を盡し、能く涅槃に到らしむ。

【三】月珠とは、水に映れる月を指すならん。然らば、月に緣りて月珠生ずとあるべきなるに、上の一句變なり。何等かの間違ひならんと思はる。

何者か是れ園なりや。四大天王・三十三天・夜摩・化樂・他化自在は業に相似して生れ、天中より退きて復人中に生れ、人中より退きて復人中に生れ、是れ園生なり。比丘、是の如くに相を緣じて想を(起す)。何物は是れ青なりや。不善の業に攝せられ、地獄の人は闇地獄に入り、是れ青生死なり。比丘、是の如くに相を緣じて想を(起す)。何物は是れ黄なりや。黄色の業に攝せられて餓鬼中に生れ、互に相ひ惡を加へ、迭に共に破壞し、是の如き餓鬼は是れ黄生死なり。比丘、是の如くに相を緣じて想を(起す)。

何者か是れ赤なりや。赤業に攝せられて畜生中に生れ、迭に相ひ血を食ひ、血に於て愛を生じ、是れ赤生死なり。比丘、是の如くに相を緣じて相を(起す)。

何者か是れ白なりや。白色の業に攝せられて天中に生れ、彼の人、白業なる善道の寶價にて天人の生を買ひ、天退かんと欲する時、餘天語りて言はく『汝は善道に(趣き)、人世界中に去らん。人中に死せんと欲すれば、親友・知識・妻子は啼哭し、涙出でゝ面を覆ひ、而して是の言を作さん「甚だ愛愍す可し。今我れを捨てゝ去る。當に好き處に生るべく、人中に生れん」』と。是の如き天人は、是れ白生死なり。比丘、是の如くに相を緣じて想を(起す)。

彼の比丘、是の如くに思惟す。既に人身を得るも、若し善を行じ、施・戒・智を修めずんば、彼の人自ら誑し、流轉して地獄・畜生・餓鬼の曠野中を行き、是の如くに愚癡の凡夫は、是の如き業道を具足し聚集す。彼の比丘、諦かに受を觀察し、想陰を觀察し、攀緣して行じ、諦かに見諦らかに求め、眼に因り色に緣りて眼識を生じ、三和合して觸あるを(觀)、修めて多く想を作し、歷別に觀察す。色の好惡、若しは近若しは遠、若しは長若しは短、若しは方若しは圓、若しは白、三角を見、是の色の形相を歷別に觀察し、彼の諸の相と想とにて、想の因緣を觀、陰・界・入を觀、因緣と相と想とを歷別に觀察す。若し惡業報あらば、分分に正しく因と相應の緣とを證し、因と相應するを覺

他に讀誦することを教へ、捨施を調順にし、正しく梵行を行じ、諸根を寂靜にし、少語にて法を樂み、法の如くに飲食す。若し天是の如くんば、生死則ち短し。爾の時世尊、偈を說きて言はく。

種種なる諸の苦惱あり、飢渴にて口焦け乾き、火炎其の身を燒きて、燒かるる枯れし樹の如く、彼の苦數ふ可からざるも、若し一念にして根を靜め、暫らく佛・法・僧に依らんに、彼の人の生死短かからん。

比丘、是の如くに相を緣じて想を(起す)。

常に搗打たるゝを怖畏れ、若しは雨及び寒と熱と、迭互に相ひ食噉ふなど、是の如き衆苦ありて、彼の苦數ふ可からざるも、若し一念にして根を靜め、暫らく佛・法・僧に依らんに、畜生の生死短かからん。

比丘、是の如くに相を緣じて想を(起す)。

活・黑繩・合・叫喚・大叫喚・阿鼻等の地獄に在りて、種種の極苦に逼られ、彼の苦數ふ可からざるも、能く一念中に於て、心を寂靜にして戒を取らんに、地獄の生死短かからん。

比丘、是の如くに相を緣じて想を(起す)。彼の比丘、是の如くに生死の短相を思惟するに、何物か[一八]四楞なりや。彼れ正しく觀察するに、[一九]鬱單越の人は一切の物に於て、[二〇]我所の心無く、決定して上行し、彼の人、是の如くに四楞の生死あり。比丘、是の如くに相を緣じて想を(起す)。

何物か是れ圓なりや。地獄・餓鬼・畜生等の中は、無智にて輪轉し、自心の行に非ず、是れ圓の生死にして、比丘、是の如くに相を緣じて想を(起す)。

何物か三角なりや。若しは人・善・不善・無記なる種種の[二一]雜業を行じて、地獄・天・人なる諸處に雜生す。彼の不善の業なれば地獄中に生れ、善業なれば天中に、雜業は人中に、若し三業を行ずれば三處に生る。是の如きを名けて三角生死と爲す。比丘、是の如くに相を緣じて想を(起す)。

【一八】四楞。四角のを、この國の人は天上と人間のみ往來する故に夫を圖示すれば四角となる。

【一九】鬱單越(Uttarakuru)。又は鬱多羅鳩婁、鬱多羅究留、鬱單曰、拘盧等と云ひ、勝生、勝處、最上等と譯す。須彌四洲の中、北方の大洲の名。此の國土の莊嚴、國人の風貌等に關しては、本經六十四卷以下(經集部十一)に詳說せらる。

【二〇】我所。我所有の略。有情、妄見にて我れ以外のものを、皆我所有なりと考ふるにより、自身外の萬物を我所と云ふ。

【二一】雜業。娑婆世界は天、人、鬼、畜等雜生するを以て雜生世界と云ひ、この雜生の業因を雜業と云ふ。一人に就て云ふに非ずして、同一界に受生する各人の業雜多なれば、これを雜業と云ふなり。依て直後の雜業人中は、無記人中の誤ならんと思はる。若行三業。於三處生の句に徵するも、無記人中の方妥當なり。

苦に縛られ、刀刃に殺され、老病死有り、迭に相ひ惱害し、百千の苦惱あり。空中を行くが如きは、烏鳥・獯狐・鵄、及び孔雀・鸜・鵒・鷄・雉・鳩・鴿・水雁・靑鳥・護澤・百舌・鸛・雀・[14]命命、他養なる是等諸鳥ありて、是の如くに無量なり。復異なる鳥有り、殺され縛られ、飢え渇き、迭に相ひ噉食ひ、寒熱の苦惱に逼切らる。是の如き畜生の水・陸・空を行く三處は皆畏れ、是れ長き生死あり。彼の相を緣じて想を（起す）。活地獄・黑繩地獄・合地獄・叫喚地獄・大叫喚地獄・焦熱地獄・大焦熱地獄・阿鼻地獄の如きは、第一苦惱にして、不可思議なる無量百千の畏るべき火刀等あり、諸の惡池に墮ちて身分の血洋れ、刀葉林に入り、大火中に入り、墮ちて灰河に在り、火の燃ゆる地を行きて、火燒の苦を受け、堅鞭相似たる無量種の惡苦惱に逼られ、忍耐す可からず。是の如き地獄は、是れ長き生死あり。彼の相を緣じて想を（起す）。彼の比く、慧を聚めて觀察し、彼れ有對を見、彼の長色の業果の因緣に緣り、[15]四諦に緣りて、衆生の種種の諸行を百千由旬觀察し、是の如き道行を分分に思量し、因緣を觀察して生死を厭離す。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが彼の比丘、分分に思量して彼の短相を觀るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の比丘、魔軍を動さんと欲して、云何んが分分に思量して、短生死の相を觀察するや。戒を受けて[16]頭陀し、精勤し布施し、戒を持し智を行じ、尊長を恭敬し、直心にて歡喜し、是の如くに正見にて父母を敬重し、佛を見、法を聞きて恭敬し供養し、諂曲を行ぜず、慢らず謚らず、善知識に近き、信を守りて正しく行ひ、直心にて業を起して身・口・意を嚴らんに、是の如きの人の生死は則ち短し。彼の相を緣じて想を（起す）。若し天中に生るゝに、則ち放逸有り。歡喜園中、間錯れる寶の輦、種種の樹林、水池の蓮華あり、好き栴檀有り、勝妙なる瓔珞の莊嚴は端正にして、[17]劫波樹・河流・泉林有り、遊食して快樂す。是の如き樂を捨てゝ禁戒を受持し、飲食して遊行し、是の如く種種に禪思し讀誦し、樂みて善人を見、

【一四】命命（Jīvajīvaka）。音譯して耆婆耆婆と云ひ、共命鳥、生生鳥とも云ふ、一身二頭の鳥なりとせらる。

【一五】四諦（Catvāri āryasatyāni）。一に苦諦（Duhkha-āryasatya）、生死の苦なり。二に集諦（Samudaya）、苦報の因たる業煩惱を指す。三に滅諦（Nirodha）、涅槃の妙果にして、業煩惱を滅盡して生死の苦を離れ、畢竟寂滅の境なれば滅諦と名く。四に道諦（Nārga）、八正道を云ひ、涅槃に通ずる道なれば、これを道諦と云ふ。前二は是れ迷界の因果、後二はこれ悟界の因果にして、これ聖者所見の眞理なれば、これを又四聖諦と云ふ。諦とは眞實にして、虛妄ならざる義なり。

【一六】頭陀（Dhūta）。又は杜茶、杜多。抖擻、陶汰、修治、浣洗等と譯す。衣食住に對する執着を拂ひ去る修行のこと。

【一七】劫波樹（Kalpataru）。劫波（Kalpa）は時の義。時に應じて一切所須の物を出す樹なり。

又復、天中に長き生死の相あり、彼の相を緣じて想(を起す。)是の如き天中は境界を得ざるに、境界の聲・味・色・香を喜樂し、貪欲・瞋・癡あり、種種に放逸にして、婦女に習近き、歡喜園中の種種に莊嚴れる寶間・宮殿・樹林・水池の妙蓮花有るにて、遊戲して快樂し、天の諸の花の香、種種の味を食し、舞食して遊行し、喜樂に貪著し、天の[五]栴檀末を若しは散らし若しは塗り、[六]曼陀羅花と天の歌の音聲に心に喜樂を生じ、正法を離れて、是れ長く生死し、若しは天中に生るゝも、是の如きの事有り。彼の長相を緣じて、則ち長想を生ず。

又復、餓鬼は長き生死の相あり。彼の相を緣じて想(を起す。)惡業行の故に飢渴にて乏瘦し、雨る火、身に墮ちて咽は則ち針の如く、脇狀は山巖(又は)空の破瓮の如く、姤嫉を以ての故に、刀劍等を以て迭に相ひ斫割き、黑闇處に在りて嶮岸に墮墜ち、疾走して河渠・陂池に往趣す。[七]閻魔羅人の、手に刀杖若しは利钁等を執りて、斫打ちて之れを斲るに、大苦惱を受け、人の唾吐を食し、是等の惡食は無量百千にして、堪忍す可からず。種種の苦を受けて眼中より淚出で、頭髮は蓬亂れて身を覆ひ面を蓋ひ、百千の蟲有りて其の體に遍く、惡身を擔負ひて身に一切の病饒くして、長く生死を行ず。常に鐵烏有り、爪嘴火に燃え、其の眼を攫啄し、口は燒けたる樹の如し。迭互に相ひ食ひ、三十六百千億數爾許由旬に於て曠野中を行き、主無く導無く、飢渴に逼られて其の身は火に燃え、黑闇の處に入る。是の如き餓鬼は邪見に誑され、正法を聞くことを離れ、是れ長き生死あり。彼の相を緣じて想を(起す)。又復、畜生は迭互に相ひ食ひ、非理の淫欲にて應ふ所を知らず。若しは水中に生れて水中を行き、心燥き常に飢え、常に他の取らんことを畏る。黿・鼉の[八]慳獸、及び水獺等あり、魚には則ち[九]提彌・[一〇]提彌宜羅あり、[一一]銮魚と名くる有り、[一二]金毘羅魚あり、[一三]那迦羅魚を大口魚と名け、蛤・蠡等の虫ありて、常に一切の時に大なる者は少を食ひ、常に綱等の遮障りて取らんことを畏る。又陸地を行くに、麞・鹿・水牛・猪・象・牛・馬・驢、及び犛牛・麋・熊・羆等あり、種種の

【五】栴檀(Candana)。治病の功有るに依り、與樂と譯す。香木の名。
【六】曼陀羅花(Mandāra)。白華、天妙華、圓華等と譯す。
【七】地獄の獄卒のこと。
【八】慳獸。慳のかたき意より、甲の堅き黿、鼉を慳獸と云へるか。明本には怪獸に作れり。
【九】堤彌(Timi)。大魚の名。
【一〇】堤彌宜羅(Timigila)。大魚の名。織田氏の佛教辭典には、玄應音義を引用して、右の二者は同一の魚とせらる。
【一一】瓮魚。瓶の形をした魚か。
【一二】金毘羅魚(Kumbira)。又音譯して倶毘羅、倶吠羅、鳩鞞羅等と云ひ、蛟龍、威如王、鰐魚等と譯す。鰐を指すならん。
【一三】那迦羅魚。摩迦羅魚Makara 大口魚、鯨魚、海の怪獸。

卷の第四

生死品之二

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。彼の比丘、受陰の地分の、略[一]六天の知見せる所の如きを(觀察せり。) 又復、如何んが第五地を得るや。又彼の比丘、已に諦に受を見たり。彼の六天衆の既に業を作し已れるに、想陰と相とを觀、分別し思量すらく『何者の地中にて、我れ彼の想と共に、白法を行ずるや』と。正しく思惟し已りて一分中に行じ、彼の想を觀察して白法の相を行ずるなり。初に是の如き法を、分分に善く知る。云何んが[二]有見[三]有對を緣じて、不可見無對の想を生ずるや。彼の比丘、更に廣く想を觀るに、彼の想は十一種の色に攀緣す。所謂、長・短・方・圓・三角・團及び青・黃・赤・白・紫等なり。

彼の長相に依りて、則ち長想を起す。是の如き世間は愚癡にして智少なく、無邊の生死に業果にて退き生れ、愛するとは離れ、寒熱、飢渴の患あり、他の爲に使を作して若しは奴僕等となり、迭互に相ひ食ひ、是の如くに和集し、虛妄にして實ならず。一切所有の饒益せざる事は、是の如くに無量にして、堪忍す可からず。無量百千億那由他の一切の作す所の心・口・意にて、苦惱の業を起作して以て莊嚴を爲し、虛妄・誑詐・愚癡の凡夫は恒常に是の如し。人中に則ち農作等の苦あり、迭に相ひ欺誑きて斗秤を平にせず、言ひて訟諍ひ鬪ひ、治生に利を求めて王等に參承へ、海に入りて遠く行き、種種に鬪諍ひ、田を作り放牧し、夷人中に生れて喜びて邪見を生じ、根を具足せず、正法を聞くことを離れ、佛無き處に生れて善の因緣無く、無難なることを得[四]難くして、心常に飲酒・婬盜・貪欲・瞋恚・妄語・兩舌・惡口・綺語を樂み、是の如きの人は、是れ長き生死あり。彼の長相を緣じて、則ち長想を起す。

【一】 六欲天に住する天衆のこと。

【二】 有見(Sanidarśanam)。十八界を有見・無見に分類するに、色界のみを有見に攝する。眼根の色を見るが故に見と云ひ、又見とは言說にて、色の言說を有するが故に有見と云ふ。

【三】 有對(Sapratigha)。對は礙の義にて、障礙あるものを有對と云ふ。十八界に就て、障礙有對、境界有對、所緣有對の三種あり。

【四】 難の字は、宋・元・明三本に依る。別本に雖に作れり。

又彼の比丘、更に異法を以て微細に受を觀る。眼觸受を生ずるに、麁有り細有り、垢重くして輕からず、癡と相ひ隨ふ。某衆生の受は、彼の某甲の受より勝るゝが故に能く壞し、餘殘を少く在らしめ、彼れ依止せず。是の如く、耳受・鼻受・舌受・身受・意受(も是の如し。)彼の比丘、是の如くに修め已りて受觀を成就し、魔軍を壞たんと欲す。彼の地の夜叉は轉た復歡喜し、是の如くに上りて虛空夜叉に聞え、彼の地の夜叉と虛空夜叉は四大王に聞え、彼の地の夜叉、虛空夜叉、彼の四大王は四天王に聞え、彼の地の夜叉、虛空夜叉、及び四大王、幷に四天王は帝釋に向ひて說けり。時に帝釋王、卽ち白象瑿羅槃那に乘り、炎摩天に向ひ、歡喜心にて說を具足すること前の如し。彼の炎摩天、帝釋の說くを聞きて心に歡喜を生じ、種種の色の天寶・妙鬘・莊嚴の具・香を以て身を莊嚴り、種種の乘に乘り、愛す可き聲・觸・味・色・香等ありて種種に愛す可く、樂を說く可からず、心大に歡喜せり。炎摩天衆、兜率天に向ひて四萬由旬なるに、七寶の殿舍の勝妙なる光明と種種の宮室あり、意分別城ありて一萬由旬なり。無漏樂菩薩坊巷と名け、彌勒[三八]世尊住して彼處に在し、諸の菩薩五百人有りて倶なり。彼の炎摩天、世尊の所に至りて心大に歡喜し、天の衣服を正して一肩に在らしめ、右膝を地に著け、合掌して禮し已り、額に合掌して是の言を作さく『天今當に知る可し。閻浮提中なる業地の處、閻浮提に依れる某國、某村、某聚落中の某善男子にて、是の如き種姓、是の如き名字なるは、鬚髮を剃除して法衣を被服し、正信にて出家し、持戒し修行し、尊長を恭敬して、第四求の無漏善を獲得し、諦かに受地を見て魔衆を破壞し、堅牢なる善ありて正法の橋梁を作し、白法を開顯し、彼の魔分をして威力有ること無から令め、天の朋を增長して大勢力有らしめたり。我が如きは、今、天に向ひて說く所なり』と。彌勒世尊、是の如く聞き已り、炎摩天に向ひて是の如く說きて言はく『天の朋に力有り、魔分を劣弱ならしめ、正法の朋を長し、煩惱の縛を緩め、魔軍を戰動かしむること、我れ聞きて歡喜す』と。

【三八】彌勒(Maitreya)。慈氏と譯す。現に兜率天の內院に在り、人壽八萬歲の時、此の上に出世して正覺を成じ、釋迦佛の處を補ひて衆生を濟度すとせらる。

又彼の比丘、次いで舌受を觀るに、誰か舌受を覺ゆるや。此の受を觀察するに、意識に繫縛されて、是の如き舌受は彼の意に依止し、彼の縛に攀緣す。彼れ因緣にて生じ、作者有るに非ず、受者有るに非ず、更に別物無く、唯行聚の因緣力のみ有りて生ず。又彼の比丘、身觸の受を觀るに、誰か此の受を覺え、此れ何誰の受なりや。是の如く觀察するに、意識に繫縛されて此の如き身受あり、作者有るに非ず、受者有るに非ず、更に別物無く、唯行聚の因緣力のみ有りて轉ず。

又彼の比丘、意受を觀察す。誰か意受を覺ゆるや。意受を觀察するに、意は法を緣じて意識を生じ、三和合して觸あり、觸と共に受の生ずること、譬へば種種の無量の香物、衆多和合して則ち善き香を生ずるが如し。此の善き香生ずるは、是れ一の因に非ず。此れ亦是の如くに、因緣和合して一切の受を生じ、作者有るに非ず、受者有るに非ざること、譬へば莖・葉・鬚・蕚等の緣にして蓮華の名生じ、彼た一の因に非ざるが如し。是の如く眼に依り、色に緣り空に緣り、念に緣り明に緣りて眼觸の受を生じ、眼に依りて生ずる是の如き受は、一從り生ぜるに非ず、一物の生ぜるに非ず、一の合生せるに非ず、一相の生ぜるに非ず、聚集して生ぜるに非ず、應化して生ぜるに非ず。彼の比丘、是の如く、是の如く諦かに此の受を求むれば、是の如く、是の如くに白淨法を生ずること、甘蔗の汁を器中に火もて煎るに、彼の初に垢を離れしを頗尼多と名け、次いで第二煎にて則ち漸く微に重きを名けて巨呂と曰ひ、更に第三煎にて其の色則ち白きを白石蜜と名け、此の甘蔗の汁は、是の如く、是の如くに煎復更に煎るに、垢を離れて漸く重く、乃至色白きが如し。比丘、是の如くに器と智の火に緣りて、以て相續する甘蔗の汁を煎て、(得たる)初始の禪觀は頗尼陀の如く、次いで復第二は則ち巨呂の如く、次いで復第三は白石蜜の如く、是の如くに比丘、心相續法を智火を以て煎て、則ち無漏鮮白の法を成じ、垢を離れて雜らず、出世の法生じて生死を出で、鮮白にして垢を離るゝこと、猶し洗衣の如し。

し已りて次に受を觀察せば、若しは苦、若しは樂、不苦不樂なり。是の如く觀じ已り、思惟して憶念すらく『我が此の心は、壞すと爲んや、壞せざるや』と。又復彼の味に攀縁して生ずる所の受を觀るに、能く心を破壞す。是の如くに觀已りて、不愁の繩を以て、彼の心を繫縛して攀縁柱に在らしめ、行の如くに修取す。心若し是の如くんば、舌受の味愛も劫ふ能はざる所なり。又彼の比丘、身の觸を觀るに、是の如き身の觸は彼の觸の受と共に攀縁柱を縛り、若しは善・不善、若しは記・無記なり。彼の觸の受を觀、若し心動壞せんに、復以て攀縁柱に縛し已りて之れを調伏せば、復破壞せず。

又彼の比丘、次に意を觀察す。意に法を縛する受ありて、若しは善・不善、若しは記・無記なり。受意壞するを見ば、彼の比丘、不愁の繩を以て彼の心を繫縛し、攀縁柱に在らしめて之れを調伏せんに、則ち破壞せざらん。彼の比丘、亦境界の身に入る受を觀已らば、諦かに五受を知りて不盡處を得ん。彼れ智燈を以て眼觸の受を觀るに、何者は受を覺ゆるや。彼れ觀るに、意識此の受を縁生し、意縛り心取り、一切世間の愚癡の凡夫は、分別の火を以て自ら燒燃く。此の受は無き者にして、唯[三七]行聚生じ、唯行聚滅し、因縁に縛らるゝなり。眼觸にて受を生ずるを隨順して觀已り、隨順して行ずれば、彼れ取る能はず、心動轉せず、死せず亂れざらん。又彼の比丘、耳受を觀察するに、何者は耳受にして、誰か此の受を覺ゆるや。彼れ見るに、意識隨順して繫縛し、此の如き耳受は意識に共に繫縛されて彼の意に依止す。此れ作者無く、亦受者無く、因縁にて生ず。是の如き耳受は作者有るに非ず、受者有るに非ず、唯行聚の因縁勢力有りて、若しは生じ、若しは滅す。又彼の比丘、鼻受を觀察するに、誰か此の受を覺ゆるや。彼れ受を觀察するに、意識に共に縛られて彼の意に攀縁し、彼の意に依止し、彼の因縁に因りて隨順して生じ、唯行聚のみ有りて、作者有るに非ず、受者有るに非ず、相續して轉縛す、鼻受を觀已らば、受なる者を離れん。

【三七】行業の聚（アツマリ）業の力のこと。

と名く。

能く諸の煩惱を殺し、平等なる善き意にて觀、善く出入の息を知らんに、是の如きを比丘と名く。

若し能く次第して知り、諦かに修むる所の法を知り、善く道と非道を知らんに、是の如きを比丘と名く。

樂を得るも心に喜ばず、苦に遇ふも則ち憂へず、憂と喜に心平等ならんに、是の如きを比丘と名く。

若し諦かに老死を知り、天と修羅を禮敬し、衆生の善惡を知らんに、是の如きを比丘と名く。

衣鉢は常に足るを知りて、賊寶を聚積せず、少欲にて梵行する、是の如きを比丘と名く。

一食にして垢を離れ、諸の味に貪著せず、能く利養を捨てんに、是の如きを比丘と名く。

捨心と非心を行じ、姤嫉の惡を捨離し、已に一切の過を燒けるに、是の如きを比丘と名く。

彼の比丘、內心に思惟し、正法に隨順して是の如くに受を觀じ、旣に受を觀じ已りて微細の智を得、更に深く觀察す。眼觸にて受を生ずるに、攀緣に順行し、是の如くに眼の第二の攀緣を觀ずれば、相ひ與共に滅し、我が眼觸の受と、攀緣已に滅せん。聲の攀緣と共に我が愛受を生じ、若しは不愛の受生ずれば、心共に滅すること莫し、彼の比丘、不愁の繩を以て、彼の心を繫縛して攀緣柱に在らしむるに、彼の受滅し已り、彼の聲の攀緣は、耳受と共に滅せん。鼻は香を緣じて鼻受を生ず。彼の比丘、復鼻受を觀じて是の如くに思惟すらく『我が鼻は香と共に鼻受を生じ、若しは善、不善、若しは記、無記なり。我が此の鼻受は、心共に滅する莫し』と。彼の比丘、若し心の壞するを觀れば、是の如き攀緣を數數習行して調心を修取し、善法を心に熏ず。無漏の善法は、爾の時動かず。舌の味を攀緣するに、此の攀緣は若しは善・不善、若しは記・無記なり。彼の比丘、攀緣を證

諸根寂靜にして、境界に貪著せず、行きては一尋の地を視んに、是の如きを比丘と名く。
他を罵る家に行かず、一向販賣せず、四出の巷を樂まずんば、是の如きを比丘と名く。
歌舞を視るを樂まず、人饒き處を樂まず、樂みて塚間に住まんに、是の如きを比丘と名く。
唯當日の食を取りて、明日の食を取らず、食は[二三]二分にて便ち罷めんに、是の如きを比丘と名く。
妙好の衣を捨離て、塵土衣を憙樂び、食と行とに倶に相應せんに、是の如きを比丘と名く。
若しは世業を作さず、世業の果を望まず、苦みて須ふる所を求めずんば、是の如きを比丘と名く。
欲と瞋を解脫し、癡心の泥を捨離して、惡法汚す能はずんば、是の如きを比丘と名く。
已に一切の結を過ぎ、一切の使を捨離して、一切の縛を解脫せんに、是の如きを比丘と名く。
[二四]八分聖道に遊びて、涅槃の城に趣向き、惡意煩惱を離れんに、是の如きを比丘と名く。
堅き意と寂靜の根ありて、欲の淤泥を捨離し、常に一の意に正しく住まんに、是の如きを比丘と名く。
若しは已に地智を得て、寂靜の心にて諦かに見、諸地の善惡を知らんに、是の如きを比丘と名く。
漏法と無漏法は、皆因緣にて生ずるを、一切種種に知らんに、是の如きを比丘と名く。
正直く梵行を修め、寂靜にして懈怠を離れ、早く起き淨く恭敬せんに、是の如きを比丘と名く。
樂みて定と慧を修め、復[二五]四禪を樂み、亦[二六]阿蘭若を樂まんに、是の如きを比丘と名く。
鳥の虛空に飛びては、影の則ち常に相ひ隨ふが如く、若し意正法に順はんに、是の如きを比丘

【二三】一日に二回の食をとる意か。

【二四】八分聖道。八聖道、八正道、八分道、又は八支等と云ふ。比丘の修行して以て涅槃に趣向すべき、中正の理に契ひたる八の正道にして、これ聖者の道なれば聖道(Ārya-mārga)と云ふ。正見(Samyak-dṛṣṭi)、正思惟(Samyak-saṅkalpa)、正語(Samyag-vāk)。正業(Samyak-karmānta)、正命(Samyag-ājīva)、正勤(Samyag-vyāyāma)、正念(Samyak-smṛti)、正定(Samyak-samādhi)、の八これなり。

【二五】四禪(Catur-dhyāna)。四禪定、四靜慮と云ふ。此の四禪を修めて、色界の四禪天に生るゝなり。

【二六】阿蘭若(Āraṇya)。空閑處、寂靜處、意樂處等と譯し又音譯にて阿蘭那、阿練若とも書く、比丘の修行に適したる。村を離れし靜かなる場所を云ふ。

し、此の因緣を以て、一切の愛想あり。若し業を作さずんば、業無きを以ての故に、則ち愛有ること無く、愛無きを以ての故に、則ち受有ること無し。彼の因緣とは、譬へば炷と爐と油と火の因緣にて、則ち燈焰の念念出生すること有るが如し。比丘、是の如くに受の因を觀察して、諦かに業因・業法・業力の、一切の受を生ずるを觀ず。爐は身に喩へ、油は根に喩へ、炷は受に喩へ、欲・瞋・癡は火にて、念念に生ずる焰は念念の智に喩へ、明は智慧に喩ふ。彼の修行者は、是の如くに、一切の三界に皆此の受あるを見知す。譬へば金師若しは其の弟子の、好き眞金を得れば則ち能く妙なる莊嚴の具を造成するが如く、是の如く是の如く、彼の巧作師は修行者に喩へ、彼の眞金は善に攀緣するに喩へ、若し善に攀緣せんに、則ち善業有りて涅槃道を得、不善に攀緣せんに、不善の業を得。

爾の時世尊、偈を說きて言はく。

諦かに因と緣與を知り、決定して微細の義(を知りて、)解脫の流を憙樂せんに、愛の使ふ能はざる所ならん。

衆生は業の流に隨ひ、一切は業の中に生れ、業果に繫縛され已りて、有中の險處を行く。

若しは不善の業を離れ、常に善業を喜樂する、是の如き修行は、垢無き月の光の如し。

彼れ能く惡業を燒くこと、火の乾草を焚くが如く、三界の光明にて、諸の惡法を解脫せん。

若し人解脫を悕ひ、心に生死を樂まずんば、生死は縛る能はずして、鳥の虛空に飛べるが如し。

諦かに受の從ふ所を知り、善く受の果報を知らんに、則ち解脫を得て、彼れ諦かに三界を知らん。

苦樂も動かす能はず、善惡にて心を經らず、世間を見ること焰の如き、彼の修者は普く愛さん。

意常に錯謬らず、恒に法行を樂み、心比丘の法を樂まんに、是の如きを比丘と名く。

數見る親きを樂まず、善人を見るを樂み、出家して舍の垢を離れんに、是の如きを比丘と名く。

明に緣り空に緣り、憶念に緣りて眼受を生ず。所謂、苦と樂と不苦不樂なり。猶し彼の瓶の、若しは好き因緣なれば則ち好き瓶を生じ、若し惡しき因緣なれば則ち惡しき瓶を生ずるが如く、是の如く是の如く、若し緣にして善き緣ならんに、善き眼受を生ぜん。耳・鼻・舌・身・意等も皆爾なり。若し善受を合して次第に行に順ぜば、則ち涅槃に至り、若し不善の因緣にては不善の眼受を生じ、欲・瞋・癡に緣りて、生死中に於て、地獄・畜生・餓鬼なる惡道の境界に墮ちん、と。彼の比丘、一切の所有る善行・善果に隨順し、思を縛して彼の受を觀察するに、依止する所無く、作者有るに非ず、因有りて起るに非ず、因無くして起るに非ず、亦聚集せるに非ず、常に非ず色に非ず、不念の念に非ず、顚倒法に非ず。比丘是の如きに此の受陰を見ば、則ち有愛を滅し、意樂と共に生ずる垢惡の愛と、一切の生死を皆無常なりと見、則ち出道に於て、樂み修めて多く作さん。彼の比丘是の如く修め已りて、一切の結を斷じ、諸の使を遠離せん。何者を結と爲すや。所謂、愛結・障礙結・無明結・見結・生結・慢結にして、此の諸の結を斷ず。何者を使と爲すや。謂はく、欲染使及び有染使・見使・障礙使・慢使・無明使なり。思量結・疑結・妬結・嫉結・疑使なる此の因緣を以て、[一七]三有に流轉し、[一八]三地に行き、[一九]三惡に輪轉し、[二〇]三時に隨ひ行き、三品中に於て三受の熏に隨ひ、[二一]三生に隨ひて生死の因緣に轉ず。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが彼の比丘、是の如き眼の因緣を覺知するや。彼れ是の如くに觀ずらく『眼は何の因、何の緣にて生ずるや』と。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、業を眼の因と爲し、眼は業に因りて生じて是の如く轉行すること、譬へば世間の[二二]尼居陀子は、子從り尼居陀樹を出生し、樹は復子を生じて因緣繫縛するが如く、是の如く是の如く、業に因りて生じ、業にて復轉生するを知る。若し生るれば、則ち老死・憂悲・啼哭・苦惱有り。是の如き業因にて、愛の羂に縛られ、一切愚癡の凡夫の人は、生死海中に是の如くに輪轉

【一七】三有。欲界、色界、無色界の稱。有は存在の義なり。
【一八】三地。苦道、煩惱道、業道の謂ひか。不明。
【一九】三惡。詳くは三惡趣、三惡道と云ふ。地獄、餓鬼、畜生なる、惡業にひかれて趣向する三趣を云ふ。
【二〇】三時。印度にては一年を三に分つ。即ち、熱際時、雨際時、寒際時なり。之れを三際時又は三時と云ふ。又晨朝、日中、黄昏を三時と云ふことあり。此處では或は過去、現在、未來のことを三時と云へるか。
【二一】三生。過去世(前生)、未來世(後生)、現在世(現生)の三を云ふ。
【二二】尼居陀。尼拘陀(Nyagrodha)を指すならん。尼拘陀は卽榕樹のことなり。

心の受なり。是の受を勝ると爲し、能く漏受を障ふること、譬へば夜中に衆多の星宿あるも、一月の光明能く衆星を障ふるが如し。又彼の比丘、隨順して彼の微細の受を觀察するに、何物は多受なりや。謂はく、眼・耳・鼻・舌・身の起す所にして、此れは是れ漏受なり。何物は善を發すや。彼れ世間の有漏の受の多くを觀るに、復無漏に非ずして、世間の力無きこと、夜闇中の星宿の光明の、月有る時に於て、善く照す能はざるが如し。又彼の比丘、彼の受を觀察すらく『我が此の受は、幾許の時住するや』と。彼れ我が受の生滅の相と住するとを觀るに、譬へば電光の如し。又彼の比丘、是の如くに觀察す。『此の義如何ん。眼受の因緣にて鼻受を生ずるや不や』と。彼れ正しく觀察するに、意根攀緣せば、其の受則ち一切の根受を壞すること、譬へば牛・馬・駝・驢・水牛の各各相を壞するが如く、一の因緣に非ず。是の如く是の如く、五根の起る所、喜樂びて攀緣し、一の境界に非ずして、相境界を壞し、境界の根を壞すこと、譬へば牛・馬・駝・驢・猪等の如し。彼の比丘是の如くに受を觀じて、微細の智を得。

彼の比丘、能く彼の智に於て樂み修めて多く作し、樂受を觀じ已りて隨順して受を觀じ、隨順して觀じ盡して是の如く憶念すらく『我が此の受は、眼・耳・鼻・舌・身・意より起る所なり。生じて何れより來り、滅しては何所に至るや』と。彼の比丘隨順して觀察し、受の盡滅するを見て道理を思惟し、是の如くに觀じ已らば、則ち眼受生ずるも處來無く、滅しては所至無きを知らん。我が此の眼受は本無くして今有り、已に有りて還りて無し。我が此の眼は、來處有る無きこと海中の水の如く、滅して所至無きこと、河の下り行きて大海に到るが如し。我が此の眼受は本無くして今有り、已に有りて還りて無く、因緣にて生ず。耳・鼻・舌・身・意受も皆爾り。譬へば陶師若しは其の弟子の、輪と泥團と人の功勢力に因り、水に緣り杖に緣りて瓶を生ずるが如し。是の如き瓶は處來有るに非ず、滅して所至無く、此の瓶は因緣にて生ず。是の如く是の如く、眼に因り色に緣り、

なり。魔分を損滅し、正法の朋を長せり』と。彼の炎摩天は、帝釋王の彼の白象瑿羅槃那に乘れるを見、彼の炎摩天は是の如きを見已りて心に歡喜を生じ、帝釋王に向ひて是の如くに說きて言はく『汝今帝釋よ、閻浮提人の法行に隨順し、能く愛念を生ぜり。是れ汝に應き所なり』と。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが彼の比丘、捨受を觀察するや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の比丘是の如くに諦に受を觀察す。眼識の因緣にて不善の受を生ずるも、彼の受第二の善を緣ぜんと欲すれば、不善の受滅して善受生ずることを得、彼の記の緣滅すれば、記の受則ち滅して無記の受生ず。是の如く次第して耳觸の受を生じ、鼻觸の受を生じ、舌觸の受を生じ、身觸の受を生じ、意觸の受を生ずるに、是の如くに受を知りて善法を滿足し、煩惱を微薄からしめ、彼れ是の如くに修む。復細に受を觀じて、彼れ法受を觀る。法受の共に障ふること、燈の光明を日光の能く障ふるが如く、是の如き二受の障ふることも亦是の如くにして、善受既に生ずれは不善の受を障ふること、應に是の如くなりと知るべし。譬へば燈明の如きは、第二の燈明相ひ障ふる能はず。又受を思量するに、何の受は何等の受と共なるを以て、畢竟相ひ障ふるや。彼れ見るに、善受は不善の受と共なれば、畢竟相ひ障ふ。譬へば燈明の如きは、星宿の光明との二相ひ障へず。

又彼の比丘、思量して觀察す。何受、何受は、何物、何物を、是の如く能く壞すや。彼れ是の如くに觀ず。無漏を緣ぜる受の漏を緣ぜる受を壞すこと、譬へば火光能く雪の光を障ふるが如し。又何者の受は何者の受より勝れ、是の如く復起るや。是の如くに觀察す。彼の不善の受の、善受を障へて後時に復起ること、譬へば晝の日の、月の光明を覆ふが如し。彼の月の光明を、夜闇中に於ては、能く障覆ふこと無し。又彼の比丘正しく受を思量するに、多くの受の和合せるを、一受能く障へて彼の多受より勝る。彼の多受を觀るに、是れ世間の受にして、彼の一受とは、是れ出世間無漏

りて、復此の受に於て更に深く觀察す。眼觸の受を生じ、生ぜんと欲し已りて生じ、及び此の受の住するを我れ悉く之れを知り、我が受の滅し、滅せんと欲し已りて滅するを知る。

又復我が耳觸の受を生ずるを知る。我が眼觸にて受あるも、已に滅し已に沒し、已に厭ひ已に棄つれば、更に復來らずして、此の受滅し已らん。次第に復耳觸受を生ずるを觀るに、苦に緣り樂に緣り、不苦不樂にて耳觸受を生ず。是の如く是の如くに隨順して觀察し、是の如くに知り已らば、則ち耳受に於て喜樂を生ぜずして、彼の受を知り已らば、欲を離れて解脫せん。

耳觸の受を生ぜるを是の如くに滅し已りて、復鼻の受の生ずるを觀る。鼻の受を生じ、鼻觸の因緣にて我が此の受生じ、樂の緣にて樂を生じ、苦の緣にて苦を生じ、不苦不樂の因緣の故に不苦不樂を生ずるを知り、是の如く是の如く隨順し觀察して、鼻觸の受を生ずるを實の如くに正しく知らば、受は則ち滅沒せん。受の滅沒せるを知り、彼れ既に滅し已りて、鼻の緣にて苦受・樂受・不苦不樂受を生ずるを知らば、我れ若し後時に、鼻の緣にて受を生ずるも、是の如きの觀察によりて、亦是の如きを生ずるも、生じ已りて復滅せん。

彼れを既に滅し已りて、舌の受を生ずるを觀る。後時に受を生ずるに亦三種有ること、前に說く所の如し。次第に乃至意の受を生ずるを觀る。亦三種有り。彼れ既に是の如く實の如くに受を知りて第四地を得、勤めて精進を發し、魔の縛を脫せんと欲す。彼の地の夜叉は知り已りて歡喜し、是の如くに復虛空夜叉に向ひて歡喜心にて說き、虛空夜叉は四大王に向ひて亦是の如くに說き、彼の四大王は四天王に向ひて亦是の如くに說き、彼の四天王は帝釋王に向ひて亦是の如くに說き、彼の帝釋王は炎摩天に向ひて是の如くに說きて言はく『閻浮提中の某國・某村・某聚落中の某善男子にて、是の如き種姓、是の如き名字なるは、鬚髮を剃除して法衣を被服し、正信にて出家し、持戒に精勤し、是の如く次第して實の如くに受を知りて、第四地を得たり。我が如きは今、天に向ひて說く所

を以て鉗を執り、並びに捏び並びに吹きて極めて善調なら令むるに、彼の生色の金は調柔・眞淨となり、光色は明好にして、須用ふる所に隨ひて一切を造作して皆讃歎す可く、一切の方土の至處に隨ひて過を說く者無く、之れを磨くに垢無く、雜らず澁らず、第一柔軟にして、作す所は皆妙に、光明淨く勝れて餘の寶を映蔽するが如し。然り此の巧師若しは其の弟子は、彼の眞金を善巧に能く治むるを知り、是の眞寶を知り、是の如くに知り已りて、憶念ふ所に隨ひて何等を作さんと欲するも、之れを見る者をして歡喜を生ぜ令む。卽ち以て鈴を作すに若しは身を莊嚴り、若しは見ざる處、若しは眼に見る處に、若しは耳、鐺を作すに用つて耳を莊嚴り、若しは瓔珞を作すに用つて咽を莊嚴り、若しは以て莊嚴りて經論を供養し、若しは指環を作すに、環に印文有りて用つて指を莊嚴り、若しは金鬘を作し、若しは髻冠を作すに以て髻を莊嚴り、何れの處、何れの處にても用以つて莊嚴るに、彼彼是の如くに相應して善く成ず。是の如きの智有り。善戒の比丘是の如き心を生ずらく、『我が今此の捨は、是の如くに淸淨、是の如くに鮮白、是の如くに正行なり。虛空處を取らば我れ則ち相應せん。我れ此の捨に依りて彼處を繫念し、彼處を喜樂して用つて彼處を取らん。我れ此の捨を以て虛空處を行じ、是の如くに識處無所有處、是の如くに非想非々想處(を行ぜん)』と。(又)是の如くに憶念すらく『我れ今此の捨にて、云何んが常・不動・不壞・不念念滅なるを得るや』と。彼れ思惟し已りて、次いで復四無色處に攀緣するに、彼の捨は常に非ず、是れ無常に非ず、動・不動に非ず、常・無常に非ず、彼れ是の如くに彼の虛空處、是の如くに識所無所有處、是の如くに非想非々想處を知る。彼處を緣ずるに、常・無常に非ず、則ち彼處に於て心喜樂を生ぜずして、寂靜ならず、無常にて動轉するを知らん。彼れ復受を觀ず。受の生ぜんと欲するを知り、受の生じ已れるを知り、受の滅せんと欲するを知り、受の滅し已れるを知り、眼觸の生ずるを知り、是の如く次第して耳觸生ずるを知り、鼻觸生ずるを知り、舌・身・意觸の生ずるを知り、彼れ已に是の如くに受を證知し已

[13]堙羅槃那と名くるに乗り、大神通第一の天衆從り炎摩天に到り、歡喜して說きて言はく『閻浮提中の次第に乃至某善男子は、廣說にて乃至第三地を得、魔と共に戰はんと欲し、魔分を損滅して正法の朋を長せり』と。彼の[14]炎魔天は帝釋王從り是の如きを聞き已り、轉た復歡喜す。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが比丘、第三地を得、次第に更に修めて第四地を得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、比丘第四地を得んと欲せば、是の如くに觀察す『觸の因緣を以て我が樂受生ず。若し彼の樂の因・樂の因緣滅し、寂靜にして失沒せんに、則ち樂受無けん。觸の因緣を以て我が苦受生ず。是の如くんば、苦の觸なる、苦受・苦集・苦等の諸の苦の因緣を捨離せん』と。彼れ是の如くに、觸の因緣にて受あり、我が受は念念に觸と共に生じ、觸に因りて生ずるを知り、彼れ樂受に於て心に喜を生ぜず、喜樂を生ぜず、彼の受を讃めず、亦多く作さず、味著を生ぜず。是の如くんば苦受は逼迮る能はず、惱さず亂さず。是の如くに捨を行じ、憶念して正しく知り、是の如くにして三受の自餘の諸の心も皆悉く染無く、一切を捨離し、是の如き捨は淸淨・鮮白なり。他の比丘、是の如くに心に念ずらく『我が今此の捨は、是の如くに淸淨、是の如くに鮮白なり。我れ今如何んが[15]虛空處を得るや』と。彼の人是の如くに悕望みて虛空處行を得んと欲し、『彼の處の心の如きは我れ云何んが得るや。我れ已に捨を證し、究竟堅固なり。我れ今此の捨を畢竟喜樂し、常に攝めて離れずして、我れ此の捨を以て虛空處を取らん。又我が此の捨は是の如くに淸淨、是の如くに鮮白なり。用つて識處無所有處を取り、用つて非想非々想處を取らん。我れ彼處の是の如き正行を悕望せり』と。彼の人是の如くに正しく非想非々想處を行じ、是の如き念を作さく『我も今此の捨にて彼處に依らん。彼處の法の如きは、我れをして之れを得令めん。我れ此の捨を以て彼處を喜樂し、用つて彼處なる正行の非想・非々想處を取らん』と。[16]譬へば世間の善巧の金師、若しは其の弟子の、生色の金を以て火中に置き、筒を以て之れを吹き、手

【一三】 堙羅槃那(Airāvaṇa)。又は堙羅婆那、堙那婆那、伊羅婆拏、羅筏拏、藹那婆那、伊羅婆拏、繄羅葉、伊那鉢那等に作る。本經第廿一卷に出でたり。帝釋天の乘御たる六頭の白象なりとせらる。

【一四】 炎摩天(Yama)。夜摩天に同じ。又は須夜摩天、焰天と稱し、善時又は時分と譯す。この天主はもと婆羅門の神なりしが、後密敎に入れり。水牛に乘り、右手に人頭幢を取りて、南方に在りとせらる。

【一五】 虛空處等。無色界に四天あり。卽ち空無邊處、識無邊處、無所有處、非想、非々想處なり。すべて形色なく、只識のみあるが故に總稱して無色界と云ふ。生死界の最上の果地なり。無所有處とは識の有想を離れたる無想の境地を云ひ、非想非々想處とは、有想、無想を離れたる三界の最上位の天處を云ふ。

【一六】 善巧の金師は調冶せる眞金にて良く種々の莊嚴を作すを、淸淨なる捨にて用つて無色界を取りて、良く之れと相應するに諭へたるなり。

らん。

又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。是の如くに思惟し、比丘、[九]十八意行を觀察して初地を成就し、諦かに[一〇]六界を知りて第二地を得たり。復何法を念じて第三地を得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、實の如く諦かに[一一]五受根を知るが故に第三地を得。云何んが諦かに知るや。樂受生ぜんと欲せば彼れ實の如くに知り、是の如く次第して苦受生ずるを知り、喜受生ずるを知り、憂受生ずるを知り、[一二]捨受生ずるを知り、有樂を皆知り、觸の因緣にて樂受を生ずるを知り、樂受を知り已りて、彼れ實の如くに我れ樂受を知ると知る。若し彼の比丘、觸の因緣にて樂受を生ずるを知らば、樂受の觸に於て貪樂を生ぜざらん。樂受の觸を知らば、樂受を生じ已りて則ち樂受滅し、彼の樂受滅せば、則ち實の如くに我が樂受滅せりと知り、彼れ是の如くに念ずらく『我が苦受生ぜるは、因緣にて生ぜしなり』と。彼れ苦受を知ること樂受の生ずるが如く、彼れ是の如くに知ること、樂受は觸の緣にて生ず等と說くが如し。此の苦受中、是の如くに廣く說けり。云何んが比丘、喜受を知るや。觸の因緣と共に喜受を生ず。云何んが比丘、憂受を知るや。觸の因緣と共に憂受を生ず。若し隨順して彼の喜受を觀じ已らば、喜受則ち滅し、其の滅を見已らば心離欲を得、若し我れ喜受初に生じて則ち滅せんに、其の滅を見已りて實の如くに受を知り、心離欲を得ん。是の如く憂受を、是の如くに廣く說けり。捨も亦是の如し。彼れ是の如くに知りて、第三地を得。彼の地の夜叉は知り已りて歡喜し、次第に上りて虛空夜叉に聞こえ、虛空夜叉は四大王に聞こえ、四大王は四天王に聞こえ、彼の四天王は憍尸迦帝釋王に向ひて說かく『閻浮提中の某國、某村、某聚落中の某善男子にして、是の如き種姓、是の如き名字なるは、鬚髮を剃除して法衣を被服し、正信にて出家して第三地を得、魔と共に戰はんと欲し、魔分を損減して正法の朋を長せり』と。彼れ旣に聞き已りて轉た復歡喜し、彼の憍尸迦帝釋天王は、即ち大象の、其の象を名けて、

【九】六根、六識、六境の十八界を指す。
【一〇】地、水、火、風、空、識を指すか。
【一一】下に說く、受、喜、苦、樂、捨の五受のこと。
【一二】捨受。苦受、樂受と共に三受と稱し、憂受、喜受、苦受、樂受と共に五受と稱す。非樂、非苦なる、苦樂の中間の感覺を云ふ。

河澗(等)是の如き中の所有る虚空、若しは外の孔穴なる、是の如きを名けて外虚空界と爲す。若しは內色中に攝せらるゝ虚空界、若しは外色中に攝せらるゝ虚空界は、彼れ一に和合し、此の界は唯界にして、此の空界を觀るに、一切我に非ず、亦我所に非ず、亦所我に非ず。是の如く、是の如くに虚空界を觀、實の如く正しく知り、實の如くに見已らば、心離欲を得、是の如く觀已らんには、則ち放逸ならず。此の虚空界は一切我に非ず、亦我所に非ず、亦所我に非ず、作者有る無く、受者有る無し。是の如く知り已らんに、心離欲を得ん。

何物は識界なりや。謂く十二入にして、內外和合して眼識は物を見、意識は了別し、是の如き耳・鼻・舌・身・意識なり。是の如き識界は意是れ根本にて、皆意識にて知る。爾の時世尊、偈を說きて言はく。

法を行ふには意、前に在り、意に力有りて速疾ならば、先に意動轉し已りて、則ち能く說き能く行ぜん。

諸の惡業を抖擻らば、則ち能く退生を知り、諦かに業の果報を知らば、則ち不死處を得ん。

能く一切の根を制し、樂みて衆生を利益し、諸の根調ひて寂靜ならんに、是れ安隱の比丘なり。

六根の輦に乘駕り、能く欲心の怨を殺し、勇智もて　蘭若に行ずれば、能く寂靜の處に到らん。

阿蘭若にて足るを知り、地に臥し心は安隱にして、能く惡法を抖擻ること、風の重る雲を散らすが如く、身業・口業善く、喜樂びて善行を行ひ、諦かに見て恭敬を行じ、能く魔軍を破り、欲等は縛る能はず、心善くして貪らず、多く慈悲の意有らば、出道に住せる比丘ならん。

境界は是れ縛の因にして、若し色等を愛せずんば、彼れ勝れたる寂靜に至り、不苦惱處に至

【七】蘭若。阿蘭若(Âran-ya)の略。空閑處と譯す。聚落等のさわがしき處を三百歩若しは六百歩離れたる、比丘の修行に適したる寂靜の處を云ふ。

【八】出道。出世間道の略。即ち、迷界なる有漏の世間道を解脱せし道位。

るゝなり。不覺を以ての故に外火界と名く。若しは内火界、若しは外火界は、彼れ一に和合し、此の界は唯界にして、此の火界を觀るに、一切我に非ず、亦我所に非ず、亦所我に非ず。是の如き火界を實の如く正しく知り、實の如くに見已らば、心離欲を得ん。是の如き火界は作者有るに非ず、受者有るに非ず。何者が風界なりや。風界に二種あり、一には内、二には外なり。何物を内と爲す。身中の所有る若しは内、内分の、風數に攝せられ、若しは輕く、輕く動き、覺分に攝せらるゝなり。彼れ復何物なりや。謂く、上行風、若しは下行風、若しは傍行風、若しは産等風にて、若しは針の刺すが如く、若しは刀の斫る所の如く、(亦)邪分別風あり、施轉風有り、是の如き等の風に八十種有りて、動きて虫の行くが如し。是の如き等の風の、是の如き八十なる、八十處に於て分分に行く風にして、是の如き身内の分分・處處にあり、風數に攝せられ、輕く動きて成熟せしめ、有覺に攝せらるゝを、内風界と名く。何物を名けて外風界と爲す耶。所有る外風の、輕動數に攝せられ、和合するも覺無きを、外風界と名く。若しは内風界、若しは外風界は、彼れ一に和合し、此の界は唯界にして、此の風界を觀るに、一切我に非ず、亦我所に非ず、亦所我に非ず。是の如き風界は作者有る無く、受者有る無し。是の如く、是の如く、實の如くに正しく知り、實の如く見已らば、心離欲を得、是の如くにして、比丘は慧家を證す。

何物を名けて虚空界と爲すや。虚空界には亦二種有り、一には内、二には外なり。何物を内と爲す。謂はく、此の身中の所有る内分・内分の虚空にて、虚空に攝せられ、覺知有る處にして、普からず遍からざるなり。色の動轉ずる處、飮食せる衆味の、轉じ下り、消化して開脹せる處、叉咽喉中、耳中・眼中・鼻中の虚空、舌處の虚空、口内等の空、口中の舌の動き行く處の虚空、此れ等を名けて内虚空界と爲す。何物を名けて外虚空界と爲すや。所有る虚空にして、覺處に攝せられず、一切に滿ちず、一切に遍からざるなり。所謂、樹の枝條・葉の間の空、一切の窟中の諸の所有る空、山谷・

【六】數は類、種類。輕く動くものゝ類。

の所有る諸の分を內と名け、是の內に覺有り。彼の何者に覺ありや。皮肉等と和合せるに則ち覺あり、所謂、髮毛・爪齒等の根は堅澁に攝められ、入內を覺と名く。彼復何者なりや。所謂、髮毛・爪齒・皮肉・筋脈・骨髓・脾腎・心肺・涕唾等の處、生藏・熟藏・小腸・大腸・肚胃・頭惱、是の如き身中の一切の內分は、堅澁にして覺有り、內地界と名く。何者を名けて外地界と爲すや。所有る外地の堅澁にして覺せざるを、外地界と名く。若しは內地界、若しは外地界は、彼れ一に和合し、此の界は唯界にして、此の界を觀るに作者有る無く、受者有る無く、無因緣に非ず、常無く樂無く、我無く淨無し。比丘、是の如くに慧家を觀察せば、則ち解脫を得ん。一切は我に非ず、亦我所無く、亦所我無し。是の如く、地界を實の如くに正しく知り、實の如くに見已らば、心離欲を得、是の如き比丘は則ち慧家に於て解脫を得。何物が水界なりや。水界に二種あり、一には內、二には外なり。何者を內と爲す。所有る水數には皆水界の相あり、所謂、爛相・體中の津潤・涕淚・涎唾・腦血・脂汁・凝脂・髓膽・小便・汗等、是の如く身中に內水數有りて、覺分に攝せらるゝを內水界と名く。何物を名けて外水界と爲す耶。諸の外水數の濕潤に攝せらるるなり。所謂、不覺にして、不覺に攝せられ、不覺を以ての故に外水界と名く。若しは外水界、若しは內水界は、彼れ一に和合し、此の界は唯界にして、此の水界を觀るに一切我に非ず、亦我所に非ず、亦所我に非ず。是の如く、水界を實の如くに正しく知り、實の如くに見已らば、心離欲を得、是の如き比丘は慧家に住さん。何者が火界なりや。火界に二種あり、一には內、二には外なり。何者を內と爲す。身內の所有る種種・分分の若しは火・火に攝せらるゝものにして、是の內に覺有り。所謂、身の煖にして、燒燃せず、所謂、能く消す。何者んぞ能く消すや。謂く、飲食を噉ひては味の正しき樂を得せしめ、迴轉して消化す。是の如き身中の內及び內分の、若しは火・火に攝せらるるものにして、是の內に覺有るを、內火界と名く。何物を名けて外火界と爲す耶。所有る一切の外なる火・火數にして、若しは煖、煖に攝せられ、不覺に攝せら

て、若し喜意の染れたる(を起さば)不善の報を得、若し憂意を起して染欲意を離るれば則ち善法を得、若し捨意を起さば無記報を得、又復是の如くに意に法を知り已りて、若し喜意の染れたる（を起さば)不善の報を得、若し憂意を起して染欲意を離るれば則ち善報を得、若し捨意を起さば無記報を得、是の如き等の十八意行の三報の因緣を以て、世間に生れ退く。若し彼の比丘是の如くに十八意行を觀察せんに、上初地を得、彼の地の夜叉は是の如きを見已りて轉た復歡喜し、次第に傳へて虛空夜叉に聞こえ、彼の地の夜叉と虛空夜叉なる彼の二夜叉は四大王に向ひて歡喜心にて說き、彼の四大王は四天王に向ひ、歡喜して說きて言はく『閻浮提中の某國、某村、某聚落中の某善男子にて、是の如き種姓、是の如き名字なるは、鬚髮を剃除し、法衣を被服して正信にて出家し、既に出家し已りて憒閙しき處を離れ、寂靜の處に在り、今復十八意行を觀察して已に彼の法を證せり』と。彼の四大王の是の如くに說き已れるを、四天王は聞きて轉た復觀喜心を增長して曰く『魔分を損減し、正法の朋を長せり』と。彼の四天王は是の如くに復三十三天・帝釋天王に向ひて歡喜して說きて言はく『閻浮提中の、次第に乃至某善男子にて、某甲なる種姓の名字は某甲なるは、鬚髮を剃除し、法衣を被服して正信にて出家し、憒閙しき處を離れて乃至塚間に、法の如くに十八意行を觀察して已に彼の法を證し、法の如くに正しく住せり』と。彼の四天王は帝釋王に向ひて是の如くに說き已り、彼の[五]憍尸迦・三十三天・帝釋王は聞きて心に大に歡喜す。又修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。是の如き比丘、已に法の如くに十八意行を觀察して初地を得已り、後に復更に何者の異地を證するや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼れ復次第して四家を觀察す。四とは所謂、慧家・諦家・捨家・出家なり。云何んが比丘、慧家に住するや。謂はく、彼の比丘是の如くに自身の正法を觀察し、是の如く實の如くに分分を善く知るなり。此の身中に、地界・水界・火界・風界・空界・識界有り。何者を地界とするや。地界に二種あり、一には內、二には外なり。身中

【五】憍尸迦(Kauśika)。蠶兒と譯す。帝釋の姓なり。

巻の第三

生死品第二

又修行者は内心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが比丘、次第して漏を捨つるや。初に不善の法を捨て、次に善法を修行し、正しく觀じて思惟し、心を修めて正しく住す。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の比丘、初に是の如く觀ずらく『根と塵と相に對し、迭相に因緣となりて、一切の世界は無始以來生死に流轉す』と。彼れ是の如くに觀ず。此の生の因緣なる境界の大海は皆悉く我無く、唯内心の境界の因緣有りて世間に流轉す。是の如くにして最初に遠離の行を修め、憒鬧しき處を離れて【一】空閑處・阿蘭若處・山野林中・【二】稻穰の積等・樹下・露地・塚間の處に住するを樂み、則ち能く心の猨猴を繫縛し、修習するを以ての故に心は則ち寂靜にして、聚落の歌舞し戲笑する憒鬧しき處を樂まず、亦長幼の婦女を見るを樂まず、多語を樂まず。二の【三】揵尼有りて梵行を壞す。一には是れ淫女、二には多く言說するなり。皆悉く捨離し、旣に捨離し已りて心一に寂靜にして、彼の人の心能く是の如くに住す。云何んが正しく觀ずるにて、初に何法を觀ずるや。彼の人初心に、是の如く、十八意行ありて能く善根を起し、不善根を起し、無記根を起すを觀察す。何等を十八とするや。所謂、比丘、正しく意を觀察するに、眼に色を見已りて、若し喜意の染れたる(を起さば)不善の報を得、若し憂意を起して染欲意を離るれば則ち善報を得、若し捨意を起さば【四】無記報を得、又復是の如くに鼻に香を聞き已りて、若し喜意の染れたる(を起さば)不善の報を得、若し憂意を起して染欲意を離るれば則ち善報を得、若し捨意を起さば無記報を得、又復是の如くに舌に味を知り已りて、若し喜意の染れたる(を起さば)不善の報を得、若し憂意を起して染欲意を離るれば則ち善報を得、若し捨意を起さば無記報を得、又復是の如くに身に觸を覺え已り

【一】空閑處。阿蘭若(Araṇya)に同じ。修行に適したる寂靜の處にして、聚落を三百步、若しは六百步離れたる比丘の住處なり。
【二】稻を刈りて積みたるものを指すか。
【三】Kaṇṭa 棘(トゲ)。
【四】無記(Avyākṛta)。三性の一。善とも惡とも記別し難き其の中間性のこと。

邪見を離るゝが故に是の如き法を得。又修行者は內心を思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが彼の人邪見を捨離するや。正見を修行して疑惑の心を離れ、是の如く次第して無漏禪を修むるにて、彼の地の夜叉と虛空夜叉は四大王に至り、（四大王は是の如きを）見聞して歡喜す。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の四大王と四天王は帝釋の所に至り、是の如くに說きて言はく『閻浮提中の某國、某村、某聚落中の某善男子にて、是の如き種姓、是の如き名字なるは、鬚髮を剃除して法衣を被服し、正信にて出家し、善き戒ありて正しく行じ、無礙樂說辯才[三七]と相應し、常に正しく憶念し、乃至少罪にも深く怖畏を生じ、魔分を減損して正法の朋を長せり』と。彼の四王等帝釋王に向ひて是の如く說き已り、帝釋王は是の如きを聞き已りて心大歡喜し、三十三天、帝釋王の衆は皆共に歡喜す。

【三七】無礙樂說辯才。四無礙辯（或ひは四辯とも云ふ）の一。如來の衆生の欲する所に隨ひて說きて自在なるを云ふ。

利養に貪著せず、足ることを知りて草を敷と爲し、利養を見ること火の如くんば、是の如きを乃ち見と名く。

外なる境界の愛河の、漂はす能はざる所にして、諦かに自業の果を知れるを、佛は是れ比丘なりと說きたまへり。

已に過ぎたる事を憂へず、未來を希望せず、現に法に依りて行ずるを得んに、彼れ心意を汚さざらん。

若し法意を壞せず、常に法中に於て住さば、則ち生死を行かずして、彼れ白法を具足せん。

若し人智火を以て、心中の煩惱を燒かんに、境界は僮僕の如くにて、彼の人則ち苦無けん。

若し人根寂靜にして、根自在を得ずんば、心は色等に著せずして、煩惱を離れて佛の如からん。

若し人能く根を制して、根自在を得ずんば、色等は劫す能はずして、煩惱を離して寂滅ならん。

若し人の心愛念ならんに、忍有る者も亦然り、(是の如きを)見る者の心は惺悟り、彼れ牟尼の如からん。

若しは樂みて空閑に住み、重樓を觀るを樂まず、樹下と露地を樂まんに、乞比丘と名くることを得ん。

勇める寂なる調へる善き智にて、實の如くに苦樂を知らば、必ず無上處に到りて、永く諸の憂愁を離れん。

憐み愍む淳直の心あり、一切時に禪を修め、勝と負とに心平等しく、是の如くに修めて諦を得ん。

す、心に正直を行ひ、多語を樂まず、家を禮するを修めず、共に往返せず、惡友に近かず、多くの人聚集する[三四]憒閙き處を心に見んと欲すること無く、惡業に往かず、多くの人の集りて戲ぶ處に往かず、美味の大器・多食を貪らず、親友・善知識に數往きて見ず、境界の中に於て常に正念を行ひ、常に勸めて精進し、法の如く飲食し、法の如き處にて行ひ、勸めて魔の縛を斷ち、勸めて正見を修め、是の如き善人は一切世間の衆生を利益す。爾の時、世尊、偈を說きて言く。

若し衆生を殺さずして慈心にて常に忍を行ひ、衆生に於て父の如くんば、彼れ能く世間を觀ぜん。

偸盜を捨離し、黠慧くして常に根を攝め、身業常に善を行ぜんに、能く諸有の惡を度らん。

乃至畫ける婦女をも、眼に尙觀るを欲せずして、欲を破りて堅明の慧あらば、故に解脫を得たりと名く。

金と土は平等なりと觀、愁憂を離れて正しく行ぜんに、煩惱の蛇は嚙まずして、彼れ無量の樂を得ん。

利と衰に心平等しく、得と失に意亦然り、苦と樂も心に異らざれば、故に名けて比丘と爲す。

怨と親を異れりと見ず、根を攝めて放逸ならず、境界の爲に傷けられずんば、故に婆羅門と名く。

境界は毒の如くなるを見、勇み離るゝこと怨を避くるが如からんに、彼れ涅槃に遠からずとは、正遍知の說きたまふ所なり。

實の如くに生滅を見、正見にて心貪らずんば、心は動かざること山の如くにて、彼れ生死を解脫せん。

[三五]栴檀と餘の草に等しく、美と惡食に心平しく、[三六]袈裟と絹布に等しくば、彼の愛は縛る能はず。

【三四】憒閙。心思の亂るゝを憒と云ひ、衆く、擾ることを閙と云ふ。

【三五】栴檀(Candana)。與藥と譯す。良く病を治すればなり。南印度摩羅耶山に多く產する香木の名。

【三六】袈裟(Kaṣāya)。染色衣と譯し、又無垢衣、功德衣、離塵衣等と意譯す、食する能はざる草木の皮葉を採りて染めたる出家の正衣。俗服の緇衣にゑらんで多く茶褐色に染め用ひたるものにして、僧伽梨(大衣)、鬱多羅僧(七條)、安陀會(五條)なる三種あり。

を以ての故に、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。彼の善男子は邪見を捨離し、具足して當に無量の善法を得べし』と。

又復、是の如き彼の善男子は、家に居らば無量の苦惱に逼迫られ、繋縛せらるるを觀察し、既に觀察し已りて厭離の心を生じ、出家を樂欲し、魔と共に戰んと欲す。是の如き正士を彼の地の夜叉は知り已りて歡喜し、轉た復、虛空夜叉に上聞し、虛空夜叉は四天王に向ひ、歡喜心にて說かく、『某國某村某聚落中の某善男子の、是の如き種姓・是の如き名字なるは、是の如く正しく信じ、出家に堪能にして、鬚髮を剃らんと欲し、法衣を被らんと欲し、正信にて出家し、魔分を減損し、正法の朋を長す』と。四大天王是の如く聞き已りて心に歡喜を生ず。

是の如き正士は、正法を聞き已りて欲垢を厭離す。彼の善男子、和上の聖聲聞を恭敬し已り、鬚髮を剃除し、袈裟を被服し、[三二]波羅提木叉戒を受け已れり。彼の地の夜叉・虛空夜叉は知り已り、歡喜して四天王に向ひ、是の如き言を說かん『閻浮提中の某國・某村・某聚落中の某善男子の是の如き種姓・是の如き名字なるは、邪見を捨離し、正見の業を修め、法の如く修行し、鬚髮を剃除し、法衣を被服し、波羅提木叉戒を受け已り、一切世間の饒益せざる處・居家の隘迮なる、妻子・愛[三三]妾を皆捨離し、正信にて出家し、在家の心業を一切捨離し、魔と共に戰はんと欲し、無明を斷たんと欲す』と。時に、四大王聞き已りて歡喜し、既に歡喜し已り、四天王に向ひ是の如く說きて言さく『閻浮提中の某國・某村・某聚落中の某善男子にして、是の如き種姓・是の如き名字なるは、邪見を捨離し、正見を修行し、鬚髮を剃除し、法衣を被服し、正信にて出家し、某甲比丘に受けて弟子と爲る』と。彼天聞き已り、心に歡喜して曰く『魔分を損減し、正法の朋を長せり』と。彼の四大王の既に是の如く說くを四天王聞きて、是の如く歡喜す。

又復、是の如き彼の善男子は、乃至塵許の惡しき不善法を見なば則ち深く畏れ、能く忍びて作さ

【三二】波羅提木叉(Pratimo=ksa)。戒の名。別解脫と譯す、戒を以て、別々に非を防ぎ、惡を止むるを以てしか云ふ。

【三三】妾の字は、宋・元・明三本に依れり、原本壽の字に作れり。

の心を起さん。猶し光明の如く、正法に通達し、出家心を生じ。此の心を生ずるが故に、善法を流出す。若し人和合して既に是の心を生ずれば、彼の地の夜叉歡喜し、讃嘆し、身毛皆竪ち、是の如き心を生ずらく『此の善男子にして、是の如き名字、是の如き種姓なるは、發心して無始の世より來の貪・瞋・癡等を斷たんと欲し、爲めに魔の境界を破壞せんと欲して煩惱・染欲の境界を樂まず、心に染心の愛を欲することを喜樂せず』と。

又、邪見を離れし彼の善男子に出家の心有り、恒常に是の如く樂みて修め、多く作し、善知識に近き、樂みて正法を聞き、常に清淨心にて佛法を禮拜し、善淨にして寂靜なる身業・口・意業あり、彼の人は是の如く寂靜なる口意なり。是の善行人を彼の地の夜叉は知り已り、歡喜して是の如き心を生ずらく『此の善男子は、善き心、淨き心にて、在家に有る所の舍宅を樂まず、罩の如く、籠の如くに心喜樂せず。無始よりの貪欲・瞋恚・愚癡の魔の境界に於て、喜樂を生ぜず、欲愛を樂まずして、魔と共に戰はんと欲し、煩惱を斷たんと欲す』と。

又復、是の如き彼の善男子は、是の如く生死の苦を觀察し已り、出家の心轉々として增上し、殺生・偷盜・邪婬・飲酒・妄語を遠離し、優婆塞戒を具足し、受持す。彼の地の夜叉、是の如きを見已り、轉た復歡喜し、次第に虛空夜叉に上聞し、是の如き言を作さく『某國・某村・某聚落中の某善男子にして、是の如き種姓・是の如き名字なるは、正信なること是の如く、出家に堪能にして、鬚髮を剃らんと欲し、法衣を被んと欲し、正信にて出家し、魔分を減損し、正法の朋を長し、魔の繫縛を斷ち、貪・瞋・癡を斷つ。一切の[三二]使結は邪見を本と爲し、出世・涅槃は正見を本と爲す。正法に隨順し、一切法を觀じて修行する者は、最初是の如く正見を讃嘆し、嫌はず、賤めず、惡まず、亦他人を教へて正見に住せしめ、邪見を讃へず、嫌ひ、賤め、惡み、常に邪見と正見と相對して二業の果報を說き、衆生をして邪見に住せしめず。一切世間の愚癡凡夫の根本繫縛は所謂邪見なり。一切衆生は、邪見

【三二】使も結も煩惱のこと。

五功德の殿寶にして、彼の轉輪王は報として受用することを得るなり。

何なるは衣寶にして、何なる功德有りや。縷緻密を成し、第一に柔軟にして、垢汗さゞる所なり。王既に著已れば則ち寒熱・飢渇・消瘦・疲倦の極無く、火も燒くこと能はず、刀も割くこと能はず。是の如きは第六の衣寶の功德なり。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。轉輪聖王は云何に彼の第七功德の履と相似せる寶を得るや。彼の第七寶に何なる功德有りや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、履に相似の寶、王若し之を著けて水を行き、若しは陸・若しは遊行の時は則ち詳徐にして渉りて、若しは百由旬なるも亦能く行き去り、威儀を損せず、身を乏さず。是の如く輪王は七寶を具足す。復、是の如き相似の七寶有りて、心の隨に食用す。四天下處及び二天處は是の王の食する所にして、千子を滿足し、皆悉く勇健にして能く他軍を破る。彼の轉輪王は是れ一切人の應に敬重すべき所にして、瞋を離れし善業にて是の如き樂を得、十善業道の餘勢なり。

又、[三〇]修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何にして是の如き一切世間は無始より以來幽冥く、黑闇にして、邪見を種と爲し、一切の結使皆亦是の如きや。又復、云何に邪見を捨離し、正見を修行して、世間の生死を解脱することを得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見、彼の修行者の正法に隨順して法行を觀察するに、若し邪見を捨て、正見を修習し、一切の結使・饒益せさる法を皆悉く斷滅せんに、則ち涅槃を得、生死を遠離し、邪見人を離れ、五根障へざる是の如き善人は正法を喜樂す。是の如く最初に佛の功德を聞き、生死五道の中の種々の苦惱を觀、彼の五處の極めて大なる怖畏を觀るに、天中には則ち放逸の苦・後退時の苦有り、人中には則ち農作等の苦有り、地獄の中には他に惱害さる苦・餓鬼中に於ては飢渇の惱苦・畜生中に於ては相ひ噉食ふ苦あり。是の如き五處の一一を散説せんに、則ち無量種なり。是の如く觀已らば則ち生死に於て厭離

【三〇】修行の字は宮內省圖書寮本に依れり。原子行修に作れり。

ひ、彼の主兵寶の將に行かんとする所に能く以て屋と爲して、悉く能く王及軍衆を容受し、一一妻婦を隔別して雜へず、各相ひ見えず。其の色は鮮白にして、日の光明の如し。是の如きは第二の皮寶の功德なり。

云何にして輪王は彼の第三の牀と相似せる寶を得るや。彼の第三寶に何なる功德有りや。彼の牀寶は柔軟・細滑にして、上に坐すれば則ち凹み、起てば則ち還りて平なり。若し其上に坐して禪念し思惟せんに、解脫中に於て寂靜心を得ん。若し彼の牀に坐らば、心に欲事を念ずるも、卽ち欲を離ることを得ん。是の如く次第に瞋・癡も亦爾り。卽ち彼牀上に小禪屋を出し、諸の婦女有りて復王に於いて極めて染心を生ずと雖も、此の牀寶を見れば心則ち染無し。是の如きは第三の牀寶の功德なり。

云何にして輪王彼の第四の林と相似せる寶を得、彼の第四寶に何なる功德有りや。若し王林中にて遊戲せんことを憶念し、彼の林中に往くに、彼の林の功德は王の善業力にて天世間の歡喜林中の如く、華菓・賒居尼鳥・蓮華の池流を出生し、彼の濟口に於て、天歌ひ、彩女戲笑し歌舞し、一切の天女悉く來りて集會す。彼王天の如く、一切五欲の功德と相應し、彼の林中に於て婦女相隨ひて娛樂し、遊行す。善業力の故なり。彼の修行とは一切を觀察するなり。是の如きは第四の林寶の功德なり。

云何にして輪王は彼の第五の殿と相似せる寶を得、彼の第五寶に何なる功德有りや。謂く、轉輪王彼の殿中に在りて夜偃臥む時、月を見んと欲すれば則ち星月有りて殿中に現れ、見已りて眼樂しむ。謂はく之れは是れ珠なり。天女の詠歌を聞けば則ち憂無く、樂しく眠り、安く睡り、睡り已りて善き夢にて妙樂の事を見、寒き時には則ち溫風に吹かるゝこと有り、熱き時には則ち涼冷なる觸の樂有り。夜に三分有りて、二分は則ち睡り、三分の時睡を離れて起き、法樂を受行す。是の如きは第

王意の如く念じ、心の須ふる所に隨ひ、一切の作す所は法義に違はず。王の境界の須ふる所、作す所に隨ひ、皆能く成辦す。是の如く輪王は瞋を離れし善業にて主兵寶を得、恒常に十善業道を修行し、一切世間の衆生を利益すること、猶し父母の如し。

又、修行者は内心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何にして輪王は彼の第七の主藏大臣・富長者の寶を得、彼の長者の寶に何なる功德有りや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、主藏臣寶は轉輪王に屬して、何なる功德なりや。能く金剛及び[二六]因陀羅靑色寶珠・[二七]摩迦羅多・及び[二八]牟瑳羅迦羅婆等の種々の妙寶を以て、一切の坑澗・深山・幽谷・險岸・惡處・平ならざる處を悉く能く滿せしむ。王敕を待たずして、寶盡きず。何に況んや金銀に於てをや。此の長者の寶は第一の[二九]比泥にして、誑かず、諂はず、他を熱惱せず、一切の見る者淸涼にして愛念す。是の如きは輪王の富長者寶なり。是の如く輪王は七寶を具足し、四天下に王たりて、能く龍衆・天衆と同じく天處に坐り、二の四天王天・三十三天・帝釋天王有り、座を分ちて坐す。是の如く七種の妙寶を具足して轉輪王たるを得。又復、更に相似せる七寶有りて前の七寶より劣れり。所謂、劍寶・皮寶・牀寶・林寶・殿寶・衣寶・履寶なり。彼の轉輪王の劍と相似の寶に何なる功德有りや。若し國土有りて拒逆の心を起さんに、是の如き劍寶疾走して去り、一切の國土は劍を見て卽ち伏し、一人をも殺さず。是の如き劍寶に此の功德有りて、罰せず、殺さずして一切の國土自然に降伏す。是の如きは第一の劍寶の功德なり。

云何にして輪王は彼の第二の皮と相似せる寶を得、彼の第二寶に何なる功德有りや。彼の皮寶とは海中に生じ、彼れ既に生じ已り、商人之れを得れば將來王に上らん。彼の寶の功德は、廣さ五由旬、長さ十由旬、海龍の皮にして、水雨に爛れず、風も動かすこと能はず、火も燒くこと能はず、能く寒熱を劫ひ、寒時は能く溫く、熱時は能く涼し。何處・何處にても輪王の行く時、王の軍衆に隨

【二六】因陀羅寶。インドラ(Indra)殿上にある網を成せる珠の名。
【二七】不詳。maha-ratna 大寶、或は marakatam 摩羅迦多の誤寫で、綠色寶か。
【二八】Musāragalvaḥ 硨磲。
【二九】Vidyā(毘陀)を指すならん。卽ち、明、智、學問等の意。

輭にして、色の白きことは雪の如く、帝釋王の伊羅槃那の如し。自餘の諸象、氣を聞かば卽ち伏し、敢て正しく看ず。三處にて能く鬪ひ、所謂、水處・陸地・空中を能く速疾かに行き、一日中に於て閻浮提を遶り、能く行きて三匝す。彼象調順にし、一の縷綖を以て咽に繫けて牽き行くべく、若し轉輪王乘りて行く時、彼象調順にして王の心と同じく、若し轉輪王の何處にか行かんと欲すれば則ち教を須ひずして速に彼處に至る。平正に均しく行きて震はず、掉はず、行歩詳審にして、身は動搖がず、次第に足を擧げて跼せず、蹶らず、亦怒力せず、種々に善を行ひ、小兒も之を見て怖畏を生ぜず、四出の道巷・若しは重屋の上なる彼處にも到り行き、婦女も能く捉り、手にて之を摩ることを得。若し鬪戰する時は甚だ能く勇悪なるも、行かば則ち調順にして、綖に繫がれて越へず。是の如きは輪王の大龍象寶にして、是れ轉輪王の、十善道の中の一業道を行ひし種子の得し所なり。何に況んや十善業道を具足し、和合し、修行するに於てをや。是の如く法に順じ、法を修行せし者は、天眼を以て彼の轉輪王の第四の象寶を見ることを得るなり。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何にして輪王彼の馬寶を得るや。彼の馬寶に何の功德有りて和合し相應するや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、馬寶は鵝・[二四]拘物頭華の如く、是の如き淨き色にして、普く身に皆天の旋等の相有り、以て莊嚴と爲せり。是の第一の相・量・色・形等の衆相と相應し、第一に調順にして、一日中に於て閻浮提を遶り、能く行き、三匝して身乏しからず。是の如くに輪王は此の第五の功德の馬寶を得るなり。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何にして轉輪王は主兵寶を得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の主兵寶に[二五]大功德有り。所謂、輪王憶念し、思惟するに、教敕を待たずして王意を知り、王の須ふる所に隨ひて皆悉く能く辦じ、非法を遠離し、正法に依つて行ひ、時須ふる所に方りては王意に稱ひて辦じ、苦まず、惱まず、正法に依りて取り、

【二四】 拘物頭華(Kumuda)。地喜花と譯す。白蓮華なり。

【二五】 大の字は、宋・元・明三本、及び宮內省圖書寮本に依れり。原本何に作れり。

健にして、人中第一の勝妙たる身色なり。能く他軍を壊はし、轉輪王の心意に隨ひて轉行し、端正にして喜ぶ可く、如法の善人にて、法行に隨順し、轉輪王の種姓と相似し、一切聚落の大衆の會處は、皆悉く敬愛して其の心行を讃ふ。

又、修行者は、內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが瞋を離れ、善業を修行せば、轉輪王の第三輪寶の世間に出ることを得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の輪寶は五功德に相應し、具足すること有り。所謂、千輻あり、其の體は皆是れ[一九]閻浮檀金にして、廣さ五由旬、第二日の世間を照明するが如く、是の如きは、輪寶の最初の功德なり。又復、輪寶の第二の功德行とは、障礙無く、空を飛びて去り、一日に能く百千由旬を行く。又復、輪寶の第三の功德とは、謂く、王の意に隨ひ、何なる方處を憶念して行かんと欲するも、若しは[二〇]瞿陀尼、若しは弗婆提、若しは鬱單越、四天王處なる彼彼處に彼の千輻輪は空を飛びて往き、輪寶の力の故に、能く四兵の象・馬・車・步をして、皆悉く相ひ隨ひ、空を飛びて去らしむ。又復、輪寶の第四の功德とは、若し轉輪王に臣たらざる者有らば、彼の金輪寶、王と相ひ隨ひて能く降伏せしむ。又復輪寶の第五の功德とは、彼の金輪寶に能く敵を爲すもの無く、若し王・王等見れば卽ち降伏す。皆法力を以て輪王に隨逐するが故に、能く[二一]爾るのみ。是の如く輪寶は五種の功德を具足し、相應す。是の如く已に第三の大寶を說けり。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが瞋を離れ、善業を修行せば、轉輪王の第四の象寶の世間に出ることを得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、此の轉輪王の法を修行し、人の法行に隨順せば、調順せる象を得、第一に調順にして能く他城に勝れ、七支にて地に拄せり。所謂、四足・尾・根・牙等にして、是の如き七分皆悉く地に[二二]著けり。若し是の如き七種の相有らば、彼の象は大力にして、餘の弱象より勝ること一千倍の力なり。[二三]觸は則ち柔

【一九】閻浮檀金（Jambū-nada Suvarṇam）。閻浮檀とは閻浮樹下を流るゝ河にして、其の河に產する沙金のこと。

【二〇】瞿陀尼等は、いずれも須彌四州の一なり。後卷（經集部第十一）に詳說せらる。之れに依りて見よ。

【二一】爾耳は、宋・元・明・三本及び宮內省圖書寮本に依れり、原文「使爾」と在り。

【二二】著の字、宋・元・明三本及宮內省圖書寮本に依れり。原文拄に作れり。

【二三】觸の字、元・明兩本に依れり。原本斷に作れり。

に生まれん。是の如き勝妙の食は唯だ轉輪王のみ乃ち之を得んのみ。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが多垢の瞋心を捨離せば、轉輪王の善業の果報を得るや。彼れ見聞して知り、或は天眼にて見るに、瞋と他の惡不善業を捨離せんに、餘殘の善業にて轉輪王の第二の寶を食することを得。所謂、珠寶なり。此れに八種の功德有りて具足す。謂く、夜闇の中に善き光明を作し、秋の滿月の雲翳を遠離するが如く、是の如き珠寶は能く闇中に於て光明遍く照し、百由旬に滿ち、復、晝時の日の熱の患ふ可きに於ては、冷き光明を放ちて熱を除き、淸涼にして、是の如きは珠寶の第一の功德なり。又復、珠寶の第二の功德とは、若し曠野の水無き處を行きて兵衆渴乏するに、能く多く[一八]八分と相應せる淸淨なる水流を有らしめて、一切の渴を除く。是の如きは珠寶の第二の功德なり。又復、珠寶の第三の功德とは、若し轉輪王水を憶念する時、是の如き珠寶、王の意に隨ひて流る。是の如きは珠寶の第三の功德なり。又復、珠寶の第四の功德とは、是の如き珠寶は八楞を具有し、彼の一一の楞は種々の色を放ち、靑・黃・赤・白・紫・頗梨色にして是の如きは珠寶の第四の功德なり。又復、珠寶の第五の功德とは、彼の珠寶の力にて百由旬の內、人皆病を離れ、心に正直を行ひ、一切の欲する所は業の如く相似し、果を得ざるに非らず。是の如きは珠寶の第五の功德なり。又復、珠寶の第六の功德とは、彼の珠寶の勢力を以ての故に、彼の惡龍をして惡雨を降らさゞらしめむ、是の如きは珠寶の第六の功德なり。又復、珠寶の第七の功德とは、水無き處の險岸・曠野・樹艸無き處に於て、是の珠能く多くの樹木を有らしめ、池水・蓮華・叢林・靑艸を皆悉く具足せしむ。是の如きは珠寶の第七の功德なり。又復、珠寶の第八の功德とは、珠寶の力の故に、人の壽を盡せずして橫死する者無く、能く畜生をして相ひ殺害せず、相ひ憎嫉せざらしむ。相ひ憎嫉む者とは謂はく蛇・鼠・狼なり。是の如き八種の勝大なる功德を具足し、相應せり。彼の轉輪王は、瞋を離れし善業の得る所の果報にて千子を滿足し、皆悉く勇

【一八】八分相應。其の水の能く甘、冷、輭、輕、淸淨、不臭、飮時不損喉、飮已不傷腹なる八德と相應せるを云ふ。

諂曲等の畏・無量の諸の畏・嶮處等の畏を皆悉く遠離し、一切世人は第一に愛念し、一切の惡人も亦愛念を生じ、一切の善人は子・兄弟の如く極めて愛念を生ず。身壞れ命終らば則ち善道天世界中に生まれ、大神道を得、勝妙の體を得、常に一切の愛す可き妙なる聲・觸・味・香・色を得、心の隨に受用せん。歡喜園の勝妙なる樹林には寶の間錯れる[14]輦有り、大林中に於て、天の彩女の衆に圍遶せらる。一切の餘天起發す能はざる(所なり)。若し身・口・意にて、其れをして怖しむれば、百千の天子心意に憐愍し、親近して愛念し帝釋天王も愛念し、憐愍し、天の阿修羅と共に鬪諍する時、怯弱を生ぜず、怖畏の心を離る。若し煩惱の諸垢を出離し、出世間道を願はゞ、彼れ是の如き處なる天世間より退き、人中に生まれ轉輪王と爲らん。是の如く往反し、無量世を經て、四天下に王となり、七寶を具足せん。所謂女寶とは彼の女寶の身は[15]梅檀香を作し、口中常に[16]優鉢羅香を出し、身の觸は細輭にして[17]迦陵伽の觸の如し。迦陵とは海渚中の鳥にして、彼の觸の勢力は、若し人身に觸るれば則ち疲乏無く、飢渴・憂悲・苦惱を遠離す。彼の渚の上にて、人彼の觸の力を得。女寶も亦爾り、若し轉輪王若しは見、若しは觸れんに、皆快樂を受け、寒時には身溫く、熱時には涼冷にして、是の如き觸力は餘人の得るところに非らず。瞋を離れて善業に隨順せし勢力(の故なり。)一切の男人此の女寶を見んに、心に善く分別し、母・姉妹の如くならん。心を王に一にし、王を敬重し、心を王に專にし、常に與に樂行し、五種の婦女の過失を遠離す。謂く、貞良ならずして異なる男子と行ひ、妬心・惡貪あり、惡處の欲を樂み、夫の命亡きも住す。是の如き女寶は、復、五種の功德に相應すること有り。五とは所謂、夫の意に隨ひて轉じ、多く男子を生み、種姓劣らずして好き人を喜樂し、妬心を生ぜず、夫の餘の女と共に娛樂を行ふ時、妬心を生ぜざるなり。復、三種の大いに勝れし婦女の功德と相應せること有り。謂く、多語せず、心邪見ならず、夫若し在らずんば、聲・觸・諸味・香等を樂まず、心意を動かさゞるなり。是の因緣を以て、身壞れ、命終らば則ち善道天世界中

【一四】輦は人の挽き行く車、卽にぐるまなり。

【一五】梅檀(Candana)。香木の名。又良く病を治するにより、與藥と譯せらる。

【一六】優婆羅(Utpala)。又優鉢羅、漚鉢羅、優鉢剌等。青蓮華と譯す。

【一七】伽陵伽(Kalviṅka)。又は伽陵頻伽、迦樓頻等。妙聲と譯す。雀の一種か。

是の如き三種の身の不善業、是の如き四種の口の不善業を次第に捨離せば、乃ち涅槃に至り、彼の善業の因にて世に稱讃せられ、次に天に生まることを得、後に涅槃を得ん。彼の身・口業の實業の果報なり。法を修行する者は内心と思惟し、正法に隨順して是の如くに觀察し、如實に知見す。

又、修行者は内心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが意地の善業道の行なりや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、意業は三種にして、貪・瞋・邪見なり。不善を對治せば現在に樂を受け、身壞れ命終らば則ち善道天世界中に生まれ、若し生死を厭はんに、彼の人【三】無餘涅槃界に入らん。

又、修行者は内心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが貪なる不善道を離るれば善業の果を得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の貪を離れし者は、現在世に於て一切の財物及び珍寶等皆悉く豐饒にして、人の侵奪する無く、若し王・王等も尙ほ心を起さず、何に況んや復偷盗の劫奪有らんや。若し因緣有りて財物を漏失うとも、それを得しかの他人は、則ち親の如くに還送りて之れに歸さん。彼の人常に富める財物を離れず、常に他の破壞する所と爲らず、身壞れ、命終らば則ち善道天世界中に生れん。旣に彼に生まれ已りし天は、阿修羅と共に相ひ鬪諍ふに、彼の阿修羅は能く勝つ者無く、殺害すべからず。能く怖れしむる無く、(また)他人を畏れず。一切の天子は皆悉く愛樂し、心に憐愍を生ぜん。說くべからざる愛す可き聲・觸・色・味・香・食有り。若し出世の淨白なる無漏の禪定道の果を願はゞ、三種の菩提の願に隨ひて得んこと、前に說きし所の如し。又、修行者は内心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが瞋の不善業道を離るれば、善業の果を得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の瞋を離れし者は、現在世に於て業行の果報あり、財豐にして大いに富み、一切愛念して心意に憐愍し、第一の險隘、怖畏ろしき惡處にして能く便を得ること無き(處)、王の畏・賊の畏・險岸に墮つる畏・水の畏・火の畏・

【三】無餘涅槃。詳しくは無餘依涅槃。身體すべて滅して所依なきが故にしか云ふ。所謂、煩惱障を斷ち、灰身滅智したる處に顯現する涅槃なり。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順し正法行を觀察す。云何んが世間の不善業道の惡口を捨離して現在世に於て業の果報を得、後に何處に生るゝや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、惡口を捨離せば勝妙なる色を見し、眞實の人信じ、一切世人皆往反することを樂み、滑語・輭語にて一切人は皆悉く安慰め、怖有らしめず。一切世人の遙に遠く之れを見るも、皆往きて近づき赴き、善知識多し。設ひ財物無くも一念の頃に於て、一切人をして恭敬すること〔二三〕父の如からしめ、若しは前世の惡業の致す所に於て衰惱を得し者なるも、人捨離せず、一切財物皆悉く得易く、此の人に怨家・王・水・刀・火等の畏有ること無く、身壞はれ命終らば則ち善道天世界中に生まれ、既に彼に生れ已らば、滑語にて利益し、要略して省きて語り、因に相應して語り、是の如き語を得、大神通を得、勝妙の體を得。若し出道せんことを願ひて坐禪し、樂みて無漏の法を行はゞ、彼の人則ち三種の菩提を得ること前に說きし所の如し。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察する。云何んが世間の不善業道の綺語を捨離せば、現在世に於て善業の報を得、後何處に生まるゝや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、綺語を捨離すれば卽ち現身に於て世間敬重し、善人に念ぜられ、前後の語言相ひ違反せずして、一切世人其の語說を愛し、人の恐嚇して其の過を求むる者無く、善く語り、正しく語り、世に尊ばれ、少語・輭語にて人をして解し易からしめ、法と相應して語り、麁獷語らず、深き因有りて語り、皆理趣有りて、法に於て違はず。一切世間の見る者尊重し、資財・寶物皆悉く牢固にして、受用意に稱ひ、德無き者に於いても功德有りと說き、彼の德無き者と其の功德を說かん。(かくて)身壞れ命終らば則ち善道天世界中に生まれ、既に彼れに生れ已らば諸天敬愛し、大神通有りて、天の富樂を受けんことは、具に說くべからず。若し淨白無漏の禪樂を願はんに、三種の菩提の求むる所に隨ひて得んこと、前に說きし所の如し。

〔二三〕父の字、宋・元・明・三本及び宮內省圖書寮本に依る。原本奴に作れり。

一切の惡道にて善く將ゐ導かんとする中、實語の導勝れ、一切世間の受用する物の中にて、實語の物勝り、一切の病を治する諸の藥艸の中、實語の藥勝れ、一切の奮迅なる諸勢力の中にて、實語の力勝り、一切の歸の中、實語の歸勝れ、一切の知識にて實語を勝ると爲す。若し人、實語の財物を攝取すれば、則ち世間に於て惡行を〔一〇〕增さず、貧窮に墮ちず、天と比びて近く、數々往來する何處・何處にても、彼れの生まる所に隨ひて常に男子と爲り、勝れし種姓に生まれ、一切憐愛し、共語を信受し、彼の人、無色の夜叉・毘舍遮等の能く殺す所と爲らず。他國土を行くに、多く牀敷有り、設ひ病痛有るも藥食を具足し、心に思念無く、一切を皆得、一切世間の第一の勝樂は皆悉く之れを得、身壞はれ命終らば則ち善道の天世界中の最長命の處・大神通の處・最高の勝れし處に生れ、若し白淨無漏の勝道を願はゞ、則ち涅槃を得ること、前に說きし所の如し。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが兩舌の惡業を遠離し、善業の道を行ひて、現在・未來に業の果報を得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、兩舌を離れし人は、現在世に於て業の果報を受け、知識・親友・兄弟・妻子・奴婢は使を作し。是の如き等の人は皆悉く堅固にして、人の能く壞す無く、王及怨家・惡兄弟等破壞する能はず。若し財物無きも亦捨離せず、設ひ時の儉しきに値ひ、若しは曠野・山中の險處を行くも、皆悉く捨てずして、常に樂離れず。若し他人有りて種々に方便し、破壞の語を說くも、聞かず受けずして、王は彼の人を好み、心堅固にして、水賊・刀怨も畏しむること能はず。兩舌の不善業を離るゝを以ての故なり。是の如き兩舌を捨離せる功德にて、身壞れ命終らば則ち善道天世界中に生れ、天衆中に於て、多く天女の圍遶する所有り、常に共に相隨ひて愛念し、娛樂す。彼天女の身に妙なる臺ありて香を散らし、塗治して莊嚴り、第一の天女は常に歡喜を生ず。若し兩舌を捨て、淨き無漏を願はゞ、彼の人則ち無漏の禪道を得、涅槃に到らんこと、前に說きし所の如し。

【一〇】增の字は宋・元・明・三本及び宮內省圖書寮本に依れり。原本會に作れり。

【一一】毘舍遮(Piśāca)。又は毘舍闍、辟舍柘等に作る。顚鬼、顚狂鬼と譯す。又「慧苑音義」下に、噉精鬼と譯せり。持國天を護持する鬼の名なり。

を具足せんことを願はんに。願に隨ひて皆得ん。若し樂みて持戒すれば則ち菩提を得んことは、前に說きし所の如し。（

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが邪婬を捨離して果を得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、邪婬を離れし人は善業道を行ひ、是の如き法を見て、善人に讚められ、一切に信ぜらる。婦女中には心に慮を生ぜざるに非ざるも、若しは王・王等の一切皆信じて、所有の妻妾は能く侵奪さるゝこと無く、隨順して供養し、其の意に違はず、設ひ衰損すること有るとも、妻妾は嫌はず、心に妬忌すること無く、外に心を生ぜず、一切世間人の之れ（妻妾）を見る所は母・姉妹の如く、世人の罵辱する所と爲らず。邪婬せざる者は是の如き婦を得、身壞れ命終れば則ち善道の天世界中に生るゝことは、前に說きし所の如し。彼の天より退き已らば、餘の天子に生まる。若し邪婬の者の退んと欲して未だ退かざるに、彼天女の中に餘の天子生れ、時に、彼天女卽ち現前に於て、餘の天子と共に相ひ隨逐し、娛樂し、戲笑せり。彼の退かんと欲せる天は、旣に天女の餘の天子と共に相ひ隨逐し、娛樂し、戲笑するを見、妬心の羂に縛られて地獄に墮つ。是の如く邪婬を樂みて行ひ、多く作さんに、則ち大失と爲らん。何等の人に隨ふも、能く邪婬を離れ、大善道を攝むれば、是れ涅槃の器なり。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが一切の不善を對治し、妄語を捨離し、大善分を攝りて、現に果報を得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、妄語を離れし者を、諸の世間人或ひは眼有りて見、或は耳有りて聞きて一切皆信じ、設ひ、復貧窮にして財物無き者も、一切世人の供養すること王の如し。衆星中の光明の月の如く、一切人中にて實語の人の光明も亦爾り、一切の寶の中、實語の寶勝る。生死を度らんと欲すれば、一切船中にて實語の船勝れ、一切の惡行を出離せんと欲せば、實語もて離るゝこと勝れ、一切燈中にて實語の燈勝り、

生死の闇に入りては殺さゞるを燈と爲し、殺生せざる者を名けて慈悲と曰ふ。正念に思惟し、殺生せざるは善く心に常に喜を生ず。若し他の殺すを遮へるに、他遮ふ可からざれば、則ち自ら捨を行ずるなり。彼の人、是の如くに、四梵行を行ひて以て身心に熏じ、善根を殺さゞれば、不可思議にして最も眞實と爲す。何等、何等種々の諸願も、是の如く、是の如く願に隨ひて皆得ること、譬へば世間の善巧の金師の、好き眞金を得んに、是の如く、是の如く作らんと欲する所に隨ひ、彼の金は是の如く意に隨ひて種々の莊嚴を造作し、若しは瓶等を作り、若しは人像を作り、若しは佛像を作るが如く、是の如く、是の如く殺生せざる者は、缺かず、穿たず、孔けず、虛しからずして、是の如く、是の如く願に隨ひて皆得。何等の人に隨ふも、是の如く殺さずんば、則ち涅槃に近からん。彼の人は常に善知識と共に行き、彼の人は則ち是れ善器の衆生にして、善能く自他の福德を攝取す。彼の人は則ち是れ世間の福田にて、地獄・餓鬼・畜生に行かず、此の善行の人は善法を成就し、一切の得る所皆悉く堅固にして、王・賊・水・火等の畏有ること無く、皆自ら食用ゆ。人中の尊貴にして他勝ること能はず。法を具足するが故なり。是の故に智者は應に殺生せざるべし。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが盜まずして、卽ち善法を得るや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、偸盜せざる者は大貪の網を出で、彼の人、現在は善人に信ぜられ、若しは王・王等の一切は皆信じ、若しは王の衆・若しは長者衆・若しは刹利衆・若しは沙門衆・婆羅門衆は一切皆信じ、憐愛・愍念し、其語を信受し、所有の財物は一切堅固にして失はず、壞れず、能く刦奪ふもの無く、王・賊・水・火の諸畏を皆離れ、方便を須ひずして財物は得易く、財物を得已らば法の如く食用ゆ。持戒の人・道を行ふ人なる諸の福田の中には、皆能く捨施し、若し世間の中の應に用ふべき所の處に皆悉く能く與ふれば、身壞れ、命終りて則ち善道の天世界中に生まれん。若しは出世・若しは梵・若しは魔・若しは帝釋王・若しは轉輪王の四天下に王たりて七寶

能天王と譯す。忉利天主にして、四天王及び三十二天を領し、常に阿修羅と戰ひて、佛法を保護せる天主の名。

【七】轉輪王(Cakravartti-rajin)。音譯して斫迦羅伐辣底曷羅闍と云ふ。王位につく時感得せる輪寶を轉じて四天下を統領せる王の名。輪寶の種別によりて四王の別あり、各三十二相を具し、自在に虛空を飛翔し、福德は無量なりと云ふ。印度人の描ける理想の天子なり。

【八】夜叉(Yakṣa)。勇健、暴惡と譯す。鬼畜の類。天夜叉、虛空夜叉、地夜叉の三種あり。

【九】四梵行。慈・悲・喜・捨なる四無量心は、能く梵天に生ぜしむる行業なれば、これを四梵行と云ふ。

卷の第二

十善業道品之二

又、修行者は内心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが是の如き十善の業道にて、漏・無漏の業を對治し修行するや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、此の因縁を以て世間の中に縛られ、善法盡く滅す。所謂、縛の因にして、不善の業道なり。善は是れ佛の因、是れ解脫の因なり。言ふ所の善とは謂く殺生を離れ、世間の一切衆生を攝取し、不畏を施與し、現在世に於て人に讚嘆せられ、面色・諸根は端正・美妙にして、長命の業を得るなり。若しは殺さゞる者は、則ち　羅刹・鳩槃荼等の一切の惡鬼・能く人を殺す者・及び餘の惡人の能く人を殺す者の爲に、夜闇の中に於て彼人を擁護す、諸天は常に隨ひて觀察し擁護し、身壞れ、命終らば則ち善道に生まれ、天世界中にて妙果報を受く。若し勤めて精進し、下・中・上三種の　菩提を願はゞ、願に隨ひて皆得、彼の人若し聲聞の菩提を願はゞ阿羅漢を得て涅槃に入り、彼の人若し緣覺の菩提を願はゞ辟支佛を得、是の如く若し無上菩提を願はゞ、正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊を得ん。一切の諸法は命を根本と爲し、人皆命を護る。殺生せざる者は則ち其れに命を施す。若し命を施す者は一切の樂を施すなり。第一の施とは所謂命を施すものにて、是の如き思惟は天に生まる因たり。最勝の戒とは所謂命を施すなり。若し染愛の境界の勝れし樂を願はゞ、殺さゞるを因と爲す。彼の人則ち若しは梵・若しは魔若しは　帝釋王に生れ、彼の人、若し人中に生まれ勝れんことを願はゞ、轉輪王を得、七寶を具足し、四天下に王たらん。若し大身の阿修羅を願はん者は、身を捨てゝ阿修羅と爲ることを得、彼の人、若し大身の　夜叉を願はゞ、夜叉王を得ん。此の殺生せざるを最も大業と爲し、正法の種子にして、生死を行くに唯殺生せざるを歸と爲し、救と爲し、

【一】 漏業を對治し、無漏行を修行するの意。
【二】 羅刹(Rākṣasa)。又具に羅刹娑、羅叉娑と云ひ、女を羅叉私(Rākṣasī)と云ふ。可畏、護者、食人鬼等と譯す。惡鬼の通名なり。
【三】 鳩槃荼(Kumbhāṇḍa)。陰囊、形卵等と譯す。人の精氣を吸ふ鬼の名なり。
【四】 菩提(Bodhi)。譯、覺、道、智等。正覺の智慧なり。
【五】 正遍知等。之れに如來(Tathāgata)を加へて如來の十號とす。
a 正遍知(Samyak-sambuddha)。又は等正覺と云ふ。無き智正しく遍ねからざる無き意なり。
b 明行足(Vidyācaraṇa-sampanna)。佛は三明の行を具足したまへばしか云ふ。
c 善逝(Sugata)。能く涅槃に入れるもの丶意。
d 世間解(Lokavit)。
e 無上士(Anuttara)。
f 調御丈夫(Puruṣa-damya-sārathi)。
g 天人師(Devamanuṣya-śāstṛ)。
h 佛(Buddha)。覺と譯す。佛は覺者なればなり。
i 世尊(Lokanātha)。世に尊きもの丶意。
【六】 帝釋(Śakradevendra)。

し、心意動轉して常に悕望を生ず。心に取らんと欲するを樂ひ、他の財物を見ては自ら苦惱を得るが故に、名けて貪と爲す。是の如きは意地の第一貪心にて不善業道なり。

又、修行者は内心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何なるを瞋意地の第二の不善業道と名くるや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、他の前人に於て、因緣有ること無くして瞋りて惡意を起す。又復、他の若しは貧、若しは富なるに於て、因緣有ること無くして、他を見已りて意地に重惡の瞋心を起發し、瞋の因緣を以て地獄を受く。善法の穀等既に成熟し已りても、瞋心は雹の如くにて、善き穀等を壞る、唯正しき智眼のみ彼闇を對治す。瞋心は火の如く、一切の戒を燒き、瞋れば則ち色變ず。是れ惡色の因なり。瞋は大斧の如く、能く法橋を斫り、住みて心中に在るは怨の舍に入るが如し。此世・他世に心一にして正行なりとも、瞋能く[五三]破壞す。彼の瞋心を捨てよ。慈は是の對治なり、及び[五四]四聖諦の苦集滅道(も然り)地獄の行を行ずるは瞋を上使と爲す。唯だ善人・聖聲聞人・法義を聞く人は乃ち能く捨離すること有らん。又、修行者は内心に思惟し、正法に隨順し、法行を觀察す。云何に邪見は正法を障礙し、一切の惡見は心の黑闇なりや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、無始より以來、邪見を行ふ因にて、地獄・餓鬼・畜生に墮つるが故に、名けて黑闇と名く。邪見を樂む者は正道を障礙して、刀・火・毒・險岸・惡處の如し。唯一切愚癡の人のみ有りて貪著して樂み行ひ、顚倒の見を以の故に、邪見と名く。彼れに二種有り。一は邪因を信じ、二は心に業の果報の法を信ぜざるなり。邪因を信ずるとは是の如く知ることを作さん『身等の樂苦は皆是れ天の作すものにて、業の果報に非ず』と。業の果報を心に信ぜずとは、謂く施等の無きなり。是れを邪見と名く。是の如き十種は不善の業道にて、饒益せざる業なり。一切は皆邪見を以て本と爲す。

【五三】 破壞は、宋・元・明三本及宮內省圖書寮本に依る。原木壞破と作る。

【五四】 四聖諦(Catvāri-ārya-satyāni)。苦諦(Duḥkha-ārya-satya)、集諦(Samudaya-ārya-satya)、滅諦(Nirodha-ārya-satya)、道諦(Mārga-)の稱。苦は生死の苦、集とは苦の因たる業煩惱、滅とは苦集の滅盡せる寂靜の境、道の滅に到達すべき因たる八正道なり。故に前の二は迷界の因果を現はし後二は悟界の因果を示す。諦とは、苦・集・滅・道の共に其の理眞實なれば諦と云ふ。

行かん。
久時に遠く行く人の、平安にて還歸するを得ば、諸の親友、知識は、之を見て皆歡喜せん。福を作す者も亦爾く、此こに死するを他處に生まれ、作せし所の諸の福德を、親等の如きは見て喜ばん。是の如く福德を作し、和集して未來に資せんに、福德は他世に於て、則ち善き住處を得ん。
福德は天の讃ふる所、若し人平等に行はゞ、此の身毀すべからずして、未來は則ち天に生まれん。
是の如き處を觀已はりて、黠慧き者は戒を學び、聖見を具足することを得、善く行ひて寂靜を得ん。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順し法行を觀察し、第四の不善業道の綺語なる口業を觀察す。云何なるは綺語にして、綺語は幾種なりや。前後の語言相應せずして說くが故に、綺語と名く。心輕く速に轉ずれば、前後の語言相應して說くとも亦綺語と名く。慢心を起すに從りて、自ら因緣を輕んじ、人をして信ぜざらしめば、卽ち現身に是の惡道に生れ、一切世間の輕毀する因にして、饒益する所無し。垢語の綺語なる是の如き第四の垢語の口業は善業道に非らず。綺語を作すこと勿れ、亦隨喜こと莫かれ、應に受行すべからず。若し綺語する者は則善人に非ざらん。

意の不善とは貪・瞋・邪見なり。云何んが貪を爲すや。他の攝む所の物を自ら心に分別し、彼の物を得んと欲して正しく觀察するに非ず、彼の人是の如く他の物を愛樂し、他の所有を因無く、分無くして、自ら擾惱して彼物を得んことを望むが故に、意の貪と名け、不善の業道なり。是れ愛す可きに非ず、是れ樂む可きに非ず。得る所の果報は意に相應するに非ず、寂靜なる意に非ず、是れ安樂に非ず。愚癡の人は虛妄にして貪を生じ、他の物にて得叵きも虛妄に分別して貪を生じ味に著

無量の果報有り。此の語は能く無量の善行を破り、此の語は能く一切人に惡を與ふ。世間は怨の如くし、善人近かず、人に信ぜられず。此の語は毒の如し。是の如き惡口は惡道の因緣にして、是の垢たる言語を正しき梵行の人は捨離して行はず。爾の時、世尊偈を說きて言はく。

黠慧きは惡口を離れ、正語を喜樂びて行ひ、是の如き美語する人は則ち涅槃に近く住せり。

常に善妙の語を說き、垢惡の語を捨離せよ、垢惡の語は人を汚し、能く地獄に到らしむ。

垢たる語に汚されし人なる、彼人に則ち善無く、惡なること師子、蛇の如く、彼れ天に生まること得ざらん。

一切の善語の人は、能善く他を安慰め、諸の世間に愛せられ、後世は則ち天に生まれん。

若し人惡語せずして、諂曲を捨離せんに、人なりと雖も行は天の如く、彼の人善く應に禮さるべし。

實語にて常に忍を行ひ、直心にして諂曲ならず、他人を惱まさずんば、彼れ法幢を建立せん。

人命は久しく住せず、猶し拍手の聲の如し、人身は法の如からずして、愚癡なれば空しく世を過さん。

何ぞ人自らを愛せず、何ぞ樂を樂まざるや、若し人惡業を作さんに、自らを愛する因を行はず。

妻子及財物も、知識・兄弟等皆悉く相隨はずして、唯善惡の業のみ有らん。

善業・不善業の、常に與に相隨ひ行くことは、烏の空中を行くに、影の隨ひて常に離れざるが如し。

人の資糧乏しきもの丶如きは、道を行けば則ち苦を受く、善業を作さゞる者なる、彼の衆生も亦然なり。

資糧を具する者の如きは、道を行けば則ち安樂なり、衆生も亦た是の如く、福を作さば、善處に

と無けん。

若し人世間に生まれんに、口中に大斧有り、若し以て自他を斫らば、口中より惡語を出さん。是の如くんば應に實語すべく、應に他人を斫るべからず、乞求する者無しと雖も應に多少を與ふべし、此の三種を行ふ者は、身を捨つれば則ち天に生まれん。

若し是の如くんば、一切因緣は、一切の作す所に、妄語を說くこと莫かれ、他の妄語に於て心に隨喜すること莫かれ、亦妄語する者に隨逐して行かざれ、共に同く坐すること莫かれ。若し妄語の人と共に行坐する者は他人之を見て亦妄語すと謂はん。是の如く若し垢業の人と共に相隨ふ者は、則ち垢業を樂まん。若し彼の人と共に行坐等をすれば、垢業無しと雖も他垢業と謂はん。若し是の如くんば應に法を觀察すべし。惡知識の者に與に相隨ふこと勿れ。此の惡知識は生死の中に於て最も堅く繫縛し、則ち地獄・畜生・餓鬼に墮つるは、所謂惡知識に隨逐して行へばなり。若し善知識に相隨ひて行ふ者は則ち解脫を得ん。廣ければ則ち無量なるも、此の中是の如く略して妄語を說けり。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察するに、云何なるは兩舌にして、兩舌は幾種なりや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、兩舌とは和合人に於て破壞の意を起し、口中にて語說するに名く[五三]。兩舌は二種にして、自ら作すと他に教へらるゝとなり。他に教へらるゝとは、怨家、若しは怨家に似たるに遣はされて破壞するなり。『汝、彼人を破れ』と。是れ他の因緣なり。他に遣はされざること有りて、自ら破壞を作して他をして衰惱せしむ。又復、云何、瞋の因緣の故に他を愛せず、他人と惡口し、惡語を說き、聞く者は愛せざるや。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが惡口なるや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、彼の惡口する者は貪、瞋、癡を發し、一切の愚癡なる凡夫の人に常に行ひて離れず。是の如き惡口には無量種有り、無量に攀緣し、無量の因緣あり、無量の心を發し、

【五三】名の字宮內省圖書寮本に依れり。原文「多」なり。

云何んが樂み行ふや。是の如き邪婬を常に行はずと雖も而も常に喜樂と心意に分別し、更に餘處に於ては心喜樂せざる婬欲者の如し。是の如きは樂みて行ふ邪婬の境界なり。

云何んが多く作すものなりや。愚癡なる凡夫は心に觀察せずして、邪婬に覆蔽はれ、[五一]復他の爲に邪婬の功德は第一の勝樂なりと說き、所謂、婬欲は此事を爲すとも是れ不善に非らずと言ひ、復、多人に敎へて婬欲を喜樂ばしめ、是の如き邪婬にして、愚癡なる凡夫は、喜樂て多く作す。是の如き三種は身の不善業なり。口業の四種とは、妄語・兩舌・惡口・綺語なり。何なるは妄語なりや。所謂、自らの心にて失に自ら誑くことを作し、然る後他を誑き、是の如き妄語は自他の誑を成す。又、彼妄語は五の因緣を發す。所謂、瞋・貪・邪法に攝せられ、欲心、怖畏なり。

云何に瞋心にて妄語を發すや。若しは王前或ひは大衆中、長者衆中にて、若し善と知と識と怨家と諍鬪するに、知と識とを饒益し、怨家を衰惱せしむる故に妄語す。云何に貪心にて妄語を發すや。他の財物を見、方便して取らんと欲し、是の故に妄語す。云何に邪法に攝せられて妄語するや。婆羅門の法中に說く所の如くんば、尊を饒益する故に、牛を饒益する故に、自らの死を畏るゝが故に、婦を取らんが爲の故なる是の如き妄語は皆罪を得ずと。是の如き人は邪法に攝められて語り、是の如く妄語す。是の愚癡の人は邪見に攝められて語る。此の語は堅重にして、地獄を受け、是の故に乃至命を失ふ因緣なり。應に妄語すべからず。此の妄語は能く地獄の第一の種子と爲る。婦を取らん爲の妄語は無罪なりと言ふは、是れ欲心にて發し、亦た是れ邪法なり。云何に怖畏れて妄語を發し何處を怖畏るゝや。彼の饒益の爲に是の故に妄語し、是の如き心を起さく『若し妄語せずんば、彼れ則ち我に於て多く饒益せざらん』と。彼の人死を畏れ、是の故に妄語す。彼の五因緣にて、愚癡の人妄語の說を作し、是の如きの一切は皆癡法に住せり。爾の時、世尊偈を說きて言はく。

若し何等かの人有りて、一妄語の法を起さば、則ち他世を畏れずして、惡として造作せざるこ

【五一】原文「他復爲」と有り。

ば大地獄に墮ちて、頭面下に在らん。若し僧に屬する所の常食の物を取らんに、則ち無間・阿鼻地獄の寬廣き闇等に墮つ。重き福田なるを以てなり。微少の偸盜なるも心念有りて、樂みて行ひ多く作すを以て、彼の少の偸盜にても地獄・畜生・餓鬼に墮ち、若し復懺悔して隨喜を生ぜず、心中に悔を生ずれば、彼れ定んで受けず。若し偸盜の人無量に方便して偸盜を行はんに、是の如きを以ての故に、偸盜と名く。

云何して樂み行ふなりや。他物を偸盜み、得已はりて歡喜し、賊と相ひ隨ひ、心以て樂と爲し、既に財物を得て衣食を作り已り、心に歡喜を生じ、其功德を讃え、他に偸盜を敎へ、敎已りて讃說するに、是の如きを名けて樂みて偸盜を行ふと爲す。

云何んが多く作すなりや。既に偸盜み已り、多く牀敷・臥具・氈被を作り、餅肉を噉食ひ、衣服にて莊嚴り、婬女と娛樂し、[47]樗蒱、博戲して心に喜悅を生じ、『我れ今快樂せり。一切の樂の中にて偸盜を最と爲す。此の因緣を以て、我れ牀敷・臥具・飮食・衣服の莊嚴・婬女・樗蒱、第一の勝れし樂を豐にせり。我れ今當に偸盜の行を作し、我れをして後時に富樂を增長せしめん』と。前に說く所の如し。是の如く、是の如くに多く偸盜を行はゞ、決定して彼地獄の中に受けんのみ。

云何んが邪婬を樂み行ひ多く作すなりや。此の邪婬の人は心に觀察せず。婬欲にて覆蔽る。若し人、先世の婬欲の處より來り、所謂、鴛鴦・迦賓闍羅・孔雀・鸚鵡・魚・雉・[48]鶣鳥・[49]阿修羅等なる是の如き處より來りて此の中に於いて生れんに、多欲なる不善の知識と相ひ隨ひて共に行き、是の如き[50]二分、婬欲を喜樂び、心に觀察せず、心に厭足なく、欲心を離れず、行を觀察せず、欲有る處に隨ひ、往きて其の所に到らん。欲處より來りて此欲處に生るるを以て、喜びて婬欲を行ひ、故に觀察せずして、婬欲に覆はれ、是の如く邪婬の不善の人は、觸の染なるものの勢力にて、彼彼を喜樂び、是の如き邪婬を復更に是の如く心に喜樂びて行ひ、樂みて是の如き邪婬の惡觸を行ふ。

【四七】樗蒱。賭けて勝負を爭ふ一種の遊戲、ばくち、ばくえきなり。蒱の字は宋・元・明三本及宮內省圖書寮本に依れり。原本に蒲字に作れり。

【四八】鶣鳥。ふなしうづら。

【四九】阿修羅(Asura)。又阿須倫、阿素羅等。無端、無酒と譯す。其の容貌醜く、其の果報に酒無き義。新譯には阿素洛に作り、非天と譯す。果報勝れて天と似たれど、天に非ざる意。衆相山中又は大海の底に在りて、常に帝釋と戰ふ鬼畜の類なりと云ふ。

【五〇】先世と今世の二分野、二領野の意か。

此の因を以ての故に、若しは人中に生るゝも命則ち短促し。是の如き殺生は悪知識に近くを以て種子と爲す。

云何んが樂み行ふなりや。彼の不善人、既に殺生し已りて喜樂し歡喜し、心意に分別して殺の功德を見る。是の如く分別すれば則多種有り。他の命を斷ち已りて懊悔を生ぜず、讃說して善と言ひ、心に放捨てず、轉た復更に作し、他人に敎へて作さしめ、既に他に敎へ已りて彼の殺生の種々の功德、異異の因緣を說くこと、前に說きし所の如し。是の如きを名けて樂みて殺生を行ふと爲す。云何んが多く作すなりや。此く殺生し已りて、前行に說きしが如く、悪知識に近き、習ひて殺生を作し、多く殺具を造り、危險の處を作し、毒箭を作闘し、養狗等を集養し、殺生する鳥を養ひ、[四五]旃陀羅に近き、鬪戰の具を造り、鎧[四六]甲・刀杖及以び鑽鉾・鬪戰の輪・種々の器仗・諸の殺生の具なる、是の如き一切を皆悉く攝取し、是の如き悪人の多く殺生を作さんに、是の因緣を以て地獄・畜生・餓鬼に墮ち、極めて苦惱を受く。殺生の業に下中上有り、苦報を受くる時も亦下中上にして、既に業を作し已らば、是の如く果報を受けざるを得ず、是の如く是の如く、自ら悪業を作して自ら悪報を得。若しは黠慧き人は悪を捨て善を行ふも、彼れ世間の中は是の如くに殺生を樂みて行ひ多く作す。

云何んが偷盗を樂みて行ひ多く作すなりや。云何に樂みて行ひ多く作すに、盗み已りて地獄に墮つるや。此の悪戎人の性にて自ら偷盗し、悪知識に近き、若しは悪知識に近く住する人なる彼と相隨はば則偷盗を行ひ、下中上有り。何なるを下と爲すや。謂く王法等なり。前に說きし所の如し。何なるを中と爲すや。福田に非ざる所にて彼物を偷盗むに、此の盗を中と爲す。何なるを上と爲すや。佛・法・僧の物を微少く偷盗まば、是れを則ち上と爲す。彼の佛・法・僧にて、若し僧の物を盗まんに、佛法能く淨むるも、佛法の物を盗まんに、僧能く淨めず。若し衆僧の現に食用する物を盗ま

【四五】旃陀羅(Caṇḍāla)。屠者、嚴熾、下姓等と譯す。四姓の下に位する姓外の種族にして、屠殺を業となせるもの。

【四六】甲の字宮內省圖書寮本に依る、原本鉀に作る。

を樂み行ひ多く作さんに、地獄・畜生・餓鬼に墮ち、若し人中に生るれば則ち邊地の夷人の中に生れ、常に鐵處を畏れ、常に處を怖[四三]怕れ、險岸の處に墮ち、彼人の心會て安隱ならずして、常に誹謗を被り、常に是の如き多種の衆惡を得ん。

又、修行者は内心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。邪見ありて、意に不善の業を樂みて行ひ多く作さば云何ん。彼れ見聞して知り、或は天眼にて見るに、邪見の意業を樂みて行ひ多く作さば、阿鼻地獄等の中に墮ちて一切の苦を受け、若しは畜生に墮ちて、無量世に於て百千萬億々の數に生を轉じ、餓鬼の境界も亦復是の如く、若し人中に生れんに、法の說く所の如くんば、自らの種性の業は善き業道の行なるも、法行に依らざりしかば、上世より來の父祖の種性より千倍に下劣なり。

又、修行者は内心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察し、更に復[四四]異法を深く細に觀察するに、云何んが是の如き十不善法は、生死の世間・地獄・餓鬼・畜生に流轉するや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、云何なるは殺生にして、云何に樂みて行ひ、云何に多く作すや。殺生と謂ふは、此の殺生人の惡知識に近き、若しは惡知識に近く住する人なる。彼れと相ひ隨ひ、彼の人を喜樂び、相ひ隨ひて遊戲し、共に行き、共に宿り、彼に於て信を生じて功德有りと謂ひ、彼に隨ひて所作し、亦與に同く行き、彼の人、是の如く惡知識に近き、彼の殺生人の(是の如くに)殺生する者に近かんに、(殺生者は)則ち種々の殺生の因緣を以て、敎へて殺生せしめ、或ひは外道の齋、或は屠獵等にて味を貪る者の如くに殺生の事を說き、怨家の者の如くに、殺生の事を說き、賊の物を貪るが如くに、殺生の事を說き、鬪戰する者の如くに殺生の事を說き、名を貪る者の如くに殺生の利を說き、彼の人は聞き已りて心に則ち信を生じ、亦隨順して行ひ、殺生を喜樂ぶ。是の如く喜樂て旣に殺生し已らば地獄・餓鬼・畜生に墮ち、愛著すべからず、心の樂まざる處、一切善人の訾毀する處にして、

【四三】怕の字宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依る。原本魄に作る。「常怖魄處」とあり。

【四四】異の字は宮内省圖書寮本に依れり、原本、思に作れり。

又、修行者とは內心に思惟し、正法に隨順し法行を觀察す。云何なるを名けて第二の口業を樂み行ひ多く作して、果報を成就すと爲すや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、是の如き兩舌を樂み行ひ多く作さんに、地獄・畜生・餓鬼に墮ち、若し人中に生るゝも若しは聾、若しは瘂にして、口常に爛れて臭く、人語を信ずること無く、衆人に笑はれ、面色好からず、一處に住せず、心動きて定まらず、常に惡行を行ふ。是の如きを名けて兩舌の業報と爲す。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何なるを名けて第三の口業を樂み行ひ多く成し、業果を成就すと爲すや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、是の如き惡口を樂み多く成さば、地獄・畜生・餓鬼に墮ち、若し人中に生るゝも、處々にて皆畏れ、一切人の所にて皆衰惱を得、人の安慰無く、自の妻女に於て愛語を得ざることは、猶し野鹿の一切人を畏るゝが如く、善知識に遠ざかり、惡知識に近かん。是を惡口の三種の果報と名く。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。綺語を樂みて行ひ多く作さば云何ん。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、若し彼れ綺語を樂み行ひ多く作さば、地獄・畜生・餓鬼に墮ち、若し人中に生るゝも一切愛せず。王舍・怨家・兄弟・親家輕弄し嫌賤せん。此れは是れ綺語口業の果報なり。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。意業の三種不善にして意が不善の業を樂み行ひ、多く作さばいかん。彼れ見聞して知り、或は天眼にて見るに、若し彼れ貪心ありて、意の不善業を樂み行ひ多く作さば、地獄・畜生・餓鬼に墮ち、若くは人中に生れて、財物有りと雖も則ち王、賊及び水・火等の爲に理無くして橫失し、恒常に貧窮からん。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。瞋心ありて、意に不善業を樂み行ひ・多く作さば云何ん。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、瞋心の意業ありて、意に不善の業

に受く。

又、修行者は業の果報を觀るに、偸盗を樂み行ひ多く作さば云何ん。報に三種有り。謂く、地獄に受け、若しは現在に受け、若しは餘殘に受く。彼の偸盗業を樂み行ひ多く作さば、地獄・畜生・餓鬼に墮ち、若しは人中に生れんに、則ち常に貧窮にして、若し財物を得るも、王・水・火・劫賊の因緣を具足して失奪るゝを畏れ、曾て樂を得ず、彼の偸盗業は是の如き等の三種の果報を得。

又、修行者は業の果報を觀る。云何んが邪婬を樂み行ひ多く作して三種の果を得るや。彼れ見聞して知り、或は天眼にて見るに、若し彼れ邪婬を樂み行ひ多く作さば、地獄・畜生・餓鬼に墮ち、若し人中に生るゝも、餘殘の果報にて妻隨順ならず、若しは[四一]二相を得て世間に惡まれん。彼の是の如き等の三種の身業、三種の果報は彼の外道遮羅迦波離婆闍迦の能く解する所に非らず、廣く身業を說かば則ち無量有るも、皆解する能はず。何を以ての故に。彼れ癡法を以て其の心に熏ずるが故なり。唯、我れのみ能く解し、我れ實に餘人の能く解するを見ず、更に人の能く是の如き業の果報の法を見ること、我れの見るが如き者有る無し。若しは我が弟子の法を修行する者は、我れに從ひて聞きしを以て、是の故に能く解す。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何なるは口業にして、口業は幾種なりや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、口業は四種にして、所謂、妄語・兩舌・惡口・綺語なり。若し彼の妄語を樂み行ひ多く作さば地獄・畜生・餓鬼に墮ち、若し人中に生るゝも一切の衆生其の語を信ぜず、諸の善き衆會、善き長者衆、[四二]刹利等の衆及び妻子等、其の語を信ぜず、口常に爛れて臭く、齒も亦好からず、面皮色無く、一切世人に妄語り枉謗げられて常に怖畏を生じ、親友・兄弟・知識固からず、一切の作す所は果の利を得ず、一切人より饒益を得ず。是の如き妄語は是れ愛すべからず、是れ樂む可きに非ず、是れ意ふ可きに非ず、是の如き不善の業果を成就せん。

【四一】男女の二根のこと、即二形の人をいふ。

【四二】刹利(Kṣatriya)。詳しくは刹帝利。田種と譯す。印度四姓の第二。婆羅門の下に位する王種なり。

て第四の口業と爲す。

又、修行者は業報の法を觀る。云何なるは意業なりや。意業は幾種なりや。彼れ見聞して知るに、意業は三種にして、貪・瞋・邪見なり。云何なるを貪と爲すや。若し他人の富者の財物を見、心に悕望を生じて彼の物を得んと欲するは、是れ意の貪業なり。復次に意業とは、他人の富者の財物を見、心に惡嫉を生ず、是れ意の嫉業なり。若し邪見を生じ、顚倒の見を生ずれば、是れ邪見の業なり。彼れに二種有り。謂く失と不信となり。云何なるは不信なりや。彼人心に謂へらく『施無く、祀無く、齋無く、會無く、善業有ること無く、不善の業無く、業の果報無し』と。廣くは則ち無量なり。云何なるを失と爲すや。彼の人心に謂へらく『一切の苦樂は皆是れ天の作れるにて、業の果報に非ず』と。是の如き二種を名けて邪見と爲す。又、修行者は業報の法を觀る。云何なるは三種の身口意業なりや。是の如き十種を樂みて行ひ多く作さば、彼れ決定して受けん。此の義云何ん。何なるは業果を現世に受け、何なるは業果を生まるゝ世に受け、何なるは業果を餘世に受くるや。復世間に於て何處に何に生るや。彼れ見聞して知り、或は天眼にて見るに、身業の殺生を樂み行ひ多く作さば、地獄・畜生・餓鬼に墮ち、若し人中に生るれば、命則ち短促し。若し貪心に因り、獵等にて殺生せば、彼の人則ち猪・鹿・雉・鷄・[三八]迦賓闍羅なる是の如き等の中に生まれて、獵師、園兵に殺害され、乃至魚を作して鉤釣にて殺さる。彼の前に作せし業と相似の因緣にて常に生死に在り、若し人中に生れんに、命則ち短促く、設ひ天に生るゝことを得るも好き處を得ずして、多く[三九]怖畏有り、速に他の爲に殺さる。殺生の報に下・中・上有り。偈に言はく。

[四〇]藏中に死する有り、生れ已りて命終る有り、能く行きて則ち亡ぶる有り、能く走りて便ち卒する有り。

彼の殺生者は此業を成就せる勢力果報にて謂はく、地獄に受け、若しは現在に受け、若しは餘殘

の第三果なる阿那含果を得たる聖者のこと。此の聖者は未來に色界、無色界に生れ、欲界に還り來らざれば不還と云ふ。

【三五】 斯陀含(Sakṛdāgāmin)。一來と譯す。小乘四果の第二果なる斯陀含果を得たる人。未斷の九地の思惑中後の三品の思惑のため、欲界の人。天に一度來生するを以て一來と云ふなり。

【三六】 須陀洹(Srota-āpanna)。新には須陀般那、窣路多阿鉢囊等に作り、預流と譯し、舊に入流、逆流、溝港等と譯す。三界の見惑を斷ちて得る聲聞四果中の初果なり。

【三七】 婆の字宮内省圖書寮本に依れり、原本波に作る。

【三八】 迦賓闍羅(Kapiñjara)。鷄鳥なりと。

【三九】 怖の字、宋・元・明三本及び宮内省圖書本に依れり。原文鐵に作る。

【四〇】 藏は胎のこと。

實の語を作し、若しは呪誓を作し、若しは王前に在り、若しは王等の前にて、妄語を言語し、他をして衰惱せしめ、或ひは打ち、或ひは縛り、或ひは物を輸らしめんに彼れ妄語を成じて是の如くに滿足し、妄語の業を成じて地獄の中に受けん。復、口業有り、名けて兩舌と爲す。和合せる者、共に業を作す者に於て破壞を語說ば、是の如き語は兩舌を成就す。云何んが此語にして果報を得ること少なきや。破壞を語り已りて、心中に悔を生ずらく『我れ愚癡なるが故に、是の如き說を作す』と。專心に懺悔し、亦、他人の破壞の語を作すを遮へて、其れに善道を示さんに、業を具足せざらしむれば、此業重からず。云何んが此業を具足し滿たさゞるや。此の破壞の語を、或ひは煩惱を以て、或ひは酒に醉へるを以て、心異りて分別し、他に向ひ異りて說きしは、此の業足らず。云何なるを名けて業道に相應して破壞の語を成ずと爲すや。若し惡心を以つて他を破壞し、隨喜び讃嘆せんに、是の如きを名けて業道に相應して破壞の語を成ずと爲す。云何んが此の業決定して成就するや。破壞の語を說き、作し已りて隨喜び、復、他に作すことを敎へて、隨喜し讃說し、喜樂し貪著して心を離れず、常に惡心を懷き、他人に避けられ往返す可からず、他の毀呰を爲し、羞恥を生ぜず、無慚、無愧にして、自ら知ること能はずんば、是の如きを名けて破壞の語の業と爲す。又、修行者は業の集を觀察す。云何なるを名けて惡口の業行と爲すや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、是の如き惡口は能く熱惱を生じ、聞きては耳悅ばず。他の惡を忍ばずして、異なる人をして信ぜしむること、若しは重く、若しは輕く、戲笑して心を瞋らしめんに、無量の報を得、無量種の報あり。彼の重き惡口は地獄に墮ち、彼の輕き惡口は決定して受けず。是の如きを名けて第三の口業と爲す。彼の業を具足し相應する義は前に說きし所の如し。

又、修行者は業報の法を知る。云何なるを名けて第四の口業と爲すや。義無き綺語(を說き)、前後相違して相應せざるを說くなり。決定して受けざると、決定せるとは餘の如し。是の如きを名け

ず（第二）、又一類の信じ一類の信ぜざるも喜憂を生ぜずして、常に正念に住したまふを云ふ。

【三〇】 胡の字は宋・元・明・三本及び宮內省圖書寮本に依れり。胡跪とは右膝を地に著け、左膝を竪てゝ坐するにて、これ極めて敬意を表する坐法なり。

【三一】 羅漢（Arhan）。又は阿羅訶、阿盧漢等。殺賊、無生、離惡等と譯す。煩惱の賊を殺して惡を離れ、再び生死世間に生れざる聲聞の究竟位なり。正しくば應供譯とすべし。供養を受くるにふさはしき聖者の義。

【三二】 齋。中時（正午）を過ぎずして、正しき時に食するを云ひ、これ比丘、在家の八齋戒を持する人の食法なり。轉じて僧家の食及び法會の施食等を齋と云ふ。但し今は外道の定むる一定の宗教的儀軌を指すならん。邪の祕法等のこと。

【三三】 緣覺（Pratyekabuddha）。又辟支佛と云ひ、新には獨覺と譯す。十二因緣を觀察し、又現事の緣により無常を觀じて、獨りにてよく斷惑證理するもの。

【三四】 阿那含（Anāgāmin）。不還、不來と譯す。小乘四果

爲、若しは飢急なるが爲、彼れを饒益するが爲の是の如き偸盜は果報を得ること少く、盜業を具せず。又復偸盜して果報を得ること少しとは、謂く、偸盜し已りて專心に懺悔し、既に懺悔し已りて後更に作さず、他の偸盜するを遮へ、不盜戒を敎へ、其れに善道を示し、善法に住し、偸盜を遠離せしむ。是の如き盜業は具足し滿さず。何なるは業を具足するや。若しは人偸盜し、彼の偸盜人の若しは他を誑惑き、屛處にて思量して欺誑く事を作し、斗秤にて物を治めて惡業の行を作すに、是の如きの種々は此業を具足す。若し他の攝む物を知り已りて盜み取らんに、是の如きは業を成す。何なる業を具足するや。云何に業を成すや。作し已りて隨喜び、樂しみ行ひ、多く作し、他に向ひて讃說し、又復他の善戒の者に盜を敎ふるに、此の業を具足し、是の如き三業を具足せば、滅せず。餘い偸盜業は果報を得ること少くして、決定せず。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順して法行を觀察す。云何んが邪婬なりや。此の邪婬人の、若しは自の妻に於て非道に行ひ、或は他の妻に於て非道に行ひ、若しは他の作せしに心に隨喜を生じ、若しは方便を設けて强て他をして作さしむるに是れを邪婬と名く。云何んが邪婬にして果報を得ること少きや。若し邪婬し已りて專心に懺悔し、他に隨喜せず、他の邪婬を遮へ、其れに善道を示して、彼の邪婬業を具足し滿さゞらしめ、邪婬の意を離れ、善戒を修行するに。是の如き邪婬は果報を得ること少なく、決定して受けず。是の如き三種の身の不善の業は果報を得ること少なく、果報輕軟なり。是の如きは外道遮羅迦波離　婆闍迦の知る能はざる所にして、其の境界に非ず、幷に天・世間、若しは魔、若しは梵・沙門・婆羅門・一切世間、諸の天人等も知る能はざる所なり。我が聲聞を除くのみ。我從り聞きしが故に、業の果報を知れり。更に敎ふる者無けん。

又、修行者は業の果報を知るに、云何んが口業の惡不善の行なりや。口業の四種とは所謂、妄語・兩舌・惡口・綺語の是の如き四種なり。何なるは妄語なりや。自ら思惟し已り、然る後、他に於て不

脫無減、解脫知見無減、一切身業隨智慧行、一切口業隨智慧行、一切意業隨智慧行、智慧知過去世無礙、智慧知未來世無礙、智慧知現在世無礙なる十八種の法の稱。

【三六】　九繫縛。愛、恚、慢、無明、見、取、疑、嫉、慳なる九結よく人を繫縛するにより、この九結を九繫縛と云へるなり。

【三七】　十種の力。菩薩の十力、力波羅蜜の十力等あれど、こゝには如來の十力を指す。處非處智力、業異熟智力、靜慮解脫等持等至智力、根上下智力、種種勝解智力、種種界智力、徧處行智力、宿住隨念智力、宿住生死智力、漏盡智力の稱。

【三八】　四無畏。又四無所畏とも云ふ。菩薩の四無畏あれど、こゝには佛の四無畏を指す。一切智無所畏、漏盡無所畏、說障道無所畏、說盡苦道無所畏の稱。佛は我れ一切智にして漏を盡せりと師子吼して畏無く、又佛道を障礙する法を師子吼して畏なく、苦を滅する道を說きて畏なき意なり。

【三九】　三念處。又三念位とも云ふ。第一念住、第二念住、第三念住の稱。佛は衆生の信ずるも喜を生ぜず、（第一）、又衆生の信ぜざるも憂を生ぜ

世尊』と。彼の諸の比丘、世尊の所に於て至心にて諦かに聽けり。

爾の時、世尊、諸の比丘の爲に是の如く說きて言さく『諸の比丘、何なる者が正法念處の法門なりや。所謂、法は法なりと見、非法は非法なりと見、常に彼處を念じて心に疑を生ぜず、喜樂て法を聞き、長宿を供養し、彼れ身業・口業・意業を知り、業果と生滅とに、顚倒の見ならず、異法を行はざるなり。諸の比丘よ、身業は三種にして、所謂、殺生、偸盜、邪婬なり。云何んが殺生なりや。他の衆生に於て、衆生想を生じ、殺害の心を起して其命根を斷ちて、殺生を成すことを得。彼れに三種有り、謂く上・中・下なり。言ふ所の上とは、[三一]羅漢等を殺して阿鼻獄に墮つるなり。言ふ所の中とは道に住する人を殺すなり。言ふ所の下とは不善の人を殺し、及び畜生を殺するなり。又復三種とは所謂過去・未來・現在なり。又復三種とは所謂貪を作し、瞋を作し、癡を作すなり。彼の貪を作すとは所謂獵等なり。彼の瞋を作すとは所謂下性なり。彼の癡を作すとは外道の[三二]齋等なり。又復三種とは所謂自ら作し、他に教へ、(又この)二を作すなり。五の因緣有りて、是れ殺生なりと雖も殺せし罪業なし。所謂、道を行き、心無くして蠕ける蟻等の命を傷殺し、若しは鐵等を擲ち、心無くして殺生して物の命を斷ち、醫師の病を治するに、利益の爲の故に病者に藥を與へ、藥に因りて命を斷つとも、醫に惡心無く、(又)父母の慈心にて、治せんが爲の故に打ち、打しに因りて命終り、然火に蟲入りて心無くして蟲を殺し、蟲火に入りて死す。是の如き五種は生命を斷つと雖も、殺せし罪を得ず。又復更に三種の殺生有り、所謂、他に教へ、自ら作し、二を作すことなり。

又、修行者は內心に思惟し、正法に隨順し、法行を觀察す。云何んが偸盜を成就し滿足するや。云何んが偸盜するも、果報を得ること少なきや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、他の物にして他の攝むるを、自らの意にて盜み取らば、是の如きは偸盜を成就し滿足す。若しは是れ王法、尊父母・病人・[三三]緣覺・羅漢・[三四]阿那含人・[三五]斯陀含人・[三六]須陀洹等を饒益せんが爲、若しは病急なるが

於て眞なれば諦と云ひ、又眞理は決定して動かざれば諦と云ふなり。

【三二】 三種の苦。苦苦、壞苦、行苦の三苦を指すならん。苦苦とは苦の緣によりて受くる苦、壞苦とは樂の壞するによりて生ずる苦、行苦とは一切の變遷して無常なるに依りて生ずる苦なり。

【三三】 三界。欲界、色界、無色界の稱。欲界とは、地獄、餓鬼、畜生、人、天、阿修羅及び六欲天の總稱にして、此の界の衆生はすべて欲に耽る故に此の名あり。欲界に上に四禪十八天ありて之れを色界と稱す。此の界は欲界の色相を離れ、清淨微妙の色を以て組成せらるゝが故に色界と云ふ。更に色界の色をも離れ、只心識のみありて勝れたる禪定に住する世界を無色界と云ひ、四天あり。これ生死の世間に於ける最上の果報にして、欲界を最下の果報となす。

【三四】 十八界。六根、六境、六識を十八界と名く。

【三五】 十八功德。十八分具法(Aveṇikadharma)を指す。十八不具法とは、只佛のみ具し給ふ功德にして、身無失、口無失、念無失、無異想、無不定心、無不知已捨、欲無減、精進無減、念無減、慧無減、解

ることは須彌山の如く、心に畏るゝ所無きは師子王の如し。一切衆生の歸依する所にして、猶し父母の如し。大悲、心に熏じ、一切衆生の唯一の上親にて、慈・悲・喜・捨を依止する處と爲したまへり。[一八]三十七大菩提分の勝妙の法を以て其身を莊嚴り、一切衆生を清淨の眼もて觀じて厭足こと有る無く、日月光より勝れり。釋迦王子、[一九]偈にて言はく。

世尊は廣き普眼、[二〇]三垢無き淨眼にてましまし、能く巧に[二一]二諦を說き、善く[二二]三種の苦を知り給ふ。

是の如く佛・世尊、已に二種の修を修め、現に道果を證り、滅諦の智を具足し給ふ。

[二三]三界眼を遠離して、異る三界を說き、[二四]十八界諦を知り、解脫諦を觀知したまへり。[二五]十八功德衆に、自らの功德は相應し、[二六]九繫縛を解脫し、[二七]十種力を具足したまへり。[二八]四無畏を成就し、亦大悲を成就し、大悲心は深潤にして、[二九]三念處を成就したまへり。

爾の時、衆多の比丘、既に世尊を見たてまつり、一肩を整服し、法の如く、[三〇]胡跪し、右膝を地に著けて世尊の足を禮し、退きて一面に在り、正しき威儀に住し、低頭して容を斂めりき。爾の時、衆多の比丘、一比丘を推し、往きて世尊に近かしむ。復更に世尊の足を頂禮し已り、世尊に白して言さく『我れ晨朝に衣を著し、鉢を持して王舍城に入り、行きて乞食せり』と。上の所說の如く、次第に乃至、彼の外道遮羅迦波離婆闍迦と共に問難、語說し、彼れ身業・口業・意業を問ひしこと(を說くこと)、皆上に說くが如し。

爾の時、世尊、先づ觀察し已り、然る後に說を爲せり。爾の時、世尊、彼の比丘と那羅陀村の諸の婆羅門の爲に法を說きて言さく『汝、諸の比丘よ、我が說く所の法は初・中・後善く、義善く、語善く、法に應ひて具足し、清淨鮮白にして、梵行を開顯し、所謂、正法念處の法門なり、諦かに聽け、諦かに聽け。善く之を思念せよ。我れ汝の爲に說かん』と。諸の比丘言さく『是の如し。

天の苗裔なりとし、梵天に奉事して梵法を行ふ、印度四姓の一。

【一六】 如來(Tathāgata)。佛十號の一。眞如より來生せるものゝ意。

【一七】 須彌山(Sumeru)。又は修迷樓、蘇迷盧等、妙高山と譯す。一世界の中央に位し、金輪の上に在り、高さ八萬由旬、頂上を帝釋の所居とし、諸天、六道、四生、廿五有皆之れによりて住し、日月之れによりてめぐり、周圍に八山、八海連れり。山の四面に所謂須彌四洲あり、其の國土の莊嚴等は、本經の後卷(經集部第十一)に詳說せらる。

【一八】 三十七大菩提分。又は三十七道品、三十七品等と云ふ。四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道の三十七は、能く菩提を成就する法の支分なれば、これを三十七菩提分と云ふ。

【一九】 偈(Gāthā)。頌と譯す。四句を以て一連とせる詩句のこと。頌とは美しき歌のことなり。

【二〇】 三垢。貪欲、瞋恚、愚癡の三煩のこと。

【二一】 二諦。俗諦、眞諦の二を云ふ。俗諦とは世俗の所知の法。眞諦とは聖智所見の眞理のこと。世間の事相は俗に

非ず、他を隨喜せずと。汝の釋迦沙門瞿曇の是の如き法律は何なる異、何なる意、何に勝ることゝ有りと爲すや。若しは汝の釋迦沙門瞿曇の是の如き法律は我れと何に異るや。而も汝の釋迦沙門瞿曇は自ら我れは是れ一切智人なりと說けり』と。彼の遮羅迦波離婆闍迦外道の是の如く問ひ已るも、彼の諸の比丘は、新しき出家の故に、比丘法を未だ善く解すること能はず、心に隨喜せず。是の故に、答へず。爾の時、衆多の比丘、既に乞食し已り、慧命舍利弗を離れ、各々皆、那羅陀村に到り、食を乞ひ已りて住せり。爾の時、慧命舍利弗も亦乞食し已り、同じく共に往きて那羅陀村に到れり。爾の時、衆多の比丘、往きて慧命舍利弗の所に到り、具に說きしこと上の如し。

爾の時、慧命舍利弗、衆多の比丘に語りて言はく『若し我れ慧命、汝と共に相隨ひて王舍城內の同じき四出の巷、同じき三角の巷にて、卽ち汝等と共に遮羅迦波離婆闍迦外道の所に到らば、我れ則ち能く正法を以て之を破らん。然るに、我れ異る四出の巷、異る三角の巷に在りて、行きて乞食せしが故に、我れ是の如く彼の難、卽ち彼の遮羅迦波離婆闍迦外道の前に問難せる所を聞かず。世尊は普眼にて諸業の果報の一切を現に知りたまへり。今、此處に在て最も尊勝と爲す。一切の外道見れば則ち降伏し、諸の[一二]聲聞、諸の[一三]優婆塞、諸の天人等の爲めに善く一切の業の果報の法を說き給ふ。此れを去ること遠からず。汝、往きて問ふ可し。彼れ當に汝の爲に善く一切の業の果報の法を說きたまはん。若しは天・魔・[一四]梵・世間・沙門・[一五]婆羅門等は說く能はざる所にして、唯、[一六]如來のみ能く汝の爲に說きたまふこと有り。我れ彼の法に於て未だ通達せず。唯、世尊のみ善く業の果報の法を解くこと有りて、能く汝の爲に說きたまはん』と。

爾の時、衆多の比丘、世尊の所に向へり。

爾の時、世尊、晝時の法に依りて、[一七]須彌山の如し。自らの光網の燄にて晝日の明の如く、夜中の月の如く、月の清涼なるが如く、陂地の清きが如し。甚深なることは海の如く、安住して動かざ

にして眞ならざるものを云ふ。

【九】釋迦(Sākya)。釋迦牟尼、卽ち世尊のこと。又印度の一族なる釋迦族をも指す。

【一〇】沙門(Śramana)。又は娑門桑門沙門那等に作り、息心、靜志、乏道等と譯し、新に室囉摩拏、舍羅摩拏等に作り、功勞、勤息と譯す。道を修むるに勞多きを以て功勞と曰ひ、又諸の善法を勤修して惡法を止息するものゝ意より勤息と云ふ。もと外道佛徒を論ぜず、なべて出家して道を求むる者に名く。

【一一】瞿曇(Gautama)。又は俱譚、具譚。新に喬答摩に作る。釋迦一族の姓なれど、又特に瞿曇と云ひて釋尊を指す。

【一二】聲聞(Śrāvaka)。佛の小乘法中の弟子にして、佛の聲教を聞きて煩惱を斷ち、能く涅槃に入るもの。

【一三】優婆塞(Upāsaka)。舊に又は伊蒲塞、新に鄔波索迦、優婆娑迦等。淸信士、近事男等と譯す。在家の男子にして、三寶に親近し、五戒を受けたるものゝ稱。

【一四】梵(Brahmā)。譯、寂靜、離欲等。梵天のこと。色界の諸天婬欲を離れて淸淨なれば、總じて梵天と云ふ。

【一五】婆羅門(Brāhmaṇa)。淨行、淨志等と譯す。自ら梵

正法念處經[1]

卷の第一

元魏 婆羅門 瞿曇般若流支[2]漢譯

十善業道品第一

一切の諸佛菩薩に歸命[3]したてまつる。

是の如く我れ聞けり。一時、婆伽婆[4]、王舍城[5]に在して、那羅陀婆羅門村に遊びたまへり。爾の時、慧命[6]舍利弗[7]、晨朝の時に、衆多の比丘と共に王舍城に入りて、各々行乞せり。爾の時、衆多の比丘、慧命舍利弗を離れ行きて乞食し、遂爾往きて遮羅迦波離婆闍迦　外道[8]の所に到り已り、共に相問訊す。彼此歡喜し、說法し、語論し、迭互に相問へり。彼の遮羅迦波離婆闍迦外道、諸の比丘に問へらく『汝の釋迦[9]沙門[10]瞿曇、是の如き法を說けり。不善を爲さんと欲するは、是れ愛す可からず、是れ樂む可きに非ず、是れ意ふ可きに非ず。他の欲ある者に於て亦隨喜せずと。我れも亦是の如く說けり。彼の身業は是れ愛す可からず、是れ樂む可きに非ず、是れ意ふ可きに非ず。他の欲ある者に於て亦隨喜せずと。汝の釋迦沙門瞿曇は彼の口業を說きて、是れ愛す可からず、是れ樂む可きに非ず、是れ意ふ可きに非ず、他を隨喜せずと。我れも亦是の如く說けり。彼の口業は是れ愛す可からず、是れ樂む可きに非ず、是れ意ふ可きに非ず、他を隨喜せずと。汝の釋迦沙門瞿曇は彼の意業を說き、是れ愛す可からず、是れ樂む可きに非ず、是れ意ふ可きに非ず、他を隨喜せずと。我れも亦た是の如く說けり。彼の意業は是れ愛す可からず、是れ樂む可きに非ず、是れ意ふ可きに

【一】正法念處經（Saddharmasmṛty-upasthāna-sūtra）。

【二】瞿曇般若流支（Gautama-prajñāruci）。瞿曇は姓、般若流支は名。智希と譯す。南天竺波羅㮈國の婆羅門にして、元魏孝明天熙平元年洛陽に至り、諸經論を譯す。

【三】歸命（Namaḥ）。南無と音譯し、歸命と譯す。惣じて至極の信心を表す詞なり。

【四】婆伽婆（Bhagavat）。又は薄伽梵、婆伽伴等。佛十號の一、世尊と譯す。

【五】王舍城（Rājagṛha）。中印度摩迦陀國の都城にして、釋尊の最も多く傳道したまへる地なり。

【六】慧命。比丘の尊稱なり。比丘は慧を以て命と爲すが故に慧命と云ふ。又は慧壽と曰ひ、新譯には具壽に作る。

【七】舍利弗（Śāriputra）。又は舍利弗多、舍利弗羅、舍利子に作り、新に舍利弗多羅、舍利富多羅、舍利補怛羅に作る。本外道なりしが、馬勝比丘の因緣所生法の偈を聞きて出家し、後目連とならびて敎團中重要の位置をしめ、智慧第一と稱せられたり。佛に先ちて寂す。拙著「佛弟子傳」に委し。

【八】外道。佛敎以外の諸敎學を外道と云ひ又延ゐて邪法

日二黄閤一とあり。
【一八】 鈴閤。將師の居る所。「晉書」に鈴閤之下、侍衞不レ過二數十人一とあり。閤は小門、東閤を開いて天下の士をまつこと。
【一九】 九部經。十二部經のこと。
【二〇】 不憚重繭。足傷れ、皮皺だち、蠶繭の如くなれるをもいとはずの意。「戰國策」に足重繭而不二休息一と。莊子の註に、重繭とは胼胝なり、皮の厚きなりとあり。
【二一】 法螺。佛寺にて吹きならす貝。轉じて又佛寺を言ふ。
【二二】 この下、概略して本經の要旨を說けり。
【二三】 布施。愛語、利行、同事の四攝法と六神通のこと。
【二四】 この下、高公の瞿曇流支を第に居らしめて譯さしめ、曇林、僧昉等に筆授せしめしをあかす。
【二五】 玄默、淵獻は古時の十干、十二支に該當するもの。北魏の興和元年（西紀五三九年）より北魏武帝の末年（西紀五四九年）に至る十年間なり。
【二六】 緇素擊節云々。僧俗共に柏子を取り、雅人、俗人共に法を傾首するは、となり。

二に止らん。遥き矣西方、路は百宿を超ゆ。精力苦心して[二〇]重繭を憚らず、故に能く法藏流行し、異聞倶に湊まり、爰に王舍城の妙說有り。時將に感通せんとす、[二一]法螺の良藥響授して斯れに在り。[二二]善業の本從り身念の際を極め、品を標するに七有り、義を明す者五、俗に違ひ、世を絕し、想を菩提に託し、彼の天人を眷、深く鬼畜に嗟き、玆の因果に鑒みて心を是の緣に寘し、誠を篤くして行を修むるが如きに至りて、又前旨を悟らん。懷を載せて依仰せば、形殊なれども理は一なり。大覺して下に臨まば、昭然として獨り曉かなり。[二三]四攝六通、群智を網羅して、妙德を贊揚するの事を斯の文に屬る。[二四]直風殊にして俗舛ひ、詞翰乖絕せるを以て、耳を傾け目を注ぐも、隔つること山河の若く、將に靈敎に虧くる有り、玄旨墜つること多きを恐れんとす。婆羅門瞿曇流支・比丘曇林・僧昉等有り、並に深きを鉤け隱れしを索め、言に通じ理に接す。延いて第館に居らしむるに、四事違ふこと無し。乃ち明かに玆の典を譯し、正法念處と名け、興和の歲陽玄默[二五]自り起り、武帝の淵獻の季に終れり。流を修め廣を積み、合せて七十卷、微言昧からず。之れを弘むるは我れに在り。大いに覺典を崇び、尅ず靈迹を宣べ、此こに乃ち四部を法橋に濟し、六塵を定水に刷はん。心殿に業重く、德無くして言ふ。龍樹を追はず、馬鳴に日遠しと雖も、法を申べ道を尊ぶこと、夫れ豈昔に異らんや。[二六]緇素節を擊ち、雅俗首を傾くる所以は、義存すればなり。法を三界に永くと云ふ爾。

祇陀太子又其の林樹を捧げしを以て、佛のかく名けたまひし園林にして、舍衞城の南凡そ一里の所に在り、これ又佛のしば〳〵說法せられし所にして、有名なる祇園精舍は此處にありしなり。

【八】　鹿苑。鹿野苑(Mrgadāva)の略。仙人住處、仙人鹿園、施鹿園、鹿林等種々の名あり。佛成道後始めて憍陳如等の五比丘を濟度したまひし地なり。

【九】　連河。尼連禪河(Nairañjanā)の略。有金河、不樂著河等と譯す。佛、苦行を捨てゝ此の河に浴し、以て身垢を去りて菩提樹下に正覺を成じたまへり。

【一〇】　升極。升はのぼる義、解脫のことなり。

【一一】　鵠林。鵠は鶴と古字通ず。鶴林とは釋尊入滅の地なる娑羅樹林のこと。入滅の際、雙樹悉く白色となりて、あたかも白鶴の如ければかく名けしなり。轉じて一般に僧寺を鶴林と云ふ。

【一二】　檀薪已然。佛の涅槃に入りて還りたまはざるを云ふ。「水經注」に友僧載外國事曰、佛泥洹後、天人以ニ新白緤一裹レ佛、以ニ香花一供養、滿七日、盛以ニ金棺一以ニ栴木一爲レ薪、天人各以レ火燒レ薪、薪了不レ然、大迦葉、從ニ流沙一還、不レ勝レ悲、號感ニ動天地一從レ是之後、他薪不レ燒而自然とあり。

【一三】　水骨流暉。光陰の流早きことを云ふ。「四民月令」に犁星沒レ水生レ骨と。かく光陰流れて村里に教義はよく廣まれど、釋尊の遺せし約や旨の今まで傳はること少なしとなり。

【一四】　神衿。崇高なる心を云ふ。衿は胸に當る故に心と爲す。揚巨源の詩に景雲隨ニ御輦一顥氣在ニ宸襟一とあり、宸襟とは帝王の心を指すが如し。

【一五】　廟堂。王宮の正殿、或ひは朝廷を云ふ。天淵を廟堂に制すとは、能く高公の天と淵の如き極端にへだたれるものをも制統せるを云ふ。

【一六】　異軫同騖。軫は車の横木。高公の風德を慕ひて、各各車を馳せて同じく其の門下に集まれるを云ふ。

【一七】　黄扉。黄閣と云ふに同じ。黄閣とは宰相の事を聞く所。「漢舊儀」に丞相聽レ事閣

正法念處經叙

夫れ[一]域中の名に四等あり、道の生ずる所萬殊なり。名は蓋し衆名の假にして、生は生有るの實に非ず。然れば[二]則ち修促共に盡き、小大期を同じうす。而も金もて絲編に字し、緗に素篆を交へて、途を分ち道を列ね、門を張り戸を設くれども、既に斷惑の境に昧く、未だ息言の路に接せず。詎ぞ能く神を探り妙を測らんや。無邊を苞總むものあり聖有りて將に應ぜん。靈因は曠遠なり。髮膚を遣てんと志し、[三]單に城國を施てゝ、繁星駐まり彩るに及び、夕に馬空に騰り、四門を出でて以て念を結び。處ること三夜にして果圓かに、[四]十力已に在り、[五]八解倶に照かなり。智は一切を兼ね、慈は萬方に洽く、既にして法吼すれば傍ら震ひ、甘露降りて[六]鷲山[七]祇樹の下、[八]鹿苑連河の地に灑ぎ・衆出ずること恒沙(の如く)、徒繁れること林竹の(如くにして)、窺迷を升極に反し、[一〇]重昏を鐙炬に啓けり。[一一]鵠林に興慕すと雖も、[一二]檀薪已に然ゆ。敎義忘られず、風聲逾被び、壽陵には丹素の工を仰ぎ、[一三]淸台には金玉の質を寫し、水骨流暉して園闍に等を加ふれど、遺契・餘旨は前載を傳ふること薄し。幽宗の絕唱方に玆の辰に備はれり。使節大將軍・領中書監・攝吏部尙書・京畿大都督・渤海王の世子高公は、道風虛邁、[一四]神衿峻遠にして、日月を中衢に負ひ、雷霆を上路に擊つ。德は生民に表はれ、舟梁を夷夏に作れり。器は群物を含み、天淵を[一五]廟堂に制し、流を殊にするるも共に委ね、酌めども竭きず、[一六]軫を異にするも驁するを同じふし、仰ぎて以て歸するを知る。[一七]黃扉南に闢き、[一八]鈴閤東に啓けば、則ち高士・通才・幽人・偉器有り、其の漢爵の重を懱み、其の南岳の游を鄙めど、裾を曳き高歩して自ら門下たるを得ば、倶に前趣の禮を申べ、並に却行の眷に應ず。蓋し書を以て多方に奏し、術を異等に呈せるなり。或ひは卷を披きて止まり、或ひは一貫して獨り得、每に神を釋典に留め、玄門を洞叩く。以ふに夫れ壁を照し瓶に瀉ぎ、遺文を必ず擧げなば、徒に[一九]九部のみに非ず、寧ろ十

【一】域中之名四等。「老子」に道大、天大、地大、王亦大、域中有二四大一而王居二其一一と。佛敎では地水火風を以て四大と爲せり。

【二】長短萬差あり、大小同時に存在するを說明せんと、或ひは金字を以て、書を綢み或ひは緗に白字を以て、書きて、種々に論議を設くれど、釋尊出世以前の種々の敎學の未だ息言、斷惑の境地に接せざりしを云ふ。緗とは淺黃色の絹にして、以て書狀と爲すもの。

【三】釋尊の月夜に乘じて白馬に跨り、迦毘羅城を出でゝ出家したまへるを云ふ。四門を出でゝとは、未だ太子にておはせし時、四門出遊の途上生老病死の相を見て、遁世の心を起したまへるを指す。

【四】十力。如來の十力なり。

【五】八解。八解脫の略。又八背捨とも云ふ。欲心を背捨して三界の惑より解脫する八種の解脫觀なり。

【六】鷲山。耆闍崛山(Gṛdhrakūṭa)の譯名。王舍城の東北に聳え、釋尊說法の地として聞ゆ。

【七】祇樹。祇樹給孤獨園(Jetavana-Anāthapiṇḍada-Ārāma)の略。給孤獨の祇陀太子より地を購ひて佛に供養し、

よりて「業」あり、「業」から「苦」界を造るといふ苦集の原理を「道」智にて明かにすれば「滅」が實現するといふ、迷悟染淨の因果を、心の創造によりて廣說してゐる。（拙著「佛教に於ける地獄の新研究」序論第四章內觀の世界參照）。

尙ほ本譯各册の略解題によりて、その中に於ける特色ある大體の事項を知つて戴きたい。

昭和八年一月十二日

譯者　山邊習學　識

いふ說、又は「中阿含經」第十二の縱の方處(そしてこの說を受けたる「婆沙論」第百七十二卷の說明)等の地理書のやうな科學的說示に對比して、本經第十一の文には

「かやうに六十八百千由旬の地、海、州、城を過ぎ、海外の邊に將ゐ去り、復行くこと三十六億由旬、漸々に下に向ふこと、十億由旬なり。業風吹いてかやうに遠く去る」。

人間の思惟と想像を奪うて、幽玄深刻なる大地獄を、眼前に彷彿せしめんとする。これは焦熱地獄より大焦熱地獄への旅路であるが、更にこの地獄から最下の無間地獄へは

「業力自在にして、相似たる身を生じ、頭面は下に、足は上に、墮ちんとするや、大力の火燃、抖擻きて、二千年を經て、下に向ひゆけども、未だ阿鼻地獄に到らず」。

かやうにして、大地獄の深さを描きつゝ、心の深さ、內觀の深さを暗示しつゝある。卽ち本經を貫くテーマともいふべきは、世尊がこの六道相を說かれるに當りて、事々に必ず「又、修行者・內心思惟・隨順正法・觀察法行・云何偷盜」等と繰返されることによつて、內觀の上に表はるる生活の客觀化であることを知ることが出來ると思ふ。

更に帝釋、阿修羅の關係は、「雜阿含」の說示から本經に來りて、極度の發展を示し、第二十、第二十一の兩卷に亙りて、雄大豪壯なる大戰爭文學となつてゐる。顧ふに帝釋は文化主義、阿修羅は軍國主義を代表し、云はゞ人類の歷史の二大潮流ともいふべき戰爭と平和の相克を描かうと試みたのであらう。そして夫等の勝敗の主因を彼等の戰鬪力に置かないで、却つてこの世界の民衆が正法によりて善事を行ずるか否かを明せる處に本經の眼のつけ所が知られると思ふ。更に天上の廣大雄渾なる記述は、その體裁といひ結構といひ全く大乘經典と其規を一にしてゐるといつてよいと思ふ。更に「雜阿含經」の諸餓鬼を蒐錄せる「餓鬼應報經」の三十六種餓鬼を、本經がその儘討襲し完成してゐることも甚だ明了である。

終りに本經に一貫する思想的立場は、唯心創造であると思ふ。それを尤も明了に表はしてゐる處は、第五卷中、生死品第三である。「心業の畫師」が、黑白黃色をもつて、地獄を描き、諸天中の不染汙畜生道を描くといひ、又は「欲心は火焰の如く、燈明の色は愛すべし。飛蟲は癡の故に、彼の明焰を見て貪著し愛樂し、中に入りて卽ち死す。愚癡の凡夫も亦復是の如し」とゝき、又は終りの偈文には「心怨最第一、更無如是怨、心常燒衆生」、「智爲第一親、智爲第一寶、如是之智火、常燒煩惱山」と結び、「惑」に

ないが、本經の流傳の一つの事相として認むべきであらう。

尙ほ間接ではあるが、親鸞聖人がその著「敎行信證」化卷に於て、唐代の法淋師の著「辯正論」中の數品を引用してゐるが、その第二十代奉佛篇に、本經第十八、畜生品が引かれてゐることは、注意に値するであらう。それは正法が世に行はれる時は、諸天は盛んに、人民は榮えるが、邪法が行はれる時は、阿修羅は盛んに、人民は衰へるといふ一段の取意の文で、之を廣說したのが天と阿修羅の戰鬪批判となるので、本經第十八より第二十一に亘るものである。片鱗ではあるが、佛敎の社會性といふものを說く有力なる證文として須ゐられてゐることは、本經の流傳の一つとして數ふものであらう。

四、一經の組織及び內容の大綱

本經の組織は甚だ簡單である。初めに外道の一人が、身口意の三業に就いて新出家の比丘等に質問したことから端を發して、世尊が是に關して「正法念處法門」を廣說せられることになつてゐるので、地獄・餓鬼・畜生・天上がその內容である。この中、阿修羅は畜生に收められ、人界は別說しては居らぬが、是等全體に關係あるものとして取扱うてあるから、內容的には凡に行き亘つてゐると見たのであらうから、つまりは三界六道相から成り立つてゐるわけである。

卽ち一般的に云へば漢譯「長阿含經」第十八より第二十二に至る「世記經」、「增一阿含經」第三十六の地獄、「雜阿含經」第十九の餓鬼、「同上」第四十、四十六等の帝釋、阿修羅等を思想的、文學的に完成せしめたものといふべきであらう。一例をあぐれば、本經に於ける思想上の特色たる地獄の罪因、罪果の關係に就いて、「長阿」、「增一阿」の所說は、幾分の混雜を免れ難いが(拙著「佛敎に於ける地獄の新研究」六十八頁圖解參照)、本經にありては、秩序整然として、地獄の批判を明示しつつある。卽ち現世に於ける殺人罪の如きは尤も重罪であるが、身口意の三業の中、意業最重の原理に立ちて、尤も輕罪として第一等活地獄に墮し、それより偸盜、邪婬、飮酒の身業よりも、妄語の口業を第五、大叫喚地獄に墮し、次いで邪見、犯持戒人、逆謗の意業を焦熱、大焦熱、無間の最重の地獄に墮在せしめる如きが夫である。かやうにして反省と批判の意義上、現世に於ける向上は、その儘逆に地獄に於いては向下となりて、この兩者の批判は全く反對となつてゐる。(「同上」七十頁、百十四頁の圖解參照)。

次に、文學的に完成せる特例をあぐれば、地獄の位置に關して、「長阿含經」第十九の横の方處たる二大金剛山の中間と

ることゝ、從つてその文體も夢幻的、ローマンテツクであることである。元より是等によりて(特に漢譯文を本として)時代を限定することは出來ないが、少くとも小乘思想の爛熟期――大毘婆沙論編纂後――に於いてなされたこと丈は慥かであると云はれやう。これが爲めに往々にして錐の袋を脱するやうに大乘思想に及んでゐることは本譯第九卷の略解題にも指摘した處である。この理由も幾分の證左となりうると思はれる。

三、本經の流傳

本經が小乘部に屬せられたといふことも一つの理由となつたと思はれるのであるが、四阿含經と等しく一つの註疏も持つてをらないこと丈でも、いかにも三國に亘つてあまり重要視せられなかつたことは容易に知られると思ふ。併し、六道觀が、佛敎思想中有力なる宇宙觀、人生觀的の基本概念として一般に流布せられた爲めに、從つてこの思想が大衆的に根を張るに從つて、六道觀を說示することに於いて諸經中嶄然頭角を表はしてゐる本經が、現實生活の批判に眼を注いだ實踐者としての敎家の眼を引いたことは自然であらう。「佛祖統記」第四十卷に表はれてゐる、彼の名畫家、吳道子が、「景山寺に於いて地獄變を畫き、都人が之を觀て、咸く罪を懼れ、善を修め、兩市の屠沽售れず」とあるは、何經に據つたかは知り得ないが、「地獄の地處は、心業の畫師の愛筆にて畫く所なり。善からぬ分別は種々の彩、愛する妻子は彩器にて、執著の因緣にて堅し」(本經第五卷)等の文字にても知らるゝやうに、地獄の變相圖を畫くことを唆らしめる點に於いて本經が尤も勝れてゐるから、多分その臺本となつたのではないかと想像せられるのであるが、併し燉煌發掘の「十王經」の圖等から見て、或は本經ではなしに僞經「十王經」が臺本となつたかも知れない。他に有力な史料のない限り、此想像は是以上に進むことは出來ない。

日本に來つて源信僧都が「往生要集」を作られた時に、厭離穢土の下に描かれた八大地獄の材料として、本經が「智度論」「瑜伽論」、「倶舍論」、「觀佛三昧海經」等とゝもに引用せられてゐるが、量に於ても質に於ても、尤も重く依用せられてゐることは注意すべきものである。本經はこの著者によりて初めて、その七百年の沈默を破りて、直接大衆の琴絃に觸れたと云はるべきであらう。清女の「枕草紙」(六十一段)によれば、中高が見せやうとする地獄變相圖を、淸女が嫌がつて隱れたとあるから、當時既にその圖が造られ、それが夜宮中におかれると、宮女が地獄の苛責の聲を聞いて戰いたといふ傳說が生れた程であるから、直接では

頭を破りて腹に入る等といふ、是丈が本經第六合地獄中の有名なる刀葉林地獄と大同小異の構想であるが、併し智度論に表はれたる地獄の描寫は、古撲簡潔で、本經の如く豐潤放奔ないいき方とは著しく相違してゐるから、偶々この一ヶ所の一致點があつても、必ずしも本經から取材したとは云ひ難い、或は寧ろその反對であるとも云はれやう。恐くこの二本より、もう一つ先きの文献にあつたものを双方で傳承したと云ふ方が適當であらう。何分にも本經は、小乘經典と云はれるものゝ中、六道相を描いた最も尨大なるものであり、內容から云つても、亦最も完美して居るものであるから、若し龍樹以前の成立してをつたとすれば、何等かの形で本經の思想が智論のその條下に表はれる筈である。然るにそれが上述のやうであるから、少くとも本經の成立は龍樹以後であらうと想像せられるのである。

いふまでもなく、龍樹の智度論をもつてあらゆる經典成立の年代を決定する規準とすることは出來る筈はないが、想定の一方法としては、可成りにその批判價値は認められるわけである。假りにこの想定に幾分の根據を置くとすれば、本經の成立年代は、西曆四世紀の初めから漢譯以前半世紀程と見て、五世紀の終り頃までの二百年間であらうと思はれる。

是を本經の內容から見て、この想定を稍有力ならしむるものは本經第十一卷、焦熱地獄の罪因の一として邪見をあげてゐる。

「復有二邪見一、所謂有レ人、作二如是見一、世間有二始因緣一而生、有常、無常、一切皆是因緣所作、彼不二實語一、邪因譬喩、於二非法中一相似法說、令三他餘人安二住邪法一、退二失正法一、障二礙正法一而作二邪見一、彼不二正說一、常法非因、常法不動、常法不異、常(法)不能作、猶如二虛空一」

こゝに邪見として彈劾せられてゐる說「一切皆是因緣所作」又は「常法非因乃至猶如虛空」は、中論の因緣空說、卽ち生滅去來一異斷常の範疇を否定する八不中道觀を、有部の實有說から見てかやうに曲解したのだと思はれる。「諸法實相者、心行言語斷」、不生亦不滅寂滅如涅槃」を曲解して「實相」(法性)を「常法」と置きかへれば、上出の文が容易に作られるであらう。元より「中論」以前、既に各種の「般若經」に於いて、この思想は充分に表はれてはゐるが、「中論」に來つて、初めて破邪顯正して、明確にこの思想が社會性をもつて來たことは明かであるから、本經のこの文からも、龍樹以後の成立であるといふ一證左が得られると思ふ。

もう一つは、本經の構想及び文體である。雄大豐富な詩想をもつて、大凡小乘的思想の能ふ限りの極限まで擴大してゐ

りに「今搜ニ訪實錄ー件註如レ前、餘所未レ見者俟ニ諸後進ニ耳」といふてあるから、この「開元錄」の編者智昇は、是までこの二流支の混同に困つてをつた先進の人々に一歩を進めて、ともかくも「今搜ニ訪實錄ー」して「件注如レ前」本經を瞿曇流支と決定したわけである。こゝに「實錄」といつたのは、同流支の銘ある筆寫本か、或は是に關する信頼すべき記錄を探し出したことをいふのであらう。一先づからと決したものゝ「餘所未レ見者、俟ニ諸後進ニ耳」で、尙ほ自分の見た以外にどういふよい文獻があるかも知れないから、それは後の研究者にまつの外はないといふてあるから、尙ほ確定を避けてゐるわけである。併し今となつては是以上に文獻の研究を進めることが出來ないから、この兩譯者の譯經の內容研究に俟つの外はないのであるが、是は容易ならぬことで、それこそ後の君子を俟つの外はない。今は「開元錄」をそのまゝ討襲してゐる「貞元錄」(第九)の編者並に本經の叙文起草者とゝもに瞿曇流支譯としておくの外はないであらう。

次に譯者の確定と否とに係はらず、譯出の年代は、經錄の記錄によりて明かである。「歷代三寶紀」所載の興和元年は西紀五百三十九年に當り、梁武帝の大同五年、我朝にては正に欽明帝の卽位の年である。尙ほ本經の叙文によれば「興和の歲玄默より起り、武帝の淵獻の季に終る」とあるから、若し正確に武帝の末年(西紀五百四十九年)とすれば十年の歲月を閱したことゝなる。勘文鏤賜の刻苦察知すべきである。卽ち本經が譯出せられて第三年目に佛敎が我國に渡來したのである。

因に大谷大學圖書館發行「西藏大藏經甘殊爾勘同目錄」(櫻部文鏡編)(三百六十八頁)によれば、本經の漢譯と西藏譯は完全なる一致を示してゐる。

二、本經の成立年代

此項目に就いては今の所、私に取つて材料は甚だ貧素である。成立年代想定の唯一の手掛りと云へば、龍樹の「大智度論」の中に本經を發見し得ないことである。卽ちその論の第十六卷に、八大地獄、並に十六小地獄卽ち八炎火地獄と八寒冰地獄を說示してゐるが、大體に於て長阿含經第十九、增一阿含經第三十六に據つてゐる。(そして龍樹以前の編纂にかゝはる「大毘婆沙論」第百七十二卷の地獄も同一傳承である)。只八炎火地獄中の鐵刺林地獄を記して、邪婬を犯したものが、一由旬の高さある刺樹の上に大毒蛇ありて化して美女となり、罪人を欺いて欲を共にしやうとて樹上に喚び、罪人來れば刺は下に向ひて滿身を刺し、やがて美女の所に到れば、直に蛇身となつて罪人の

正法念處經解題

一、本經の譯者及び譯出年代

現行の大藏經には、本經は元魏婆羅門、瞿曇般若流支(Gautama Prajñā-ruci)となつてゐるが、經錄を調べて見ると、先づ「歷代三寶紀」第九には

元魏鄴都正法念處經七十卷興和元年。於ニ鄴城大丞相高澄第ニ譯。曇林僧昉等筆受

並に他の十三部の經名を列ねて、

右一十四部合八十五卷、梁武帝世、東魏南天竺國波羅㮈城、婆羅門、瞿曇般若流支、魏言智希、從ニ元象初ニ至ニ興和末ニ在ニ鄴城ニ譯。時菩提流支、雖ニ復前後ニ亦同出レ經。而衆錄目相傳抄寫、去ニ上菩提及般若字ニ唯云ニ流支譯ニ不レ知ニ是何流支ニ迄レ今群錄交涉相參、謬濫相入、難レ得ニ評定ニ。後賢博採幸願討レ之。

是によりて見ると、瞿曇流支と菩提流支が混同せられて、區別がつかないことになつてゐる。そして「大唐內典錄」第五にも同文を載せてゐる。

溯つて「衆經目錄」(隋沙門法經等撰)第三を見ると、成程

正法念處經七十卷後魏世(沙門菩提)流支譯

となつてゐて、「沙門菩提」は宋、元、明の三本一致してゐる。處が他の「衆經目錄」第一(唐、釋靜泰撰)には亦、

正法念處經七十卷一千一百九十九紙 後魏世瞿曇留支譯

となつてゐるから、「三寶記」「內典錄」が「不レ知ニ是何流支ニ」と嘆き「迄レ今群錄交涉……難レ得ニ評定ニ」と匙を投げるに至つた一班を窺ふことが出來ると思ふ。

所が、こゝに現行の如く瞿曇流支に決定するに至つたのは、「開元釋敎錄」(第六)である。

正法念處經七十卷興和元年於鄴城大丞相高澄第譯、曇林僧昉等筆授、見ニ長房錄ニ

の外に、十七部の經目をあげ卽ち「一十八部九十二卷」を瞿曇般若流支の譯に歸し、左の如く譯者の貴重なる小傳を添えてゐる。

婆羅門瞿曇般若流支、魏云ニ智希ニ中印度波羅㮈城淨志之種、少學ニ佛法ニ妙閑ニ經旨ニ神理標レ異、領ニ悟方言ニ以ニ孝明帝熙平元年ニ遊ニ寓洛陽ニ後京都、遷レ鄴亦與レ時徙、以ニ孝靖帝元象元年戊午至武定元年癸亥ニ於ニ鄴城內ニ在ニ金華昌定二寺及尙書令儀同高公第內ニ譯ニ得無垢女等經一十八部ニ沙門僧昉曇林居士李希義等筆受。

更に「又續高僧傳云」「續高僧傳」第一、菩提流支傳中の取意とて上引の「三寶紀」の瞿曇、菩提二流支混同の文をのせ、終

目次

（本丁）　（通頁）

經集部 八

山邊習學譯

國譯一切經

大東出版社藏版